奇譚クラブ

1月号



新しい風俗文献誌

1973・1

昭和四十七年十二月二十日印刷　昭和四十八年一月一日発行　一月号（第二十七巻第一号）毎月一回一日発行　昭和二十一年四月二十日第三種郵便物認可　昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別扱承認雑誌第二二〇号

☆総天然色カラー新作女体緊縛資料☆

極彩色のカラーで描く五人のM女の美しき生態

可憐な近代的姿態の深田菊子。
純情で素人っぽい笠井奈保子。
お侠やんで陽気な福井桃子。
妖艶な芸者福竜の松本たえ子。
飼育済みのMマダム江口淑子。

最近の奇ク誌上にて大活躍した五人の個性あるM女たちの生態を大型ネガカラーによって、極めて鮮明にキャッチしました。自然のままの生々しい肌色も鮮やかにプリントの下に再現しました。厳しい緊縛と責めに喘ぐ彼女たちの吐息までも画面に盛り上るほど、肉迫的にカメラを縦横に駆使して、貴重な資料の作成に努めて貫いました。カメラは誌上の『カメラとペンのルポルタージュ』でお馴染みの塚本鉄三氏です。白黒写真では物足りなくお思いだったマニアの方は、是非この新作発表を機会に貴方のコレクションの一端にお加え下さい。素晴しい美しさの緊縛フォトに必ずや御満足されることでしょう。殊に福井桃子さんの臨月腹のカラー緊縛フォトは珍稀な資料として必ずや稀少価値を発揮することと思います。カラープリントの大きさはRサイズ（8cm×12cm）で大型のコダックネガカラーからプリントしましたので鮮明度も発色も断然素晴しいものです。五人のM女のいきいきした責めのムードを、カラーにてお楽しみ下さい。

全裸開股開陳縛り
カラー三枚一組　一〇〇〇円
深田　菊子　略号〈ある〉
思いきり両股をひらいて開陳する可憐で美しい女体も、縛られてこんなあどけない表情なのです。

白肌と赤白斑ら紐
カラー三枚一組　一〇〇〇円
深田　菊子　略号〈あり〉
真白い肌をぐっとくびる斑ら紐の美しいコントラストは惨虐のなかに甘いムードを盛りあげる。

浣腸と緊縛と弄戯
カラー三枚一組　一〇〇〇円
福井　桃子　略号〈あや〉
各種の浣腸器を前にして大の字に正面開股したマダムと後手高手小手に縛られた。

縛りの羞恥に喘ぐ
カラー三枚一組　一〇〇〇円
笠井奈保子　略号〈あむ〉
すぐ赤面する恥かしがり屋の奈保子が大好きな縄で縛られるというナマナマしい色彩の中の羞恥。

羞らいの坩堝の中
大手札三枚一組　一〇〇〇円
笠井奈保子　略号〈あも〉
原色的な配色の中心に全裸の肌に腋毛もあらわに繰り展げられる緊縛と羞恥のかもしだす饗宴。

晒らされた緊縛体
カラー三枚一組　一〇〇〇円
笠井奈保子　略号〈あめ〉
縄にくびられた乳房の先のグミのように乳首もピンク色に染まり全裸を晒して縛られた美麗な女体

猿轡に悶える女体
カラー三枚一組　一〇〇〇円
笠井奈保子　略号〈あみ〉
噛まされた豆絞りの猿轡にうめき思わず開股する女体の息づまるような迫真的な色美しきシーン。

全裸で見せる狂態
カラー三枚一組　一〇〇〇円
松本　たえ子　略号〈あき〉
芸者福竜が全裸にひん剝かれて三種三様の縄にて変った縛りをされ、そのM性を露呈してゆく。

強烈後手縛り展開
カラー三枚一組　一〇〇〇円
松本たえ子　略号〈あい〉
如何なる強烈な責めにも耐えるというM女の繊細な裸身を厳重に縛りあげて執拗にいたぶり抜く。

臨月腹緊縛の発端
カラー三枚一組　一〇〇〇円
福井　桃子　略号〈あろ〉
覚悟はしていても出産予定日が目前に迫ってくれば躊躇するのだが、それを払いのけて緊縛する。

便々たる太鼓腹を
カラー三枚一組　一〇〇〇円
福井　桃子　略号〈あね〉
もうこれ以上大きくはならないという程思いきり突き出た太鼓腹にも情容赦なく縄が襲いかかる。

拘束された臨月腹
カラー三枚一組　一〇〇〇円
福井　桃子　略号〈あれ〉
丸々と極めて美しい線を見せた妊孕腹をツンと突き出させて非情な縄は妊婦の裸身にからみつく。

蛙腹にも強烈縄目
カラー三枚一組　一〇〇〇円
福井　桃子　略号〈あよ〉
出産間際の便々たる蛙腹でも苦しいのに、更に縄目も凄い後手高手小手縛りが肌を痛めつける。

海老責め後手吊り
カラー二枚一組　八〇〇円
江口　淑子　略号〈あお〉
強烈な海老責めと伸した後手を逆に吊り上げた姿態のなかに、あられもないM女の秘密があった。

苦痛と喜悦の交錯
カラー二枚一組　八〇〇円
江口　淑子　略号〈あわ〉
厳しい縄目で裸身をさいなまれる苦痛も彼女にとっては、身のおきどころない甘い喜悦ではあった。

◎お申込みは前金にて、大阪市阿倍野郵便局私書箱第14号天星社へ略号記入の上、御注文下さい。送料当方負担にて急送いたします。

女性モデル求めます

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者の方々の告白の投稿やモデルの応募によって数多くの貴重な作品が誌上を賑わし、風俗文献誌としての絢爛たる金字塔を、打ち樹ててまいりました。真摯で研究熱心な本誌読者の方々の期待に応えて写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか御遠慮なく勇気を出して御応募下さるよう、お待ちしております。

○本誌愛読の女性の方でしたら、国籍、未既婚の別、年齢など一切問いませんから、遠近に拘らずお申込み願います。採用させて頂いた方には、謝礼として一回につき壱万円以上拾万円まで、即金にてお支払い致します。

○応募されました方々の個人的な秘密の漏洩は、御本人の許しがない限り絶対致しません故、御安心の上、御応募下さい。尚、告白文をお書き下さった際は別に原稿料を、資料を提供下さった方には謝礼を併せて、お支払い致します。尚、お申込みの節、お好みの傾向などを出来るだけ詳しくお書き添え下されば幸甚に存じます。

○撮影いたしました写真は、誌上掲載を原則としておりますが、若し御都合によって発表を望まれない場合は、その旨添記下されば改めて打ち合わせしたいと思います。助手や介添えとしての出演、若しくは編集部資料作成についてのプレイ出演などの役に任じて頂きたいと思います。その際の報酬は、改めて個々に御相談に応じたいと思います。

○御応募に際しては、年齢、職業、身長、体重などは必ずお書き添え願います。写真があれば同封下されば好都合ですが、お手元に適当なものがなければ結構です。

。申込先。大阪市住吉郵便局私書箱第41号

暁出版株式会社　編集部

◇本誌三百号突破記念◇

百萬円懸賞原稿募集

▽賞　金△

入選作品	第一席	二十萬円	1篇
入選作品	第二席	十萬円	1篇
入選作品	第三席	五萬円	3篇
入選作品	第四席	三萬円	5篇
入選作品	第五席	二萬円	10篇
佳作優秀作品		一萬円	15篇
選外佳作作品		五千円	10篇

▽内　容△

一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ奇譚クラブという題号のもとに発行を続け、ここに三百号の多きを数えるに至りました。その間、風俗雑誌のパイオニアとしての幾多の辛酸を具に嘗めながら、読者の皆様の温かき御支援によって、二十数年の厳しい星霜をよく耐えて今日に至りました。

一、本誌は異色ある風俗文献誌として生長してまいりましたが、今まで読者の方々の投稿による数多くの傑作や力作が春の花のように咲き乱れ、SM文献誌としての本誌の真価がいやが上にも高められて参りました。三百号発刊を記念して、更に一層の内容の充実と清新化を計りたく、皆様の作品に期待して原稿募集を企画しました。

一、内容は本誌に発表するにふさわしいものであれば、どのような傾向のものでも結構ですが、一例を挙げれば、サディズムに関連したもの、マゾヒズムに関連したものを始めとして、各種フェテッシュ一般、同性愛、切腹嗜好、褌美、女斗美、女相撲、変装、生首狂崇、妊娠嗜好、見世物、変態風俗、奇習珍奇異色風俗、特異風俗習慣紹介、アブノーマル・テクニックなど、古今東西を問わず異色文献に屬するものを取り上げて下さい。

一、形式は、小説、創作、読物などのフィクション物でも、告白、体験、手記のようなノンフィクション物でも結構ですし、見聞記、実見談やレポート、ルポルタージュも大いに歓迎致します。写真、画、参考資料などがあれば添布下されば幸いです。（資料に限り返戻の求めに応じます）更に、論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、如何なる形式のものでも最も得意とされるものを選んで御執筆下さい。

一、模倣とか亜流は絶対に排して下さい。あくまで野心的な新作に限ります。幾多のSM作家を輩出させて本誌の誌面を野心のある読者の方は登竜門として試みて下さい。

▽規　定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作品に限ります。原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用紙を御利用願います。枚数は三十枚以上三百枚迄に制限致します。

一、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載し入選と同時に規定の賞金を贈呈致します。尚掲載の際、発表に支障ありと思われる個所を削除することもありますので予め御諒承願います。原稿は原則として返戻は申上げません故、原稿御入用の方は前もってコッピーをとっておいて下さるよう願います。

一、懸賞応募作品は一般応募原稿、読者原稿と区別するため、第一頁に〈懸賞〉とお書き下さい。ペンネーム、匿名はご自由ですが、住所（又は連絡先）は必ずお書き願います。応募者の氏名を公開したり他へ洩したりなどは絶対に致しません故、御安心下さい。永続性のある奇クに作品を発表して、貴方の力量と手腕を、どうか発揮して下さい。

一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第四十一号、暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種便）して下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断わり致します。

奇譚クラブ
昭和四十七年十二月二十日印刷　昭和四十八年一月一日発行　一月号（第二十七巻第一号）毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日　第三種郵便物認可　昭和四十二年四月二十一日　国鉄大阪局特別扱承認雑誌第二一〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan



雑誌 2805－1

¥400

塚本　鉄三・撮影

白い縄と白い布の幻想

＜笠井奈保子＞





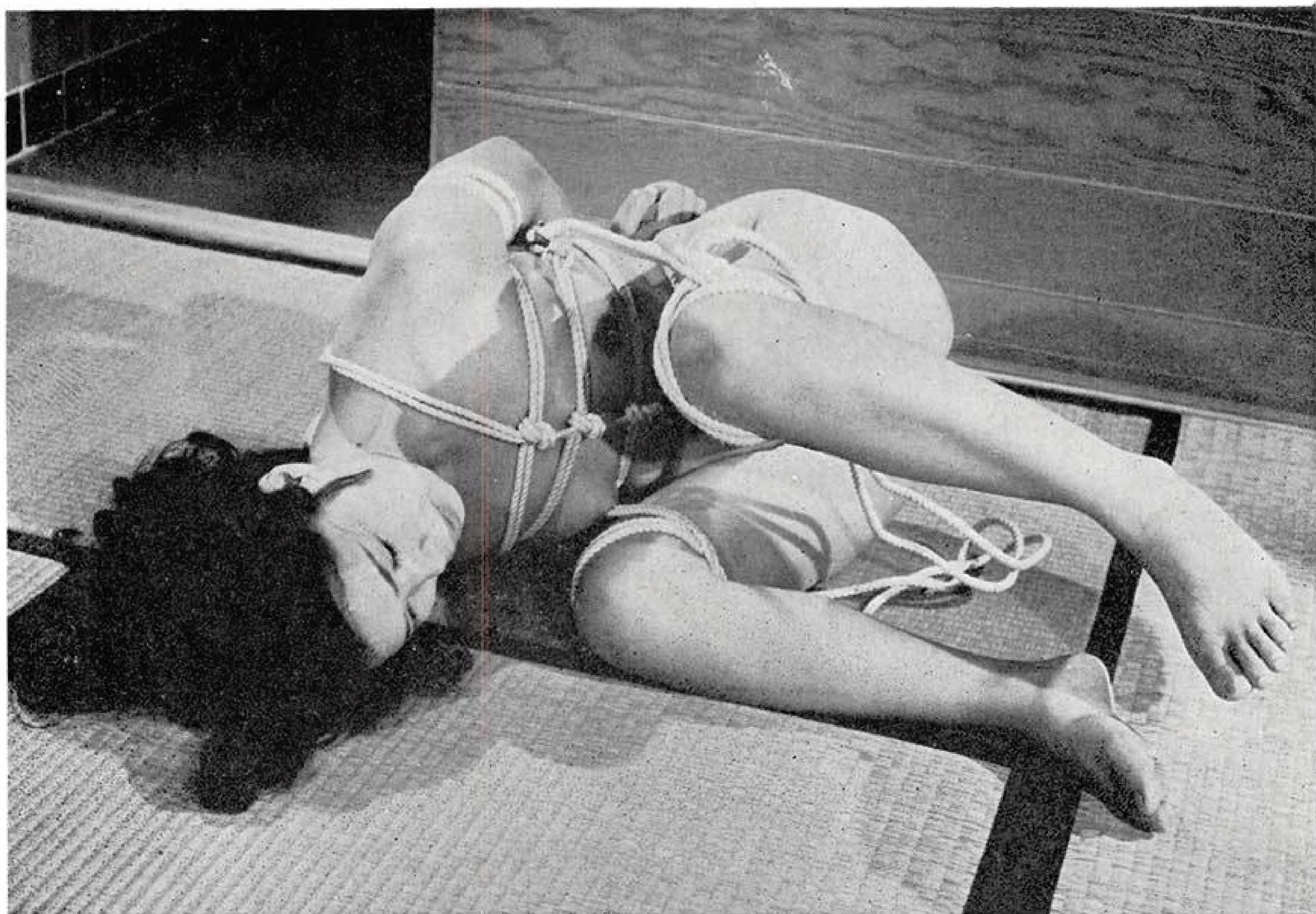
奇譚クラブ

一月号目次 〈昭和四十八年〉

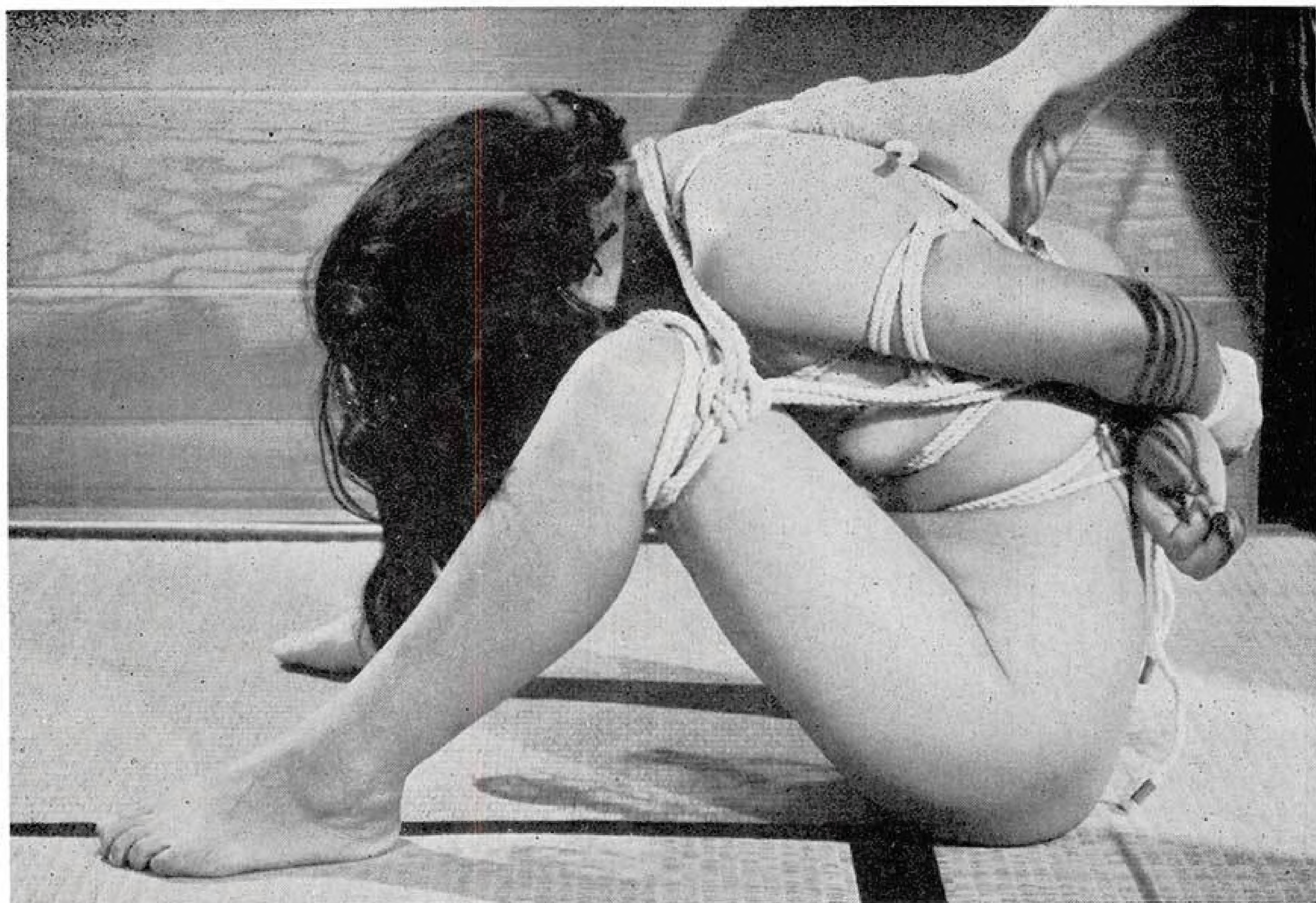
〈第二十七巻＝第一号＝通刊第二九九号〉

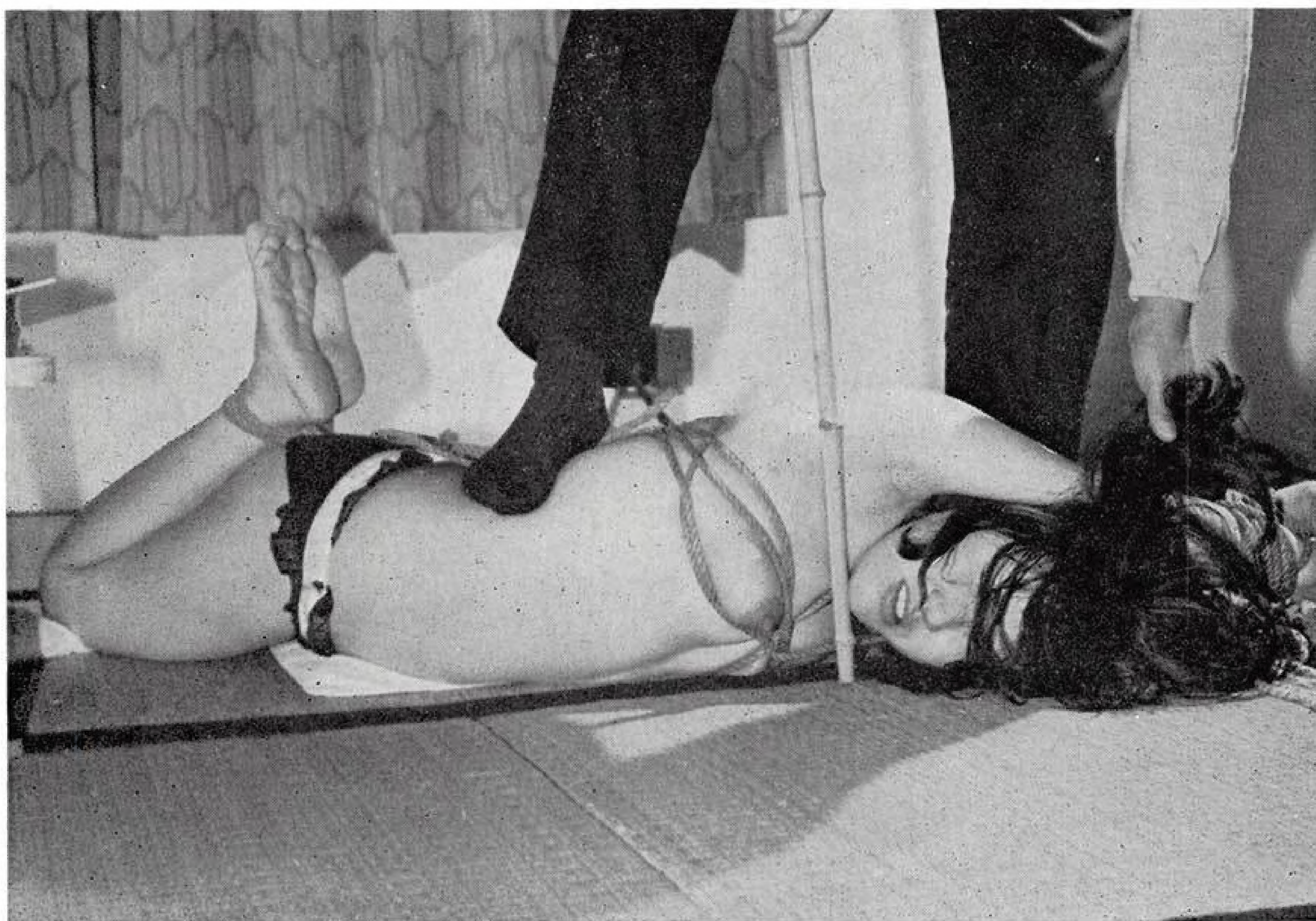
本文



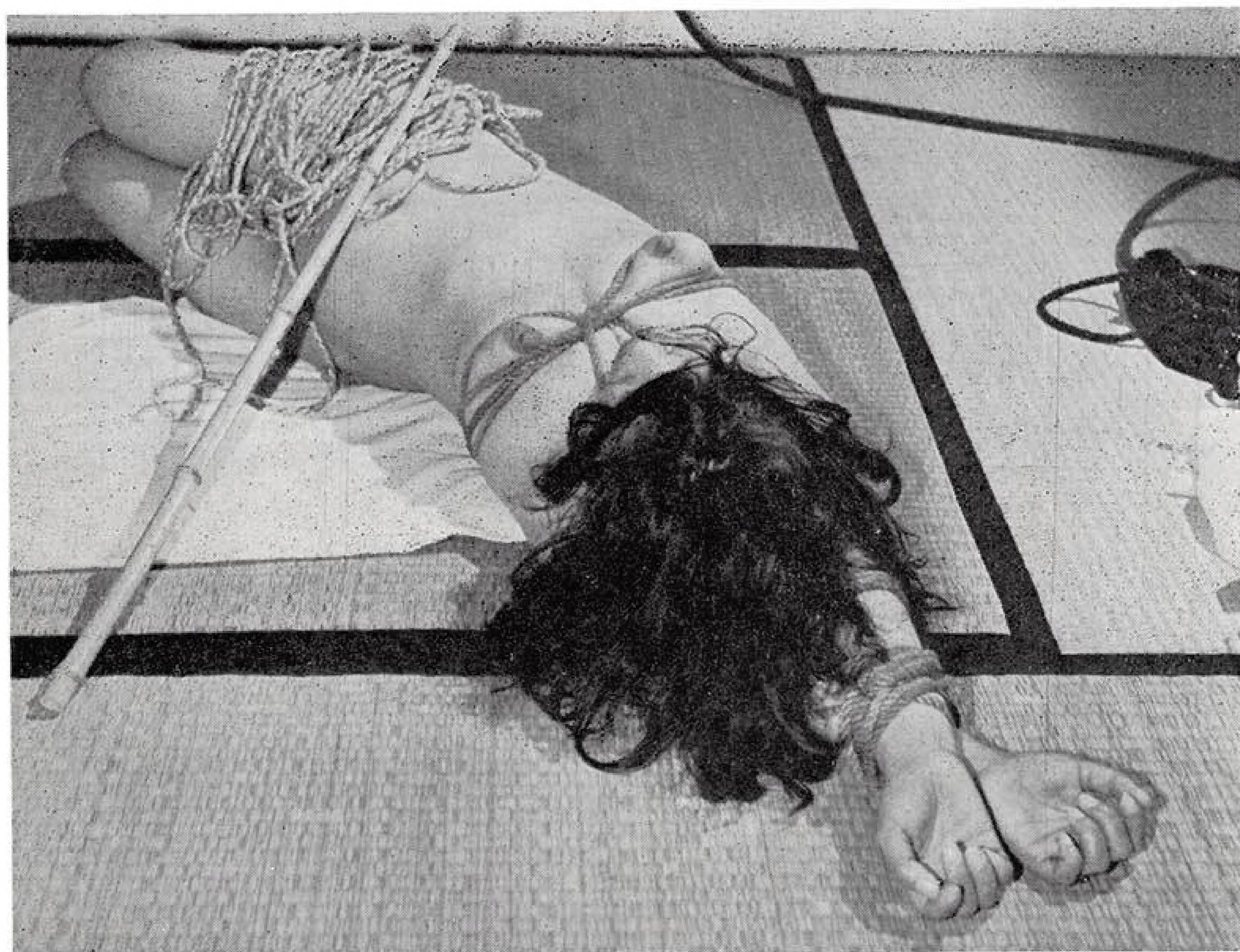


奴隷宣誓した女の結末　　<江　口　淑　子>





料理をするM女　　<川路むら子>





責められる楽しさを噛みしめる

<深　田　菊　子>

責めに痺れた一瞬！



〈笠井奈保子〉

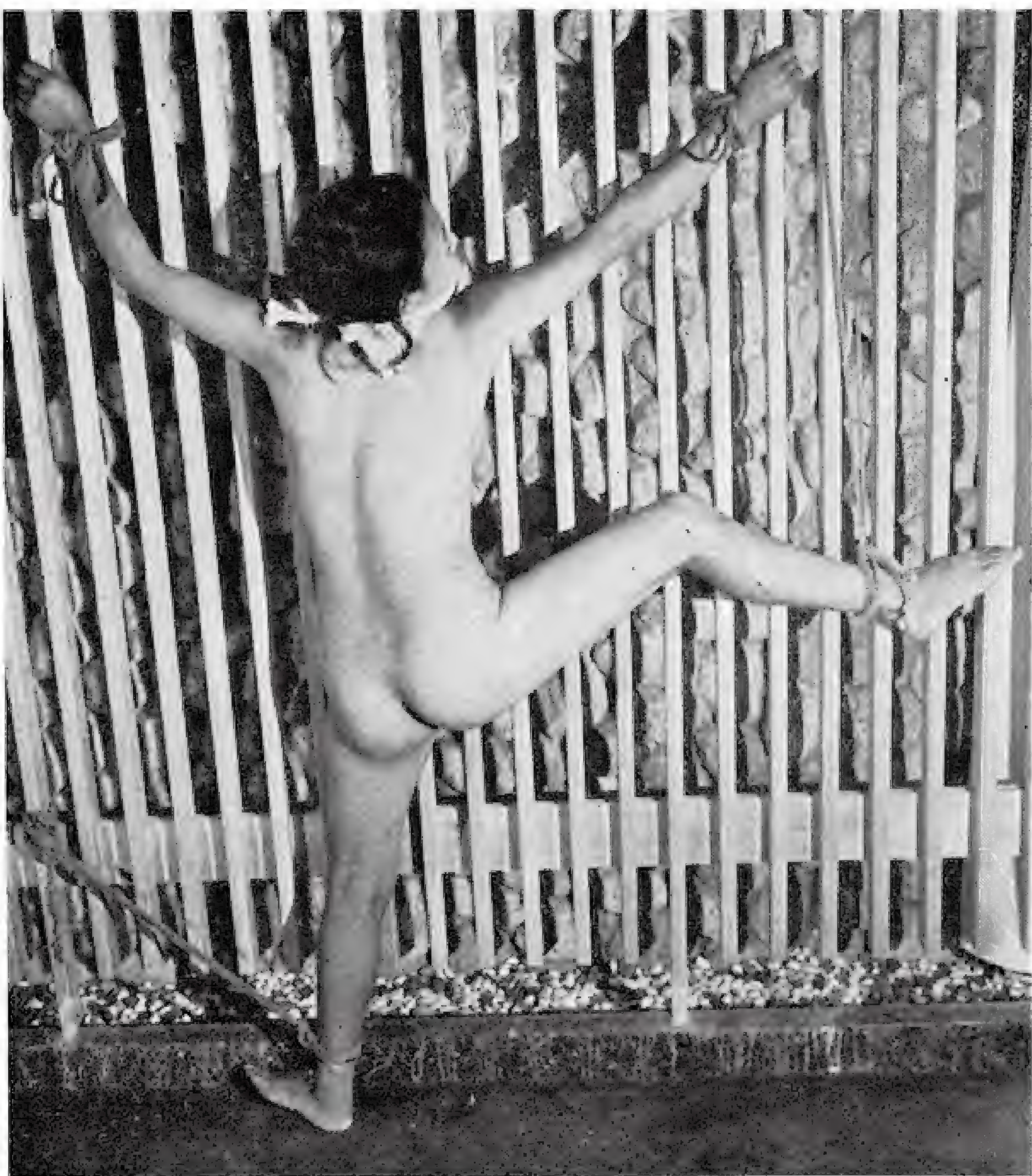




ハリツケられた乙女の可憐さ

〈高村浩子〉





大の字の羞恥責め



〈高村浩子〉

カメラは縛りを狙う



<鈴木千鶴子>



浣腸器の襲うポーズ

<鈴木千鶴子>



ムチで責められた臀部

〈福井桃子〉



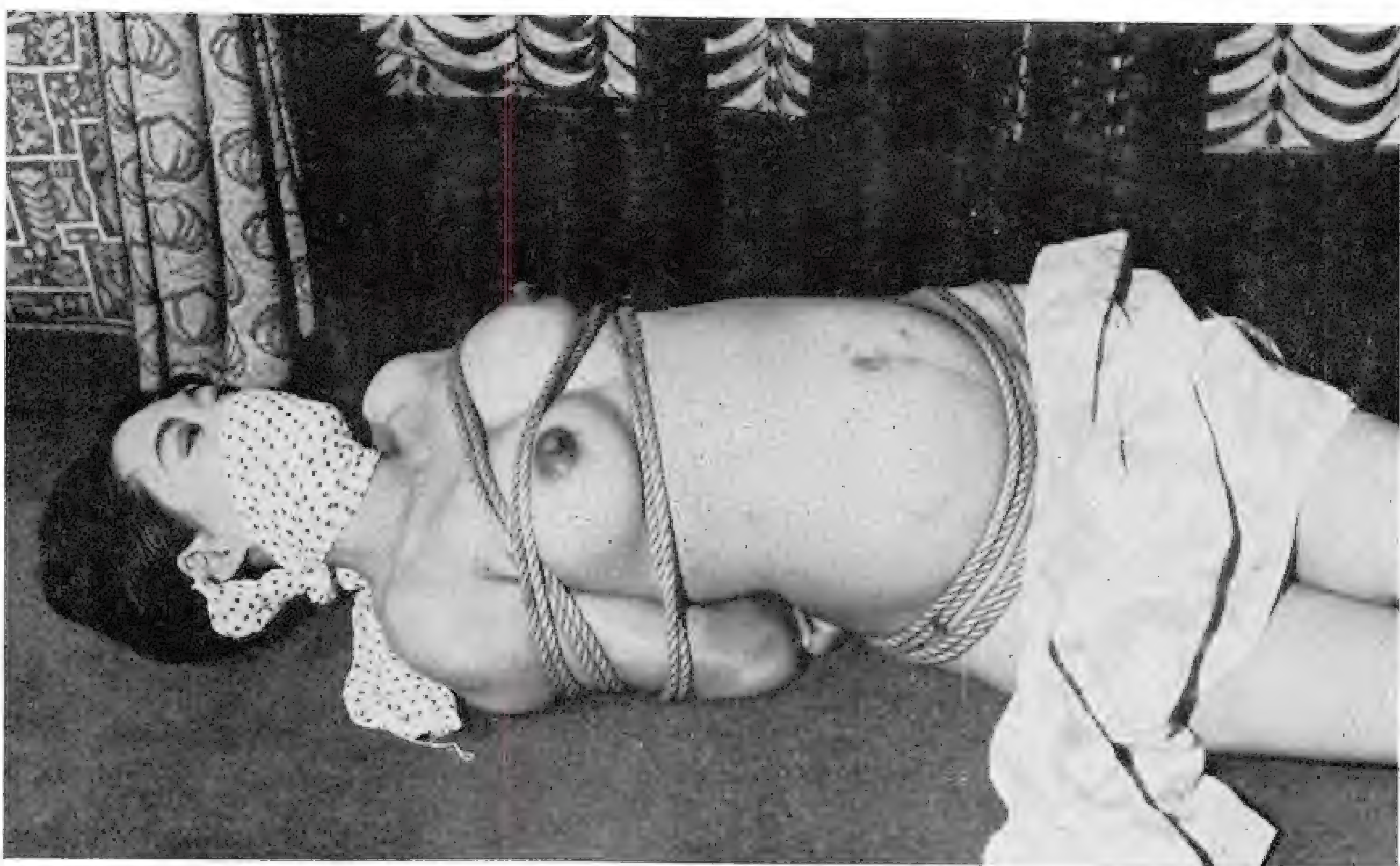


初妊娠を縛った頃

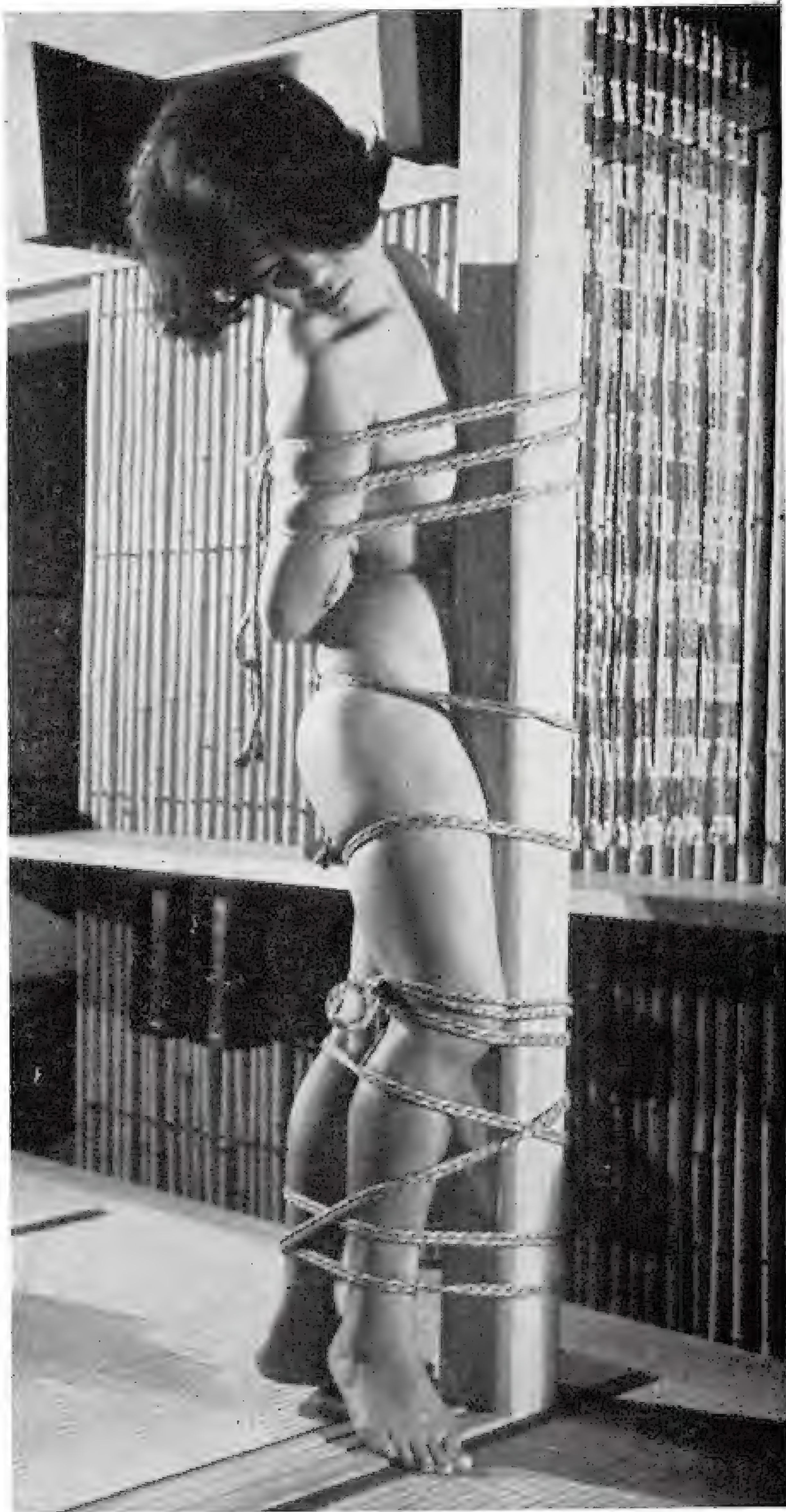
〈中河恵子〉

杜を抱擁する緊縛

〈大塚啓子〉









〈松木たえ〉

紅に染まった白い肌

跨下から見た縛り



＜梨花悠紀子＞

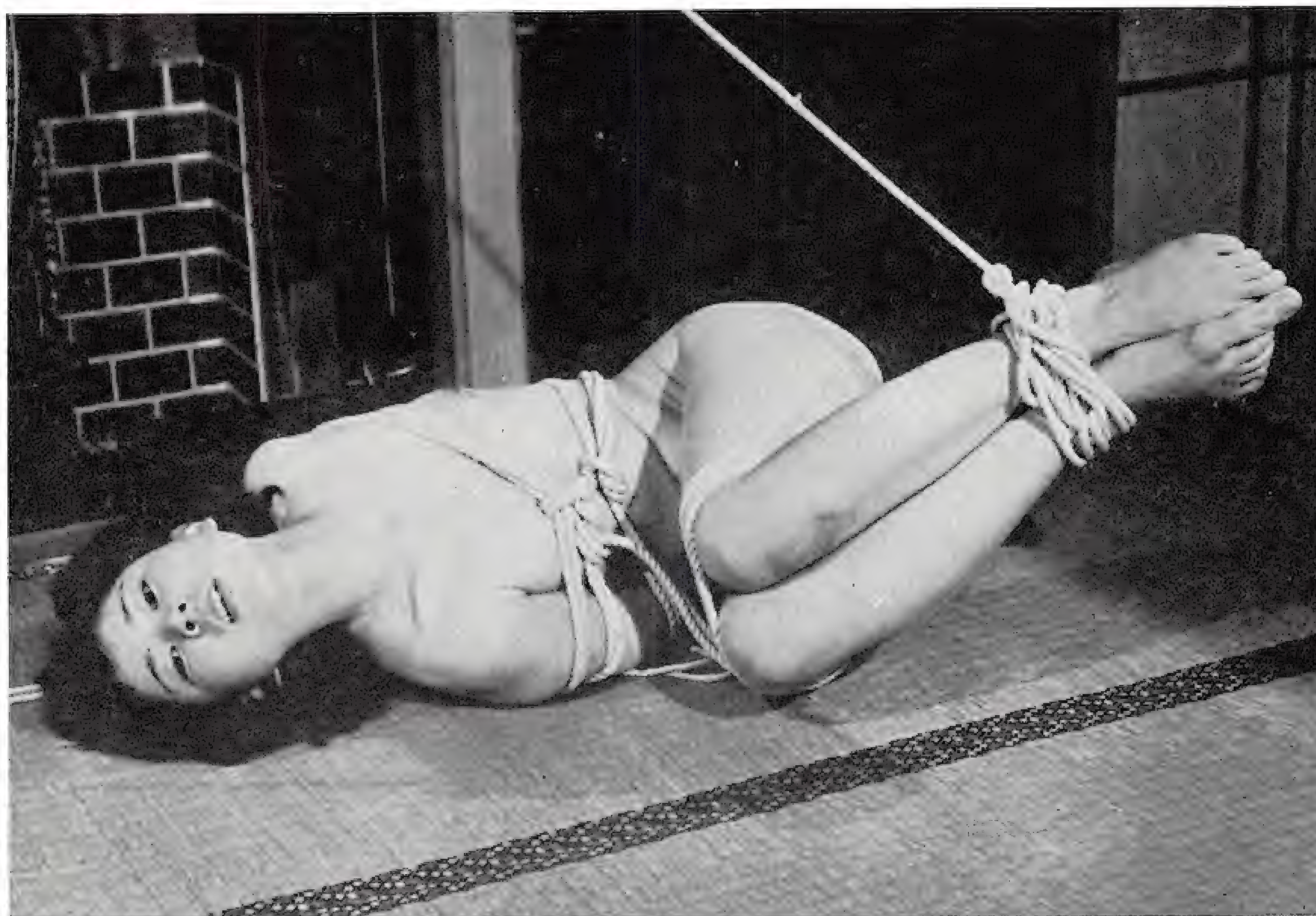
稚妻妊婦責め



＜金原奈加子＞



美とマゾの祭典　　<前田真知子>

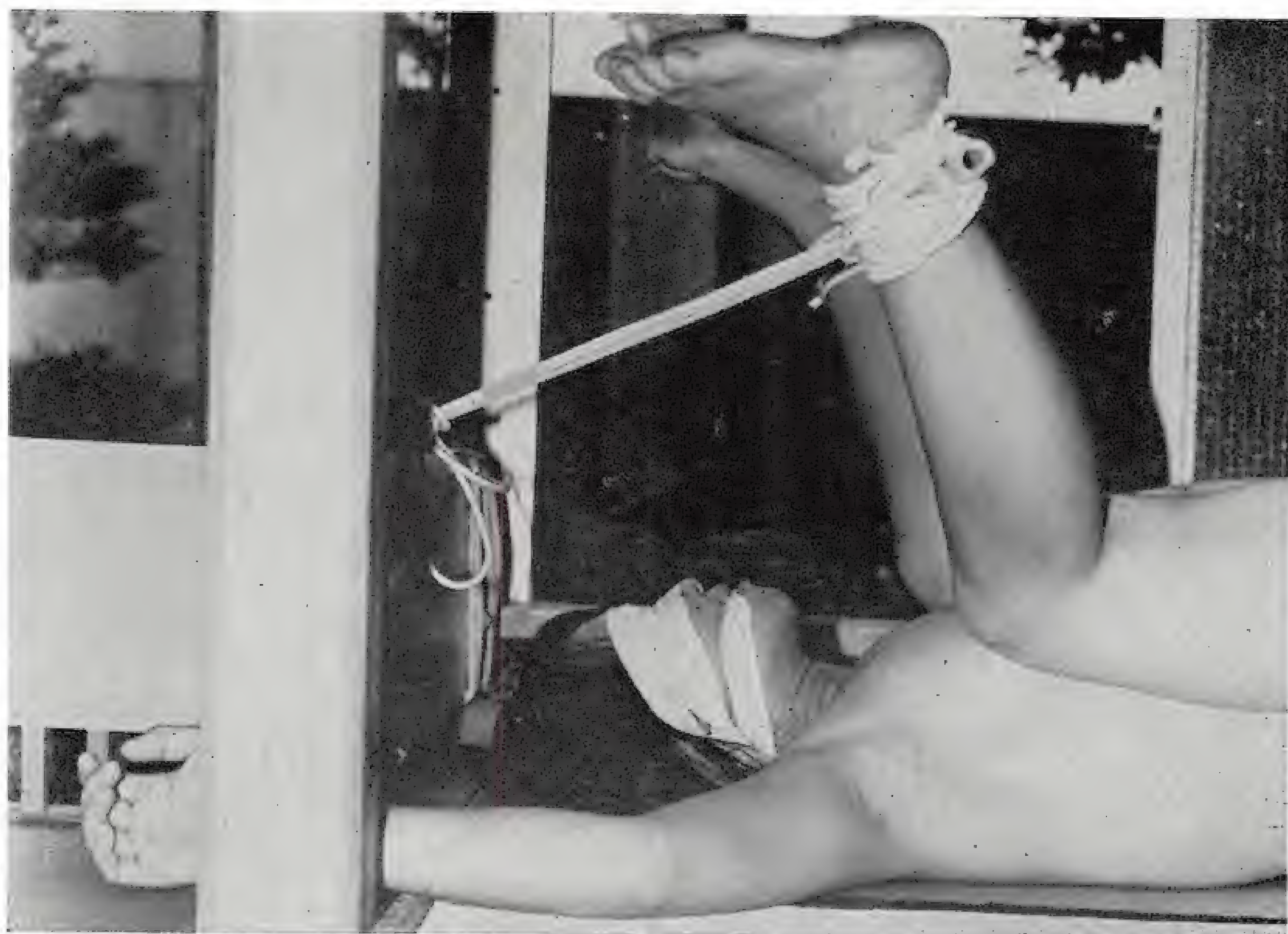


検身の準備

猪吊りの女



＜左近麻里子＞



＜左近麻里子＞

奇譚クラブ

—昭和四十八年一月号—

（第二十七巻第一号
通刊第二百九十九号）



可愛いさ余って憎さが…。

モデル……村井知可子

愛していたがために恋人である腰元が不義をしでかしたら、憎さが百倍となって折檻を加えるのは当然であろうが、私達にとっては、事の真偽なんかはどうでもよいことである。矢絣の裾をむざんにまくられて、むきだしの素肌に割竹の笞が情容赦なく振りおろされるだけで、いたく心がゆさぶられるのである。打つ人、打たれる人、その心のなかを推量することによって私達はSとMの夢幻境を、さまようことが出来るのである。（鈴木章太郎・記）

——ミニ・カメラ・レポート——



西方より友来たる

—中宮　栄—

「今から、そちらへ伺います……」
と電話があってから、予定の二時間に、事故でも起きたのではないかと思わせるほど大巾に遅れ、トヨペット・クラウンが砂塵を舞い立てて停まった。

僅かばかりの日蔭に炎熱を避けていた私を通り過ぎてから気づいた大山氏は、車から背筋を伸ばしながら出て、サングラスを座席にほうり込んで歩み寄って来た。手は私の方から近づくのを制止している。

「お待たせしちゃって、すいませんなア」
と、挨拶はするが、車外の暑さばかりでなく、手ぶらに見えた私の、いでたちに落胆した表情だ。

「家内も一緒に来てるんですよ。やっと納得させて……」

仁丹を噛んだ息が、無風状態の中で届くほど接近した大山氏は、言外に期待外れを、ただよわす。だが、バックからはカー・ルームに人影は見えなかった。何か工夫のあるところを見せたくて、シートに夫人を沈ませているのに違いない。

「ひと息、入れますか……?」

こちらも、じらし戦法だ。それに夫人同伴とは考えられなかったので全くの軽装備……

ハーフ撮りカメラをポケットに入れ、約束の写真は別のポケットに在中。それでも充分、初回の話合いに太刀討ち出来る自信があった。

「道具は……?」

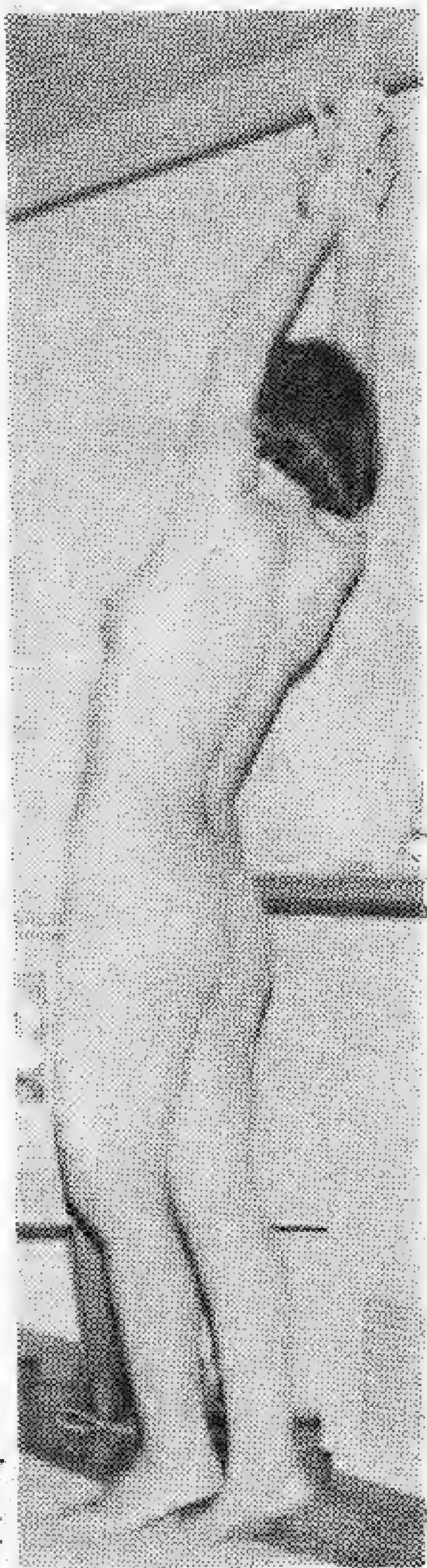
「なんとかなるでしょう」

「カメラ備え付けのモテルが……この辺にはあるんですか?」

「いいえ。ビデオを置いてあるところもない位……このあたりは遅れてます」

私は、いつでもどうぞ、と知らせるように煙草の吸いさしを踏み消した。足許の吸い殻が六つ。その数を一瞥して、待たせた事を面目ないと思ったのか、私の気の長さに驚いたのか、折角出向いて来たからには、具体的にこれからの話だけでも進めておこうと考えたに違いない大山氏の先導で、冷房のきいた車に納まった私は、坐ると邪魔になるポケットのふくらみを引き出した。





大山氏の顔が、汗を拭くハンカチの下で、ほころんだ。

夫人はバック・シートでドライブ疲れのようにコートを引きかぶって横になっていた。ドアの開け閉めにも気付かぬふりは、羞恥というより、よく仕込んだことを見せたい夫の指示によるものと思われる。

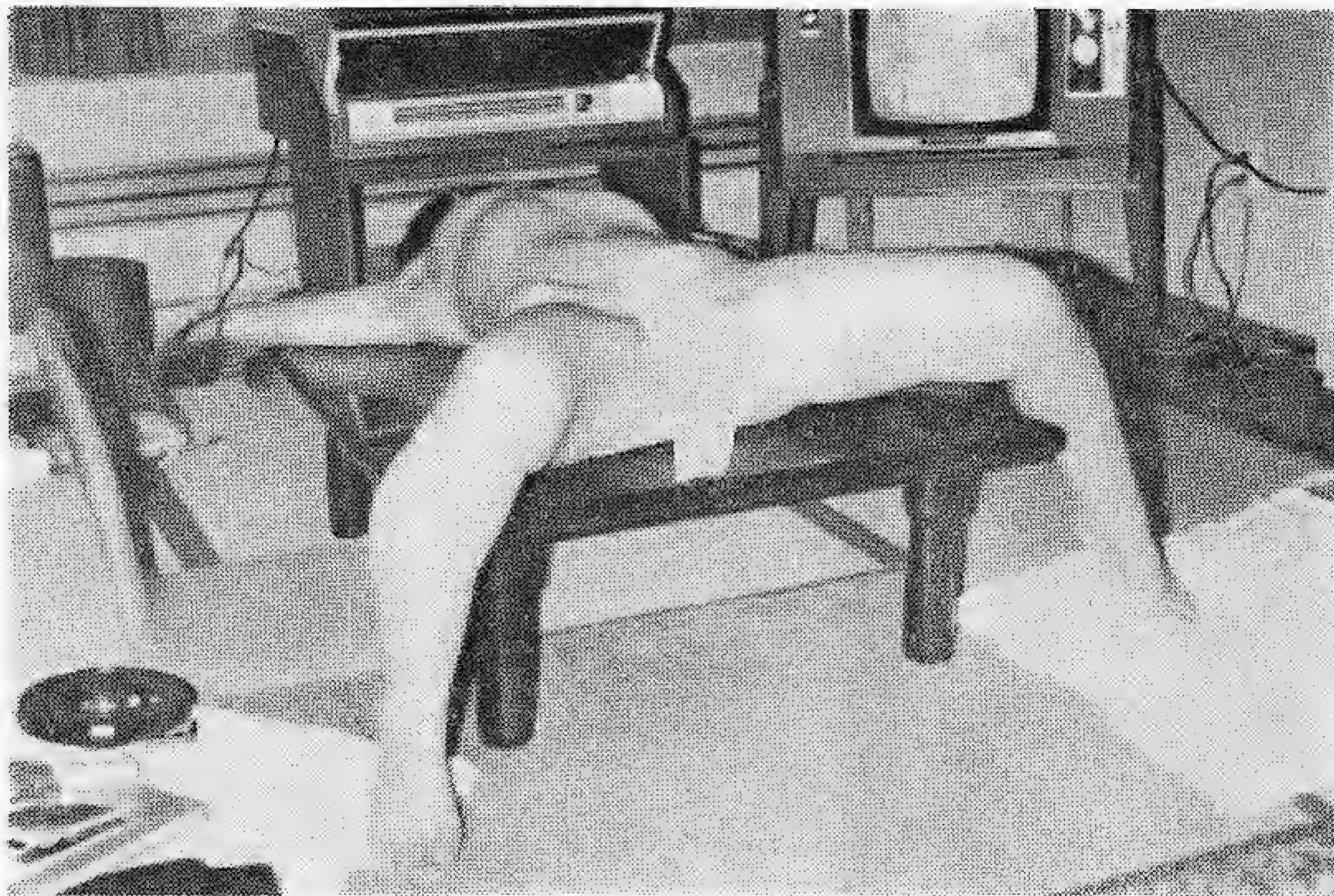
挨拶苦手の私にとって、初対面からの順序だてた儀礼一切が、はぶかれることほど有難いものはない。対向車に気を使わなくても済む広大な米軍家族住宅地（グランド・ハイツ）の筋にさしかかってから、計画や取り決めなど、夫人にも聞かすほど声高かに喋り合っていた前部座席の男二人は、一息入れる暗黙の合意にも達し、座席の背を倒した。私の手の動きから察したらしい大山氏が、

「おい、煙草だ……お前も喫っていい」

と、振り返りもせずに夫人に声をかける。

「はい」の返事と同時に、せばめられた後部座席からコートを丸めて坐り直す夫人の気配があり、直後、私の動作は夫人の手で鎮められた。

交換の写真でしか見ていない真理夫人の裸身が、顎を反らせば見える直ぐ後ろにあっても、私は美味しい物を最後まで残す子供のように、カーライターが



はじかれるまで、フロント・ガラスを通して盛夏の空を仰いだままでいた。

過剰サービスのホステスからなら御免蒙りたいが、夫人の紅のついた煙草を淑かに口唇に運ばれると、紫煙を吐き出し無言でも初対面挨拶が完了したように図太く振り向く。

夫婦交換を多様に体験した夫人は、さすがに物怯じせず、私の視線を微笑で迎えた。

「どうです。本当に写真のモデルになりますか」

「いいですねえ！」

横になって眺めていてはこの際失礼と、私はシートの背に腕を突いて上体を起こした。

そばから盛んに打診するように「若けりゃあ……」を連発するが、大山氏は満更ではなさそうである。人には年を感じさせぬ若さだと糠糟の妻を称讃されると、更に一言、世辞が欲しくなるのは人の常だ。背丈一五八センチと言えば大柄の方だし、

「どうしたわけか、私の今迄相手になって貰った女性……みんな小柄な人でねえ。奥さんは願ってもない良い被写体だ。これからのお付き合い、よろしくお願いしますよ」

と、ずるいような当たらずさわらずな追従をおくった。

「後ろへ回って下さいよ、中宮さん」

「え？」

「そばへ行って近くから、よく見てやって下さい」

「ここで十分ですよ。ヌードの夫人を乗せて走る……極楽じゃないですか」

「そう言わずと、さあ！」

せき立てられ、私は一旦、暑い外気に触れ再び爽やかな車内に逃げ込んだ。

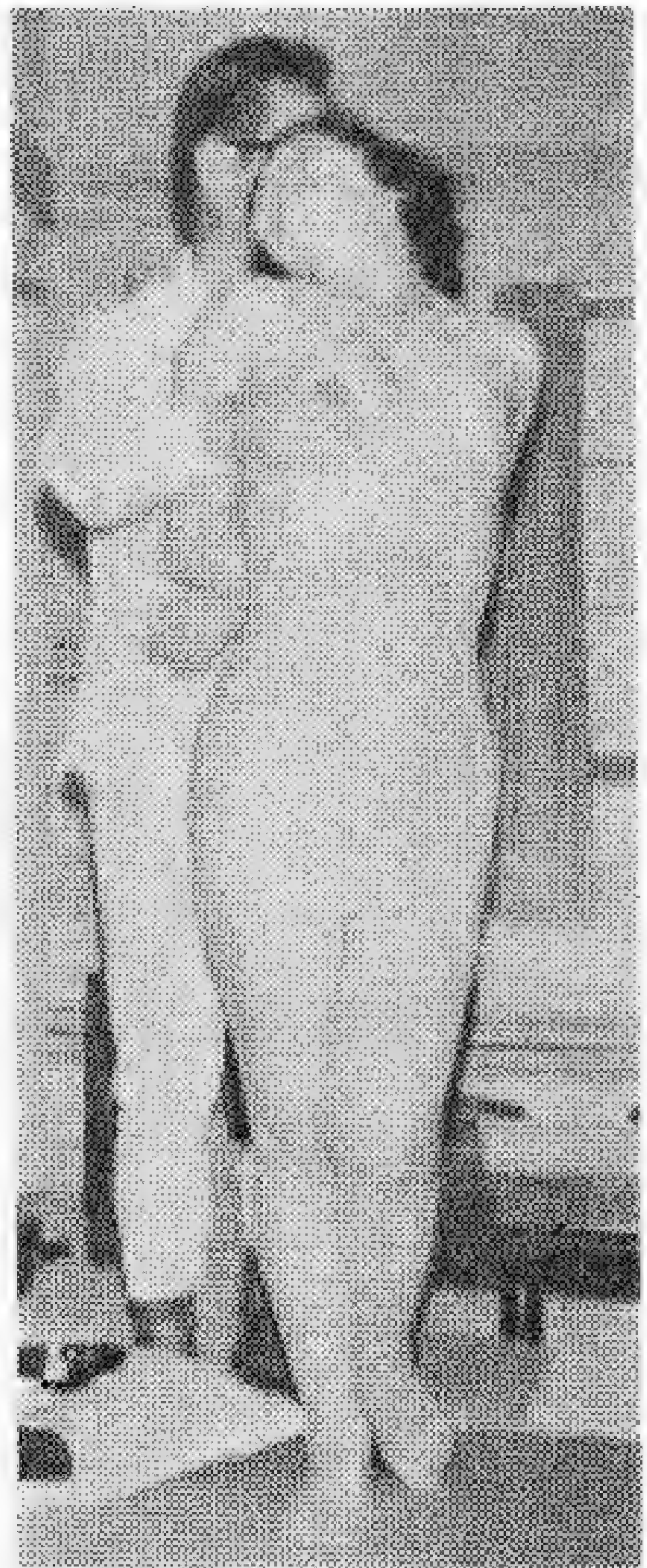
「これは後で、ゆっくり拝見だ……」

大山氏は参考写真を閲覧するのは諦めてアクセルを入れたが、ミラーを見ながらコートを羽織ろうとした夫人を叱り、氏が最も誇示したい箇所の披露へと指示を続けた。

後部座席が妖しくなればなるだけ、運転のしがいがあるというのだろうか。スワップ目的の遠来の客とカーセックスをさせたとか、走る間中マスタベーション続けさせたとかの

氏にとって悦楽喝采の思い出話を、つぎつぎと繰り出しながら、道路状況によってハンドルさばきの独り言も違って来る大山氏の期待を満たさせて行った。
モテルに着いてからも、意外な話が出て来る――氏の交友半径。そのぐるっと円を描く中に知名の人々とその人々の生活が、台風情報のレーダーのように写し出される……。
だが、私のようなSM世界に足をふまえた者は居らず、大山氏が緊縛体験を夫人に与えようとして私を選んだ事は言葉通り初めてのことと信じてよさそうであった。
「コイツは、ひらけていて……」
「いやあ、そうさせたのは御主人なんでしょうが」
肴にされる夫人は、車から降りて部屋に入ると、すぐ浴衣を身だしなみ良く着付け、脱いだコートや夫の衣服換えをすませると、小壜のウイスキーを二言、三言のやりとりの後に冷蔵庫から取り出し、水割りにして口に含んで聞いている。
男二人の会話に異論を唱えるのは、セックス・アバンチュールに関して「好きだ」と断定されることについてであった。
健康を数年前に害して以来、煙草も酒も断ったという大山氏にくらべ、勧められ覚えてやめる必要もない夫人は、独り酒で次第に肌つやを紅潮させて行く。それには矢張りプレイをスタートさせる〝羞恥忘却〟の薬の効用が加味されているのではないか。
スワップにしても、初めての縛りのモデルにしても、亭主の好きな赤烏帽子になるためには素面ではいられないに違いない。
三人が打ちとけ合うにつれ、残念さを、しきりと口にする夫と私の顔を見較べる夫人は大がかりな道具持ち込みがないのが、この場の救いであるかのように、
「いつでも機会はありますものねえ……」
と笑い流して浴室へ立った。
「そうですよ。のっけから、お目にかけたような写真は撮れません。それに、こうもすんなりオーケーされるとは思ってもいませんでしたからね。次回をお約束下さるなら、その時は一日がかりでもいいように考えておきますよ。でも、そこでパターンが出尽してしまうと、大山さんのことだ……却って御縁が薄れちゃうかもしれませんねえ」





夫人は、玉暖簾の向こうで帯を解きながらククッと笑った。

「いやあ、とんでもない。中宮さんさえ気に入って下されば、本格的なマゾに育てて欲しいんだ……」

あとは小声になって「この女性のように馴らして下さいよ」と、二枚の写真を指先で選り出した。剃毛した体を開陳してウエスタンスタイルの便器に跨坐緊縛固定したものと、顔面にビデの噴水を浴びている光景のものであった。何れも点景小道具として置いた「調教用品」が好奇、関心を煽ったに違いない。

「どうやって、こういう女性と知り合うんです？　中宮さん」

「うしろ楯なしの孤軍奮闘ですからね……種を撒いとかないと……バカを提ぐ思いでも根気よく攻撃するんですね、一寸した機会を活用して」

攻略戦法の説話など続けたところで無益である……印象は秘中の宝となり、他人の宝は欲しくなるのも、これまた人情。果たせる哉大山氏の口からも

「是非、紹介して下さいよ」

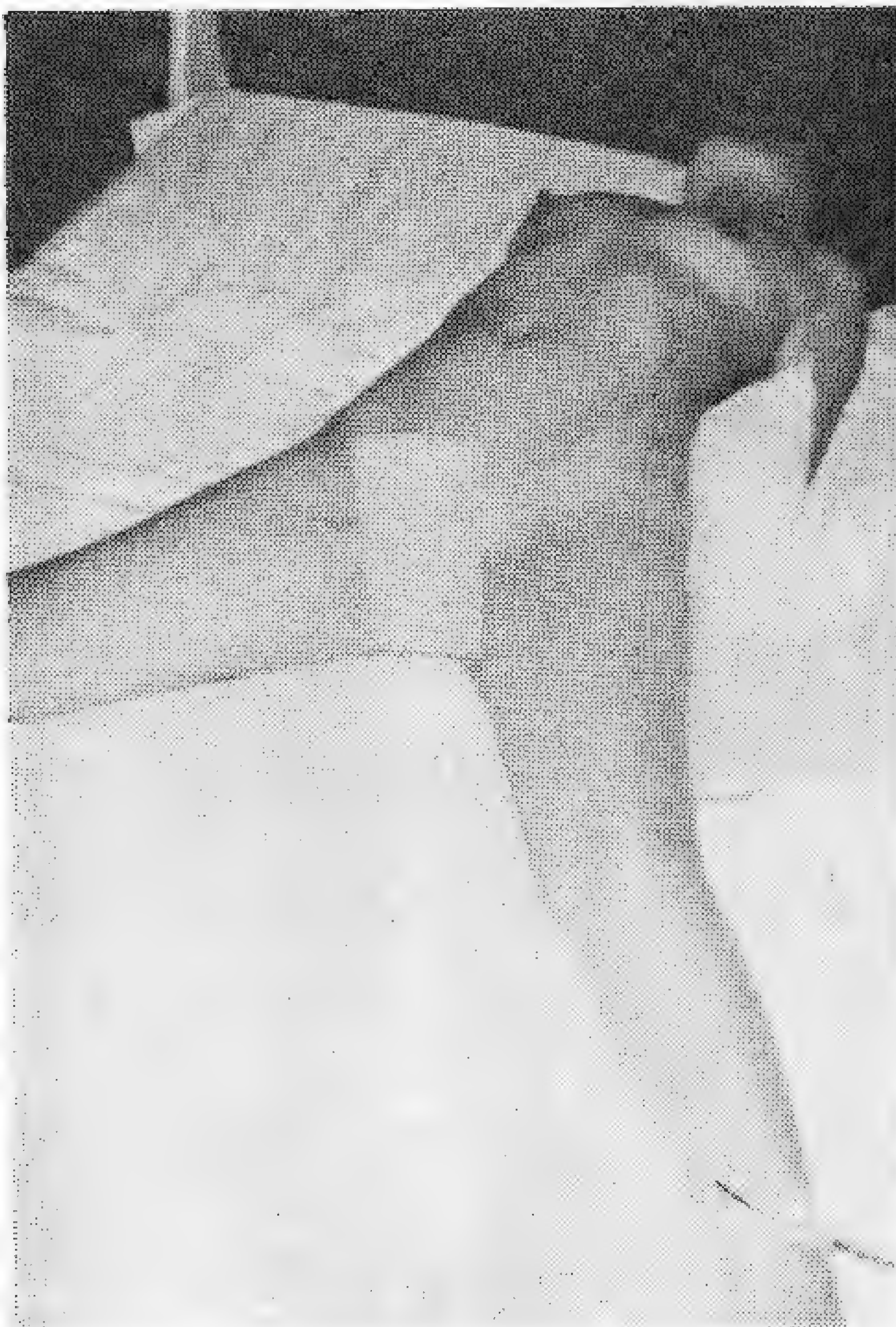
と出た。

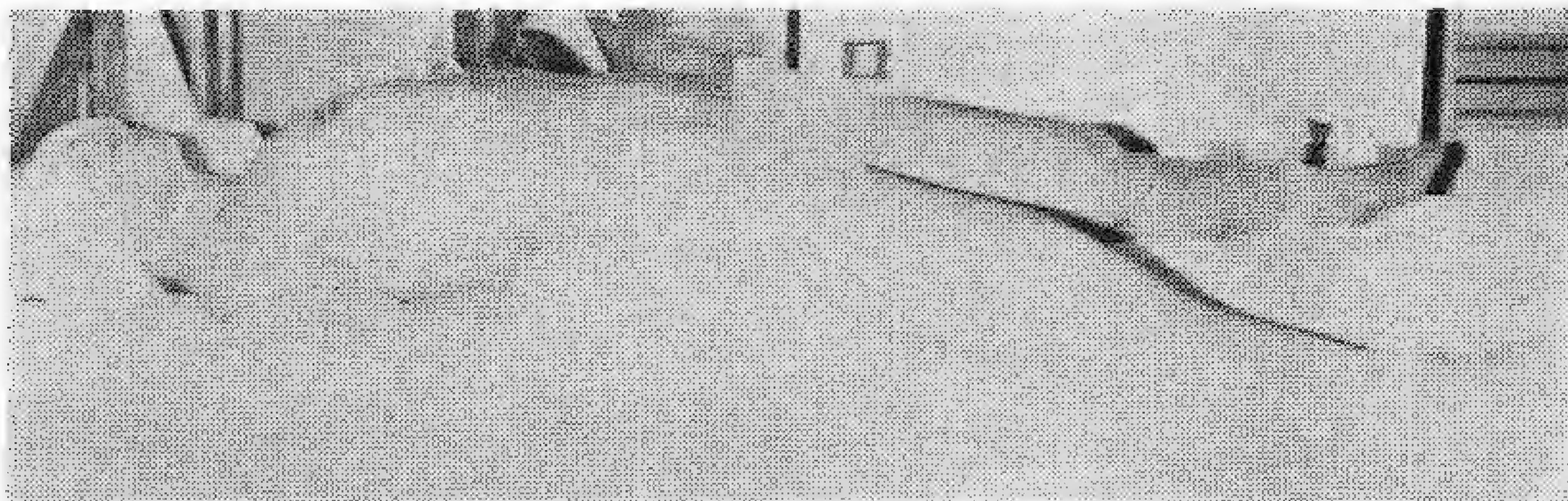
風呂あがりの夫人は夫の手に捕まる。私は初めから、〃初回はテスト〃のつもりだし、気ごころ知るまでは、SM気のある夫婦に記録作りをたのまれて〃協力〃しているとでもいうところから入りたいと言って撮影兼進行役を了承して貰っていた。

「いやだわ……恥ずかしい……」

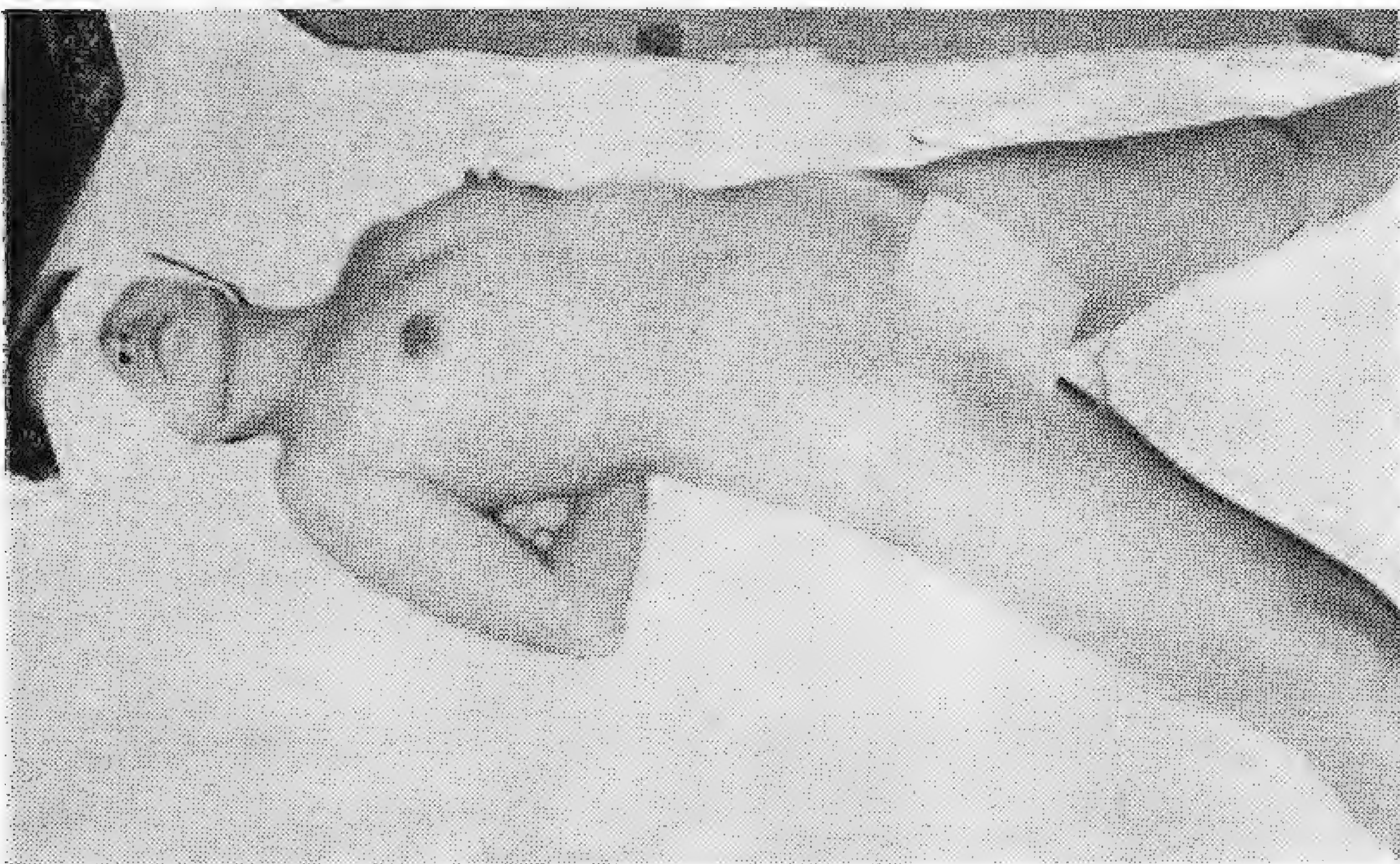
両手首を浴衣の帯紐で縛られると、夫人は夫の目論んだ吊りの出来そうな欄間下まで押しやられながら、ストロボを装着しカメラ準備の私の前を通りすぎた。

「お前はな、売りに出された奴隷のように、よく見て貰うんだ。これからも専属のモデル





申し分ありませんよ。でも、本気にしていいんですか……？　M馴致」
「気に入ったんですよ。わたしは、あなたが……手紙でもそうだったが実際に会って、なおのこと」
「恐れ入ります。あとは、奥さんの……」
「いや、アレだって、あなたに関心があったから、こうやって出て来たんだし、いやだったら、おとなしくしていませんよ。スワップも、あれに一言〝イヤよッ〟といわれれば帰るんですよ、私は」
「ほう……選択規準が厳しい？」
「もちろん！　こわい女御殿ですからね」
「そうですか？　奥さん」
　私は撮影位置を変えながら、じっと耐えている夫人に声をかけた。
　遠くから浴びていた閃光が、今度は至近距離のものとなり、身をすくめた夫人がぐらついた。爪先立ちする足許が定まらず、素人縛りの紐が手首を強く締めつけた。
「今日は幾つかポーズを変えてみるとして使って貰えるように……そして、よく仕込んでもらえ」
　縮みこまる夫人の腕を伸びきらせるために力みながら暗示にかける言葉を吐き帯紐を結んだ大山氏は、離れ際に告別のような、愛撫を与えて退いた。
「どうです、中宮さん。かなりのとこまでやれそうですか」
「映像的には奥さんのプロポーション、

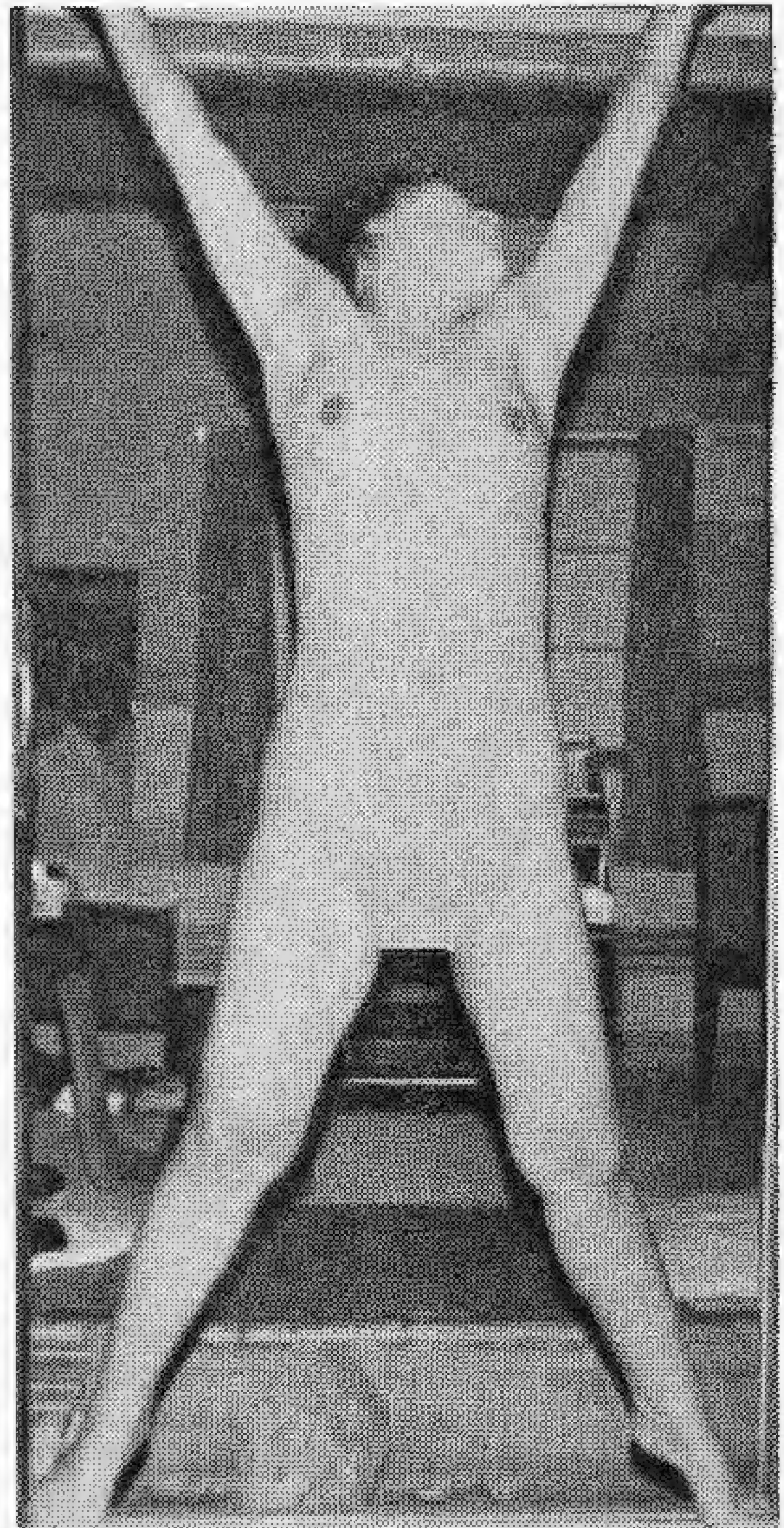


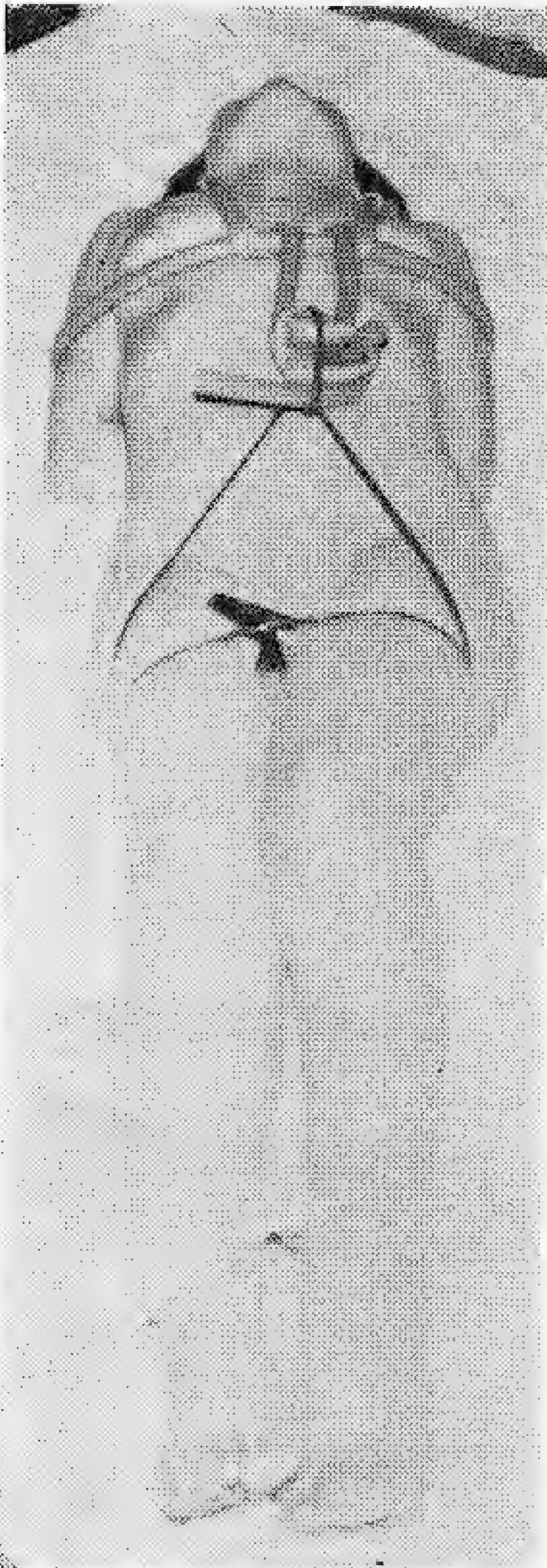
だけにしましょう。……途中で薬局があったら貰おうと思っていた長尺ガーゼもないし……」

私は順調に進行しすぎたことや、乗用車の車中で〝裸女〟接待を受けたことの方を恨む気持をもらし、夫人が悲鳴を上げた結びの幼稚さを問題にしないで、吊りから解放した。

それにしても、もろくも崩れた計画は致命的であった。折角の機会に、手ぶらと見せかけ秘密の武器として行使しようと思っていた綿布や繃帯までが手許に、ないということは。

大山氏が、せっせと片付けた座卓の上に真理夫人は寝かされる。閉じようとする脚も一芸済むと餌をやって馴らすサーカスの動物のように、我意を押し進める氏の愛撫を伴った強制で定まった。





「このままだ。勝手に動くんじゃない、お前は！」

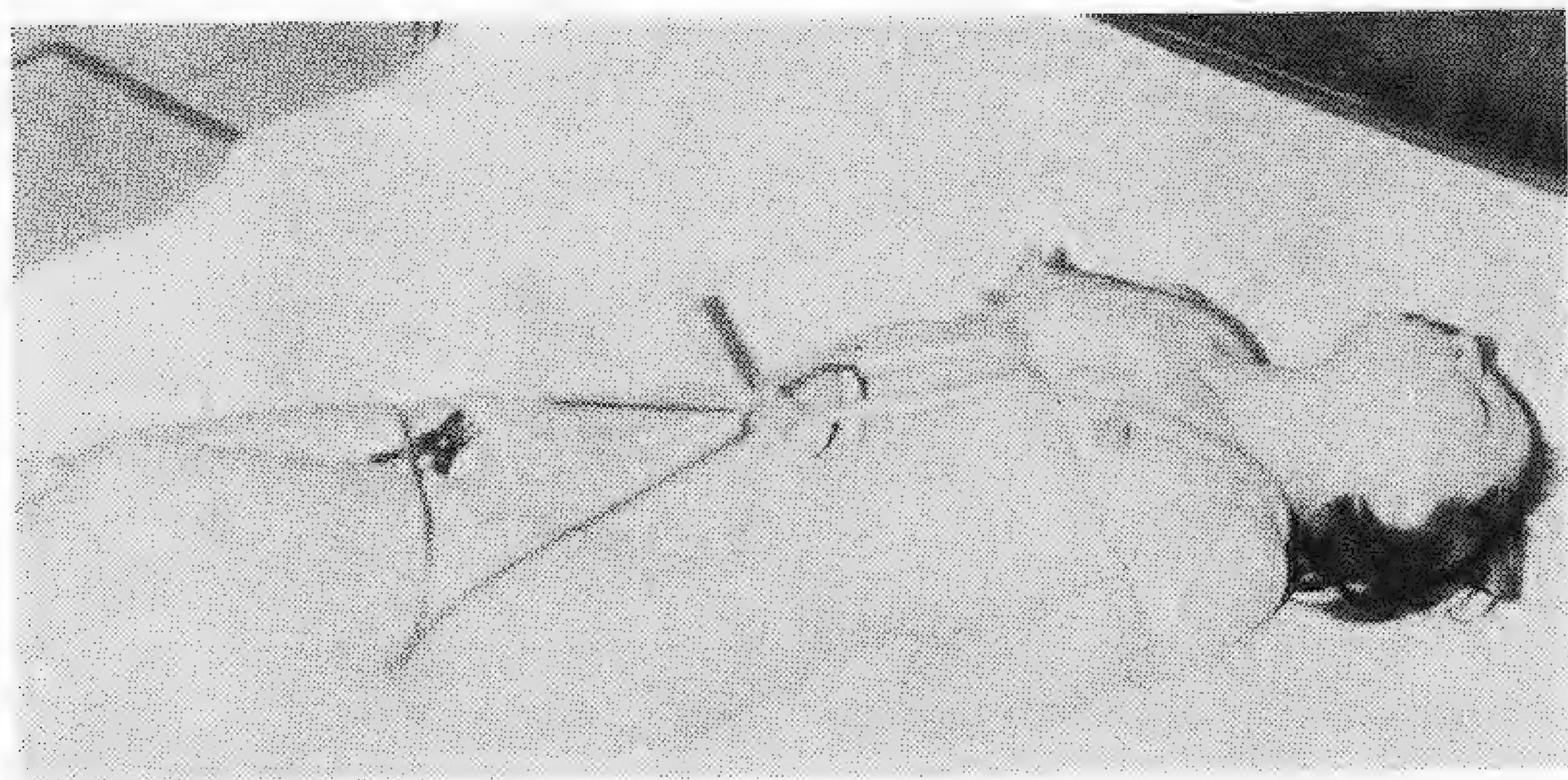
夫の、燃え上がった露骨な「餌付け」で真理夫人が反り上がり、少しでもポーズが変わると大山氏の指が鉄鋲と帯金で打ち止めるように、すかさず元の体勢に引き戻した。

感応の潤湿が、入浴に使われ、部屋の冷気で冷えきった濡れタオルで清拭されると、軽い飲酒ぐらいでは酔いが醒めた夫人に、羞恥がよみがえった。切ない哀訴がほとばしる。だが大山氏の手は容赦がない。座卓上で夫人が反転したのを幸い、うつ伏せにして背を反らさせる――拡げる、のけ反らせる、のいずれの台上固定のポーズも、氏のイマージュでは啜り吸うの強制であったらしい。

「……その気になりませんか？」

「ええ、なりませんねえ。旦那（ハズ）がいるい

ないじゃなく、カメラを持っていると一瞬のポーズや表情変化を追う気が強いのか、文柱(ポール)は突っ張っても行為はしません、私は。それで〃ポーズをとるだけね〃と安心する女性(ひと)と〃物足りなくなる〃人妻(ひと)とがいますが、「物足りなくなって」も突き放すのが主権を握ったSだと思うんですよ。M馴致を不感症治療の療法であっていいと思いますねえ……なにしろこっちは多感だし、それを自制する力(りき)を養っているつもりで臨みますからねえ。世間の規制が恐いから詭弁を弄するのではなく、私の信念ですよ、プレイ中に接しないというのは。だから杉さんに誘われた時は戸惑った……こっちは白人女性が縛れるとイソイソ飛んで行ったのに、カメラは駄目、日本の男のミルクが飲みたい……いろいろ話と違う注文が出て」
「ああ、あの時……。杉さん、自分がソレが好きで選ぶ人だ。それとナメナメが狙い。家内(コレ)もしつっこくて参ったとボヤいていた……アハハ」
「杉さん、今頃、耳の穴を長く伸ばした小指の爪で、ほじっているでしょう」
「いや、デッカイくさめして授業中の女生徒を吹っ飛ばしているんじゃないですか」



アメリカ文学史の講師、ミスタースギはサン・フランシスコのアングラ新聞に個人広告を出すほどのスワップ・マニアである。彼氏によって美臀(ファニー)をフラジレーションさせて貰ったこともあるのだから、不在裁判は気がひける。大山氏の場合は夫婦同伴が叶うので、数倍恩恵を受けている筈であり、哄笑にも遠慮があって話題は消滅した。
　大山氏は夫人を後手に縛り、引き立てた。背後からむんずと掴んだ乳房に力が籠る——（お前がマゾに育てば一段と秘悦の分野が拓け欲楽が叶うのだ）と示唆するような荒々しさだ。八十糎巾程の次の間への、渡り廊下を越させ、夜具の上に引き据える。だが、その後（全ておまかせする）と目で促し身を退かれても、カラミがあって楽しかった撮影も急に空虚感に陥った。
　そこから這い上がるように「いいですか、奥さん」と殊更、断わりを言って、初めてモデルとしてのポーズをつけるために手を触れる。真理夫人の肌は、三人の内、唯一人、全裸のために、強力な冷風換気のせいもあって、サラッとした冷たさであった。
　用足しを装い、わざと中座した大山氏の動静を知りつつ、そのあと夫妻が二人だけの世

界に浮遊して行ったとしてもいいように、枕を当てがい腰を浮かし気味の真理夫人の体を中央に動かし、ダブル巾のマットレス一杯に把手を使った開股固定にとりかかる。平静だった夫人も呼吸が乱れだし、目隠し用に着換え用の夫人のブラジャーを借り出して近付くと、顎を引いて見上げる夫人の目に、微かな恐怖の色があった。

頭を抱え上げ、カップ部分が両眼を覆うように当てて軽く後頭部で結ぶブラジャーの目隠しを終えると、夫人は二、三度、奥歯を鳴らし、口を真一文字に閉じた。

「……不安ですか？」

「え？　いいえ……フフフ」

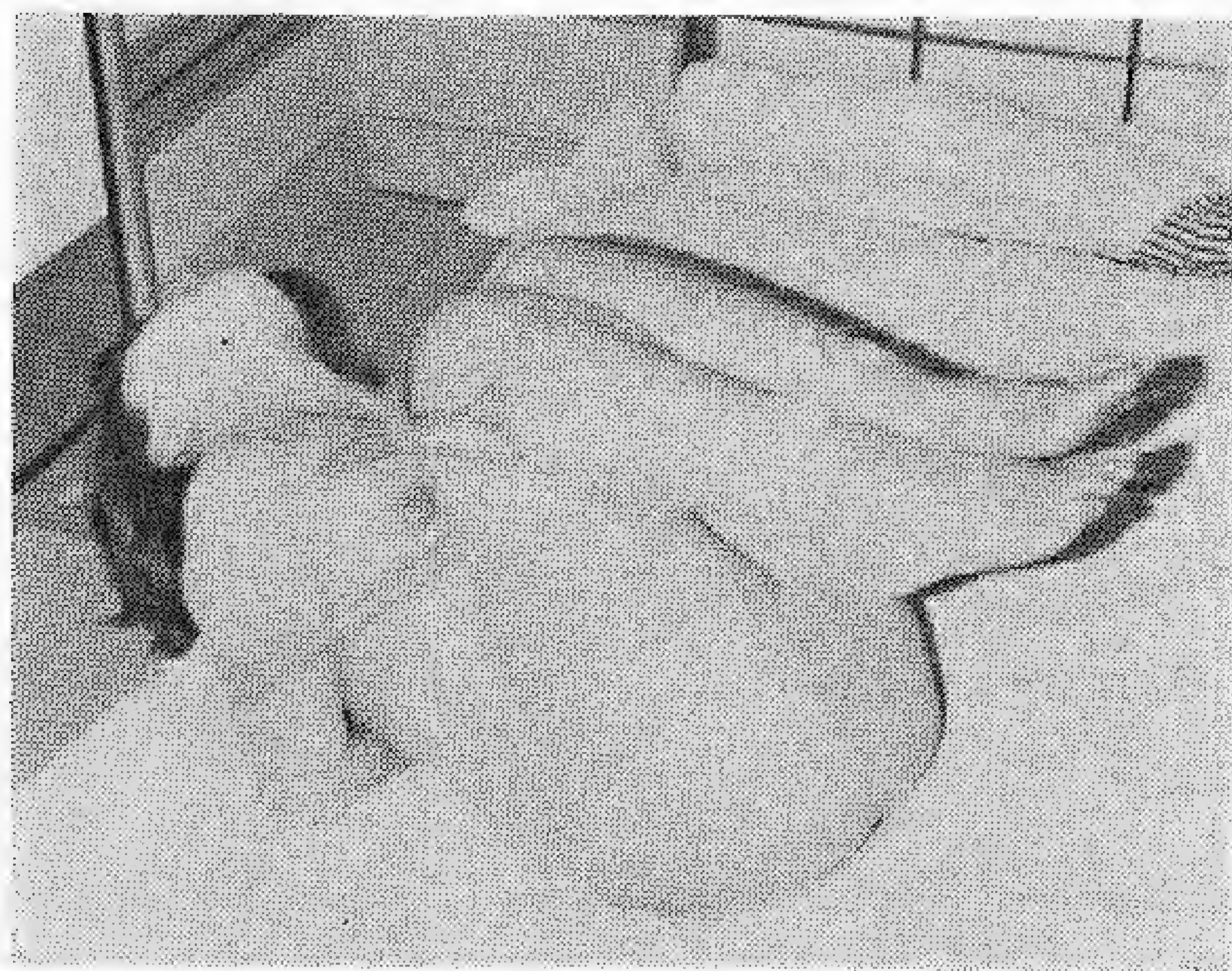
夫人は笑いで本心を誤魔化し顔を背(そむ)けた。

後手縛りも胸へ紐が掛けてないので楽な筈だった。にも拘らず夫人は、こまかく動き、肩の周辺にシーツの皺を寄せる。脚の不自由な分を、上体の自由さで埋め合わせようとしているかに……ピンと人文字に固定された姿が狙いであったのに、迎合の媚態と錯覚させる程ポーズが崩れた。

「競売が済んで……いよいよこれからマゾ馴致される奴隷なンだから……逃亡しても無駄になるよう烙印を押そう」

真理夫人は暗示にかかりやすい人である。カメラからストロボを外し、左乳房の上に発光窓を向けて軽く押しつける。その冷たい感触で思わず吐息が出て、充電開放のスイッチを入れた一瞬の灼熱感では、覗き見していた大山氏を陰から躍り出させる悲鳴となった。

（御心配無用。一寸、驚くだけ）と大山氏を



納得させる発光を掌に与えると、ストロボはフラッシュ電球とは違い、冷光だと信じていた氏は「フーム」と唸る。

その足許で真理夫人は俎上の魚のように静かになっていた。

一(ワン)ポーズ、数カットが私の撮影習慣なのだが、襖を開いて鏡を出し妻の実像と虚像を眺められる場所に鎮座した大山氏にとって、モデルの静止不変は退屈であった。氏にすれば目隠しも不要なのだ。

参観から参加へ。大山氏は夫人の変化を視覚に満たそうとし、更に夫人にも刺激興奮を与えるために目隠しを外し鏡に顔を押し向けさせて、十指を這わす。被虐洗礼の夫人の興奮は急速に極点へ達した。

喘ぐ呼吸、盛んな流汗……大山氏が無言で指し示す夫人の官能の焚口は、狂騒の愉悦に良主の誇示欲を叶えて燈火に映えた。

夫人からのタイム要求で、小休止となり、解放された真理夫人は奥の出入り口から一旦去った。失禁を回避し、またその限界まで堪能させたことが大山氏の快心の微笑みで表わされる。柱に、もたれかかって、

「スワップは……もう、つまらん」

と、つぶやいていた。

憑かれたように従順に戻って来た夫人が、寝室の入口で押し留められた。
「なあに……?」
「鴨居に吊り下がってみろ」
両手両足の位置を決めて、空間の飾り物とした夫人の背後に回った大山氏は、ズボンのベルトを引き抜いて、初めての試みという鞭打ちを実験する。位置からいって、そうそう力は入っていない鞭打ちだが、夫人は四度目に手を放し、床へ逃げて倒れ込んだ。
「やっぱり、縛ってなきゃ駄目だなあ」
大山氏は不成功に終わって、口惜しそうにベルトを捨て、別の物を物色しだす。
私も、夫妻の華々しさに応えるため、一段と工夫が必要になり、緊縛に使えそうな物を探しまわる。やがて発見出来たのは、清掃撒水用のビニール管であった。
その表面を拭き、中に残った水をきって部屋に引き返すと、大山氏は別に卓上湯沸器のビニール・コードを持って、縛りの不足を補う気で待っていた。
二人の男に背を向けた夫人を起こし、手にした物で縛りにかかるが、肉厚のビニール管は腰が強く、反発性と巻きぐせとで思い通りにはならない。それでも一応サマになるように結びつけて、拉致した女性を監禁した風に寝かす。
そばで大山氏は、「うーむ、いいぞ、いいぞ」を連呼し、カメラアングルを変えて撮り終えるたびに、妻の新鮮な魅力を、そこに見出したように居所をかえては慰謝の手を伸ばしていた。
「……却ってロープなどの常套の物でないところがいい」
など言いつつ居催促である。夫人の方は旺盛なマゾ欲求が萌芽したようにも見える柔順さで、ひとときの運命をゆだねたような風情であった。
最初、私の手ぶらに安堵があった夫人は、目につく物を手当たり次第、縛り用具に活かす私に、すっかり思惑が外れ、畏縮してしまったのだろうが、夫の歓ぶ姿に、こうした体験も嫌悪を見せまいと耐えていた……。
「美味しいワ……ビール」
後片付けを済ませ、三人がくつろいだ時、ただ一人、乾盃して夫人が、自由の無上感を吐露した。
私の視線を避けようともしない。
「また、ちかぢか……今度は、もっと準備して盛大にやりましょうや!」
良妻を伴侶とした夫の、実生活でも覇気ある男性の、自信に満ちた言葉が、一膝のり出した大山氏の口から飛び出した。

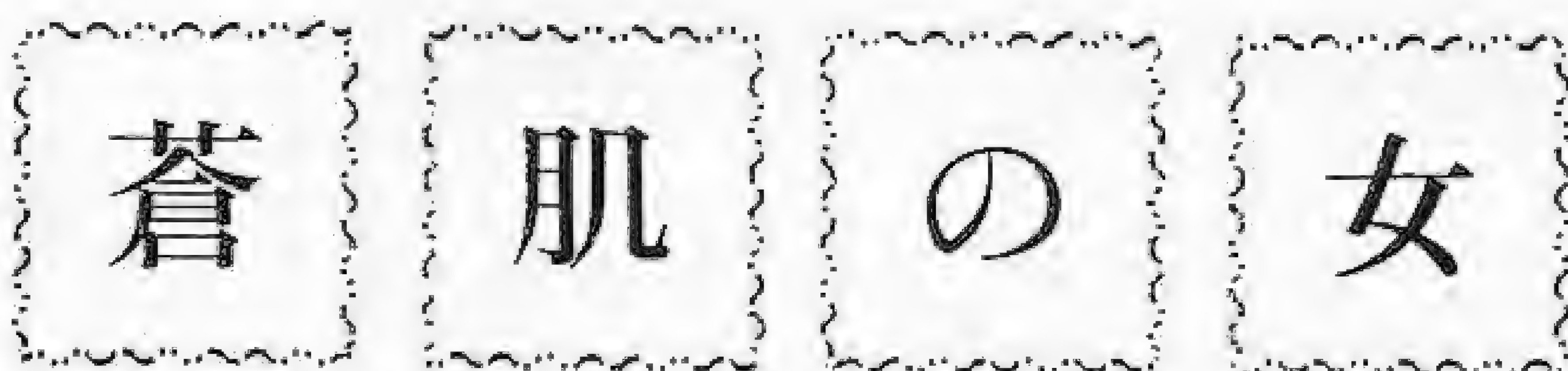


——(おわり)——

カット・秋　勲



——懸賞入選創作——



蒼肌の女
あおい　はだ　の　おんな

下田忠雄

（一）

今年の夏も盆踊りが始まったらしい。

街はずれの空地から、かすかに響いてくる太鼓の音は、ひそかな夜風をともなって、開け放された私の部屋へと訪れてくる。唄までは聞こえなかった。いや、聞こえたのかもしれないが、私の耳に入ってきたのは、テンポの速い、かすかな太鼓の音だけであった。

その太鼓の音は私の耳にも快い筈である。が、私にとって、その太鼓の音は、五年前のある奇妙で衝撃的な出来事を想い出させる合図であったのだ。

その年の夏は異常な暑さであった。

とりわけその夜は、ひどく蒸し暑かった。私はその夜、上野でミチコという女と一緒であった。その夏、最高の昼の熱気が、夜になっても、いっこうに去らず、不忍池の水面上にさえ、まだこもったままであった。

池の端の弁財天の横では、盆踊りが今たけなわであった。櫓の上の太鼓からは、重苦しい熱気をうち払うような音が、連続的に規則正しく夜空に響きわたった。賑やかな民謡が櫓の下の幾重にも出来た踊りの輪を左廻りに流していた。一番外側には見物する人々の、でこぼことした輪が、取り巻いていた。

その輪の中に、私とミチコは紛れていた。

「あの太鼓うってる人、秋田の人じゃないかしら?」

ミチコが、ひとり言ちるように、ポツリと言った。

「なぜ?」

「なんだかそんな気がするの。ウチの田舎の盆踊りで太鼓叩く人にすごく似ているの。唄

がおこさ節だからかもしれないけれど……」
「顔がかい？」
「違うわ。あの太鼓の叩き方が、よ」
　私はその時、太鼓のことなど、どうでもよかったのだ。私の躯は、つい二時間ほど前に飲んだウイスキーとハイミナールの混濁した酔いが脱けきらず、ひどくけだるく大儀であった。しかし、そのけだるいような大儀さはけっして不愉快なものではなかった。
　ミチコとは、さっき逢えたばかりだった。
　私はその夜、ミチコと七時に上野駅公園口改札で待ち合わせていた。ミチコとはそれが知り合ってから三度目のデートになる筈であった。が、ミチコは来なかったのである。
　私は尚、しばらく待ってみたが、八時が迫ったところであきらめ、その場所を離れた。足は自然と仲通りにある、行きつけのスナックに向いた。
　そのスナックで、いつもよく顔を合わせる男から、ストレートを一杯おごった代りに、ハイミナールを何錠か貰ったのである。私は睡眠薬の常用者というのではなかったが、その味は、とうに躯で知っていた。
　私は貰った何錠かのハイミナールを、ウイスキーと一緒に飲んだ。やがて、全身から無用の力が、すべて脱け去り、意識は半ば混沌とした。私は、しばらくの間、その状態を心から楽しんだ。その名残りは、スナックの外へ出てからも、まだ躯にあった。
　私はフラフラする足どりで駅へ向かった。当時、田端にあった私のアパートへは、南口から乗ったほうが都合がよかったが、足は上野駅と西郷像真下にある聚楽との間の坂道を公園口改札へと登っていくのであった。
　駅のホームの大時計が九時になろうとしているのが見えた。文字盤の数字は、ぼやけて判読できなかったが、針の位置から推しておそう確認できた。いきなり、その時計の長針が左に揺れ、長針全体がくねり、ゆらめいた。実際は一分目盛分だけ左に動いたに過ぎなかったが、私の目には、長針の尖端が毒蛇の三角の頭に見え、あたかも白い文字盤の上を黒い毒蛇が、のたくっているように見えたのである。まだ大分、薬が利いているんだな、と私は、ぼんやりと考えた。そういえば、駅のホームで蠢いている乗客たちも躯の輪郭も、ぼやけてしまっている。
　上のほうから、ぞろぞろ人が降りて来た。公園内にある文化会館で行なわれていた催し物が終わったところらしい。すれ違う人々の顔はいずれも目鼻が判然とせず、ノッペラボーみたいにかすんでいた。歩くようすも、魂が脱けてしまったようにユラユラしている。
　やっと公園口改札のところへ着いた。仲通りのスナックから、ここまでわずかな距離の筈だが、随分歩いたような気がした。
「ああよかった。もう逢えないと思ったわ」
　突然、若い女の声が聞こえて、私の左腕に女の手が、からまった。ミチコだった。
「わたし、遅れてしまったのよ。八時頃、着いたの。もう帰っちゃったと思ったけど、今まで、ずうっと待っていたの。ひょっとしたら戻ってくると思って……」
「ぼくも、そんな気がしたんだ」
　私はミチコを連れて、今登ってきたばかりの坂を下った。不思議なことにミチコと逢えた瞬間から意識がはっきりしてきたようだ。今度は駅のホームの大時計も、はっきり見えた。長針がかすかに動いて一分を刻んだ。
　意識が、はっきりしてくるとともに、躯にけだるい疲労がひろがってくるのを感じた。
　盆踊りはおこさ節から東京音頭に変わる。
「歩こうか」
　私は、無表情に踊りの輪を見とれているミ

チコをうながした。ミチコは黙って頷いただけだが、私の言葉が何を意味するかは、よくわかっている筈だった。

私は、不忍池へ出る直前のミチコの言った言葉に妙に、こだわっていた。

私たちは、さっきの聚楽のところまで降りそこから今度は聚楽の中の階段を上って西郷像のある場所へと出たのである。そこからは上野の街が見渡せた。バーや飲み屋のかたまっている路地から、そろそろ家へ帰るのか、客が大通りへ姿を現わすのが見えた。

「どこへ行こうか？」

私は、およそつまらないことを訊いてしまったと後悔した。が、ミチコの返事は意外だった。

「どこへでも。今夜は、あなたの行くところなら、どこへでもお伴するわ」

ミチコがそのつもりでいることは、私にはとうにわかっていた。この前、ミチコと二度目に逢った時のいいさつからみて、今日私たちが逢えば、行きつくところまで行くことはお互いに充分わかっていたことだ。しかし、ミチコが正面切ってそんな言い方をするとは想像もしていなかったのである。私はミチコのその言葉に、その時、いいようのない不安を感じた。その言葉には、ミチコの思いつめた気配のようなものが、こもっている気がしたのだった。それが私に、その言葉について妙に、こだわる気持を与えてしまったのに違いなかった。

見物の輪から抜け出し、弁財天の小さな鳥居をくぐると、両側には夜店が並んでいた。

ほおずき屋。月遅れの雑誌売り。綿飴屋。玩具売りは、次々に、さまざまな玩具を取り出し、二百円では、百五十円、これでもまだか、と台を叩いていたし、子供騙しの手品道具屋は、汗みどろになりながら盛んに口上をつけていた。

しかし、そこは束の間の雑踏であった。夜店の連中は、あと二時間もすれば、何処かへ消えてしまう。そして、あくる晩は、また同じ場所に同じ顔が臆面もなく同じ店を張る。束の間の雑踏を演出するのだ。

私たちは、その雑踏を無言で縫った。

小さな赤い橋があった。その橋の手前の店は蛙の玩具ばかりを売っていた。緑色に染められたそのゴム製の蛙たちは、小さな台の上に行儀よく並んでいた。

私たちは、ふと、そこで立ち止まった。いや、ミチコが立ち止まったので、私も立ち止まらざるを得なかったのだ。

「可愛い蛙ね」

「うん……」

私は気のない返事をした。

「弁天さんは白蛇の神様でしょう？　すくんでるわ、このカエルたち……」

ミチコは冗談とも本気ともつかず呟いた。

この女は、よほど蛇に興味があるらしい。私はミチコと初めて出会った日のことを思い浮かべた。

（二）

御徒町駅を降りると、ひどい土砂降りだった。烈しい雷鳴をともなったその驟雨を避けるため、雨具の用意のなかった私は、慌てて近くの喫茶店に飛び込んだ。

その日、私は上野のある小さな会社へ行く途中であった。十日ほど前、新聞の募集広告を見て履歴書を送ったところ、間もなくその会社から面接通知がきた。その日が、ちょうど面接の日で私は一時までに、その会社へ行かねばならなかったのである。実のところ面接に行くのは、あまり気乗りがしなかった。あてにしていなかった面接通知がきてしまったために、追い立てられて、ここまで出てき

てしまったようなものだ。

アパートを出る時に、信子に投げつけられた言葉が、まだ耳に残っていた。「今度は頑張ってくるのよ。甲斐性なし！」まくれあがったネグリジェの裾を気にする様子もなく、ベッドに、ひっくり返ったまま、信子は叫んだのだった。からかいとも罵声とも又、激励とも取れるその言葉は、靴を履きドアのノブに手を掛けた途端に発せられたということもあって、一瞬、私をその場に釘づけにした。

いたく気勢を削がれた思いになってドアを閉めると、部屋の中からケケケと笑う信子の声が響いてきた。

信子はバーに勤めていた。私と信子とは既に三年近くも同棲生活を送っていたが、二年目あたりから二人の間に微妙な割れ目が出来た。定職がなくブラブラと日を過ごす私と、月に一、二回は必ず浮気のために外泊してくる信子とは割れ目ができて当然であった。三年目に入ると、その割れ目は、いよいよ大きく深くなった。が、二人は文字通り腐れ縁で信子はまだ私と別れようとはしないし、私も信子から離れると、情けない話だが飢えが待っているばかりであった。そうした状況の中での二人の暗黙の妥協が、自然と信子には私を飼っているという立場を取らせ、私には信子の下風に甘んじるということを、我慢させた。

結局、信子が私を飼うという秩序が生まれそれが崩れないかぎり、二人の仲は安泰なのだった。

私は相変わらず売れもせぬ小説を、アパートという檻の中で書き続けていった。

信子は飼う立場から、そんな私に対して、時には冷やかな、時には母親が子供に注ぐような慈愛のこもった目で眺めていた。私にとって、そういう信子の目は、とても厭わしく感じられたものである。少しでも干渉されまいという気持が私を度々就職させたが、どれもこれも二月とは続かなかった。檻の中から脱け出て、しばし山野を駆けるといった程度の気分転換には、充分なったが……。

一時の面接時間は、とうに過ぎていた。もっとも、喫茶店に入って出されたお絞りで顔の汗を拭った時から、面接に行くということが、ひどく面倒くさく莫迦気たことに思えてきていた。

今入って来たばかりの二人連れの客が階段を登ってきた。彼等の傘からは雫がしたたり落ちなかった。雨は、いつのまにか上がったらしい。私は伝票を手にして立ち上がった。

梅雨あけの雷雨が襲った上野の街を、わずかに西へ傾いた陽が照りつけていた。じめじめした重苦しさが、カラッとした燥(はしゃ)いだ空気に、今盛んに変わりつつあった。熱く眩しい陽は、既に真夏であった。

私は、なんとなく都電通りに出る道を歩いてみた。ウイークデーの昼間にもかかわらずかなりの人が、その道を流れていた。

ある漢方薬局の前で、私は足を止めた。その漢方薬局には、大きなウインドーで隔てられた檻の中に、数十匹の青大将と縞蛇が放たれていたのである。

しかし私が足を止めたのは、蛇を見ようとしたためではなかった。

ウインドーの中の枯木に、からみつき、重なりあい、もつれた毛糸くずのようになった蛇のかたまりを、若い女が、まばたきもせずに見詰めていたのだ。私は、その女の、蛇を見る目に気をとられた。

その女の、蛇を見詰める目の色には、何か普通でないものがある。薄気味わるそうに見詰めているわけではない。蛇を哀れんでいるようでもある。憎んでいるようにも思えた。いや、そうではなかった。

もつれあった蛇のかたまりの中から、ひときわ大きな青大将が鎌首を、もたげてきた。そいつはウインドーに首をつけんばかりに近づけて静止した。私は、なぜかその時、この蛇は若い女を見詰めるために鎌首をもたげたのではないかと思った。

女の目は、その大きな蛇を凝視して動かない。

女の目は蛇を見詰めているのではない。語りかけているのだ。その大きな蛇と、なにかを伝えあっている。私は、そう思った。

蛇は絶えず、真赤な炎の糸のような舌を吐き出したり引っ込めたりしていた。

若い女は、私の視線に気がついたようだ。すーっとウインドーから離れ、歩き始めた。私も、そこを離れた。

女は都電通りに出ると、右に折れ、上野駅の方へ向かった。そこから上野駅南口に至るまでの右側には、洋装店やハンドバッグ店、甘味物専門の喫茶店などが並んでいて、若い女たちのショッピング地帯になっていた。昼間から軒並みに店を見てまわったり、ショーウインドーで品定めする女たちで、かなり賑わっているところであった。

が、その女は華やかなウインドーには一瞥もくれなかった。といって、急いでいるようでもない。ゆっくりというより、静かな足どりで、周囲をまったく無視したような歩き方であった。

女は静かに歩き続けている。私が女との間隔が、つまり過ぎない様に苦労するぐらいだから、かなりゆっくりとした歩調であった。

この時間、このショッピング街をブラブラ歩く女たちは、例外なく時間を持てあまし、退屈している女たちだ。だから、彼女たちの歩く姿には、どことなくスキが感じられたし、それが、買物にやって来た女たちや、他処に用事があって急ぎ足で通り過ぎていく女たちとの違いだったが、その女には、退屈している女のスキはなかったし、かといって、用事がある風にも見えなかった。

この女は、まったく足音を立てないで歩いているのではないか？　ふと、そう思った。

私が、その女となんとしても話をしてみたい衝動にかられたのはその時だったろうか。

ともかく、そうすべく行動に移したのは間違いない。

「ひとり？」

私は女に追いつき、肩を並べざまに声を掛けた。

女は聞こえなかったかのように、私を無視した。

「君は蛇の気持がわかるのかい？」

唐突な問いに女の足は止まった。私は内心しめたと思った。女の気持が動いたから足が止まったのだ。

「ぼく、お茶が飲みたくなったんだけど、ひとりで飲むのもなんだかつまらなくて……。よかったら一緒に飲んで話相手になってほしいんだ」

私はブッキラボーに、が、少し照れながら言った。そんな言い草が、女に安心感を与えるということは今までに何回か経験して知っていた。女は私の視線を避けながら、返事はしなかったが、髪に手をやり、かきなでる仕草をした。私は、その仕草を、承諾の意志表示と受取った。

「三十分でもいいよ。すぐそこに静かな喫茶店があるんだ」

私は赤札堂の横を右に折れたところにある喫茶店Rに女を連れていった。私たちはロマンスシートに並んで坐った。

「ミチコっていうの」

女は名乗った。

秋田のN市から一昨年の春、高校を卒業し

て上京したのだと言う。現在は本田という作曲家のところで住み込みのお手伝いをしている。その作曲家の家は青砥にあり、荒川の堤の傍だというような話を続けた。

　私はミチコの声に独得の粘りのようなものがあるのに気付いた。ミチコの口から言葉が発せられると、言葉自体が粘っこい存在として感覚されるのである。

「あなたのことも知りたいわ」

　仕事は、なにをしているの？　とミチコは尋ねてきた。

　私はやむを得ず、二、三カ月間、勤めただけで、つい最近、辞めたばかりの、ある会社の名刺を出した。



イメージギャラリー　『縄と女のバラード』　岡　たかし

「アラ、新聞記者をしているの？」

　ミチコの言葉は粘っこさはあったが、抑揚やアクセントというものが、まったくなく、新聞記者をしているということに対して、思いがけないという驚きがあったのかどうかについては判断の仕様がなかった。

　しかし、ミチコの言葉の粘っこさは、私の耳よりも、肌に粘りつくような刺激を与え、それは私の男心にも敏感に伝わった。

　ミチコは私の古い名刺を大事そうにハンドバッグに、しまい込んだ。

「今日は休みなの？」

「そう。週に一回、休みがもらえるの。日曜日は休めないんだけど。それでも、この頃、お手伝いさんの、なり手がいないらしくて、待遇は、とてもいいのよ」

　テレビ付きの部屋をあてがわれ、夜七時以降の仕事は全部、奥さんがやってくれるのだと言った。

「だけど、最近、嫌なことばかりあるの。聞いてくれる？」

　ミチコが東京へ出て来たのは、高校時代に付き合っていた男友達と離れるためらしかった。赤池という名のその男友達は、同じ高校の一級上で、卒業してからベッド販売会社の

営業所に勤めたが、すぐあきて辞めてしまいあとはミチコが卒業するまでの間、ずっとブラブラしていた。ミチコは、そんな赤池が嫌になったらしい。

ところがミチコが上京したことを知ると、その後を追うようにして赤池も東京へ出てきた。そして今は、中野区の自動車修理工場に見習工として勤めているのだと言う。

「しょっちゅう電話をかけてくるの。それも朝早くよこしたり夜遅くだったりして、旦那様や奥様の手前もあるし、困ってしまうわ」

それも、きまって金を貸してくれというような迷惑な話で、最近は電話のベルが鳴ると途端に、なにも手が付かなくなり、半分ノイローゼの状態だとミチコは言った。

「電話で何度も断わると、お家の人の留守を見はからってやってくるのよ。図々しいったらありゃしない」

ミチコは坐り疲れたのか、心もち腰をずらした。その瞬間、私はミチコの躯が、わずかに、くねったのを見た。それは腰をずらした時の反動で躯が動揺したのとは明らかに異なり、あまりにも自然な動作として行なわれ、ミチコ自身も意識していないと思われるような、くねり方だった。

「あなた、さっき私が蛇を見ていたところの隣に立っていたわね」

ミチコは突然、話題を変えた。

「気になる?」

「ああ、大いに気になるね」

ミチコの田舎はN市の郊外にあった。郊外といっても、市の中心部から十数キロも離れており、そこまで来ると、三百米前後の丘陵がエンエンと続いているところらしい。ミチコの家はその麓にあり、植林の良質の杉が産出して、かなり裕福な部落だと言った。

「どこの家にも蛇が棲みついているのよ。ネズミをとってくれるのと魔除けをしてくれるという言伝えがあって、田舎ではオ守リサマと呼んで、とても大事にするの。もちろん私の家にも大きなオ守リサマが棲んでいたわ」

二米もあるオ守リサマで、静かな夜更けに梁の上を伝って移動する時などは、蛇と梁と摩擦する音が家中に響く。ズリッズリッと異様な音がするのだと言う。

「田舎の家っていうのは、普通と違って天井がない造りなの。だからオ守リサマは家中を梁を伝って移動することができるの」

ミチコは又、少し身をくねらした。

「だけど、同じ屋根の下で大きな蛇と一緒だなんて薄気味悪くないのかなあ」

「小さい時から、それが当たり前になっているから……。それに滅多に人の前に姿を見せることがないの」

その滅多に人前に姿を見せない筈のオ守リサマが、ネズミを呑みこむところを目撃したことがある、とミチコは言った。

「中学の頃かしら。私一人の他、家に誰も居なかった時の事よ。ドタリと突然、重たい物が高いところから落ちたような音がしたの。びっくりして廊下へ出てみると、オ守リサマが梁から落っこちたところだったの。ネズミをつかまえたばかりのところらしく、口が大きく裂けて、半分ほど呑みかけていたわ。ネズミのチュウチュウという悲鳴が蛇の口の奥から聞こえたのと、ネズミの尻尾が力なく動いていたのを今でもはっきり憶えているわ」

ミチコは、その時の蛇の目の輝きが忘れられないと言った。

「ネズミを半分、呑みかけたオ守リサマの目って、とても印象的よ。素直っていうのかしら。純粋だし、何ともいえない、きれいな目をしているわ」

「それは、獲物にありついたという本能的な喜びじゃあ――」

「違うわ！」

ミチコは私の言葉を遮り、驚くほど、きっぱりとした調子で打ち消した。

「殺戮の残忍な目でもないわ。満足した目でもないの。かといって楽しむ目でもないの。なんといったらいいのかしら？　哀しみに堪える目に近いの。ネズミに対する愛みたいなものが感じられたわ」

私はミチコの顔を窺った。薄暗い照明のなかに白いというより青い顔が浮かんでいた。その青い顔からミチコの心を読みとることは不可能のように思えた。

が、その顔の中の大きな目は、ぬれぬれとしており、不思議な輝きがあった。私は、ミチコの言うオ守リサマの目というのは、案外こんな目をいうのかもしれないと思った。

「ネズミはオ守リサマにとっては単なる食物じゃないのよ。呑むという行為は大変な難行苦行なの。口を裂き、顎の骨を外して、時には血まで滴らせながらも、呑む行為を続けなければならない業みたいなものを感じるわ」

ミチコの粘っこい声は、妙に説得力があった。私は確かにそうかもしれないと思った。ライオンが殺した獲物の肉を、喰いやぶり喰いやぶりして、ほおばるのとは、まったく異質なものかもしれない。

「三年前に死んじゃったの、ウチのオ守リサマ……」

胴の一番太いところが物干竿ほどもあったそのオ守リサマは、ある日、庭に投げ出されたような格好をして死んでいた。家中で、庭の隅に手厚く葬ったという。

「つぎの日のことだったけど、私、埋めた筈のオ守リサマを、家から少し離れたところにある沼のほとりで見付けたの」

一目見て家のオ守リサマに間違いないことがわかったが、念の為、前日埋めた跡を調べてみたら、やはり死体は消えていたという。

「水のあるところまで行きたかったのよ、きっと。よそのオ守リサマも沼の傍で死んでいるのを時々見かけたものだわ」

喫茶店Rを出た時はすでに夕暮れだった。私たちは上野公園に向かった。私はミチコの肩を、そっと抱くようにして歩いた。Rでの四時間にも及ぶ語らいが、そんな親密そうな動作を、ごく当たり前のようにしていた。

階段を登り、東照宮の境内を西洋美術館の裏手を目指して抜けていった。途中、私はミチコの手を握った。ミチコの手は、しっとりと脂がのっていた。冷たくも暖かくもない、粘りつくような肌を感じた。

私たちは西洋美術館の裏手にあたる木立の中に入った。木々の間を抜けてくる風には昼の通り雨の名残りがあって涼しかった。

大きな樫の木をミチコは見上げながら言った。

「田舎の庭にある樫の木、これより、ずっと高いわ」

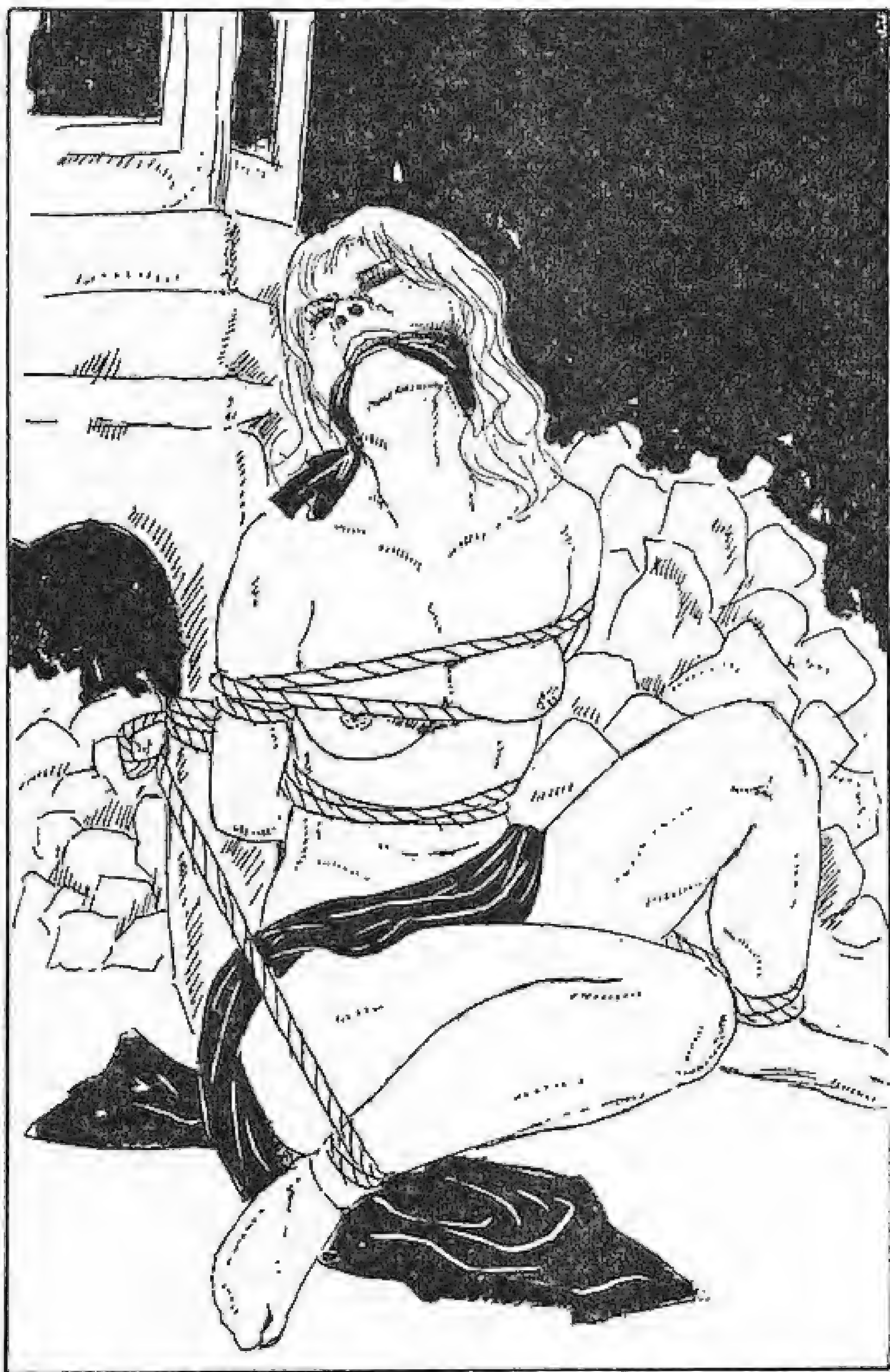
上を向いたミチコの目が、薄闇の中で冷たい光を放っていた。私は不意にミチコを抱き寄せ、接吻をしようとした。ミチコは「駄目よ！」と小さく叫び身をかわすと、その樫の木にからみつくようにして摑まった。私は背後からミチコを樫の木から引き剝がすようにしたが、まるでミチコの躯全体が吸盤にでも化してしまったかのように幹にへばりついて微動もしない。私は尚も力を入れて、引き剝がそうとしたが徒労に終わった。

私があきらめて力を抜いた途端、ミチコは樫の木から離れ、くるりと私の方に向き直った。そして私の背中に手を回し、自ら唇を求めてきた。ミチコの目は大きく見開かれ、冷たい光を放っている。

私の舌がミチコの口へ押入ろうとするより早く、ミチコの舌が私の舌を押し戻すように

して私の口へ侵入してきた。火のような感触だった。その熱く燃える肉塊が私の口腔を這っている間中、私は痺れるような震えと眩暈を覚えたものである。
その夜、私はなかなか寝つかれなかった。薄闇の中で冷たい光を放ったミチコの不思議な目が、絶えず私の目の前にちらついては眠りを妨げた。あの時、私はミチコの光る目にいいようのない畏れを感じたのだ。私が、はじめミチコに強引に接吻しようとしたのは、その畏れを誤魔化すためではなかっただろうか。
ミチコの冷え冷えした唇の感触と、その唇の間から繰り出された火のような肉塊の感触が甦った。闇の中でミチコの目に射すくめられ、虜になった自分を感じた。
隣で信子が大きく寝返りを打った。

それから一週間後の夕方、私は再びミチコと逢った。待ち合わせ場所の公園口改札を出ると、ミチコは先に着いていた。私たちは駅の建物の一部になっているレストランで軽い食事を取ったが、そこでミチコは、又も蛇の話を始めたのだった。
「ねえ、ナマゴロシになった蛇って、見たことある？」
ミチコは食べ終わったスパゲティのソースが口元についたのを、紙ナプキンで拭いながら何気なく訊いた。
「ああ、蛇を殺したことならあるよ」
私は子供の頃、鶏小屋に忍びこんだ青大将を青竹で叩き殺したことを思い出した。
「頭に近い方の胴が卵を呑みこんで、ふくらんでいたんだ。カーッとなって、半分は蛇が恐いってこともあったんだけど、頭や、ふくらんだ胴のあたりを、夢中で、ひっぱたいたよ。何百回か続けたら、グッタリと動かなくなっちゃってね」
「まあ！」
ミチコは、目を大きく見開いて私を見た。私はその目に、蛇に同情しているというよりも、もっと切実な、大袈裟に言えば、ミチコ自身が関わりあってでもいるような深刻なものを感じた。
「それで、その蛇、どうしたの？」
「死んじゃったから、川に捨てに行ったよ」
「じゃあ、生き返ったかも知れないわね、その蛇」
ミチコは、なぜか、ほっとしたように言った。私は一度、死んだ蛇が生き返るわけがないと言おうとしたが止めた。
「キミの田舎は、蛇を大事にするところだから、殺すなんてことはないんだろう」
「でもないの。よそ者の伐採人夫が入りこむでしょう。山で蛇を見つけてはナマゴロシにしちゃうのよ」
枯木の枝でひっぱたいたり、地下足袋で踏みつけては面白がるのだという。
「そんなにされても蛇って死にはしないわ。ナマゴロシになっているだけよ。それにねえ、ナマゴロシになった蛇の目って、憎しみに燃えてなんかいないの。踏みつけられても叩かれても、喜んで堪えているわ」
「ぼくには理解できないね」
「今にわかるわよ」
私はミチコの言葉を、どう受け取るべきか迷った。こんど蛇を殺す時には、わかるという意味であろうか。
レストランを出ると、私たちは公園に足を向けた。催し物を見に行くらしい人々の群れが文化会館の入口に吸い込まれていくと、あとは私たちのようなアベックが数組、歩いているだけであった。そのアベックたちも次々に暗がりに消えて行く。私たちは無言で、初めて唇をかわした場所へと向かった。


イメージギャラリー　『夜咲き艶花』　志羽利也

その夜、公園からの帰途、私たちは鶯谷駅の方角に向かって歩いていた。

私は躯は熱く燃えていた。私の躯は、とめどない欲望で沸き立っていたので、ミチコをそのまま帰したくなかったのだ。

私たちは鶯谷駅手前の陸橋を渡った。陸橋の中途で階段を降りると、そこは大きなキャバレーの前であった。手前の細い路地を左に折れると、けばけばしい造りの連れ込み旅館の前に出た。私は無言のまま、ミチコの背中に回した腕に力を込めた。一瞬、ミチコの背中がビクッと反応したが、そのまま黙ってついてきた。

狭い部屋いっぱいに敷かれた蒲団と、その上にきちんと並べられた丸い二つの枕は、私たちに戸惑いを与えた。私たちは意識して蒲団には目をやらず、部屋の隅に押しやられていた小さなテーブルに向かい合って坐った。

ミチコは、お茶を運んできた四十女が部屋の外へ消えるのをムッツリ見ていた。私は突然、電気を消し、ミチコに襲いかかった。意外にもミチコは必死に抗ったのだ。私の胸の下で、腕の中でミチコは巧みに身をくねらし決して私の自由にはさせなかった。私は焦りミチコのスカートを乱暴に捲くり上げ、肉に食い込んだ堅いガードルに指をねじこむようにして無理矢理、引き下ろそうとした。

「やめて！」

ミチコは低い、しかし厳しい声で叫んだ。私はなぜかハッとしてミチコの顔を見た。闇の中でミチコの目は異様なまでに冷たい光を強く放っていたのだ。私は、その目に射すくめられ、全身の力が脱けていくような錯覚に陥った。

結局、私たちは何事もなく、その旅館を出たのであった。

（三）

夜店の並びは都電の踏切少し手前で切れていた。その切れ目を受け持っているのは生烏賊を焼いている屋台であった。私たちは、炎に焙られた烏賊の匂いと、それに安酒の匂いが、いりまじった空気の中を横切り、都電の踏切を越えた。

都電の線路に沿った暗い道を、しばらく行くと、線路は左側の家並みの間に消えてしまっていた。道は弧を描き、緩い上り坂になった。両側は古い貧弱な家並みで、とりわけ右側の家並みは、あおぐろく迫る上野の森に今にも押しつぶされそうにしている。

その右側の家並みの前方に赤い門燈が見えてきた。池の端の太鼓の音が道を伝って聞こえてきた。私たちは、背中に受けた太鼓の音に、せき立てられるようにして、S旅館と読める赤い門燈をくぐった。

私はミチコの言う通りに明りを消した。ミチコは自分で服を脱ぎ、全裸になると静かにベッドの上に横たわった。

ミチコの肉体は、にぶい光を放って闇の中に浮かんでいる。白いというよりは青い肌のように見えた。その青い肌が、すぐ手の届くところにあるのだ。

私は震えた。触れてはならないものに触れる、初めて禁忌（タブー）を侵す男のように、その青い肌に触れた。

脂をたっぷり含んだ粘り着くような肌であった。私はミチコの肌が青く光る秘密を知ったと思った。

私は、手を静かにすべり上げていった。ミチコの呼吸が荒くなるのがわかった。私の手に力がこめられ、ミチコの形よく盛りあがった乳房に這っていこうとした時だった。突然ミチコは不可解な行動をとったのだ。

ミチコは私の脱ぎ捨てたズボンから、いきなり、革のベルトを引き抜いたのである。そして言った。

「これで私を叩いて！」

私は、あっけにとられ、咄嗟には、その意味を、はかりかねた。

「ああ、早くやって――」

ミチコは喘ぎながら促した。私は、その粘りつくような声に、拒否できないミチコの意志を感じた。

私は催眠術をかけられた男のように、ミチコの手からベルトを取り、その躯に振りおろした。瞬間、闇の中に鋭い音が走り、ミチコの青く光る肌が変化するのがわかった。私は興奮した。続けざまに叩いた。ミチコは悲鳴こそあげなかったが、ベルトが振りおろされるたびに、低い呻きを漏らし、ついには間断なく、糸を引くように呻き続けるようになった。私は狂ったように叩き続けた。まるでミチコの意志が私の腕に乗り移ったかのようであった。

薄暗い中であったが、ミチコの青い肌に緋色の鞭痕が縦横に走り、浮きあがるのが、はっきりと見とれた。ミチコが躯をのけぞらせひきつらせすると、その緋色の鞭痕は、それ自体が生き物であるかのように変化するのであった。

今はもう狂ったように革のベルトを振るう私は、子供の頃、卵を呑みこんだ蛇を夢中で叩いている私と同じであった。なおも叩き続けた。

やがてミチコは、ピクリとも動かなくなった。

私は不思議な興奮と、革ベルトを振りまわした疲れとで、痺れたようになった腕でミチコを仰向かせた。グッタリと、私のなすままになっていたミチコが、大きく喘ぐと急に烈しく挑んできた。

私は、かつて味わったことのない快楽の海の中に溺れこんだ。
狂乱と耽美の時間は過ぎた。ミチコは汗を吸った皺だらけのシーツに身を横たえ、私に背中を向けている。私は、ミチコの背中の緋色の筋が、ほとんどわからないくらいに薄れてしまっているのを訝っていた。さっきは暗がりの中でも、はっきりと見えていたのだ。あれから一時間も経っていないのである。
「私、こんな女なのよ。もうわかったでしょう」
ミチコは後ろを向いたまま、言った。
私は無言だった。ミチコの言ったことが、汚れた女という意味であるのか、それとも、この場には直接関係ない、無知な田舎娘という意味で発せられたのか、判断に苦しんだためだった。
私が黙っているのに業を煮やしたのか、ミチコは突然、くるりと向き直り、私を、光る目で、じっと見詰めながら言った。
「私、知っているのよ、あなたのこと。なにもかも……」
「えっ、なにを……」
私は全裸の時に、いきなり予期していなかった言葉を投げつけられたせいもあって、大変どぎまぎした。
「私、初めて逢った日から、二、三日、経ってから、あなたに貰った名刺のところに電話したのよ。そうしたら……」
ミチコは声を詰まらせた。
ミチコが、つぎに何を言おうとしているのかは、わかっていた。後足で砂をかけるようにして辞めていった私に対し、その会社は快く思っていなかった筈だ。問い合わせの電話でもかかれば、尾ヒレを付けて悪口を言うに違いなかった。
が、そんなことはどうでもよかった。ただミチコを失いたくなかった。妖しく輝く青い肌におおわれた肉体の奥深くにひそむ魔性の快楽に、私はつい、さっき手を染めてしまったばかりなのだ。しかし、もう一人の私はミチコの青い肌には、二度と触れまいとしていた。ミチコの魔性の虜になることを畏れていたのである。
私の頭の中は、野分の風に吹かれる薄の穂のように揺れ乱れていた。
「とっくに前に辞めたんですってね。それに……あなたには奥さんがいるんだって……」
ミチコは私の予想していた通りのことを言った。私は、ともかくここを出て、池の端でも歩きながら、ミチコに今の私の気持を打ち明けようと思った。
「ともかく、外に出よう」
私は手さぐりで服を着始めた。部屋を明るくして、気持の動揺からこの場に居たたまれない思いをしている私の顔を、ミチコに見られるのは、たまらなく嫌だった。
ミチコは、私が服を着ている間に、全裸のままトイレに入った。しばらくして、激しく水の落ちる音がした。
ミチコはトイレから出ても身仕度をせず、なにを思ったのか、またベッドに這い上がり横になった。
私は再び押えようもない衝動にかられて、思わず、にじり寄った。
その瞬間、ミチコは目を大きく見開いたのである。
「私、たった今、薬をいっぱい飲んだのよ」
ミチコの目は大きく燐光のように光り出した。私の躯は、金縛りにあったように動かなくなった。
「あなたを好きになっていたの。ああ、もう駄目だわ。ああ……、早く逃げてえ――」
ミチコの目が閉じられた。ミチコの意識は混濁し始めたようだった。

「逃げ——てえ——」

ミチコのふりしぼるような声が、中途でかすれてしまった時、突然、私の耳に太鼓の音が響いてきた。その音は急速に近づき、遂には私の耳元で叩かれているのかと思うほど大きくなった。私は弾かれたように、その部屋を飛び出した。

そのあと、どこをどのように歩き、走ったのか、まったく記憶がなかった。ただ、すさまじいばかりの太鼓の音が、私の頭の中を荒れ狂い続けていたような気がした。

気がつくと不忍池畔のベンチに横になっていた。陽は、かなり高い。頭の芯がズキズキ痛んだ。昨夜、行きつけのスナックで飲んだ薬(リスク)が、まだ残っているのだと思った。それから、どうしたっけと自問しながら私は、あっと叫んだ。昨夜ミチコと過ごした旅館での出来事が、はっきりと思い出されたのである。

ミチコは死んでしまったのだろうか。私は落ち着かず、胸は早鐘を打ったように動悸した。時計を見た。十時を少し廻っている。私は夢遊病者のような足どりで駅に向かった。

立売りスタンドで朝刊を三、四枚買い片っぱしから目を通した。が、私が予想していたような記事は、どこにも発見できなかった。

私はアパートへ帰った。信子は部屋には居なかった。どうやら昨夜は帰らなかったらしい。部屋に入っても、やはり落ち着かなかった。今朝、ミチコの死体が発見されたとしても、朝刊には間に合う筈がなかったと思い、テレビを点け放しにした。しかし、テレビも報じる気配がない。私は今にも刑事が扉をノックするのではないかとビクビクしていた。絶えず煙草に火を点けては、もみ消す動作を繰り返していた。夕刊が配達されるのが待ち切れず駅まで買いに出掛けた。

夕刊を買うと、その場で展げ、社会面を喰い入るように見た。が、(上野の旅館で変死体)といったような見出しは見つからない。ほっとしたような、落ち着かないような気分だった。もしかしたら、ミチコは薬など飲まなかったのかもしれない。あれは私を脅かしたつもりなのではなかったか、と思い始めながら、最下段の小さな見出しに目をやった私の顔から、みるみるうちに血の気が失せていったのである。

(結婚に反対され心中)という見出しの記事は、次のようなものであった。

(二十七日午後九時三十五分ごろ、葛飾区青砥町二の十、作曲家本田宏さん方応接間ソファーの上で同家お手伝い原美智子さん(十九才)と二十二、三才位の若い男が死んでいるのを、旅行から帰った本田さん夫妻が発見、青砥署に届け出た。調べでは、若い男はかねて原さんと交際中の中野区に住むAさん(二十才)で、原さんはAさんとの交際を、本田さん夫妻や郷里の両親から反対されており、結婚できないことを悲観しての心中らしい)

頭の中が、くらくらした。すると昨夜のミチコとのことは、すべて薬(リスク)を飲んでの幻だったのか。

私は、ミチコと初めて出会った日のことを思い出してみた。喫茶店Rでのミチコの話を一つ一つ、思い浮かべてみたのである。田舎の蛇の話。ミチコは、水のあるところまで行って死んだオ守リサマの話をした。

突然、私の頭にひらめくものがあった。ミチコは水辺で死にたかったのだ。不忍池の畔で死ぬために私に逢いに来たのに違いない。私の躯中からすべての力が脱けていった。

空地の太鼓の音は、いつのまにか止んだ。夜風が一段と涼しくなっている。私は今でもあの夜ミチコは、不忍池の傍へ、やってきて死んだ、と信じている。

(完)



＜告白＞

羞恥責め願望の系譜

桃源国彦（とうげんくにひこ）

奇ク十月号で、鈴木千鶴子嬢がモデルになっている「東京の踊り子浣腸記」を読み、特に、その写真のすばらしさに、たまらない気持になりペンをとった次第です。憧れの鈴木千鶴子嬢のような女性が、私の前に羞恥責めの快楽と陶酔の姿態を、さらけ出してくれることを心から期して、私のつたない願望と、その目覚めの頃について記してみます。

私が奇クの存在を始めて知ったのは、高校の二年の頃ですから、既に十年近くも昔の事になります。地方の大学で、仏文学を教えている父の書棚の隅に、桃源社から発行されていた「マルキ・ド・サド全集」や、ジュネの「花のノートルダム」等とならんで立てかけてあった奇クを始めて手にした日の、あの衝撃と興奮は、今でも、昨日の事の様に、はっきりと思い出されます。

性に目覚めて間もない頃で、SMのなんたるかも知らなかった私は、厳格であった父の書斎に、ひっそりと置かれていた、その本にとまどい、父の中に、人間の悲しさを、かい間見た様な気がしたものでした。

明快に、それらの事が理解出来るようになるまでには、さらに、長い年月を待たねばな

らなかったのですが、とにかく、当時は新しく発見した、その本を秘かに読みふけり、覚えたての手慰みにふけっていたものです。

当時の奇クは、真白の表紙に、黒でイラストをあしらった、とてもシャレタ本でした。グラビアやイラストも、巻頭にあったように記憶しています。

すでに中学生の頃から、本屋の店頭などで性に関する雑誌や女性ヌードのグラビアなども、店員に気がねしながらも立ち読みしていたわけで、最初は、それら好奇心の延長として奇クのページも、めくっていたのでしょうが、父の書斎で、奇クが立てかけてあったのと同じ本棚で見つけた本に、伊藤晴雨氏の著書がありました。色刷りの時代物の責絵が出ていました。

その本の中に、セーラー服姿の少女が責められている写真のページがあり、当時、自分が学生であった事も理由としたのかも知れませんが、始めて、はっきりと、今まで自分が知らなかった、未だ感じた事のなかった強い欲望を感じた事を覚えています。

自己の中に、ノーマルとは言えない、ある欲望の所在を、たしかな形ではないまでも、おぼろげに自覚し始めるようになった最初の日でした。

その本を発見してからは、一人になると父の書斎で、そのページに、じっと見入ったものでした。

奇クの世界と、もう一つ、私の性の目覚めに忘れる事の出来ない世界があります。

私には三才年上の美しい姉がいました。私が高校生の頃ですから、姉は短大に通っていた頃の事です。私が始めて、偶然、手慰みを知った日、私は姉の下着をひそかに抽き出しから出し、自分の身につけて興奮しながら自分の物を……まわしているうちに、突然、爆発してしまい、その快感を知ったのです。

その日以来、姉の目をぬすんでは、姉のパンティやシュミーズ等を身につけて、鏡にうつった自分の姿に見入りながら手慰みにふけっていたものでした。

現在、女装には全く関心がありませんから莫然とした性の目覚めに伴う女体への慕情だったのかも知れません。ただ、手慰みをしながら、姉とのセックスを想像していなかったと言えば嘘になりますが、それも、閉鎖的な社会で思春期を迎えた少年の、性に対する欲望のたあいない当然の成行と言えるのではないでしょうか。

こうして、奇クとは比較的、早い出会いであったにもかかわらず、なすすべがあろうはずもなく、時おり、父の書斎でひそかに奇クの世界にひたる事と、姉の下着を身につけて手慰みにふける以外は、平凡でおとなしい学生としての毎日を送っていました。

性にも、はっきり目覚めていたにもかかわらず、その実行力においては、全く無力だったと言わねばなりません。

そんな私が、ひとつだけ、いまだに忘れずにいる幼い日の体験があります。

あまりにも幼い日の体験なので、自分のアブノーマルな欲望と結びつけるのはナンセンスかもしれません。しかし、今になって思い出しますと、どうしても遠因が、あの体験にあり、生まれながらにして持っていた素質がすでに、意識する事なく、あの日、芽ばえていたと思われてなりません。誰でもが持っている幼児体験だと言われるなら、私には、その方が気が楽なのですが――。

小学校に入学する前ですから、いくつの頃だったでしょうか。隣家に、二才年下のEち

ゃんという女の子がいました。特別、仲が良かったという思い出はないのですが、とにかく、その日は家人が不在で、私はEちゃんと二人で、おままごとをしたりして遊んでいました。

そのうちに、退屈してきた私は、自分の方が年長である事をタテに日頃の好奇心を満たしてみたいという欲望にかられました。『お医者さんごっこ』にかこつけて、私はEちゃんの、かわいいパンツをぬがしてしまいました。極めて内気だった私にとって、それは生まれて始めての経験でした。

もとより、男女の性のいとなみについてなど、知るよしもなく、生まれて始めて目にするその白いわれめちゃんに、ただ見入っていました。その時の印象が、よほど強かったのでしょうか。後年、成長して女性と接する機会を何度か持ったにもかかわらず、黒々としたそれよりも、あの日の白いわれめちゃんの方が、私にとっては、強い欲望の源泉となっています。

私がビーナスの丘の剃毛(ていもう)に、強い関心があるのも、そのへんに理由があるのだと思います。

お医者さんになった私は、台所から御飯粒を持って来て、Eちゃんの白いわれめちゃんに、それをすりつけて、はり合わそうと試みたり、紙の小片に、御飯粒をぬりつけて、Eちゃんの可愛いいアヌスにつめこんだりして時を過ごしました。

そのうち、おしっこをしたいというEちゃんをトイレへ連れて行き、Eちゃんの排尿をじっと、かたずをのんで見入っていたものでした。

その日、私が行なった事は、ただ、それだけでしたが、家に帰ったEちゃんが、彼女の母親に、おしりに紙をつめられたと訴えている声を聞いた時は、子供心にも、生きた心地がしませんでした。幸い私の方の家人の耳には入らなかったらしく、何の科も受けませんでしたが、その日以来、Eちゃんは私の家に来なくなり、そのうち、遠くへ引っ越してしまいました。

小学校の六年の時、一度だけ顔を会わせる機会があったのですが、美しく、明るい女の子に成長しており、とても、まぶしく感じた事を覚えております。

私の、これまでの生涯で、たった一度だけの、魂の充実した日の思い出ですが、それはあまりにも遠い日の出来事です。

六年前、東京のW大学の仏文科に学ぶため上京し、平凡な四年間を過ごし、卒業して小さな広告代理店に就職し、二年になろうとしています。書店で奇クを買って帰り、読みふける他には、これといって欲望のはけぐちもなく、女性への羞恥責めの願望は日々につのるばかりです。

私は内気で、おとなしい性格ですので、ムチ打ち等のひどい責めには、あまり興味がありません。浣腸やバイブによる羞恥責めを中心に、開股縛り、剃毛などのSMプレーを夢見ています。

前田真知子さんや鈴木千鶴子さんのような女性とプレー出来るチャンスがあれば、どんなに幸福か知れません。写真は学生時代から続けていますからモデルになって下さる方さえあれば、技術的には撮影は可能です。誌上に発表出来るようなレポートを写真入りで是非、書いてみたいと思っています。

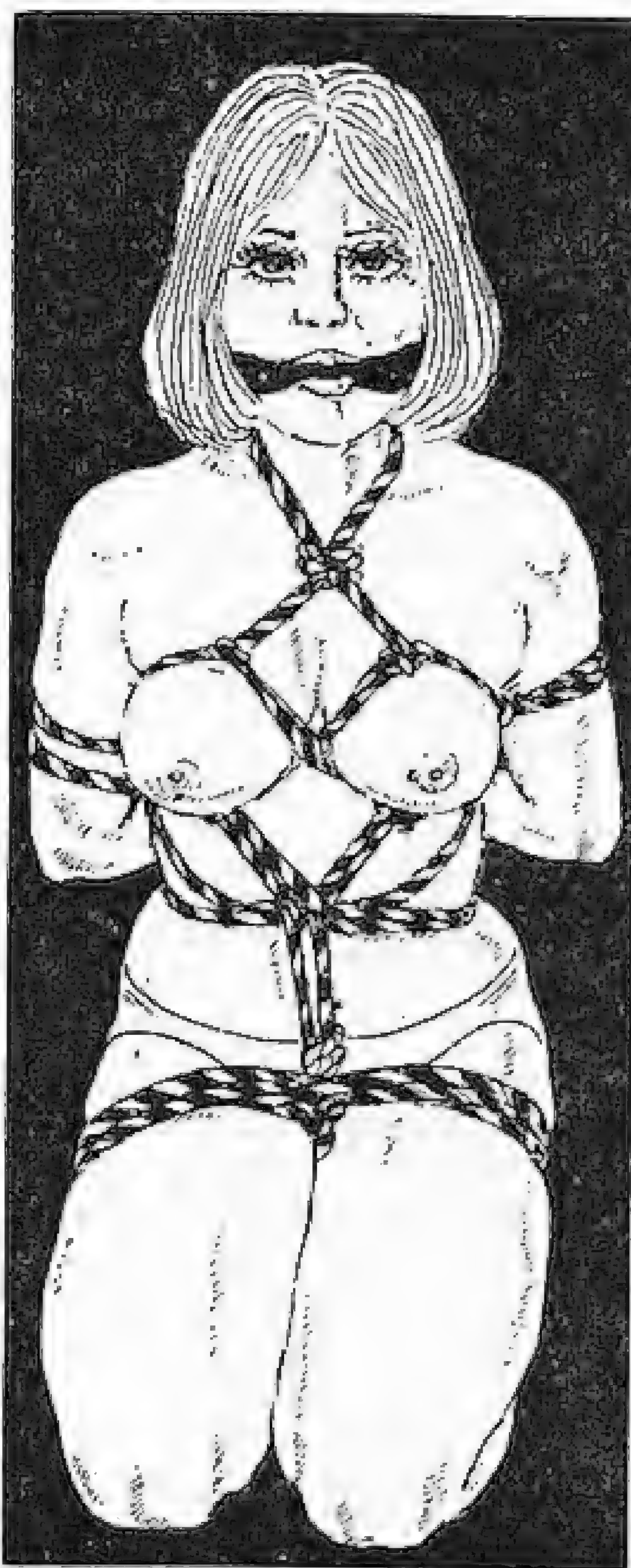
羞恥責めに関心をお持ちの東京近辺にお住まいの女性の方、お便り下さい。お願い致します。

創作・罠に掛かった乙女

花は傷つかない

第一部　花責め

久留木栄



カット・志羽利也

（一）

「水野さん、残って下さい」

そういわれたとき、花枝は来るものが来たと思った。弟香一の数学の話だろうと、もういわれなくてもわかっていた。そんな姉の心を知らず香一は、さっさと帰って、もうあたりにはいなかった。香一らの教室に他の親子の進学の話が進められているのを見ながら居残ることはきつかった。しかし花枝は耐えるほかなかった。香一は高校三年生である。二年のときから数学が欠点続きでどうしてもよくない。担任の熊野謙蔵に相談とくに数学主任の樫村賢の家にかよわせていたが、それでもよくならない。いよいよ進学を、あと十カ月後に控え、模擬テストが行なわれたが、その結果も同じだった。

「姉さん、ボクだめだよ。進学はやめて、働こうかしら」

という香一を叱りつけ、進学の相談に出席したが、答は予期したとおりで、午前中の相談で帰る気にもなれなかった。そんな花枝の気持を察したのか、熊野は簡単な相談のあとで、花枝に残れといったのだ。

残れといわれた人が花枝の外（ほか）に二人いた。花枝は控え室のイスに坐って、ぼんやり窓越しに外の世界を見ていた。

若い学生風の男女が、にこやかに語らいながら通り過ぎて行った。私も、そういう時代

があったと花枝は思った。あの頃は楽しかった。両親が生きていて毎日が幸せであった。学校を卒業すると、花枝は電々公社の経理課に勤め、好きな人もできた。その人といっしょに歩き、その人のそばにいるだけでうれしかった。だが、その人との交際も、両親が生きている間だけだった。両親が事故死してから一変した。生活の重荷は一度に花枝の肩にかかり、恋をとるか、弟を育てるかの二者選一を迫られた。花枝は後者の道を選んだ。思い切って、処女を初恋の人に捧げた花枝は、きっぱりとその人と縁を切り、恋をあきらめたのである。いつしか相手もあきらめ、結婚して遠くの支店に去って行った。それと同時に弟の成長だけが楽しみであった。

『これでいいのだろうか』

『これでいいと思う』

と花枝は、よく自問自答した。

着やせするたちで、ほっそり見える身体（からだ）も実はグラマーで、赤い血汐に息づいていた。花枝は、そのからだが、いとおしい。顔も決して悪くはなく、なによりシンが強く、優しいという日本女性の典型みたいな特性を持ったこの女性は、それだけに内に、はげしい斗志を燃やし、自分にきびしかった。

花枝は、いつしか着物の上から乳房を押えていた。その乳房は若さで充満していた。その身体をもてあますように冒険心が、ちょっぴり、のぞいていた。

『いったい、これからどうなるのだろうか』

未知の不安と、

『なるようになるさ』

という、ふてぶてしさが花枝を悩まし続けていた。弟を大学に入れることは、また花枝の青春を完成させることではなかったのか。花枝は、そうも考え、待てといった担任、熊野謙蔵のことを考えるともなく考えていた。

熊野は三十四歳の働き盛り。この町の愛城大国文科出身で、江戸文学を専攻したというどこか、ふてぶてしい男で、家庭には自慢の美人奥さんと一男一女があった。一見、何を考えているかわからないところがあり、学校でも策謀家、実力者として知られていた。頼り甲斐のある男くさい男であったのである。

花枝が、そんなことを考えていると、その熊野が、いつしか横に立っていた。

「あら、先生」

「ずい分、待ちくたびれたでしょう」

そういえば残された三人のうち、いつしか二人の相談は終わったらしく、教室には担任の先生と花枝だけがいた。

「さ、お話しましょう、そう気をつめることはいりません。気楽に行きましょう」

「ええ、ええ、でも、心配で、心配で」

「そう心配しなくてもいいのですよ」

「でも、もう受験まで間がないのでしょう。このままでは官公立は覚束ないのでは……」

「そりゃ、確かに、そうですがね」

「私の細腕では私立は歯がたたないし……」

「なるほど。でもね、水野さん、御心配はよくわかりますが、いくら心配しても、人生はなるようにしかなりませんよ。だからといって勉強を放棄するのは、よくありません。ともかく、このままでは本当に、ちょっと心配です」

「でしょう。だから困っているのです。私立なら、お金を払えばいいよ、とおっしゃる方もいるんですが、そんなお金があるわけもないし、とはいっても何とかしたいし……」

「その気持、よくわかります。だが学校は、いくら金を積んでも行けるという保証はありませんよ。入れない人は、どうしても入れないものです。何といっても点数が優先します。少なくとも最低線はとる必要があります。その上で考えられる非常手段がないこともない

んです」
「非常手段？」
「ええ、そういって悪ければ、学校側が、ぜひ、きてほしい人になるわけです。つまり学校の宣伝材料になるとか、学校が命脈をかけて研究しているその実験材料になるとか……いろいろあります。そういったグループに入ることも手です」
「研究のグループ？」
「そう、たとえばスポーツです。あなたは野球部や柔道部の優秀な選手が大学に進学していることを知っているでしょう。国立はまあ無理としても、私立なら、この選手をとれば宣伝になると思えば特待生というてもあります。またある大学が、音感教育に力を入れているとします。するとその適性を持った子供は、ぜひ、ほしい。多少、他の学課ができなくても、とおるということになります」
「でも、私の弟には……」
「その弱気がいけないのです。確か弟さんはブラバンのリーダーでしたね。トランペットが得意だった。それを、いかすこともできます。それにはツテがいります。あなたは大学の教授を知っていますか」
「いいえ、とても、そんなこと、私たちの社会では……」
「そうでしょうね。でも今からでも、おそくありません。どうです。ひとつ当たってみますか」
「そんなことできますかしら」
「わたしは愛城大出身です。国立を滑ったときの歯止めぐらいにはなるでしょう。とにかく私に、まかして下さいますか」
「それはもう。でも、そんなご無理を……」
「いや、ご心配には及びません。香一君は前途有為な青年です。この青年を生かすのも教師のつとめの一つでしょう」
熊野は胸を、たたいた。だが、こういう話は、どうも学校ではふさわしくないと、結局二人は連れだって近くの喫茶店に出かけた。
音楽は珍しくクラシックだった。モーツァルトのセレナーデを聞きながら二人は喫茶ルナの片隅のボックスに腰をおろした。熊野のごつい手が器用にメニューをとり、これでいい？　という風にミルク・コーヒーの項を指さし、花枝がうなずくと、ウェイトレスに注文してから、もったいぶった素振りで、ゆっくりと花枝を見すえた。まるでクモが網にかかった、えものを見すえているといった感じだったが、花枝は、ちっとも、そんなことに気付かず、ひたすら頼りきっていた。
「さっきもいいましたが、ま、あんまり心配しなさんな。心配すると美人が台なしになります。ハ、ハ、ハ。……ところで水野さんはこんな本を見たことがありますか」
と熊野は一冊の本を、とり出した。
花枝が手にとってみると、それは学童向けのパンフレットで、『江戸文学入門の手引き江戸法制史の研究』という、表題がついていた。
熊野は、その一部を指さして言った。
「ここが大切なんですよ」
そこを見ると
愛城大教授　池本八郎監修
同大助教授　佐野良造
第一高教諭　熊野謙蔵編著
と、なっていた。
「あら、あなたが、お書きになったの」
「いや、うちの研究室で作ったわけですよ。愛城大の国文学研究室の池本グループです。池本教授は私の主任教授で国文学、とくに江戸文学研究で博士号をとっています。また音楽が趣味で、愛城大の音楽クラブの部長をしています。どうです、ぼくのツテがわかりま

したか」

花枝が、無言でうなずくのを見ると、熊野は得意げだった。

「この本は学生が西鶴や黄表紙、人情本を読むのに役立てばと思って作ったわけです。ところが、これが意外に好評で、こんど中央の出版社と協力、大々的に出版しようということになったんです」

「で、この制作には、ぼくらも大いに、はりきっているのです。そうなると挿絵も豊富にいるし、写真も、ふんだんに使わねばなりません。ところが写真といってもモデル代は高いし、こんな学研誌のモデルになってくれる人も、あまりいません。そんなわけで適当な人に協力願おうと、実は、ぼくらはモデル捜しをしていたのです。あなたも、ひとつ協力してくれませんか」

「あなたが協力してくれれば、われわれとしては子供さんを、音楽特待生として、無条件で、とってもらうよう、池本教授にお願いしてもよいと思っています」

「まあ！　ほんとに、そんなことが、できるのでしょうか」

「できると思います。愛城大ではオーケストラの充実を、はかりたいと考えている矢先です。香一君は、それにふさわしい人物です。それに姉さんも、われわれのグループになっていただくのなら断わる理由がありません。どうです、ともかく、私からじゃ心配でしょうから、いまから池本教授の家をたずねましょうか」

「まあ、いまから――」

「善は、いそげです。どうです、協力して下さいますか」

「私にできることでしたら」

と花枝は承知した。願ってもないことだった。これが、ほんとのことだろうかと、ほおをつねってみたいような気がした。

一体、彼女の果たす役割が何なのか。このため、こんご、どんな生活が襲いかかってくるのか――そんなことは露知らず――花枝は香一を思う一心から、熊野に手を合わせて拝みたい気持になっていた。

「じゃ、教授に連絡してきます」

といって、熊野は席を立った。

熊野は部屋を出〝フ、フ、フ、カモメ〟とふくみ笑いしながら、玄関口のボックスから公衆電話で池本教授を呼び出した。

「教授いますか――熊野です。あ、教授。例の件、カモが来ました。え、え、この前、話しておいた姉の方です。OKと言っていますよ。え、まだ正確に説明はしていません。弟の入学を条件に引導、渡して下さい。え、え――多分、大丈夫と思います。じゃ――いまから行きます」

熊野はそういうと、電話を切った。池本を中心とする熊野らのグループに何らかの策謀がめぐらされている。これを知ったら花枝はおそらく池本の家にも行かず、承知もしなかったろうと思われる。

しかし、そういうことは夢想だもせず、花枝はいそいそと池本の家を訪れた。

池本は小柄だが、赤ら顔の油ぎった精悍そのものの教授だった。

「教授。私の教え子の姉さんの、水野花枝さんです。両親が交通事故でなくなり、弟さんを養っておられます」

「そう。そら、たいへんでしょう」

「は、はい、一生懸命やっております」

「熊野君の話では、私たちの計画に積極的に協力してくれるということだそうで――感謝しております。私たちは、まあ御承知でしょうが、学問が生命です。そんなわけで、こんどの江戸法制史の出版には、なみなみならぬ

力を入れています。したがって、あなたがモデルになられて途中で、もういやといわれても困ると思うんですが、その点は大丈夫ですか」

「はい、多分。私も仕事を持っていますのでそれに差し支えなければ――」

「いや、そのことは熊野君から聞いている。それには差し支えないと思う。ただ、こんどのあなたの仕事は、かなりきついと思う。というのは学問の実験のモデルといっても刑罰のモデルをも、してもらいたいからだ。それには、たとえばハリツケの仕方も、男と女とは異なる。男の方は、この熊野にでも、モデルをやらせても実験できるかもしれない。だが、女の方は、そう無茶な人にも頼めない。そこで、いい人を捜していたんだが――。あなたに協力していただけるなら、鬼に金棒と思っています」

「すると、ハリツケにされることもあるわけですか」

「そうです。そのていどは我慢して下さるでしょう。ひとりでは心細いでしょうから、私の妻と熊野君の奥さんも協力するといっています。三人いれば安心でしょう。もちろん出版にさいしては、弟さんもいることだし、素顔は出ないように考慮はしますが、いかがでしょう――」

「…………」

「もちろん、即答してもらおうとは思いませんが、弟さんの入学のことも、あなたがモデルを承知していただければ身内同然。当大学でも、よいトランペッターがいたならと思っていました。当然、引き受けますよ！」

「まあ！　ありがとうございます。わかりました」

花枝は池本の言葉に一瞬、息をのんだ。それは見事な口説だった。花枝に猶予を与えなかった。花枝は、きっぱり、いった。

「協力します。そのかわり、弟を末長くお頼みします」

「そう。じゃ、いつから始めようか。熊野君具体的に話し合って下さい」

「はい――」

緊張していた雰囲気が再び、なごんだ。

それから池本は奥さんの君代に命じて茶を入れ、熊野に江戸法制史の資料を持ってこさせた。

池本は、それを花枝に見せながら――

「江戸時代は、ずいぶん今とちがいますね。ま、水野さんには少々刺激が強すぎるかもしれないですが、このさい勉強しておくのも身のためですよ」

と刑具の写真を見せた。

それを見ながら花枝は――これを実際にモデルとして実行されるのだろうか、と考え、身もすくむ思いがした。しかし、もうサイは投げられたのだ。香一のために――と花枝はただそれのみを願っていた。

（二）

その夜、花枝は寝つかれなかった。二間しかない家の一間では、夜遅くまで香一が勉強していた。その気配がわかるにつけ、花枝は昼の話を思い出した。

「遅かったネ。何かあったの」

「う、う、ん。先生と、いろいろご相談したのよ。愛城大ではトランペッターを募集しているんだって。香一は、やる気あるの」

「トランペット、きらいやないなあ。たしか愛城大の部長は池本というんだろ。あの先生ごっついもんなあ。担任から何か、そのこといわれたの」

「滑りどめに絶対というのを持つと安心だって。そうすれば心置きなく東大を受験できるでしょって」

「ほんとかしら。熊野にしては、できすぎていらあ。でもそうなれば、うれしいネ。姉さんを恥かしめないよう、うんと勉強するよ。東大にとおらなくても早稲田ぐらいに行けるようにネ」

「ありがと。とにかく、ガンバッテね」

「うん」

ともかく、香一も乗り気になっていた。それなら、あとは自分の方の工作だけである。まずは、めでたしと、花枝は思った。そう思うと、よけい気がかりだった。

花枝が見せられた写真は、仕置例集といおうか、その図の複写だった。だから実物のような実感はわかなかったが、ともかく見て気持のよいものではなかった。

熊野の話によると、江戸幕府は、そのはじめ、刑事事件に関しては、一般的な法典を設けることなく、先例とか臨時の単行法令とかで裁判していたという。八代将軍吉宗のとき「公事方御定書」（くじかたごじょうしょ）ができ、その下巻に「御定書百箇条」が定められ、これが幕府裁判の基準になったという御定書に定められた刑罰は、おもに町人百姓に科せられたもので、当時はこれをお仕置といい、生命刑、身体刑、自由刑、財産刑、身分刑、栄誉刑などの別があり、その図が「刑罪大秘録」にのっているという。花枝の見た図は、それであった。

たたき、石抱き、などの拷問の図の中で、花枝の目にとまったのは海老責め図だった。その図は女が手足を別々に括られ、まるでエビのように前に曲げられ、苦しみもがいている図であった。どうしてそれが、花枝の印象に残っていたか。目をつぶって今よく考えて見ると、どこかで、それに近い絵か写真を、見たことがあったからである。

それは、どこであったろうか。花枝は、いくら考えても思い出せなかった。

思い出せない、はずである。それは映画のスチール写真であったからである。花枝の公社のあるところから約一キロ離れたところが町の中心で、公社がひけると花枝は、よくお茶をのみに行った。そんなある日、喫茶店からよく見える映画館のショーウインドーの中に、その写真は入っていた。花枝は、見るともなく見ていた。だが、そんなスチールには何の関心もなかった。だから完全に忘れていた。だが、いま、こうした出来事が自分の身の上にふりかかってくるとなると、その時、看過した印象だけが鮮かによみがえってくるのである。

その映画は石井輝男監督の徳川女刑罰史だった。全く花枝の運命を地で行ったような映画だったが、花枝は、その映画が上映されたことすら知らなかった。知っていたら、あるいは花枝の考え方も変わったかもしれない。だが、知らないことは幸いであった。花枝はそれでも、熊野に見せられた刑罰図の特に、えび責めの女の顔を自分の顔におきかえて想像していた。しかし、いかに苦悶に満ちて描いてあっても、写真の実写とは違って、そこに甘さがあった。だから花枝の想像も、投視図法以前のような抽象画風の味があり、しかも弟の犠牲になるということで、何となく、甘ずっぱい感情が、たちこめていた。

弟のタメに、なき父や母に代わって、家のタメに、と花枝は思った。

江戸時代の服装で縛られる。

家のためにという古風な考えで縛られる。

どこに、その差があろうかと思った。

想像の世界では、縛られるということすら楽しく暖いものに、変身させてしまうものらしい。

（三）

その後の熊野との話で、水野花枝の実演の日どりは九月五日から一週間と決まった。これにそなえ、花枝は公社から二週間の休みをとった。幸い、香一はこの間、修学旅行をかね、学校から東大受験の現地踏査に行くことになった。それで万事ＯＫだった。

香一が本当に東大に受かったら。花枝の苦労は万事、水の泡となる。だが、それはそれでいいのだ。香一には香一の行き方がある。香一にとって愛城大という歯止めは、大きな心のカテになるものだし、その自信が自信をよんで、すべてうまく行ってもらいたいと花枝は願っていた。

花枝は、だから日どりがうまく決まったことで、大きく肩の荷をおろした気持だった。

その九月五日は、すぐ来た。

秋晴れのうららかな日だった。駅まで香一を見送った花枝は、ホームのかげで汽車が見えなくなるまで立っていた。

午前八時半。汽車は予定どおりに来、時間どおりに出発して行った。汽車が見えなくなったとき、熊野が近寄ってきた。

「行きましょうか」

「ええ」

二人は池本の家に向かって出発した。プラットホームを肩を並べて歩き、駅の前でハイヤーをひろった。

「きょうは、ひときわ美しい。やっぱり弟さんのことになると、そんなに献身的になるのかね。うらやましいなあ」

「あら、いや。そんなこと、いわないで。私は、きょうのために、先生のために、せいいっぱい化粧してきたんです」

「ごめん、ごめん。でも、ほんとに、きれいだ。その洋服、オニューじゃない」

「そうです。夏のボーナスで買ったんです。和服でなくて、ごめんなさい」

「何、そんな心配しなくてもいいよ。あちらで、ちゃんと用意しているでしょう。オヤ、もう先生の家だ」

と熊野はいい、運転手に命じて車を止めさせ、池本を呼びに行った。

この前に行った時には気がつかなかったが池本の家は純日本風の庭があり、木立ちが、うっそうと茂っていた。最初は、この家でという意見もあったが、とても都心では無理というので、場所は郊外にある出版社の関係者で池本のパトロンの家と決まった。山の中腹にある別荘だった。池本の家から車で、ざっと一時間、かかるところだそうである。

花枝がそんなことを考えていると、池本とその妻君代が小さなボストンバッグ類を持って車に乗り込んできた。池本は羽織ハカマ、君代は金紗の和服で、小紋の落ちついたシックな柄だった。羽織も同色系統のいきな物。さすがに藤間流の名取りで踊りの師匠をしている人に、ふさわしかった。

「やあ——お待たせ。水野さんには、きょうは御苦労さんだネ。香一君は元気で出かけたかね」

「ハイ」

「それは、よかった。それから、これはスケジュール。ま、ともかく、向こうについたら一息いれ、皆の指示どおりにすればよいよ」

「ハイ」

花枝は返事しながら、渡されたプリントをめくった。

江戸法制史　実演資料

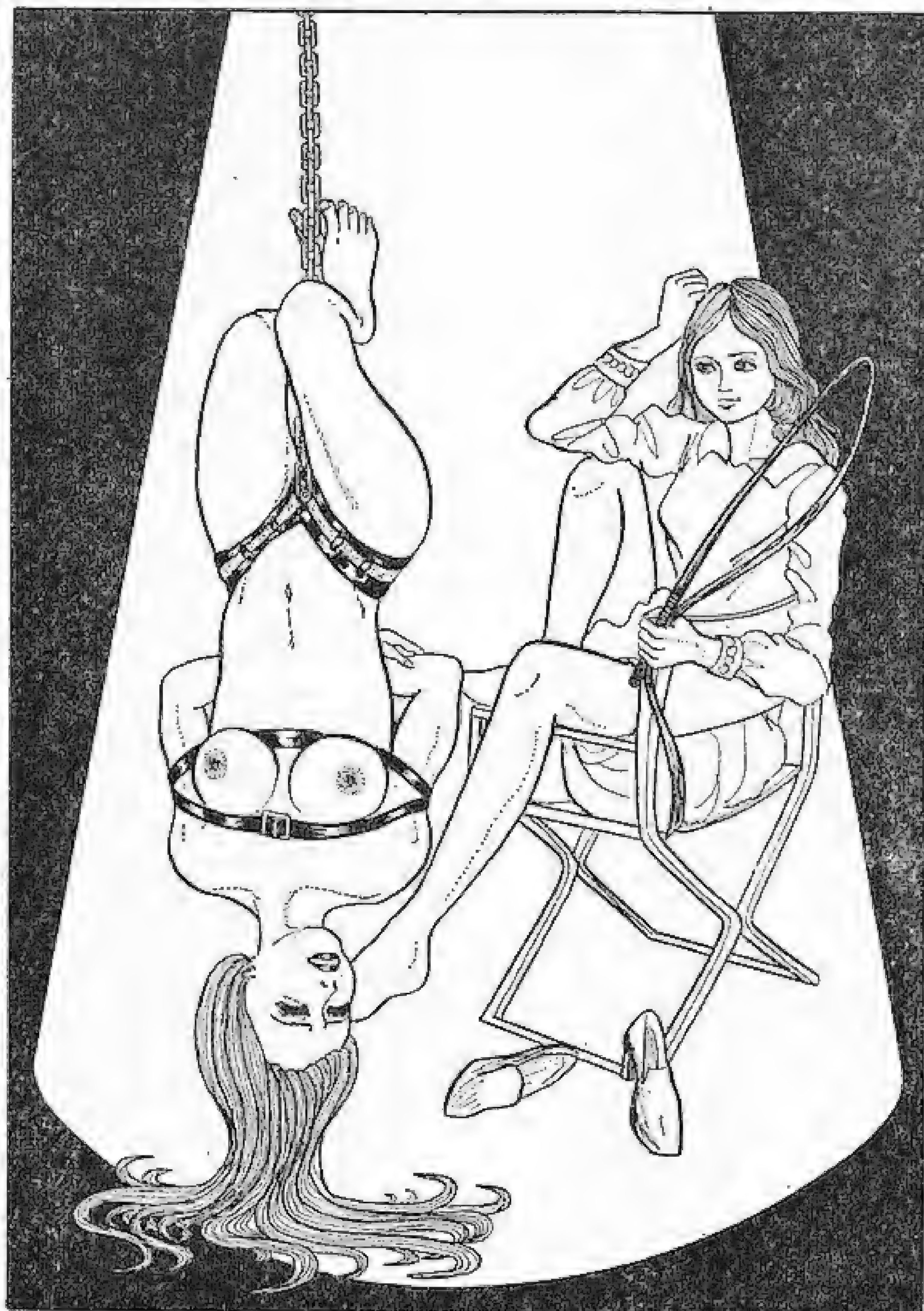
一、出演者

池本八郎　熊野謙蔵　佐野良造

池本君代　熊野道子　水野花枝

一、指導　池本八郎
一、舞台演出　浦本久則
一、撮影　近代出版社撮影部
一、時代考証　池本八郎　佐野良造
一、道具方　浦本久則　浦本千波

一、実施日時　男性　八月十五—二十三日
　　　　　　　女性　九月五日—十三日
一、場所　浦本久則方別荘及裏山
一、救急医師　奥村正彦
一、内容



イメージギャラリー　『華やかなオアソビ』　飯田ひろくに

①逮捕、召取り
②入牢
③吟味、取調べ
④拷問
⑤裁判
⑥判決
⑦処刑
⑧私刑
⑨その他

注意　①できるだけ正確に当時のやり方を再現する。
②出演者は本当に犯人であるかのごとく、演技する。
③できるだけ出演者に苦痛を与えないよう注意する。
④女性の場合、衣装など身の回り品の世話は池本君代を長とする女性たちで行なう。

と、なっていた。

花枝は、この日まで池本や熊野から預った資料で勉強していたので、ほぼ、どんなことをするのか知ってはいたが、いよいよとなっても、まだ漠然とした感じで、具体的には何も知らなかったといってよい。だが、この取り決めで一応の線は敷かれたとみてよい。要

するに芝居でいえば、花枝は女囚を演ずればよいことだけは、はっきりしたのだ。
〝信用のおける人たちだから安心していてよかろう。だが、これじゃ相当、苦しいだろうなあ。気をしっかり持たなくっちゃ！〟
と花枝は思った。
花枝が、その表を一応、読み終えたころ、横にいた君代が
「花枝さん、どう、覚悟は決まりました？」
と聞いた。芸者をしていたころの艶っぽい目だった。
「はい。それはもう」
「でも、きついことよ。一度、私は見たことがあるの。踊りのお弟子さんの奥さんに協力してもらって、やったのよ。その人、大声で泣き出して、なだめるのに困りましたワ。それで途中でやめさせちゃったんだけど、花枝さんなら、そんなことはございませんワネ。なにしろ、かわいい弟さんの命運もかかっていることだし、公社の鯖江課長夫人にうかがったのですよ。職場では、すばらしい女性といって皆さんのあこがれの的ですって、そうほめていらっしゃいましたの――」
「あら！　そんなに。いやですワ、奥さん。おおどかしになられたら。ただでさえ、こわくって体が、すくんでいるのに花枝は、つとまりませんワ」
「あら、そうかしら。別におどかしたわけじゃございませんの。なにしろ、男たちは乱暴ですからネ。花枝さんみたいな美しい人を縛れるなんて千載一遇のチャンスだって、はりきっているのですよ。だから私、行き過ぎないよう厳重に監視しなくっちゃと思っていますの。ま、そんなわけだから、花枝さんも度胸をすえて、モデルを頼みますよ」
「はい」
そんなやりとりをしているうち、車は浦本の別荘についた。杉木立に囲まれた山の中腹にある、純日本式の家だった。軒や屋根の端に大きな鬼瓦がついて、悪魔祓いの形相で、にらんでいた。
車を降りると、なんだかひんやりして、土塀が幼い日の記憶を思い出させるように、どっしりして、心をゆすぶった。塀の上には松の枝も見え、静かな、たたずまいである。
花枝は、君代に手をとられて玄関をくぐった。明るい外気と対照的な薄暗い室内。その室内に足を踏み入れた時、君代の目が妖しく光るのを、花枝は気づかなかった。一応、羽織ハカマという一時代前のような服装で車に同乗していた池本教授は、下駄の歯音も高く玄関に入り、式台を上がって行ったが、何となく貫録があり、まるで時代劇映画の一駒をみるように花枝には思えた。迎えに出た人たち、そういった人たちをふくめ、皆なんとなく落ち着かず、浮き浮きしているように花枝には感ぜられた。
「さ、こっちへ」
という熊野の案内で、花枝は応接室に通された。そこで花枝は池本教授と熊野から改めて池本教室の人たち、池本グループといわれる数多くの人を紹介された。カッターシャツにネクタイ姿という佐野良造助教授。でっぷり太ったいかにも重役タイプの男。この別荘の持ち主の浦本久則。おとなしそうな、その奥さんの千波。目が、くりくりして美しく愛嬌はあるが、いじわるそうな熊野の妻道子。神経質な医師、奥村正彦。雑誌社の人たちである。これらの人が実は皆、花枝を徹底的にいじめぬく悪魔の演出者とも知らず、花枝は多勢の人がいることに安堵を覚えた。
お茶が出た。和菓子をつまみ、玉露のほのかな香りが花枝のノドをうるおし、気を落ち着かせた。

池本が、
「じゃ、そろそろ始めようか。皆、準備をして下さい」
といった。サイは投げられたのである。
花枝は池本夫人の君代と熊野夫人の道子と清本夫人の千波の三人に案内されて別室に連れて行かれた。そこは化粧室で、正面に大きな三面鏡があり、さまざまな衣装や化粧道具などが置いてあった。
そこで花枝は、下着から長襦袢と、いっさいを着替えさせられ、厚化粧をさせられ、カツラをつけさせられ、正装させられた。いかに同性の前とはいえ、また、覚悟していることとはいえ、これは、かなり抵抗のある事だったが、それでも花枝は、顔が赤くなるのを必死にこらえて我慢しとおした。われながらずい分、かたくなっていると、わかるくらいだった。しかし三人は委細かまわず、
「最初は良家の若奥さん、米問屋の妻ということでしたネ。それが母殺しの疑いでつかまる――という設定で……」
と君代夫人。
「だから顔は少し若づくりに」
「しっとりとした演技が必要ですよ」
道子夫人と千波夫人もそれぞれ注意する。
花枝は三人の手で、いいようにあしらわれながら、ますます緊張する。
「花枝さん、縛られたことあるの」
と突然、道子夫人が聞いた。
「いいえ、そんなこと一度も」
「そう、縛られるのも楽しいワよ。――ね、ドラマチックでしょう」
「そんな!」
「そのくらいの気持じゃないとダメよ」
「さ、行きましょう」
と道子夫人は、すっかり着付けがすんだ花枝を隣に連れて行った。花枝はオハグロこそつけていないが、丸まげに黒じゅすのエリをつけ、紫色のタテ格子の着物を着せられていた。若奥さんになった気だった。
座敷の真ん中に床がとってあり、そこが花枝のいる場所で、殺人現場だった。花枝はそこで母を殺し、呆然としているところを捕り方につかまるわけである。
後ろ手に縛られた花枝が、片ひざをついてよろめき、番所に引っぱられる。それまでの演技をするように言われた。
最初は、その捕り縄をかけられる。その縄のかけ方を五、六回、実演するという。
とにかく、そこに連れ出されたときから、花枝の新しい人生が始まった。一週間にわたる苦行が始まったのである。

(四)

最初は右手を後ろに、左手を前にした縛りで、両手首と首に簡単にまきついた縄は、とれそうでとれなかった。これは実際に暴れた犯人にたいし、まず抵抗を抑圧するという型の縄だそうで縛り方の早いのが特色である。いわば、簡易束縛である。だからモデルを縛る場合には別に必要はないのだが、まずは小手調べといったところだろう。
「もがいてごらん」
という君代の指示で、花枝は手を動かして縄をぬけようとしたが、アクロバットダンサーと違って、そう関節の柔らかくない花枝にとっては、努力しても努力しても、とけたりぬけたりする縄ではなかった。逆に、もがけばもがくだけ首が締まるというありさまで、どうにもならなかった。
「やっぱりサマになるものだな。実際に施してみたのは、これが最初だが、昔の人はうまく考えたものだな」
と縛り方を熊野に命じた池本教授は図面と

みくらべて、感心していた。花枝はこの縛り方が〝早くち〟という縛り方で、これにも二種あるという池本の説明を聞いた。前と横と後ろから池本は写真班に命じ、花枝の写真をとらせながら、次は何にしようかと考えているらしかった。撮影が終わると、すぐ縄は解かれた。解き役は佐野助教授だった。

「やっぱり次は女五方だろうな。この図面によると方円流なら、そういう縛り方になるだろう。ぞくに高手小手という奴かな。少しは違うが、水野君にとっては大同小異だろう」

と池本は、いう。その指示に従って、熊野夫妻が二人で協力して縛りはじめた。この縄は手首と二の腕、首が中心になる。手首や上膊部が、ぎっと締まり、えもいわれぬ被縛感がある。花枝は覚悟をしていたものの、うっといいたいくらいの苦しい縛りだった。熊野のゴツゴツした手にくらべると、道子夫人の指先は、しなやかだったが、縄さばきは夫人の方が夫より、はるかに上手で、仕上げも、さえていた。

〝いい恰好！〟

といったような意地わるい目つきで眺めながら、

「若奥さんが縛られて引ったてられるというのに、襟元も裾も乱れていないのでは、大罪をおかした罪人のようではないわ。こうしましょう」

と花枝が抵抗できないのをよいことに、道子夫人は花枝の着こんだ着物のエリに手をかけて、胸もあらわなくらい、はだけさせた。また、裾を力いっぱいひっぱり、花枝がよろけるのを、あわてて熊野が、ささえるというひどさだった。花枝は熊野に、もろに抱かれたような、かたちになり、やっと体をたてなおしたときは、はだけられた胸元が気になって、思わず顔が赤らんだ。

「その感じ。その感じが、いい」

と池本。池本教授の目くばりで、撮影班がパッとフラッシュをたく。あっと思う間もなく、つぎつぎにストロボが点滅し、矢つぎばやに撮影が進行した。

ついで花枝は腰縄を打たれ、

「歩け」

という指示で熊野にうながされながら、部屋の中を、ぐるぐると三、四回、回らせられた。

「ようし、一息いれよう」

という熊野の声と同時に道子夫人は、

「それじゃあ、二人で一息いれるわ。花枝さん、庭を散歩しましょう。まだ序の口なのよ、そう緊張していたら先が思いやられます」

という。それはそうだが、誰も花枝の縄を解いてくれるものは、いなかった。花枝は仕方なく道子夫人につれられ、縛られたまま庭を散歩させられることになった。縁先から、赤い花緒のついた小さな下駄をはかされ、グリーンのワンピース姿の道子に追われるようにして庭に出た。枯山水の庭とかで、浦本自慢の泉水があったが、そのそばに、縁側からは見えないが、かなり広いグリーンの芝生があった。その一部に天幕が、はってあって、イスが置いてある。手のあいた人が、花枝らの様子を、茶をのみながらでも見られるという仕組みである。また、撮影用の器材も、そこに並べておく必要があった。そんなものを左手に眺め、縄尻を道子夫人ににぎられて歩くというのは、いくら演技とはいえ、非常な屈辱感のいるものだった。どうやら道子夫人の目的は、意地悪をして、ちょっぴり自由の身の優越感を味わいたいのだなということが花枝にもわかってきた。それあってか、男たちも、しきりに、ひやかすのだ。

「いよう、若奥さん。いや、お嬢さん。お姫様の道行きとございい」

と、いく分、間の抜けたハヤシ言葉をなげかけたのは、オッチョコチョイ気味の佐野助教授らしい。とてもそうなると、散歩どころではなかった。むしろ、捕り物のあとの拘引であった。昔の人は、なるほど、こんなにして拘引されたのだろうかと、ふと花枝は考えた。そんなとき道子が、ひょいと築山の石の上をとんだので、ぐいと縄じりをひっぱられ体制をこわされた花枝は、よろよろと思わずよろめいた。そのはずみで下駄がとび、左足が素足になって花枝は坐りこんでしまった。



イメージギャラリー　『喜悦呼ぶ儀式』　志羽利也

「ばかねえ、何をしてるの。ホラ、しっかりしなくちゃあ!」
「ハイ」
「困った人ね、ちょっと本当に小休止ネ」
　そういいながら道子は、縄尻をそばの松の幹に括りつけた。少し高めに括られたので花枝は自然と爪先立ってしまった。かがとを下ろそうとすると、体重が手首にかかって、ひどく痛んだ。片方の下駄は、まだとんだままなので、花枝は不安定な一本足で立たされたことになる。最初の苦痛が、じわじわと花枝に襲いかかってきた。
　そんなことは意に解しないかのように道子は下駄を拾いに行った。それから、ゆったりした足どりで、庭のはずれに行き、木戸をあけると姿を消してしまった。どうするつもりなのだろうと、ちょっぴり不安になったころ道子はバケツに水を汲んで入ってきた。
「世話のやける人ネ」
「すみません!」
　道子は花枝の左足を洗って下駄をはかせてくれたが、人に聞こえないような小声で、
「花枝さん。担任の先生の奥さんに、恥をかかせたらどうなるか、わかって!」

と、おどすのを忘れなかった。雑巾で足をふくそぶりをしながら、ゆっくりと足の裏をくすぐる。そんな悪質のいたずらをする。両足で立っていても苦しいくらいのポーズであるのに片足で立たされ、自由な方のその足をしっかりにぎられて、くすぐられるのでは、どうしようもない。

「あっ、やめてぇ！」

と思わず声が出そうになるのを、花枝はやっとの思いで、歯をくいしばってこらえ、上体をこちこちにし、縛られた両手のひらを、かたく握りしめて、こらえた。

それでも思わず声が出る。

花枝は人に聞こえないような小声で、

「ね、奥さん、御免なさい。や、や、やめてえー」

と哀願する。道子はその効果が十分あるのを確かめた上で、最後にぎゅうっと花枝のふとももをつねって、縁側にひきあげた。

「どう。ちょっとした、さらし刑でしょ」

と、道子は君代夫人に自慢する。

「いきなり、かわいそうよ」

と浦本千波夫人は同情的だ。

「それもそうね」

と道子は再び花枝に近づき、松の木から縄をとき、よろめく花枝をせかせて、縁側まで連れてきた。時間にして約二十分ぐらいの、できごとであろうか。わずか半時間足らずの緊縛でも、花枝の腕の感覚はしびれて、肩がこるような感じで、痛かった。

ふとみると、いつしか庭の片隅にムシロが敷かれ、にわかな、お白洲ができていた。

そこで型どおりの吟味があって、やがて揚屋入り、さらに裁判へと進むという池本の説明があった。

「これからは、めんどくさいから、もう当分説明はしないよ。途中も適当にはしよって実行しよう。水野君は縛られっ放しで辛いだろうが、本当の罪人に比べれば、うんと手加減してあるのだし、いまさら痛い、きついといっても仕方ないから、覚悟を決めて我慢して下さいネ、いままでのは、あくまでも小手調べ。これからが本番と思って下さってよい」

という。

では囚衣に着替えさせよう。というので君代と道子、千波が近より、イスに花枝を腰かけさせて縄を、ときはじめた。解き役は君代で、ゆっくりと捕縄をゆるめる。一方、千波は、それと並行して帯をとく。道子は別に衣装部屋から浅黄色の色あせた囚衣をもってきた。

三人三様ムダのない動きである。二の腕の縄が解かれ、まだ手首が、きっちり縛られているのに着物は早くも肩から、ずり落ち、妙になまめかしい長襦袢姿の花枝が、姿を見せた。その途端『そのまま、待って！』と浦本久則から声がかかった。

「どうしたの」

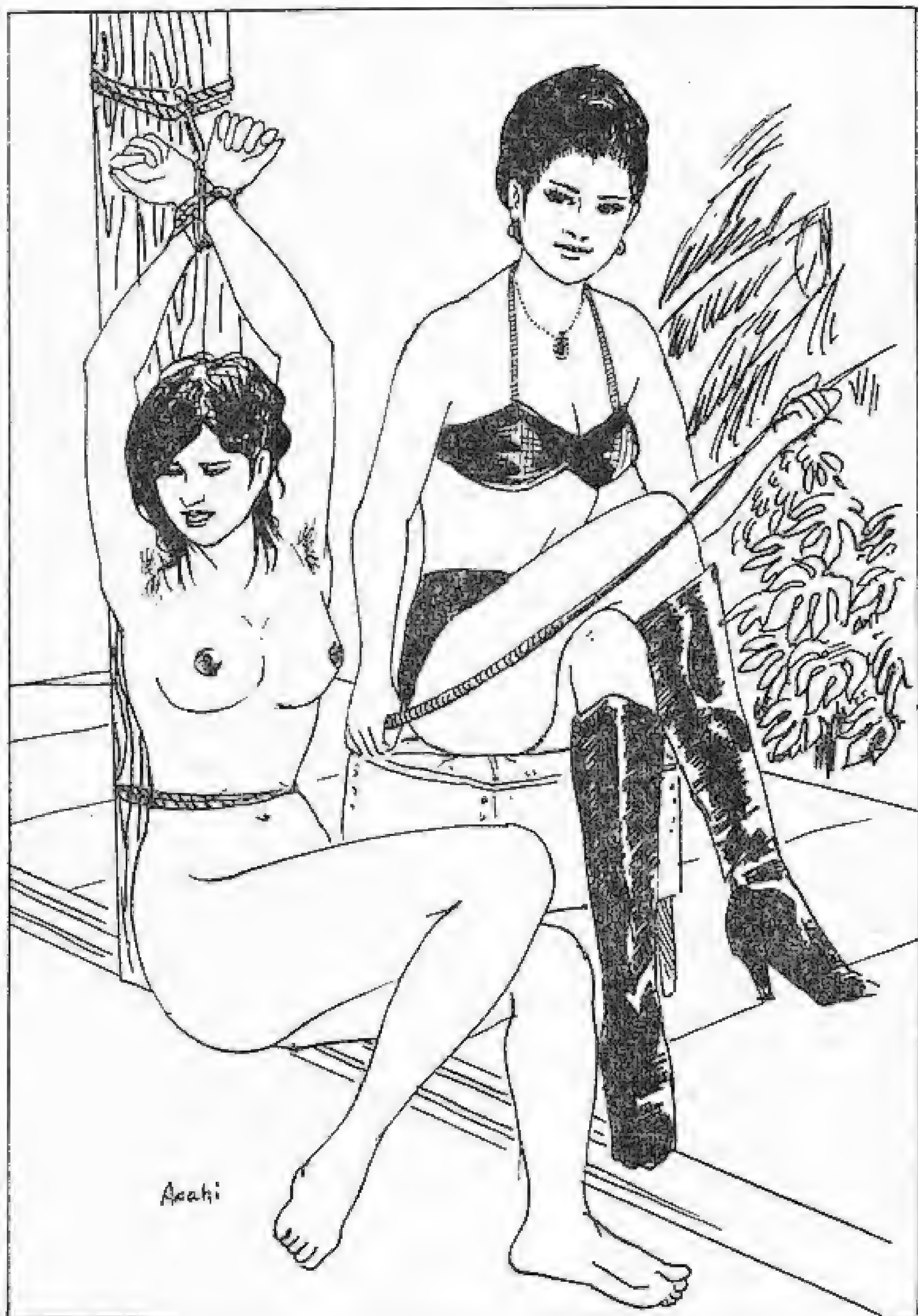
「いまのポーズが、すてきだ。写真班、スナップ頼む」

と浦本は気ぜわしい。浦本にとってお仕置なんて、どうでもいいのであった。池本にしても佐野にしても心は同じだったろう。しかし彼等には一応、体面があった。それに比べると浦本は気楽な稼業ときていた。そんな恥かしい恰好で花枝を、たっぷり鑑賞した上に脱線してわるいが、といいつつ、長襦袢の上に別の縄をかけて、そのまま、二、三枚、撮影した。イスに坐っていた花枝を立たせたりムシロの上に横たえさせたり、好き勝手なポーズもつけさせた。花枝は突然のことであっけにとられていた。しかし抵抗してもダメと思い、この家の持ち主とあらば、仕方ないと思って、いうままになった。それが浦本を刺激したのか、そんなポーズの撮影が終わると

手首の縄だけを、といて着物だけを脱がせ、長襦袢姿にして縛り直し、
「逮捕、拘引のポーズも、こうした寝乱れ姿の方が恰好いいんじゃないか。水野さんには苦しいかもしれないが、自殺防止にサルグツワという手もある。その手拭いで口をわって猿ぐつわを噛ませてごらん」
と道子に指示する。そのとおり道子が実行した。傍に寄り花枝の鼻をつまむと、思わず口をあける。その口に、容赦なく和タオルを一本、つっ込み、口いっぱい、ほうばらせた上で、いま一本を、その上におさえ、口を割りこますようにして締め上げ、頭の後ろで括った。
思わず〝ぐぇーっ〟と、花枝は悲鳴をあげる。だが、それも、くぐもり声にしかならない。
「これでいい？」
「十分だ。ついでにもっと長襦袢を乱して」
「そうね」
道子は、えたりやおうと猿臂をのばした。長襦袢のエリに両手をかけ、力をこめて、ぐいとひっぱると、胸がむきだしになり、花枝の左の乳房が、ちらっとのぞき、真っ白な膚が真っ赤な長襦袢に映えて、目にしみるように美しかった。
「ムッ、ム、ムーッ」
花枝は思わず、うめき、身をよじって身をかたくする。だが、それを避けることはできないのだ。そんなポーズで二、三枚とると、さらに上半身を裸にされて、五、六枚とられた。
花枝の裸はさすがに美しかった。しみ一つない白さであった。左乳房がわずかに見えた時でさえ、ゴクリと男たちが、かたずをのんだほどである。首から肩にかけ、ふっくらとふくらみ、ゆるやかなカーブを描いて脇腹にしずむ曲線。両の乳房は大きからず、小さからず、半月形にふんわりとふくらみ、乳首がつんと立って、いいようもない、しこりを見せていた。桃色に色づき、肩で息をする花枝は、うらめしそうな目で、裸にした男たちを眺めていた。涙が溢れんばかりに溜まり、漆黒の髪と比べられるほど美しい、つぶらな瞳は、恥らいと、運命を恨んで、純情でありながら妖しくすら見えた。
「いいネ、素晴しい」
と浦本は自分が裸にしたことに満足そうであった。池本教授と千波夫人は痛ましそうに庭の松の梢を眺め、しばらく瞳をそらせていたが、やがて気をとり直したように視線を帰した。一方、佐野や熊野、撮影班の若い技師たちは、目を丸くして凝視していた。
花枝は、こうした人たちの視線を痛いほど感じていた。いずれは、こんな目に逢うかもしれない。そういった不安は最初から感じないわけでもなかった。だが、こうして、しかも関係者外のような人によって、いきなり裸にされるとは思ってもみなかった。それだけに泣き叫びたい心境だった。だが、人が見ている。泣くことはできなかった。叫ぶことはもちろん、厳重なサルグツワで拒否されていた。どうしようにも、どうにも、ならないのだ。花枝の体と心は大きな屈辱に強引に、ねじふせられてしまったのだ。腹を立ててもくやんでも、もうどうしようもない。花枝は本当にどうにもならない汚辱の池に投げこまれたということを意識しないわけにはいかなかった。並の人なら、虚脱してしまうだろう。だが、父母をなくし、弟を両親の代りになって育てあげる花枝は、あまりに、しっかりしすぎていた。忍耐だ！　忍耐しかない。花枝は必死になって、そう言いきかせていた。
淡い興奮が一同の上を駈け過ぎていった。
「さあ、それはこれまでで、よかろう。先を

急ごう。まずは吟味だ」
　池本教授の声で人々はハッと我を、とり戻した。さっそく女たちが手早く、花枝をとりかこみ、一気に縄をといた。長襦袢は、そのはずみで足元に落ちた。ハッとした一瞬、もう花枝の肩には囚衣がかかっていた。あっという間もない、手ぎわよさだった。
　花枝は思わずしびれた手首をふった。だがしびれを十分いやす間もなく、すぐに花枝はこんどは、きちんと囚衣の上から麦縄をかけられたのだ。むしろの上に正座させられ、そのあとで足首も、きちんと縛られた。
　サルグツワをとろうと思ったが、花枝にはその余裕もない、巧みな間のとり方で、花枝は息つく暇もなかった。
「最初はソロバン責めというわけか。ソロバンのかわりに、足の下にマキを入れよ」
　という指示で強引に中腰にさせられた花枝は両スネの下に、まきを並べられ、そこに正座させられた。ヒザと足首を縛られた上、佐野と熊野が上体を支えているので、花枝は膝から下をくずすことも、逃げ出すこともできない。二人が手を離し、そばに去ると、足の下に刺すような痛みが伝わってきた。
「ムウッ——ムウ、ウ、ウ、ウ」
　と思わず、うめく。ぐらりと上体が傾きそうになるのを必死でとめる。その瞬間、フラッシュがとんだ。前から横から後ろから、カメラが、しつようにねらう。
「サルグツワを、とろうよ。そうしないと不自然だわ」
　と突然、道子夫人がいった。
「そうだ、確かに不自然だ」
　と佐野助教授。その一言で、道子夫人が、つかつかと近寄り、サルグツワをとった。花枝は思わず息を腹いっぱい吸った。すると改めて足が、しなうように疚き、弁慶の泣き所といわれた向こうずねがコリコリと鳴って、ぎゅっと口を噛みしめ、唇をへの字なりに曲げて、花枝は我慢した。
「ようし、そう。もう少しの我慢だ」
　と熊野が声をかける。その間も撮影は続くのだ。やがて腰縄を打たれ、それと足首の縄を連結し、ふくらはぎと太腿の間にも、ごついマキを入れられ、縄をしめられると、また新たに、きびしい痛みが加わり、
「ハア、ファーッ」
　と、花枝は思わず奇声をあげた。肩でいきをつき、うらめしさをこめて責め手をにらんだ。
「このくらいで悲鳴をあげては、誰も同情はしませんよ。水野さん、まだ始まったばかりですよ」
　君代夫人は静かに、たしなめた。だが花枝のがまんは、もうかなり限界にきていた。下半身がしびれ、いつしか大きく体をゆるがせゆっくりと左側に横転していった。露出した膝が赤くかわり、マキの形に白い足に小さな凹みが、できていた。
　それを抱きおこし、庭にクイを打ち、花枝を、またムシロの上に坐り直させ、そのクイに縛りつけた。
「つぎは石抱き」
　と池本教授は容赦ない。——
　まき責めで弱った足に重い四角な石がおかれる。考えただけでも気の遠くなるような拷問だ。それでも本物の石に比べると重さ半分という軽い石だが、実演となると、そんな石でも、とび上がるように痛い。
　熊野と佐野が二人がかりでかかえ、どっこいしょと花枝のヒザにのせた途端
「あ、あーっ、あ、あ、やめて、やめて。苦しいーッ」
　と、さしも気丈な花枝も、思わず悲鳴をあげた。ところが責め手は、その悲鳴を楽しむ

ように石をゆすり、さらに一枚、もう一枚と三枚も重ねたのだ。思わず花枝の目から泪がこぼれた。唇をかみしめ、上体をゆすって苦しむ、その様子を責め手は目をこらして眺める。写真をとり、石の上に、わざとバラの花を一輪おいてみる。それを中心にアップ写真をものにしようというのだ。バラの美しさと花枝の苦悶とを対比し、責められる女の美をバラで象徴させるつもりだ。それだけに撮影も、しつようである。花枝は首を振り回し、



イメージギャラリー　『束縛とムチの愛』　須坂旭

もがき苦しむ。そのはずみで思わず頭のカツラが、とんだ。すると、こんどは花枝の長い髪を束ね、それすらクイに縛りつける。

　そればかりか、石をゆする。

　そのたびに新たに悲鳴が洩れる。

「きいっ、きいっ」

　と花枝の歯ぎしりが聞こえ、目が次第に吊り上がってきた。

「あーっ、もうダメ。やめてえーっ」

　花枝の悲鳴は、せつない。哀訴嘆願する。責め手の男たちの顔に、ほっと満足のようなほほえみが、わいた。

「つぎ――」

　と池本教授の声がする。

　続いて石が静かに、のけられた。かれこれ十分間も責められたであろうか。花枝にとっては一時間も、いや二時間以上も、かかったように思われた。

　つぎは肩たたきの刑である。これも拷問の一種と考えてよかった。手首をできるだけ高く吊ると、肩胛骨が盛り上がる。それをたたくのだ。盛り上がった肉をたたくため、体をそこなうことはないが、痛みは抜群である。

「たたきの用意」

と池本が命じた。
つぎの一言で、やっと下半身の束縛をとかれ、束の間の自由を楽しんだ花枝も、ほっと一息つく間もなく、次の責めが待っていた。
「余り悲鳴をあげさせるのも、かわいそう」
という千波夫人の配慮で、また厳重にサルグツワが、はめられた。口に手ぬぐいを噛ませたあと、鼻から下を心持ち長めのサラシで二巻きして締め上げられると、かなり厳重なサルグツワができる。
そうしたあと、再び正座させられ、足首、ヒザを厳重に緊縛された上、腰縄をぎっちり棒くいに縛りつけられた。それから菱縄をとかれ、手首を、ぎっちり縛り直されたあとで上半身を裸体にされたあげく、手首の縄を力一ぱい、上方にひかれた。それだけで肩が、しなうようになり、肩のつけ根が痛み、上体が、くの字なりに前かがみとなり、息苦しくさえなった。そんな無理な形で固定されると道子が竹刀の四本の竹をばらし、二本を合わせて縛った小さなムチを佐野に手渡した。佐野助教授が、いきなりピシリーと肩を打ちすえた。ピクリと花枝の体が、うごいた。
「ム、ムーッ」
と、うめき声がきこえた。ヒュ－ッという悲鳴が、くぐもって、ム、ムーッと聞こえるのだ。ピシリッと第二撃も、忽ち襲う。
「二十、打て」
と執行者は、きびしい。右に左にムチが、とぶそのたびに花枝は、うめく。石抱きの痛みが鈍重な痛みであれば、この肩の痛みは火のつくような痛みである。花枝は一撃ごとに髪を振りみだす。その髪を道子が手に巻きつける。まさに、それは嗜虐のシーンだった。江戸法制史の撮影に名をかるサジストたちの饗宴といってよかった。男たちは、いや女たちもふくめ、自分たちの企画、演出、その効果に酔っていた。
だが、酔っていない人が一人いた。それは花枝だった。花枝は、マゾヒストではなかった。多勢の人前に出るのでさえ花恥かしい乙女であった。そればかりか、五体正常で、こんな趣味はなかった。それだけに、まさにこの世の地獄だった。一打ちごとに身も心も、くたくたになり、やがて錯乱させられながらついには意識が薄れて行き、ピクピクとひきつりながら失禁し、失神したのである。
「休憩」
という池本教授の声で、両手首の縄だけを残し、一切の束縛をとかれた花枝は、そんなになっても白眼をむいて、のびていた。その花枝に、たれかが水をかけた。花枝に意識が戻ってきたが、花枝は失禁し、上半身、裸体にむかれた自分を意識しても、それを恥かしいと思う余裕はもう残っていなかった。水の冷たさが心地よい刺激となって、体を無意識のうちに動かし、四囲を見回した。池本教授たちは道子夫人をその場に残して一息いれていた。カメラマンと道子夫人だけが、このまるでケモノのような花枝をみていた。
「アウ、アウ、アウ」
と花枝はいうだけで、まるで芋虫のようにあたりを、はい回った。
やがて奥からバスタオルや新しい長襦袢、腰巻を用意して君代夫人と千波夫人がやってきた。三人は力を合わせ、花枝を抱きおこしサルグツワをとり、素裸に剥いて、頭から湯をかけ、その場で花枝を洗った。そしてバスタオルでふき、新しい長襦袢に着せ替えて、再び八畳の間に追い上げた。そこで濡れた手首の縄がとかれ、また新しい縄に変えられた花枝は三人の、なすままにされていたが、肩をしゃくりあげ、長い間、嗚咽していた。
だが、その日の苦しみはそれで終わったのではなかった。

約一時間、そんな姿で放置されていたあと気付け薬にビタミン剤をのまされ、ブドー糖の注射を奥村医師から打ってもらったあと、花枝はエビ責めにかけられたのである。

まず花枝は長襦袢、腰巻姿のまま、菱縄をかけられ、それから足首を組ませられて縛られ、頭と足首が、くっつかんばかりにして締めあげられて固定されたのである。

肩から両ひざ、両ふとももにかかる縄は、拷問の作法どおりのかけ方にされ、こうした姿を、皆がよってたかって鑑賞し、そしてフイルムにとった。

花枝は前に折り曲げられたとき、胸がせまって言葉にならなかった。その上、再びサルグツワをかけられたので、まるで息がつまるのではないかと思われた。こんどは和タオルを細長く折って口の間にあてがい、その上から綿ロープで強くしばるという残酷なサルグツワのかけ方で、口中に詰め物がないので幾分イキは楽だったが、もちろん声にはならず歯を割って喰い込む和タオルと綿ロープが、きびしく両頰を圧迫して痛かった。アゴが、はずれるのではないかと思われたくらいである。

このポーズをとらされると、うめきたくても、うめき声も出ない。縄一本で、どうしてこのような残酷な責めができるのかと思われるくらいの、はげしい拷問だった。

それだけに余り長い間、緊縛して放置しているわけにはいかない。しばらくすると花枝は手足を解かれたが、ぐったりなっていて畳にのび、自らサルグツワをはずすほどの気力も残っていなかった。そんな花枝を責め手はよってたかって、いたぶった。手どり足どりして長襦袢を脱がしたのである。

腰巻一枚にされた花枝は、そこで再び厳重に上半身、菱縄にされ、足首も再び縛り合わされてしまった。

「さあ、これからが、きょうのメインエベント。ビーナスのエビシバリとございい」

と佐野助教授が再び、ちょっと、おどけてみせた。だが、誰も笑うものはなかった。もう再三、素裸に剝かれているので、人々は花枝の裸には、なれていた。だが、こうしてみると、いくらなれていても、えもいえぬ美しさがあった。美しい妙齢の婦人の体は何度ながめても見あきるものではなかった。しかもすべての自由を奪われているのである。男たちも女たちも前から横から後ろから、ためつすがめつして眺めた。縄のせいで、ふっくらとした乳房は、さきほどより幾分、せり上がって高く見えた。乳房の下から、なだらかな起伏が下に流れ、わずかにふくれ上がったところで真赤な腰巻に、さえぎられていた。この下に、どんな裸身が、かくされているのだろうか。人々は皆そこに関心を持った。そこだけは、衣服を着替えさせるとき、夫人たちが、ちらと、かい間見ただけで、男たちにとっては未知の世界が住んでいたのである。

そんな男たちの希望を、やがてかなえる時が来たのである。そんなこととも知らず、花枝は黙々と耐えていた。まさにマナ板の上のコイであった。いくらジタバタしても、どうにもならないのだ。だが、まさかと花枝は、その時ですら、そう思っていた。花枝の見た本には、囚衣姿のエビ責めはあっても、全裸のエビ責めはなかった。それだけに、全裸でエビ責めにされるとは考えてもいなかったことである。

足首に新たな縄が巻きつけられ、体を折り曲げられ、縄は首の後で交差させられ、着実にとめられた。それから責め手は、腰巻をたくし、ヒザとふとももにロープをかけ、エビ責め型に固定したのだ。花枝にとってこのポーズは長襦袢を着ていても着ていなくてもた

いしてかわらなかったのだ。だが花枝はあっと驚いたのはそのままころりとひっくりかえされ足と尻を天井にむけられたからである。あっと思った瞬間、池本教授の手ではらりと腰巻がとられた。瞬間、全員、花枝をふくめて、が、イキをのみ、石のように固くなるのが気配でわかった。なんと花枝の体は、そのすべてを白日の下にさらされたのである。

花枝自身、これは大きなショックであったハズである。だが、もはやショックは通りすぎていた。ウワッと思っただけに、すぎなかった。尻を天井に向けたポーズが、こんなに恥かしものとは思ってもみなかったのだ。だが逆に、こうまでされると、クソ度胸がすわるものであった。とうとう行くとこまで行ったという感じがないでもなかった。だが、それにもまして恥かしかった。

無抵抗をよいことに、千波夫人がタタキにつかったときの竹刀のムチで、軽く尻をピシピシと叩いた。その刺戟が堪まらなかった。一打ち一打ちに屈辱の思いが身に染みた。ウッ、ウッとうなって、そのショックをこらえながら、いっそ、ひと思いに殺してくれと叫びたかった。そんな軽いムチでなく力一杯、叩いてほしかった。そんなポーズにサジストたちは、この日始めて心からの満足を味わったのである。いつしかムチ打ちは止み、こんどは、もっといやらしい、くすぐり責めが足の裏と、わき腹から、おそってきた。千波夫人が両足、道子夫人が左の脇腹を、奥村医師が右の脇腹を、くすぐった。その、えもいえぬ感触。

「クワッ、グワッ」

と声にならぬ声を出し、花枝はもがいた。吐き気が胃から胸へこみあげ、胸のナワとサルグツワで、また逆戻りされる。そんな気持だった。そんな苦しみを察してか、佐野がサルグツワの綿ロープをとり、和タオルをとったが、声は出なかった。ぐぇっという、しぼったような、うめきとともに、黄色い胃液が一すじ口からこぼれ、花枝は再び悶絶した。石抱きについで二回目の失神だったのだ。

さっそく、手足の縄をとかれた花枝は、その場に横たえられ、奥村医師から強心剤を打たれ、活を入れられた。花枝は、やっと自由を取り戻したのだ。長々と、のびた素裸の体の上に、ふんわりと長襦袢が、かけられていた。それだけの自由でも、花枝にとっては天国のように思われた。

「あ、あっ、あ。また気を失ったのネ。もう終わったの」

花枝は小声で傍の君代夫人にそういって、わずかに頭を、もたげた。その時、その部屋には君代夫人しか、いなかったのだ。

「そう、もう終わったのよ。疲れた？」

「ええ、苦しくって、ぼうっとして、こわくって、恥かしくって、そのまま、ぼうっとして……」

と花枝は、まだ、うなされているようだ。

「さあ、オフロに入りましょう。用意できてるのよ」

そうすすめられて、体をおこそうとしたが節々が痛んで自由にならず、「痛い！」と顔を、しかめた。

「痛いでしょうね、本当に。でもフロに入ったら、少しは、よくなるのよ」

「そうね。でも、まだ自由が効かないの」

「そう、じゃ皆に手伝わせましょう」

そういう君代夫人の指示で道子夫人と千波夫人が、すぐ現われ、三人にかつがれるようにして花枝はフロに入れられた。それから、ジュースを中心にした営養食をとらせられると、奥村医師の診断を受けさせられた。

それが終わって、やっと自由になった。いや、自由になったと花枝は、その瞬間、思ったのだが、残念ながら自由ではなかったので

ある。柔らかなフランスベッドに案内され、ネグリジェ姿にされ、羽根ブトンをかけられて、寝かされはしたものの、手も足もベッドの四方にとりつけられたロープに、幾分の自由は残されてはあったが、縛りつけられたのである。こんなポーズで寝かされるなぞ思ってもみなかっただけに、
「寝るときも自由にしてくれないの」
と枕元にいる君代夫人に聞いた。
「そう、きょうのこころはネ」
「まるで奴隷ね」
「母殺しの若妻ですものね」
「あら、まだ、あの想定、生きているの」
「終わるまでワね。本当は自由にしてもいいのよ。だけど、自由にしたら逃げて、もう帰ってこないかもしれないでしょう」
「私、そんなに見えますかしら」
「見えないネ。でも、苦痛から逃がれたいと思うのは人の常でしょ。そんなスキを与える方が悪いのよ。だから、ここにいる間は徹底的に束縛し、いじめようと思うの」
「そう、仕方ないワ」
「苦しかった?」
「死んだ方が、ましなくらい」
「そう、でも生きていたワ」
「生きているのが、うらめしい」
「そうね。それも本当ね。じゃ、お休みなさい。これから、ゆっくりと一人で考えるのねあと三十分もすれば、さきほどの食事に入れていた睡眠剤が、ゆっくり、きくでしょうから、ぐっすり明日の朝まで、ねむるのね」
君代夫人は、子供をあやすように語り、最後に花枝の顔をはさんで、しばらく見つめ、ひたいに軽い口づけをして出て行った。
あたりが急に静かになった。花枝は今日、一日のこと、いや熊野に呼ばれた日のことから考え直さないわけにはいかなかった。
男たち、女たちの態度、いったい彼等は何の目的で自分を、こんなに、いじめたのだろうか。それは単に江戸法制史を作るために撮影しただけだろうか。否、そこに何かがあると思った。幸か不幸か、花枝はサド、マゾの世界について何一つ、知識を持っていなかった。それだけに何と表現してよいか、彼女の知識では、それを明確化するわけにはいかなかったが、おぼろげながら、そのことを認識したのである。そのための犠牲が、つまり私なのだ。犠牲だからこそ、寝る時ですら自由がないのだ。そう解釈した。この分では明日はどうなるか分からない。存分に覚悟を決めておこうと言いきかし言いきかし、花枝は昼の疲れも手伝って昏々と、ねむりにおちて行った。
その頃、別室では花枝の緊縛プレイで興奮した人たちが夫婦で、それぞれSMプレイを楽しんでいた。熊野夫妻の場合は道子夫人の方がSで、熊野はMであった。むくつけき大男の熊野をクサリで縛り上げた道子夫人は、夫の顔に、厳重な革のサルグツワをかけ、歯ブラシでワキ腹をこすり、うならせていた。
一方、浦野夫婦の場合は浦野がSで千波夫人がM。浦野は千波夫人を、すっぱだかにしてさきほど花枝がされたように徹底したエビ責めを加えていた。口には竹ばしで舌をはさんで、これを縛り上げてとめ、しきりと、くすぐっていた。池本夫妻は、この二組の夫妻に比べると冷静で、何事もなかったように二人して読書にふけっていた。
一方、撮影班は、ふるまい酒に酔って、しきりに快気焰をあげていたが、さすがにSM趣味はないとみえて、もっぱら討論会といった風景で、それもあきるとメンバーを揃えてマージャンをはじめた。
こうして、この夜は次第にふけて行ったのである。
（未完）

プレイ・レポート

裕子の泣く時

最上卓也



私は六月号に、『我が初撮影の記』という拙いレポートを掲載して頂いた最上卓也三十才です。七枚の裕子（OL二十四才）を責めた写真をお送りして雑誌には四枚、掲載されました。七枚の中には、足首と首を一つにしばり、むきだしになっているところを手でいっぱいに拡げ、集中的に至近距離から蝋をたらしているといった凄い場面も混じっていましたので、公刊の雑誌としてカットされたのも、やむを得ないと思っています。

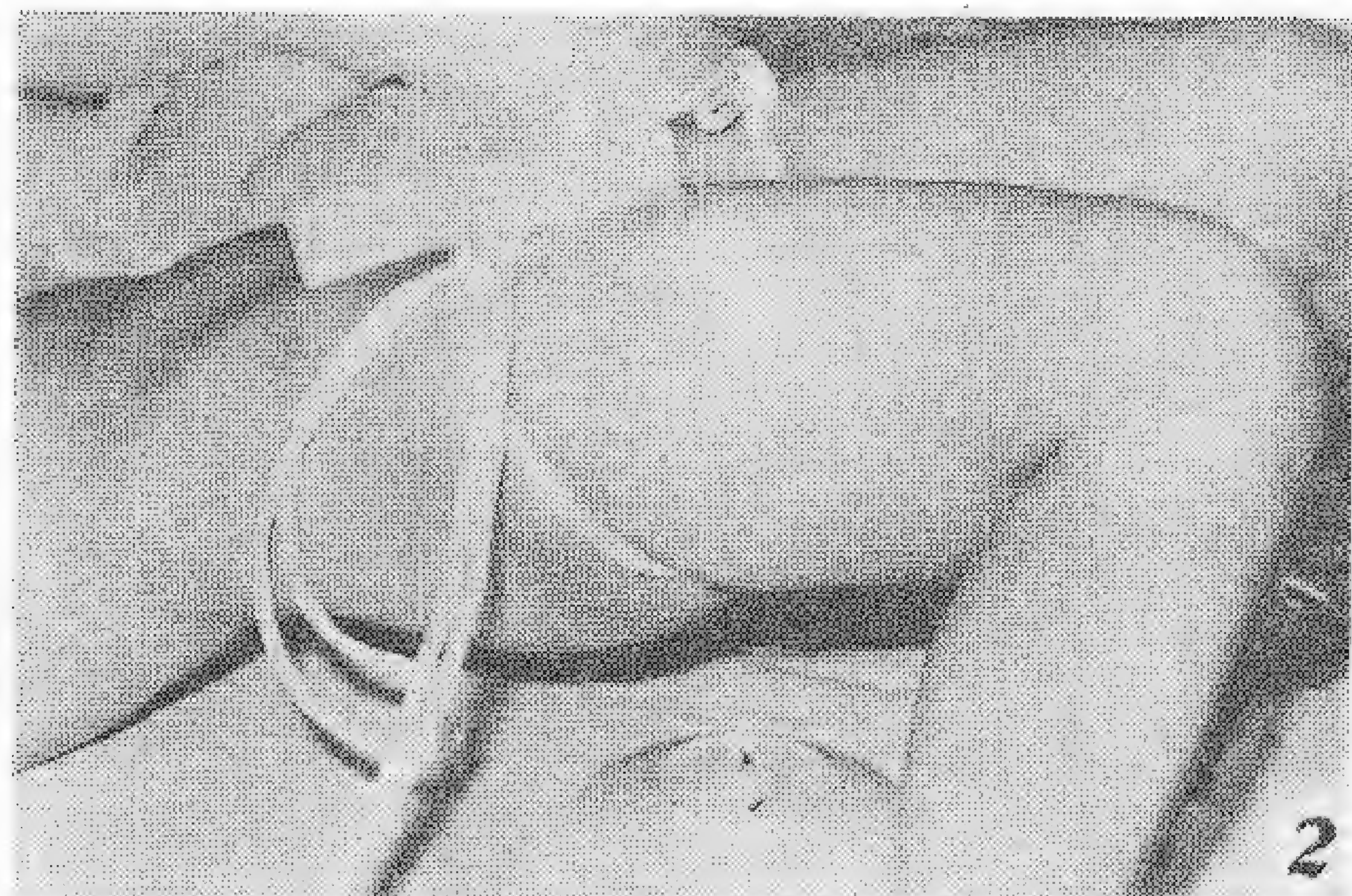
初めてのこととて、私の写真技術もうまくなく、裕子もまだまだ固さは解けていなかったのですが、第一回としては、先ず先ずの出来で、＜責め＞という感じが、そこそこ出ていたように思います。

更に八月号には、我がプレイ・レポ「ゆう子を責める」というSMプレイの報告書を載せてもらいました。奇クの誌上に紹介してもらえるという晴れがましい期待が、私にとっても、裕子にとっても、どれだけ励ましになったかもしれません。

八月号掲載のものは、裕子の表情もいくらか豊かになってきておりますが、それでも自分では、まだまだ満足ゆくものが撮れず歯がゆく思っております。プレイの方は、いろいろと羞恥責めの趣向を考え、自分がしたいと思うことを、裕子の体の上に加えて、それなりに迫力を加えているつもりですが、なにしろ室内撮影に馴れていないものですから、写真として、なかなか自分の満足のゆくものが出来ない有様です。

そんなわけで、いよいよ先日、第三回目のプレイを行ないフィルム三本ほど撮影しましたが、妻子のある身故、家でなかなか現像処理が思うにまかせず、フィルムの現像をタンクでやっただけで、未だに印画紙に焼付ける

暇がありません。近いうちに、なんとか押入れ暗室で焼付けて編集部へ、お送りしたいと思いますが、一応、当日、裕子へ行なった責絵模様を、ご報告致します。
全然、写真がないのも淋しいと思いますので、前回に撮影しましたものの中から、まだお送りしていなかった分を混じえながら、話を進めてゆきたいと思います。



私は羞恥責めが好きですから、SMプレイといっても羞恥責めを主として更にローソク責めに非常に興味を持っております。したがって、裕子を責める場合でも、先ず風呂へ入らせてから裸のまま、ゆかたを着て……などといった、くつろいだ姿や、また、それを期待する様なポーズで責め始めることは、あまりありません。
私は先ず裕子に逢ったら、その時の服装のまま、両手吊りにして、ブラウスの間から乳首をつまんでみます。更に裕子のスカートをまくり、パンティの裾の方をチョット引っ張って拡げてみたりします。
ビールでも飲みながら、裕子を服の上からしばらく、なぶって気分を出しておいて一旦手をほどき、ブラジャーとパンティだけにして、また、さっきと同じ様に両手を上に揃えて吊り上げます。
そうしておいて、私は裕子の片方の乳房をブラジャーから摘み出し、コップに注いだビールを裕子に飲ませてやります。口のまわりからビールが流れ落ちるのもかまわず、コップに三杯ほど、無理に飲ませます。
さて、次に、私特製の重りをパンティのまわりにブラ下げてゆくのですが、五個か六個位で完全にパンティとしての役が果たせなく



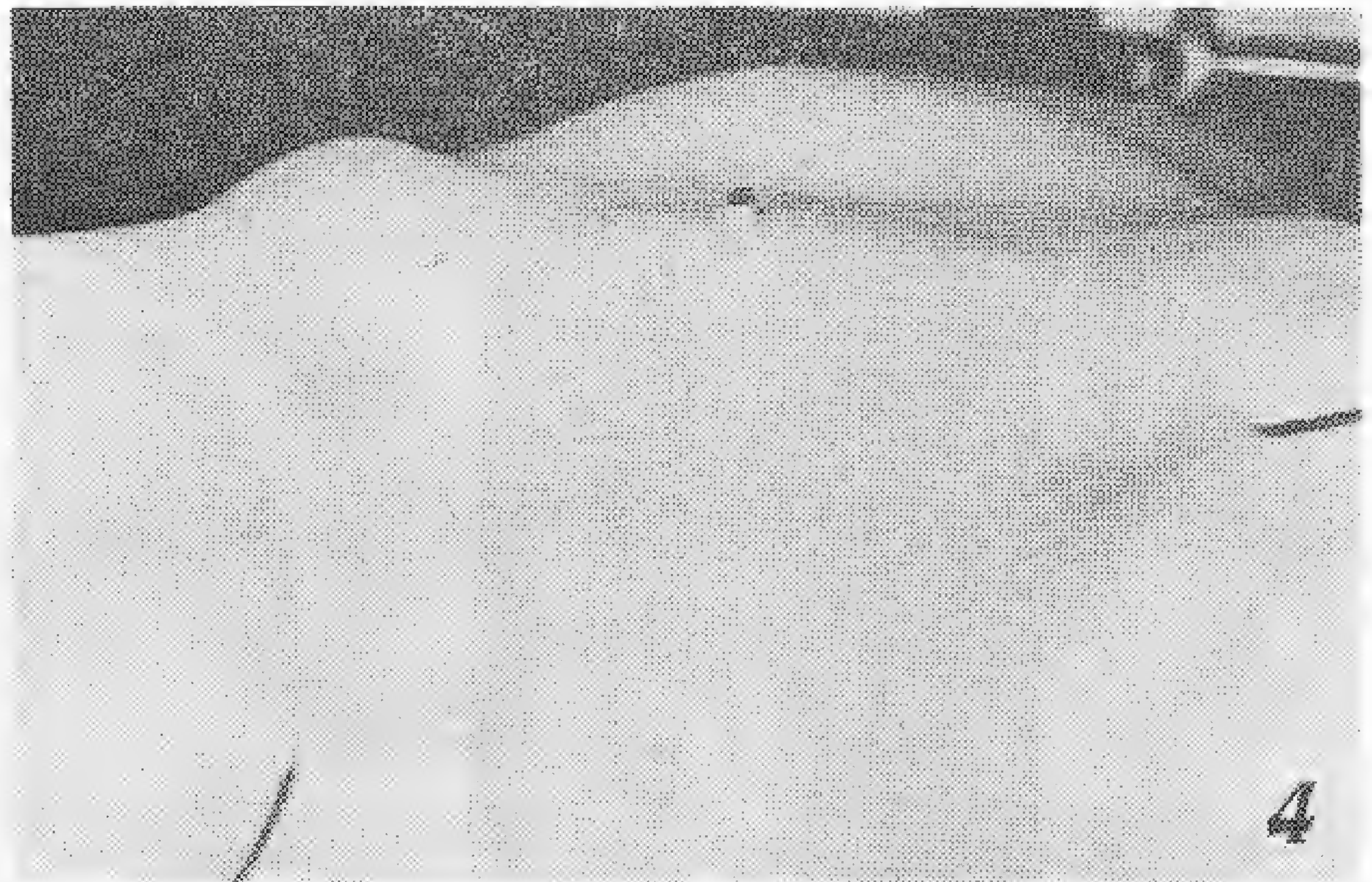
なって腰から脱げてしまいますので、それでは面白くないから、三個か四個ぐらいにしておきます。そうしますと、パンティが今にもズリ落ちそうになり、そうさせまいとして、裕子は必死に膝を曲げて、それを防ぎます。

それでも、ちょっと気をゆるせば、パンティは重りによって、ズルズルと下へ脱げ落ちてしまうのです。コップ三枚のビールによって、ぽっと頬を染めてホロ酔いの裕子（裕子は余りアルコールには強い方ではない）は、なんとかパンティが落ちないように、お尻をもじもじさせていますが、その意志に反して次第に、下へ下へとズリ下がってゆきます。

そこで私は、乳首にクリップを挟んだり、腋の下に火のついたタバコを、そっと近づけたりします。「あっ」と声を挙げて裕子が気をそらせたら、そのとき、パンティは、すぽっと面白いように脱げてしまいます。

パンティが足下に落ちてしまったときの裕子の消えいりたいような羞恥に満ちた表情は素晴しいものです。私の悪戯だけで落ちないときは、更に重りを一個ふやすとか、パンティの上から裕子の敏感な部分にバイブの挨拶を行なったりします。

以上が、私の羞恥責めに対する序曲の、まだほんの一部ですが、私の責めに対して馴れてしまった裕子は、最近では、ここまでのシナリオは不要になってしまい、何か淋しい思いをしております。私自身、最初の頃は、裕子のブラジャーやパンティを脱がせようと考えただけで、全身がカッカッとしたものでしたが、それぐらいの事では、だんだんと燃えなくなってきました。それだけに、責め方もエスカレートして、激しさを加えてきたことも事実です。



序曲が終われば、次にいろいろの責めに移るわけですが、なんといってもローソク責めの好きな私は、ローソク責めから開始することになります。

まず手始めに椅子に開股させてすわらせ、両股をロープで椅子のアームに固定し、わざと両手は縛らずに、マンギラスの額を充分に剃毛をし、その部分に厚さ3ミリ直径25ミリのローソクを置きます。（フォト1）

このスタイルで裕子をローソク責めにするのですが、それには先ずローソクに火をつけます。火のついたローソクは次第次第に燃えつきて短くなります。裕子は、蝋涙をたらしながら短くなり、その中心に完全に孔があいてくるローソクを見ていなければならないのです。やがて、今にも火が消えそうになりましたが、裕子はその寸前に自分でローソクの火を吹き消しました。

次に、ベッドの上に仰向けに引きのばして縛りつけ、1と同じところにローソクを置いて火をつけます。蝋涙はマンギラスの口の方


5

へ涎のように流れてゆきます。

熱ローソク責めは上ばかりでなく、お尻の下に、火のついたローソクを置き、いつも、お尻を持ち上げていなければならないように、しむけます。（フォト2及び3）

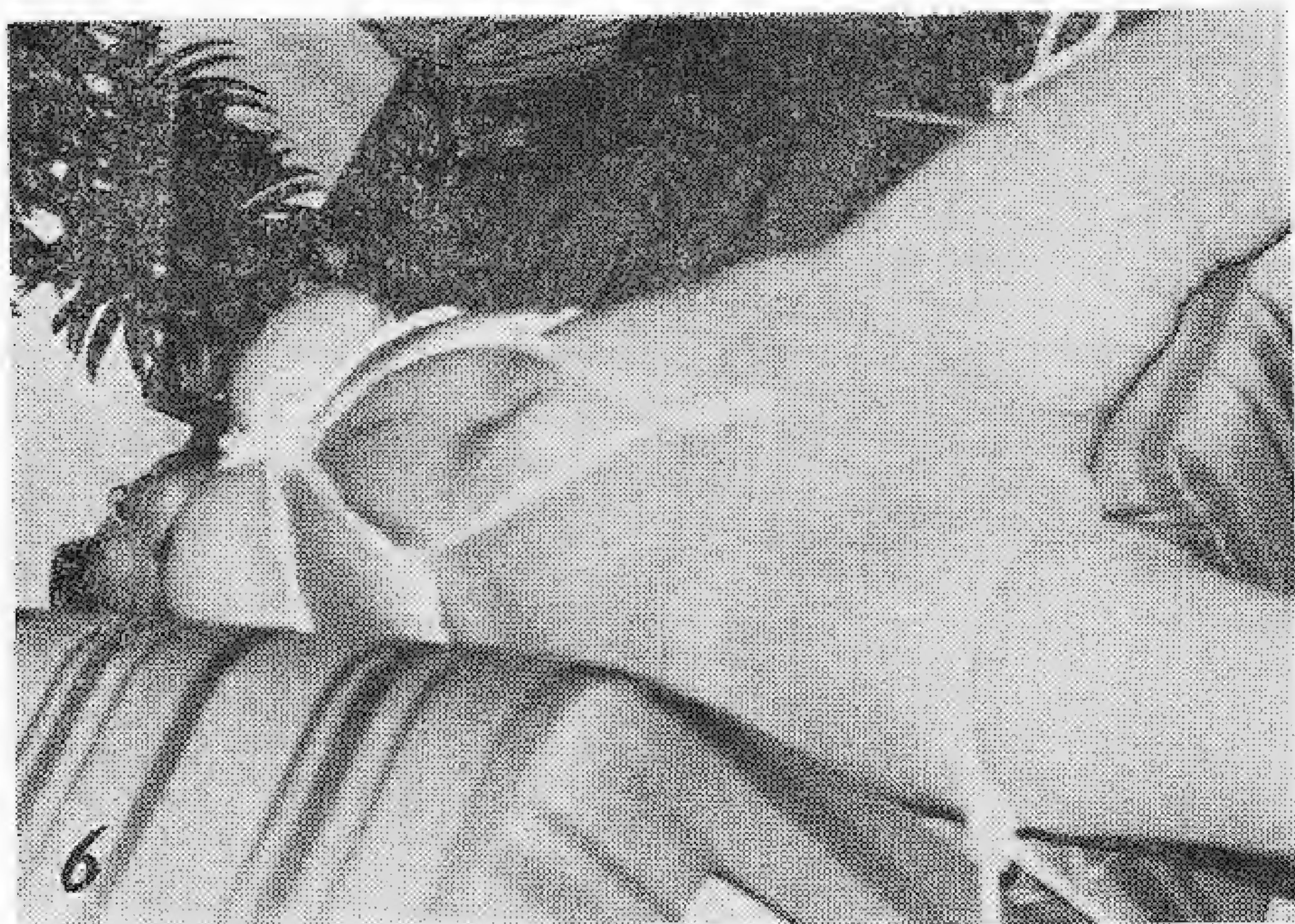
下のお皿の上に立てた火のついたローソクが相当熱いらしく、お尻をモジモジさせて、上の熱ローを傍へ流して、上と下との両方からの責めで、もがいていましたので、私は裕子の太股の縄を幾分ゆるめてやりました。

次は、私の得意とする親子ローソクです。

これは先ず、太さ25ミリのローソクを裕子のマンギラスに、約10センチほど、くわえてもらいます。表面に3センチほど出ているローソクに点火のあと、いよいよ子ローソクの登場です。（この分のフォトは、今回撮影分にありますが未現像ですので、次回にお送りさせていただきます。）

これは約8ミリの先のとがったローソクを炎であぶり、親ローソクに添ってマンギラスとの僅かな隙間にビリビリと挿入させるわけですが、裕子に実験したところでは、まだ上下に二本しか実施できませんでした。ベテランの女性でしたら、四本ぐらいは抱かせてみたいものです。「許して、許して……」と、泣いて許しを乞うのを、無理矢理、抱かせるのには興味があります。

こうしておいて、最後には、もっとも敏感な部分に、お灸を一個すえて、このローソク


6

責めも終わりとなります。（フオト4）

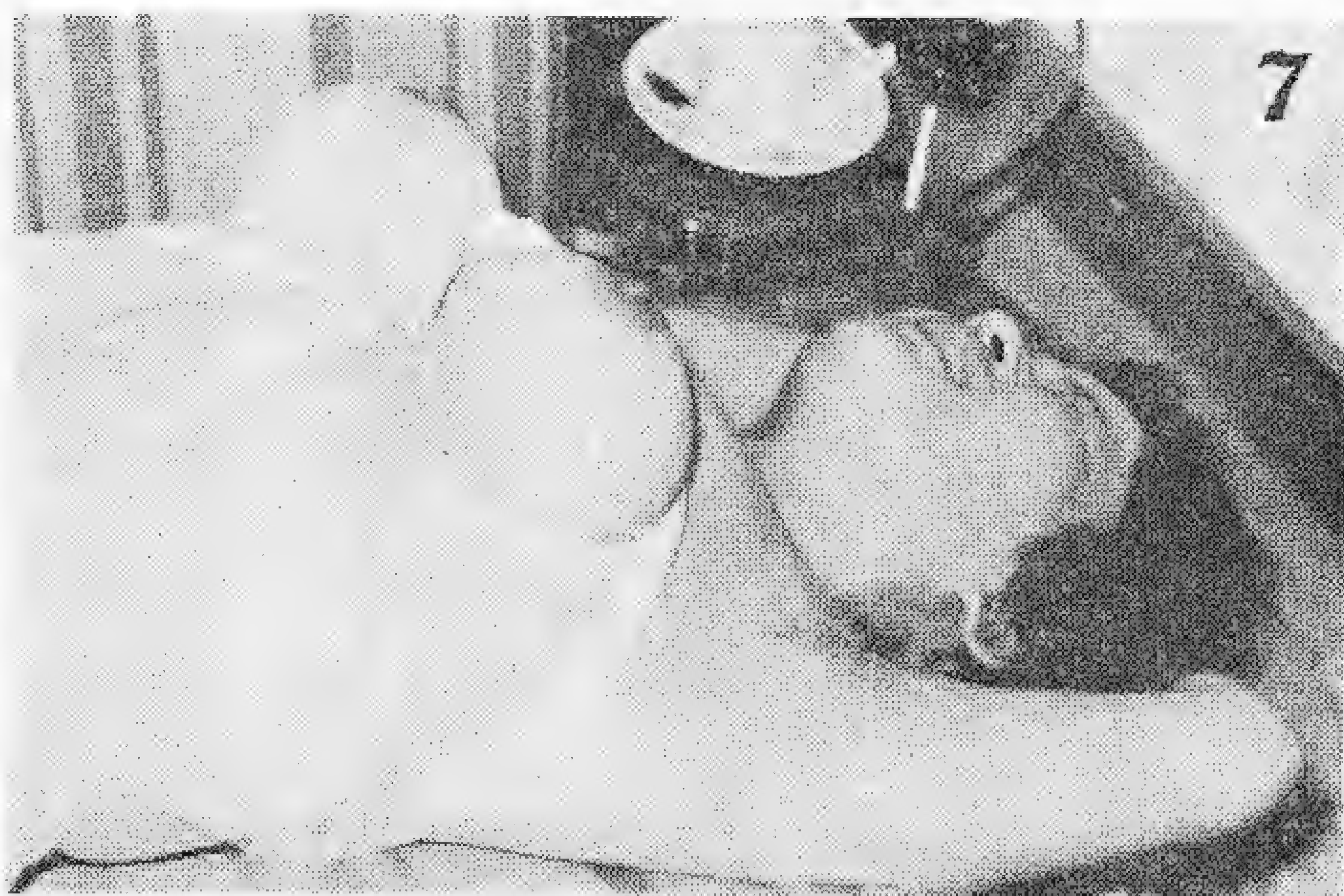
裕子の場合、艾に火がつけられて、熱い火が肌を灼き初めますと、「アーッ、熱いわ」という悲鳴と共に灸の周囲5ミリほどの肌はピンク色に変わってまいります。尚も、そのままにしておきますと、「アアア、アツイ。アーとって、とって。アーア」という激しい悲鳴が洩れてきますが、すでに、その時は火が消えております。

痕をみますと、白い肌が約20ミリほど、赤くなっております。余程、熱かったものか、裕子は涙を流しておりました。灸痕には、すぐオロナイン軟膏をぬっておきますと、跡カタは残りません。

ローソク責めの次に好きなのは針による責めです。まず、洋服を着たまま、後手に両手首を縛ってから、その細尻を吊るように引き上げます。こうしますと、足は爪先立って、お臀は突きだした格好にとびだしてきます。

こんな両手後手吊りのポーズのまま、パンティを膝のあたりまで、ずり下げます。裕子は「イヤ、イヤッ」と駄々をこねますが、もう、どうすることも出来ず、私の思いのままになる運命なのです。

私は煙草をくわえながら、ゆっくりとスカートをまくり上げて、ぷりぷりとした白い双丘のあたりを、まさぐりつつ、ぺちゃぺちゃ平手で叩いたりして観賞します。



私の視線が、お臀に集中されているだけでくすぐったいらしく、裕子はお尻をもじもじさせながらも、もうすでに観念したらしく、声も出しません。ですが、次の針責めには、大きな凄い悲鳴を挙げます。

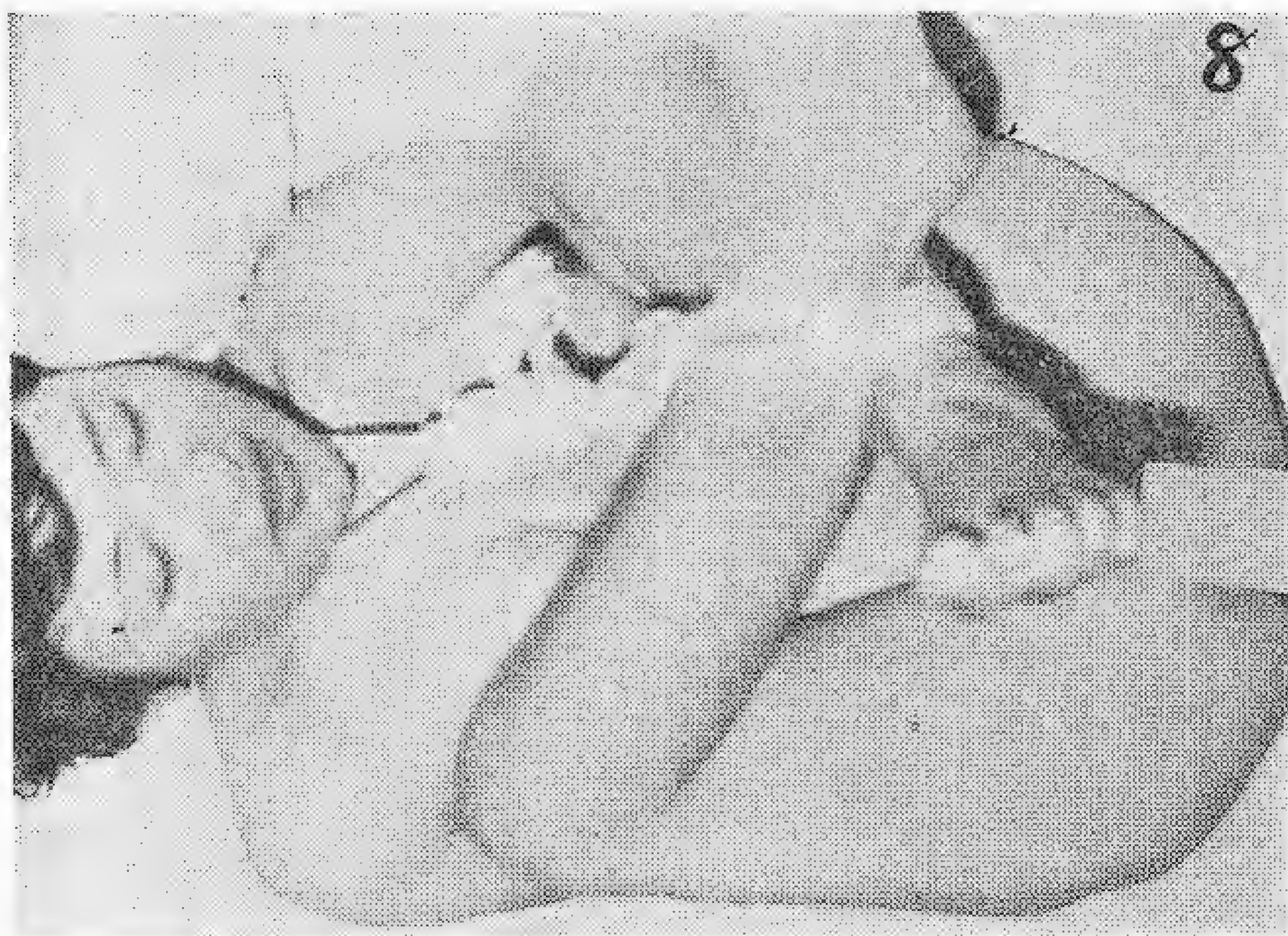
私はマチ針をとりだして裕子の菊座の周囲を軽くつつくのです。私は血を見るようなことは好きではありませんので、ほんの針の先が触れるか触れないくらいの浅い刺し方ですが、それでも裕子にとっては、場所が場所だけに、刺激が強いのでしょう。とても派手な悲鳴を、その都度、挙げますので、それがまた私の耳を、いたく楽しませるのです。

針の次には、線香で少しばかりいじめてやります。これは火のついた線香の先を、肌にそっと触れるわけですが、触れる場所としては、菊座とマンギラス間、約3センチの部分で、五回ぐらい軽く触れます。じっとしていればいいのですが、身体を動かすと、予想外に熱いらしく、時には多少のお小水をみることもあります。

こうした責めを行なうと、裕子の目から涙が、ほろりほろりと水晶の玉のように溢れて頬を伝います。私は、そんな裕子の頬を両手で挟んで、そっと口づけをします。唇を合わせたまま、ブラウスの間から手を入れて乳房を責めたり、まだ、もっと外のいたずらをや

ったりします。

お臀に対する責めとしては、ゴムのムチによる尻打ちがあります。このゴムのムチは、八本に分かれているものですが、ゴムが硬質なため、相当に痛いらしくて、手加減して、



8

ぶっていても、僅か数打でお臀の皮膚一面が真赤になりミミズ腫れが出来てしまいます。

着衣のままの責めは、これくらいまでで、さて、ここらあたりで、いよいよ裕子にも全裸になってもらいます。全裸にしたところで平凡ですが軽い股間縛りで楽しみます。（フォト5）ウォーミングアップしたところで、本番の私自慢の玉ギラス付き強烈股間吊り上げ責めを行ないます。

まず玉ギラスの説明をしますと、直径35ミリと、表面にギザギザのついた28ミリの黒玉五個を麻ヒモでつないだ全長約16センチほどの、しなしなした責具がそれです。更に末端の大玉（直径約5センチ）には縦にもロープが通っており、このロープで股間縛りを行なうわけです。

縛り方としましては、まず全裸の裕子を、あぐら縛りにしておいて前にころがします。腰に二巻きしたロープの腰部に玉ギラス付きのロープを結び、裕子のマンギラスに、たっぷり、くわえてもらい（菊座の部分にも一個小玉がついています）再び腰のロープを通して上に吊り上げますが、その時の裕子の表情次第では両膝が浮き上がるまで、吊り上げます。（フォト6・7）

結婚の経験のない裕子には、玉ギラスによる責めが相当にきついらしく、あぐら縛りで吊り上げる前にダウンしてしまいます。（これはソファに縛りつけてのフォトです）

裕子は、この玉をのませるだけで悲鳴を上げますが、ベテランのM女性だったら、相当のところまで耐えられると思います。

最後は、あぐら縛りでころがしておいて、玉ギラスやバイブで責めて仕上げにかかるわけですが、私も適当に楽しませてもらうわけです。（フォト8）

以上が大体、私の好みを生かして裕子に対して行なう責めプレイの一部です。其の他、多少の遊び道具は持っておりますので、もし私とプレイをしてもよいとお思いのM女性の方がおられましたら、お便り下さい。

それから、裕子も私以外の男性から、一度責められてみたいと言っておりますので、信用の出来る方でしたら、一緒にSMプレイをやりたいものです。

近々、裕子を伴って関西方面へ旅行しますので、その時は編集部へ連絡の上、ベテランの方に、裕子を責めて、写真撮影をして頂けたらと、楽しみにしております。

奇妙な責め意識に憑かれた男

我が半生の回想

春野松雄


カット・丸鬼怒叉奴

私の半生、胸の中に切なく秘められた願望は、豊かな女性のお尻と、〝お灸〟についての憧れでした。

それは小学校一年の頃から始まります。

瀬戸内海の海辺近い静かな町。商家と農家が立ちならび、あまり豊かな町ではないが、その気になれば、すぐにでも隣の家の中が、よく見えるような家ばかりが並んでいる平和な町の中で私は育ちました。

その私が、生まれて始めて胸がドキドキするようなショックを受けたのは、丁度、私が小学校に入って間もなくの頃でした。隣の家に、二十二、三才位の娘さんがいました。

狭い庭で双肌を脱ぎ、汗を拭いているのを見たのです。その真白い背中に、黒々とした小指の先程もある、お灸の跡が黒々と二列に並んでいたのです。一列に五つずつ合計十個の跡がついていました。真黒な灸跡のまわりが少し紅くなっていたように覚えています。

私は息をのんで、その灸跡を喰い入るように見つめていました。

私の気配に気付いた娘さんは、向こうむきのままふり向いて、白い歯をみせニッコリ笑って家の中へ入ってしまいましたが、私は、その娘さんの背中の灸痕が頭に灼きついて、そこを離れることができませんでした。

何故、あんなに優しくて、きれいな娘さんがヤイトなんか、すえられたのだろうか。すえられているときは、どんな顔をしていたのだろうか、など考えると、何とも云えない気持になりました。そして、何とかもう一度、その背中が見たくて、時折、娘さんの家へ遊びに行きましたが、なかなか、その機会が、ありませんでした。

ところが、とうとう、そのチャンスがやって来たのです。母と一緒に銭湯へ行ったとき、その娘さんが入って来たのです。私は胸が高鳴るのを抑えて、すぐ見に行きました。しかし、そのときは、あの黒々とした痕はとれてかなり淡い茶褐色の痕しか残っていませんで

した。その代り、大きなお尻の上——丁度、腰の少し下に、新しいお灸が二つ、すえられていました。

彼女は頓着なく私の背中を洗ってくれたりしましたが、私は豊かで真白いお尻の上の新しいお灸の痕にドキドキし通しでした。その時から、彼女の裸が見たくて、いつも母と銭湯へ行くようになりました。

銭湯では、他にも、体のいろんな処に、お灸をすえている人を沢山、見ました。

私の育った町では、お灸のことを、〝やいと〟と呼び、小さい頃の疳虫とか、寝小便には、背中の上の『チリケ』というツボに、お灸をすえるのが習慣でした。又、子供のお仕置にも、〝やいと〟をすえるのが、つきものでした。女の子が年頃になってくると、血の道の予防とかで『犬の目』と云われる腰の両側のエクボの処に二つ、お灸をすえることになっていました。

農家が多かったので、若い娘でも、人妻でも、月に一度か二度は、必ず、家の年寄か近所の灸点師かに、背中や腰に、やいとをすえてもらっているようでした。

しかし、私が、女のお尻と、お灸とを結びつけて考えるようになったのは、偶然の機会があったからです。

母が近所の雑貨店の奥さんと立ち話しているのを聞いて、私は非常なショックを受けたのです。その奥さんが、

「うちの女中が痔が悪くて困ってますの。医者に行けといっても、場所が場所だけに、恥かしいといって、いやがるし、便所へ入ると半時間ぐらい出て来やへんし——」

母は若い頃、痔をお灸で治した経験があるようでした。

「そら、やいとがよろしいですよ。家で治せますもの、痔なんか、一寸つづけてすえたらすぐ治りますわ」

「それなら、女中を寄越しますから、奥さんから、云うてやって下さいな」

その女中さんが家へやって来ました。小柄でキヨという名前でした。母の話を聞いて、一寸、びっくりした顔をして

「まあ、やいとですって？　小さいとき一ぺん、すえられましたけど……それで、どこへすえますの」

「腰の〝犬の目〟の処や」

「大きいんですの？」

「まあ大したことないわ。五つか六つ、すえたら治るさかいに」

母は小指の先を出してみせました。

「熱いんでしょうね」

「そら、初めの二つ三つは熱いけど、すぐ馴れるよって、とに角、やいとの先生の処へ、連れて行ったげる。そしたら、あとは私がしてあげるから」

その日、母はキヨさんを灸点師の処へ連れてゆきました。翌日、私の家へ彼女が、お灸をつづけるために来ましたので、私は固唾をのんで母の横に坐りこみました。

キヨさんは恥かしそうに着物を脱ぎ、腰巻を、お尻の下までさげて、殆ど丸裸のような恰好になりました。抜けるように白い肌の、腰からお尻にかけて、新しい灸あとが、米粒程の大きさの黒い点となって、両側に八つありました。母は線香に火をつけ、艾をひねりながら、

「こんな小さいやいと効かへんわ。もう一寸大きいのでないと——」

遠慮会釈なく、その黒いカサブタを取ってその上へ、一つずつ新しい艾をのせました。

「奥さん、あんまり、大きいのでは……。昨日でも、熱うて、熱うて——」

母は頓着なく、まず腰の両側の艾に火をつけました。小指ほどの大きさの艾から、二本

静かに煙が立ち、艾の灼ける特有の匂いが漂ってきました。

キヨさんは口を一文字に引きしめ、目をつむっていましたが、艾が赤い火の玉になってくると、腰をもじもじ左右に揺り動かし、鼻を鳴らし、「ウフン、ウッ、アッ、アツツ」と呻き声をたて両手で顔を覆いました。

母は構わず、今の場所の少し下の灸跡に、又二つ、火をつけました。キヨさんの体は、だんだん前に倒れ、うつ伏せになり、胸を畳にすりつけ、四つ這いの姿のまま、可愛いい小柄のお臀を小刻みに揺さぶり始めました。

「キヨさん。子供やあるまいし、一寸、辛抱しなはれ。今度は一寸、熱いよって――」

母は、お臀の割れ目の、ちょっと上の尾テイ骨の処の艾に火をつけました。煙が、ぽっと立ち昇ったとき、キヨさんは堪えかねて

「ヒヤー、奥さん、艾のけて――。熱いわ、勘忍やわ。あつつ、あつーい。あつッ」

大きく力んで、お臀を、はげしく揺り動かした瞬間、お臀の割れ目の間から、何か破れたような、にぶい音がしました。間もなく、線香の匂い、艾の灼ける匂いとは別に、特有の臭いが流れてきました。私はキヨさんの丸くて可愛いい、そして、少し紅味（あかみ）を帯びたお尻にみとれながら、鼻をおしつけるようにして、その臭いをかいでいました。

しかし、そのキヨさんに私がしばらくしてからやいとを据えられる羽目になりました。私が近所の子供と喧嘩をして、その子供の頭を殴ったというので、母は平身低頭で、謝りにゆきました。帰ってから母は丁度、遊びに来ていたキヨさんに手伝わせ、私を裸にして母が私の上に馬乗りになり、キヨさんが私にお灸を据えるという役割になったのです。

「キヨさん。遠慮せずに、もっと艾を大きくして。うんと熱い目に会わしとかんと、あかんよって――」

「この位で、いいんですの？　こんなに大きかったら、熱いですよ。可哀そうに」

「ええの。その位の十コ程こしらえといて」

私は十コもどこへすえられるのかと、始めから泣き叫び乍ら考えました。そのうちに母が墨で私のお尻の両ペタに印をつけました。冷やりとした感じでした。そのうちに、キヨさんの柔らかい手が、私のお尻を抑え、火がつけられたようです。

今でも忘れませんが、太い錐をもみ込まれるような熱さと痛さで私は、どんなに暴れて泣き叫んだでしょうか。例の、隣の娘さんが心配して家へ見に来てくれました。

「あら松ちゃん、どうしたの。やいと据えられて可哀そうに」といい乍ら、尚二つ程、据えられるのを心配そうにのぞきこみ、

「もう堪忍したげたら。それだけ据えたら、こたえてるでしょうに」といって、キヨさんの手から線香を取り上げてくれました。

キヨさんも、

「松ちゃんゴメンね、熱かったでしょうに」と若い娘さん二人が交る交る私のお尻のやいとの痕にツバをつけて撫でてくれました。私はそのとき何か楽しい感じになり、そしてフトこの娘さんやキヨちゃんに、もっとお灸を据えてもらったら、いいなという感じがしました。娘さんは優しく笑い乍ら、

「これから大人しくするのよ。今度、悪いことしたら、姉ちゃんが、もっと熱いやいとをここにすえたげる」といいながら、私のおチンチンの先を指先でピンと弾きました。キヨさんに据えられたお灸の大きさは大豆位のものでしたが、今も尚、淡く痕が残っていて、あの当時を懐かしく思い出さしてくれます。

時代は変わり、第二次大戦後、私は世の中が落着いてくるにつれて、娘さんやキヨさんのことを思い出しましたが、二人共、戦災で

消息不明です。

私は手近な赤線の女、バーやキャバレーの女に、娘さんやキヨさんの面影を求めて歩きました。そして彼女達と一緒に床に入るとすぐ裸にして背中やお臀に、お灸の痕がないかを探しました。だが彼女達の体は娘さんやキヨさんのような美しい肌ではなく、お臀の線も崩れていて、あまり魅力はありませんでした。しかし彼女達の多くは関西の田舎から出て来た人が多いので十人のうちの八人迄は必ず背中やお臀にお灸の跡があり、中には、無量寺のやいとか、弘法様のお灸とか、又、稀には数人、痰炎といって卵位の大きさのものを、お臀に据えているのもいました。

そのように数多くの灸痕をみているうちに私は女の子のお臀に自分がお灸を据えてみたいという欲望にとりつかれてゆきました。

或時、キャバレーで、私の席に坐ったホステスは、色が白く餅肌で、顔もまず十人並以上で、歌手の園まりに似た感じでした。お臀は一きわ大きく私の好みに合った女性で、例の隣の娘さんに少し似た処がありました。

彼女とホールで踊っていると、ライトに照らされた彼女の背中の両側にカサブタがとれて間もない、未だ少し紅味を帯びたお灸の痕が見られました。数回、会っているうちに気心も、だんだん通じて来て、彼女は四国の出身で今は独り下宿住いをして、身寄りもなく年は二十七才で、冷え症で痔が少し悪いということを知りました。彼女なら私の願望が叶えられるかも知れないと思い、デートに誘いました。彼女は、二つ返事でＯＫしました。私は自分の願望実現のキッカケを作るためにデートの数日前に、近所の灸点師の処で腰にいくつか、灸を据えてもらいました。

彼女とのデートでは型通り映画を見て、少しアルコール分を入れてからホテルに誘いました。もう彼女は私に馴れているので別に恥かしがることもなく、ついて来ました。しかし部屋に入ってから一緒に風呂に入るということになると少し躊躇していましたが、私は彼女を促して私が先に入りました。後から彼女は遠慮勝ちに腰にタオルを巻いて、おずおずと入って来ました。

暗いキャバレーで見るよりも体は遥かに美しく白く、ボリュームもあり、特に白くこんもりとしたお臀は、歩くたびに左右に大きく揺れて私の情感をそそりました。私は彼女を浴槽に引き入れて、滑らかな彼女の体を、そっと抱えました。脂の乗った体を少し固くして、彼女は恥かしそうに下を向いていましたが、その風情に私は次第と彼女が、いとおしくなって来ました。

私が浴槽から出ると彼女は私の体を流すため私のうしろに回り、時折、彼女の肌が私の体にふれながら、背中から腰まで手拭いで洗いました。彼女の手が私の腰まで来たとき私の腰のお灸を発見して、

「あら、こんな処にヤイトを据えましたの。熱かったでしょう。何のヤイトですの」と、頓狂な声で聞きました。

「少し痔が悪いのでね」

「そうですの。しかし私、背中には据えましたけど、こんな処、熱いでしょうね」

といい乍ら浴室から上がり、二人は抱き合うようにしてベッドに横たわりました。

素裸のまま横たわった彼女の眩しい位の白い肌。そして盛り上がって、深い割れ目をもったお臀に私は、しゃぶりつきたい衝動にかられました。ほんの少しの腋臭。話をするたびにかすかに甘酸っぱい口臭が流れ出し、それがかえって私の性感をかきたてました。

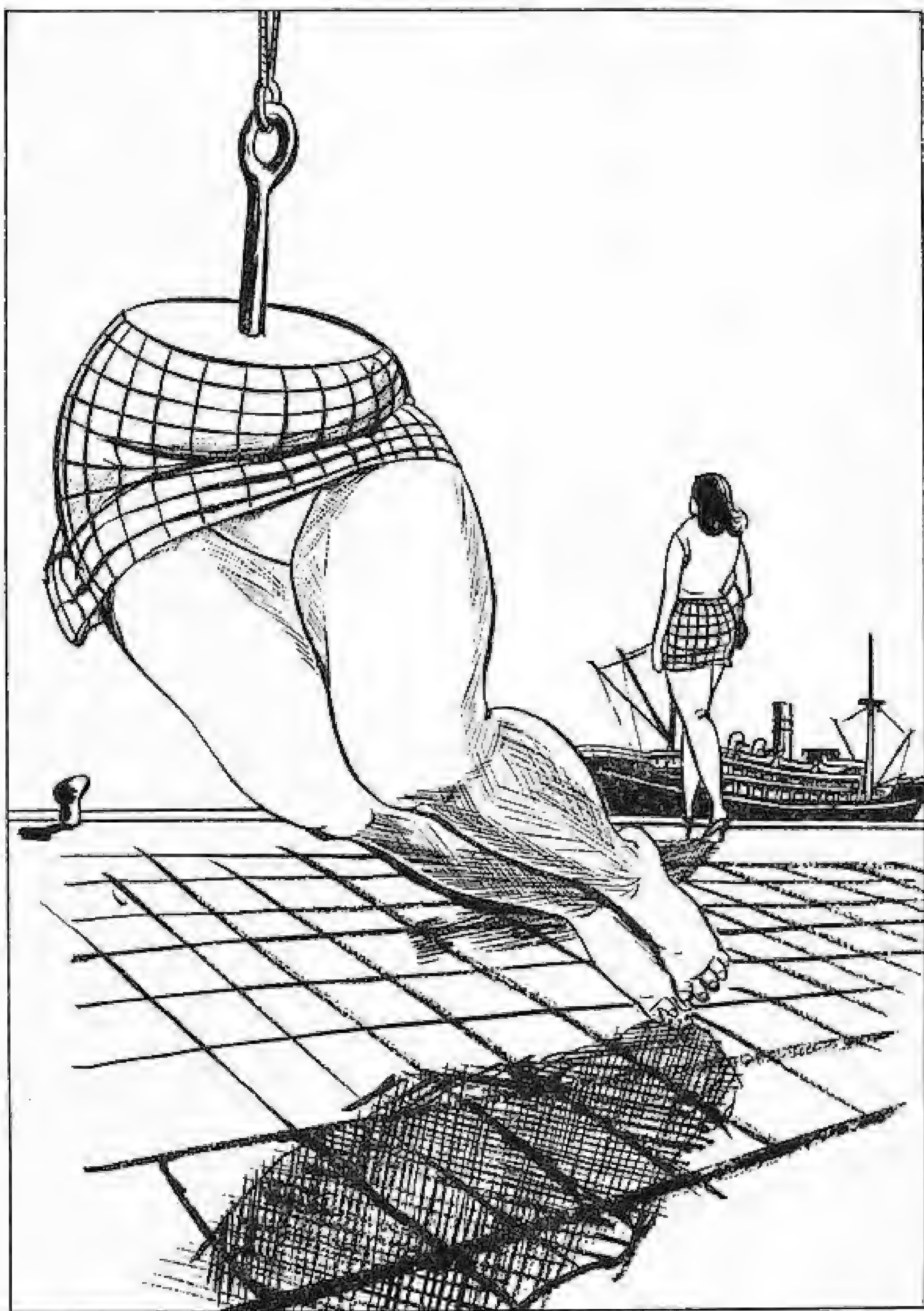
私は例によってお臀から背中にかけて愛撫しながら、お灸の痕が、いくつ位あるかを調べました。『チリケ』には少し大きな親指位

のうすい灸痕があり、背中の両側に六つ、これは割合に新しい痕があります。私は、そこを軽く指で押すと、彼女は
「私も沢山ヤイトをすえてるでしょう。チリケは、小さいときイタズラをしたやいとで暴れるので馬乗りになって抑えつけられて据えられましたの。背中のは胃腸の工合が悪いので、此の間、近所の奥さんに据えて貰いましたの」
私は彼女を抱きしめながら、ウットリと彼女のやいとの由来を聞いていました。
「私、ちょっとトイレへ」と立ち上がりトイレへ駆け込みました。私は、何かの準備かと思っていましたが、仲々出てきません。十分位たって、やっと出て来た彼女は、
「昨夜ちょっと飲みすぎて――これで、すっとしましたわ」といい乍ら、横のコーラの栓をあけて口にふくみました。私はあまり気にも止めず、入れ違いにトイレに立ちました。中に入ると、排便特有の臭いが鼻をつきました。彼女も痔の気があると云っていたので、それで時間がかかったことが分かりました。私はトイレから出て来て彼女に、
「小夜ちゃん（彼女は小夜子といいます）のウンチの臭いをトイレで十分、匂わせてもらったよ」と意地悪く云いますと、彼女は照れくさそうに、
「あら未だ臭いが残ってたの。恥かしいわ。エッチね。だって私、痔の工合が悪いので、仲々出ないんですもの」
「痔が悪いのか、どれ一寸、見て上げよう」
「いやァね、エッチだわ。そんな処、見るものじゃないわよ」
「いや、俺は自分も悪いから、よく知っているんだ」
彼女を無理にねじ伏せて、真白なお臀の割れ目を指で開きました。
彼女の肛門は未だ桜色にキュッとしまっていて可愛いい菊の花弁の形をしていましたがその中から少しイボ痔が出ていました。私は指にツバをつけて、その痔を肛門内に指を奥深く突込んで押込みました。すると彼女は、
「いやン、痛いわヨ。指を突込んだら。今トイレへ行ったばっかりだから、アレが手につくわよ。汚いわ」
私は思わず指を鼻先にもっていって匂いました。丁度さっきのトイレの中と同じ臭気がして、同時に、いつかキヨちゃんの肛門から出た空気の臭気と同じだなと思いました。
「痔の治るやいとをしたげようか。よく効くよ。丁度、今、道具を買って持ってるんだ。今晩、帰ったら自分で据えようと思ってね」
「自分でする位なら、私がしたげるわ。よくお母さんに据えたげたから、私上手だわよ」
彼女は自分に据えられたら大変だと思って逆に私にしようとしました。私は、それならそれでもいいと思って、
「では先に、やってもらうか。大丈夫かな。上手にしてくれよ」
「大丈夫。でも、私のお尻の穴に指なんか突込んだ罰に、熱いのを据えたげるわ。泣かないようにね」
彼女は、いたずらっぽく笑い乍ら、手つきよく艾をひねり、線香に火をつけました。
「さあ、やるわよ。泣いても知らないわよ」
「小夜ちゃんは、やいとで泣くの」
「小さいときは、そりゃ泣きわめいたけど、今でも熱がるわ」
やがて彼女のつけた艾が私の腰の上で煙を立てはじめました。熱さが錐で、もみ込むように襲って来ます。しかし小夜ちゃんに据えてもらっているという快感もあり、堪え難い程の熱さは感じられませんでした。
「あら、熱くないの。じゃ、もう少し大きくこの位のをするかな」と彼女は親指程もある

艾をひねって私の顔の前へ差し出しました。そして、

「さっき私のお尻に悪いことをしたから、これを肛門の上に据えたげる」

私は少しあわてて、



……イメージギャラリー……『波止場の怪』……仲乃ミハル……

「おい、冗談はよせよ。そんなことしたら、その位の艾を、小夜ちゃんのお尻の穴にも据えるぞ」

「いやーん、じゃ、もう少し上ね」

割れ目の上にのせて火をつけました。大きな艾なので、その熱いこと。私は小さい時にキヨちゃんの苦しむ姿を思い出し、キヨちゃんが、あんなに熱がってオナラまで洩らしたのが、よく分かるような気がしました。

小夜子は、つづけて、いくつか相当、大きいのを同じ処へ据えて、

「もうこれで堪忍したげる。でも、こんな大きいのを据えても、熱くないのかしら。本当に効きますの?」

「そりゃ効くよ。どうだ、一つ小さいのを据えて上げようか。すぐ治るよ」

「うーん。でも熱いでしょう。私、辛抱できるかしら……」

生返事をする彼女を押し倒して、彼女の背中に逆に馬乗りになりました。

「何だか、お仕置きされるみたいで恐いわ。本当にあまり大きいのをしては、いやよ。私熱がりだから」

彼女は恐る恐る首をもたげて云いました。私はそんなことには委細構わず、彼女のお尻の可愛いエクボ(犬の目という処)に二つ、その下の両側二列、合計六カ所に小指位のモグサをのせました。そしてエクボの右側の艾に火をつけました。艾の火が燃えてゆくにつれて少し体が、よじれ「ウッウー」という呻

き声が聞こえ始めました。それでも割合にお灸に馴れていると見えて、キヨちゃんのようには熱がりません。つづいて二つ目の艾に火をつけました。

彼女は少し足をふんばって辛抱する力が入ってきました。彼女は、うつ伏せで、声にならないまま体を少しよじらしています。やがて次の艾に火をつけますと、お尻近くになって来たので熱さが強くなったのか、足をバタつかせ始め、

「フン、フン、あつい、あちち」

「まだ大丈夫だよ。この位の、何だね」

私は更にその下の割れ目の両側近くの処の艾二カ所に同時に火をつけました。艾が、だんだん燃えつきる頃、彼女は途端に、

「熱い。あちち、もうやめて。熱い、堪忍して。アーン」

半泣きの声を出し呻いて、お尻を大きく持ち上げ左右に振り出しました。それはそうでしょう。たださえ熱い場所に、二つの艾に同時に火をつけたのですから。しかし私は構わず、更に尾テイ骨の処に艾を少し大きくして火をつけました。

小夜子は、もう堪まらないらしく、子供が折檻のやいとをすえられてるような声を出して、

「熱いったら。艾のけてエ、やめてーあついあついアチチあっあっ」と叫び始めました。

私はあわてて彼女の口を手拭いで蔽って、もう一つ新しい艾を、そこにおき、火をつけました。もう彼女は辛抱の限界に来たようです。恥も外聞もなく両足を大きくひろげ、お臀を高くもち上げ、その間から見える彼女の可愛らしい肛門が開いたり閉じたりして、力を入れ過ぎたあまり、折角、私の押込んだ痔が、彼女の排泄し残った便の一片と一緒に外へ出てきました。

やっと艾の火が消え、腰からお臀にかけて大豆位の大きさの黒い点が七カ所、白い肌に鮮かに浮き出て、そのまわりがポーッと赤くなっています。彼女はぐったりとして、涙にぬれた顔で私を、うらめしそうに見上げました。私は、やっと若い女性のお臀に、お灸をすえるという願望を達した満足感と同時に、彼女の顔が何とも云えず、いとおしくなってきました。

私は彼女に長い長い口づけをしました。力を入れて辛抱したためか、少しきつくなった彼女の腋臭と口臭。そして涙と汗の味。私はそのようなものが入り交じったものを味わい乍ら、私は彼女の腰からお臀にかけての黒々とした灸痕の一つ一つに口づけをし、自分の舌で肛門の未だ便が少し残っているのを、彼女のイボ痔と共にふき取るように甜めてやりました。すると彼女の、涙を浮かべた顔が少し微笑して私に

「私好き？　こんな女でも、これから可愛ってくれる？　私あんたに恥かしい処を、みんな見られたワ。熱いやいとはうらめしかったけど、私が好きでやってくれたのかと思うと私嬉しいわ。今度は、もっと熱いヤイトでも我慢するから、又きっと据えてね。あなたにならどこに据えられても私うれしいわ」

私はもう一度、強く彼女を抱きしめて再び口づけをしました。

それからというものは、一週間に一回は、彼女の下宿を訪ねて、お互いにお灸を据え合う生活が始まりました。

艾の大きさも、数もふえてゆき、それだけではあき足らず、しまいには、お互いに、火のついた線香をもったまま抱き合って、相手のお臀や背中に親指程の大きさもある艾をつけて同時に火をつけるのでした。そのとき、私も小夜子も、灼けゆく熱さに汗をたらし乍ら堪え、彼女の涙、汗を私が口ですすり乍ら

腋臭と口臭の、ほのかな甘さに酔いしれ〱、強く強く抱き合うのでした。

次に私達のやったことは、二人の体を背中合わせに紐でくくり、お互いが相手に同時に浣腸をかけ、便意をギリギリまで堪え、十円銅貨位の大きさの艾を二人の、くくり合ったお尻の間に左右一つずつ軽く差し込み、それに、お互いが一つずつ持った線香で火をつけるのです。これは同時に同じ艾で相手の体にお灸を据えるわけですから、二人にとっては一身同体の感が強いのです。そして艾が大きければ大きい程、お互いの苦痛を分け合う度合も大きいわけです。

十円銅貨位の艾が燃え始めて来ると、今迄辛抱してきた浣腸の便意が限界に達して、二人共、殆ど同時に排泄を行ないます。熱さを堪え乍らの同時排泄ですから恥も外聞もありません。部屋に敷かれたビニールの上に便器をおくのですが、中々うまく、そこに収まらず、熱さで、お互いの体が動き、排泄物で相手の体を汚すこともあります。

排泄も終わり艾の火も消えますと、急に灸の跡がヒリヒリと疼きます。線香と艾の灼けた臭いの他に排泄物の臭いが交じって、部屋中が臭気と煙で充満します。

それでも苦痛を分け合った満足感でお互いが灸痕を口づけし合い相手のお臀や肛門をお互いに舌でふき清め、長く長く抱擁し合うのです。これ以上に、お互いの体の秘密を曝け出すことも出来ないでしょうし、愛情をこれ以上、確かめ合うことも出来ないでしょう。

小夜子の体にも、そして私の体にも、いくつかの灸痕が、愛情の烙印として残っています。恐らく小夜子が初めて私の手で腰や臀に艾をおかれた当時、泣き叫んで堪えることの出来なかった熱さは、もう彼女にとっては日常茶飯事の熱さになっています。

この次に私達が計画していることは、一つは、もう艾を使わないで、線香の火を直接、肌に当ててみることです。ある時、試みに私が小夜子の腰に一寸、当ててみましたが、十円銅貨大のお灸でも辛抱する彼女が、直接の火には、飛び上がって熱がりました。

もう一つは誌面に書くことを憚りますが、少なくとも小夜子は、私の肛門と、その他の一カ所に直接、艾をおいて灸をすえたがっています。しかし私はまだ、自分でその勇気がありませんし、私も小夜子に対しては、彼女の美しい肛門にやいとを据えるという気は起こりません。まして、もう一個所の処には尚更のことです。ただ、肛門と、局所との間の『アリノトワタリ』という処に灸を据えれば婦人病や冷え症に効くと云われていますのでこの間、小夜子にその話をしますと、彼女は「もう試してみたわよ。熱かったわ。小豆位の大きさのでも飛び上がったわ」と云っていましたが、そこがその程度であれば肛門へ直接のやいとも、その程度かも知れません。

何はともあれ、このような数年間で小夜子は小夜子なりに益々美しく豊艶になってきました。これが果して『やいと』の魅力によるものかどうか分かりませんが、これからもこのような苦痛と快楽の分かち合いが続くことでしょう。　（完）

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

カット・伊達 忍



――連載・奴隷妻小説――

命預けます

――四の章 飼育生活実技――

柴 利好

13 愉しい飼育生活

一カ月経ったある日。浩介は再び新吉に招かれて、公然と彼の家に出掛ける機会に恵まれた。そう度々はあるまいと思われた相手からの招待に、浩介の心は、いやが上にも弾みに弾んだ。あの前回の秘かな訪問以来、柱に固く縛られた春子の肉体の、幻妙な魅力に虜われてしまっていた浩介は、走るようにして新吉宅にやって来た。

出迎えたのは主人ではなく、妻の春子であった。彼が初めてこの家を訪れた時の夜と同じブラウスにスラックスという軽装の彼女は薄化粧のせいか、随分、若やいで見えた。スラックス姿なので、太めのベルトで締めつけられた彼女の極端に細い胴が、痛い程、浩介の目に映る。

彼女は、前回の彼の訪問を主人には内緒にしている事を耳元でささやくと、急に改まった口調で、

「まあ！　ようこそ、お越し下さいました。どうぞ、お上がりなさいませ」

と、声高に、浩介を招じ入れると、

「あなた！　お見えになりましたよ」

と浮き浮きと庭に向かって呼び掛ける。裏の方で何かしていたらしい新吉も直ぐさま顔を出して、これ亦、待ち兼ねた様子で、

「やあやあ。本日は、どうも。さあ、どうぞお寛ぎ下さい」

と、気さくな態度で話し掛ける。

「今日はねえ、家内と相談しまして、二人して昔話を交えながら、プレイの実演をして、

ご覧に入れようと思って、お越し願ったんです」

「願ってもない事です。それで、奥さんは今なんでもない時間という訳ですね?」

「これは恐れ入りましたね。おっしゃる通り奴隷時間じゃありません。それに今の処、特別仕置する罪もありませんから、いわば自由妻とでもいいましょうか」

二人の会話の最中に、茶道具を持って来た春子に向かって、

「さあて、お前もここに坐れよ。ご一緒して色々聞いて戴こうじゃないか」

「はい。……あのう、お客様には、ご迷惑かも分かりませんけれど、お聞き戴きたい事が山程ありますのよ」

と春子は真顔で答える。新吉は、

「妙なものですねえ。夫婦限りの秘事ともいえる事柄を、内緒にしないで、本当に話の分かる方に理解して欲しい気持なんです。変わった夫婦とお笑いになるでしょうが、これが私達の本心なんです。——こんな気持になった、きっかけは何だったたっけなあ」

と、見やる夫の声に応じて、春子は

「あの古い行李を片付けた時からですわ」

と晴れやかに答えてから、浩介に向かい

「私が、流れ歩いていた時分から持っていた小さな柳行李がありますの。随分ボロボロになってしまったので、今しがた、主人に裏で焼いてもらっていた処なんです。その行李の中に想い出になる物が幾つか納まっていました。それを見ていると、色々な事が思い起こされて来ます。私にとって、それはそれは辛い思い出ばかりなんですけれど、今になって見れば、懐かしく思われてなりません。今迄にもその品々を一つ一つ手に取って見ながら何度となく主人と一緒に、随分、楽しい時間を過ごしたものですわ。それで先日、行李を始末する事を決めた時に、いっその事、野口様に昔話をお聞かせしたらって、主人がいい出してくれましたので、ついその気になって甘えてしまったんです」

と、さも嬉しそうに話す。

「そうでしたか。有難とう! 何の因縁もないぼくを、そんなにまで信頼して下さるとは感謝の外はありません。是非、聞かせて下さい。それに、プレイの実演とやらも見せて戴けるなんて、願ってもない幸運です」

という浩介に、夫婦は交々話し続ける。

「私達二人が新宿で結ばれた経緯は前にもお話しましたが、突然、此奴が裸で縛られて押入れから引き出された時は、正直驚きましたよ。お前あの時、あんな風にされて何年目だったっけ?」

「かれこれ三年だったかしら。でも私、感心しましたわ。あの時の貴方ったら、すぐに私達の芝居を見破ってしまったんですもの。若いお客様の中には、女の責め場を見せると、慄え上がって逃げてしまう方もありましたのに。それから芝居を見破られた時、私、てっきり貴方に撲たれると覚悟しましたのよ。それなのに貴方は、落ち着いて静かにお帰りになったわ。優しい言葉を言い残して……」

と、頼もしそうに主人を見守る春子。

「でも、よくも縛られ続けていられたもんですねえ。ところで、その時の縄の達人は、未だ健在なんですか?」

と浩介が口を挟む。新吉は、

「さあ、どうしていますか、それは分かりません。やかましい無粋な法律が出来たりしてあちらの様子も、すっかり、変わりましたしね。いずれにせよ、あの時のままでは、やって行けない事は相違ありますまいが……実は私が此奴を縛るようになってから、三、四回あの人に捕縄術の手解きを受けた事があるんです。昔の警察は今と違って、手錠を掛ける

よりも捕縄の方が重視されていましたから、あの人も随分、沢山の人間を縛った事でしょうねえ。私が教わった時の、縛られる相手は勿論、春子です。場所は、あの家の例の奥の一間でした。此奴ときたら素人の普通の縛り方では、どだい満足しないんだから始末におえませんや。それから二人して随分、研究しました。私も、ああでもない、こうでもないと文句をいわれながら、それでも結構、縄捌きは上手になった心算です。それというのも二人が心から愛し合っているからだと思いますよ」

と自讃する。

「そうですわ！　貴方のお蔭で美事なお縄を受けて、立派な奴隷妻に仕上げて戴けたのですもの、本当に私は幸せ……」

と、春子は感に堪えない風情である。

「当時はアパート一間の暮しなので、プレイには随分、苦労しました。只、普通に縛り上げただけでは到底、此奴が満足してくれません。室の中には柱も梁もありませんので、此奴の望み通り色々してやれないんです。収入の少ない我々には引っ越そうにも金はありません。そこで、その辺の安宿を利用したり、懇意にしている人の倉庫とか、裏庭なんかを借りた事もありましたっけ。それでも、春子の方の慾望が段々進んで行くのが私にも分かりましたし、なんとかしなければと焦りました。此奴も劇場の売店に勤めたりして稼いでくれましたが、たかが知れています。その内に私が雑誌社に応募した漫画が運良く入選して、小さな週刊誌に載るようになってからは幾らか纏ったものが入るようになり、それやこれやで、漸くこの家に引っ越せた訳です。勿論、借家ですが、なんといっても一戸建ての我が家です。ここに越せた時は、本当に嬉しかったなあ、お前」

その言葉に、春子は大きく頷いて微笑む。

「プレイは良いとして、お風呂なんかどうされましたか？　アパート住いの時なんか、縄の跡が肌に残ってお困りだったでしょうに」

と浩介が尋ねると、

「全くその通りです。しょっちゅう縛り通しですから、此奴の身体中、至る処、縄の跡だらけで、消える暇もありゃしません。それでも風呂は欠かせません。時には楽屋風呂を借りたり、態々電車で二駅先の銭湯まで行かせた事もありました」

「そうなんですよ。私、初めはお風呂屋さんに行くのが辱かしくて辛うございました。落ちる処まで落ちた身ですけど、矢張り人の子です。場所によって、時によって羞恥心も起こりますわ。それでも顔見知りの人に見られないだけでも、遠くのお風呂の方が、まだしもでした。それも終まいには、この私の身体に残ったお縄の跡が主人から受けた愛情の記念の一つだと信じるようになってからは、その肌色の変わった深い締め跡を却って誇りに思うようにさえなったのです。これは、私自身が、そこまで成長したんだと思っておりますわ」

と確信あり気に、いい切る春子。

「成程。そうもいえますねえ。少なくとも他人にはない愛情の表現を、満足して身を以て受け止めている訳ですから、それは自慢しても良い事ですよね、奥さん」

と浩介も、釣り込まれて行く。

「ここに来てからは、横手に小屋を作って、風呂桶を据えましたので、そうした苦労もなくなりましたが……さあ、それじゃあ、一回り我が家の、ご案内をさせて戴きますかな。春子は、お縛りの準備をしなさい」

といって新吉が腰を上げた。

この家の構造の概略は、玄関と台所とが北向きで、二間続きの座敷が南向きになってい

た。即ち半畳ずつのタタキと板の間から成る一坪の玄関を上がった奥が六畳の座敷で、それには一間の床の間と押入れがついている。玄関の向かって右側（西側）は、トイレである。六畳の東隣が四畳半の奥の間で、その中央に掘り炬燵があり、南隅に半間の押入れ。これら二つの座敷に南面して三尺巾で、長さ二間半の廊下。廊下の西端が、半間の押入れである。六畳間の北が三畳の台所になっていて、そこへは玄関からも、奥の四畳半からも通じる。

以上が従来からある、この家の造作で、これに台所の東側に接して、三畳余りの小屋が彼等夫婦によって増築された。そこが風呂場からの台所への通路である。

ところで、春子が奴隷妻として折檻される仕置場は、この狭い家の全ての場所が利用された。新吉の説明によると、掘り炬燵と廊下東端の押入れは、前にも出て来た通り、牢屋として最適であった。二つの座敷が廊下に接した部屋境に三寸角の柱が在り、更に六畳と玄関と台所とが接する三者の交点にも同様の柱が立っている。これらは、その柱に関連する唐紙や戸、障子を開放する事によって、たちどころに独立した柱が得られるのであった浩介が二度目に訪れた時、春子が縛りつけられていたのは後者、即ち、玄関脇の部屋境の柱であった。

二つの座敷境の廊下に接して立てられた柱と対立するかのように、縁側にも一本、独立柱がある。これは縁側に、東と西から閉め寄せる雨戸の止めの役目をしていた。しかも、この廊下を挟んで相対立する柱の天井近くに一本の丸太が渡されていた。この丸太は昔から在った物だそうだが、当時、なんの目的で取り付けられたのか分からない。けれども彼等二人にとっては、絶好の吊るし梁の役目を果たした。

新たに増築された小屋の表向きは、一応、風呂場ではあるが、そこには風呂場としては無用の柱が一本その中央近くに立ててある。しかも、その柱の上部には、立柱と十字に交じわる腕木が取り付けられ小屋の東西の壁面まで届いている。説明するまでもなく、これらは磔刑用として新規に拵えたものである。

14　第一課は梁吊るし

ひとわたり家中の様子を見終わった時、

「そろそろ準備も出来たでしょうから」

と新吉に促されて、浩介が六畳の座敷に入ってみると、春子は既に全ての衣類を脱ぎ去って、床の間の前に正座していた。普通なら一糸纒わぬ全裸というところだが、彼女の場合には、そうはいえない。例の胴鎖が固くウエストに嵌め込れているのだから。

床の間には、日常、二人が使い慣れた品々……頸や手、足の枷に使う革環の類。鉄鎖。しなやかな革ベルト。数束の綿縄などが整然と置かれ、お縛りの用意完了を告げている。

新吉は先ず口を切って、

「最初の実技ですから、奴隷時間とは、しません。春子に自由にしゃべらせるためです。今日は、縛りの基本型から、お目に掛ける心算ですが……我々は良いとして、ご覧になる野口さんが残酷に感じられない方が良いと思いますので、余り酷い折檻も致しますまい。だが、お前は、どうだい？　いつものように奴隷として本格的な折檻の方が良いかね？」

と一応、尋ねると、春子は、

「はい。貴方のなさる事でしたら、私はどのようにされようと厭いません。けれど、ご質問にお答えしなければなりませんでしょう？　ですから、お仕置一度のお縄ぐらいから始めては如何でしょうかしら」

と真顔で答える。
「よし、分かった。それで行く事にしよう」
と新吉が同意して、綿縄の一束をほぐしに掛かるのと、春子が後ろ手に両手を回わすのとが、殆ど同時だった。
飼い慣らされたという言葉がピッタリ当て嵌まるその場の光景に、浩介は、すっかり上気して固唾を飲む。
春子は後ろ手に両手を回すと、グッと胸を張り、ヒップを引いて、正座の姿勢を正してから、静かに、うなだれ
「お縄を頂戴致します」
といいざま、両の瞼を閉じた。
「今のこのポーズが一つの儀式なんです。奴隷時間に這入る時や、お仕置に掛けられる時にも、この形式から這入る事にしています」
と新吉は重々しい口調で説明して、一筋の綿縄の中央辺りを口に咬える。やがて腰骨の辺に合わせて組んでいる両手首を、背中の上の方まで引き上げて組み直すと見るや、アッという間の早業で、ロープが生き物のように彼女の交叉させた手首に搦みつき、更に背後から首筋を分けて、引き絞った首縄となって胸元に回される。続いて二の腕もろ共、乳房の上下に当たる処を、二巻きずつ厳重に巻き締めてから、もう一度、手首を縛った元の場所に縄尻を戻して、固く縛り合わせてしまった。
「どうぞ、この縄尻をお持ち下さい」
尚二米近くも余っている、二筋の縄尻を持たされた浩介に、新吉は
「引き回しをしてみましょう。廊下から隣の部屋に回って、台所を通って、ここに戻って来て下さい。途中で縄尻を時々引いて調子を取りながら、背中をコヅイてやるんですよ。若し、いう事を聞かなかったら、縄尻で尻をビシビシやって下さい」
と伝授する。何しろ浩介には、こんな事は初めての経験なので戸惑いながら、それでも一生懸命に、新吉のいいつけ通り、女の縄尻を握りしめて、引っ張る。これを合図に春子は、素直に立ち上がって、わざと、ヨロケた調子で歩き始めた。彼女にとっては、慣れ切った事なので、どうという事のない引き回しであっても、浩介には最初のことで、縄尻を握りしめた掌が汗で、びっしょりになった。それでも、いわれたように、やっとの思いでひと回りして戻って来ると、新吉は
「おい、牝奴隷！　お手間をとらせたんじゃあ、あるまいな。どうだ？　素直に、お引き回しを受けたか？」
と高飛車に出る。春子は、
「はい。有り難く、お引き回しをお受けして参りました。お慈悲の程、身に染みましてございます」
と古風に答える。
「それは、よかった。その褒美に、これから今日のお仕置の第一課として、梁吊るしの刑に処するから、覚悟せい！」
と声を励ます新吉に、
「有り難い仕合わせにございます。喜んで梁吊るしの刑をお受け致します」
と、春子は飽くまでも従順な風で、首を垂れる。新吉は浩介に、
「このまま風呂場へ引いて行きましょう。そうだ。今日は一つ、鞭をサービスするかな」
というと、床の間から一本の使い古した革ベルトを取り上げる。
三人が連れだって降りた、台所から一段下がった風呂場は、風呂桶の前の洗い場の簀の子まで行く間が、板敷きになっているから、履物の必要はない。新吉は、やおら浩介から縄尻を受け取ると、その縄を十字柱の片方の腕木に掛けて、グイグイ引き始めた。
「そこにある小さい腰掛を、此奴の下に置い

て下さい」

新吉にいわれるまま、浩介が風呂用の腰掛を春子の足元に置くと、彼女も心得たものでその上に乗って、ヨロケないように注意深く調子を取りながら、出来るだけ身体を上に浮かすように爪先立った。新吉は、引き絞った縄尻が少し短かったので、腕木に掛けて二巻きしただけで固定してしまった。それでも十分に引き絞られたロープはピーンと緊張して縄止めしてある春子の後ろ手の交点の辺りはそこにだけ全体重が掛かっているため、縛り目に隙間が出来た位に厳しく吊られている。

「足の方も縛ってやりましょう」

そういうと新吉は、その場に前々から置いてあった別の細引を取ると春子の臍の辺りを先ず力一杯、絞り上げてから、その縄を次第に締め下ろし、下腹、太腿、膝下、足首と順次二巻きずつ手慣れた縄捌きで縛り上げた。

「台を蹴れ！」

との命令一下。春子は何の躊躇もなく、半吊るしの姿勢から、両足を少し浮かし加減にして、腰掛を蹴った。

下の支えを失った彼女の全身の重みが、吊るし縄と、それに連結した上体の高手と小手の縄目に掛かったから堪まらない。彼女の二の腕から乳房の上下に、縄がググッと痛々しいまでに喰い込んでしまった。この皮肉に喰い込んだ捕縄の伸びで、春子の身体は腰掛の高さ程、下にずり下がりはしたが、彼女が、あらかじめ心得て精一杯、爪先立って構えていたので、こうして完全に宙吊りになっても両足先は下まで届かず、それでも殆どスレスレの所で止まっている。

それにしても、固く歯を喰い縛って宙吊りの苦しさに堪える女の表情は、悲惨そのものであった。全裸で、本当に縛り吊るされた女の肢体を、こんなに目近く見たのは、勿論、浩介にとって初めての事であった。しかも浩介自身が、その責め手の一人として一役、買っているのである。それは支え綱を使っての舞台上での演技とは全く似ても似つかぬ、想像を絶した迫力で彼に迫った。

「素晴しい！　なんて素晴しいんだろう」

浩介は思わず嘆声を洩らしてしまってからも、後ろ手縛りのまま宙吊りにされて、やや前傾姿勢を保って、ぶら下がった春子の姿を殆ど瞬きも忘れて眺め入った。

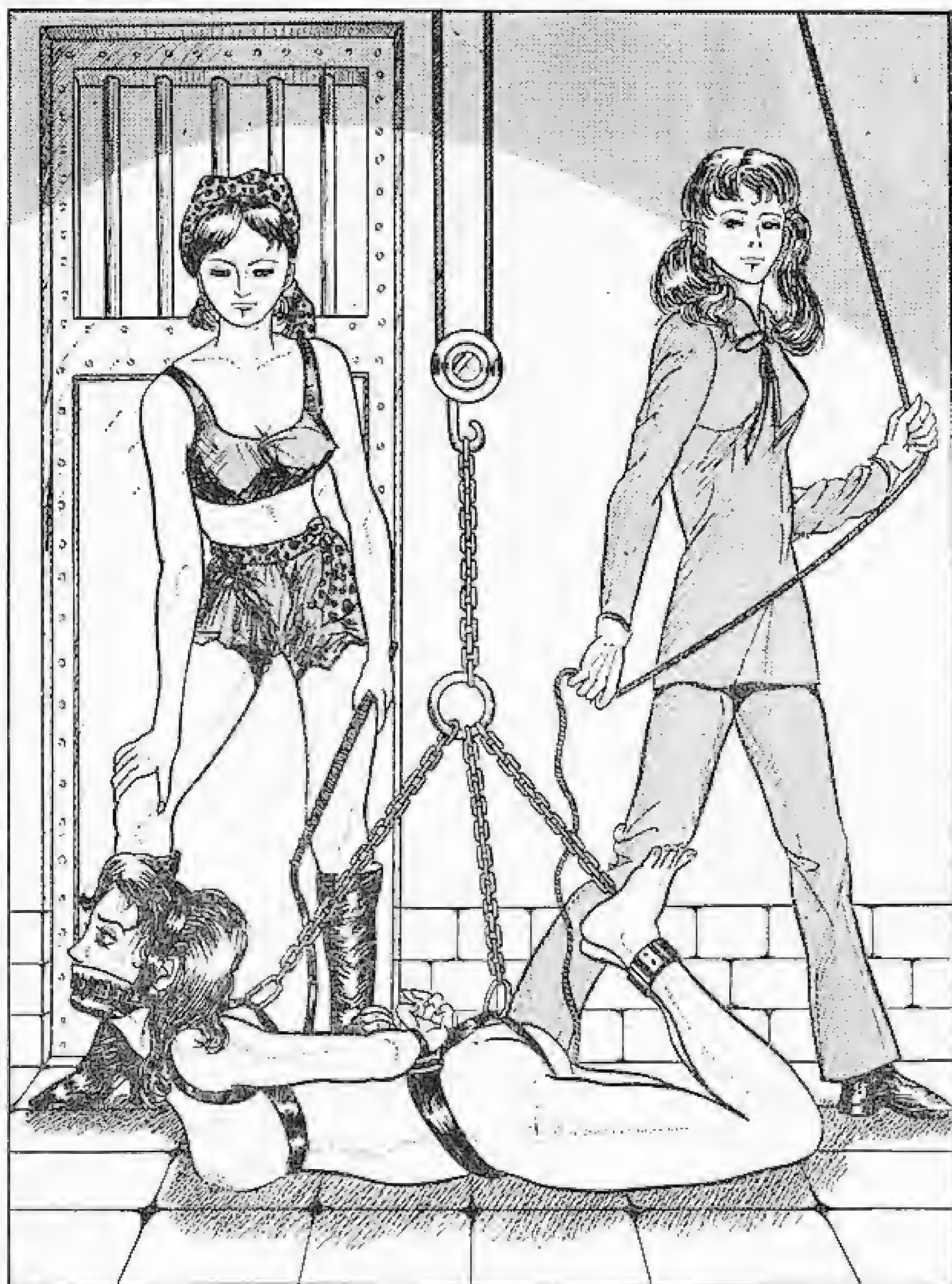
突然「ビシッ！」という鞭打の響きに、漸く我に返った浩介であった。

新吉は、革ベルトを二度、三度と、立て続けに春子の肉厚の臀部目掛けて打ち降ろす。

それにつれて、彼女の身体はグルリグルリと、虚空に緩やかに回転する。やがて彼女の髪の奥から脂汗が流れ出して、額や首筋に伝わり落ちる。胸元から両乳房、二の腕が高手縄のために極度に圧迫されて、血行が渋滞して来た。そのために、それ等の肌が桃色に変色して、そこから滲み出した脂汗が、ジットリと光り始める。鞭打たれた臀部は、赤い鞭跡が幾筋かの斜線になって残り、しばらくすると腫れ上がって来て、滲み出た汗の玉が伝わり、太腿まで濡らしている。

この光景を眺めた時の浩介の状態は、あの浅草で夢中になった、残酷ショーの時とは、まるで較べ物にならなかった。口の中はカラカラに乾いて、動悸が我と我が耳に、はっきり数えられた。若し、その時、鏡を覗いたなら、彼はその鏡の中に、真赤に充血して吊り上がった自分の目差しを発見しただろう。

この宙吊りが、どれぐらい続いたのか浩介には皆目、分からなかった。やがて踏台が直され女の縛しめが足の方から解き放されると腕木に吊るされた細引も解かれた。春子は流石に慣れたもので、誰の手助けも借りず自力で踏台から降り、そのまま板の間に、じっと



イメージギャラリー　『責めのある青春』　飯田ひろくに

押し黙って佇みながら次の命令を待つ風情。それでも肩で大きく息を弾ませているのは、吊るされていた間中の胸の圧迫のため、存分に呼吸出来なかった、せいでもあろう。

「さあ、これで吊るし責めの基本は終わりましたから、一先ず部屋に戻りましょう。吊るし時間は、たかだか五分足らずでしたから、奴隷にとっては楽なもんですよ」

と、新吉に声を掛けられて、はじめて我に返った程、この責めの第一課は浩介にとって大変なショックだった。

新吉は、相変わらず上体を縛られたままでいる春子の縄尻を取ると、自分で引きながら部屋に戻って来た。が、その後ろから、フラフラと腑抜けのようになって従う浩介の様子を面白そうに見ながら

「如何でしたか？　全く女の責めは楽しいもんですねえ」

と新吉自身も讃美を惜しまないのだ。

春子はといえば、後ろ手に縛られ放しで、畳の上に裸身を引き据えられているのだが、その腕にも胸にも、ギリギリに縄目が深く喰い込んでいるにも拘らず、さして苦しそうな素振りも見せず、じっと押し黙っている。

浩介は、それを見ると、彼女も矢張り苦しいに相違ないと思って、急にこの女が可哀想になって来た。それで、

「奥さん！　さぞ苦しかったでしょう。胸のところが、こんなに縄が喰い込んで、肌がすっかり赤く染まってますよ。こんな酷い目に合わせて、申し訳ない事をしました」

と謝るのを、春子は遮るように、

「いいえ。何をおっしゃいますの。申し訳な

いのは私の方ですわ。私、こんな風にされるのが好きな女なんです。今の様にして、お縄を受けて、吊るされたりしますと、身体の方はいうに及びませんが、精神的にも、なんともいえない気になって、酔ったようになってしまって、それは、もう堪まらないんです。決して嘘ではありませんのよ。こうした異常な生活をお目に掛けたために、貴方様の正常なお気持を、お騒がせしてしまって、私は本当に罪深い女だと思っています」

といって夫を見上げると、

「ねえ、貴方！　私って悪い女ですわねえ。この悪い女を懲らしめるために、これから本当のお仕置をして下さいませんこと？」

と、尚も折檻の継続を夫に迫る春子の様子に、一層、驚かされた浩介であった。

15 金網籠の雌鳥

「そうだなあ。今日のお前は、良くやった。美しさも上々だった。だから、そんなお前をこれ以上、折檻する理由はない訳だが、良い成績だったので、褒美に今少し特別のお慈悲を加えてやるとしようかねえ」

という新吉の言葉に、

「有り難い仕合わせでございます。ご主人様！　お情深いそのお言葉。奴隷は身に染みて嬉しゅうございます」

と、これもマゾに陶酔した奴隷妻の儀式の一つなのだろうか。春子は、まるで罪人かなんぞのように頭を低く垂れて、顔を畳に押しつけんばかりに、ひれ伏した。背中に組んで縛られた両手は、血行が停滞しているせいか肌色が赤く変色して来ている。

やや顔を仰向け加減にした春子は、上目づかいに夫を見上げると、

「私、これからどうされますの？　次は、どんなお仕置をして下さいますの？」

と、次第に昂奮の度を増し、今までの淑かな良妻から、漸次、真性奴隷妻として変貌し始めて来た。新吉は一寸、考えていたが、

「おい、こら！　お客様の前だというのに、そんなに取り乱して、なんてざまだ。はしたないとは思わんか。俺に恥をかかせる心算か？」

芝居にしては、いささか真に迫った調子で叱りつけた彼は、縄尻を浩介に渡すと、

「一寸の間、この牝奴を捕えていて下さい。ご覧のように、奴隷の奴も大分、気が乗って来ているようですから、続けて今一責めしてお目に掛けましょう。一口に責め折檻といっても、色々ありましてねえ。見た目に派手なさっきの吊るし鞭打ちのようなものもありますが、一方では静かな緩くしたものもあるんですよ。これから、その典型的な責めを、ご覧に入れます」

そういって、廊下の押入れ牢の上段から持ち出して来たのは、金網で作られた、方形の一つの籠状のものであった。

「これは、どこにでもある襁褓干しの金網です。それを少し改造して、奴隷のサイズに合わせ、網底を取りつけた物に過ぎません。これからこの中に、此奴を縛ったなりで詰め込んでやりましょう。結構、面白いですよ」

といいながら、その金網の口を開ける。続いて彼は、春子の上体を縛って尚、余っている縄尻で、彼女の正座している足首と太腿とを一緒にして、固く縛り合わせた。それから軽々と春子を抱き上げて、その金網の中に入れ、背中を丸めて坐らせると、頭も深く曲げさせ、グイグイと身体全体を上から押しつけ押し込み、完全に彼女を詰め込んでから、金網の口を閉め、止め金でシッカリと閉じてしまった。

「相済みませんが、もう一度、手を貸して下

さいませんか。この鳥籠を、このまま置いておくのは勿体ない。高く吊るしてやりましょう。全く今日は吊るしが多いなあ！」
　自分で自分の言葉に合点しながら新吉は、床の間にあった鎖を一本、取ると、廊下の天井近くに渡された、例の丸太の高梁に掛け、
「さあ、お願いします」
　と浩介の手を借りて、金網籠を廊下に運び出し、その鎖に吊り下げてしまった。これが本当の鳥籠だったら、籠の中で小鳥は多少の羽撃き位は出来る筈だが、襁褓干しのこの鳥籠は、特に春子の身体に合わせて作られている上に、荷物のように、手も足も縛られて詰め込まれている彼女は、全く身動き一つ、出来ない。それどころか、金網の網目の間から至る処、彼女の皮肉が、プリプリと外側に、はみ出している酷たらしさなのだ。
　新吉が、その宙吊り籠の一端をグイと押してやると、鳥籠は緩やかに回転して、一旦鎖の捩りの限界まで廻り切ると、その反動で反対に廻り始める。その光景は如何にプレイとはいっても残酷そのもので、浩介にとってはこの刺戟は余りにも強過ぎたようだった。
「これは酷い！　もうその位で……。僕はもう、とても見ていられなくなりました」
　と、浩介が嘆願するように新吉に呼び掛けると、新吉は真顔で軽く制してから、
「まあまあ。此処は任しといて下さい。これ位は毎度のプレイで慣れっこなんです。決して、ご心配には及びません。貴方が今日お見えにならなくても、この程度の事は当然やってました。いいえ、もっと荒っぽい折檻をしていたかも知れません。今では春子の被虐嗜好が、それ程に進行していて、自分から、もっと虐めて欲しがる位になっているんですから。まあ、小鳥が鳥籠で一休みしている間に我々も休憩するとしましょうや。さっきから何だかんだとサービスし通しですから」
　硝子戸一枚で外界から遮られているだけの廊下の梁に、籠吊るしにした春子を振り返ろうともせず新吉は、浩介を促して室内に戻った。それから先ず、座布団をすすめ、煙草を一服、さも旨そうに、くゆらしてから、おもむろに話し始めた。
　その話の内容は、新吉が折に触れて春子から聞き出した、彼女が彼と結婚する以前の履歴についてであった。それは先達て、浩介が単独で春子の口から聞いた告白と、ほぼ同じ内容である。春子の告白が、果たしてどれ程真実性のあるものかどうかは、それを証拠立てる手段も反対する材料もない。しかし一般に、思い出とは美しいものであり、殊に彼女のような被虐性の強い女性にとっては、自分の過去を一層、傷ましく悲惨なものとして追懐し、その追憶に陶酔し勝ちである事は容易に頷ける。それ故、彼女の一方的な話の内容が尚更、何処までが真実なのか判断し難い。
　まして、前にも触れたように、彼女が内地帰還後から新吉に邂逅するまでの数年間は、全く空白のまま残されている。しかし今更それを仔細に詮索する必要も、重要性もあるまいと思う。只、此処で判然といえる事は、今現に籠吊りの責め苦に喘ぐ春子なる一人の女性が、これまでの短い半生を通じて、その殆どを日蔭で送っていた事。そしてその間、緊縛を主体とした様々な虐待に只管、耐え抜いて来たという事である。もっと重要な事は、その結果、遂に彼女は、緊縛生活の中に彼女自身の生き甲斐を見出した程の、被虐愛好者に変身し、昇華したという事実なのである。
　一通り、妻の経歴を話し終わった新吉は、傍の小机の上にある置時計を覗いて見て、
「おや、もうこんな時間か。二時間近く経ったんですねえ。そろそろ、降ろしてやりますか」

といいながら、やおら立ち上がり、既に早くから回転の運動を停止して、吊り下がったままの篭に近づくと、
「どうだ、具合は。降ろそうか？　それとももっと続けて吊るされていたいか？」
と優しく妻に尋ねた。
篭の中で、縛られた身体を丸めたまま、それまで声一つ出さないでいた春子は、決して気を失っていたのでも、寝入っていた訳でもなかった。夫のこの一声を即座に受けて
「貴方のお慈悲にお任せした身体です。それに今日は、とても気分が良くて、まだまだ辛抱、出来そうです。お客様にも充分、ご納得の行くまで責められとうございます」
と小声だが、判然とした調子で、健気に答えたのであった。
「そうか、よく分かった。でも野口さんが大変ご心配の様子だから、一先ず、これで許す事にするよ。いいね」
「はい。有り難うございます。こんなに早くお許し戴けるとは思っていませんでしたわ」
という春子の声を聞きながら、新吉は早速篭を降ろしに掛かったので、浩介も直ぐさま手助けする。
先ず篭を廊下に降ろしてから、針金の止め具を外すと、春子の身体を篭から引き出す作業が大変だった。何しろ長いこと篭詰めにあっていたので、肉団子のように丸まった彼女の身体の方々が、金網の編目の間に深く、めり込むように喰い入ってしまっているので、無雑作には扱えないのだ。彼女の身体を傷つけずに篭から出すためには、篭に取りつけた全ての止め具を外して、篭をバラバラにしなければならなかった。
漸く篭詰めの責め苦から解放された時、彼女の全身は真白く変色して浮腫んで見えた。それに反して、身体の外側の、篭に直接、接触した箇所には針金の型が、肌が切れたかと思われるばかりに真赤な亀甲状の線になって喰い入っている。それは丁度、焼けた金網の網目をつけられた切り餅の姿に似ていた。
新吉は休む暇なく、慣れた手つきで、上体や手足に絡んだ縛り縄の全てを解き外すと、春子を抱えて座敷に運び入れ、そのまま畳の上に仰向けに寝かせた。が完全に全身麻痺の状態にある彼女は、自力では身動き一つ出来ない。それでも首だけは、なんとか動かして目を見開くと、不安そうな面持ちで傍から覗き込んでいる浩介を認めて、僅かに微笑み掛けたけれども、言葉にはならなかった。
「野口さん！　これが我々の楽しみの一つでもあるんですよ」
と新吉はいって、春子の肌についた深い縄目の跡を一本、一本と仔細に調べながら、
「これを我々は、縄肌吟味と勝手に呼んでるんですが、こうして柔肌に刻みつけられた縛目の跡を調べて、あの時と較べて、どうだとか、こうだとか話し合うんです。それはそうとして、篭の針金跡も大分、酷いようですから、少し身体を揉みほぐしてやりましょう。それに時間も長かったせいか、麻痺の具合もすこし酷いようですから」
新吉は説明口調で、そういって、春子の全身を上手に揉み始めた。その時、漸く幾らかずつ肌に赤味が戻って、神経が通い出した矢先だったらしく、春子は
「アアッ！　ウワッウワッ！　ヒィエッ！」
と、なんともいえない動物的叫び声を上げながら、まるで電気に掛かったように、ブルブルと身体中を痙攣さすのであった。
少時の後、やっと起き上がった春子は、それでも直ぐ立ち直って居ずまいを正すだけの元気は未だ完全に恢復していないのだろう。グッタリ両手を畳についたなり、縄や針金の跡で彩られた身体を捩らせて横坐りの侭、肩

息を続けている。

「どうしたんだい、お前！　今日は調子が良い様な事をいってたくせに。普段に似合わず馬鹿にシュンとしてるじゃないか。さては野口さんの前だから、甘えてやがるんだな？」

と新吉が、からかうと、春子は、さも嬉しそうに聞いてから

「まあ貴方ったら！　非道いことおっしゃって。お憾みですわ！」

と主人を上眼づかいに睨む真似をしては、口元では微笑を浮かべている。彼女の満足気な様子に、浩介は漸く一安心の体で

「やあ参りました。お二人の仲の良さに降参です。僕も早くお嫁さんを貰わなくっちゃ」

といい乍ら、わざと感に堪えないおどけた身振りを見せたので、新吉も春子も、つい釣り込まれて笑ってしまったのであった。

16　蜂腰と胴鎖

初夏の訪れも間近い、その日は爽やかで、誠に気分の良い休日のひと時であった。だが硝子戸を閉め切った部屋の中とはいっても、全裸の女一人と二人の中年男とが、細引や鉄鎖を撒き散らかし、上気した面持ちでとぐろを巻いている光景を、若し他人が覗き見したら、嘸かし、びっくり仰天したに違いない。

浩介は、その家に出入りするようになってから、彼等夫婦が、近隣に殆ど無頓着で話しているらしい事。しかも、その家の中での異様な生活が、余りにも開放的である事が気掛かりであった。

「無躾ですが、この部屋も隣の部屋も、庭の方から、丸見えですけど、外から見られたり覗かれたりする心配はないんですか？　今の今だって、若しも誰かが庭から這入って来ないとも限らない筈ですが。それなのに、お二人共よくも平気でいられますねえ。カーテンを引くとかなんとかする必要はないんでしょうか。それとも、人眼に付いても一向、構わないというお考えなのでしょうか」

この浩介の質問に、新吉は笑い乍ら

「ごもっともです。が、その恐れは、まずありますまい。というのは、隣家は二軒、あるにはありますが、両方共いつも無人の納屋同然ですし、庭の方は未だご案内していまんが用水池の長い堤と小川とに二方が遮られていますから、人は近付けません。残りの一方は高い塀越しで、工場用地として、手付かずの宅地なんです。御用聞きなんか、こんな処に来る訳もありませんし、集金人も指定日以外は、この家が無人の事を承知しています。いわばこの家は、少なくとも今の処は全くの別天地で、我々にとっては絶好の地の利を得た住いといえるんです。反って、千に一つでも見付かりはしないかという心配が、ある種の刺戟になって、お互いの緊張感を高めているといえるかも知れませんねえ。そんな訳ですから、奴隷折檻も、わざとこの庭先でする事もあるんですよ。しかし、何か他の目的で、この庭迄侵入して来る奴があるとしたら、それは只事じゃあないですねえ」

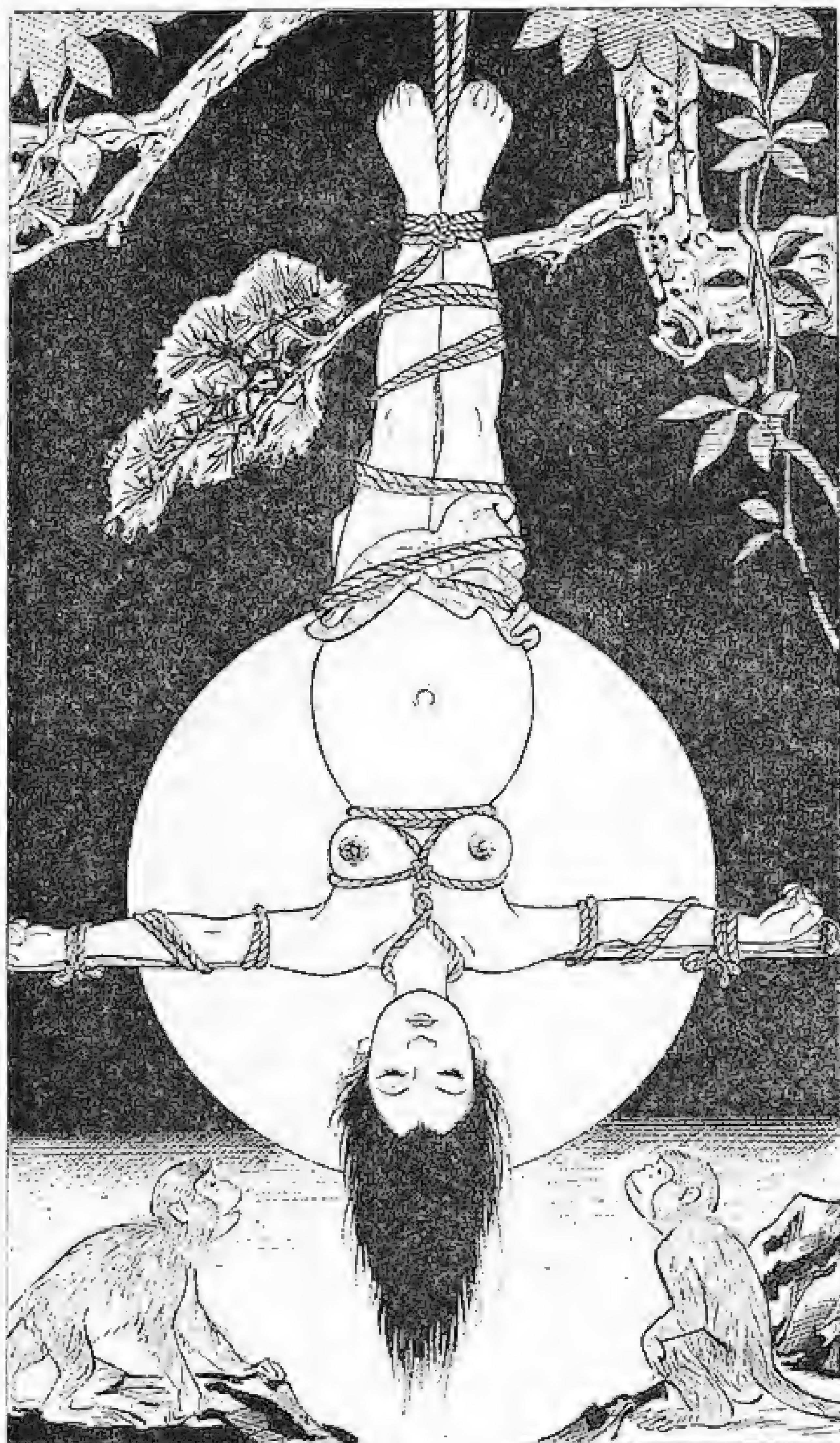
と念を押す新吉であった。その最後の言葉に、身に覚えのある浩介は、後めたい気持で黙って俯いた。

春子は逸早く浩介の心中を察したものか、その場を取り繕うかの様に、すかさず言葉を挟んだ。それも奴隷妻らしいオズオズした口調で口篭り乍ら

「貴方！　お仕置はこれ迄でございましょうか？　先程のお話の様子ですと、もっとお慈悲を加えて戴けるかと、存じておりました。それでは、何か着る物をお許し下さい」

と話題を外らす様に夫の意向を尋ねる。新吉は別に何も気に留めている様もなく

「そうだなあ。昼間の仕置はこれ位で止めよう。余り一ぺんに何も彼もでは、野口さんもお疲れになるだろうから。その代りお前は、お客様がお帰りになる迄その侭でおいで！　それがこちらの、ご贔屓様に対する一番のお勤めと思うんだ。分かったな」
と威厳を利かす。春子はホッとしたらしく
「はい、分かりました。それじゃあ、奴隷時間はお取りになりませんの?」
と尚も続けるのを、新吉は突き放す様に
「それは俺が決める事だ。お前の口出しする事じゃない。こうして野口さんが、わざわざ来て下さっているからこそ、お前にお相手させる為に口をきかせているだけなんだ。実質的には奴隷時間中の心算で勤めなければいけない。奴隷妻の宣誓の文句を、いつでも良く噛み締めていて呉れないと困るなあ」


イメージギャラリー　『満月と臨月』　岡　たかし

深刻そうな表情をして、春子を睨んだ新吉の眼は、引き歪めた顔付きとは裏腹に、愛妻を愛しむ情感に溢れていた。
もうその頃には、春子はすっかり元気を取り戻したらしく、二人の男を前にして、キチンと正座して全裸を晒していた。流石、若い頃からサーカスで徹底的に鍛えぬかれた彼女の肉体は、普通ならば一日や半日は、息絶え絶えの態たらくである筈の責め苦の直後だというのに、早くも立派に立ち直っている。
二人の話が途切れたのを機に浩介は、一膝乗り出して、質問の矛先を春子に向けた。
「奥さんは、サーカス生活を終戦の時迄なさったと伺いましたが、その時からでは、かれこれ十年余りになりますが。アクロの演技は今でもお出来になりますか?」
これに答えて春子は、やや得意気に、
「はい。そりゃあ全く昔通りとは参りませんけれど……。何しろもう三十に手が届きますもの、身体が段々固くなって来ておりますからねえ。それでも私は、あんなに苦しい思いをして仕込まれた演技を、全然棄ててしまうのが勿体ない様に思いました。それで、引き揚げてからも、アクロの基本運動だけは、自

分で努めて続けて来ました。一通りの事でしたら、今でもこなせますわ」

　と胸を張ってみせた。

「成る程。それだから奥さんは、こういっちゃあ何ですが、お年の割には身体の線が崩れていませんねえ。いやそれ処か、胸や腕や脚腰の筋肉が強く発達していて、関節部がしなやかなんですねえ。だからこそ、今の様に丸く身体を曲げたまま縛られて、篭に詰め込まれても辛抱出来る訳ですねえ」

　と、又しても感嘆する浩介に、新吉が、

「全くその通りです。春子にアクロの素地があればこそ、私達二人の悦虐プレイが、強度に、複雑に実行出来るんです。これが普通の女だったら、たとえ自分自身がどんなに折檻を望んだとしても、緊縛一つにしてもこう迄深い味わいは得られなかったでしょう。それに、さっきお話した通り、サーカスの団長と副団長の、これに対する特別の仕込み方が、一層、今日の被虐生活の役に立っている事はいう迄もありません」

「例の腰縄付きの生活の事ですね？」

　浩介は、春子の腰に依然として嵌め込まれた侭でいる胴鎖に眼をやると、この異様なウエスト・バンドに就て、質問した。

「奥さんの腰のベルトは、どういう性質の物なんですか？　何か特別なお仕置の為なのでしょうか？　兎に角、いつでも凄い喰い込み方で、腰を締めつけていますねえ」

　この胴鎖は、浩介が前々から注目し、機会があれば、それに就いて聞き出し度いと念願していたのであった。

　新吉は春子に代って

「いいえ、胴鎖はお仕置ではありません。私の妻に対する愛情の証（あかし）の一つなんです。逆にいえば春子にとっては、こんなにきつい胴鎖を辛抱して嵌め続けている事が、私に対する愛情の証になっている訳です。いわば奴隷妻の証とでもいうんでしょうか。そうだ！　この機会に、例の宝物を出してお眼に掛けたらどうなの？　胴鎖とは切っても切れない因縁がある代物だから」

　という新吉の提案に応じて、春子が早速その部屋の押入れから取り出した一品は、古ぼけた小さなパンティーだった。

　子供用のサイズよりもっと小型の、洗いさらした白いパンティーを見て浩介は

「それはまた随分小さいパンティーですね」

　と、やや呆れ顔で覗き込む様にするのを、

「実は、これは春子がサーカスに居た時分、いつも穿いていたキャルマタとかいう代物です。パンティーだなんてハイカラな物じゃありませんよ。今でこそパンティーといえば、随分小型で締まりの強い物が出回ってますがその時分は誰もが、例のダブダブのズロースしか穿いていませんでしたので、当時の物としたら珍しい物なんです。これを、ご覧下さい。この胴の処が、こんなに小さく締まる様に特別に工夫して拵えてあるんです」

　と浩介にそのキャルマタを見せ乍ら

「尤もゴムは前の物ではなくて、何回か取り替えましたが、随分キツク締め付けてあるでしょう。腿に当たる裾ゴムも強く締まる様に出来ていますから、これを穿くと太腿がそこから切れはしないかと思う程喰い込むんですよ。昔の物なので、今のパンティーみたいに腿のくりを深くくってありませんので、腰から尻全体がピッタリ包まれるような感じです他の女達には、穿けといってもキツクて穿けない、春子だけの特別製なんです」

　と、裾ゴムをひっぱって見せながら、

「先程お話した通り、団長とそのカミさんとが一風変わり者だったらしく、春子をむやみと縛りやがったんです。その縛りにしても事もあろうに胴に腰縄を巻き締めて全然、解い

て呉れなかったんだそうです。解くどころかその縄の締め付けを次第にきつくされた為に此奴の胴囲りが、段々小さくなって、遂々こんなズロースの化物みたいな物でなければ間に合わなくなってしまったんですねえ。今だって結構穿けますよ。今度、革とゴムを使って、それにチャックをあしらった新しい物を拵えてやる心算です。」

と、妻を見返って笑うと、尚も話を続ける新吉であった。

「私が新宿の店で馴染んでいた時分には、まだそうした事情を聞いていませんし、何も知らなかったのですが、何しろ春子の胴が並外れて細く括れているのに驚いていたものでした。春子は、サーカス時代の腰縄の習慣が身について、腰縄から解放されてからも、引き続いてウエストを力一杯締め付ける事が、無性に好きな女になってしまったのでした。ですから、私と一緒になってからで、縛り責めの時は勿論の事。普段でも素肌の胴をバンドや腰紐でギリギリに締め付け、それで息が出来るかと心配する位に細く絞り上げていました。それなのに本人は平気でいるんです。この胴鎖が出来る前に、太い針金を巻いていた事があったねえ。お前、覚えてるだろう！二巻きか三巻き針金を胴に巻いて、後ろでペンチで止めてしまうんです。グイグイ、ペンチを回すと、面白い様に細く締まるんです。しまいには針金と肌との間に、指一本挟めない位に締め上げた事も何回もあります。締め残った余りの針金を切断して、切り口で肌を痛めないように、丹念に鑢で仕上げしてやりました。こうしてしまえば、春子の力ではどんなに指先に力を入れても、絶対に外れっこありません。春子の奴と来たら、そんな風に緊め付ければ緊め付ける程機嫌が良いもんですから、身体の事など忘れて、私も夢中でペンチを回していました。どうかすると、巻かれた幾筋かの針金の間に肉が挟まって、挟まった皮膚が、内出血の為に赤紫色に染まって今にも血が滲み出そうになりました。そんな時は、流石の春子も、泣いて痛がったりしたものでした。それもその筈です。内出血で染まった腰肌の色合が完全に元通りに戻るのに二、三カ月も掛かった程酷い跡になって残りましたもの。胴鎖が出来てからは針金絞りはしなくなりました。腕や脚、乳房とかヒップなどの縛りには今でも針金を使っています。肌に喰い入った感じは、縄とは又違った味わいがあって、仲々良い物ですよ。針金の締めつけの後には、鉄鎖を使って胴締めを続けました。鎖というものは、一つ一つの環の具合が身体に微妙に作用します。鎖の種類によっては、腰肌に凸凹した跡ばかり残って、滑らかな感触がなくなるのが欠点です。ですから成るべく環の小さい物を選んで使う事にしました」

この時、春子が急に口を挟んで

「貴方！　針金の胴絞りを覚えてるだろうだなんて、暢気そうにおっしゃって！　忘れようにも忘れられる段じゃありませんわよ！野口様、聞いて下さいましよ……私、針金で胴縛りをされたなりで銭湯に行かされた事もあったんですのよ。だって、針金は私の力では絶対に外せないんですもの。あの時ばかりは本当に、泣き泣き参りましたわ。縄や鎖でいくら緊しく縛られても、そうした物を肌身に着けた侭でお風呂に行った事はありませんでした。必ず全部解いて戴いて、ええ勿論、方々に縛られた跡がついてはいましたけれどそれでも辛抱して、なんとか自分を励まして行っておりました。それが針金の胴絞りの侭の時だけは、私悲しくて悲しくて。幾らおいいつけにしても、余り酷過ぎますもの。本当に辛うございました。でも考えて見れば、

皆自業自得なんですわ。この事は、後々迄私達の話題になりましたけれど、その都度、私の、奴隷妻としてのご主人様に対する愛情の受け取り方が間違っていると叱られては、お仕置の口実にされたものですわ」

そういい乍ら頂垂れる春子の女らしい羞恥の表情が、狭い部屋の中一杯に匂う様であった。

新吉も往時を思い返すかの様に眼を細め、

「そんな事もあったかなあ。うん、そうだったねえ。それやこれやで結局、今の胴鎖を作る事になったんだったねえ。何時頃だったかなあ、胴鎖を作ったのは」

との新吉に答えて、春子は嬉々として

「忘れもしませんわ。此処に引越して来た時でしたわ。私達のお城が出来た記念に、とおっしゃって、貴方が作って下さったんですもの。――ご免なさい。度々貴方呼ばわりして申し訳ありません、気を付けます！」

と真面目顔で謝る奴隷妻振りなのである。

新吉は、それには別段、苦情をいわず、

「そうだったねえ……縄や革ベルトや鎖で締めていてもよかったんですが、いっその事、もっと奴隷妻意識を高める為に、終生、肉体から離れない腰枷を嵌めてしまおうという事になったんです。時計の製鎖工場で特別に誂えました。ご覧下さい。この後ろの所に所有者、牧山新吉と刻みつけてあります。これは昔、米国の白人奴隷の持主が奴隷女に嵌めた鎖の足環に、奴隷の持主である証拠として自分の名前を入れた話を本で読んだので、それを真似したんです」

「ふむ！　そうですか。それでは奥さんは、此処に来られてからずって今迄、これを嵌め切りで暮しておられるんですねえ」

と感心する浩介の言葉に、春子は誇らし気に声を弾ませて

「おっしゃる通りでございます。ご主人様のお許しがない限り、この胴鎖を外す事は出来ません。後ろの合わせ目の処が錠仕掛けになっていて、鍵が掛けてあります。鍵は何処に在るものやら、私、存じません。お尋ねしても決して教えては下さいますまい。そうじゃございません？」

と新吉を顧みてニッコリする。浩介の胴鎖追及は尚、続く。

「それにしても、よくも、そんなに胴を細く出来たものですねえ。そんなにきつく鎖を腰に嵌めて通して、苦しくはないんですか？」

「いきなり、こんな風に締めようたって、それは無理に決まってます。長い間、腰縄で縛られ通している間に自然と形が奇形に近く変わって、こんなに細くなっていればこそ辛抱出来る事ですわ。それも、全く苦しくないといえば嘘になりますわ。私だって人の子。苦しいに違いありません。けれど、苦しければ苦しいだけ、私には愉しさが募って来る変な性分なんです。今嵌めている物は普段用のサイズですから胴囲りの喰い込み方も比較的楽な方です。お仕置用の極小サイズのを嵌められると、それはそれは死ぬ程の苦しみです。一時間も嵌めていると、もう気が遠くなりますわ。それでこれ迄に何回失神したか覚えておりません。この普段用の方でしたら食べ物も自由に戴けますけど、お仕置用の方ときたら、水を一杯飲むのがやっとなんですのよ」

「恐れ入りました奥さん。くどい様ですが、胴鎖は嵌め切りですから、外出の時でもその侭の訳ですけど、ご近所とか他の人の眼に付くでしょうねえ。何せ、その胴の細さなんですから」

「でも、いつもは眼立たせようとは思っていませんから、成る可く上に着る物でごまかしています。反対に、特に他人様の眼に眼立たせたい時は別ですよ」

と、両手を腰に回して、さも楽しそうな身振りで答える春子であった。

「とすると、先達ての残酷ショーの最中でも嵌めた侭で出ていたんですね？」

「その通りですわ。この時はお腰を締めていましたから、お客様の方からは全然見えなかったでしょう。けれど、素肌にはチャンと奴隷妻の証をしっかりと嵌めておりました。そうですねえ。今の私には、この胴鎖は、まるで私の身体の一部といって良い位に馴染んでおりますから、若しこれを外されると反って身体がシャンと、しなくなる位ですわ。始終締め続けていると胴鎖も汚れますから、年に一度か二度は、ホンの短い間、外して手入れを致します。その時だけ、特別に外しても良いという、お許しが出ますのよ」

「成る程。サーカス時代の腰縄は、いつ頃外したんですか？」

「それは、はっきりとは覚えておりませんけれど、引揚列車に乗る前の晩迄は腰縄を縛られた侭で過ごしたと思います。腰縄はキャルマタと一緒に、私の大切な宝物の一つとして取ってありますわ。なんの変わりもない一本の綿ロープですけれど、汗や脂に汚れた時は洗わされました。汚れたロープを洗っている間は、別の腰縄で縛られていました。私には忘れられない苦しみの記念品として、未だに棄てられないでいるのです」

　聞き乍ら浩介の口から出るのは、只、春子の緊縛嗜好に対する驚嘆の溜息であった。

『俺は何というどえらい友達を持つ事になったもんだろう』

　事実、浩介がこれ迄に知り合った女の数は商売女を含めてそれ程少なくはなかったが、この中年になって、こんな女性に巡り会おうとは夢想もしない事だった。浩介自身にして見れば、生来嗜虐性向がそれ程強く深く潜在していたという自覚さえ無かったにも拘らず何故、この様に春子の肉体と、その肉体に加えられる折檻そのものに魅せられるのだろうか。これからの自分は、この春子という女無しでは済まされなくなって了うのではなかろうか。そんな想念が彼の脳裡に瞬時閃いた。

「他に、何かお聞きになりたい事はございません？」

　といった春子の澄んだ声音を耳にして、浩介は「ハッ！」と我れに帰って、気を取り直すと、急に居住いを正し

「いや。随分長い事、お邪魔してしまって。それに奥さんにはお疲れの処を愚問を発してご迷惑掛けてしまいました。今日はこの辺でお暇したいと思います。牧山さん！　奥さん！　本当に有り難うございました。機会があったら、又呼んで下さい」

　浩介が急いで立ち上がったのは、彼等夫婦に、自分の本心を見すかされはしないかという見栄も手伝っての事であった。

「まあ、まだお宜しいじゃありませんか。今晩こそ、本当に何か差し上げとうございますもの。ねえ貴方？」

　といって了ってから、出過ぎた事をいってしまったことに気付いたかの様に直ぐ様、自分の口を押えて主人の顔色を覗き見た春子は依然として裸の侭で、衣類着用を許されていないのであった。

　新吉は、春子の言葉を素直に受けて

「そうとも。本当に、そうして下さい」

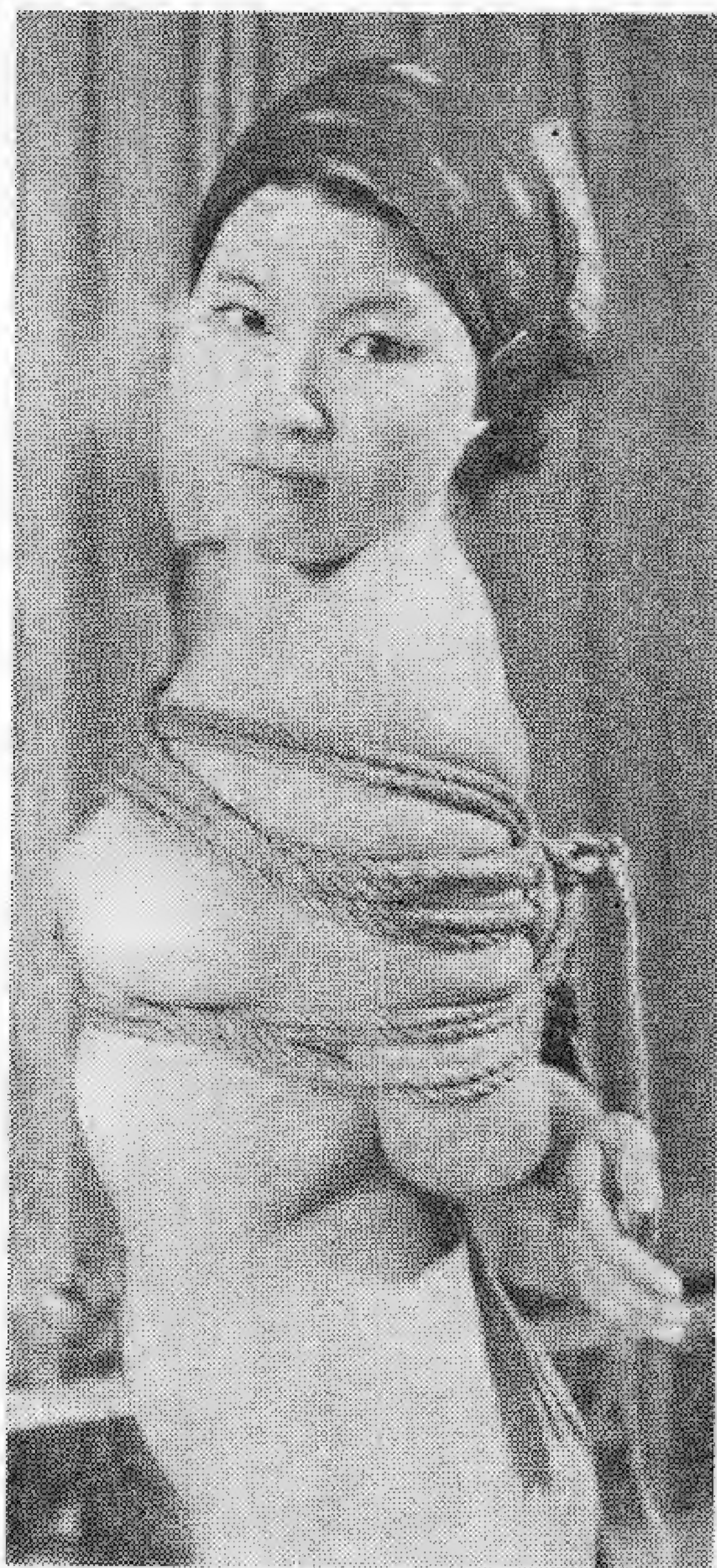
　と身を乗り出していう。

　万更お世辞だけとも思われない口調で、浩介を引き留める二人の言葉だったが、彼はそれを嬉しく聞き流して、潔く、この家を辞したのであった。しかし彼の心の底には、縛り縄で鍛えぬかれた春子の、輝くばかりに美しい裸身の悌が、何時迄も何時迄も灼き付いて消えないのであった。

（未完）

SMはメルヘンの世界

花田一郎



奇クの歴代モデルを眺め渡して、表情の激しいモデルと、ポーカー・フェイスのモデルとに大別してみる。表情の激しいモデルは、感受性が鋭く、ポーカー・フェイスのモデルは感受性が鈍いという解釈も可能である。

しかし、本当にそうであろうか？　感受性の鈍いモデルが、しげしげと誌面に、その姿を晒すであろうか？

サド・マゾの世界は、メルヘンの世界なのである。そのメルヘンの世界と、現実の世界とが、各モデルの内部に共存している。オーバーな表情は、そのモデルの内部で、現実の世界とメルヘンの世界とが遠く離れていて、引き裂かれた精神が現われたもの。そしてポーカー・フェイスのモデルの内部では、現実の世界とメルヘンの世界が隣り合っている。ポーカー・フェイスが、その証拠であるという、逆説は可能ではなかろうか？

現実の世界、すなわちメルヘンの世界といっていいポーカー・フェイスのモデル――彼女は愛する恋人の目を楽しませ、恋人が真剣に望むなら、ただそれだけの理由で、はりつけ台に登れる女、しかも、その内心を人に告白したりしない女ではないだろうか？

私が始めて奇クを知ったのは、池袋の隣の大塚駅の近くであった。ぬめぬめした白肌が農家用の荒縄で、無残に縛り上げられていた昭和二十年代であった。それから十年後、大塚啓子が誌面を飾ったのは、全くの偶然の一致であったが、今となっては大塚啓子は、少なくとも私にとって、大塚の海の泡から生まれたビーナスである。

十一月号の拙文『ふるーい奇ク』で、ヨーロッパの文豪のペンを借りて私は、おそらく奇クの歴史を通じて、いちばん激烈な鞭打ち

を、誌面の上で大塚啓子に浴びせた。

そのすさまじい末尾の描字から、読者は何回くらいの鞭打ちを想像されたであろうか？大塚啓子の受けた鞭打ちは、実に「九十回」だったのである。

読者は、鈴ケ森送りの大塚啓子も観察したくないだろうか？

メルヘンの世界が成立するためには、奉行を買収するだけの財力が必要である。それが解決しても、次の問題は、ひとりの女をはりつけと火あぶりの両方の刑には、かけられないという事実である。

その選択に当たって、受刑者たる恋人に対する思いやりなど毛頭不要である。もし、あるとすれば、どちらの刑にかけた方が恋人はより多く苦しむか、ということだけである。火あぶりかはりつけか迷った末に、はりつけが選ばれるであろう。槍の穂先は、いわば男の意志の触手である。触手を女体の奥深くまで差し入れるのがはりつけである。それに現実の問題として、はりつけならば、獄門台の首に対して、心ゆくまで接吻ができよう。

メルヘンの世界に、はいる。前回の描文は大塚啓子の四枚の写真で飾られた。最初と最後のものが、とりわけ美しかった。最初のものには「拷問前」という題が、ふさわしい。

恋人の手から奉行所に渡され、庭の立木に仰向け気味に縛りつけられている。幅広の猿ぐつわが顔の表情をかくしている。ポーカー・フェイスのモデルは、それに反比例して全身の表情が豊かである。

「どうにでもして」

という、捨鉢な表情が、先ず読み取れる。無理もない。恋人の真剣な頼みに負けて、極刑を受ける決心はしたものの、恋人に対するかすかな愛想づかしもあるだろう。今まで、恋人の手だったからこそ、甘美に受けとめた拷問が、今日から奉行所の役人や非人の手に移されるのだという絶望もある。

しかし、その捨鉢な表情を圧して、彼女の全身は別のことを物語っている。責め手は役人や非人に移っても、拷問そのものは恋人の意志である。これから加えられる、さまざまな拷問への期待を、いわば、この名画「拷問前」は表現していないだろうか。

毎日、拷問を加えては、囚人の生命は絶たれる。彼女は拷問は、一カ月の間、一日おきに取り行なわれる。奉行に頼んで、恋人は拷問倉の隣の物置で、拷問の日は耳を澄ます。物音にまじって、あたりの空気を、つんざくような金切り声や、ときには泣き声が、ながながと続く。

物音がしない時にも、よく、

「殺してっ。殺してえー」

という声が聞こえる。あれは啓子がエビ責めのまま、仰向けに、ころがされた時の口ぐせである。その声の中に、歓喜のひびきを聞き取れる耳は、恋人の耳以外にはない。

平凡な描写は省略しよう。

刑の宣告から処刑までの二カ月間に、罪人の健康は回復する。

その彼女を待っているのは十日間の晒しである。日本橋、赤坂……と晒しを終え、今日は九日目の晒しである。今日と明日を晒されれば、一月おいて処刑である。

今月は、半蔵門前に晒されることになっている。

白木綿の囚衣の女囚が、竹で編んだ、網つきの唐丸かごで運ばれていく様子は、遠くから眺めると、めんどりを運んでいるように見える。

啓子は縛られたまま、涙に濡れた頬を、編んだ竹の内側に、そっと、こすりつけて、ぬぐう。その竹かごに、とんできた石がバシッと音を立てる。

昨日の黒門町の晒し――数人の無頼漢がのたうつ大きな青大将をかかえるようにして人垣をかき分け、晒されている啓子の前に現われた。青大将が、なぜ奇妙な口かせをされているのか、啓子には分からなかった――。

今思い出しても、気が遠くなりそうだ――その青大将は、女のいちばん、つらいところへ押し入れられた――口かせは、蛇が女体の内部を食い破らないためだった――。

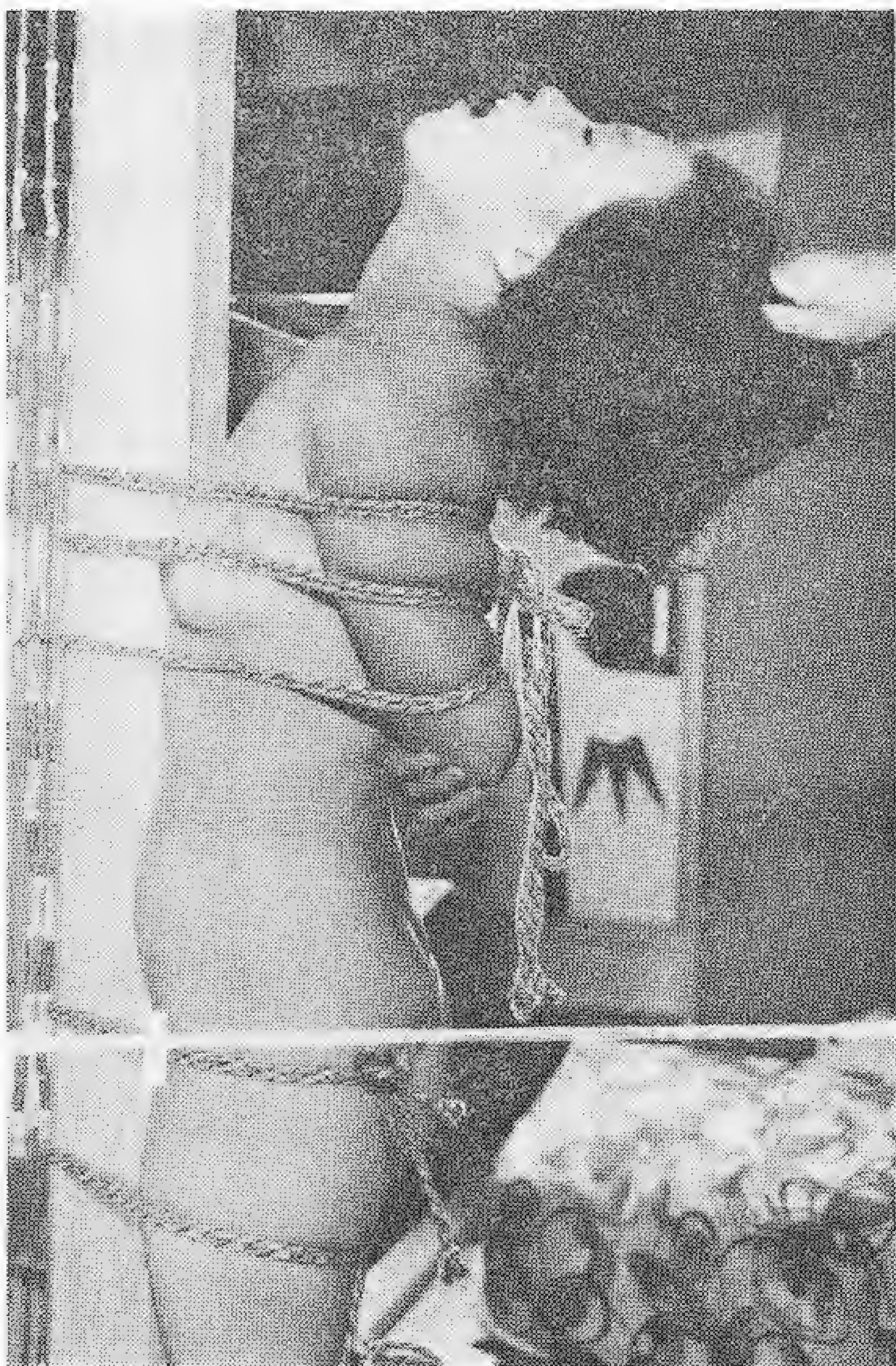
呼吸困難になった青大将が、のたうちまわり、自分のひざの前の地面に白い蛇腹が見えたとき、啓子は失神した。見張りの役人を買収しているのが、恋人の財力であることは明らかだった。

今日と明日、同じ青大将が晒し場に待ちかまえていることは疑いない。このつらい仕打ちも、ただ恋人が見ていてくれさえすれば、自分は夢見心地で受けとめるのに。

せめて通りすがりにも、この唐丸かごの中で、後ろ手にきびしく縛り上げられて運ばれている姿でも見てくれれば……。

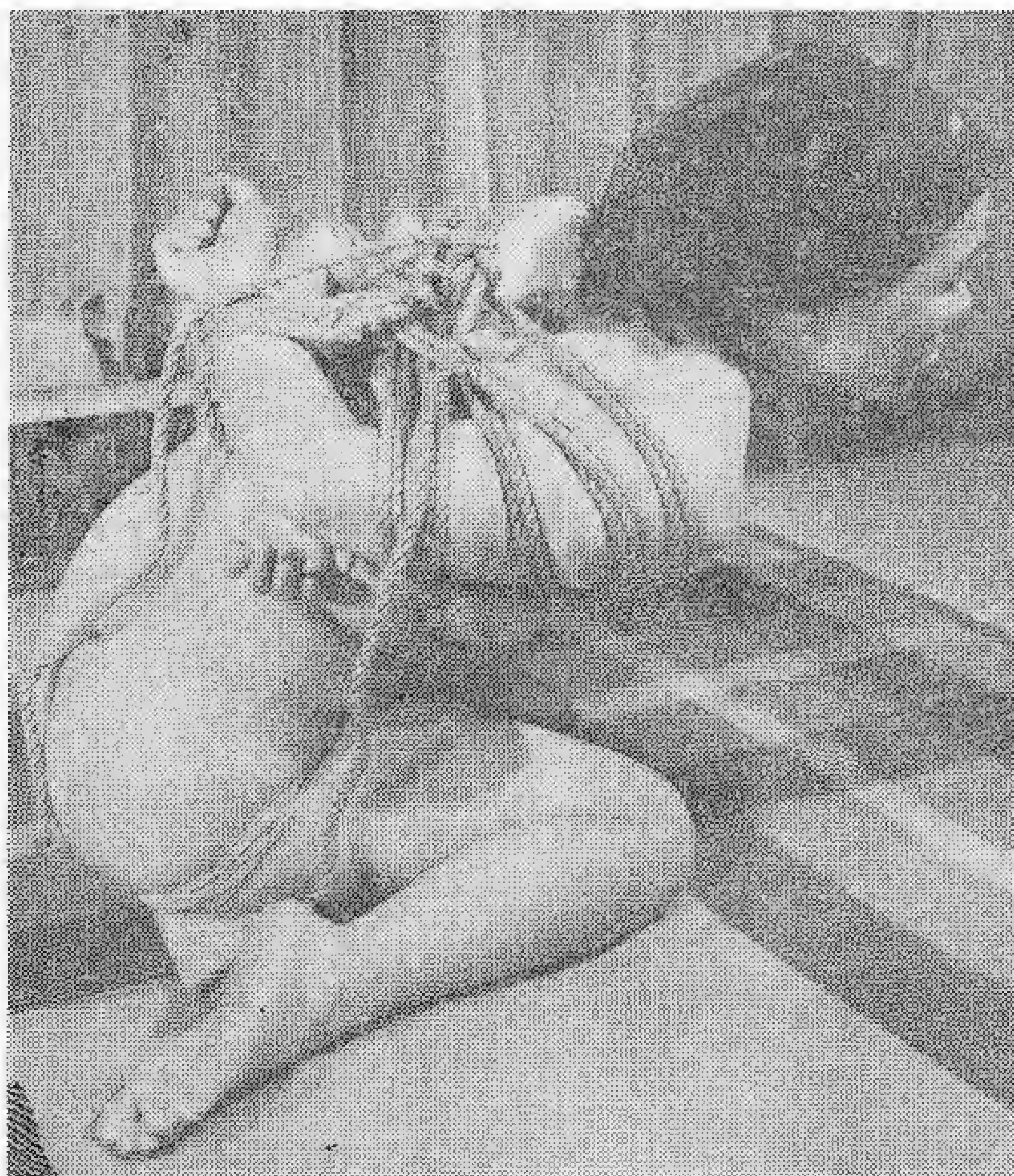
――三月後の鈴ケ森――

江戸時代初期には、着衣の囚人がはりつけ台に登った。百年も経つと、ほとんど素裸ではりつけにかかったことが史実として残っている。庶民を弾圧しながらも、先細りになっていく己が力を意識した幕府の公営劇場としての性格を、鈴ケ森は帯びていたのである。



大塚啓子の四枚目の写真も、名画である。「処刑前」という題がふさわしい。消えいく女の生命を、これほど美しく表わした写真が他にあろうか。木かげに素裸で待機させられた啓子は、はりつけ台を組立てる、槌やのこの音を、じっと聞いている。

人間は、不治の病いのどん底でも、決して不治を信じない。囚人も、処刑直前まで、なにか回りで起こっていることは全てウソで、突然自分は救われると思いこんでいる。啓子の胸を去来しているのは、彼女の目の前で、犬ごろしに撲殺された近所の大きな白い犬の思い出である。袋へ放りこまれたその犬は、



ぴくぴくうごめいていた。飼主は、涙ながらに犬ころしたちに助命を、たん願していた。その願いが聞きとどけられ、あの犬だけは、あとで袋から取り出され、介抱されるのだと啓子は信じた。

　啓子はハッとして、竹矢来の群衆のほうを眺める。あの犬は、あの犬は、アア、あの犬は、あれから自分の目の前に現われなかったではないか。

　自分は本当に処刑されるのだろうか？　そして、あの何千人の人たちは、それを待ち望んで、あのように矢来の外に群がっているのだろうか？　それにしても自分の身体は、もう少しふっくらとしていたと思うのに、いつからこんなに筋ばってきたのだろうか？　周囲の役人や非人たちに対する、裸身の美しさを誇示する気持も次第にゆらいでくる。

――はりつけ台に縛りつけられながら、啓子は激しく泣く――

　はりつけ台が立った。恋人は、南ばん渡りの望遠鏡で、涙に濡れた顔面や、ぴくぴくけいれんする唇を、むさぼるように眺める。読唇術の習得には、ずいぶん努力した。啓子が台の上で、なんとつぶやくかが、知りたかった。

　唇のけいれんは、

「どうして、こんなむごい……」

「どうして、こんなむごい……」

と、二度つぶやいて、あとは言葉にならないもつれとなった。何千人の群衆の中から、望遠鏡を持った恋人の姿をみつけ、そのもつれが、

「嬉しいわ。本望だわ」

という、はっきりした言語になる可能性はない。

　槍が合わされた。それが、すっと手元に引かれた。

　と、すごい勢いで上昇した。両脇腹から反対側の肩に、突き通った。啓子の顔が、のけぞる。うまい。心の臓は避けている。

　血が槍の柄を伝って、非人の手元まで流れおちる。非人が青草をちぎって、それをぬぐう。ふたたび、槍をかまえる。啓子の泣き声が風に乗って聞こえてくる。またひと突き！　激しく左右に振られた頭から、あの長い黒髪が乱れて、顔は全く、見えなくなる。さらにひと突き――。

（おわり）

M小説

セックス・マシーン

北林一登

カット・岡たかし



鼻——。
　私は自分の鼻が怖ろしい。鼻の事を考えると悲しいような、恥かしいような、何とも妙な気分になる。神は何という悲しい、いたずらをされたのだろう。
　しかし、なげくのは止そう。この世にも不思議な話を、こうして書くことによって少しでも気がまぎれれば、それで私の気持もおさまるだろうから。
　私の名前は——。誰も正式に呼んでくれる人は会社ではいない。誰もが、「鼻君」とか「ハナさん」とか言う。幸いにもテレビタレントにハナ肇という人がいるので、他人は本当の名かと思う。だが、呼ばれた本人の私はその一言で胸が張りさけるような思いをしていることを誰も知らない。
　私は呼ばれるたびに、気弱そうな微笑をうかべて返事をする。「鼻」と呼ばれても平気な顔をして……。
　私の鼻は確かに異常である。顔の面積に比較して鼻だけが特に大きい。大きいばかりではない。その形が普通の鼻とは格段に違うのである。
　第一、長さが違う。象ほどではないが、下に垂れていると形容した方が当たっている。しかも赤い。尤も色は時折、変化するが赤紫色になったりピンク色になったりする。
　私は自分が鼻コンプレックスを持っているので、他人の鼻は随分、注意して見るのだがこんな鼻は見た事がない。
　私は物心がつき始めた頃より、異性と、まともに話をしたり、付き合ったり出来なかったのは正に、この鼻のおかげである。三十五才の今日まで、未だに独身をかこっているのも、この鼻のおかげ。会社で出世できないのも、すべて、この鼻のおかげといっても過言

ではない。

芥川龍之介の小説、あの小説によって、私の鼻コンプレックスは益々深まるばかりである。只、昔は私のような鼻の所有者が居たらしいという、かすかな安堵感が胸をかすめたのも事実だった。

天狗の鼻——。そう、私の鼻は普段は、あのような状態にはなって居ない。下に垂れ下がっているのだから……。

でも、ここが重大な所なのだが、昂奮時には丁度天狗の鼻のように屹立するのである。いわば鼻が勃起するのである。私が自分の鼻のこの異常に気付いたのは、小学校六年の時だった。

学校で女と男に分かれて合戦という遊びをした時の事だった。

合戦という遊びは、互いに相手を捕虜にして、又それを助け出す、という遊びなのだが……。私は女の敵方三人に取り囲まれ捕虜にされそうになった。必死に逃がれようとする私を、三人の女の子達は抑えつけて動けないようにしようと計った。

そのうち一人、グラマーな子が、私の顔の上に思いきり足を拡げてまたがり、スカートで、すっぽり顔を包み、パンティのまま、お尻をデンと据えたのだ。異変は、その時に起こった。女の子とはいえ、微妙な香りと熱気に包まれた私の鼻は、生まれて始めて、みるみるうちに異変をきたし、天狗の鼻のように波打ってきたのである。

それからというもの、友達から借りてきた例の本、春本、春画の類を見る時など、確実にその鼻の変化を自覚するようになったのである。それらは自宅で、こっそり見るのだからよいのだが……。困るのは、電車の中などでドキッとするようなミニスカートのお嬢さんなんかに会って、ふと変な想像をしたような時である。私が夏でも黒い大きなマスクをしているのは、その予防、目かくしの為なのである。そんな時、むくむくと張り出してくるマスクを、そっと抑えて、わざとせき込むような真似をする。そうでもしないとマスクは、はち切れて中から天狗鼻が、しゃしゃり出てくるからなのだ。

○

「あら、お風呂に入るのに、マスクをとらないの？」

最初に行った時の、トルコ風呂での会話の一端である。

「うん、一寸ね」

「やだ、どうしたのよ。マスクが張り切れそうにふくらんでいるわ。鼻のケガでもしたの？　いいから、とりなさいよ」

「恥ずかしくて……」

「バカね、鼻を恥かしがるなんて——。そらとってあげるわ」

「……」

「あらッ。……フーン、びっくりした。あんたの鼻、似てるわね。ちょっと、もっと、よく見せてよ」

「あッ、いけない。さわらないで下さいよ。困るんだ」

「ふっふ、面白いわ。この鼻、むくむくと大きくなってきたわ。これで、あんたマスクをはずせなかったのね」

「すみません」

私は、もう風呂の中で、うだった、ゆでだこのようになってしまった。

「さっ、上がりなさいよ。よく洗ってあげるから。まず、その鼻ね。石鹸をつけて、きれいにしてあげましょう」

石鹸をつけられた鼻は、ドキンドキンと脈打っているような感じだった。

「あんた、この天狗さんみたいなお鼻と比べて、かんじんのお鼻は馬鹿におとなしいじゃ



イメージギャラリー『幸福なひととき』岡 たかし

ない。インポかしら」

「そんな事ないけど、こっちの方は、あまり大きくならないんです」

「そう。ほんとに可愛いわね。一寸、親指ぐらいの感じね。それに引きかえ、上のは、またバカに立派ね。あんた、この腰掛の上に鼻をのせてごらんよ。この調子だと、もっと大きくなるかもよ」

私は鼻を腰掛の上にのせてタイルの上に、じかに腹這いになった。

女は私の鼻の上に石鹸を万遍なく塗り込み足の裏でコリコリと踏み始めた。その感触の気持の、よい事。天にも昇る心地とは、この事かと思う程だった。

「あらいやだ。ホントにこんなに立派になったわ。この鼻って、どういう仕掛けになってんのよ。こうやって見ると、本当に間違えてしまいそうよ」

このミストルコは、アケミという名前だった。

一度、こうして自分のコンプレックスをさらけ出してしまい、アケミとの間に羞恥心がとれると、私は気持が軽くなって、せっせとアケミの所へ通うようになった。

アケミとしても、鼻を一寸いじってやるだけでスペシャル代金が貰えると歓迎しているような様子だった。本当のスペシャルは私自身、余り好まないのだった。

ある日、通い慣れたトルコで、アケミを指名して個室に入った途端、アケミは鼻を、ぐいと握った。

「あら、いらっしゃい。今日は、また、とっても元気ね」

「痛いよ。あまり無茶に扱わないでくれよ。鼻だって、体の一部だよ」

「いいから、いいから。遠慮しないで、早く裸になって、こっちへおいで。そらそら、こんなに、お鼻が悦んでるくせに……」

その日も一時間たっぷり、鼻を洗ったり足

で踏んで貰ったりして遊んだ。私なりに満足して帰り際にアケミは、じっと私の鼻を見つめながら、

「どう？　あんた、その鼻を利用して、女を悦ばしたいと思った事ない？」

「そりゃ、あるにはあるけど、第一、相手になってくれる女の人が居ないし、こっちから言いだすのは恥かしくて無理だよ」

「あたい、やってやろうか……」

「えッ、本当ですか？　僕も一遍やってみたかったんです」

「今じゃないよ。いくらあたいだって、こんな所じゃいやだわ。ちゃんと表で会った時じゃなくちゃ」

「判りました。僕は、いつでも、かまいません。今晩でも、明日でも……」

　その日、私はせいぜいおしゃれをして、彼女と銀座で待ち合わせをした。一寸、雨の降った日で、あんな事を言ってても来ないのではないかと思っていたのに、彼女は私が行った時は既に来ていた。

　お茶を飲み、飯を食い、ボーリングをし、バーへ行き――と、型通りのデートコースを終わった時は、午後十一時過ぎ。最後に渋谷の宮益坂上のホテルに落ち着いた時は二人とも適度の疲労とアルコールの酔いで、ぐったりとしていた。二人で一緒に入る風呂でも、アケミは私の鼻を握りっぱなしだった。

　疲れているせいか、いつも程は元気にならなかった。アケミが握っている時は、そそり立つが離すと、だらんとなってしまうのだ。

　部屋に戻ってからアケミは細い腰紐のようなものを取り出して私の鼻の根元を固く縛った。紐の先端を馬の手綱のように持つと、ぐいぐいと引張りながら部屋中を回り始めた。

「さあ、四つん這いのまま駈けるのよ。お前は、あたいの馬なんだから。ふふふ、鼻の長い馬なんてないわね。あたいのペットの子象だよ。子象か子天狗だわ」

「痛いよ、痛いよ。一寸、もう少し、ゆるく引張ってくれよ」

「子象のくせに口をきくなんて生意気よ。それ、今度はあたいを背中に乗せて走るのよ」

　素裸の私の上に裸のアケミが乗って、鼻につないだ手綱を持って、それは珍なる格好だった。アケミは御機嫌で手綱のあまりを鞭の代りにしてピシピシと私の尻を打ちながら部屋を回らすのだった。アケミは相当のグラマーだから、十周もすると疲れて遂にダウン。

「なんだ弱虫なのね。この位で、のびちゃうなんて、私のペットにはなれないよ。よし、つぶれた罰に少し折檻してやるわ」

　アケミは私の背中から降りると、のびている私の両腕を背中へ回して縛った。そして鼻に結んであった手綱を天井近くの鴨居にかけて、ぐいぐいと引張った。これは、たまらない。寝ているわけにはいかない私は、遂に爪先だけで立つような格好で鴨居につり下げられてしまった。鼻に体重がかかるのだから、その痛い事、痛い事。ちぎれそうだった。目から涙がポロポロ流れてきた。

　アケミは面白がって、鋏を持ってきて鼻毛を切ってみたり、煙草の煙を鼻の穴の中に吹き込んでみたり、足の裏をくすぐられた時はくすぐったくて、身をよじると鼻がちぎれる程、痛くなった。だが、その時、私は苦痛だけだったかというと嘘になる。私はこの鼻のおかげで、美しい女と遊んだという経験が殆ど今までになかった。関心を持たれた事すらないといえる。

　アケミのような美しい女性を悦ばせる為なら、どんな苦痛も喜びに変わるだろう。やっと、このめくるめくような折檻も終わって紐をゆるめられた時は、力もはてて、どたりと床に倒れてしまった。アケミが鼻の根っ子を

縛ってあった紐をほどき、ゆっくりとマッサージをしてくれると、紫色に脹れ上がっていた鼻も、徐々に生色をとり戻してくるのだった。

　最終コースに入ってから、アケミは色々と試みたが、私が仰向けに寝て丁度、顔の上にアケミが腰を下ろす型が一番よかった。トイレしゃがみ型とでもいうべきだろうか。鼻は勿論だが、この場合、舌も重要だった。鼻と舌による二重サービス。アケミの悦びようは大変なものだった。

　翌朝、目が覚めると眠ったままのアケミはまだ、私の鼻を握ったままだった。起きてから更に二回、アケミの要求に応じたが、私の鼻は、たいへん便利なものである事が判明した。

「あたし、もう絶対に、はなさないわよ。いいわあ、この子象ちゃん。普通の男なんて、あんたにくらべれば問題にならないわ」

「あけみさんが悦んでくれて、僕も、とてもうれしいです」

「あんた、今、一人暮しでしょ。あたしのマンションに引っ越しておいでよ。どう？」

「でも、何だか悪くて……」

「何が悪いのよ。もう、きめたよ。今日、引っ越しといで――。言う事をきかないと、この鼻を、へし折っちゃうよ」

　あけみは私の鼻をひねり上げた。これではいやも応もない。私自身、この美しいあけみと同棲出来るなんて、天にも昇る気持で早速引っ越していった。

　それからの生活は、まあ、あけみのヒモのようなものだった。会社の方は、いつしか止めてしまい、トルコに通う、あけみの身のまわりの世話と、鼻による奉仕に、あけ暮れる毎日だった。

　人間というものは判らないものだ。私にとって、一番のひけ目である鼻のおかげで、私は思いもかけぬ幸せを手に入れた。あけみと暮し始めてから半年位は、蜜のように甘い毎日の連続だった。

　外界から断絶した明るいマンションの部屋で、あけみとの二人きりの密事に、あけ暮れる毎日。――

　あけみがトルコに出かけたあとは部屋の掃除、あけみの派手な下着類の洗濯、風呂の掃除、トイレの掃除と、こまめに働いて、あとは食事の仕度。丁度あけみが帰る頃（それは翌朝の午前二時頃）に食事が出来るようにしておくのだ。

　深夜、あたりすべてが寝静まった中で、二人きりの饗宴。そして風呂と情事。情事といっても、例の一方的奉仕なのだが、私にとっても、それは好ましい事なのだ。

　やっと寝つくのは、そろそろ、あたりが明るくなる午前五時半頃。そして目を覚ますのは、おヒル頃。

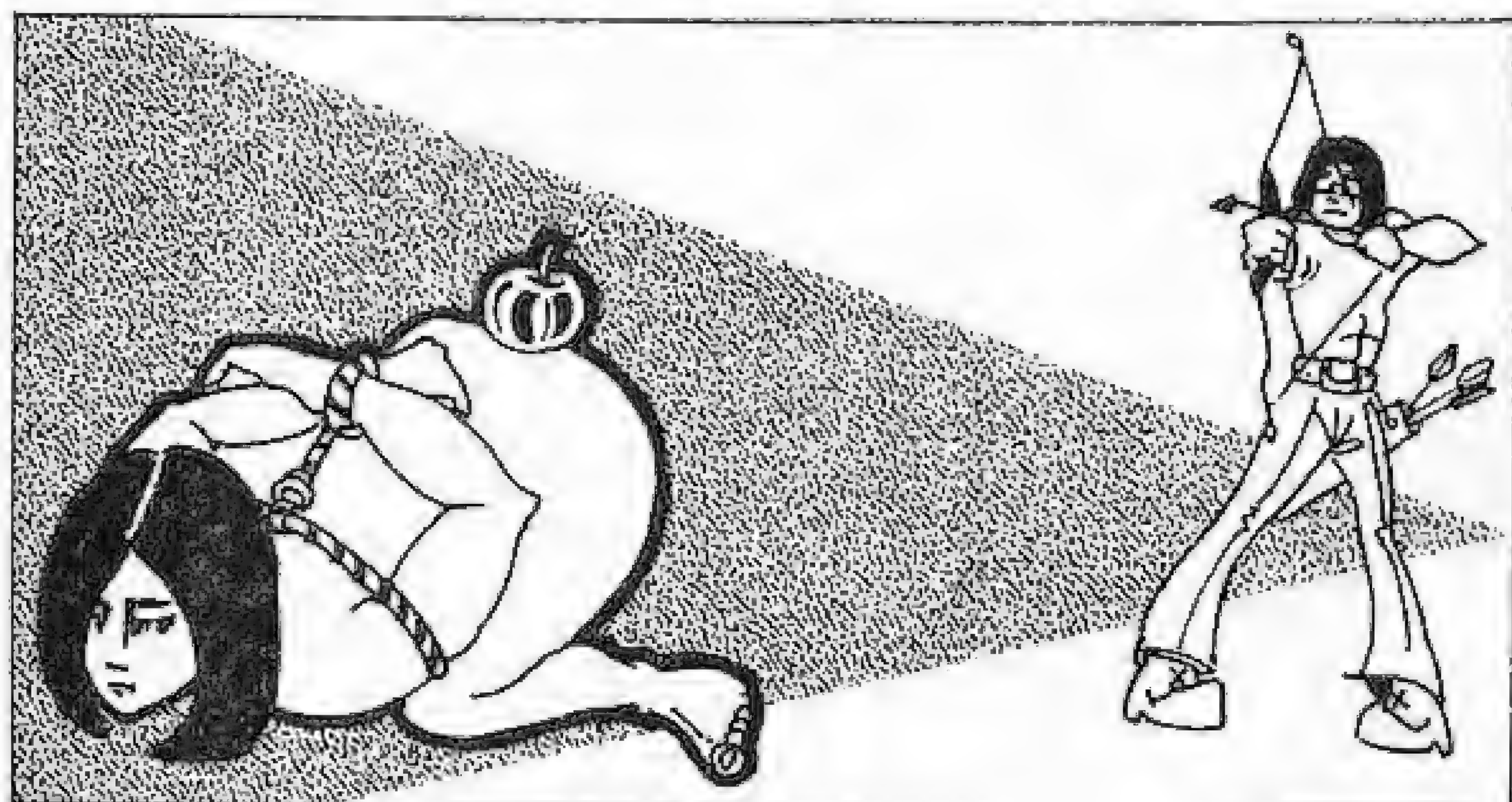
　あけみの出勤時刻が、早番と遅番とマチマチなので、それに合わせての生活になるのだが、まあ、一つのリズムにのった生活は、それなりに、よいものである。

　この夢のような生活が崩れ始めたのは、店であけみが同僚に、私の事を自慢がてらに、話した事が、きっかけになった。

　面白くて素敵な鼻――。鼻と舌との二重サービス――。そのような話は、同僚のミストルコ達の絶大な好奇心を呼び起こしてしまったのだ。

　セックスマシンとしての私の変身のことについては、いずれ、また書きたいと思う。とにかく、私はM男としては幸福の絶頂にあることだけは事実である。

――（おわり）――



カット・札幌TH

<体験告白>

地獄の快楽 A感覚に魅せられて

長谷田真知子

　それは昭和四十一年の七月のことでした。
『おい。おもしろいものを買ってきたぜ』
　一カ月に亘るヨーロッパの旅から帰ってきた主人がポイと投げてよこした一冊のポルノグラフィーを〝またか〟の思いで手にとったわたくしは、思わず息が詰まるほどのショックを受けました。

　主人は独身時代から8ミリやスチールの相等なコレクションを持っており、わたくしもずいぶん見せられたものです。ですから、たいていのものには驚かない自信があるのですが『フォーサム』とタイトルのついた、このデンマーク製のカラーのポルノグラフィーには、すっかり圧倒されて

『こんなことが本当にできるのかしら』
　と身震いするほどの興奮を覚えました。
『フォーサム』（四人組）といっても二対二の単純のグループ・セックスとちがって一人の女性に三人の男性が同時に群がるという、すさまじいものなのです。最初こそ一対一ですが、男性が二人になると女性はVとA、いわゆる〝ダブル・スクリューイング〟を演じさらに男性が三人にふえるとMまで駆使して公平に、三人に満足を与えなければなりません。

　典形的な北欧系の金髪、青い瞳のグラマーガールが、真っ黒のストッキングを身につけただけで、目をそむけたくなるような、さまざまなポーズをとらされ、黒人を交えた、たくましい三人の男たちに同時に責められている――女性として可能性の極限を強いられているだけに、苦痛と快楽の交錯した、その表情には、白々しい演技のにおいは、かけらもなく、すばらしい迫力がありました。

　ニヤニヤしながら、わたくしをうかがっていた主人は、
『女って、ずいぶん使える処が、あるもんだな。真知子はVとMは、すでに及第だから、今夜からAの練習でもしてみるか』

と気が遠くなるような破廉恥なことを、いい出すのです。あとでわかったのですが、それまでAに全然、関心を示さなかった主人がそんなことをいい出したのは、フランクフルトでA専門の娼婦を相手に、生まれて始めて経験し、その魅力にとりつかれてしまっていたからなのです。

当時のわたくしは二十七才、結婚四年目で二才の長男がいました。肉体的にも、すっかり開発され、恥かしい行為や姿態も、とれるようになっていましたが、Aを使うというような奇想天外？な行為は想像したこともありませんでした。女性にとってAはVよりもむしろ、恥かしい〝タブー〟のところなのです。ですから、これぱかりは、いくら主人に頼まれようと許す気にはなれませんでした。

でも結局は主人の強引、執拗な説得に負けて、Aへの調教を承知させられてしまいました。わたくしの心のどこかに、未知の世界への好奇心と、ある種の期待があったのかも知れません。

調教のあらましは『あなる・せっくす』と題して主人が昨年九月号の本誌に寄稿してありますので、重複を避け、苦痛と羞恥に満ちた拡張を強制され、最初はそのおぞましさに身震いしながらも、次第に地獄の悦びともいえる独得のA感覚に目覚めていった、わたくしの体験を綴ってみたいと思います。

この調教について男性の方々に、もっとも注意していただきたいことが二つあります。

その一つは、事前に必ずイルリガートルを用い、少なくとも千五百CC程度の石鹸浣腸を施していただきたいことです。調教が始まれば、激しい便意が襲ってきますから、粗相しないかと心配で、どうしても緊張して調教が受けにくくなります。

もう一つは、Aの括約筋は、とても強靭ですから、焦らず、ゆっくり時間をかけていただきたいということです。それに、ここはご承知のように末梢神経が集中していますので少しでも無理をしますと、引き裂かれるような苦痛を伴います。主人は誰に教えられたのか存じませんが、市販の油溶性塩酸ジブカインの原末をワセリンでとかし、自家製の強力な局部麻痺剤を作り、たっぷりすり込んだうえ、入念なマッサージを施してくれました。10分から15分程度、続けますと『花と蛇』の静子夫人のそれのように、まるで軟体動物のように柔らかくなります。主人は、ここまでが第一段階だといいます。

第二段階は肛門鏡を使って、かなりの量のワセリンを入れます。ここまでなら、苦痛はほとんどありません。でも、まだまだ調教は序の口で、最初わたくしは、いきなり、ここで試みられ、あまりの痛さとみじめさに、泣いて拒んだことを覚えています。

わたくしの激しい抵抗に合って主人も、いったん、あきらめ、徹底的な持久戦法に転向しました。もし、あくまで強行されていたらおそらくわたくしは一生、嫌悪感を持ち続けていたことでしょう。

それからの約一週間、わたくしは拡張用に直経4センチくらいの、柔らかいスポンジコケシを、アヌス・バンドで固定されたのですが、その不快さは経験された方でないと、わかっていただけないと思います。

なにしろ、いつもは堅く閉じているべきを無理やり押し開かれたままになっているのですから痛むのは当然としても、やりきれないほど不愉快な異物感があります。それに毎日高圧浣腸を施され、すっかり排泄されているはずですのに、間歇的に、便意が襲ってきます。しんぼうしきれず、主人が出勤したあとこっそり取りはずしてしまったことさえあります。それでも、なお数時間は灼けつく様な

異物感がぬぐえません。はずしているのが判りますと、叱られますので、主人が帰宅するころを見はからって、再び元通りにするのですが、なぜこんなにつらい、恥かしい調教を承諾したのだろうと、お人よしの自分に腹がたち、主人が恨めしくてなりませんでした。

でも、いま振り返ってみますと、この苦しくてみじめだった一週間のおかげで想像もつかなかった新しい感覚が得られたのですからがまんの、しがいがあったというものです。この期間中、主人は毎日、朝、夜の二回、バイブを使ってマッサージを繰り返し、根気よく待ち続けていました。Aにひかれる男性の方々にお願いしたいのは、女性の身になって決して焦らず、十分な時間をかけて、待っていただきたいということです。〝せいては事を仕損じる〟という格言を噛みしめて味わってもらいたいと思います。

この一週間が終わると第三段階へと進み、麻痺剤とワセリンを、たっぷり使った上で、まずピンポン球で試めされました。丸くても弾力のない堅いセルロイドですので、簡単なようでも、なかなか思うようにはまいりません。激しい痛みをこらえ、冷たい脂汗を流して必死に取り組み、ようやく成功させましたが、いったん直腸内部へ納まってしまうと嘘のように痛みが消え、スポンジコケシのときのような異物感も起こりません。これには、まったく意外な思いがしたものです。結局、輪状の括約筋になにか異物がはさまり、開いたままになっているときにのみ、いろんな障害が起こることがわかってホッとしましたがその反面、ふれることができないくらいになってしまったピンポン球をどうして取り出したらいいのか、もし取り出せなかったら、どうしよう——という新たな不安が募ってきました。

こうした、わたくしの不安をよそに主人は〝してやったり〟とばかり二コ目を、ゆっくりと押し入れ、さらに三コ目を手にしようとしています。わたくしは思わず、

『もう止めて。取れなくなったら、どうするのよ』

と泣き声を上げてしまいました。でも〝案じるより生むが易し〟とは、よくいったものです。主人のアドバイスにしたがって、お腹に強く力を入れますと、まるでニワトリが卵を生むように比較的、簡単に排出することができました。

続いて今度は、ゆで卵でした。ピンポン球にくらべると一回りも大きいため、十分にワセリンを塗り、命じられるまま、全身の力を抜いて口だけで呼吸を続けるなど、せいいっぱいの努力をしましたが、どうしてもピンポン球のようにはゆかず、引き裂かれるような激痛は、

『いったい、麻痺剤が効いているのかしら』

と、その効果のほどを疑ったくらいです。

決して無理はしないという約束にしたがって、この日は許してもらいましたが、主人をニヤリとさせるようになるまで、なお一週間余が必要でした。唇に塗れば、しびれて感覚がなくなってしまうくらい強力な麻痺剤を使っていてさえ、この有様なのです。人間の筋肉のなかで、もっとも強くて丈夫だといわれるだけあって、Aの括約筋は、大変な難物です。主人と二人で、なにか楽に拡張する、いい方法はないものかと頭をしぼりましたが、名案も浮かばず、結局〝一にも調教、二にも調教〟ということになってしまいました。

こうした調教を受けるポーズは、とても恥かしいことですが、犬のように四つんばいになって、お尻を高く持ち上げる俯伏位が最適のようです。そして息を吐き出し、力を抜きうまくタイミングを合わせて、少しずつ調教

してもらうのです。そうすれば幾分かは苦痛を和らげることができます。焦って、強引な方法をとれば、きっと裂傷を負うでしょう。そうなると第一、ばい菌がはいる恐れがありますし治るまで調教を休まねばなりません。たとえ治っても調教を再開すると、また同じ箇所が破れるおそれがあるそうです。

卵には失敗しましたが、この夜、ついに最終段階にはいりました。苦痛は、それほどでもありませんでしたが、正直いって快感を覚えるどころか、全身鳥肌がたち、なんとも形容できない不快さに早く終わってほしい――と、どれほど祈ったか知れません。文字どおりの一方通行なのです。調教の苦しさから考えても、決して甘美な期待を持っていたわけではありませんし、ある程度の覚悟は、していたのですが、これほど女性の人格と人間性を踏みにじる、ひどい行為はないとまで思いました。

いま思えば始めての体験ということで緊張もしていましたし、ケダモノにも劣る浅ましい行為をしているという罪悪感と抵抗感に、さいなまれていたのも事実でした。それにあとが赤く充血し、麻痺剤がきれると、ひどく痛みました。思わず涙がこぼれたのを、はっきりと覚えています。一人前の女性になったときのようなセンチメンタルな涙ではなく、やり場のない憤りの涙でした。

しかし、この夜の主人は、ようやく目的を達して、すこぶる、ご満悦でした。調教中、ボネリートを使って計った事があるのですがVの20－22%mHgにくらべ、Aは110%mHgもあったのですから当然のことでしょう。でもわたくしの不気嫌な表情に気付くと、

『そのうちに、きっとよくなる。Vだって目が覚めるのに半歳以上もかかったのだから』

と、なぐさめのことばをかけてきました。そのときは、わたくしも腹が立っていましたので、

『おためごかしも、いいところだわ』

と頭から信じなかったのですが、それから二カ月余り、Aばかりを強制されている間に嫌悪感も次第に薄らぎ、すっかり主人のペースに巻き込まれてしまいました。ときどき、わたくしが、元どおりにするよう頼んでも、がんとして応じてくれません。それというのも、なんとか一日も早くA感覚に目覚めさせ自分好みのAマニアに仕込もうと一生懸命になっていたのです。

『花と蛇』は、わたくしも大ファンでしたが静子夫人が、犬のように四つんばいになって捨太郎に調教結果を試めされるところがあります。このポーズは調教には最適でも、実際には、ある程度、馴れるまで、とても苦痛が伴います。その点、後背位はもっとも苦痛や不快感が少なく容易に行なえると思います。

しかし〝馴れ〟というものは恐ろしいもので、半歳もたちますと、どんなポーズでもスムーズに行なえるようになり、やがて主人が予言したように〝地獄の快楽〟に、のたうつ日が、とうとう、やってきたのです。

石油ストーブで寝室を暖めなくても寒さを感じませんでしたから、たぶん九カ月近くたった翌年の三月の半ば頃だったと思います。ブルーディの直前で、もっとも欲望の高まっている時でした。すでに痛みも、ほとんどなくなり、むしろ、むずがゆさを覚えるほどになっていましたので、はじめて麻痺剤に代って、市販されている卵胞ホルモンの坐薬を用いました。これがとけて吸収されると、火のように、ほてり出し、ゆるやかな快感と激しい快感とが波のうねりのように交代に押し寄せ、一種異様な感覚に思わず、われを忘れてしまいました。経験のない女性には、このA独得の快感は分かってもらえないでしょう。

女性にはマゾ的な、被虐の喜びという精神的な媚薬があります。わたくしの場合もアブノーマルな行為を強いられているという最初のころの嫌悪感が、いつの間にか被虐の喜びに変わり、さらに肉体的な成長と、卵胞ホルモンの効果がぴたりと一致して、一気に爆発したのだと思います。

それからのわたくしは、底知れぬ内臓快楽に溺れていきました。ワセリンだけは欠かすことができませんが、麻痺剤の必要もなくなり、主人のリードでAVMの三つを使いわけることによって、まるで順列組合わせのような多種多様のプロセスを楽しむことも可能になりました。そんなとき

『ダブル・スクリューイングとは、こんなものかしら』

と、ついその状況を想像したりしてしまうのです。ある部分に力を入れ、いっそう緊迫力を強めるコツも覚えました。

それにブルーディや排卵期にも、いつもと同じように行なうことができます。ブルーディにはタンポン式の内装品を使用しますが、排卵期にはバスコン用具は、いっさい不要です。いずれの場合もVを敬遠の四球で歩かせAに勝負を挑んで、みごとにピンチを逃がれるという仕組みなのです。

早いもので、すでにまる四年の月日が過ぎています。体に悪いのではないか——というのが唯一の心配でしたが、括約筋こそ弛緩しましたものの、いたって健康で、なんの影響もありません。主人に強制され、泣く泣く応じていたわたくしが、いつの間にか、その妖しい魅力のとりことなり、熱烈な礼讃者に変わってしまっているのですから、本当にお恥かしい次第です。それどころか主人が渡欧みやげに買ってきた『フォーサム』を見るたびに、

『一度でいいから、このモデルのように三人の男性と……』

と、心の中で熱望している、もう一人の自分を発見して、愕然とすることがよくあります。

でも、こればかりは一生、実現することのない、わたくしの悲願に終わってしまうことでしょう。

SMカメラ・ハント

豊満女体猥ら責め

――村上喜美の巻――

辻村　隆

村上喜美夫人のカメラ・ハントを書くのは丸二年振りである。昭和四十五年十一月号で『豊満女体猥ら書き』と題して、彼女を始めてハントした記事を書いて以来、それが縁となって、この堂々たる肥満タイプの夫人とはその後、幾度となくデートを重ねてはいるのであるが、会えばいつも、旺盛なる肉欲に負けてしまい、カメラはショルダーバッグの底に眠っている始末であった。

彼女の場合、緊縛は所詮セックスの前戯に過ぎない。その緊縛すらも、脂肪肥りの肉体には、かなり負担を感じるのか、仲々縛らそうとはしない。せいぜい前手縛りの上、太く逞しい両腿を一杯に開いて、いやが上にも、私の好き心を、そそり立てるのが、関の山であった。

部屋中に轟き亘る、けたたましい歓喜の叫声と、もだえで、私の欲情をかき立てる。

碌にフォトも撮らぬうち、激しく求める夫人の猥ら声に、思わず知らず肌を合わせてしまうのであった。

フィルムに印された女体は、そのものズバリの、到底、発表出来ぬシロモノである、村上喜美は、決して私を、一度では解放してくれない。あの豊かな逞しい肉体が、半ば強制的に、貪婪なまでの狂奔の数時間を要求し、ヘトヘトになって、やっと私は解放される。

彼女とプレイする時、私はいつも、ハナから押され気味で、受身に回ってしまうのであった。

夫が数日出張の時は、お手伝いの、やっちゃん（安江さんという）を、阪急、阪神あたりのデパートへ買物にやらせ、沢山の買物をいいつけて、私の出向いている間には、絶対帰らないように細工をする。

そんな時は、広々とした芝生で、私にも全裸になるように命じて、紫外線を一杯に浴びながら、二匹のけだもののように戯れるのであった。

縛ろうとすると、

「イヤ。自由がきかないもの。それに私、すぐ縄の痕が、つくのですもの。やっちゃんにさとられますわ。それより、こうして……」

と、彼女の好きなオーラル・インターコースを求めてくるのであった。

木立ちとブロックの高塀に囲まれているとはいえ、白日の野外で、こんな危険な戯れに私達は、しばし自己を見失ってしまう。

私の倍ほどもある、彼女の逞しい両腿で首を挟みつけられて、喜悦の余り、ぐいぐい力をこめられては、思わず息が詰まりそうになり、必死に、この肉枷を脱出することも、しばしばであった。

M男性なら随喜の涙を流しそうな行為も、私にとっては、幾分、勝手違いの感じであったし、彼女自身、S性からそうするのではなく、無我夢中で力が籠るのであった。

どういうわけか、広い座敷や、夫妻の寝室の、豪奢なダブルベッドは使いたがらない。

キッチンに通じる茶の間とか、浴室の隣合わせの四帖半の間とか、日常茶飯事の場所を使う場合が多い。

家中の掃除や片附けは、一切、お手伝いのやっちゃんに任せてあるので、寝室や奥の客間に、万一、証拠物を残しては、という配慮なのであろうか。夫に秘密の快楽は、こうした点にも、かなりの注意を払っているようであった。

茶の間やダイニングルーム、納屋代りの四帖半は、その点、幾分雑然としているので、少しぐらい、あとが乱れてもカムフラージュされるとでも思っているらしい。

限られた時間の中で、存分に快楽と愉悦を吸収したい貪欲さが、すぐさま直接行動となって現われ、一息つく間もなく村上夫人は、忽ちに唇を求め、抱擁を求めた。

M性の十分にある彼女のことである。緊縛や、SMプレイの責めは、決して嫌いではなかったが、それらのプレイに、長々と費やされる時間が惜しかったのかも知れない。

アベックホテルへ、しけ込めば、ゆっくりとSMプレイに堪能出来るのであるが、通学の男の子とお手伝さんがいては私が考えるほど、それは自由にならず、つい危険を承知で自宅を使ったり、後に述べる、夙川の若い青年のアパートを利用したりするのであった。

それすらも限られた時間内である。

慌しくも、存分に満喫すると、いつの場合も、夫人はソワソワし出して、手早く衣服を纏うと、度々腕時計を覗く。

いつ子供が学校から戻ってくるか知れないのを、あきらかに気にしている風である。

うたかたの満足を果たすと、それとなく言外に私の退出を仄めかし、婉曲に帰ってくれといわんばかりの口吻りになる。

私は、彼女の自己本位さに、いつも腹立たしくなる。重労働のあとは何となく気懶く、飽和状態に、なり勝ちである。白けた空虚な心に、その口吻りは反動的に私の胸に冷たく突きささり、果ては、このジャンボ夫人の、ていのいい男娼のように思われて（こん畜生二度と来てやるものか）と、つい気難かしげな顔色になって退去するのであった。

別れて一週間か十日も経った頃、阪急デパートより、村田喜久男という男性の名前で、ジョニ黒が送られてきたり、オパールのネクタイピンが届いたり、イージーオーダー券つきの、高級背広地が配達されてきたりするのであった。

村田喜久男という同好者だと、妻には告げ

てあるが、ついぞ嘗って姿をみせたことのないこの同好者に家内は、かなり不審を抱いているようである。贈り物が高価でもあり、どのような同好者仲間か、精しく知らせていないせいもあった。

彼女の連絡は誠に巧妙であった。私以外のもう一人の、セックスの奉仕者、山下純に電話をかけてよこさせるのである。

ジュンは二十五才――一応、独身である。村上喜美には、それとは告げていないがジュンには、恰好の愛人がいる。夫人とジュンの関係は、どちらかというと、物質＋セックスで結びついているようである。

ジュンは、SM気を持ち合わせていない。お召しに応じて、夫人を満足させ、堪能させて、自分も又、折々のセックスの吐け口としているのであった。

私もジュンを知っている。どちらかというと、シスターがかった、痩せぎすの、今風に脚のヒョロ長い髪の毛の長い青年であった。

彼の、二DKというには、ややお粗末なアパートで（マンションというほどのものでない）村上喜美と、二度ばかり、プレイに耽溺したことがあり、地図を頼りにそのアパートに出掛けると、既に夫人は部屋で待ち兼ねていて、それまで話相手をしていたジュンが、入れ違いに、チラリと皮肉めいた笑みを頬に泛かべ乍ら出ていったからであった。

笑みに、自嘲と、夫人の厚顔さへの憂憤がレリーフされていたように思え、私も彼に、何と挨拶していいやら、咄嗟には困惑し、黙って頭を下げただけであった。

歓び全身にみなぎれば、時と場所を忘れてけたたましく、野放図に咆哮する痴声を恐れて、口中一杯に詰ものをして、有り合わせの布で猿轡をし、且その上から、力任せに口を抑えることも、しばしばである。

完全に一匹の性獣と化した夫人は、あらゆる痴態を曝け出して、狂奔するのであった。

そこには、日頃の、つつましやかな、芦屋夫人の面影は微塵もない。

快楽の渕に没入しきった、赤裸々な牝獣に変貌しきっていたのである。

日頃つつましやかに見える女性ほど、一旦心を解放すると、大胆奔放、濡れにぞ濡れしになることが多い。

私は決して、贈り物の物欲のみでプレイしているのではなかった。

余りにも変わり身の鮮かな、この豊満な憎めぬ芦屋夫人に、正直いって、心のどこかで惹かれているのかも知れなかった。

糖尿の体に加えて、中年の域の、活力を復活させるのに、かなりの時間を要する私を、実に根気よく、こちらが気の毒になる位、あらゆる手段を講じては、私を奮い立たせてくれるのであった。

それは、夫人の、目的遂行の為でもあったが、かなり献身的な奉仕でもあった。

若いジュンを相手にすれば、こんな労を煩わさなくても済むものをと、気の毒になって口に出したら、

「あなたには、ジュンにない、よさがありますもの。老猾っていうのか、巧妙というのか女の歓ぶツボを心得ていらっしゃるもの。何たって、ジュンはその点、若いですわ」

と眼を細めて、猥らに笑うのであった。

電話するまで、ジュンは戻ってくる気遣いはなかった。自分のアパートの一室を提供することで、ジュンは又、若干のお小遣いを、せしめているに違いない。

「ジュンと、どうして知り合ったの？」

「ゼラシー？」

「そんな年でもないですよ、今更――。あなたが、御主人や私以外の、誰とセックスしようと、それはあなたの自由ですが、部屋まで

提供してくれるからには、かなり深い仲でしょう。なれそめを聞いてみたいまでですよ」

「一寸言うの恥かしいけど、白状しますわ。実は子供の家庭教師ですの」

「今も？」

「週に二度やってきますわ。ヌケヌケと素知らぬ振りで、トボけて……」

「ヌケヌケは、あなたもじゃないですか。それで、最初はどちらからモーションをかけたのです？」

「どちらからともなく……」

「嘘でしょう……きっと、あなたからだ。そんな匂いがする」

「彼が時間に来て待ってるのに、肝心の子供が、友達の家に寄ったとかで、帰って来ないんですよ。やっちゃんも生憎不在で、私、お相手しているうち、つい……」

「つい、どうなったの？」

豊満な裸身が、俄破と私に襲いかかる。勢いで、うしろにのけぞって倒れ、倒れた私は京塚昌子ほどもあろうかと思われる、重々しい女体を受け止めねばならなかった。

熱い溜息が頬を擽り、喘ぐ呼吸と共に、

「可愛いい方と、いきなり抱きしめてあげたら、真蒼になって震えていたわ」

「それで……」

圧迫されて、胸苦しい思いで、私も喘ぎながら追及する。

「手触りに彼の反応を感じて、私はおしゃぶりを……。まるで一方的。私の火照る体はその侭で、彼ったら、全然手出しもせず、呆然としていましたわ」

「欲求不満も、いいとこだ」

「そうよ。だから、約束させたわ。明日は私の為に来て下さいって……」

「来たの？」

「ええ、来たわ。でもソワソワしているの。罪悪を感じるって顔付きで……」

「非道い悪女だ」

「そう、確かに悪女ね。でも、そんな私にさせていったの誰？」

私は返事代りに、夫人の乳首を思い切り噛んでやった。彼女はウーンとのけぞり、激しい嬌声を、ほとばしらせた。

白い牝豚は、恍惚としゃべる。まるで姦通の告白が愉しくて堪まらぬかのように……。

「彼の見ている前で全裸になったわ。つられてモゾモゾしながら、彼も脱いでいったの。痺せっぽちのくせに、とっても元気なの。どう、羨ましいでしょ」

女が矢庭にリードする。それを迎える私。猛り狂う台風が一過しても、喜美夫人は、このアパートは落着いていたし、プレイに心を解放させていた。話を青年から外らせて、

「もう一度、ハント用の緊縛フォトを撮ってみたいな」

そんな提案をすると、

「又、奇譚クラブに掲せる気ですの？」

と、一寸イヤな顔をする。

「いけないかい？」

「いけなくはないけど、のせられたとなるとヒヤヒヤするわ。それに、こんなブクブクの体でしょう。美しいハント女性が多いから見劣りして、何だか愧かしくなって、コンプレックス感じますもの」

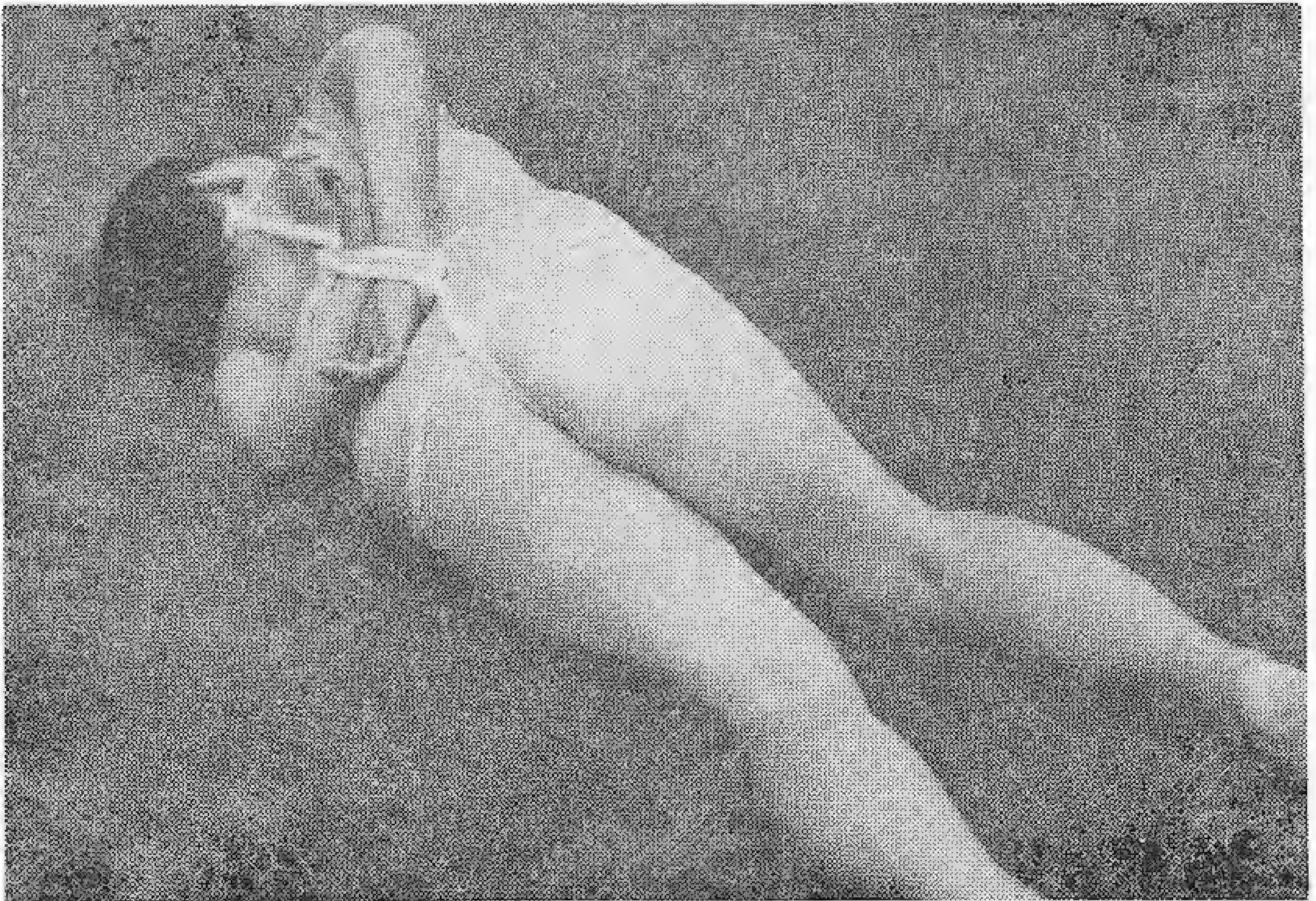
と、乗気でなかった。

「この処、一寸タネ切れなんですよ」

「じゃあ、私、ピンチヒッター？　いやだわそんなこと」

これはマズいことをいった。喜美夫人は、顔色を硬化させた。

「一度、時間をかけて、ゆっくりと縛ってみたいのですよ。二年近くつき合っていて、満足に縛らせてくれたことある？　ないでしょう。大抵、今迄、易々として、貴女のいう通



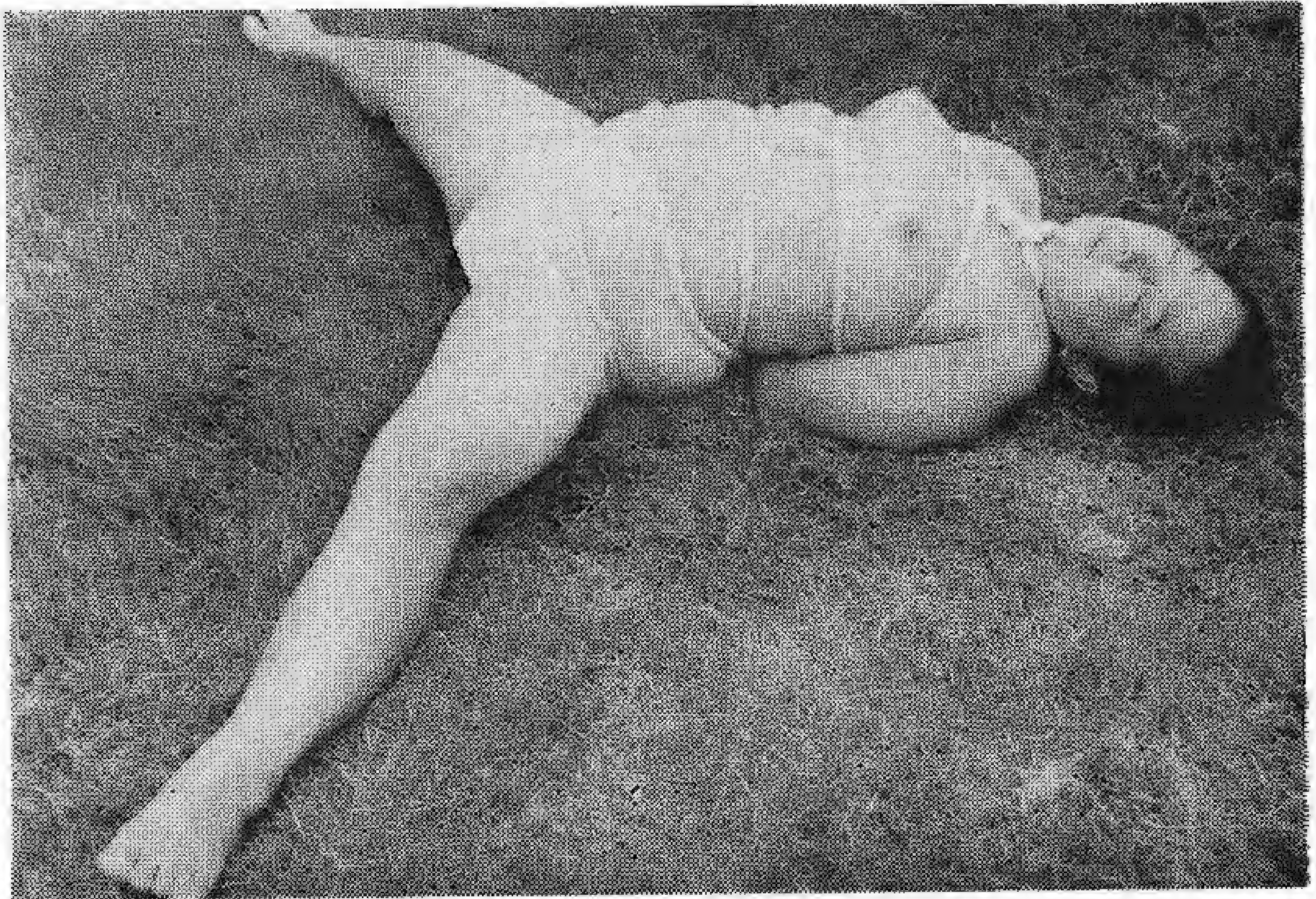
りになってきましたよ。偶には、私の無理も聞いて下さってもいいじゃないですか。カメラ・ハントは二の次として思い切って犇々と縛り上げて自由にしてみたい。苛めてもみたい――。謂わばS的な願望なんですよ」
「そうねえ、サジストのあなただったのね。でも、いくら節食しても、痩せないでしょう。後手に縛るといったって両手をうしろに回して、手首を合わせるのが、精一杯ですのよ。こんな肥満体でもいいの?」
「正直いって、SMプレイの場合、私は痩せた女性の方が好きです。強烈な無理な体位をとらせられるから……。そのかわりガリガリしている。肥満の女性には、肥満タイプ向きの緊縛があるし、肉布団のような柔らかさがありますよ。縛るには痩せた方がよいし、抱くのには肥えている方がいい。ハハ、ぜいたくな考えですね」
「そんなに縛りたい?」
「ボンレスハムのように、丸々とした肉をしめ上げて、プリンと盛り上がった、かたい肌の感触を愉しんでみたい」
「とうとう、ハム扱いですのネ。いいわ、わたくし、あなたの奴隷になりますわ。気の済むまで縛って頂戴。でも今日はダメ。もう五時でしょう。夫が夕方、帰ってくるの……縄のあとが仲々とれない体、御存知の筈でしょう。薄着だから、気付かれると大変。この次きっと……お約束するわ」
俄に日常性を取り戻したのか、夫人は、そそくさとLLサイズのパンティを穿き始めたのであった。

×　×　×

あれから、もう二カ月、経過している。
こちらから連絡しても、自由の効かぬ夫人の立場であった。気長に、彼女の連絡を待つより、致し方なかった。
ジュンから電話のあったのは、十月の飛石連休の中日、九日の朝であった。
「明日、朝から家の方でお待ちしていますという、ことづけです」

「急だね。明日というと、体育の日ですネ」
「そうです。とも角、頼まれたことだけ御連絡しておきます」
ジュンの電話は、そっ気なかった。私達のプレイの関係を承知していて、若さから何とはなく嫌悪感を覚えるのであろうか。懼らくは彼自身、村上喜美夫人との、爛れた関係に自己嫌悪を抱いているのかも知れなかった。
確かに一方的な押しつけである。やれやれといった、気重な感の方が強い。
体育の日という、別段、変哲もない休日は私にとって、何の意義もないが、混雑する日曜や祝祭日は、なるべく外出しない、近頃の私である。人浪に揉まれ、停滞する車にイライラさせられるからであった。
秋さなか、嘸かし、阪急ターミナルなどは混雑することだろうと、うんざりしながらも既に一方の心は、眼に見えぬ糸に惹かれるように、村上喜美に傾斜していた。
アナールセックスや、ソワサン・ヌーフはやはり反面、強烈な魅力でもあったのだ。
次の朝、なじりたげな妻の眼をあとに、例のショルダーバッグを肩にして、内心チラリと、やましい思いにかられて家を出る。
この日、息子や娘も、銘々の友達等と、出掛けてゆき、私達夫婦は、表戸を閉ざして、ゆっくりプレイを愉しんだあと、血のしたたるようなビフテキでも喰いにゆこうかと、話し合っていたのである。
ジュンの電話で、それが反古になり、妻独り、広い邸内で留守をする味気なさが、やり切れなかったのであろう。
妻とのプレイ、そしてビフテキは次の日にでもその気になれば可能であるが、喜美夫人の場合、二カ月振りの邂逅である。つい心は毎日、顔を合わす妻より、村上喜美に心を走らせるのは已むを得なかった。
男のエゴは承知である。唯、人並以上に、SMプレイの執着心が強いということで、私は妻から寛容してもらっていた。
果たして、梅田のターミナルはハイキングや、アベック、ファミリーの行楽の人の渦である。
やっと乗り込んで、岡本駅で下車すると、勝手知ったるダラダラ坂を昇ってゆく。
豪壮な邸宅の立ち並ぶ辺りから、金木犀の強い香が流れて、私の鼻孔を快く擽る。
みかん色の花片が、爽風に散らされて、舗道のあちこちに吹き溜まりをつくり、秋晴れの日射しを受けて、粉チーズを振り撒いたようである。
いつもの通りインターホーンのボタンを押すと、待ち兼ねたように、夫人の声が流れてくる。
「どちら様でしょうか？」
「辻村です」
「すぐに参ります」
待つ間もなく潜戸が開く。チラリと左右を見廻し、素早く姿を隠す。
「お久し振りですわ。もうお会いしたくってお会いしたくって」
待て暫しもなく、夫人は私の手を握っていた。握られた侭、置石づたいに、庭の方へと回る。桐の木が繁って、陽を遮ぎっていた。
「主人はゴルフで、夜まで帰りませんし、子供は、やっちゃんの郷里の三田の奥へ栗拾いに昨日からゆきまして、多分、夜の九時頃、帰ってくる予定です。久し振りのチャンスなんですわ。あなたのお顔をみるまで、ジュンが間違いなく連絡をとっておいてくれたのかと心配で、心配で――」
ふくよかな天平美人は、まるで子娘のように、はしゃいでいた。
育ちのよさからくる、のほほんとした菩薩の顔が、めぐり会えた喜びに輝いている。

「急だから、正直いって出難かったですよ」
「当然ですわ。本当に御無理いって……わたくし、今日は、あなたの仰有る通りになります。お好きなようにして下さい」
「犇々と雁字搦目に、縛り上げてやりますからね」
「覚悟の上ですわ。でも、こうして家にいると、不意の来客でもないかしらと、何となく心が落着かないのです。ジュンの部屋の、鍵を借りておきました。歩いても十分そこそこです。鍵をお渡ししますから、先に入って待っていて下さいな」
「私もその方が気楽ですよ。じゃあ」
と受け取った時、陽光に輝く芝生に眼をやって、フト、一つの構図が浮かび上がった。
あの芝生に、全裸にして縛って、転がしてみたらどうであろう。そのあと股縛りにしてその上から着衣させて、来させるのも面白いかも知れない。
考え泛かぶと、躊躇なく口にする。
「芝生で、裸にして縛ってみたいなあ」
「でも、ジュンの部屋へ行くのでは……」
「その前にやってみたい」
矢庭に、灰色のセーターに手をかけると、私は強引に脱がせようとした。
「あッ、待って……自分で脱ぎますから」
吃驚した眼付きになって、縁側でそそくさと脱ぎ捨ててゆく。
爽やかな秋晴れでも、流石に裸身に、風は冷たく感じるのか、喜美夫人は、真白い豊満な肌を、両手で抱きしめていた。
「さあ、早く縄を持ってきなさい。例の太い奴を――」
私は命じる。太縄はかさ張るので、夫人に買わせて保管してもらってあった。
彼女の選んで買ってきた太縄は、しなしなと柔らかく、抜けるように真白い。
保管場所から持ち出してきた新縄を受取って、縁側に直立させて、首縄かけると、素早く縛ってゆく。股縄通して、元締めは、薄い茂みの中央で結び終わった。
「さあ、歩くのだ、素足で――」
うしろから小突くと、ヨタヨタとよろめいて、それでも素直に芝生に向かって歩く。
私はその間に、手早くカメラをとり出していた。
B93・W82・H96という巨体が、芝生に上って、私をみつめている。この肉体の寸法、いつか私が、悪戯半分に計ったものである。
カメラをその場に置くと、私は夫人に近寄り、いきなり荒々しく、芝生にドンと押し倒した。不意をつかれて、仰向けに引っくり返り、その勢いで、ゴロリと横転して俯伏せになってしまう。
撒水用のゴムホースをとり上げると、皮下脂肪のたっぷりと乗り切った双臀を、パシリパシリと打擲する。
真白い臀部が、忽ち桃色に染まる。芝生に顔を伏せて、牝豚は、しゃくり上げるような「ヒエッ、ヒエッ」という悲鳴を洩らした。
背後の両手は、肥満の彼女としては、精一杯、深く組み合わせて、為に二の腕が、かなり押し上げられている。
私はわざと乱暴に、この重い女体を、相当の力を篭めて足蹴にし、ゴロリ、ゴロリと、傾斜になった芝生を転がしていった。
二度、三度、転がした処で、夫人は大きく溜息をついて、伸びてしまった。
故意か無意識か、両脚を精一杯に拡げて、これみよがしに、どうにでもしてくれといわんばかりである。
私はズボンを、もどかしく脱ぎ捨てると、ジャンボな女体に馬乗りになる。
「さあ、奉仕するんだ」
「ハイ」



喜美夫人は、アーンと大きく口を開いた。

奉仕は、喜美夫人の好むところである。

その代償として、私も当然夫人を喜ばせなくてはならない。

馬乗りの馬首を転じて、ふわふわとした肉布団の上に大の字に寝そべり、邪魔っけな股縄を、おもむろに外していった。

燦々と降りそそぐ秋日の下で、爽風を全身に受けながら私達は大らかに、生きる悦びに没入してゆくのであった。

既に陶酔の境地をさまよう夫人のどっしりとたゆたう全裸が、次第に激しく浪打ちはじめ、欷歔を伴った嬌声を、こらえようもなく、白日の秋気の中に撒きちらしてゆくのであった。

「あああ、だめだわ。あなた……もう、よして。でないとわたし……」

「いいじゃないか、今日の愉しい演奏会の、これは序曲だ」

「誰かに見られそう。だめ、いけない……」

「見られたって、いいじゃないか」

熱く交す言葉が、お互いに正反対の方向でくぐもっていた。

今日一日を解放された、これからの悦虐の期待を、充満した肉体一杯に漲らせて、脂肪の塊の、ぶよぶよした真白い女体が呻き始めていた。

ポッテリとした両腿に秋の陽射しが照り返っているのも、私の嗜虐心を一層に擽る。

響音が近づき、ヘリコプターが一機、上空を通過してゆく。その時、ジーンと灼けつく激しい痛みが脳随に伝わり、その痛みが、今の私にとっては快く神経を刺激した。

白い牝獣が唐突に、私を振り落としそうな勢いで、急激に背をのけぞらせ、大気を震わせて咆哮した。

× × ×

だらだら坂の曲がり角で佇み、私は村上喜美夫人の、邸内から出てくるのを待ち受けていた。

あの侭であれば、サラミソーセージが一本

夫人の体温に温まっている筈であった。ジュンの部屋へしけ込んで、こいつを肴に、ウィスキーをチビチビなめる段取りである。

縄が完全に没する迄に、腰の肉を、めり込ませて、縛ってある。

その上からLLパンティを穿かせたから、途中、脱落する気遣いはなかった。

伸・ハワイならぬ、歩く姿はダンプカーの雄姿を見たさに、私は待っている。ジュンのアパートまで、彼女のあとを尾行してゆくつもりであった。

地味なツーピースの、夫人の姿が戸外に現われると、こちらへ歩いてくる。

私の存在に気付き、猥らな笑みが、彼女の頬をよぎり過ぎた。

素知らぬ風で、さっさと歩いてゆく。

逞しい腰をふりふり歩く、夫人の後姿は、そのことを意識するせいか、ぎこちなく、妙に、なまなましい。

この辺り、関西学院や、甲南大学などの、学生向きの下宿、マンション、アパートが点在している。ジュンのアパートも、その一つであった。

ジュンは大学を卒業しても、エリートのサラリーマンコースを嫌って、自由を求めて生きている脱サラ組である。

個人教授の家庭教師数口と、パートタイムのアルバイトをやって、愉しく遊ぶため、気楽に生きるための費用を稼いでいた。喜美夫人との愛情なきセックスライフも、ジュンにとっては、アルバイトの一つに過ぎないのであろう。

アパートの時間貸しも、若干の小遣いの足しには、なるに違いない。

ジュンは今日、仲間達と、行き馴れたロックガーデンへ出掛けて、神戸三の宮でのんで夜、帰ってくるという。それも、若者の、愉しき哉人生の足跡であろう。

留守を狙って忍び込む私と彼女――背徳めく、そのひとときも人生の縮図の一つ――。

他人に干捗しない、若者達の巣だけに、中年の男と有閑マダムが、若者の部屋に勝手に闖入したところで、さして無関心である。休日で出払っていて、人目のなかったのも幸いしていた。

通りを歩く時、警戒して、十数米あとから離れてついていったが、アパートの部屋へ入る時は、もう同時であった。

閉めきってあった部屋には、男臭さが充満している。私にも覚えのある、それは若者の息吹きと分泌の匂いでもあるのだ。

喜美夫人は、軽く眉をしかめると、裏の空地に面した窓をあけて、カーテンを引いた。

ものもいわず、女の体が、私に傾斜してくる。抱きかかえて、そっと手をやると、硬い手応えがあって、サラミは紛れもなく存在していた。

「ぐっと太腿に力を入れて歩いたでしょう。肥えてますから、すっかり汗ばんじゃって、股ずれしたみたい、ヒリヒリするわ」

「見てあげようか」

「ええ、見て……」

甘えて、女は、私の首に両手を回してよりかかる。

ながめのスカートの下に手を忍ばせてゆくと、ドキリとした。LLパンティは穿かず、肌にじかに、パンティストッキングをつけていたのであった。

くるくると巻き降ろして、スカートを脱がせると、細目の股縄が、痛々しいばかりに、腰に喰い込んでいるのを、目を瞠る思いでみつめ、私の嗜虐心は、途端にメラメラと燃え上がり始めた。

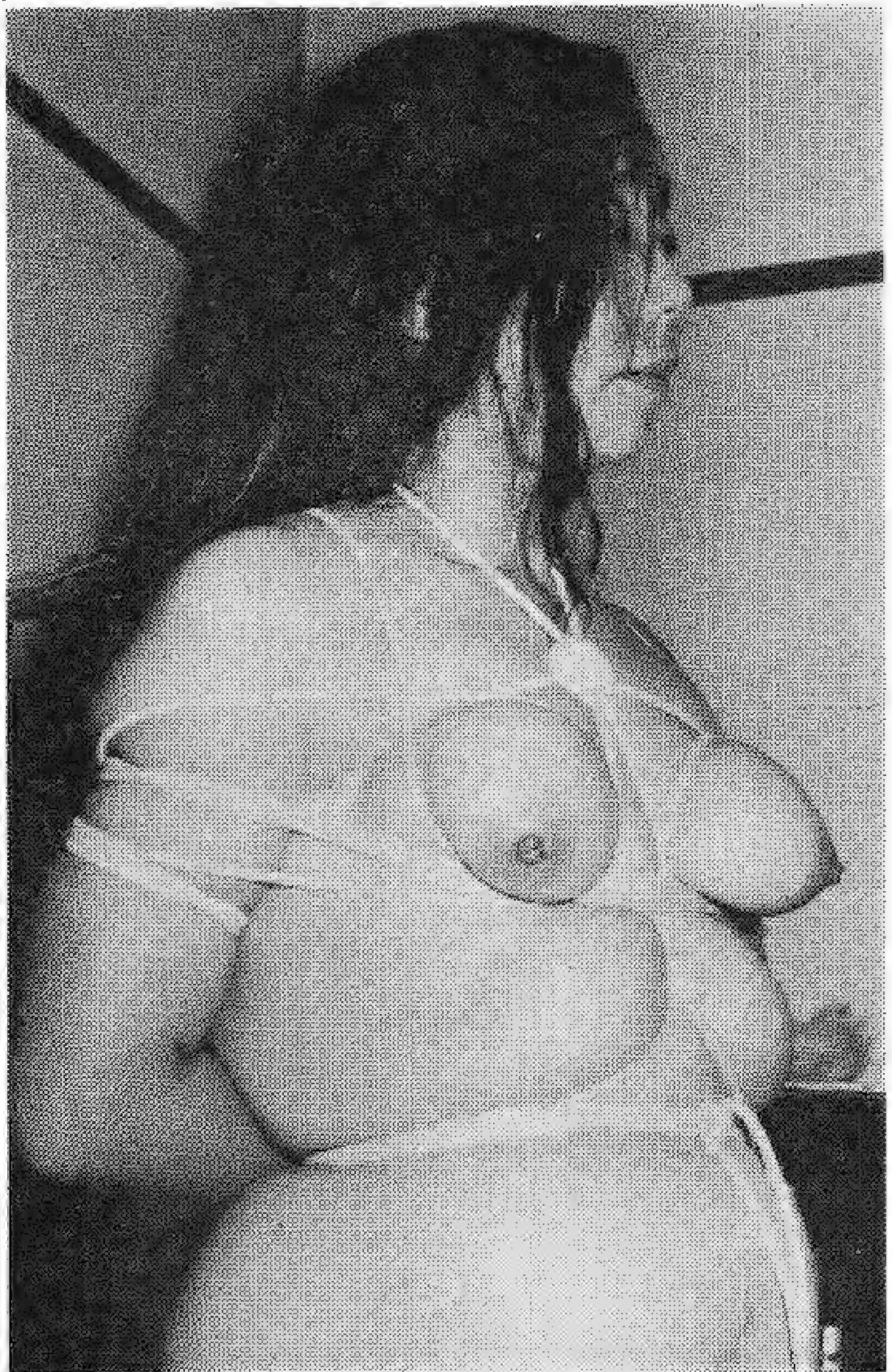
「さあ、全部、お脱ぎ――」

「ええ、だけど、少しお化粧していい？　あ

たしって、主人の好みに合わして地味な方でしょう。だから、変身してみたいの」
「ウン、それがいい。その髪も解きおろして乱れ髪にするのだ」
「一寸だけ、待っててね」
素早く夫人は上着類を脱いで、ハンドバッグから携帯の化粧品を出し、ジュンの粗末な鏡に向かって、かなり濃いめの粧いを、つくりはじめた。
確かに、その方がいい。傍から覗く私が見ても、数才は若返ってゆく。
「どう、これでいい?」
心なし気愧しげに、ニッと笑って、私にきく。
「ウン、まるで見違えるようだ。どうして、もっと早く、こうしなかったのだろう」
「いつも心の余裕がありませんもの。今日はその気になっていますから」
猥らさが表情に漂い、夫人は意外なことを口走った。
「私ね、主人とはもう、一年以上も夫婦関係がないんですのよ」
「どうして?」
思わず聞き返す。
「昨年の夏、視察と輸出の用件を兼ねて主人は、香港、シンガポールに半月ばかり旅行したのです。その時、向こうの女と遊んで、かなり悪性の病気を移されてしまったのです。私を避けるようにするから、問いつめたら、遂々白状しましたが、それ以来なんです。抗生物質ですっかりなおりましたものの、それがショックだったのか、その後どうしてもダメなのです。精神的なインポテンツかも知れませんが、或は、強い抗生物質の飲み過ぎとも思えるのです。ジュンに捌け口を求めたのは、そんなせいも、あったのですわ。主人は薄々気付いていますが、何も申しません。あなたとの仲は気付いておりませんけど、少々気の毒なくらい、寛大なのです。近頃、深酒するようになって、尚更ダメなんです」
私は唯、黙って、頷いて聞いていた。
今になって、夫婦の秘密を、どうして告白する気になったのだろう。その精神状態が幾分、不可解である彼女は、私に何を希もうとしているのであろうか——。
女盛りの、もて余す情慾の吐け口を、この私に求めて、欲求不満を訴え、私との接触をより以上に密接にしたいのか——。
「成程、きいてみれば、どの家庭にも、それなりの悩みはあるものですねえ。でも、今になって、どうして、そんなことを?」
「今まで、何度か御相談しようと思ったのですが、いいそびれちゃって……。でもねえ、このままでゆくと、早晩、私達夫婦は、どうにもならなくなってしまうのじゃないかと、怖くなってきたのですわ」
「その憬れはありますね。あなたは、御主人の、海外での行為は許していらっしゃる?」
「男性なら、解放されれば、誰しもそうなるでしょう。それを咎める気は全然ありませんわ。むしろ、私にそんな忌わしい病気を移すまいとして避けた主人は、正直なのかも知れませんわ。自分一人で済んだのですもの。私自身、主人がシンガポールへ出向いていた時に、あなたとデートして夢中になっていたのですもの。主人の行為を咎める資格はございませんわ」
夫人は妖艶に笑った。
「成程ね。あの時は、桜の宮のホテルへ行って、かなり夜おそくまで、耽溺しましたね。後にも先にも、ホテルは去年の夏、始めてでしたから、一寸変だと思いました。それで、御主人のことについて、何か相談でも……」
「ええ、そのことなんです。私がうまく計りますから、主人と出会って、サド的な感覚を

植えつけて戴きたいのです。私を縛るようにそれとなく奨めてほしいのです。そこからセックスの感情は蘇ると思います」
「そりゃ、一寸無理ですよ。御主人はノーマルなんでしょう」
「私もそう思っていたので、今までは、自分の性向を素振りにも見せませんでした。ところが、半月許り前、いつもは、お手伝のやっちゃんに任している、主人の書斎の整頓をやって、意外な事実に驚きました。別段隠す気振りもなく、数十冊のSM雑誌が、週刊誌などに混じって、雑然と積んであったのです。その中に、最近号の奇クも一、二冊、混じっていて、ドキリとしました。私とノーマルなセックスが出来なくなってから、主人は、捌け口のない欲求をみたすため、緊縛写真がのっているそんな雑誌類を買い漁って、そんな方面に、急速に興味を持つようになった様ですわ。そんな自分を、アブノーマルだと思い込んでか、私には一言も、SMめいたことは申しません。でも主人の胸中には、紛れもなく、SMの関心が昂まりつつあることは確かなんですわ。だから、あなたに、そのきっかけを作ってやって欲しいのです。それが、主人の人間恢復につながるように思えて……」

「ウーン、そうですか」
私は思わず、唸っていた。
熱心に説く夫人の、熱の篭った口調には、切々とした、夫の愛情の回復を願う妻の心情が、ほとばしっていた。これはもう、うたかたの、SMプレイ以前の問題である。
盛り上がっていた私の、嗜虐の感情に水をさされた思いで、問題は、SMに関係あり乍ら、事実は確かに重大であり、不能の夫を持つ妻の、最大の関心事でもあったのである。
「よろしい、何とか引き受けましょう。どうやら、これは私の範疇に入る事柄のようですからね」
「まあ、ホッとしましたわ。もう、そのことが言いたくって、何度悩んだでしょう。……こうしましょう、私は主人が書斎に居る時、さりげなくお茶をもって入って行き、SM雑誌を手にとります。驚いたふりで、夫に問います。主人は何とか応えるでしょう。私も関心のあるふりを示します。そのうち、あなたのカメラ・ハントを示して、私の女友達の誰かが知っているという風にして紹介します。二年前に、膵臓ガンでなくなった、私達の結びの神のHさんを引合いに出しても構いません。紹介したあとは、すべてあなたにお任せしますわ。どうでしょうかしら、この考えは？」
「驚きましたな。そこまでお膳立てをしていたのですね。あなたを見直しましたよ。案外こうしたことは、御主人の年配も、私に近いですから、案ずるより産むが易しかも知れませんよ。しかし、お蔭で、プレイの熱が、すっかり醒めてしまいました」
「まあ、御免なさい。私のことばかりお喋りして——もう、これですっきりしましたわ。さあ、どうぞ」
私は思わず苦笑を洩らした。改めて、さあどうぞといわれても、何か事務的めいて一向に情感が伴わない。SMプレイは、所詮SとMの、非日常の雰囲気の中で、激しく燃焼するものであったからだ。
その事に思い当たったのか喜美夫人は、提げてきた紙袋の中から、サントリーオールドをとり出すと、グラスを二個持ってきて、なみなみと注ぎ、どうぞと私に奨めて、みずからもググーッと一息に、あふるように、のみ乾してしまった。
ハラミソーセージは、今も尚、温められ放しである。
喜美夫人は、どっしりとした逞しい腰を、



躊躇の姿勢にしたかと思うと、

「いただかない？」

艶然と笑みこぼれ、笑みに猥らさが泛かび上がって、彼女は、ぐいとそれを私の鼻先へ突き出したのであった。

× × ×

洋酒の、アルコール度の強さが、急速に女を大胆奔放にしてゆく。

眼許を桜貝色に染め、裸身が私を圧するようにしなだれかかってくる。

洋酒の香りを含んだ唾液が、もう既に幾度か、私達の口腔を往来している。

正直いって、この際、私のカメラに対する関心は極めて薄い。度々出会い、濃厚な時間を過ごすと、今更、カメラに、この巨体をしるすことが、無意味のようにも思えてくるのであった。

「お撮りにならない？」

珍しく、喜美夫人からの催促であった。

Mの願望が油然と湧き上がってきたのであろうか――。

それとも、カメラをとるという目的の為に行なう、私の種々の緊縛を、待ち望んでいるからであろうか――。

数杯のグラスをあけて、私の心身は、ものうい。この侭、抱擁と接触を重ねて、ジュンのシングルベッドを、精一杯きしませたい欲望の方が強かった。

その反面、積極的にそうなりたがっているこんなチャンスを、逃がすこともあるまいという思惑にもかられる。

お互いの吐く息は、かなりアルコールくさい。一方的でないのが救いであった。

私は、のろのろと立ち上がったが、フラリとよろけた。幾分は酔っているらしい。今日は車ではないという気安さが、気を許してのませたのであろう。

「さあ、一丁、縛ってやるか。容赦しないからね」

「ええ、いいですわ。あなたのお好きなようにして……気のすむまで」

『ようし、よく言った」
吠えるようにうそぶいて、ショルダーバッグを開くと、細縄の束をとり出す。
ゆっくりと時間をかけて、白々とした、柔らかい肥満の肌を、犇々と、きつく締め上げてゆく。見事な乳房が、ポッカリと、お椀を伏せたように飛び出し、腹から腰へかけて、幾層もの、くびれを作って、肉がボコボコと盛り上がっている。
股縄をかけかけて、ふと気付いた私は手を止め、あとのプレイを考え合わせて腰縄で結び止めると、締めつけた縄が、肉塊に押されて姿を没してしまうのであった。
粧いを凝らした夫人の酔顔は、見違えるばかりに妖艶であった。
名実共の緊縛で、かなり息苦しいのか、彼女の呼吸づかいは、既に弾んでいた。
縄で、はちきれそうになった半円形の突端をひねると、女は、待っていましたと許り、甘い声を出して悶えた。
「ああ、縛られた気分って、とてもいいわ」
快楽を口に出して、全身をくねらす。
俄に薄黒く、くろずんだ眼のふちが、淫蕩に翳り、女は、堰をきったように卑語を、あからさまに口に、し始めた。



虚飾と教養をかなぐり捨て、一匹の牝獣に還元した、赤裸々な剥き出しの本能が、そこにある。
女は、こうも鮮かに変身出来るものなのであろうか。そこには、誇りたかい芦屋夫人の面影は片鱗だに見当たらなかった。
女は痴語を口吟み、卑語を繰って、只管に私を求めつづける。
嗜虐の炎は、けたたましく、燃え上がってゆく。
罵り、雑言を浴びせて、存分に芦屋夫人の誇りを蹂躙してみたい気持に、かり立てられる。
私は矢庭に、夫人の黒髪を鷲掴みにすると



俄破と、その場に押し倒した。
　仰向けにして、馬乗りになろうとしたが、両手の組み合わせの変型の縛りが、たえがたいらしく、夫人は悲鳴を挙げて、身悶え
「ああ、手がチ切れそう。痛い、痛い」
　と泣き喚く。そこに、肥満体の悲しさがある。二の腕をぎゅっと縛った後手では、両手の背後の組み合わせが、これで精一杯だったようである。
　諦めて横転させ、私は面積の広い、脂肪のよくのった臀部に、平手打ちを、くらわせていった。
　その疼痛が程よい快楽となるのか、女の呻き、小さな叫びは甘く、媚が含まれていた。
「どうだ——」
「ウン、とてもいい気持」
「こんなに縛られて、こうして尻を叩かれることがか?」
「ハイ」
「お前は牝獣だ。そうだろ」
「ハイ」
「フフ、この白い牝豚め! 思い切り苛めてやる。どうだ、苛めてほしいか?」
「ハイ、いいようにして」
「では、お前の好きなものは何だ、いえ」
「××××——」
「違う、奉仕だ」
「ハイ、おしゃぶり」
「よし、よし、ホラ、あーんと大きく口を開いて」
　私は昂ぶってゆく。手早く玉子型のリモコン装置をとり出す。遠くから操作出来て、これは便利であった。
　彼女の好きだという奉仕をさせ乍ら、強弱を使いわけ、女の反応を、冷静にみつめる。
　私はその時、俄に尿意を覚えた。そこに恰好の便器がある。
「のどが渇いただろう。たっぷりと美味しい甘露を頂戴させてやるからな。一滴でもこぼ

してみろ、縛り上げたこの侭にして、オレは帰ってしまうからな」

強烈な嗜虐の欲望にさいなまれて私は徐々に、はかしていった。

こんな場合の排泄は無理だと、誰かが書いていたが、絶対そんな筈はない。現に、私は敢行したのだ。無理だというのは、敢えて試してみない人間のいうことである。

牝豚のノドがなり、表情に、限りない恍惚が泛かんでいた。

リモコンは強を押えている。

身を震わせ、ピクピクと肥肉をうごめかせて、絢爛と、女は靡れに靡れていった。

×　×　×

徹底的に、村上喜美の衿恃を粉砕してみたい、ワイルドな疼きに心を掻き乱され、私の責めはつづいている。

嘗ては、この肥満の女体に、黒々と全身に猥ら書きをしたが、それにも勝る、屈辱を味わわせたい欲望に燃えていた。

だからといって私は決して、この日常性の芦屋夫人を憎んではいない。日頃の優美な挙動や、つつましやかな地味な身のこなしなども、それはそれで好ましいものであった。

豹変して、牝獣になる女体というものに、私の態度も、それに比例して豹変するのであった。

狭いジュンのトイレは、カメラの入り込む余地はなかった。

尿意を訴える夫人を引き廻して、一部始終は観察してもカメラのレンズは、その実態を覗くよしもない。

いきみと共に、異臭の中で牝豚は人並に愧じた。

そして今私は、すべての襖をとり払い、仕切りの柱を、頃合の責め柱として、喜美夫人を、雁字搦目に縛り上げていた。

柱の背後で、両手を合わせて縛るのは、肥満の夫人にとっては、苦手でもあり、かなりの難行でもあった。

背や臀部を柱にヒタと喰い込ませやっと両手を柱の背後に回す。ぐいと引き絞って重ねると、ぐるぐる巻きにしてゆく。



あとは一気呵成、胸に、腹に、腿に、太縄を総動員して、締め上げていったのである。
肉体がジャンボだから、それにふさわしくやや大型のバイブをとり出してくると、電極を合わせて、振動を伝えて、いきものの様にふるえさせる。
うっと呻いて、女は息を吸い込み、須臾にして、眼許がうるみ、快楽の喘ぎが、息遣いも慌しく吐き出される。
脱落しないようにかけた縄は、太りじしの腿肉に挟み込まれて、深々と完全に姿を没し去っていた。
縄の強さによって、ムックリと、丸く飛び出した肉塊が、肥満の肉の、余剰の分であった。



三脚をとり出してくると、カメラを据えつける。
いつしか、酔いは醒めつつあった。
あの、なまなましい、排泄の現実を直視して、急速に発散していったのかも知れない。
流腸具を持参しなかったことが悔まれたが夫人は懼らく、従容として、それを許容したことであろう。
根性のようなハント精神が、酔い醒めと共に、まるで本能のように、顔を覗かせてきつつあった。
ピーンと張りつめて、円型に盛り上がった乳房を、ギュッと摑み、私は荒々しい愛撫の手をさしのべた。
恍惚と陶酔の交錯した、うつつの表情で、女の眼は、猥らに燃えていた。
既に二度に亘って山を越えてきたにもかかわらず、女人は喜悦の呻きを挙げて、唇を震わせている。
この豊かに発育した肥肉を、思い切り、叩きのめしてみたい想念にかられ、細縄をしごくと、ピシリと、ぶちかます。
「呀っ、痛た……」
敏感な乳首に、腹に、首筋に、細縄のムチ

は容赦なく乱れ飛んだ。
鈍い音が撥ねかえる。白い肉が、みるみる線条をなして赤らんでゆく。
羽虫に似た微かな音が、うなりつづけていた。
ムチ打ちの苦痛を、快楽にすり替えて、夫人は、縛り柱にのけぞりながら、甘受していた。
享楽の声が次第に昂まる。
猿轡がわりに、ねじり蝋燭を口に銜えさせて、点火する。否応なく女人は顎を挙げて、ローソクを垂直に保っていた。
歯を割って銜えさせた蝋燭に、熱い蝋涙が溜まり、ツツーと尾を曳いて、唇に伝わってゆく。鼻をつまみ上げ、頬をつねり、乳首をひねり廻して、散々にいたぶったあと、私は再び縄束を手にして、万遍なく、裸身に、縄のムチを当てていった。
蝋芯がゆらめき、蝋涙が口辺に飛び散る。
白い牝豚は、真紅の蝋滴を唇にまきちらして、唸り声をあげて、悦虐の極致を噛みしめていた。
蝋燭を歯の間から抜きとって、ポトポトと乳首の辺りへ熱蝋を垂らしてゆく。
次々と果てもなく襲いくる快美感に、女は譫言の様に、
「ああ、もう気が遠くなっちゃう……死にそうよ。ダメよ」
と、忘我の境地で呟くのであった。
柱の角で腕の血脈を押えつけられていて、彼女の手首は、まるで死人のように、冷たくなっていた。
もう、ここらが限度であろう。これ以上、どうしようもない緊縛の構図に飽きて、やっと縄を解いてゆく。
羽虫も喘ぎやんだ。
村上喜美は、正体もなく、膨大な肉塊をダラリと曝け出して、のびていた。
それでも彼女は失神はしない。私との激しいSMプレイによって鍛え抜かれた女体は、数分後には、忽ち正気に還元してゆく。





ノロノロと体を起こすと、コビリついた胸元の蝋骸を剝がし、口辺の紅い斑点を、手探りで取り除いていた。

逞しい女体は、肉体相応で、この程度では屁古垂れはしない。いつの場合も音を挙げるのは私の方からで、彼女の慾望は、無限の様に思えるのであった。

「少しは、こたえたかい?」

「ウウン、とても愉しかったわ」

「かなり感じた様だね、どれくらい?」

「数えきれないわ」

「私は、まだ大事にとってある」

「ずるいわ、私ばかり泣かせて……」

「いいじゃないか。女は幾度でも勝負出来るが、男はそうはゆかないからネ。もっとも、ジュンの様な若者なら別だけど」

「ダメダメ、飽っ気ないくらいなのよ」

猥らにいってのけて、私によりかかり、

「その点、あなたは知ってらっしゃるもの」

と、熱い吐息を吹き掛けてくる。

「ねえ、もっと縛って……もう、どんなにされてもいいの」

執拗な迄の女の欲望であった。

「じゃあ、も一度、柱に縛りつけてやる」

柱に坐らせると、両手を高々と掲げさして犇と縛りつけてゆく。

出入口の一枚扉を開けば、この曝しものは忽ち丸見えの位置であった。

若し何かの拍子に誰かがこの部屋を訪れたら、この光景を目撃して何と思うだろう。鍵を内側からかけてあるから、その懼れはないにしても、危険な場所に変わりはなかった。

郵便受を押し上げて、内部を覗き込めば、この狼籍の痴態は、じかに眼に飛び込んでくる筈である。

「どうだ、この入口のドアを開け放って、学生共に見せてやろうか。吃驚するぞ」

「ああ、そんなことはしないで――」

夫人は真面目に哀願する。私の嗜虐の想念

は昂揚し、露出趣味にかられてくる。

把手をひねって、ロックを外し、ニュッと首を出して外部を窺ってみる。

階上のこの部屋の前は、コンクリートの通路で、ベランダになっており危険防止の鉄柵が植えられてある。

昼下がりの休日は、シーンと静まり返って辺りには人影もなく、遥かに六甲、摩耶の山並が、白く霞んでいる。

私はシャツとパンツの侭の姿で、サンダルをつっ掛けて、ベランダに出ると、ドアを大きく開け放した。

「ねえ、ダメ。外から、見えますわ。やめてェ。早く入ってきて……」



夫人は、愧らいを一杯に泛かべた顔を捻じ曲げて、哀願する。

私は意地悪く、返事をしないで、ニヤニヤと、夫人の横顔をみつめた。

「ねえ、本当に誰か来たら大変よ。這入って下さいな」

哀願は必死であった。十月上旬に、シャツとパンツだけの中年男が、ベランダに佇んでいては、これはとりようによっては、確かに異常である。私は外気を存分に吸い終わると大きく背伸びして、手狭まな部屋に引き返して、扉にロックを掛けた。

立ちはだかって、腰を落とせば、奉仕させる位置に頃合である。

以心伝心、夫人はそれを察して、舌舐めずりした。

甘美な衝撃。

彼女が、腿を合わせた立膝の力を抜くのがわかり、特有のむれた匂いが、鋭く私の鼻腔を刺激する。

一体この白豚夫人は、何度満足すれば気が済むのだろうか——。そんな不貞腐れた考えで、私は自分を制御して、身を踞めると、手を伸ばしていった。

×　×　×

「あら、こんなもの、いやねえ」

ジュンのシングルベッドに転がっていた夫人が、マットレスと本枠の間に押し込まれていた、汚れたハンカチを摘み出すと、鼻に当てがって匂いをかぎ、軽く眉をしかめて、投げ捨てたのであった。

これは青春の残滓――。

私にも覚えがある。夜毎、夜毎、せっせと栗の花の匂いの蓄積し、こわばりゆくハンカチーフを、わざと洗わずに、むしろ、その汚れに奇妙な愛着を抱いた、若かりし頃を――健康で、性に目覚めた若者なら、誰しもが通る、性の軌道の過程であった。

投げ捨てられたハンカチーフは、薄黄色く斑点を印して、汚れている。

「いいじゃないか、元の場所に、そっと突っ込んでおきなさいよ。ジュンにハジを掻かすこともない。こうして、部屋を提供してくれてるんだもの」

「洗って乾しておきましょうか」

「余計なことはしない方がいいですよ。誰しも行なうことでも、知られると、やはり顔を赧らめるものだ」

女人には若者の気持は分からないらしい。

彼女は渋々、そっとつまむと、元の位置に押し込んだ。

「ティッシュ・ペーパーでも使って捨てればいいのに――」

と独り呟く。

「若者独りでは、うず高くなったペーパーの捨場に困るのさ」

「えらくジュンの肩をもつのね」

「私にも経験があるからさ」

「誰でもするの、そんなこと？」

「懼らく、健康な若者で、性に目ざめた者ならね。若い女性だって、そうじゃない？　あなたは経験ないの？　例えばさ、どうしても意識過剰で眠れない夜なんか、独りで……結婚後も、そんなことに快美を覚える女性だって多いのですよ」

「私は、母から、未婚でそうした行為は、いけないのだと教えられました」

「正に封建的な性教育ですね。貝原益軒の養生訓を信奉した、くちでしょう」

戦後は解放されたものの、戦前の女性は、自ら瀆すという、自瀆なる言葉を当て嵌めて忌避したものである。

その様に教え込まれた喜美夫人が、私やジュンと、耽美なセックスの世界に、どっぷりと、ひたり込んでいるのだから世話はない。

時計を覗くと二時半過ぎで、残された時間は、たっぷりとあったが、私自身、かなり疲労を覚えていた。

最後の強烈なプレイにとりかかり、貪婪な夫人の欲情に、そろそろ、お別れしたい気にかり立てられてきつつあった。

肥満タイプの女性にとって、到底、長らく堪え切れないポーズをとらせてやろう。

苦しさに、彼女は、究極を求めるに違いあるまい。

そう腹をきめると私はやおら立ち上がる。

中休みで、ベッドに転がっていた彼女は、私の、男としての行動を半ば期待していたのか微かに色めき立った双眸に、ひときわ欲情の色が走った。

この白い牝豚は、シングルベッドをフルにきしませて、あらゆる痴態を展開する愉しみに心を疼かせていたようであった。

外した襖を、はめ終わり、狭い部屋の中央に陣取ると、

「こちらへ」

と手招く。喜美夫人は案に相違の顔で、黙って、凝っと私をみつめる。

「もう一縛りだ。うんと苦しいやつをね」

「また縛るの？」



「ああ、いけないかい?」
「いけなくはないけど……」
期待外れに、言葉を濁して、それでも、やっと諦めたのか、裸の上半身を起こして、しばらくは、私の行動を推測していたが、思い直したように、素直にベッドをおりて、近づく。
ぐいと引き寄せて抱きしめ、感情を甘えさせておいて、私はいきなり、
「こうしてやるさ」
と、足払いをかけるようにして、仰向けに押し倒すと、ドサリと、大きな地響きを立てて、派手に引っくり返る。
両足を抱えるようにして持ち上げ、ぐいぐいと二つ折れに屈曲させてゆく。
脂肪ののり切った、肥満の腹を圧縮されて喜美夫人は、さも苦しげに、ウンウンと呻きをあげる。
委細構わず、ボリュームたっぷりの、臀部と太腿を押えつけて、ぐるぐる巻きに、太縄をかけて縛り上げてゆく。
「ああ、く、くるしいわ。もっとゆるくしてよ、ねえ……あなた」
夫人はフウフウいい乍ら懇願した。
「何のこれしき、我慢するのだ。大抵のM女性は、これくらいの程度は朝飯前だよ」
「でも、私……」
肥えているからと、いいたかったのであろうが、流石にこらえて、眉をしかめて、我慢している。
喜美夫人のような肥満体にとって、確かにこの屈曲のポーズは、苦しいに違いない。人一倍、腹部に重圧を感じるからであろうが、それを承知で、行なっている私である。
縛り終わると、ぐいと腰を持ち上げて、辛うじて背後で組み合わされた両手を、別の縄で縛り、双臀の間を伝わせて、揃えた両足首を繋いでとめる。
手早く、屈曲の縛りが出来上がった。

逞しく盛り上がった太腿の肉壁で押しこめられた縄は、すっかり埋没して、さだかではない。

双臂を照らすように、例の赤い蝋燭を、二本の縄の合間に、位置を定めて屹立させるとライターで火をつける。

縄に挟みこまれた蝋燭は、直立の炎を、静かにゆらめかせていたが、蝋涙が溜まり始め溢れてくると、ツツーと糸を引いて流れ落ちてゆく。

「あつつ、灼け爛れてしまうわ」

「これしき、大丈夫さ。ホラホラ、足を挙げると、蝋燭が傾くぞ」

倒れるのを防ぐため、ともすれば伸び上がる両足を、ぐいと片足で踏んまえ、屈曲の苦しいポーズに拍車をかける。

高々と屹立した、豊かな双丘は、叩きのめしたい欲望をそそる。

縄を拾うと、手頃に折りたたみ、巧みに蝋燭を避けて、この面積の広い、叩き応えのある、脂の乗りきった白い丘に、縄ムチをふるい始める。

双臂が揺れて、蝋燭がゆらめき、蝋涙がふきこぼれる。

息苦しさと、容赦ない縄ムチの痛さに、白い牝豚は、自由のきかぬ緊縛の身をのたうたせながら、ヒーヒーと、大仰に泣き喚く。

頃やよしと、蝋燭を手にすると、かなりの低位置から、白い丘めざして、ポタポタと、蝋滴を垂らしていった。

瞬間的な灼熱の苦痛が、間断なく襲いかかる。

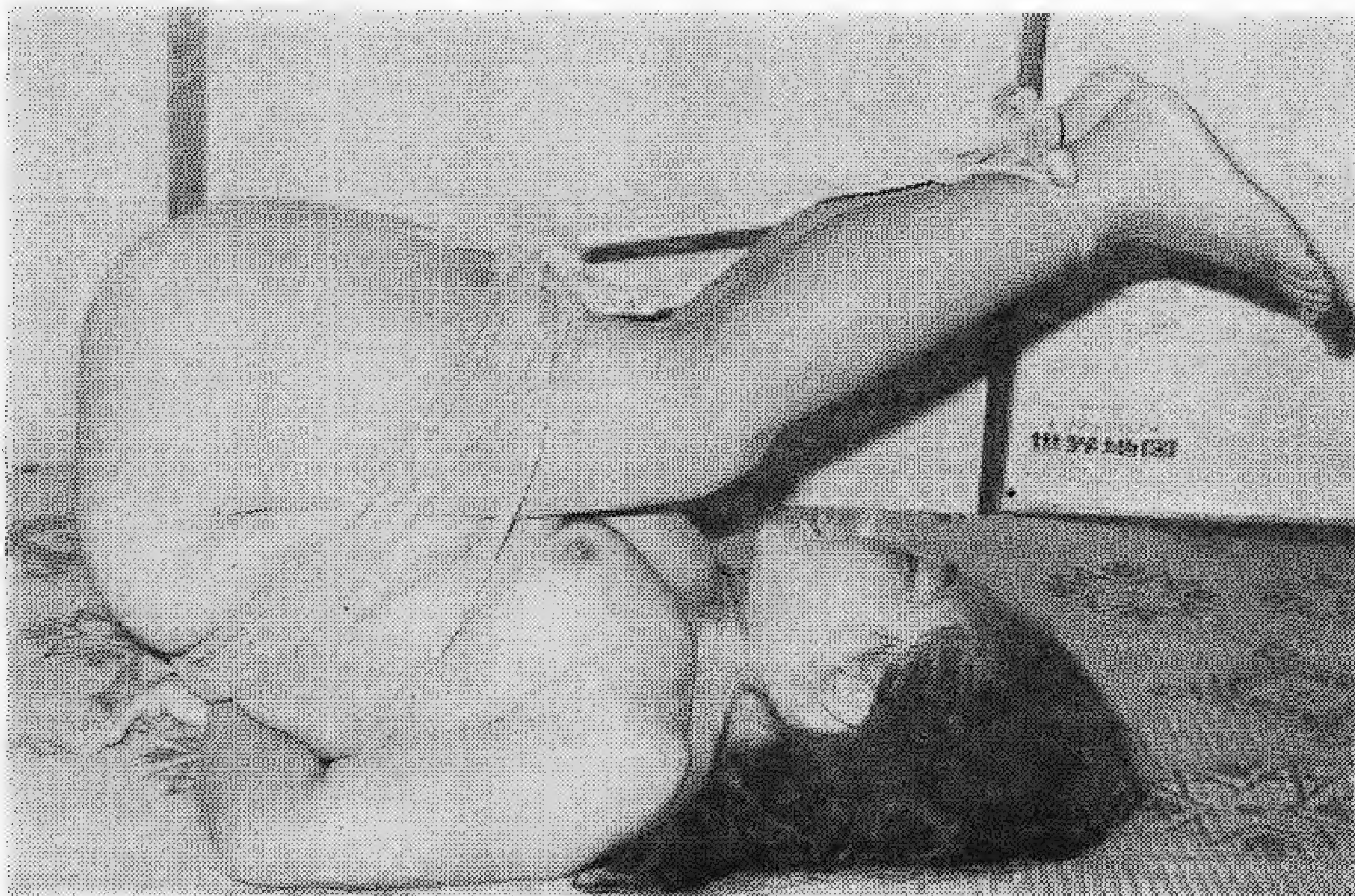
真紅の花を、真白い双丘に散らして、それは眼にも鮮かであった。

片手が走る。

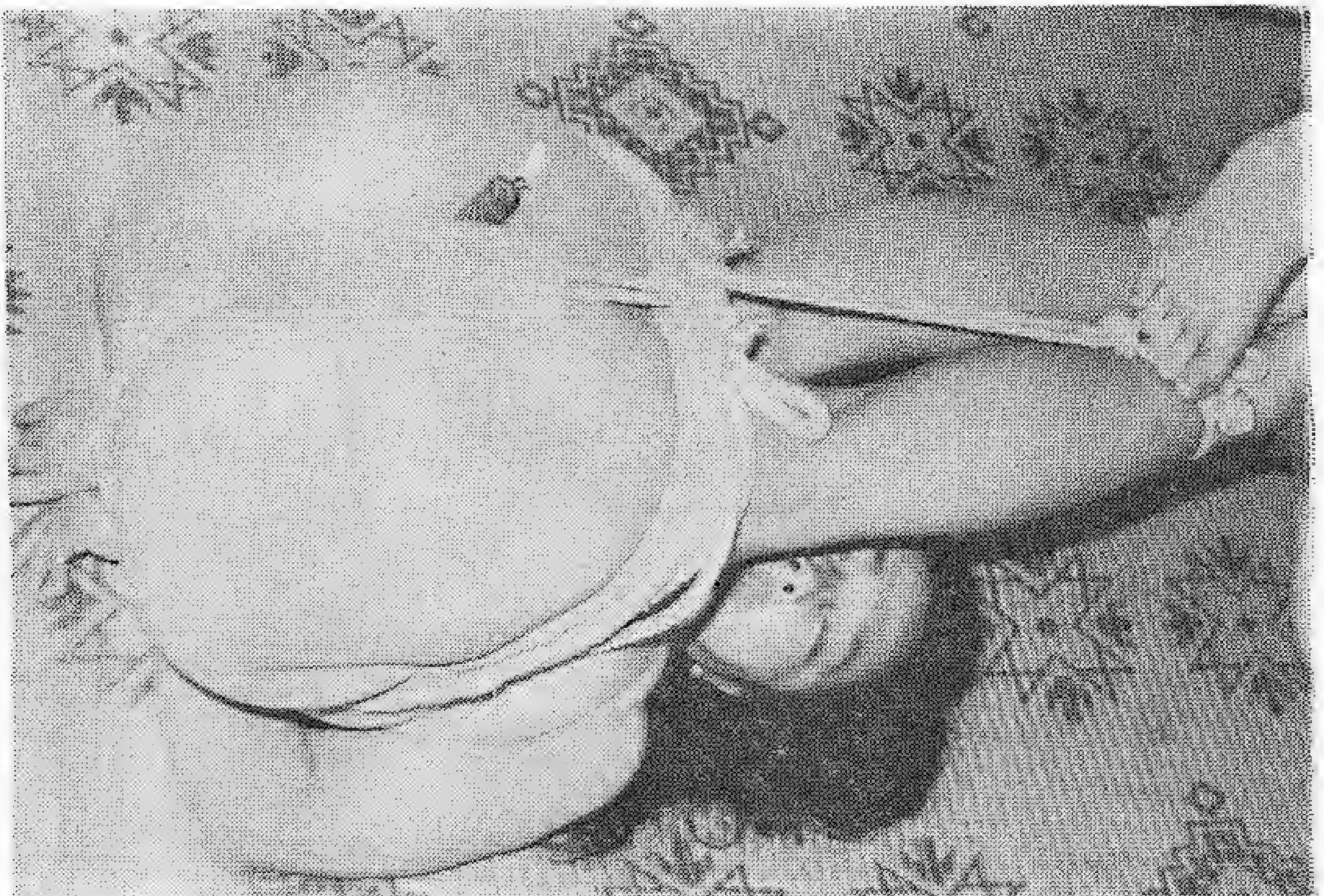
牝豚の苦痛の呻きに、甘美が加わっていった。疼くような被虐の快感に、ドッポリとつかって女の表情は、甘く変貌してゆく。

喜美夫人は、A感覚の反応も敏感である。

去年の春頃であったか、私は何かに憑かれたかのように、アーヌスへの羞恥責めを、ハント女性の誰彼となく試みて、拒絶されたり、嫌悪されたり、甘受



されたりで、女性みなそれぞれに、その反応は一様ではなかった。
勿論、喜美夫人の場合も、その例外ではなく、私の目標は、まるで必然的のように、それに向けられた。
心が快虐にエスカレートしている場合は、夢中で受け止めて忌避しないが、プレイに熟していない時に、いきなり求めると、彼女も渋い顔をして、いやいやというように、重い腰を振るのであった。
経験からおして、これは喜美夫人に限らずSMプレイ可能の女性なら、大体一様にいえることであった。そうした行為に限らず、心の熟さない時は、A感覚も浣腸も、いきなり直面するのは、まずいやり方のようである。
感情が昂まり機が熟すれば、M女性の場合それを、プレイの一環として、無我夢中のうちに容認するように思われるのである。
充分に気分を昂まらせておいて、徐々にA感覚にかからねばならない。
そろそろ頃やよしと、私の手は、じわじわと、うごめいていった。
彼女とは既に、アナールの方の経験があったし、しかもそれは、かなり完全に遂行されそれによって夫人は、結構、山頂を踏破していた。
そんな野望に捉われた私は点滴をやめて、足首の縄を解くと、胴と太腿を密着させた縄を少し変化させて、足首と両手を縛った縄を解き、首縄かけて、左右の両手足を一束に縛る手段に出たのである。
太腿の圧迫が、開放され、都合のよいポーズが展開される。
彼女も又、腹部の圧縮を解き放たれて、後手も許され、苦悶から解放されて、ホッとした表情になり、私が求めなくても、一束に縛った両手足を開き気味にして待ち望んでいるかに見えるのであった。
喜美夫人は決して嫌ってはいない。むしろ、甘美な恍惚の表情を示している。
こうした無抵抗の状態で、自由を束縛されて辱かしめを受けているということに、M女性は、激しい陶酔を覚えて



いるのであろう。
とりようによっては、大半の女性の場合、それは辱かしめではなく、SMプレイに、必然的に結びつく、甘い快楽の行為として受け止めていた。
現に、彼女の恍惚とした表情は、何よりも明白に、それを物語っていた。



「ああ、あなた、奉仕をさせて」
恍惚にめくるめいて、女は自ら、それを求めてきた。
与えてやることによって、女の快美感は、更に昂められてゆくのであろう。
彼女の、熾烈にして絶妙なる翻弄ぶりに、もうどうにも止まらない気持にかり立てられ私は今や、セーブの出来ぬ至近距離に、刻々近づいたことを予知した。この侭でもよい。それも又、彼女の望むところである。互いに鬩ぎあって、それで終止符が打てたら本望である。
没我の境地に於いては、他のすべてのことは想念の外にあった。それでいて、神経は極度に緊張して、敏感にもなっていた。
私の耳朶に、人の気配を感じたのは、正に一触即発の、そんな時であった。
ハッと顔を挙げて、物音に耳をすます。この四帖半の、壁を隔てて、物音を感じ、アパートの隣の部屋に、誰か人のいることを直感したのである。
呀っと思う間もなく、神経が他に走った時の冷えぶり。それは正に、ものの見事であった。
「しッ、誰かいるよ。隣に？」
そっと声をひそめ、甘い声をたてる、喜美夫人を制する。
「えッ、どうしたの？」
その口を押え、私は金縛りのように、姿勢を崩さず、全神経を耳に集中させた。
又、ガタッと音がする。カメラなどで、右往左往していたなら、この程度の物音は、懼



らく看過ごしていたであろう。
燦らかに、音を忍ばせて、隣室の住人は、私達の様子を窺っているようである。
ハッと、ひらめいたのは、盗聴器のことであった。
近頃はウカウカと情事も楽しめない。いつどこで、どんな仕組みが、たくらみがあるか分からないのである。況してや、ここは、アベックホテルの様な密室ではなく、八室棟続きの、アパートである。壁のようにみせかけてあっても、インスタントで、ベニヤ板にモルタル塗りならまだしも、吹きつけのような壁が罷り通る時代である。
私は、彼女を制止し、音を殺して立ち上がると、足音を忍ばせ乍ら、辺りを念を入れて調べてみた。
隣室との壁添いに、テレビが据えられ、その上に、一個の10本入のピースの箱が、無雑作においてある。
取り上げてみると、煙草の重さではない。そっと抽出してみると、果たして、マッチ箱大の、超小型盗聴器が、隠されてあった。
極小のつまみをオフにして、
「大変だよ。これを御覧、近頃流行りの盗聴器だよ。高感度だから、五〇米や百米先でも盗聴出来る。まして、隣室ならお茶の子サイサイさ。きっとジュンの仕業だよ。隣室は友達に違いない。面白半分に、我々のSMプレイの様子を、盗み聞きしたか、カセットテープにとったに違いない。どうする?」
「とも角、この縄を解いて頂戴――。いやーねえ。それじゃ、私達が、この部屋へ入ってから、喋ったことや、私の声など、全部、聞かれていたのね」
「そうらしい。気がつくのが遅かった。最初によく調べておくべきだったよ。ジュンを信用していたからね。悪気じゃないと思うけど私達のプレイの証拠にはなるね。それで、脅すこともあるまいが、人にすべて盗み聞かれ

たとなると、いやな気になる」

「どうしましょう……」

村上喜美は、没我の快楽の境地から、すっかり醒め果て、困惑と危惧を、ありありと泛かべて、両手で胸を抱えて、ペタンと坐り込んでしまった。

「盗聴器を止めたから、何らかの反応があるよ。一寸その侭で、い給え」

私は、静かに壁により添って、耳を当て、隣室の気配を窺った。

何か、ごそごそと動く気配と共に、軽い、しわぶきが、数度、聞こえる。

どうすればいいか――。

盗聴の事実は、あきらかである。

隣室へ掛け合いにゆくべきか――。

惧らくは、シラをきってトボけるに違いあるまい。むしろ、逆ねじを喰わされ、私達の情事を吹聴することにもなりかねない。

この侭、黙って看過ごすべきか――。

FMラジオで聞いていただけなら、証拠も残らないが、カセット付FMラジオなら、完全に、テープに収録されているに違いなかった。

卑猥な痴語を吐き、あられもない嬌声、SM的な言辞など、単なる情事以外の言動は余りにも多かった。

これくらいのことは、やりかねない最近の学生である。

このテープを、あちこちで披露されては、それこそ、どうにも恰好がつかないであろうし、村上喜美夫人の素姓や、地位、プライバシーに汚名と傷痕を与えぬとも限らない。

弱ったことになったと、私はしばしは思考も纏まらず頭を抱え込んでしまった。

（落着くのだ。落着いて最善の策を練ろう）

さて、どんな名案が浮かぶというのであろうか――。

もう情事どころではない。すっかり白けきって、私達は気拙く沈黙を続けていた。

もう少しで、私は飽和状態に到達する筈であった。いっそ、燃え尽したあと、その事実を知った方が未だしも救われる気がするのであった。

未完のくすぼりと、違和感



は、憂欝な焦燥を、かき立ててゆく。
おこりが落ちたように、村上喜美夫人は、あわただしく衣服を纏い、頭髪を束ねて、濃いめの化粧を落としていた。
抗議すべきか、それとも黙って泣寝入りするか、とつおいつ、思案にくれる。
ここに盗聴器はあっても、隣人が盗み聞きしたという証拠は何もない。
しかし、盗聴器は、紛れもなくONになっていた事実——。
ジュンの部屋に、スイッチの入った盗聴器のみ放置されている筈がない。
ジュンと隣人の共謀は分かっていても、抗議の方法は、余程考えないと難かしかった。
腹いせに、盗聴器を破壊してやろうかとも思ったが、反って反動的に、吹聴されては叶わない。
声だけとはいえ、SMプレイの対話や、夫人の媚声は、余りにも生々しかった。
「弱りましたね。いい思案が浮かばない？」
「ジュンが、こんなことをするとは、思いもよりませんでした」
「懼らく、いたずら心でしょうが、何しろ内容が、余りにもズバリですからね。ジュンに事情をきくより仕方ありませんね」
「帰るのが遅くなりましてよ」
「待つしか手がないでしょう。どうぞ、あなたはお先に帰って下さい」
心がさめてしまうと、口調まで事務的に変化してゆく。
夫人は、しばらく思案していたが、やっと意を決したように、
「それじゃ、主人も不在ですから、ジュンとの、話の結果をお電話して下さいね。すごく気になりますもの」
「ええ、そうします。ベッドに転がって、本でも読んで、ジュンの帰りを待ってますよ」
「折角、愉しかったのに、何かまだ心残りですわ。あなた、結局は何もなかったのでしょう？」
「あなたが一番御存知の筈です。なまじ、こんな事実を、爾前に知ってしまったことを悔んでいますよ。今更、その気にもなりませんからね」
「いっそ、ホテルへでもゆけばよかったのですわ、落着けて……。私のせいですわ、御免なさいね」
「不測の珍事ですからね。奥さんの名誉の為に、必ず、何とか手を打ちます。安心していて下さい」
「主人の件も忘れないでね。じゃあ、悪いけど、先に帰りますわ」
おこりの落ちた病人のように、夫人はケロリとして、そそくさと出てゆく。
時計は四時——数時間、ジュンの帰るのを待つ間の、何と長きことよ。

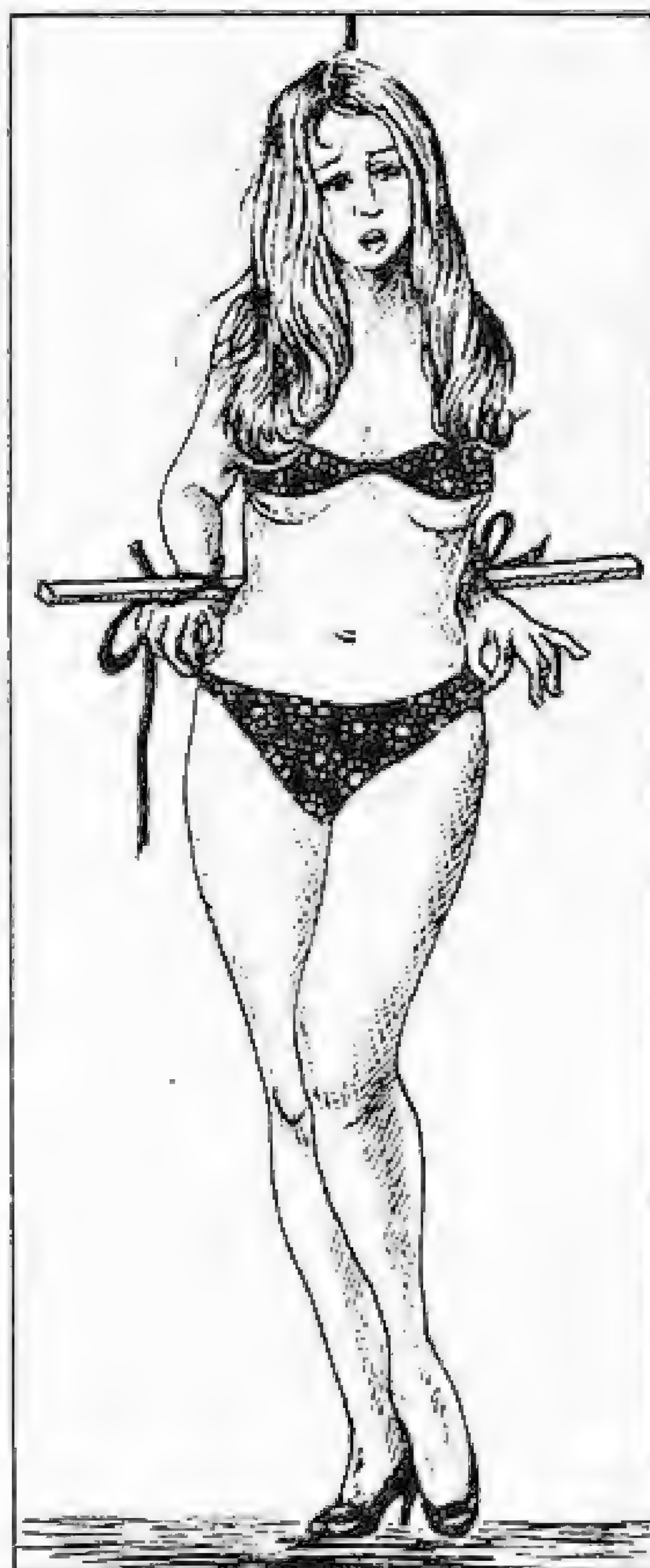
×　　×　　×

「へえ、どうかしたのですか？」
寝そべっている私をみるなり、ジュンは呆気にとられた顔をした。
「どうかしたから、こうして君の帰りを待ち兼ねていたんだよ」
「ボクを？　何だかヘンですね。それで、奥様は？」
「とっくに帰りましたよ」
「又、一体、何があったのです」
赤いリュックを、無雑作に放り投げて、ジュンは、虚心胆懐に聞く。
「何があったもないものだ。こんなものを仕掛けられていたら、誰だって気にするじゃないか。ヘンなことするなよ」
私はピースの箱からとり出しておいた、盗聴器を、ジュンの眼前につきつける。
「あッ、気がついたのですか。こいつは弱ったな」

ジュンはニヤニヤして、一向、悪びれた風もなく、頭を掻いた。
「スイッチが入っていたよ。誰に聞かせるためだい?」
「あれ、それじゃ切り忘れたのですね。実は誰にも内緒だったけど、隣の学生夫婦の生態を盗み聞きしていたんですよ、これで」
ジュンは、リュックを開いて、FMラジオを、とり出してみせた。
「じゃあ、君が聞いていたのか?」
「ええ、よくないことだけど、余り猛烈なので、つい……」
ジュンは改めて、もう一度、頭を掻いた。
気の抜けた様な安堵感が私を包む。
知らず知らず、表情が、なごむのをおぼえる。
事態は、全く逆ではないか。余裕をとり戻した私は、もう面白半分の興味で、ことの仔細を聞き出していた。
「大学の四回生なんですが、この夏、同じ大学の二回生の彼女と、激しい恋愛をして、親の反対を振り切って、同棲みたいな結婚をしたのです。大学生同志の、学生結婚なんですよ。夜毎、夜毎、悩まされちゃって、眠れないものだから、いっそ、判っきり聞いてやれという気になって、隣の壁近いところに、アレを仕掛けちゃったのです。一晩に二回、三回はザラですからね。あれで、よく勉強が出来るものだと、つくづく感心したりあきれたりですよ。彼はアルバイトに出ていて、今日は確か彼女だけ残っていた筈ですよ。静かだから、聞こえていたかも知れませんね。何しろ、あの奥さん、あの時には、大変なんだから」
私は苦笑して、照れた。ジュンはニヤリと笑った。
「奥さんが心配しているから、そのことをよく電話しておくよ」
「そうして下さい。アルバイトの口が、一つ減ったんじゃ叶いませんからね」
ジュンの濾れてくれたコーヒーをのみほして夜空の綺麗な戸外へ出たのは、もう午後の九時半を廻っていた。
ジュンに聞いた公衆電話を探し求め乍ら、フト、一抹の不安が、胸をかすめるのであった。
余りにもスラスラと述べた彼の言葉に、大きな詭計を感じたからである。
発見された時の言訳を、チャンと準備していて、隣室の仲間と共謀し、今頃、ニヤニヤ笑い乍ら、私達の情事と、プレイの一部始終を、仲間と聞いているジュンの、してやったりという表情が瞼に浮かび、この若者の言葉を、素直に信じてよいのか、うまく丸め込まれたのか、私には半信半疑であった。
電話で、夫人にジュンの弁解を告げると、受話器の向こうで、明らかに安堵の溜息が洩れた。
「やはりジュンは信用出来ましたのね。人の情事をきくなんて悪いけど、私達の事でなくて、本当によかったですわ。子供が疲れて、すぐ寝てしまいましたのよ。お手伝いも休ませました。よかったら、そっと、いらっしゃいません?」
未遂の情事に、ふと心を走らせたが、もう今の私は、精神的に参ってしまって、今一度の、声を忍ばせての、夜這い同然の行為には気が進まなかった。
名残り惜しげな夫人の声を耳朶に残して電話をきると、昨夜は、この大空をジャコビニ大流星雨が流れたのかと、改めて見上げ、感傷的な感慨にひたり乍ら、夜のプラットホームへと急いでいったのであった。

――(了)――

カット・小川茂正



創作

SM歌手

佐原陽一郎

その白い壁の向こうに何が起きるかを、前もって知っていたら、私は決してドアのノブを回さなかっただろう。

レコード会社のスタジオというのは、そうでなくてもあまり感じの良いものではない。

どの部屋も厳重な防音装置がほどこされ、白々としたライトに浮かび上がったステージには、マイクが立っているだけで物音もなくガラスに遮られたミキサー室ではパイロットランプが意味あげに点滅し、テープの入っていないリールが空転していたりする。

パメラに、はじめて逢ったのは、そうした深夜の録音スタジオなのだが、私が驚いたのはパメラの美しさより、その白い手首にきつくくい込んだ手錠と、ワンピースの腰にまわされた捕縄の、ものものしさであった。

私は、レコード業界誌『オーディオ通信』の記者として十年近いし、今日まで人よりはいろいろな体験をしてきたつもりであるが、金髪の美人と手錠という取り合わせには、まずドギモを抜かれた。

それに相手は外人だから当然のことだが、ペラペラと英語で私に話しかける。かろうじて彼女の名と「私は歌手になりたい（アイ・ウォント・トゥビー・ア・シンガー）」というのは分かったが、その外は、さっぱり聞き取れなかった。

私が助けを求めるように、ミキサー室を振り返ると、暗かったルームライトが一せいに明るさを増し、カーテンの陰で笑いを噛み殺していたらしい野々宮ディレクターの声がスピーカーから流れてきた。

「やあ、さすがの強わ者も、弁慶の立往生というところかね」

「真夜中の一時に人を呼びつけておいて、恐れ入った、ご挨拶だね」

「まあ、そう怒るなよ。冗談で来てもらったんじゃない。歌謡界を揺るがすホットニュースを提供しようとしているんだぜ」

「いい加減にしろよ、ノンちゃん。これは悪趣味というもんだよ」

私と野々宮との付き合いは、かれこれ六、七年になる。業界誌の記者とディレクターという関係は、互いに持ちつ持たれつ、新譜が出れば適当に宣伝効果のある記事を流し、その見返りとしてレコード会社から、かなりの量の広告が掲載されていた。

雑誌社は広告費や購読料の中から、ディレクターにマージンを渡しているので、レコー

ド会社の会計年度が変わる頃になると、さし当たって必要でもない一ページ大の広告が誌面を埋めるのであった。

お互いに相手の痛い所を知りつくしているだけに、無遠慮な要求や相談もできる間柄であり、私にとって野々宮は、利用価値のある人物の一人であるといえよう。

「つまりだな、もうあたりまえの声をした最大公約数的な歌手は、だめなんだ。森進一なんて、世が世ならレコード会社のオーディションで、絶対に落とされる声だぜ。録音技術が劣っていた戦前のレコード界では、美声で地声のデカイやつが幅をきかせた。東京音頭を歌って家を建てたといわれる三島一声から霧島昇へと続く美声歌手の系譜は戦後になって三橋美智也で終止符を打った。ご三家といわれた、全盛期の舟木一夫、橋幸夫、西郷輝彦も決して美声ではない。現在、成長株ナンバーワンといわれるCBSソニーの、にしきの・あきら、だってそうだ」

ミキサー室のドアが開いて、小柄な体格を事さら大きく見せようとでもするのか、いつも胸を反らし気味に外股で歩く癖がある野々宮が姿を現わした。

薄くアンバーコーテッドした縁なしのメガネをかけ、髪はオールバックだが、額の上の方まで、かなり禿げ上がっている。不規則な職業に特有の、ドス黒い皮膚をしているが、顔立ちは端正で鼻梁が高い。見えっぱりで、酒好きで、借金の名人というのが社内の定評であるが、歌謡曲ディレクターとしての感覚は抜群で、これまで十指に余るヒット曲を出していた。

「これから勝負をかける秘密兵器は、このパメラだ。ごらんのとおり、ルックスは完全な外人だが、まだ日本から外へ出たことはないんだ」

私は啞然として、ことばもなく、パメラと野々宮の顔を見つめるだけであった。

「しかしパメラは、よくあるような日本人と外人との混血ではない。両親とも純然たるユニオンジャックの血を受けたイギリス人だ。ここでパメラ出生について、くわしく話す時間はないが、約十九年まえ、日本の陶器の美しさに魅せられた若い英国人夫妻が陶器の町に住みつき、陶匠として世界的に名のあるK氏について修業をはじめた。熱心に腕をみがいたので、かなりレベルの高い作品ができるようになり、K氏も碧眼の弟子の将来を嘱望していたが、不幸な事故が起こった。イギリス人夫妻は、ある日、町で酔っぱらい運転の乗用車にはねられ、夫は即死、妻は重傷だった。妻は臨月で病院でも胎児は絶望視されたが、奇跡的に意識不明のまま女の子を生み落とした。その子が、このパメラ・クーパーだよ。パメラの母も間もなく息を引き取った。

この話は、まだ後日談があるんだ。自動車を運転していたのはK氏の息子だった。K氏は地位と財力を利用して新聞記事を、もみ消し、町の人の口を封じたが、孤児となったパメラについては心を痛めて引き取り、今日まで養育してきた。ところがK氏が昨年、病死すると遺産をねらう一族が、よってたかってパメラを追い出しにかかった。パメラは居たたまれずに、家出同然のかたちで上京してきたんだ」

パメラは、野々宮が話している間、終始、無言であったが、愁いを帯びた碧い目は、思いなしか潤んでいるように見えた。

「ごめんなさい。英語を使ったのは、野々宮さんの、命令なんです。友だちの雑誌記者をびっくりさせてやろうっていうんです」

パメラは流暢な日本語で私に話しかけた。

「あたくし、どうしても歌手になりたいのです。もう何も頼るものがないし、食べてゆく

ためには、どんな苦しいことでも、がまんできると思います」
私は野々宮がパメラを新人歌手として売り出そうとするＰＲ戦術が、わずかながら判りかけてきた。
かすかにカールした長い金髪が、房々と肩にかかり、明眸と呼ぶのが本当にふさわしいと思える愛くるしい瞳と、頬から口元にかけての外人特有の細そりした線は、どこかイギリス女優のタイナ・エルグを思い出させた。
「パメラを歌手として、どうしても成功させてやりたい。そのためにボクは、あえて非常手段をとることにした。パメラを世界のＳＭ歌手第一号に仕立て上げるのだ」
「パメラに何を歌わせる気なんだ」
私は野々宮が意図するものを、ある段階まで読めていたが、それを、あえて本人から、いわせようとした。
「これまでにも、混血歌手のサリーメイに演歌調のブルースを歌わせたレコードが出ている。それはそれなりに成功していると思うが、ボクのレコードは、そんな二番せんじとは違う。シングル盤、三分二十五秒の中に歌詞は一行も出てこない。もちろん、由紀さおりのスキャットとも全然、別なものだ。ボクはレコードのＡ面全部に、パメラのスクリームを吹き込む。スクリームは悲鳴という意味の英語であることはわかるだろう。バックに流す音楽はフルートを使った。スローテンポでは幻想的になり過ぎるので、わざとハイビートにしてアクセントをつけた。手錠をはめられたパメラの写真をジャケットにも使ってトレードマークにするつもりだ」
「ＳＭというのは、スクリームという意味なのかい。それとも……」
「もちろん、サディズム、マゾヒズムととっても、それはかまわないさ。ボクは、さっきパメラを世界のＳＭ歌手第一号といった。ボクが海外の音楽資料を調べた限りでは、縛られたり、手錠姿でステージに出ている歌手はまだ、どこの国でもデビューしていない」
「わかった。トピックとしてはマスコミの注目をあつめるだろう。しかし、さっきノンちゃんは、最大公約数的な声の歌手は、もうだめなんだといったね。パメラのスクリームははたして商品価値があるのかどうかが問題になってくるね」
「それを知ってもらうために、君をこんなに遅く電話で呼びだしたのさ」
野々宮は、小さな鍵でパメラの手錠をはずして、録音スタジオの片隅へ連れていった。
そこには、オーケストラに使う木製の階段や楽譜立てなどが乱雑に積み重なっており、天井から縄梯子に似た、かたちをした二本の鎖が下がっていた。
野々宮は、パメラの両手を上げさせ、皮ヒモで鎖の末端に縛りつけた。パメラは、バンザイをした格好のまま、ハイヒールの爪先で立った不安定な姿勢を強いられた。
スカートが短いので、白いシュミーズのレースが、はなやかに、まくれ上がり、黒いストッキングに包まれた、すんなり伸びた足が太股の方まで見えた。
梯子のかたちをした鎖は自由に回転するので、反動をつけて鎖を回されるとパメラの身体も一諸にスピンするようになっている。
野々宮はパメラのワンピースの胸元を荒っぽい手つきで引きちぎった。
ブラジャーとシュミーズのストラップが、一度に肩からはずれ白い胸が露わになった。
明るいライトの下にさらけ出されたパメラの乳房は薄いピンクに色付き、ブラジャーから弾けるような若々しさを誇示している。
薄いブルーにストライプの入ったワンピースは背中のジッパーをはずされ、役目を果た

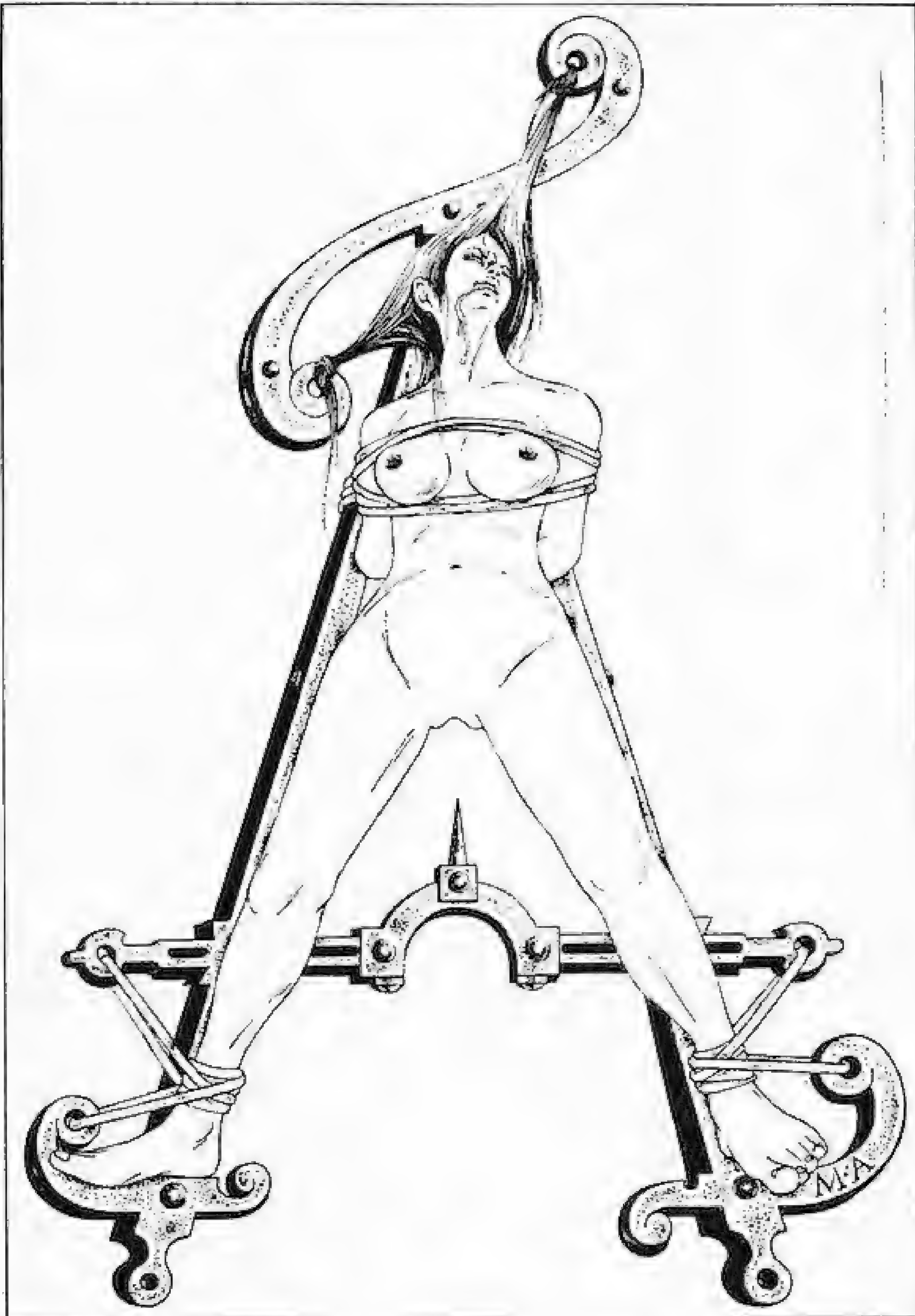
した落下傘のように、すべり落ちた。

残されたミニスカート用のシュミーズは、パメラの太股を申し分け程度に覆っているだけで、少し身体を動かすと、白いパンティがどうしても、のぞいてしまうのだった。

「それでは、はじめよう」

野々宮は、カラオケ（テープにとってある音楽）をスピーカーから流した。

高く低くうめくような、フルートの奏法である。



野々宮は、いつの間にか、にぶく光る皮製の鞭を手にしていた。これは私も以前に見せられた事があり、何でもメキシコからの土産品だという。日本のものよりも丹念に編み上げられており、風を切る音だけでも、女性にあたえる恐怖感は大きいと思われる。

野々宮は、音楽のリズムにのった様に、強烈な一撃をパメラのむきだしになった背中に打ち下ろした。

「ああっ、ウウッ」

パメラの濡れた唇から、ことばにならない短い、うめき声が激しく、ほとばしった。

学生時代に英語の時間で、外人は痛いときに「アウチ」というのだと教わったが、突然の激痛に見舞われたら、そんなことはいっていられないのであろう。ましてパメラは日本で育った外人であるから、苦痛に耐える悲鳴は多分に日本人的なのかも知れない。

鞭がパメラの白い肌に喰い込んで、はね返ると同時に、彼女の身体はターンテーブルに乗ったように、くるりと回転し、また元の位置に戻って鞭の一撃を受けるのであった。

パメラの悲鳴や、うめき声は野々宮が推賞するだけあって、多分にハスキーであり、鞭打ち以外の、セクシュアルな情景さえ想像さ

せた。
パメラの背中には一面に金色のウブ毛が生えており、身体が反転する度に、うっすらと汗ばんだ肌から強い体臭が感じられた。
それは明らかに、日本女性の体臭とは異なり、どこか新鮮な玉ネギを切ったような、刺激臭が、まじったものであった。
パメラの肌には、幾筋もの条痕が走り、悲鳴が、やがて哀願に変わっていった時、音楽が止み、野々宮は鞭をフロアに放り投げた。
「オーケイ、パメラ。プレイバックして聞いてみよう」
パメラは両手を自由にされたが、もはや立っている気力はなく、海岸に打ち上げられた海藻のように髪を乱したまま、フロアに倒れてしまった。しかし、その表情には苦悶や、うらみの色はなく、愉悦の残り火を身体の奥で確かめているような風情があった。
巻き戻されたテープが、パメラの悲鳴をスタジオいっぱいにボリュームを上げて流しはじめた。フルートの合い間に入る鞭の音が、リズムをきざむアクセントになって、パメラの悲鳴にリアル感をあたえ、聞いていると何とも不思議なものであった。
それは明らかに歌のジャンルから逸脱していると私は思ったが、野々宮は、そんな私の心の動きを見すかすように
「これが、はたして歌なのかと世間のやつらは、みんないうだろう。しかし俺は、どこまでも歌として押し通して見せる。俺は歌つくりを二十年やってきたが、今の日本の歌謡界に、本当の歌のこころというものは何もないじゃないか。学生バンド上がりのニキビ面が少しギターを引っかけば、それが作曲家として大手を振って、まかり通っているんだ。パメラのレコードは、現代の不安感をデフォルメして表現しようとする試みだが、ここには少なくとも、つくりものではない人間の叫びがパッケージされていると思う」
私は、ことばもなく、交互に野々宮とパメラの顔を見つめた。野々宮が、どんな理論を展開しようが、ここには明らかに、ＳＭの世界がある。鞭を振るう野々宮のギラギラした視線と、それを受けとめるパメラの肉体との間には、理性を超越した融和があった。
「少し鞭の音が弱いし、パメラもまだ、これでは物足りない。もう一度やってみよう」
「おい、まだやるのかい。もう僕は帰らしてもらうよ」
「だめだ。このスタジオに一歩、足を入れた以上は、君も共犯者として録音に付き合う義務がある。まあ、これは冗談だが、満足のゆく音がとれるまで、ここにいてくれ」
私は結局、窓が白みかける夜明けまで、スタジオを出られなかったのである。

○

パメラのレコードは、社内の反発を受けながらも臨発（臨時発売）というかたちで強引にプレスされた。
発売に先立って、宣伝部は『ＳＭ歌手第一号』として全国的なキャンペーン作戦を計画した。
手錠をはめられたパメラを銀座の歩行者天国に連れ出し、一丁目から八丁目までを引き廻すという企画や、パメラを後ろ手に縛り上げ、ロープでヘリコプターに吊るして、今度オープンする高層ホテルの屋上に着陸させるといった奇抜な案が、真面目に検討された。
野々宮は、そんな企画には耳を借さず、手錠姿のパメラを新宿のクラブに出演させた。
黒いマキシのドレスに身を包んだパメラの美貌と、両手に掛けられた手錠のきらめきが強いアクセントになり、レコード発売前に、パメラの人気は高まってきた。
パメラは、クラブのステージでは、自分の

歌を絶対に、うたわなかった。ヒット曲にはパメラのスタイルに、ふさわしい曲が数多くある。

酔客の出すリクエストは、ほとんど奥村チヨの『恋の奴隷』であり、ちあき・なおみの『無駄な抵抗やめましょう』であった。パメラが、わざと舌足らずの日本語で、これらの歌をうたうと、客は放心したように聴きほれるのである。

「なあに、パメラがうける理由は簡単さ」

野々宮はいう。

「日本人は先天的に白人コンプレックスを持っている。白人の女が、みじめな女囚スタイルをさらして、男性の前にひざまずくような歌をうたえば、劣等感を裏返しにしたサディズムを刺激された男たちが、うれしがるのはあたりまえだ」

パメラの写真は週刊誌のグラビアに載り、レコード会社には、ファンレターが舞い込みパメラは『デビューせざる人気歌手』という見出しで、新聞芸能欄の話題となった。

「縛られても、裸にされても、有名になるため。だから別に恥かしくはないけれど、歌手としてではなく、もっと違った見方をされているようで何だか恐いと思います」

とパメラは語るが、私は彼女の身体には、どうしても、生まれつきのマゾ性が潜んでいて、一度、火をつけられた性癖が、ますますエスカレートしてゆくのではないかと懸念した。

その日は、意外にも早くやってき過ぎた。あれはレコード発売を数日後にひかえた初夏の夜であった。

記事の割付けに手間取って編集室に夜更けまで残っていた私のもとに、野々宮から電話がかかってきた。

「パメラが死んだよ。たったいま……」

「えっ、何だって」

私は、もう少しで受話機をとり落とすところであった。

「おいっ、今どこにいるんだ。くわしい事情を話してくれ」

「会社のスタジオにいる。おれはあの録音でも、どこか満足できなかった。より完全なものをと願って、早々と二作目の音どりテストをしていたんだ。パメラは、おれに注文をつけた。逆吊りにしてくれというんだ。おれはパメラを打ち続け、気がついたらパメラは何も叫ばなくなっていた。驚いて床に下ろした時、パメラは、まだ息があった。パメラは決して、おれを恨んでいなかった。テープを聴かせて、といいながら、おれの腕の中で死んでいった」

窓の外には、濃い夜霧が流れて車のテールライトが、にじんだように明滅していた。

「これから自首する。付き添ってくれるか」

「わかった。いますぐ行くから、そこにいてくれ」

私は煙草に火をつけ、底冷えのするビルの階段を下りた。コンクリートに反響する靴音の中に私はパメラの激しい息づかいと、ハスキーな悲鳴を聴いた。

薄倖な十九才の少女は、何を思い、何を願って死んでいったのか。私は何度となく自分に問いかけ、今度の事件は私にも責任の一端があるのではないかとも考えたりした。

新人としては異例の五万枚をプレスされ、出荷を待っていたパメラのレコードは、永遠に陽の目をみることがなく処分された。

『SM歌手』は、こうしてデビューすることなく忘れられ、野々宮も公判中に拘置所の中で病死した。

——（完）——

連載・時代S小説

紫蘭の門

(17)

風流極道軒

カット・岡たかし

夫たるもの、探るべし、
妻の本能にひそむ希求を……。
その極意に開眼せざる者、
夫たる資格なきのみならず、
極悦の境地悟るを得ざるべし。



女あぐら

夜明けが近い。

もう、ぼつぼつ下男下女が起きだすころだとおもうと、貴子は気がきでなかった。

この元禄屋で、かりにも〃お内儀さま〃と仰がれる身が、何という惨めな姿を、晒さなければならないのだろう。

せめて、大きくひらかれた太股を閉ざすことだけでもできたらとしきりに両足に力を入れてみるのだが、昭吉と和吉が念入りに縛りあげた角八つ打ちの組み紐は、柔らかい肉に喰いこんで緩もうともしない。

あぐら縛りというのであろう。

女の身で、あられもなく大あぐらを組ませられただけでも身をきられるように恥かしいのに、交叉した両足首を縛られ、膝の内側に青竹を横にさし入れられて、膝と膝を、三尺も離して、それぞれ青竹の節に括りつけられている。むろん、一糸も許されてはいなかった。

「旦那さまは大の字とおっしゃったけど一日中、立ったままでは、お疲れになるでしょうから」と昭吉が親切ごかしに、こんな姿勢をとらしたあとで、無造作に内股のあわいに投げかけた真紅の湯文字が、僅かに救いとなっているだけ。

「ア、アウ……」

貴子は、せつなそうに角柱に縛りつけられた上半身を、くねらせた。

昨夜――

おぞましい〝蛸責め〟の拷問をうけたあと湯殿にひきすえられて、躰のすみずみまでを元禄屋に洗い清められたあと、寝所にともなわれて、鴛鴦の刺繍のある豪華な夜具のなかで、骨も身もバラバラになるほどの扱いをうけた貴子であった。

　そのあまりの激しさに、再度ならず失心状態に陥り、果ては「旦、旦那さま。だ、だんな――さま。アアウ……」と、逞しい男の胸に、つい、悶えるままに手が伸びて、

（ダ、ダメよ。ダメだわ、貴子。こ、こんな野卑な男に縋りつくなんて、ダメ……ダメなのよゥ、貴子！）

　ハッと押しとどめたものの、自分自身、いぎたないとおもうくらいに押しひらいてしまった両足の爪先から、こみあげてくる官能の焔に、心ならずも再び縋りつく。胸毛に触れて（ダメ！）と云いきかせたのが、

「ダメ！　ダメ！　ダメなのよ、貴子……」

　おもわず言葉になってしまって、それを、元禄屋に、聞かれたとおもうと、あとはもうほんとうに〝ダメ〟になって、七尺近い男の巨体に、気品のあふれる白蘭のような裸身をからませてしまった貴子であった。

「まさしく、名器。領田さまのお邸でも、そう感じておったが、今夜はまた、ひとしお。前右大臣家の姫ともなると、すべてが、こうも見事なものかのう」

　枕元の水差しに、手をのばした元禄屋の言葉に、おもわず貴子が、

「旦、旦那さまァ……」

　と、むっちりと肉のみちた肩をよせ、しっとりと汗ばんだ両脚を、からませようとしたそのとき、

「フッフッフ。男とは、けじめが大切でな。女、こどもには、わからぬ」

　サアッと、のびた手が鈴を、たからかに鳴りひびかせたではないか。

　鈴を鳴らすということは、番頭の昭吉と和吉の手に自分が、ゆだねられるということにほかならない。貴子は、

「お許しを。旦那さま、お許し下さりませ。いましばし、ここで、このまま……」

「儂のそばに居りたいというのかな、姫。フッフッフ、それはなるまい。女というものはいつでも、〝もっと、もっと！〟と、求めつづける、どの女でも、そうじゃ。どんなに可愛がってやっても限りがない。女の欲望に限りがないように、男の〝夢〟もまた、いや、

前号まで――昭和四十八年新春の貨幣価値に換算して、三兆円にもなろうか。日本列島に「金銀湧出」と歴史にのこされている頃に、天下を取った豊太閤は、一子秀頼のために、莫大な財宝を残し、その秘密を**五夜のロザリオ**に託した。今その謎をとくロザリオのうち四つまでを手にした**元禄屋**は、意気すこぶる盛んに**菊亭貴子**をはじめとする美女を心ゆくまで責め嬲る。

女以上に無限であり、生きている限り壮絶なる野望を追いつづけるものよ」

　高らかに笑った元禄屋は、待っておりましたとばかり、襖のそとで手をついた、昭吉と和吉に低く、押しころした声で、

「晒せ。姫を晒しものにするのじゃ。フッフフフ。美しい女というものは、独り占めに、すべきものではなく、できるかぎり多くの男どもに開放し、ともに、うたかたの人の世を享楽すべきもの。貴子は、まさしく、それに応わしい美しい女よ」

　あとは、くるりと寝返りを打つと、昭吉と和吉に、縄うたれていく貴子のほうには何の関心もないかのように高鼾を、ひびかせはじめたのであった。

——憎い男……

貴子は、忍びよる秋の夜明けの冷気を感じて、ふと、身をふるわせた。

東の空が、白んでいる。

おっつけ、下女のお梅か、お種。それとも下男の熊造たちが目をさます頃であった。

「ア、アッ……」

元禄屋の匂いの、しみついている自らの、乳房や太股を、複雑な気持でみおろして貴子は、せつなく喘いだ。

身をかがめようにも、角柱を背負うようにして細腰と首頸の二カ所を太縄で、つなぎとめられていては、いかんとも、しがたい。

東につらなる土蔵の甍に、処女の〃血〃をおもわせる朝日のかげが刷かれる。いまでは淡い光となった燈籠が、ほのかに貴子の内股を隠す、ただひとつの布である真紅の湯文字を照らしだしていた。

花と深淵

「アレッ、なんとまあ、お、おかみさんじゃあないか!」

むざんに縛られた裸女をみて、お種がスッ頓狂な声をあげると、お梅も、

「ほんにまあ、こりゃ、どうしたこと! 早う熊造さんに知らせにゃあ!」

貴子が晒されている角柱は、間口二十間、奥行は、その十倍はあろう元禄屋の本邸の、中庭に面した離れに通じる廊下のなかほどにあった。

お梅のしらせで、眠そうな眼をして、あらわれた下男の熊造も、一目、その場の貴子をみるなり「こりゃ、ど、どうしたことじゃ」と尻もちを、ついてしまう。

京都から、お下り遊ばされた、やんごとない姫君。なにかの訳があるらしく、座敷牢につながれなされてはいるものの、まさか、このような姿で晒されているとは。

熊造につづいて息せききってやってきたのは、手代の金吉と女中頭のお松であった。

「こ、これは、貴子姫!」

金吉が、あわてて角柱に縛りつけられている縄を、とこうとするのを、

「お待ちよ、あんた。勝手に、なにをするのよ! こ、これは御主人さまのお云いつけじゃあないかしら」

「と……お松! これが旦那さまの……」

「そうともさ。きっとこれは、御主人さまがこのように」

お松は、ゴクンと生唾をのみこみ、貴子のあらわな裸身から目をそらしたが、

「……旦那さまの御命令で、こう……晒されておられるものを、おまえさんなんぞが縄を解いたのでは、あとで、きついお叱りを受けることになりますよ」

「だ、だって、お前……こんなに明るくなったのに、お姫さまを、いつまでも、この恰好にしておいちゃあ、あまりに」

手代の金吉、目のやり場に、こまった。

ところが、女というものは怖いもの。

「そうよ、そうよ。お松さんのいうとおり。このままにしておかないと、御主人さまから大変な、お叱りを受けるわよ、金吉さん」

お種が、手に持っていた竹ぼうきで、貴子のあぐら縛りにされている太股をつつくと、

「このままにして置くべきよねえ。これが旦那さまの御命令なのですもの」

真紅の湯文字を、その竹ぼうきのさきで情容赦もなく払いあげようとした——。

と、その瞬間、高い築地塀を、ひらりと乗りこえた影が、ひとつ。

別に築地塀を乗りこえるまでもなく正面から入ってきてもよいのだが、麻生六本木からここ日本橋四丁目の元禄屋の本邸まで一里十

一町、一直線に、かけ抜けてきたらしく、玄関に回るのも面倒くさいと、つい近道をして築地塀を越えた——この男。痩身で手足が異常に長いといえば、羅卒の鞭兵衛の子分で斑縄の斑猿と、すぐ知れよう。

「斑猿さん、またこんなに朝早く何事で！」

　驚いて声をかける金吉には目もくれず、貴子の晒されている廊下に飛びあがると、

「これはこれは、姫君。久しぶりに拝顔の光栄に浴しまする」

　芝居がかった声で呼びかけて、縄目からとび出した大理石のように白く、ゴムまりのように弾んだ乳房に手をかけた。

「あ、あ、あなたは、猿、斑猿さま……」

　下男や下女たちの、いたぶりを瞼を閉じてじいーっと耐えていた貴子であったが、突如乳房を掴まれて眸をひらき、それが馴染みの顔であることを知ると、ポオーッと首頸まであかく染めた。

　この斑猿は貴子にとって単なる馴染みではない。江戸に下ってきてからというもの、何度この男に哭かされたことであろう。

　元禄屋が貴子や雅子を責めるとき、いつもその拷問係をつとめるのが羅卒の鞭兵衛や、その子分の斑猿たちであった。

　憎さも憎いが、その斑猿に、このようなところを見られるのも、この上なく恥かしい。

「斑……猿……さま……」消え入りそうな声をだして、うなだれる貴子に、

「ヘッヘッヘッ。いつ見てもお美しい」と紅真珠色の乳首を右手の親指と人さし指で、つまみあげて貴子の羞恥を楽しんでいたが、ふと、小鼻をうごめかせて真顔になると、

「こ、こいつは、どうも。いままで気づきませんで、この斑猿としたことが……」

　と恐縮したように云う。が声とは、うらはらに指先は、より強く乳首から、その麓の豊かな隆起を（これでもか、これでもか）というように、ひねりあげはじめたではないか。

　そのあまりの痛さに、

「アッ、アッ。ま、まだら猿さま。お、おやめ下さいまし」

　喘ぎながらも貴子は、斑猿のいった〝いままで気づかなかった〟という言葉が気になって、その長い右手が乳房の下から脇腹にかかり、もう一方の手が、あぐらに組まされた太腿にかかったとき、おもいきって、

「な、なにに、お、お気づきに、な、なりましたの……ま、まだら猿さま」

　と口走ってしまった。

「フッフッフッ。昨夜、旦那と寝なすった、それに気がつきやしてね。旦那に可愛がられたあとかと思うともってえねえやら、なにやら妙な気分になりやすぜ。どうです、図星でしょう。第一、まだ元禄屋の旦那の匂いが残ってまさあね」

　両手を、いそがしく動かしながら斑猿は、貴子の首頸から乳房の谷へ顔を押しあて、

「アウ、そ、そのようなことを！　ヒ、ヒャアッ、お、おやめになってくださいまし！」

　と貴子を、せつなそうに喘がせておいて、

「第二の証拠をお見せしましょう」とニヤッと笑うと、「おい、金吉。それに、お種もお梅も、お松さんも、よおく見ておくんだぜ。抱かれたあとの女というのは」

　いったん貴子から離れた斑猿は、左右の袖を肩口まで、めくりあげると、

「ヘッヘッヘッ、姫さま。では、とっくりと拝見させていただきやすぜ。……ご、ごめんなすって！」

　言いおわるより早く、内股を僅かに覆っていた真紅の湯文字が宙に舞い、

「ア、アレッ。ヒ、ヒャアアッ……」

　貴子の悲鳴が、晩秋の朝の冷気のなかに、ひびきわたった。

元禄屋に骨がバラバラになるほど、もてあそばれ、その挙句、こうして大あぐらを組まされて晒しものにされている身ではあったがいや、それだけにと言ってもよい。昭吉の投げかけておいてくれた一枚の布が、どれほど羞恥心を、やわらげてくれたことであろう。
その布が貴子の最後の砦である。その真紅の湯文字が、いま、こともなげに剝ぎとられてしまった！
一瞬、血の気を、まったく失ってしまった豊かな双頰に、築地塀の上にのぼった朝日がさしこむ。いや、双頰だけではなかった。もはや何一つ覆うもののなくなった下腹から太腿にかけて、これ見よがしに、あかあかとした朝の光が、しみとおって行く。
その光線の束を、まるで鋭く燦めく穂尖をつらねた何十本かの槍のように感じて、身をすくませる貴子であった。
夜ならばともかく、夜、蝋燭や行燈の光のなかならばともかく、広庭をのぞむ廊下の中央で、朝、太陽の光を浴びて、女体のすみずみまで曝け出す——。
「ア、アアア……」
もし花が、ものいうものであれば、深山に人知れず咲いていた白蘭の花が摘みとられて群衆のまえに飾られたときに発するであろうような、この世のものとも思われない妙なる喘ぎが貴子の唇から洩れた。
「ヘッヘッヘッ、そう恥かしがることはありませんぜ、姫さま。女は、誰でも……」
といったものの、さすがの斑猿が、ひょいっと、つきだそうとした手を途中でひっこめたほど美しく、犯しがたいほどの聖（きよ）らかさを、たたえた貴子であった。

おふじさん

「どうなさいました、斑猿さん」
斑猿の手が途中でとまったのを見とがめた手代の金吉が、そばによってくると、けげんに尋ねた。
金吉にしてみれば、さきほどから眺めつづけている女体。いま、真紅の湯文字を剝ぎとったからといって、その瞬間は、ゴクッと唾をのみこんだものの、あとは、なんのことはない。ここまできた以上、〝触らにゃ損々〟という気になったのも当然。だのに、女にかけては目のない斑猿ほどの男が手をだすのをためらっている。なぜか——と、もう一度、訊ねようとして、ふと金吉は
「こ、この匂いは！　斑猿さん、この匂いはいったい、な、なんです」
「フッフッフッ、やっと気がついたか金吉。俺が手をとめたのは、この香りのせいもあるのよ」
ライバルの出現で、やっとわれにかえったかのように斑猿は、長い手を、ぐるぐると振り廻して気分の転換を試みると、
「蘭麝の香りよ、らんじゃのな」
「ら、らんじゃと申されますと」
「知らなけりゃあ、それでいい。ともかく、この姫君の匂いでな、この匂いのゆえに元禄屋の旦那さまや老中領田さま、北町奉行所の与力工藤さま、勘定奉行の肥田さま、鳥尾芳年に戯作者の為永春彦先生……」
並べたてているあいだに、こいつはお饒舌りがすぎたとおもったのだろう。
「ともかくも、この江戸に二人といねえ名器の持主。お前さんたちのきたねえ手で触るものじゃあねえ。さあ、ひっこめな。ひっこめなってことよ、この手を！」
ピシャッと手刀を喰わせられて金吉の手がしかたなく、ひっこんだが、その時、突如、廊下の下で、お種たちが騒ぎ出した。
「この女だって、わたしたちだって、ちっと

も変わりはないのにねえ。なにをおたかくとまってるんでしょ。おんなとすりゃあ、お、同じじゃあないのさ！」

手にした青竹で貴子の体のあちこちを、さししめしてみせるお種は、どうやら斑猿の言葉に嫉妬をおぼえたらしい。

「金吉さん、かまうことはないよ。からかっておやりよ。おやりったらァ！」

と、ヒステリックな声をあげて、さかんに金吉を、けしかける。あふられて金吉が、

「そうだとも、斑猿さん。どうせ、このように晒しものにされている女。触るくらい、かまやぁしませんでしょう！」

いわれてみれば、そのとおりである。なにも貴子をかばってやる必要などはない。主人の元禄屋をはじめとする〝お偉方〟の玩具にすぎない女ではないか――。

そう思っては見たものの、やはり七尺近い黒髪を廊下にながく波打たせて、しっかりと瞼を閉ざして観念しているその姿には犯しがたい気品があり、金吉やお種たちの手には触れさせたくないと斑猿は、奇妙に、真剣な気持になるのであった。

そこで、いましも、お種から手渡された青竹で貴子の柔肌を、いたぶろうとしている金吉に向かって、

「待ちなよ。俺が、たっぷりと拝ませてやろうといっているじゃあねえか！」

と、いくらかドスのきいた声をだすと、

「貴子姫、お聞きのとおりだ。このげすな野郎どもが騒ぎやがるんで、ひとつ見せてやっちゃあくれませんかい」

再び、お種たちがブーブーいい出す。

「なにいってるのよ。いちいち、お伺いをたてることなど、ないじゃあないか」

「ほんとだよ、斑猿さん。自分一人が、いい気になって、この女の気を惹こうたって、そうはいかないわよ」

「それ、それ、早く早く。俎の上にのっかってる鯛じゃあないのさ。おくのおくまで料理して見せておくれよッ！」

男と女――女のほうが、はるかに残忍な動物であることは古今東西の歴史が、それを示す。まして、お種たちにしてみれば、やんごとなき高貴な姫君も一皮剝げば自分たちと同じことだということを、とことんまで調べあげてしまいたいらしい。どうやら女中頭のお松までが、その気になったのか、朝餉の準備でもしていたのであろう、右手に握りしめていた長い箸を斑猿に、つきだすと、

「斑猿さん。さあ摘んで食べてみて頂戴。このあわび、いったい、どんな味がするものでしょうねえ」

あわびと、お松は言った。

ちなみに「隠語辞典」を調べてみると、その数は、驚くなかれ百五十余。古事記の昔から調べてみると五百を、はるかに越える。

これも英語やフランス語などに較べて語彙のまことに豊富な日本語ならではの楽しさであり日本男子たるもの大いに拍手してしかるべし。世上に流布されているもの以外をあげてみると、おちゃいれ、おきのいし、おすがた、おもて門、おこおばこ、おかいちょ、めめっこ、おはち、おくのいん……など。そのほか、おとし穴、おまつり、おくろもの――おとし穴とは、まことにいいえて妙。まさしく男を誘いよせる、おとし穴だし、おまつりというのも男女の饗宴のおくのいんとして面白い呼称であろう。さらに変わったところでは花柳界で、つかわれる〝おふじさん〟というのがあるが、これなどは、いかにもローマンチックな美称であり、最近、マス・コミをにぎわせている〝ポッポちゃん〟とか〝ワレメちゃん〟などという、味もソッケもない表現よりも格段に〝夢〟があろうというもの。


イメージギャラリー『羞恥の中の安息』志羽利也

それにしても〝おふじさん〟とは――たしか、ミス・日本に選ばれて現在も活躍中の女優さんも、そんな名まえだったし、電話帳や社員名簿を調べれば、いくらでもでてくる女性の愛称ではある。

一方、男性のほうの、よび名は――、これは、もう、テレビの午前九時、十時、午後二時、三時の〝奥さま向け番組〟や婦人雑誌におまかせしておいて、そして、いまひとつ、以上は純粋な言語学上の研究であることを宣言させて頂いて。

さて――。朝日のさす廊下の角柱に、一糸まとわぬ身をあぐら縛りにされている貴子にお松から渡された箸を手に、斑猿が迫っていく。

灼熱の一撃

「姫さま。こうなったいじょうは、観念していただくほかはござんせん」

凄艶な美貌を、いっそう、きわだたせて、じいっと、うなだれていた貴子は、斑猿の吐く息が額にかかるのを感じると、

「お、おゆるし下さいまし。そ、そのようなことは、どうかお許しを！」

尻あがりに訴えて、五体を縮めようとしたが、高手小手に縛りあげられているうえに、申し分なく成熟した両脚で、菱形をつくらされているとあっては、両肩をすぼめ、へ・そ・のあたりを波立たせるのが、せいいっぱいの抵抗であった。

「じゃあ、ごめんなすって」

貴子の哀訴に答えるかわりに斑猿は、その右の太腿にあごを、ぴったりと、あてがう。

「ア、アッ、お、お許しを！」

白蘭のような肌に喰いこむ角八つ打ちの組み紐が、ギシ、ギシッと鳴った。

襲ってくる嵐の予感におののいている艶肌を眼のまえに、はて、どこから攻撃を——とチラッと見上げた斑猿の視線が、恐怖におびえて思わず、ひらかれた貴子の瞳と、もろに出あった。

「ヘッヘッヘッヘッ……」

と、これは斑猿の、てれかくしの笑い。

「お、お許し下さいまし！」貴子の、わななく唇から、ほとばしる最後の哀願！

とたん、斑猿の手にした長い黄楊（つげ）の箸の尖端が、さっと伸びた。

「ヒ、ヒィイッ！……」

蛇に噛まれる、いや、それほどの痛みのあろうはずはないのだが、少なくとも貴子にはそう感じられるほどの灼熱の一撃！

「ヒャァアアッ……」

絶叫が、ながく尾をひき、いままで指さし合って下品に笑っていたお松たちまでが、急に真顔になって息をとめる。

第二撃は、より深く。そして第三撃は、反転して高い頂へ。四撃は、より高い峯々へ。五撃は、谷へ。六撃は大峡谷へ。そして第七撃以後は、ピッチをあげて、より速く……。

斑猿が次の攻撃を見送って、黄楊の箸の動きを固定したのは十数撃目であったろうか。

その間、優雅な姫にはあるまじき、けだものじみた叫びをあげつづけていた貴子が、瞬間、玉のような汗をうかべた白い咽喉をゴクンと脈打たせたかと思うと「フウウッ——」と大きな吐息を洩らし、

「ア、ア、アッ……ま、まだらざるサマァ」

と、せつなそうに、ひとこと。

あとは、斑猿の意のままに翻弄されていくのである。

斑猿は、もう肩も手首も、うごかそうとはしなかった。箸を持った指先だけを、十数撃目に発見した貴子の、貴子だけのもつ〝哭きどころ〟にむかって、あやつる。黄楊の箸は恰もドスの如き無気味さを貴子に与える。

由来、女の感覚は千差万別——。

ある女は耳朶に触れられただけで我を忘れある女は脇腹をくすぐられると陶酔し、またキスされるだけで、乳首だけで、首頸に触られるだけで、なかには鼻を、ふさがれてしまうだけで法悦の境に入る女もいるという。なが年、連れそっておりながら女房の〝哭かせどころ〟ひとつ知らない亭主も、この世には多いと聞く。

いま斑猿は、いわば「貴子のなかの貴子」ともいうべき、その秘点を幸運にも偶然、発見したわけで、箸先ひとつで優雅な女体が鋭敏な反応を示すことに、いいようのない優越感に浸ることができた。

（フッフッフッ、元禄屋の旦那とて、はたして知っているかどうか）

斑猿の内心の喜びは、ただちに金吉やお松たちにも異常な興奮となって伝わっていく。

「斑猿さん、もっと、やっておやりよ」

「そうよ、その調子。おやまあ、あの女ったら。フッフフ、いやあねえ」

お梅やお種が、われ知らず自分の袂を噛みしめると、お松は、お松で、紅いしごきに手をかけてギューと、ひきしぼる。

女だけではなかった。熊造も青竹を手にしたままの金吉も、眼を皿のように見開いて、斑猿の手と、黄楊の箸のさき、そして、しっとりと汗ばんだ、やわらかな太腿の、あえかな顫動。さらには、いいようのない表情を浮かべ始めている貴子の美しい顔をみあげて、興奮このうえない、ありさま——。

いつのまにか、貴子の夫、押小路中納言高明が、こよなく、いつくしんだ〝もろこしの雲南という秘境にすむ、牝鹿の香嚢からとれる〟麝香の匂いを漂わせながら、貴子は次第に、ゆめうつつの境に誘いこまれていくほ

かはなかった。
どのくらいのときが流れたことであろう。
五つ（八時）の鐘が遠くで鳴った。昨夜、いくら遅く寝についたとはいえ、やがて番頭の昭吉や和吉が起きだす頃であろう。
「あらッ。わたし、朝餉の仕度が！」
その鐘の音を耳にしたお松が、われにかえったようにいうと、ハッ！　と、金吉たちも夢から覚めたように大きな溜息を洩らす。
と、長廊下の向こうから姿を見せたのは主人の元禄屋ではないか！
あわてて散っていく金吉たちの背に、
「待て、待て。逃げんでもよいわ」
と声をかけると七尺近い巨躯を、はこんでくる。そのうしろから寝呆け眼で、ついてくるのは昭吉と和吉。どうやら主人に起こされたらしく、いかにも恐縮した物腰であった。
そのとき――、
「あッ。い、いけねえ！」
スッ頓狂な声をたてたのは、貴子のまえにまだ蹲ったままの斑猿であった。
「斑猿ではないか。いつ来た」
「ヘエッ、それが、ついさっき……」と頭をかいて、「こ、これは、あっしの大しくじりで。実は親分からのことづけを麻布のお邸のほうからもって参りましたので」
「ほほう、それで」
元禄屋は斑猿には意を介するふうもなく、ぐったりと肉の盈ちた肩をおとして、うなだれている貴子のかたわらにしゃがみこんだ。
「お景を、小紫のお景を捕えましたので、さっそく知らせに、とんで参りましたところ、この姫が、いや、御内儀さまが、このありさま。さぞかし、お苦しいだろうと、ついその使いのほうを忘れておりました」
「嘘をつきなされ、斑猿さん。あんた、御内儀さまのお躰に、いままで、どんな、いたずらをしていなさった」
意地悪そうにいったのは昭吉。和吉も、
「それそれ、その手にもっていなさる黄楊の箸。それをいったい何に使いなさったのか」
何もかも知ってますよと言わんばかりに、つめよられて、
「こ、これは、これは、ただ……」
答に窮した斑猿は、廊下の下で女中頭のお松が、ニヤニヤするのを、ふと見つけて
「これは、お松が、お松がくれるというものだから、ただ……」
「ほほう、何のためにです、斑猿さん」
「それが、ほれ、お松。な、なんのためだったかな、こ、この箸を俺にくれたのは」
「存じません！」
とプイと、お松が横を向く。
これらの、やりとりなど、そしらぬ顔で、ねんいりに、貴子の裸身に指を這わせていた元禄屋であったが、突如、「斑猿！」と大きな声で呼びつけた。
「へ、へェーイ！」
長い手足を、おもわず縮めた斑猿は、こいつは、えらいことになったと観念した。
これまで貴子を何度も責めたことがあるといっても、それは主人元禄屋の見守る中でのこと。それが主人の許しもなく、いくら晒しものにされているからといって、思う存分に嬲りものにしたあげく〝哭かせて〟しまったとあっては、いかに元禄屋が、ものにこだわらない性格だと言っても、怒らずにはおくまい。
（こいつは、困った。これだから、女は魔性だ。おとし穴に気をつけろと孔子さまもおっしゃったのだ）と、ほぞを噛んで、
「申しわけ、あ、ありません！　か、かんべんしてやっておくんなさい！」
と言って元禄屋を見上げて、ホッとした。精悍な鷲のような眼は、少しも怒ってはいな

い。それどころか口元に微笑さえ浮かべて、

「斑猿。お前さん、〃哭かせどころ〃を、つかみなさったな。みごとな腕前じゃ」

驚いたのは斑猿。それも、とおりいっぺんの驚きではなかった。

まずは、勝手気尽に貴子を嬲ったことを咎めようともしない大度量――これはしかし、昨夜の元禄屋の〃美しい女は独り占めすべきではない〃という言葉を知っておれば納得のできることであろうが――次に、貴子を見ただけで、彼女がその嬲りの中に悦びを覚えたと感づいたこと。そして、もっとも斑猿が驚いたのは、〃哭かせどころ〃という言葉であった。

斑猿にしてみれば、偶然にそれを発見。このやんごとなき姫君の哭かせどころを知っているのは俺ひとり。いつか機をみて親分や青蛇の兄貴たちに自慢してやろうと得意になっていたのであるが、あにはからんや、主人の元禄屋が、そんなことは、とうのむかしに、ご存知であったとは。

もちろん、これとても貴子が、れっきとした元禄屋の妻であることを考えれば、驚くことはないと言えはするものの、ズバリ、核心を衝かれた斑猿は、ただもう感嘆するだけ。

と、そのとき、貴子の唇がわななき、

「だ、だんなさま……お、お許しを……お許しくださいませ。妾が、妾が、わるうございました……」

いまにも息が絶えるかとおもわれるようなかぼそい声を耳にするやいなや、「いえ、俺が、いや、あっしが、つい、いたずらをしてしまいまして……どうか、ご、ごかんべんを！」と斑猿は元禄屋のまえに這いつくばる。

「よい、よい。咎めはせぬわ」

貴子の肩から手を離し、すっくと立ち上がった元禄屋は、

「斑猿、お景を捕えたといったな」

「へ、ヘイ。またぞろ、あの阿魔、千住から浅草へかけての貧乏長屋に、しょうこりもなく金をばらまいていやがったところを……」

「捕えたか、徳夜叉の情婦を。フッフッフッ今度こそへまはやるまいぞ……」

自分に語りかけるように言うと、

「大事なお内儀さまじゃ。湯浴みをな」

と昭吉に命じ、

「だ、だんなさま……」

と見上げる貴子の名状しがたい凄艶な、まなざしに二度三度うなずいて、いたわりの視線をおくった。が、それも束の間、

「和吉、早駕籠じゃ」

くるりと貴子に背を向けて表門へと向かうその後姿には、もう微塵もすきがなかった。

（さぁーすが、元禄屋の大旦那――）

こうおもったのは、あとを追う斑猿だけではなかった。ホッとして台所に向かうお松も庭の掃除にかかるお種も、そして手代の金吉も、おなじ気持であったろう。

燦々と降りそそぐ秋の陽が、いままで貴子が縛りつけられていた角柱を、てらし出す。そのあたり、散らばった角八つ打ちの組紐にかこまれた床が、しっとりと濡れているのは彼女の汗であったろうか。

蘭麝のくがめく匂いが、すきとおった朝の大気のなかに、いつまでも漂っていた。

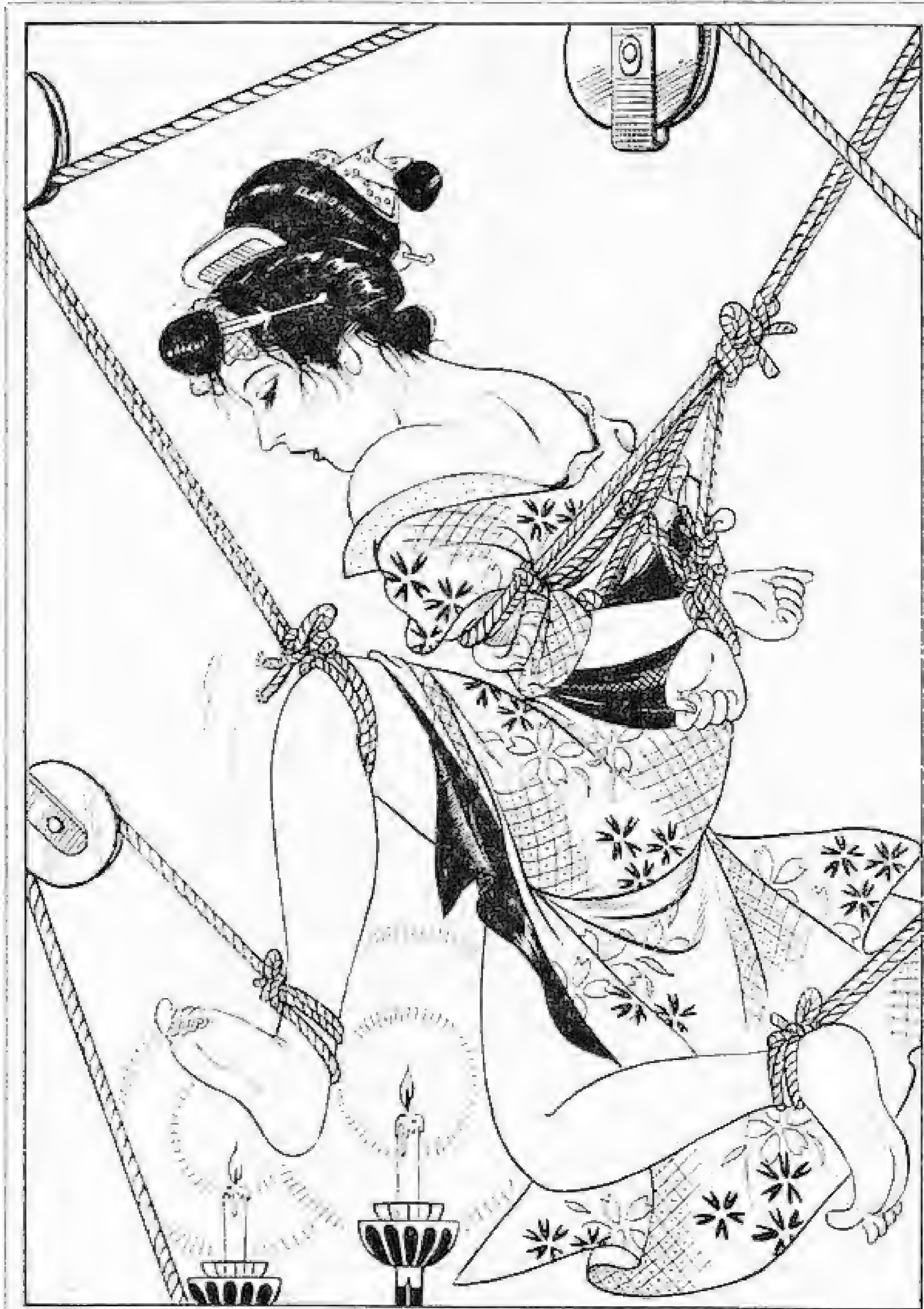
お景の危機

「お景、また顔を合わせたじゃあねえか」

青白い顔をひきつらせた青蛇が、愛用の青い縄で肩さきを打つと、白豚が、

「ヘッヘッヘッ、なんですかい、お景姐御。さては、あっしたちの味が忘れられなくってわざわざ捕まりにきたのとちがいますか」

荒むしろのうえに、ひきすえられているお



イメージギャラリー……『落花の舞』……岡　たかし……

景の唐桟のきものの襟からのぞいている友禅縮緬の長襦袢のなかに早くもブヨブヨした手を入れようとする。

「な、なにするのさ！」

激しく身を揉む小紫のお景の姿を、ついいましがたまで日本橋の本宅で貴子を照らしだしていた同じ秋の陽が、うつし出す。

ここは麻布六本木、元禄屋の別邸――老松や桧、けやきなどが、うっそうと生いしげった庭のすみにある土蔵の二階。

土蔵といっても元禄屋が、その趣味に耽るために特別につくらせた牢屋であり拷問部屋であってみれば、階下にも、ここ二階にも、各種の仕掛けがしてあり、金にあかせて買い求めた拷問道具にも、ことかかない。

正面、悠然と脇息によっているのは、本宅から早駕籠をとばしてきた元禄屋――。

豊太閤の残した五夜のロザリオの秘密をめぐる好敵手、怪盗徳夜叉の情婦であるお景の緊縛された姿を、じいっと見つめている。

このお景、まえに一度、手に入れたことがある。が、たまたま愛妾の一人であるお国が逆に、徳夜叉の手に陥ち、分倍川原八幡の境内で捕虜交換を試みると共に北町奉行所の与力、工頭監物の力で怪盗一味の一網打尽を企てて美事に失敗していた。

（今度こそは、この強情な女に徳夜叉の隠れ家を吐かせてやる。それにロザリオに刻まれた謎の和蘭文字の秘密も白状させてやろう）

一筋縄ではいかぬ女であることは百も承知の元禄屋は、駕籠の中で思案をめぐらし、その手段を、すでに鞭兵衛に伝えてある。あとは黙って見守るだけ。

「鞭兵衛、始めるがよいぞ」

声をかけられた鞭兵衛は安房から乙夜のロ

ザリオをもって帰ってきたばかりであった。
老中領田下野の家臣衣笠内記の白状したとおり、豊臣秀吉から前田利家に、そして衣笠家に代々、秘蔵されてきたロザリオは、確かに安房東条にある衣笠内記の家の中庭、石燈籠の下から発見されたのであった。
「旦那。では」
会釈した鞭兵衛は、主人の手に自分が持ち返った黄金のロザリオのあることを認めて、いささか得意な顔付きであった。
それには、
〝我が世たれぞ常ならむ〟
とありその下に、22・42・14・20・26と、奇態な和蘭文字が刻まれている。
五夜のロザリオのうち、これで四つまでが主人の元禄屋の手に入ったことになる。残るは徳夜叉のもつ「戌夜」ひとつ。あとは和蘭文字を解読すれば天正大判千五百枚を鋳直してつくった重さ六十六貫にも、のぼる大分銅金三千箇――何千万両いや何億両にのぼるか分からぬ莫大な豊太閤の財宝が、主人の手に入るであろう。
元禄屋を親とも、たのむ鞭兵衛が喜び勇むのも無理ではなかった。
「お景姐御」と猫を撫でるような声を出してお景のそばに、しゃがみこんだ鞭兵衛は、
「ほれ、あの旦那が持ってらっしゃるロザリオとかいうものを、徳夜叉も持っているはずだ。いまそれが、どこにあるか教えちゃあ、くれませんかい。それとも、何と刻まれてあったか、文句だけでもいい、思い出してくれさえしたら、痛いめにも、恥かしいめにも逢わなくてすむのだがねえ。どうです、白状しねえかい」
元禄屋や鞭兵衛が、お景を一筋縄じゃあいかぬ女と思っているのと同じように、お景もまた、この男たちを信用していなかった。
信用していないというよりも、八つ裂きにしても飽きたりぬ憎悪の念に駆られていた。
(畜生……妾としたことが……)
お景は、じいっと唇を噛みしめる。
衣笠内記の秘蔵する乙夜のロザリオの探査を、はるばる大坂の太塩平八郎中斎の使者としてやってきた虹の陣兵・洗い髪のお妻夫婦や子分たちにだけ、まかせておくわけにはいかぬと、雑司ケ谷にある元禄屋のいまひとつの別邸を探りかたがた、浅草界隈の貧乏長屋に、いくらかの金銀を、それとなく投げこんでいるところを、すでに顔をみられている青蛇や白豚たちに押えこまれてしまったのである。
青蛇たちにしてみれば、顔を知っているどころではない。右太腿のつけねのほくろから乳首のさきまで知りつくしている女である。
新しい女を責めるのも面白いが、一度、自分たちが責め嬲った女を、しばらく、時をおいて拷問するのも、また興味が深い。
一方、お景にしてみても、まったく見も知らぬ行きずりの男たちに嬲りものにされるよりも、顔見知りの男たちに責められることになろうより羞恥と屈辱に悩まされることになろう。
しかもそれが憎みつづけている男たちであれば、いっそう、悩みは深いというもの。
「な、なにを訊ねられても妾は金輪際、口をきかないからね」
気丈に言ったものの、まえにとらえられたときの、女の骨の髄までしゃぶりつくさずにはおかない鞭兵衛たちの責めをおもいだして身の毛がよだつ。それでも――、
その恐怖をおしかくして、
「いくら責めたって無駄だろうね。今度という今度は、このお景姐さん、絶対に口を開かないからね」
緊縛術穴沢流の早縄をかけられた身をよじり、歯切れよく紅い啖呵をきる、このこまた

のきれあがった美女に、鞭兵衛たちが会心の笑みをうかべた。
「フッフッフッ、必ず吐かせてみせるさ」
油ぎった顔に、意味ありげな含み笑いをうかべた鞭兵衛は、
「フッフッフッ」ともう一度、笑ったあと、
「これでも俺たちにさからおうとでもいうのかい、お景姐御」というと、毛むくじゃらの両掌を合わせて、ポン、ポンと二つ打った。と、
ギイイッ——と不気味な音がして壁の一方にポッカリと大きな穴があらわれる。
ひとめ、その穴——実は隠し戸でありその奥に四畳半ほどの部屋があったのだが——のなかを見つめたお景は、「アッ！」と声をのんだ。
そこには丸柱を背負うようにして縛られている、まだうら若い女がいた。全裸である。太目の縄で乳房の上下を厳しく縛りあげられているうえに両脚は、「八」の字にひらかれて青竹に足首を括りつけられているではないか！
「豊香をおぼえているだろう。公儀御用の櫛師、春田和泉の女房さ。その娘で千登世といってな、芳紀まさに十七才……」
そばにいるのは斑猿。径一寸はあろう五百匁蝋燭を手に得意そうに言うと、
「この女を穴焙りにしてやろうと言うのさ」
「千、千登世さん……」
お景には確かに覚えがあった。この前、ここで鞭兵衛たちに責められたとき、ともになぶられた商家の御内儀ふうの女が豊香。そして千登世という養女がいることは聞かされていた。顔をみるのは始めてだが——。
それにしても、このまだ、うら若い娘を穴・焙・りにかけようとは！
その言語に絶する苦しみを経験させられているだけに、お景の全身の血が逆流する。
「ひ、ひどいじゃないのさ。こんな西も東もわからないような娘さんに！」
「ヘッヘッヘッ、つべこべ言うひまがあるなら親分のお訊ねに答えることとさ。斑猿、かまわねえからやっちまいな」
「合点でぇ、青蛇の兄貴！」
今日はなんという佳い日だろう、つい今しがたまで、日本橋の本宅で貴子姫のお躰を存分に拝ませて頂いたかとおもうと、今度はこの娘——男冥利につきる大安吉日とばかりに斑猿は、蝋燭の青白い焔を、なんのためらいもなく近づけていくのだった。
花にたとえれば百合の花であろうか。それもまだ咲きそめたばかりの白百合の花か——かたくコリ、コリッとした蒼味の残っている千登世の乳房を、青大将の舌のような蝋燭の焔のさきがチロ、チロッと舐める。
「ム、ムッムム……」鹿の子絞りのしご・き・の猿ぐつわのしたで、千登世の名状しがたい呻きがあがる。
「まだ近づけたばかりじゃあないか、おおげさに騒ぐこたあねえぜ」
ニタッと笑った斑猿は、つぎに「八」の字にひろげられている両脚の真正面にしゃがみこみ、
「お景姐御、よおく見ておくことだね。お前さんが強情をはりつづけると、この娘、一生かたわものにされてしまうぜ。手加減はしねえ。いよいよ、本番、行くぜ！」
言うより早く斑猿のながい手がうごくと、まるで生絹（すずし）のように、すべすべとして白い千登世の下腹に焔がせまる。
「兄貴。上の方はあっしにまかせろよ」
とび出した白豚が、同じような大蝋燭に火をわけてもらうと、背後に回された両腕のつけねから、はみ出している腋毛めがけて青白い焔をあてがう。

——ジリ、ジリ、ジイ……

というかすかな音が、いちだんと激しい千登世の呻きの間を縫うようにきこえてきた。

「や、やめ、やめるのよ、こ、こんな鬼畜生のするようなことは！」

しっかりと瞼を閉じているものの、そのジリジリッという不気味な音は耳に入り、それとともに異様な匂いが、いやおうなくお景の鼻に、ただよってくる。

「フッフッフッ、この匂いは、あっしの蝋燭がやいている匂いでさ」

と白豚がいうと、「バカを言え、俺のだ、俺の蝋燭のせいだよ」と斑猿が叫ぶ。

（まったく、この男たちときたら！）

歯を喰いしばって、じいっと耐えていた、お景であったが、地底から洩れてくるような千登世の呻きが高まったとき、

「や、やめるのよう！　そ、そんな罪もない娘をいじめるくらいなら、なぜこの妾を責めないのよう！」

さすがは、義賊と噂のたかい徳夜叉の情婦——おきゃんをもってきこえたお景の啖呵といえた。が、しかし、お景の顔からみるみるうちに血の気が失せていった。

お景自身、この穴沢流穴焙りの拷問に耐える自信はまったくない。

（あ、ああ。ど、どうすればいいのよう！）

長い睫毛のしたの瞳が恐怖に、おののく。

「フッフッフッ、やっと本音がでたようだなお景姐御。やっぱりお前さんは、あのときの味が忘れられねえものだから、ここへ責められるために、のこのこと捕まりにきた。フッフッフッ、夢をかなえてあげますぜ。とっておきの穴沢流の秘術をつかって、その躰からぜがひでもロザリオの秘密を吐かせて見せようじゃあないか」

ニヤリと笑った鞭兵衛は、のっそりと立ち上がると、お景の肩に手をかけて、

「まずは裸になることだな。千登世の身代りを買ってでたのなら、同じようにスッ裸になってから、あらためて挨拶をすることさ」

縄をとかれながらお景は、じいっと唇を噛みしめる。この男たちのまえで、ふたたび地獄の羞恥にのたうたなければならないのか。

バサ、バサッと音をたてて床におちる縄を見ながらお景の小さな胸が、ときめく。

（ち、ちく生！）

憎悪のこもった瞳を平然とうけとめた鞭兵衛は、

「睨んだ顔が、また仇っぽいねえ。しかし、言っておくが、お景。お前さんがボヤボヤしていると、千登世は、ほんとに使いものにならなくなっちまうぜ。フッフッフッ……」

あごを千登世の方に、しゃくって見せる。

言われるまでもなかった。白百合の花に迫る毒蜘蛛のように斑猿の手が伸び、青白い焔が、またたき、千登世の初々しい肉体が激しい、けいれんをつづけている。

このまま穴焙りをうけつづければ、鞭兵衛の言うとおり、生涯消えることのない深傷をうけることになろう。

「やめるのよ！　親分さん、や、やめさせてちょうだいってば！」

もう瞼を閉じる気力もなくしたのだろう。どんよりとくもった瞳を半開きにして、油汗を額にうかべた千登世の無惨なありさまを眼にしてお景は、悲しい決意をするのだった。

「妾が、は、はだかになれば、よいのでしょう！　ほれさ、お、おびを解くから、き、きものも脱ぐからさ、や、やめて。千登世さんに酷いことをするのは、やめるのよう！」

一瞬おくれれば、それだけ千登世の〝女の若い生命〟が傷つけられていく……。

唇のはしを噛みしめたお景は、組紐の帯締めをとりさると江戸小紋の帯に手をかけた。

それを眺めた鞭兵衛は、
「斑猿、許してやりな。お景姐御が、やっと
・・その気になったとさ。フッフ、だが、かまう
こたあねえ。ちょっとでも、きものを脱ぐ手
をやすめたり、なまいきな素振りを見せたら
……」
「もちろんでさあ、親分。こっちは、そのつ
もりでいたのですからね」
振りかえった斑猿は、正面、元禄屋のそば
に腰を下ろした鞭兵衛に応ずるように、お景
のまわりに座蒲団をおくと、青蛇と白豚に、
「じゃあ俺たちも、ここでお景姐さんの御開
帳ぶりを、ゆっくりと拝ませてもらいましょ
うぜ」
とよびかけて、どっかと坐りこむ。
十畳敷きほどの広さであろうか――。
五人の男があぐらをかくと拷問部屋が急に
せまくなったようで、その中央に立っている
お景は、いたたまれないような圧迫感をおぼ
えた。
「さあ、脱ぎなよ。脱ぎなってことよ」
病的に青白い顔を淫らにひきつらせた青蛇
の声が、小桜色にそまったお景の耳にガンガ
ンと、ひびく。
「あ、あわてるんじゃあないよ。こうなった
以上は、このお景姐さん、逃げもかくれもし
やあしない。やくそくは守ってあげるさ」
ゴクンと唾をのみこんだお景は、
「千、千登世さん、安心おしよ。妾、妾が、
かならず助けてあげるからね」
となかば失神している千登世によびかけ、
「鞭兵衛親分さん、それにそこで黙って坐っ
てらっしゃる元禄屋の旦那。このお景、裸に
されようが、どんな責め折檻にあおうが、絶
対に音（ね）はあげませんからね」
せいいっぱいの抗議の啖呵をあびせると、
江戸小紋の細帯を思いきりよく脱ぎ捨てた。
つづいて紅色の伊達巻が、くるくるっと白
い手のなかに、くるめられたかとおもうと、
黄八丈まがいの唐桟のきものが、スルリと、
肩からすべる。
「いい度胸だねえ、姐御！」
白豚のひやかしに、
「な、なにをいうのさ。だ、だまって拝んで
いりゃあいいのさ、三下奴は！」
「フッフッフッ、これからスッ裸になろうと
いうのに威勢のいいことだな、お景姐御。な
んなら手伝ってやってもいいんだぜ」
「いらないよ！　そんな汚れた手に触られた
んじゃあ、小紫のお景の名がすたるよ」
言葉とはうらはらに人一倍羞恥心がつよく
春の微風に裾がみだれるのにも気をつかうほ
どのお景なのだ。心は屈辱で煮えたぎってい
る。が、いまは脱ぐほかはなかった。鳩羽紫
の長襦袢をあわせる腰紐にかかった、しなや
かな指が、こきざみにふるえる。と――、
わけもなく藤結びの結び目がとけて、力な
く離した指さきから、うす桃色のその紐が腰
のあたりで、ふわっと浮き上がったかとおも
うまもなく、床に音もなく落ちていく。
「裸になるんだぜ、スッ裸に！」
こみあげてくる興奮に耐えられなくなった
ような白豚の野次！
「わ、わかってるよ！」
こわばった声で応えたお景の手が右襟にか
かり、肩へと、ずらせていく。
知多晒しの半襦袢がのぞき、斑猿がフウー
ッという、ため息とともに腕組みをといたが
その息のせいかとおもわれるほど軽やかに長
襦袢が肩から下半身へと、すべりおちると、
「た、たまらねえやな！」
ゴク、ゴクッと生唾をのみこんだ、白豚の
うわずった声――。
鳩羽紫の長襦袢の下から、あらわれたのは
燃えるように紅い湯文字であった。

純白の肌襦袢に真紅の湯文字――秋の午後の洩れ陽をうけたお景の姿は、白豚だけではなく男たちの視線をもろに集めるに応わしい美麗さであった。

胴の長い、足の短い日本の女のなかにあって、お景は胴が短く、その胴に較べて腰から下がすんなりと美事な発育を示していた。

「菊の花の匂いであったな、その女は」

ふと元禄屋の洩らした一言で鞭兵衛たちは湯文字におおわれているお景の裸身をおもい出す。

「た、たしかに、そのとおりで。旦那は、よく覚えておられましたな」

菊の花の匂いとはお景だけの香り。肉体から、ただよいでてくる馥郁とした男心をときめかす匂いであった。それを元禄屋は記憶にとどめていたのである。

「もう一度かがせてもらえるってわけで」

必死でおしころしてきた羞恥心が、いっぺんに燃えあがるようで、斑猿にのぞきこまれたお景の頬が、パアーッと紅くそまった。

「はじめてじゃああるめえし。さあ、さあ、早く、はだかになったり、なったり!」

白豚のはずんだ声がとび、ふだんは陰気な青蛇にまで、

「肌襦袢もこしのものも脱いで。それそれ、スッ裸になって三つ指ついて、千登世の身代りに拷問されると挨拶しねえか」

うわずった口調で、はやしたてられると、いっそう恥かしさがこみあげてきて、つい、われを忘れてその場にうずくまってしまうほかはなかった。

だが、ためらうことを許されてはいない。

お景がうずくまるのをみた斑猿が、大蝋燭を手にとると、ぐったりとうなだれている千登世のまえにかけより、

「お景姐御。約束したはずですぜ。よおく見なせえ！」

――ドスのきいた声をはりあげ、千登世の八の字にひらかれた太腿に、情容赦もなく焔をちかづけていくのである。

「ヒ、ヒャアアアッ……」

「ア、アアアッ……」

お景の唇から呻れる悲鳴と千登世の呻きが同時であった。つづいて、

「お、おやめったらァ！　おやめよう！　妾が、妾が脱ぐからさ！」

小さく蹲っていた女体を反射的に起きあがらせたお景は、

「ち、ちく……しょう……」

唇のはしを破れるほど噛みしめ、天井を見上げて二度三度、激しく顔を左右に振り、

「は、はだかになるといってるのさ！」

それは自分にいいきかせるような声であった。あとは、すこしでも早く襲いかかる羞恥の渦巻から逃げ出そうとでもするように、紐をとき、肌襦袢を脱ぎすてて、真紅の湯文字のあわせ目に指をかけるお景――。

どっちみち避けられないさだめ――ひと思いに裸になってしまったほうが恥かしさも少なくてすむだろう。心を石のように堅くしたお景は左手で、ゆたかな胸のふくらみをかくすと、思いきって右手を湯文字の白い紐にかけた。

が、しょせんは女の身――。

紐に触れたとたんにエレキにでも打たれたように女体が硬直し指の動きがとまる。

（な、なれないわ。裸になんかとても、なれっこない！）

二尺ばかりまえに、いま脱ぎすてたばかりの純白の肌襦袢が、ひっそりと息づいているのをみとめたお景は、

「ア、ア、ア……」

淡い桃色にそまった咽喉を、のけぞらせて呻く。

そのようすを楽しそうに見守っていた鞭兵衛が、

「いつまでそんな恰好をしているつもりだい、お景姐御。早くしねえと、フッフッフッ」

親分の意を察した斑猿の大蝋燭をもつ手が千登世に、せまっていく。

「ア、アッ……お、おやめってばァ！」

それと察したお景の唇から、羞恥におののく訴えがあがり、好機がやっと到来したとばかり青蛇が、愛用する五尋半の青色の縄を手に真正面に立つ。

「姐御。じたばたしても、もう始まるめえ。おもいきりよく諦めなよ。さあ、はやくスッ裸になって、神妙にお縄を、おうけすることだね」

そばから白豚も、

「さあ、姐さん。そのお湯文字をパァーッと威勢よく、はぎとってくだせえよ。男を、じらすものじゃあねえ」

（な、なにを言うのさ、このけだもの！）

どれほど、啖呵をきりたかったことであろう。しかし、千登世を見捨てることは、とうてい、お景にはできなかった。

「ど、ど、どうとも、するがいいさ！　すき放題に、この躰を、な、なぶりものにするがいいさ……」

胸もとをおおっていた柔らかな腕が、くねったかとみると、ぐみの実のように可憐な乳首が菊灯台にきらりと耀き、お景の成熟した女体のむんむんする匂いが、青蛇たちの鼻をぴくぴくっと、うごめかせる。

――（つづく）――

告白

『褌（ふんどし）』と『革（かわ）』と『海女（あま）』

三つのフェチ

工藤俊男



カット・室井亜砂路

私には三つのフェチがある。それは、ふんどしと革と海女（あま）である。

まず、ふんどしについてであるが、私が、いつ頃から、どんな動機で、ふんどしが好きになったのか、どうしても思い出せない。小学校に入る前に、すでに六尺ふんどしのしめ方は知っていて、あり合わせの布で、ふんどしをしめて遊んでいたことだけは、たしかに覚えている。

小学校に入って、水泳の時に赤ふんどしをしめた。体操の先生は水着の下に黒ふんどしをしめており、水泳中にとけないように、しっかりしめるように教えた。

『ふんどしを、しっかりしめて』などと、よく言われるが、ふんどしをしめることが、つまり男らしいことという観念になったようであった。ふんどし姿の絵や写真を見ると、胸がどきどきしてくるようになり、水泳の時以外でも、機会あるごとにふんどしをしめたものだが、布を、なわのようによじり、しっか

りと締めこんで、わざとこするように走りまわり、後で痛くなって困ったこともあった。

痔を悪くした時に、脱脂綿に薬をつけて、それがとれないようにと、母がその上から、ふんどしをしめてくれたことも懐かしい思い出だし、夏のある夕方、近くの家の物干台で六尺ふんどし一本の男の人が夕涼みをしているのに見とれていた時、母がそばへ来て「六尺って男らしいわね」と言ったことも覚えている。母がプールに見にきた時に、友人の母親達と、「男の子の赤ふんどし姿は可愛らしい」と話し合っていたこともあった。

また、ふとした機会に妹に赤ふんどしをしめてやったことがあった。その時、それを、たまたま見た母は別に叱りもせず、「まるで海女（あま）の子供みたいね」といった。今考えてみると、もしかすると母は、ふんどしファンだったかも知れないし、私はその母の好みを受けついだのかも知れないとも思う。父は早く死んだが、越中ふんどしをしめていた。六尺ふんどしを、しめていた記憶はない。

その頃の雑誌の挿絵で、たしか「われは海の子」の歌の挿絵だったと思うが、赤ふんどしをしめた男の子が舟のろをこぎ、その舟のへさきに、もう一人の、やはり赤ふんどしをしめた男の子が、手にもりを持ち、ひたいに潜水眼鏡をつけて、じっと海面を見つめているのや、ふんどしをしめた男の子が短刀でさめと斗っている絵などがあった。私は、その男らしい魅力に、すっかり圧倒されて、それからは、ふんどし姿の絵や写真を集めるようになった。

水泳に行くときは、ふんどしをしめた上にすぐズボンをはいて出かけたが、その他の時は何となく恥かしくて、ふんどしをしめた上にパンツをはいて、かくしていた。よごれて来ると、そっと洗って、かたくしぼり、夜、寝床の中で体温で乾かしたものだった。ふんどしをしめる時は、何となく昂奮することがよくあった。ある時、学校で水泳の前に、昂奮状態で、ふんどしをしめている友人を偶然見つけた。そして、たちまち意気投合して仲よしになった。その友人は、とても頭がよく成績も良かったし、いろいろなことを、よく知っていた。体も大きく、よい体格をしていた。そして、ふんどしの話をしたり、前袋の大きさを比べあったりしたこともあった。

今思うと彼は、いわゆるSM好みで、サーカスの女の子は人さらいにさらわれてきて、ムチで叩かれて曲芸をしこまれ、酢をのまされてアクロバットをやらされるなどということを好んで話した。しかし私は、そんな話は珍しく面白くはあっても、それ程、感動はしなかった。それよりも彼のよい体に、きりっとしめたふんどしが、そういう話をする時に一段と高まりを見せることに、言い知れぬ魅力を感じた。

その頃、家の壁を塗りかえたことがあり、年配の男と、若いのが二人。その一人は、まだ十五、六だったが、若い衆二人は素肌に、尻がやっとかくれる位の短い印ばんてんを着ただけで、その下にふんどしをしめていた。しかも若い方のは赤ふんどしだった。

足をふんばり、くわをふるうたびに、ふんどしが、ちらちらするのを見て、胸が高鳴った。たくましい男のしめた、ふんどしの魅力というものを、その時、始めて感じたのである。早速そのまねをして、股下ギリギリの長さのシャツやジャケットを、裸にふんどしをしめただけの上に着て、ひとり、悦にいっていた。

ふんどしに親しむにつれて、当然、男性自身にも関心が深くなり、かつ、手を触れることも多かった。もっとも、男の児は大抵もてあそぶ興味を持っているものであるから、私

が特にそうしたというわけでもないだろう。

ふんどしを、いつもしめていると包茎になるとか、発育が悪くなるとか言われるが、私には、そんな心配は少しもなかった。特に関心があったためか、いろいろにして、ふんどしをしめたためか、とにかく心配は全くないまでに成長していた。

中学に入って間もなく、オナニーを自分で覚えていた。特にふんどしをしめたままで倒立して耽るのが最高だったと記憶している。

水着姿やヌードの女性の写真がオナペットだった。そして完全なヌードよりも、ふんどしをしめた方が、より魅力を感じるようになり、ヌードの写真や絵には、ふんどしを描き込み、水着姿は要部を削って、ふんどし型に修正したものだ。

その後、へくら島のふんどし姿の海女の写真を見た時の感動は、とても筆や口では言えないものだった。口の中は乾き、心臓の音は雷の如くひびきわたり、手足はふるえ、全身はふらつき、目の前が暗くなりそうだった。世の中に、これ程、魅力的なものがあろうかと、その時、思ったのである。

今でも、女性で最も魅力を感じるのは、ふんどし姿であると思っている。やわ肌に、きゅっと、めりこんでいる縄ふんどし。細く尻にくいこんでいる後姿。ぴんと張り切った一枚の布の前袋。最少限のもので、醜い所だけをかくした、最も合理的な仕事着。しかも女性の肉体の美しさを最大限に発揮した、素晴しい衣裳。

見事な体に「さいじふんどし」を、きりりとしめこんで、荒波の深海に、いどんで行く命がけの海女は、壮烈な美しさとでもいおうか。それ以来、へくら島の、さいじ姿の海女が最高のオナペットになったのは、いうまでもない。

ふんどしをしめて、いろいろやっている所を女中に見つかったのも、たしかその頃だったと思う。家人には勿論、十分気をつけて、かくれてやっていたのだが、留守の筈が、何か急用で帰って来たらしかった。彼女は「アラッ！」と顔を真赤にして立ちすくんだ。私も「しまった」と、その場に、うずくまってしまった。

物も言えず、下を向いて小さくなっている私に、十才位、年上のその女中は、やさしく肩に手を置いて「男らしくて、すてきだわ。誰にも言わないから、心配しないで。何でも相談して下さい。お世話しますよ」と言ってくれた。その事があってから、ふんどしの洗濯は彼女が、してくれるようになった。

○

革について魅力を覚えたのは、小学校に入って間もない頃だったと思う。父母に連れられて遊園地へ行った時のことである。そこの乗物係の女性のユニホームが全身、黒いなめし革で、ぴっちりした上衣にタイツ状のズボン。それに、今流行の編上げになったブーツのハイヒールといった姿であった。その始めて見た異様な姿に、ただわけもなく胸が、どどろき始めた。その後、桶の内側を垂直にまわるオートバイの曲芸をする同じようなスタイルの外人の女性を見て、更に感激し、やはり外国から来たサーカスの猛獣使いの女性が同様の服装をして、十頭に余る猛獣を、むち一つで自由にあやつる姿に、うっとりと我を忘れてしまった。

やがてオートバイ乗り、飛行機の操縦士、乗馬服といった一連の革製の服装の女性に関心を持つようになっていったのであるが、思春期に入ってからはハイヒールをはいた女性に、ことさら魅力を感じるように進んでいった。

その頃、私の家の向かいに、私より幾つか

僕のイメージ画集……『したく』……室井亜砂路



年上の娘がいて、大柄なグラマーでスタイルがよく、特に足が美しかった彼女が、素足に高いハイヒールを、よくはいていた。やや太っていたがウエストが、きゅっとしまって、セーターにつつまれた胸のふくらみの美しさも、さることながら、私は彼女の足に、より魅力を感じた。足首の、きゅっとしまった素足に、ぐんと高く細い、かがとの、ぬめぬめと光るエナメルのハイヒールを履いて歩く所は、そのふくらはぎの筋肉の微妙な動きによって、妖しい魅力をもって私に迫ってきた。

彼女の家の中が私の家の二階から、かなり見えたのであるが、私は彼女を、しばしばカーテンの隙間から、のぞき見した。彼女は自由奔放な動作で私の思いを、かなえさせてくれた。彼女は、夏は家ではフレアの多く入った、キュロット・スカートに近いショート・パンツを、はいていた。膝から下の脚線の美しさは、いつも外で見かける所だが、なお素晴しかったのは、太ももであった。きりっとしまった膝から下にくらべて、ももは豊かに肉付きが、しまっていた。

ある時、偶然、彼女の昼寝姿を垣間見たのである。のぞかれているとは、つゆ知らず彼女は、丁度こちらに足を向けて片膝を立て、他の足をその上にのせて、足を組んだ形になっていた。ゆるやかなパンツから、太ももの奥まで見えていた。当然そこに見える筈の下ばきのショーツが見えないのだ。ビキニをはいているのかも知れない。奔放な彼女のことだから、下に何もはいていないのかも知れない。

下に、ふんどしをしめているなら、最高に素晴しいのだが……。楽しい想像が続く。私の頭の中の彼女は、その豊かな太ももに深々と喰い込む程、きつくふんどしをしめて、ぐんと高い黒のエナメルのハイヒールをはいただけの裸体で、踊っていた。その姿が私のオナペットの一つになったことは、いうまでもない。

私を捉えた、もう一つの海女についてはこれも遊園地か博覧会に父母に連れられて行った小学校の下級生の頃である。そこで海女の実演をやっていた。テント張りで三メートルか四メートル位の深さの、一部がガラス張り

になった小さな水槽で、実演が行なわれていた。

白い肌着を着ていたが、水中に躍動する白い足は太ももまで露わになり、青白く幻想的な美しさに、息をとめて見とれてしまった。そのとめた息が苦しくなっても、まだ海女は水底で貝を探している。泳ぎのうまさもさることながら、その息の長さに、驚いてしまった。ためしに海女がもぐると同時に、息を止めて見た。こっちが苦しくなって息が切れてしまって、もう一度、息を吸って、止めて見る。その二度目の息が切れた後になって、ようやく海女は浮き上がり、口笛のような音を立てた。実に私の息の二倍以上も、もぐっているのである。

わけもなく胸が、どきどきして来た。シンクロナイズド・スイミングのような、海女の様々の動作に、身を固くして、見つめたのである。それからは、息の続く限り、深い海にもぐって働く海女に、言いしれぬ、あこがれと魅力を覚えるようになったのである。その後、ふんどし姿の、へくら島の海女を知り、それが四十メートルもの深い海底に二分間ももぐっている事実を知るに及んで、完全に打ちのめされてしまった。

ふんどしのよき協力者となってくれた女中が、海の近くで育ったということで水泳がうまかった。もし彼女が海女であったら……と思った。ある時、一緒に海水浴に行った。私は、もちろん愛用の赤ふんどしをしめた。彼女にも本当はふんどしをしめさせたかったがそれは言い出せなかった。始めて見る彼女の水着姿は、なかなか魅力的だった。今と違ってビキニは、もちろんシングルもなくスカートがついて腰がダブルになったものだった。

海女をまねて潜水をした。彼女は私よりも上手で、息も長く続いた。海女のように、くるっと尻を出して潜って行くところを見るとスカートの中で丸々と、よく発達した尻に、パンツの部分が、くいこんで、ふんどしに近い形になっていた。それを目前に見ると、たまらなかった。思い切って水中で彼女に抱きつくと、そのくいこんでいるあたりに、手をやった。

彼女は私をふりほどくと、浮かび上がって私を、ちょっと、にらんだ。別に怒っている風もなかったので、再び抱きつくと、スカートを完全に、まくり上げてしまった。水中に潜って見る。よく成育した太ももに、短いパンツが喰いつくようにしまり、後は、あたかも尻の肉付の力に打ちまかされたかのように尻の間に、よれてくいこみ、ふんどしのようになっていた。

始めて、まのあたり見た年頃の女性の腰にすっかり魅了されてしまった。私は、ついにがまん出来ず、彼女の耳もとに口をつけて、ふんどしをしめて見せるように、たのんだ。はずかしいと、いやがるのを、海女の例をひいて懸命に、くどいた。とうとう海の中でなら、ということで、納得してくれた。

私は、自分のしめている赤ふんどしを解いた。彼女は、たくみに水着を水中でぬぐと、ふんどしを、しめ始めた。しめ方を教えようとしているうちに、彼女は、さっさと自分でしめてしまった。「なんだ、しめ方を知っているの。すみにおけないね」と言うと、彼女は赤くなった。彼女を怒らせては、まずいと思って、それ以上は詮索しなかった。そして海の中で海女の真似をさせたり、泳がしたり彼女のふんどし姿を心ゆくまで鑑賞したのだった。もしかすると彼女も、ふんどしファンだったのかも知れない。少なくとも、ふんどしに関心があったような気もする。

こうして知っていても何も言わなかった母と、よき協力者だった女中に、はぐくまれて

私のふんどしへの愛情は成長して行った。下宿生活に入ると、私一人きりの生活に誰はばかることなく、ふんどし趣味を満喫した。下着はもちろん、ふんどしにして、その上に、じかにズボンをはいた。ズボン下や、もも引きなどは、はかなかった。

それは便所へ行った時に用を、たしやすいのと、股や尻が直接、ズボンに触れる感触が快かったからである。そのふんどしも、ありとあらゆるものを工夫して作った。その中に前袋を刺し子にしたものがある。ふんどしの魅力の一つは、「ふんどしをしめている」という存在感である。

最も敏感な部分にあたる前袋をさしこにして、刺戟を高め、存在感を高めたのである。レース地などを使うのも、同じ目的に、かなうものである。また前袋の内側にゴムひもを輪にしたものをつけたものもある。そのゴムひもの輪を私自身の首にかけて、しめるのである。こうすれば、いやがおうでも存在感が高められる。こうした、ふんどしを日常しめることは、鍛練にもなり、後の結婚生活に好い結果を与えたものと自負している。

結婚直後は何も知らない妻を驚かすのも悪いと思って、しばらく慎んでいたが、頃合を見て妻を教育しようと思った。ある晩、ふんどしをしめただけの裸で、先に床の中に入った。後から入って来た妻を抱きよせた。妻は私の胸から腹、腰に手をまわして行き、更に尻にさわって「おやっ?」というような変な顔をした。なおも、ふんどしのあたりを、なでまわして、これは何か、ときいた。女ばかりの姉妹の中に育った妻は、ふんどしのことは、ほとんど知識がなかった。

そこで、いろいろと、ふんどしについて話してきかせた。それまでに作った、いろいろのふんどしを、とり出して見せ、へくら島の海女のふんどし姿の写真も見せた。妻にふんどしをしめさせたいと思ったが、野蕃だとか趣味が悪いとか、恥ずかしいとか言って、なかなか応じてくれなかった。しかし、連日連夜くどくうちに、ようやく、その気になってくれた。

始めてしめるふんどしに、痛いとか変な気持だとか言っているのを、可愛らしい、魅力的だ、見違えるように美しい、と、ほめてやると、まんざらでもない風情になって来た。事実、妻にふんどしをしめさせて、間近にながめながら愛撫するのは、今までにない感激だった。その夜の二人は、それまでになくハッスルした一刻を過ごしたのだった。

こうして妻の教育を始めた私は、次々と念願を果たしていった。ふんどしは男の場合はどうしても布の巾に限りがあって、あまり細くできないが、女の場合は、いくらでも狭くすることができる。段々と布地の巾をせまくしたものをしめさせ、ついには縄ふんどし、つまり股間しばりにまでエスカレートした。

ヌードとして鑑賞する場合はアクセントとして美しさを強調する役を果たす茂みも、こうした、ふんどしプレーをする場合は邪魔物以外の何物でもなかった。そして、とうとうくどき落として剃毛してしまった。少女のごとく、けがれのなくなった丘めがけて、容赦なくロープが、くいこんでいった。

彼女は身をかくすすべもなく顔を真赤に上気させて、目をうるませ歯をくいしばって、痛さと恥ずかしさを、こらえていた。そのいじらしさは、ふるいつきたいほどの魅力で、思わず熱い熱いキッスの雨をふらせたものである。

ふんどし姿の魅力は、一口に言えば、喰い込んだところにあると言えよう。魅力のポイントは、先ず後姿で言えば、細く丸められたふんどしがY字形ないし、T字形に結ばれて

から、たてに尻の間に深く喰い込んで、左右から、ふくらみ合った、ふくよかな双丘の間に、その姿が没している部分であり、ふんどしが細くて、しかも縄のように、より合わされ、固くなって、きつく深く、めりこんでいれば素晴しい。

そのふんどしが深々と埋まって、しかもなお、その双丘の間に紙などをはさんで保持できる程に、深く喰いこみ、尻の筋肉が発達していれば申し分がない。次は股の間に喰いこんでいる部分である。これも細く固く、ねじり合わせたものならば、少々股を開いても股の間に埋もれて見えない位に、きつく喰い込んでいるのが最上である。

この二つは男女ともに共通して言える魅力である。第三は前袋である。男性自身を、くっきりと浮き彫りに盛り上げた迫力は、なににも、たとえようがない。これは薄い、しかも伸縮性に富む布地で、幅をぎりぎりに、せまくした場合が最高である。前垂れを下げて前袋をかくしてしまうのは、ふんどしの魅力を半減させてしまうものである。

女性の場合は浮き彫りの魅力のほかに、股の喰い込みの延長としての魅力が加わり、更に素晴しさを発揮する。これらのふんどしの喰い込みの魅力のポイントは、いくら見ていても見あきることはなく、ふるいつきたい程の素晴しい迫力をもって迫って来て、その度毎に、あらたな感動を覚えるのである。

ふんどしに比べると、革の方は、たやすく彼女は受け入れてくれた。革は今は高価な本革でなくても、安いレザーが容易に手に入るから、我々革ファンには嬉しい時代である。水着は、もちろん革製のビキニを造った。股下ぎりぎりの長さのワンピース型のミニドレスをレザーで造り、素肌に直接、着せた。両脇の裾はウエストのあたりまでスリットが入っている。下に色違いのレザーで造った、ふんどしをしめさせた。

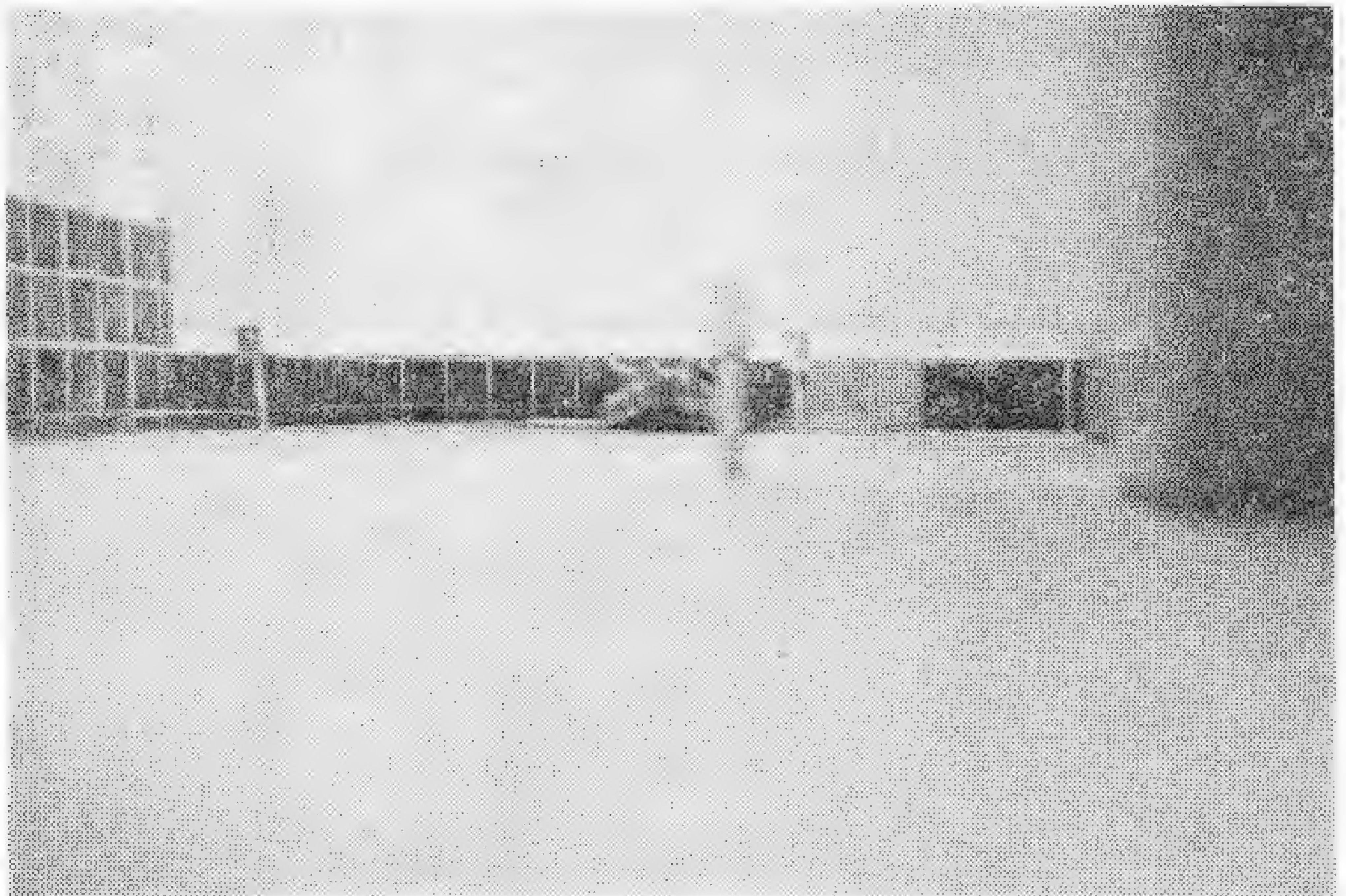
ドレスの前は股下ぎりぎりの長さ、後は尻の間が僅かに見える程度の長さにしてあるので、前後の真正面や横から、まっすぐに見た所では、下に何も、つけていないように見える。下から仰いだり、動いたりすると、下にしめたふんどしが、ちらちら見え、上半身を前にまげると、尻の間にくいこんでいるふんどしが、のぞけるという趣向である。

冬でもストーブで室内を暖房し、できるだけ、このスタイルにさせている。ブーツも、この頃は長短、太さ、さまざまのが案外、安く買えるので大助かりである。妻をつれて外出する時は、コートを着る季節や、雨もよいの時は、ふんどしとミニドレスの服の上からコートを着せて行くことがある。これは案外抵抗なく協力してくれる。

女性はコートを着れば見えるのは足だけだから、コートの下はヌードでもよいわけであり、本当は、そうさせたいのだが、まだそこまでは行けないでいる。私も本当は、ふんどし一本きりの裸の上に直接、コートだけのスタイルで外出したいのだが、外見上、そうするわけにもいかず、不本意ながら、ふんどしの上にズボンをはいてしまう。長いブーツをはいたコート姿の妻を連れて歩いていて、コートの裾から、ももが、ちらつき、その素肌が寒さでピンク色に染まっている時ほど、新鮮な魅力を感じることはない。

海女については、妻は泳げるけれども、とても海女のようには、もぐれない。水着の下に、ふんどしをしめさせ、人のいない所で、ふんどし一つの裸にして肌を焼き、十字型の陽焼けのあとをつけるだけで、あとは幻想で補うほかはないと、あきらめている。

――(終)――



〈読者告白〉

女子トイレ考現学

——〈その分析と研究〉——

福島和男

私は、ある地方都市にある民放テレビ局に勤務する二十四才になる平凡な一サラリーマンです。

テレビ局というのは、一般の人から見ると何か羨望されるような華やかな面を持っているように思われがちですが、さて、このテレビ局の中に勤務してみますと、意外と色々な面で細かい書類が多くて、私の担当しているものだけでも、そのファイルがスチール製の書棚の中に、ギッシリと詰まっています。

その中で、私専用の書棚がありまして、重要書類と混ざって、〝S〟という題字のついたファイルが6冊、さりげなく置かれているのです。

この6冊のファイルこそは、トイレの覗きに魅せられた私が、約半年の月日を費やして作製した汗の結晶の貴重な資料なのです。

女性の排泄ポーズの、詳しいデータを記載した記録なのです。つまり〝S〟という題字は、スカタロジーの頭文字というわけです。

30枚綴りのファイルなので、この記録には既に百五十人以上の若い女性の〈放尿に関するデータ〉が揃っているのです。

このファイルの紙面には、上段に先ず排泄中の女性の写真（後に詳述）が貼ってあります。その下には、氏名（わからない場合が大

半である）年令（推定）勤務先、容姿、体型（グラマーとか痩型の区別）ポーズ、体毛、A（アヌス）、備考——という風に区別した欄を設けた一覧表があります。

　この一覧表のデータには、私は控えてあるメモから丹念に清書した文字が、書き込まれてあります。

　対象になる女性は、OLが圧倒的に多く、他はホステスとか、行きずりの若い女性も混じっています。

　場所は、女性の集まる喫茶店、映館館、ボーリング場、そして、某会社の女子職員用ト

年　月　日

氏名		年令		勤務先	
ルックス		P			
A					
備考					

イレなど、約二十カ所ばかりでデータ収集が可能です。

　最近トイレは、ボックスとボックスの境の壁が下方、5乃至6センチくらい、開いている造りのものが非常に多いのですが、私が資料収集のために使用するのも、この種のトイレが、ほとんどなのです。

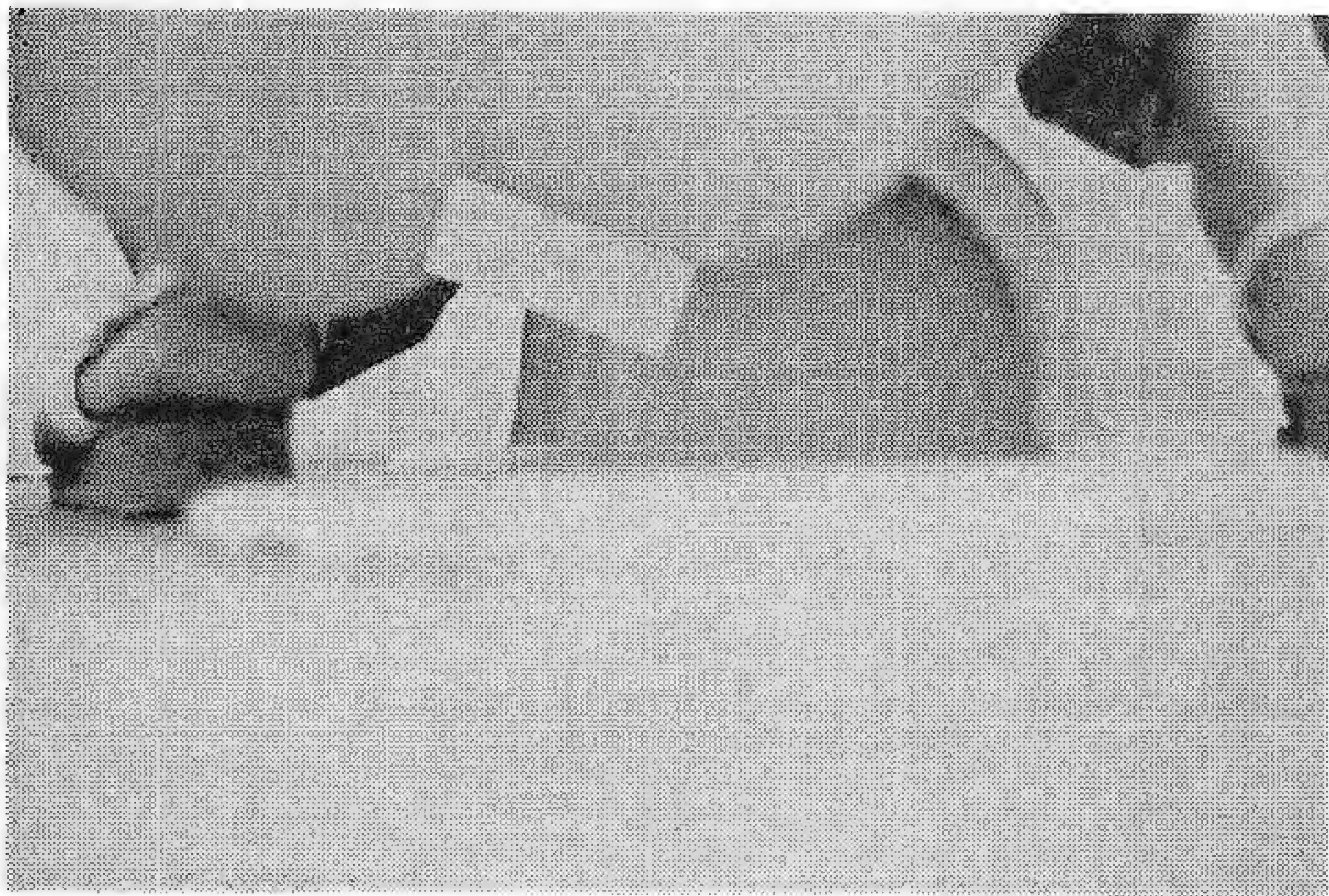
　下の方が5センチも開いていると、肉眼をつかっても、勿論のこと、写真撮影も可能なのです。カメラは市販されている二万円前後のものなら確実に収集が成功します。

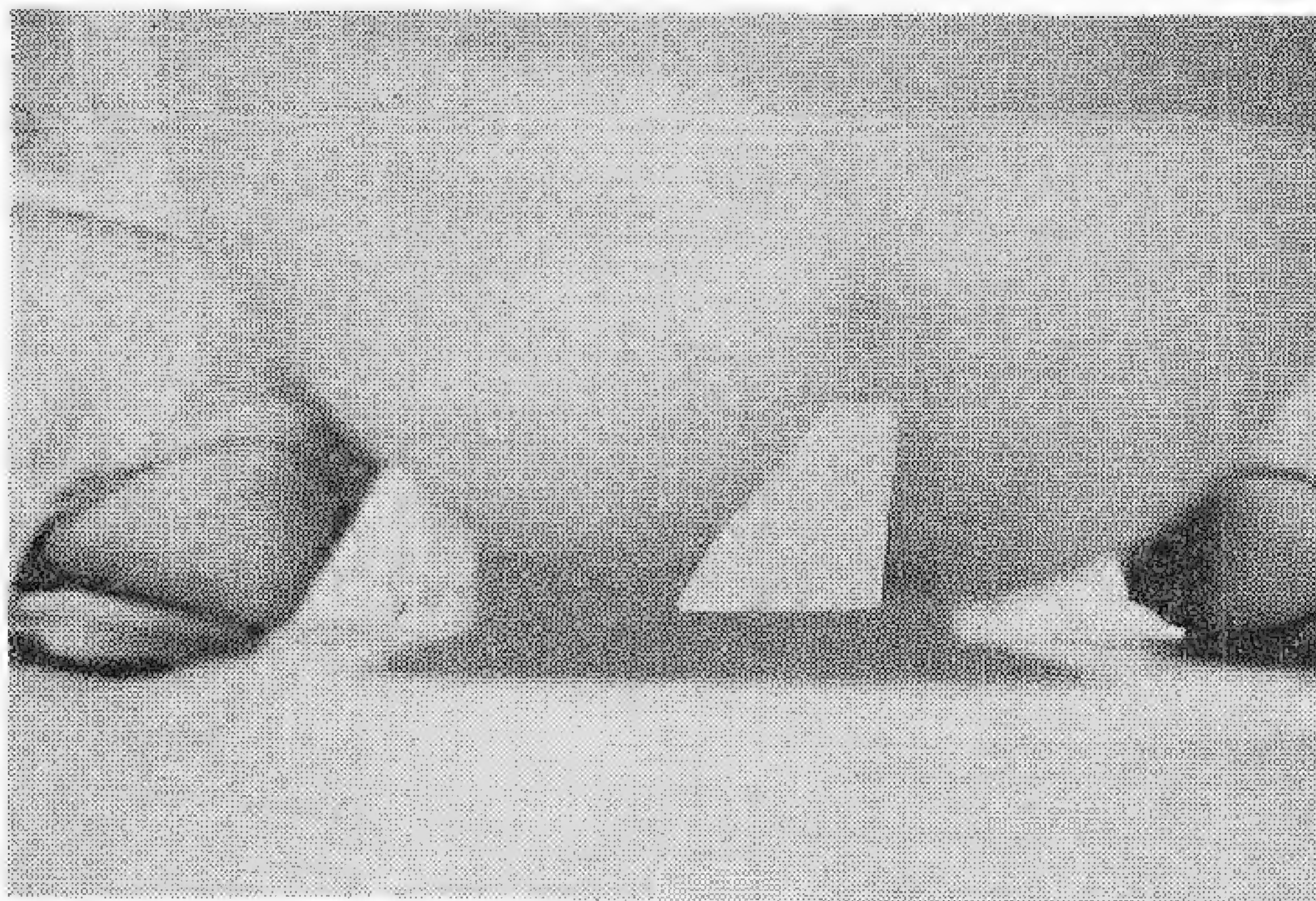
　シャッターの音は、水を流す音で消しますと、全然気づかれずに、その間2——3枚の写真が撮れることになります。

　連続的な、放尿シーンや、二十人に一人ぐらいではありますが、排便シーンなど非常に貴重な資料の収集に成功したこともあり、今まさに便が出ようとしているところなど、まことに得難いコレクションであると自負しております。

　撮影の角度は、真うしろ、ななめ前上、真横、そして特殊なトイレでは、ななめ下から拝めるところが一カ所だけあります。

　排尿シーンを狙うとして一番適当した角度





は、やはり後方からでしょう。

これは極秘のアイデアですが、死角に小さな手鏡を差し入れますと、アヌスの微妙な変化や、そして放尿の原流地点の状態などが一目瞭然に見ることが出来ます。

さて、前置きは、このくらいにして私の収集したデータを基にして、女性の放尿論について、述べてみたいと思います。

人間がトイレで排泄のポーズをとるとき、それは各々の顔が異なるようにそれぞれ千差万別なのは驚く位です。私の観察した女性のトイレに於けるポーズも極めてバラエティーに富んでいました。

そのうち、ある会社のOLで、社内では美人で通っている女性の資料は私にも興味のある一つです。顔はどことなく俳優の三田佳子に似ていて、私もほのかな慕情を持ったこともある女性です。まあ、三田佳子のムードを思いうかべて頂ければ、そう遠くはないと考えます。

私の保存してある〈女性の排尿に関する資料〉の第一ページに彼女のことが次のように記されています。

〔記〕

〈氏名〉　本田由紀子。
〈年令〉　二十四才（但し推定）。
〈容姿〉　Aランク。
〈体型〉　やや痩せ型。
〈ポーズ〉　小水、曲がるためか右足の踵をやや高くしながら放尿。
〈体毛〉　濃密度は普通、やや長い目。
〈アヌス〉　今まで見た中で最も美しく、色も、うすくてピンク色。形も最高に整う。
〈備考〉　OX薬品株式会社庶務課勤務。放尿のみ。

こういった簡単な説明でありますが、なんといっても、その場面をズバリ撮影した写真がものを言っています。

被写体が、私の狙いのつけていた彼女であるか、どうかの判断は、前もって、その会社に何くわぬ顔をして出入りして、当日の彼女の服装（特にハキモノ）を記憶しておけば、その点、万事OKです。

さて本題の放尿に関してですが、これもポーズと同様に各人各様の特徴があって中々興味があります。

前記の様に、尿道口が曲がっているのでしょうか、排尿が真っ直ぐに飛ばずに腰の位置を加減しなくては便器の外に放出してしまう女性があります。それと類似していて、尿が

一筋に流れないで、体毛か何かの障害物によって二筋、あるいは三筋に分離して落下している女性もあります。

また、体毛が密生していて、尿が空中に出るのが困難なためか、或は、その他の原因によるのか、アヌスの方まで幾筋かの水滴となって、つたわり、後方でポタポタと落下させているような女性もあります。

そして、これは最もオーソドックスな形でまた一番、一般的なものですが、一条のきれいな流れとなって、半円形を描きながら放尿する普通派が一番、多いです。

排泄前の模様も多様で面白いです。

落ち着いて足の位置を確認してから、的を定め、ゆっくりと放射する礼儀派（？）がいるかと思うと、衣ずれの音と同時に、私の視界の中に、大きなヒップが入ってくる以前にいきなり激しく放尿をはじめる女性があります。そして、尿が目的地以外の方向へ行ってしまってタイルを汚してしまってから、あわてて腰の位置を訂正するという粗忽派（？）もいます。

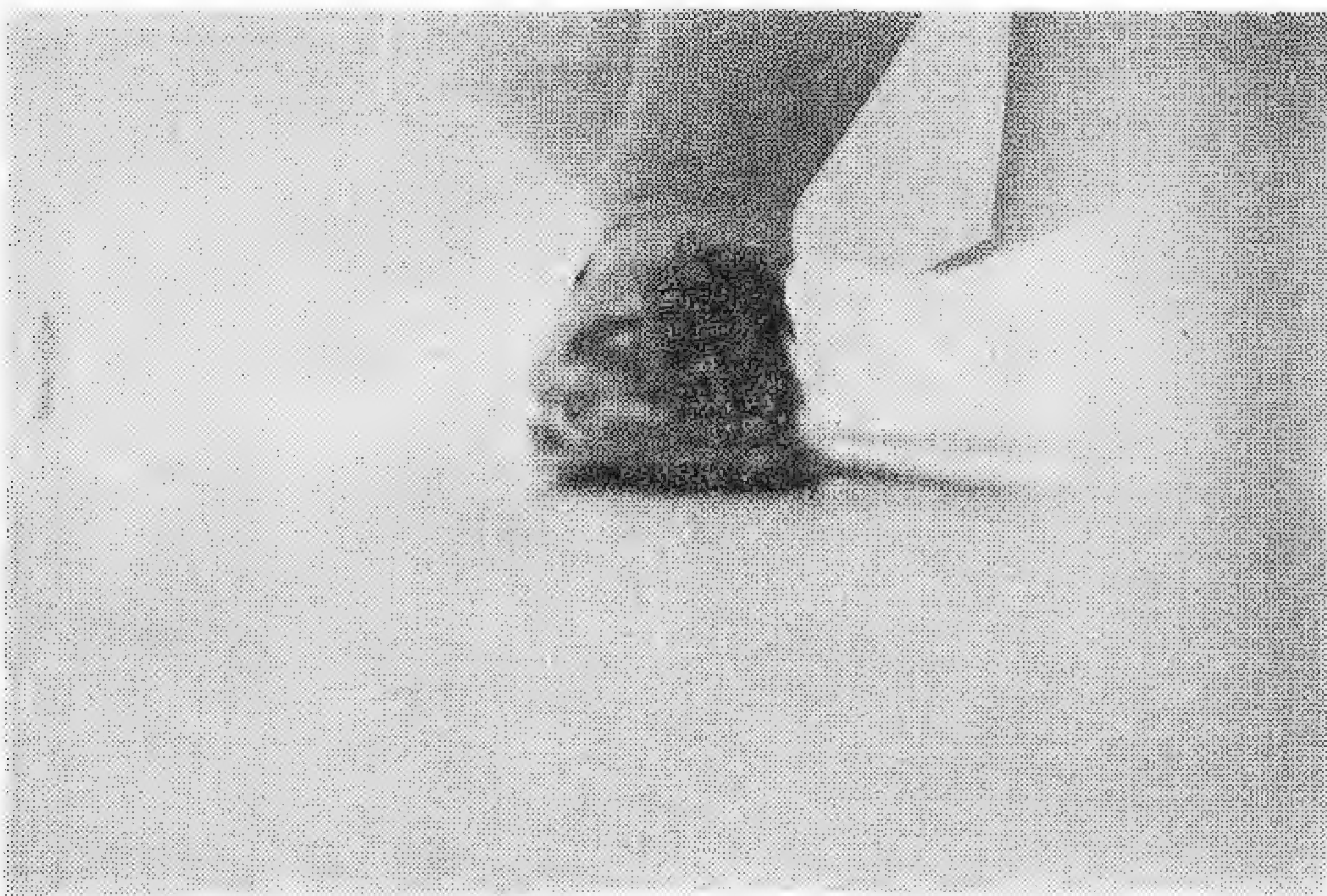
また傑作なのは、激しい放尿をタイルにとびちらせた際に受けた、はねかえりのしぶきをトイレットペーパーで拭きながら、なおも放尿を続け「ああ、きたない」などと、ひとりごとをつぶやいている光景に出会ったこともありました。

また、ドアをしてトイレの中へ入るなり、すぐ水を流し、出て行くまで、他度も何度もコックを押して水を流し続けている女性もいました。こんな時は、その水音でシャッターの音が消えこちらの手間が省けて便利なこともありました。

中には、トイレの中でタバコを一服してゆく女性が一人ありました。彼女はタバコをすっている間中、下着を上げずに便器をまたいだまま、しゃがんでいましたので、おかげで約三分間ぐらいでしたが、具さに彼女のアヌスを間近に観察することが出来ました。

アヌスといえば、これもまた多種多様で、前記の女性のような清潔そうなピンク色をした可愛いいものもあれば多く刻まれたヒダの頂点にポツンと小さな山を持っているものや、中には、暗紫色の大柄で、あまり好感の持てないものもありました。

意外に多いのは痔疾を患っている女性を見かけることです。やはり、そういった女性のアヌスは暗い色をしていて、色素が沈着しています。何かの拍子に力を入れた途端



で、5ミリぐらいの突起物が姿をあらわして興ざめになることがあります。

その中でも、特にひどいのは脱肛です。ポッコリとアヌスから、それが顔を出し、便かと思って、よく見ていると落下する気配もなく、出たり入ったりを、繰り返しています。よく注意してみますと、うすく血が、にじんだりしているのもあります。

トイレットペーパーで後始末をする時も、持ち主は、そっとそっと、こわれ物でも取扱うように、まるで撫でるように軽くふれています。その度に、それはサッと引っ込み、また、間もなく、そのグロテスクな姿を露呈します。まるで生きているように——。

やはり、私にとっては、自然の形をした可愛いアヌスが一番、観賞価値があります。そして容姿や容貌のきれいな女性ほど美しいアヌスを持っているという結論が、今までの私の調査研究から成り立っています。

また、後始末を強い力で行ない、ペーパーの一部をアヌスのひだの中に残しながら、下着をつけている女性は、なんとなく可愛いらしく感じました。

アヌスの話題が出ましたついでに、若い女性の排便について言及してみましょう。

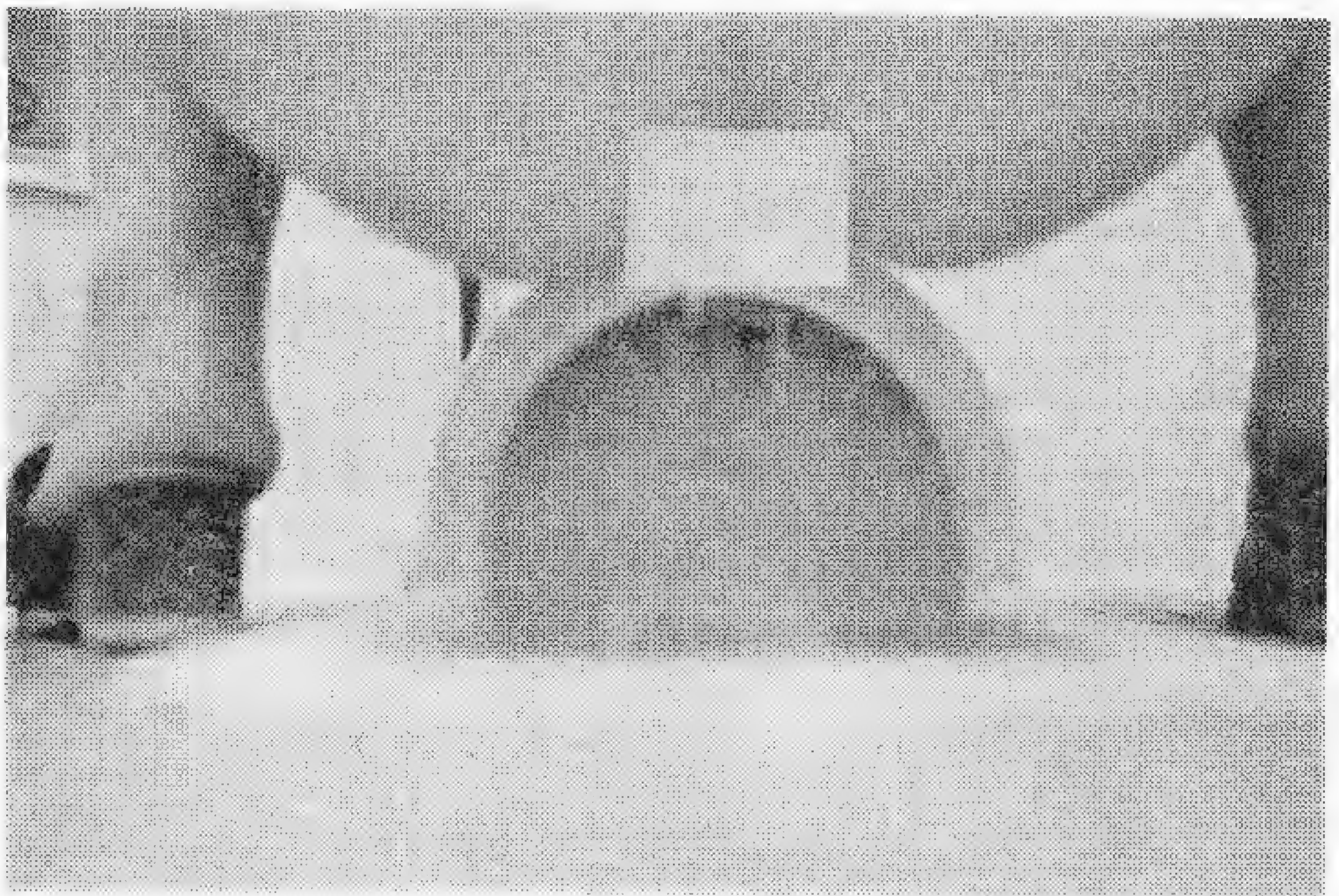
私が、この排便という場面につき当たったのは半年に亘る収集調査の過程で、まだ十回をやっと越す経験しか持っていません。その中でも、特に印象的であったものを二例、紹介してみましょう。

その一人は、ある喫茶のウエイトレスをしている女性です。この女性は、ふだん、お高くとまっていて、無愛想なくらいツンとしていましたが、顔は美人というよりも可愛いらしくて感じのよいフエイスでした。

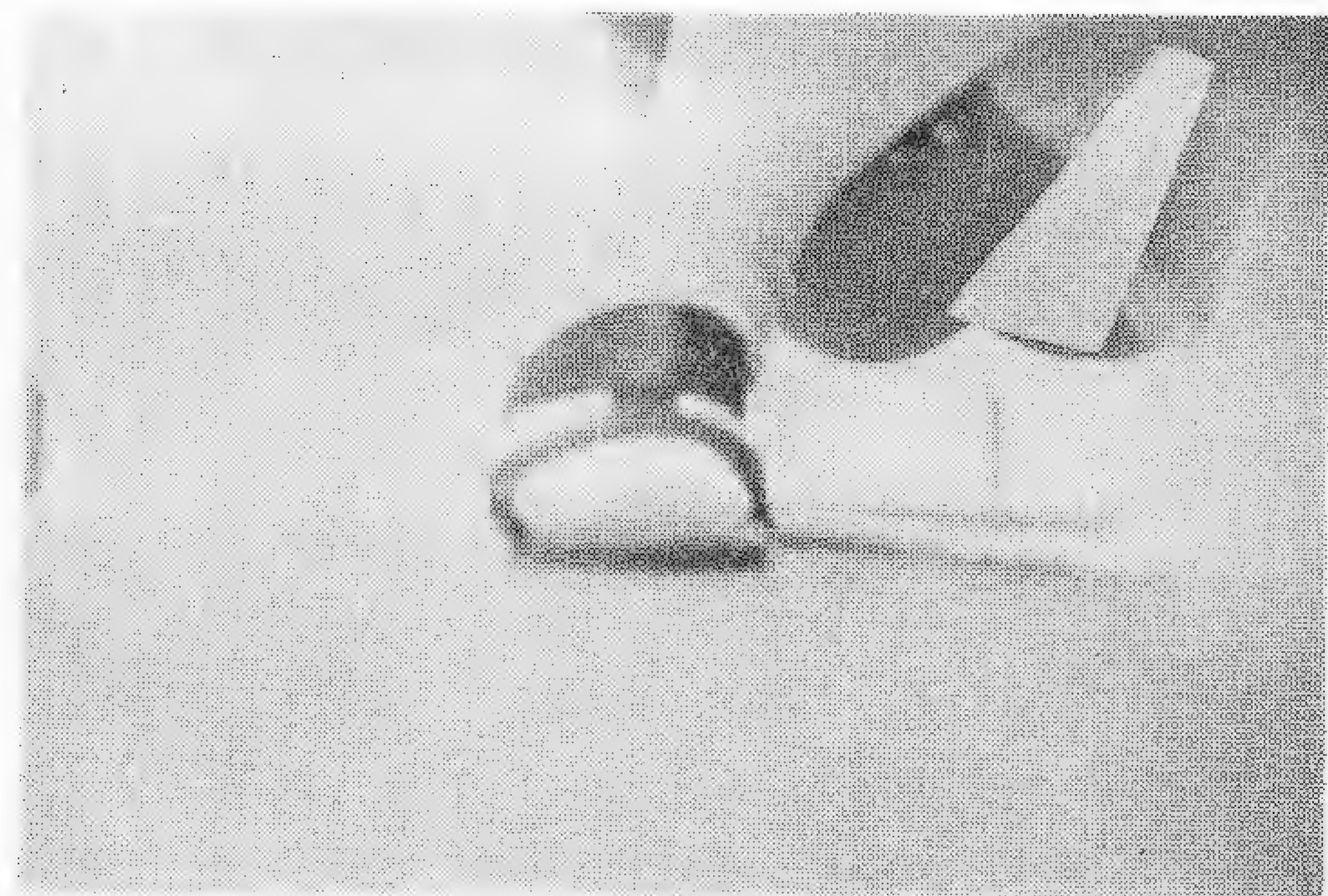
このトイレは、男女共同でした。ボックスは二つあって、それぞれ離れた場所にありましたので横から覗くような形になります。

女性のハイヒールの音がしましたので、ドアのすき間から誰であるかを確認しますと、彼女でした。タイルに顔をつけて、懸命に覗きましたが、私の必死の努力とはうらはらに彼女の放尿は、すぐ止んでしまいました。しかしすぐに紙も使わず、立つ気配もありません。じっと眺めていますと、見る見るうちに、真っ黒な便が、少し下痢気味に、連続的に落下してゆきました。

この便は、今まで見たものの中では、最も黒い色をしておりました。他の女性のものは



茶褐色か、或は黄土色をしていましたが、彼女だけは、何か無気味な暗黒色をしていました。



もう一人の女性のは、私の目の前三十センチくらいの至近距離で行なわれました。これまでの経験で判ったことでは、排便の直前に大半の事例では、重いか軽いかにかかわらず、放屁が伴うことです。

音無しのもあれば、軽快なものもありましたし、中には大砲の音のような見ていた私が思わずのけぞるような強烈なものもありました。若い女性とても排便の前に放屁するのが当たり前でその音のことを、とやかく言う権利は私には毛頭ありませんが、とにかく女性の放屁だけ取り上げても千差万別なのは極めて面白い現象です。

話はそれましたが、その女性が、また女性らしからぬ至って太いものを残してゆきました。靴の型を記憶しておいて、あとで、どんな女性であるかを確認しますと、これがまた小柄で、ポチャポチャとした色白でチャーミングな女性だったので驚きました。毎朝、排便しながら、便器の底にある自分の排泄物を観察するのですが、自分自身で太いなあ——と思っていました。その私のものより、彼女のものは一まわり太かったのですから全く驚きでした。

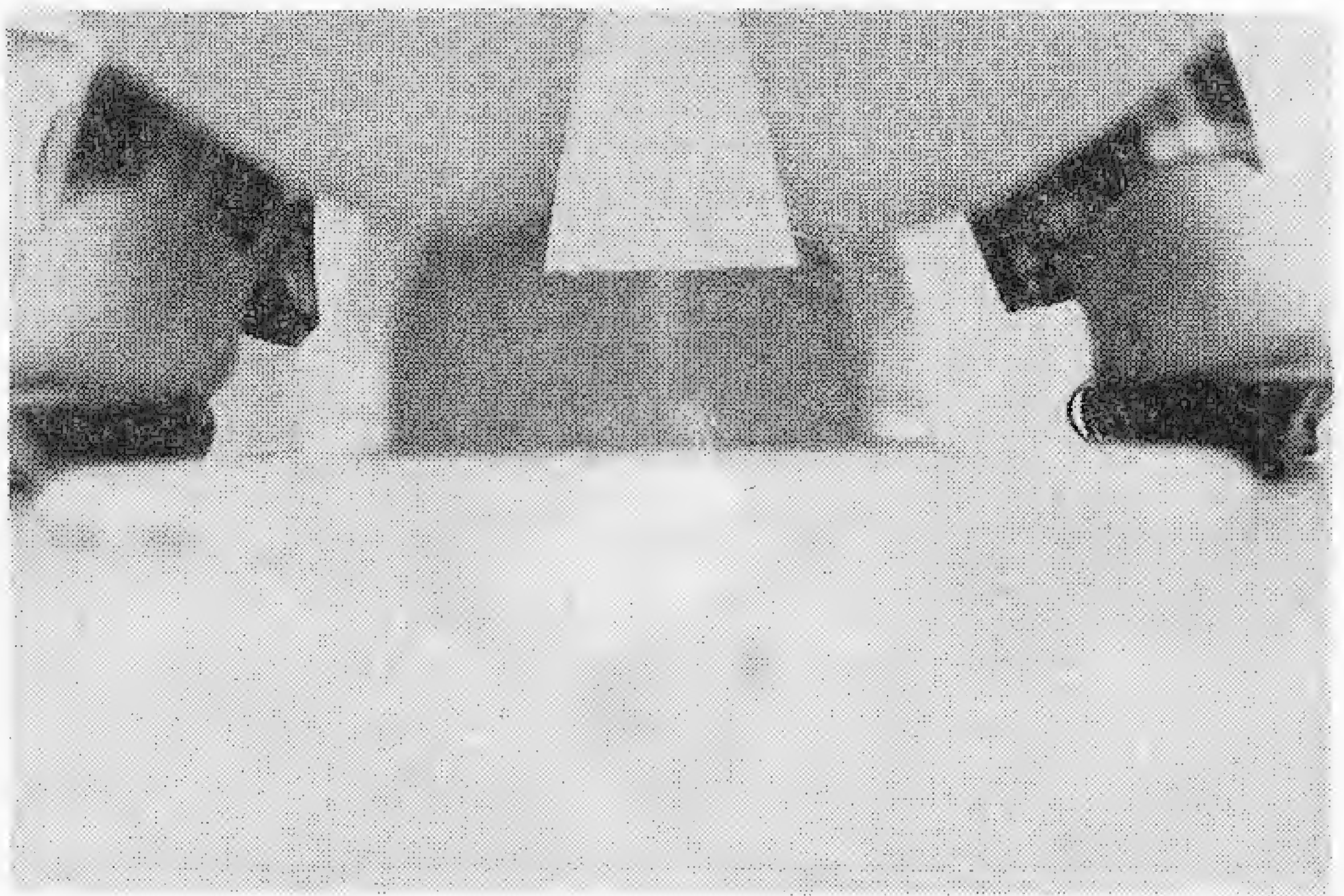
一般に排便のためにやってくる女性の放尿は、極めて短時間なのが普通です。中には、一緒に欲求が起きるまで、どちらか片方に、待つという試練を与える経済的な女性もいることは、たしかです。

排便の際に起こる音は、自分自身が、それを進行中の時は、案外気づかないものですが他人の排泄行為を眺めていますと、意外と凄い音がするものです。これも、いろいろと多種多様で一語で表現することは不可能ですがその際に女性の発する力む声とは、似ても似つかぬグロテスクな音です。

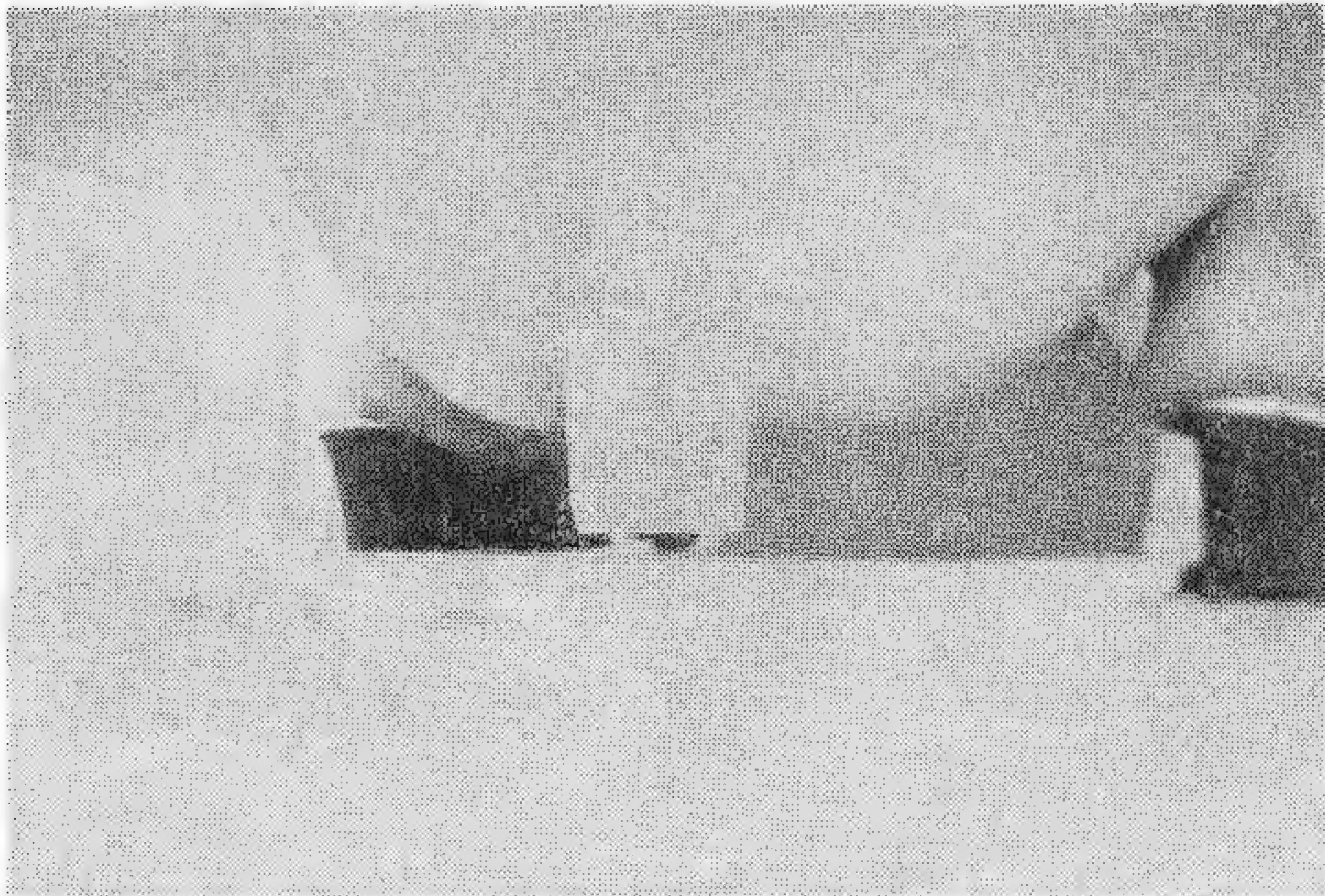
そして、第一回目の落下が、いつも非常に困難で、何度も力みますが、アヌスが、こんもり盛り上がって、ひしゃげた形を呈するだけで一向に黄金がお出ましにならない場合でも、二発目からはスムーズにお出ましになりその際の排泄音も、一発目よりは大であるというケースが多いものです。

消化しきれない豆のかけらとか、繊維状の細いものが混じっている便もあります。また一体、何を食べているんだろうと、私自身、首をかしげるような悪臭を放ちながら、資料収集に努力する私の作業を思わず中断させる

ようなクサイものもあります。
こうした排便に運よく遭遇した際には、メモに詳しく、排便有、色何々、難産か否か、臭気の区別、不消化物の有無などを細々と書き込み、あとになって一覧表の備考欄に清書することにしています。排便時は、どうしても放尿に比較して時間がかかりますので、写真の方は6乃至7枚は撮れます。
現像が出来て、排便時の連続的なシーンが印画紙の上に再現されますと、その過程が手にとるように、よくわかって面白いです。
被写体が私の方に尻を向けての排泄でしたらカメラは私のいるボックスの金かくしの前にセットするとよいようです。5センチくらいのスキ間なので、壁もレンズの中には入りません。被写体までは約50センチぐらいですから、最短距離でピントが合います。そして被写体の直後なので、完全な死角になって見つかることは絶対にありません。
手鏡を利用する場合はガラス特有の音をたてないように、そっと移動させれば、境の壁を越えて向こうへ潜入しても大丈夫気づかれる心配はありませんが、反射プリズムを応用した一眼レフのようなファインダーがあれば自分のボックスの中に居ながら観察できるから、より安全でしょうが、私はまだ試みたことはありません。手鏡は前へ出せば出すほど入念な観察が可能なことは言うまでもありません。
一カ所だけですが、上から覗くことが出来る場所がありますが、この場合放尿の具合は見ることは出来ませんが全体のポーズが観察出来るといった点に於いて、また価値があるものです。
新調したばかりの流行のワンピースを汚すまいとして懸命に、まくったそれを押えて排泄している女性。落書きを、しきりに読んでいる女性。ハンドバッグをあけ財布の中を改めながらシャーシャーやっている女性もいます。また、頸に手をかけて、何か妄想に耽っているような瞑想型の女性。中にはパンティの汚れをトイレットペーパーで拭って、その上、頭をたれて、そこに鼻をつけてクンクン匂いを嗅いでいる女性もいました。
生理中の女性には、一回だけ、お目にかかったことがあります。
現像した写真には、出血の様子が、尿とは直角の方向にツツーと黒いものが落下してゆくのが記録されています。カラーでないのが残念であるともいえる資料です。
ボーリング場のトイレでは、ゲームの終了



後、きっと汗をかいたのでしょう。股間に限らず太股の付け根あたりを、丹念に拭いていた女性もありました。



また彼氏と一緒にプレイをして、これからホテルへでも行くのでしょうか。股間の後始末の後に、ハンドバッグから、シッカロールのようなものを取り出して、ポンポンとかけておいて、その上、スプレーのオーデコロンをシュッ、シュッとふりかけ、鼻唄まじりに出てゆく女性もありました。

破れたストッキングを新品と取り替える女性は割合多いですが、団体でドヤドヤとやってきて、口々に上役の悪口を言ったり、男の噂をしたり、いろんなおしゃべりをしてゆくOLたちもいます。また、会社の中で、みんなでまわし読みをしているのでしょうか、一種の春本を、読んでいるOLもいました。

このようにして、暇さえあれば、若い女性の排泄行為の分析と研究、それに資料の収集のため、トイレへ潜入していますが、目の保養ばかりでなくコレクションが日に日に増えてゆくのも楽しみです。

女性にとって、トイレとは何か――と、いうことを、よくよく考えてみますと、それはただ排泄するのみの場所ばかりではなく、忙しい日常の時間の中に見出す、ひとときの憩いの場ではないかと思えます。

自分たった一人の密室。その個室に於いては好きな事も出来るし男子禁制でもあるので同僚の女性同志の情報交換のよき場所でもあると言えます。女性は、このように多目的にトイレというものを利用しているように私は感じました。

私よりは進んだスカタロジーの同好者でしたら、そんなことは、あたりまえだ――と、一笑に、ふされるかもしれません。そうした諸兄も、きっとおられることでしょう。私はまだまだ、それについて、一歩つけたばかりの若輩です。

しかし、今はもう秋です。これからは次第に寒くなります。ということは、人間にとって生理的に排泄の回数が一段、増えることになるわけです。

私もまた、一段とコレクションとデータの収集に、忙しくなります。いずれ又、新しい資料が手に入りましたら、お知らせしたいと思います。

――（おわり）――

―連載・アブ紳士行状記―

M派交友録

―宮下秀世の巻(五)―

鬼山絅策

(34)

カット・岡たかし



よきかな戦争

これは、後に馬場氏から聞いた宮下氏の過去についての話である。

話が前後するが、あの夜の宮下氏の心情を理解する上において、宮下氏の過去を知っておいた方が首肯されると思うので、先に触れておこう。

昭和十五年、宮下氏は陸軍の歩兵伍長として満州に駐屯した。支那事変の末期である。

軍に肉を入れている宋という肉屋が、病気になって代りに細君が肉を運んできた。その細君が肉感的な美人だったので、彼は次の日宋の病気を見舞いに行き、細君を犯した。

それが病みつきとなり、彼は満人の人妻を犯す快楽のとりこになってしまった。

街でこれと思う女を見つけると、その家に行き、漢奸(スパイ)の容疑があると脅し、いやがる女を堂々と強姦した。

太平洋戦争がはじまり、彼の部隊が北支に移動してからは、彼の行為は悪業の限りをつくした。

当時、その地方にはゲリラが出没した。敵方の言う民兵というやつで、平素は百姓などをしていて、突如としてゲリラとなって奇襲をかけるのである。しかし、これは兵隊達にとっては願ってもない好都合なことだった。

宮下は気の合った兵隊と三人でゲリラ狩りと称して民家に押し入り、金目のものがあれば強奪し、女と見れば娘でも人妻でも容赦なく三人で輪姦し、そして殺した。

彼の分隊長は予備学生上がりの少尉。軍隊

のことは何も知らぬ、でくの坊の少尉だったから古株の宮下の言うことは何でもきいた。

彼は戦争位、いいものはないと思った。

日本の国内なら極悪無惨な行為も、平気でやって、それで罪にならぬのだ。こんな、うまい話は、人の一生を通じて滅多にあるものではない。全く戦争のおかげである。

彼はまた、日本の軍隊というものの有難さも身に染みて感じた。皇軍の進むところ、敵の民衆は恐れをなして平伏した。皇軍の軍人なら、人殺しをしようと強盗をしようと強姦放火、何をやっても、いいのである。こんな愉快なことがあろうか。戦争万才、日本陸軍万才である。軍律などというものは、どうにでも、ごまかせるのである。何しろ頭に立つ奴が世の中の西も東も分からぬ大学生なのだから。

軍隊というところは、することがない。ばくちでも、やるより能がないのである。ばくちに飽きれば公用という口実をつくって、勝手気ままに外出できた。

ある村落のはずれにある民家に三人で押し入った時、そこには若い夫婦と二才ぐらいの女の子が居た。

宮下は一人を外に見張りに立て、夫の見ている前で若い妻を犯しにかかった。いま一人が夫に銃を突きつけていたが、それでも夫は宮下に向かって行こうとした。仲間が発砲し夫の腕を撃った。赤ん坊が泣き出した。

「うるせえ、がきだ」

仲間は軍靴で赤ん坊を踏み殺した。血みどろになった夫が、なおも向かって来ようとするのを、仲間が銃剣で背中を串刺しにして土間に釘づけにした。苦悶にゆがむ夫は、目の玉がとび出るほどに剥き出し、黄色い歯ぐきを見せて歯ぎしりした。それを見ながら悠々と強姦し、代わって仲間が次々に犯した。

宮下は、この時の快感が忘れられず、再度妻を犯し、夫の額に、銃弾を打ち込んで殺した。そのあと仲間二人が、また妻を犯し、最後の一人が妻の首を絞めて殺した。

「ちょっと、やりすぎたな。見つかると、やばいぞ」

三人で相談した結果、証拠を消すために火をつけて、すっかり焼いてしまった。

部隊は翌日、他の部落へ向かって移動したから、その家が何で焼けたのかさえ知る者はなかった。

こんな痛快なことがあろうか。これも皆、皇軍のおかげである。戦争のお蔭である。

終戦となった。

支那人から石をぶっつけられたり、蹴とばされたりしたこともあったが、彼は肚の中でせせら笑っていた。

〃そのくらいのことで、いいのか。俺は、てめえらを叩っ殺してきたんだぞ〃

唾を吐きかけられたこともあった。

〃そんなことで、いいのか。俺は、てめえらに小便を飲ませたことだってあるんだぜ〃

宮下は、彼等から迫害を受けるたびに、むしろ、それに快感を、おぼえた。

日本に帰ってきた。

街で綺麗な女を見かけると、犯したい衝動に、かられた。しかし、それは、できない。何と不自由な所であろう。軍隊に居れば、ばくちをやっていれば自然に飯ができてきて食えたが、平和な日本では働かなければ飯が食えない。

軍隊時代のことは、よい夢を見たと思って心を入れ替えて、まじめに働いた。

宮下の仲間だった兵隊も、宮下の郷里の福島県の男達だった。終戦後、三年目に三人は再会した。一人は村長になり、一人は郵便局長で、共に村では謹厳な人望家として尊敬と信用をあつめていた。宮下とて、その頃はじ

めたベニヤの商売が順調に行き、三人とも立派な紳士で、これが満州や北支で悪鬼のような所業を犯した男達とは、とても見えなかった。

お互いに軍隊時代の楽しかった想い出を語り合ったが、しかしこれは三人だけの、絶対秘密な事柄だった。

外見的には楽しく歓談して別れたのだが、その後は三人とも一度も会っていない。会うのが何となく、うとましいからだった。

真昼の幽霊

終戦後の乱れも落ちついた頃、結婚して子供もできた。その頃の宮下氏はサジストでもなければ、マゾヒストでもなかった。

夢中になって商売に打ち込み、多少の女遊びはしたが、それは商売上のつき合いで、まず中小企業の経営者としては当然の行動だった。

昭和三十三年。

戦争から十三、四年も経た、ある一日。

彼はバスに乗った。バスの中は空いていて乗客は三、四人しか乗っていなかった。

彼は席について、ひょいと向こう側を見ると、水を浴びせられたようにゾーッとした。

あの北支の村落で、焼き殺したはずの男が目の前に居て、宮下氏を真正面から見つめていた。

眼球が、とび出すほどに目を剝き出していた。

あの時、最後に宮下氏は拳銃の弾を男の額に打ち込んで、ざくろのように額が割れたはずなのに、いま目の前に居る男の額は、あの無暗に広いおでこに深い皺を三本、刻ませた拳銃で打つ前の額と全く同じだった。

宮下氏は金縛りにあったように、身動きができず、男の視線から目を離すこともできず呼吸のとまる思いで男の顔を見つめていた。

すると男は突然、口を開いて笑った。いや笑ったのではなく、歯ぎしりをしたのかもしれない。黄色い歯を剝き出して——。

彼が拳銃で額を打ち抜く寸前の顔だった。

宮下氏は、そうろうとして次の停留所を待ち兼ねてバスを降りた。

降りてからバスの中を見ると、その男は振り返って黄色い歯を見せて笑っていた。

他人の空似というには、あまりにも、そっくりそのままの顔だった。滅多に見られる顔ではない。あまりにも特異な容貌なのだ。それが生き写しにも何も、まるっきり同じ顔なのだ。

彼は激しい頭痛に襲われ、その場から家に帰って休んだが、夜になれば夢の中に出てきた。

そして彼は突如、インポになった。

彼の失意によって、商売の方も一時、左前になったが、やがてそのショックから立ち直って、再び仕事に熱を入れ出したため、会社の方は立ち直ったが、インポの方は治らなかった。

彼は夜に悩んだ。当時、めかけ同様の愛人も居たが、それとも別れた。彼の妻は貞淑で不満も見せずに、よくつくした。

インポにはなったが性欲は人一倍、強い方だった。だから夜になると、よくキャバレーやバーに出かけて浴びるように酒を飲んだ。

そして女性に対してオーラルセックス、その他で遊ぶことを覚えると同時に、マゾヒズムが芽生えた。

彼は戦争中、女性に対して犯した罪ほろぼしだと考えるようになった。

バーのホステスと三角関係ができた。

三角関係というよりも、その女のヒモに脅迫された形であった。

その男に金をゆすられ、殴られ、蹴られて責められた時、彼は突然、女性転移の心理を経験した。

それ以来、彼は自らを女性に転移し、男性及び女性に責められることを好むようになった。

そして、彼のインポは治った。

それは、その男に彼の男自身を煙草の火で焼かれた時、回復したのである。

インポは治ったと言っても、まともな行為は滅多にできなかった。身体の調子がよいと思う時、たまに妻を抱いて見る。脳裡に、あの男から責められた時のことを描くと、どうかすると暫くの間、それは一、二分の短い間ではあるが、持続することがあった。

彼の関係したホステスというのは大して美人でもなく、しかも無知で最低な女だった。

ただセックスにかけては動物的で、どんなハレンチな行為も面白がってやった。相手の男は、やくざだったが、恐喝を表沙汰にされて刑務所に喰らいこみ、それから行方が分からなくなった。その男が居なくなると、もう女の方にも興味がなくなって別れた。

宮下氏の性向に関する過去のデータの概略はザッと以上のようなものであるが、その他に最近の事情を、も少し、つけ加えなければならない。

一時は二、三十人も使って、建材の売買や設計の請負などで、着々と伸びて行った仕事が、最近になって急速に悪くなってきた。

大きな、こげつきが出て、金繰りが苦しくなった上、新しい建材が出回って彼の扱う商品が古くなってきたことも業績を悪くした。

いろいろな悪条件が重なって、会社は倒産寸前に追い込まれていた。

豊玉中の彼のこの邸も、抵当に入っていて借金返済のため売却しなければならなくなったのである。

彼が撮影の場に我が家を使ったのも、もしまだ住み続けるのだったら、使わなかっただろう。間もなく我が手をはなれるこの邸。彼の汗の結晶によって生み出したこの家に、愛着を感じて、せめてもの名残りにと、思いついたことなのであろう。

当時の彼は、そんな内情だったから、かなりデスペレートになっていた。さすがに五十を過ぎて、分別もあるから、我々に表面からそれを覗かせなかった。

最近の彼にとって、仕事に対するファイトを失わせ、転落のスピードを速めさせたものに、かつ子がある。

なおみとプレーしていた時には、甘美なムードがあった。

なおみから、かつ子にリレーされた時、彼の被虐度は急速に進んだ。かつ子とのプレーは砂を噛むような殺伐さで、甘さというものが全然、感じられなかった。

だから、より強い刺戟を求め、より強い苦痛を、求め合ったのである。

かつ子の捨て鉢な生活、無知で最低な女、それは、かつて彼が関係したホステスと似通ったところがあった。

どんどん堕ちて行く女と男。

そこに共鳴感もあったのだろう。

私は不明にして宮下氏が、そんなにも窮迫した立場に追い込まれていることを察知し得なかったが、それを一番よく知っていたのはやはり、かつ子だったであろう。また、かつ子ほどではなくとも、なおみも、それを肌で感じとっていたに相違ない。

より下に

なおみは勝手気ままにやっているようでいて、プレーに、ちゃんと計画を立ててやって

いた。
最初、馬場氏を責め、宮下氏には間接的な責めで、本格的な責めではなかった。
それから私のところに来て、私にサービスし、そして今度は宮下氏にサービスする。そういう順序を最初から組み立てているらしかった。
私は疲れていた。
少し休みたかったが、なおみにサービスされているところを、なおみが急に襖を開けて二人に見せつけてしまったので、羞恥による緊張が、一瞬にして疲労を吹きとばしてしまった。
しかも息つく暇も与えず、なおみは宮下氏の顔に跨がって、いよいよ直接的な責めに移っている。やはり女性は、いつの場合も男性よりも強い。
なおみは汚いものにでも跨がるように、ちょうど便器にでも跨がるように宮下氏の顔を見下ろした。
太腿の内側が濡れたところで宮下氏の頬をはさんだ。
女性というものは、まことに千変万化するものだ。
例えば一部分に限って見た場合でも、花びらのごとく美しくやさしく、いとおしく見える場合もあれば、歌舞伎の所作ごとに出てくる隈取りをした顔、或は西洋のサタンのような、恐ろしい容貌に変化する場合もある。
喜びも、笑いも、哀しみも、怒りも、立派に表現して見せるのだ。
いまの、なおみの場合は、まぎれもなく怒れるサタンの顔であった。少なくとも私の目には、そう見えた。
しかも飽くなき貪欲な形相を呈している。私の肉をくらったばかりなのに、それでも足りずに、次の獲物に向かって襲いかかろうとしている。
口から、よだれを一ぱいに垂らし、自由を封じられ、無抵抗の哀れな五十男に、襲いかかろうとしている。
なおみは宮下氏を「牝豚！」といった。
これが宮下氏に打ってつけであり、宮下氏自身も好む言葉なのであろう。かつ子も、そう言っていた。かつ子の場合は〝おとこ〟が牝豚を犯すのである。だがいまは、なおみは〝おんな〟として牝豚に恥辱を与えようとしているのである。
かつ子のように尻の方から木製の、こけしを突き出してやるのは、いかにも不自然である。〝珍奇な絵〟かもしれないが、そこに、「美」はない。
やはり女は女として、やる方が美しい。
宮下氏の心境は、ひと口に言えば、
〝より下に……〟
という願望なのだ。二人きりなら当然、相手より下に……。だが三人居れば、下の者の更に下に……という願望なのであろう。
先に、なおみは馬場氏を羞かしめた。そして私も、それと同じ状態で羞かしめられたのでは、私も馬場氏と同格になってしまう。
「より下の責め」が望みなのだ。
なおみは、それをチャンと心得ていて、最初から手順よく踏んできているのだった。
なおみは、サタンの形相を宮下氏の顔の上スレスレにして、宮下氏の反応を見た。
〝お前には、これが身分相応なのだぞ！〟
という言い含めだった。
それにしても、なおみの太股は豊かで逞しい。ドッシリとした安定感があり、両の太股でガッチリおさえこまれたら、どんな男でも身動き一つ、できなくなるだろう。
なおみが顔の上に跨がっただけで、完全に奴隷の上に君臨する女王の貫録を十分に見せていた。

私はカメラを構えレンズの中から覗いた。稍ライトを背にして逆光である。恐らく〝サタンの顔〟の表情は描けないだろう。だが微笑を浮かべて見下ろす、なおみの美しさは捉えられると思った。
「口を、おあけ。もっと大きく！」
そして、ゆっくり、その口を、ふさいだ。
「なぜ、ひげを剃っちまったんだよ。はやしとけばいいのに。手ごたえがないよ。あ、痛い」
剃りあとのザラザラにひっかかって、痛いのだろう。
「馬鹿だね、お前は。今度は、また、ひげをはやしておくんだよ。いいか」
宮下氏は目をつぶり、あかぐろく充血した顔は、グラマーな、なおみの体重を必死にこらえて、酔っていた。
「きいさん。ねえ、きいさん。出て来て、そっちの人の縄を解いてやってよ」
なおみは、手が放せない。
いや、手ではなく足が離せないので、私を呼んだ。
圏外に居るつもりだった私も、なおみの誘導に巻き込まれてしまった。
暗い所から明るい所へ出て行くのは、テレくさかった。
馬場氏の手首は意外に、きつく、しっかり縛ってあった。解くと馬場氏は、
「すみません――」
と言った。何だか変な調子だ。
「ホラ、あんた、あれ、持ってくるのよ」
なおみは、あごをしゃくって風呂敷包みの中のものを示した。
馬場氏が風呂敷包みの中の、いろいろなもののなかから、
「ろうそくとマッチよ」
と言われて太い、ろうそくを持って来た。
私は用がなくなったから、また元の位置へ引き下がった。
馬場氏は、この前、かつ子がやったのを見ているから、何をするかは知っている。
宮下氏は仰向けに寝ては居たが、尻を横に捻っていた。まともに仰向けになると、尻の棒が、つかえるからだった。
「それ、抜いておやり」
なおみはサッと立ち上がった。足をあげて宮下氏の部厚い胸のあたりを踏み転がして、うつ伏せにする。
「手が、痛くて……」
宮下氏は蚊のなくような声で言い、なおみを、あわれみを乞うように見上げた。
長い間、仰向けにされていたから、自分の体重で、手首は死人の手みたいに血の気を失っていた。
「よし、特別にお情けをかけてやる。ほどいておやり」
馬場氏が解いた。
「ホラ、仰向けになれ」
なおみは足で宮下氏の肩を踏み、蹴転がそうとした。
宮下氏は、調子を合わせて、自分からゴロリと横転した。
なおみは馬場氏に命じて、両手を腹の上で組ませて、また縛った。
「サ、あんたが、やるんだよ」
馬場氏は気が進まぬようだったが、なおみに命ぜられて、しかたなく、ろうそくに火をつけた。
「あ、それだけは勘忍してちょうだい」
宮下氏が、女の声を使っているつもりだろうが、何とも言えぬ怪鳥の鳴き声のような声を出した。
「やかましい！　ギャーギャー言やがって」
なおみは両手で浴衣を男のように勢いよく捲くって、ベッタリと顔の上に尻をのせてし


ナミオM画廊『サア、どうしちゃおうかナ』春川ナミオ

まった。
「アッ、アッ、勘忍……」
女の声を出しているときは、宮下氏も演技をしているわけであり、それだけ、まだ余裕があるわけだ。

その声も途中で、ふさがれてしまった。
あずき色のお召を着た宮下氏の裾を馬場氏が捲くった。毛深い脛や太腿が露出した。
馬場氏が、その両腿を膝で踏んで、ろうそくを近づけた。

蝋涙が、ポタリと垂れた瞬間、ピクンと、はね上がった。
なおみは、両股で顔を締めあげた。
蝋涙が上から垂れる。それと交叉するように、チョロチョロと白いものが見えた。
なおみは立ち上がって、宮下氏の顔を見下ろした。
「今日は意気地がないじゃないか。もう降参したのかい」
宮下氏は、かぶっていた、かつらが半分、脱げかかって、なんともいえない、ぶざまな恰好だったが、その顔は、いかにも楽しそうな満足気な表情であった。
「今日は割合、早く降参したわね」
「そうですか」
「いつもは、こんなもんじゃないでしょ。かつ子ん時は、どうだった？」
「そう、ろうそくだけでは駄目でしたね。ガラスの管を使ったりして、あれは、ぼくにはとてもできません」
「そんなものまで、責め道具にするの。フーン。あたしは、やったことないわよ。かつ子が教えこんだのかしら」
なおみは傍の机に腰かけて、私に煙草を求めた。

「何だかこの家、空き家みたいね。押入れを開けても何もないし、変に片づいたとこ、あるわね」
階下に下りて、応接間でひとまず休憩ということになった。
宮下氏は二階に、縛ったままで放り出してきた。
「奥さんや子供さんのものが、ひとつもないのよ。ほんとの、やもめ暮しみたい。変な感じだわ」
そう言われればおかしいが、それでもまだその時は、この家が間もなく人手に渡るためだとは、私は気づかなかった。
「もう彼は、あれでいいの?」
「まだまだ。欲張りだからね。もう一回ぐらい、やってやらなきゃ」
「だが、あんまり残酷なことするなよ。何だか見ていて、気持が悪くなったぜ」
「フフ、あたしは、そんなひどいことは、しないわよ。でも、あいつは少し殴ってやらないとね。いまに催促してくるから、見ててごらんなさい」
「何で殴るの」
「何でもいいのよ。ほんとは馬場さん、あんたが殴ってもいいのよ」
「ぼくは、とても、できないな」
「あんたは、殴られるのはイヤなの」
「ウームと、サア、そう聞かれると返事に困りますね。殴ってくれとは言いにくいけど、何かで殴られた時、一発ぐらいは気持が、いいですね。やっぱり好きなのかなあ」
「それと、まだ飲ませてやるものがあるし」
なおみは、はだけた裾前から、はりきった太腿を見せて足を組み、煙草を輪にふかしながら、馬場氏の顔を目を細めて見た。
「あ、それなら、ぼくに飲ませて下さい」
馬場氏も酒が入っているだけに、勇気ある発言だ。なおみはニッコリ笑って、
「そう。じゃ奴には、あんたが飲ませてやるといいわ。それとも、きいさん飲ませる?」
「いや、私は今夜は蔭の男だから、馬場さんやるでしょう」
「男のを飲むんですか?」
「飲むわよ。だって〝女〟だもん。男から虐められたいのよ。あの、かつらをかむっている限り、女なんだから」
「ヘエ、ぼくは男の人のは全然、飲む気がしないなあ」
「いいじゃないの。玉だれの滝をやりましょうよ」
「玉だれの滝って何ですか?」
「一直線にサアーッと落ちる滝じゃなくて、上から中段に落ちて、そこから、また下に落ちる滝があるじゃない。あれを玉だれの滝って言うのよ」
「ホウ、あんた、それ経験あるの?」
「フフ、ないわ。かつ子から聞いたのよ。あれは、やったこと、あるらしいわね」
私は残り少なくなったフィルムを新しいのに取り替えた。
「ちょっと、あんた。今のあいだにお風呂、沸かしといてよ」
なおみが、馬場氏に言った。馬場氏は気軽に立って行った。
「あとで、もう一回戦よ。面白いことを、してやりましょうよ」
なおみは笑ってウインクすると、立ち上がって二階へ行った。
二階では宮下氏が、どうやって解いたのか縄をほどいて坐っていた。どうやら階下の様子を覗き見ようとしていたらしい。
「おや、この豚め。誰の許しを受けて縄を解

玉だれの滝

いたんだい」
　なおみの野太い声が叱咤した。宮下氏は、おカッパのかつらを脱いで禿頭を丸出しにしていた。
　なおみは宮下氏の着ている女ものの着物を剝ぎとり丸裸にすると、解き捨てられた縄を拾って、また縛り上げてしまった。
「この野郎、お仕置きしてやる。覚悟おし」
　なおみは風呂敷包みの中から、どの鞭で殴ろうかと物色した。本格的な革鞭はなかったが、棒の先にベルトのような皮をつけたものや、竹の鞭、ゴムホース、登山杖みたいなのが入っていた。なおみは、その中からゴムホースに柄をつけたのをとって、
「サア、この野郎。思い知らせてやる!」
　かつらをとっているところをみると、現在の宮下氏は男になっているのであろう。だから、なおみも「この野郎」と言う言葉を使っているのである。
　なおみは宮下氏の禿頭へ足を乗せて踏み倒すと、ゴムホースを、しなわせて、
　バシーッ!
　と一撃を加えた。
「ウェーッ!」
　と蛙が潰された時のような声を出した。
「どうだッ、こたえたかッ」
　パシッ!　バシーン
　変に、にごった音がして、宮下氏の背中へゴムホースが巻きつくように当たる。
「この野郎ッ、くたばっちまえッ」
　続けざまに打ち下ろす。みるみる宮下氏の背中に赤い縞模様が刻まれて行く。
「ウッ、勘弁してくれ」
「何言ってやがんだこの野郎。これでもか」
　私の傍に、いつの間にか馬場氏が来ていて
「凄いですね。ぼくだったら参っちゃうよ」
　なおみは、ほんとに力一ぱい殴っている。足で宮下氏の胴中を蹴って仰向けに、ひっくり返した。
「フン、何だい。こんな、役にも立たないもの。鞭で、ぶち切ってやろうか。やい!」
　宮下氏は汗をビッショリかいて恐怖に、おののいている。
　なおみは腹へ一撃を加えた。
「ウーッ、痛い。こりゃ、だめだ」
「何がだめだい。この野郎、足を舐めろ!」
　なおみは宮下氏の顔を踏みつけ、口の中へ足の指を突っ込んだ。
「ちょいと、そこで見ていないで出て来なさいよ。こんどは、あんたが殴ってよ」
　なおみは馬場氏に呼びかけた。
　馬場氏はノソノソと出て行ったが、
「ぼくはダメですよ。殴れません」
「いくじがないのねえ。そんなことを言うとあんたを殴るよ」
　なおみが鞭を振り上げる。馬場氏は両手でそれを防ぐ恰好をしたが、なおみは殴らなかった。かわりに、また宮下氏の腹を打った。今度は幾分、手加減をしたようだ。
「ウイッ!」
　宮下氏が身体をすくませた。
「この鞭が、そんなに恐いか。ええ?」
　なおみは、鞭の先で宮下氏の顔を突っついた。尖端を口の中に突っ込んだ。
　なおみは宮下氏の顔を足で踏んで鞭を振り上げ、打とうとしたが、彼の状態を見て、殴るのをやめた。もしも、ここで強烈に殴れば参ってしまうからだろう。まだ最期を遂げさせてしまっては、あとのプレーに差し支えるのでやめたのだ。興奮している雰囲気の中で一番冷静なのは、やはりなおみだった。
「ああ出たくなった。もうお風呂、沸いたんじゃない?」
「まだ、ちょっと早いと思いますが」
「いいわよ、飲ましてやるから。ついてらっ

しゃい」

なおみは鞭を捨てて、着ていた、ゆかたをサッと脱いでヌードになった。

肥ってはいるが肌が締まっていて、いい身体だった。何しろ、グラマー好きの私だから多少、ひいき目が、あるかもしれない。玉井ひろ美に比べると、背が低い。それだけ足が短いのであるが、まるまると、はりきった両の腿などは魅力的だった。

湯気の立ちこめる中で

なおみと馬場氏が出て行こうとする。

「あの、ぼくは……」

宮下氏が半身を起こして恐る恐る、なおみに聞いた。

「お前なんかに飲ましてやるのは、もったいないよ。飲む人は、此処に居るんだ」

宮下氏は不満そうな、悲しい表情をした。

「ほんの少しでも、お余りを……」

「フフ、飲みたいのかい、なおみさまのおしっこ。フフ、だめだよ、馬鹿野郎。その汚い口で飲もうと言うのかい。奴隷の分際で、身のほどを、わきまえぬ不逞な、のぞみだよ」

「ハイ、それは分かっておりますが……あなたは全部、飲めますか」

宮下氏は馬場氏に助力を乞うような表情で問いかけた。

「余計な心配をするんじゃないよ。全部、飲むよ、此奴は。ねえ」

「全部、頂きます」

「ホラね。だけど相当たまってるよ。いままで出たいのを我慢してるんだから、全部、飲める？　ビールびん一本分、以上あるわよ。フフフフ、まあいいや。どうしても全部、飲めなきゃ顔へひっかけてあげるわね。やい、豚。てめえは此奴の顔から首、胸から腹、足と垂れて行った、しずくを飲め」

「ハイ、有難うございます」

と言ったが、宮下氏は不服そうな顔をしていた。

「何だい、そのツラ。それじゃ不服だと言うのかい。なまいきな」

「いえ、そんなことはありません」

「よし。じゃあ、てめえは此奴のを飲め」

宮下氏はけげんそうに馬場氏の顔を見た。

「フフフ、分からないのかい。あたしが此奴の口へ、じかに飲ましてやる。それを飲んだやつが、此奴の身体の中を、通って下から出る。それを、てめえが飲むんだよ。わかったか」

両手を腰に当て、足をひらいて宮下氏を見下ろしながら傲然と命令する、なおみの姿はまことに堂々たる女王の貫録があった。

奴隷にも、ちゃんとした格づけがある。

宮下氏は馬場氏よりも更に下の奴隷であることを、この方法で立証しようというのだ。

「ハイ、わかりました。ありがとうございます」

「よし、縄を解いておやり」

言うなり、なおみは部屋を出て、次の間に居た私に笑いかけ、ウインクすると階段を下りて行った。

サア、私は忙しい。部屋に取りつけたフォトライトを消して取りはずし、長いコードをまるめて階下へ持って行った。

浴室は、この家としては狭く、一坪もなかった。そこへタイルの浴槽が占めている。

なおみは浴槽の蓋で湯をかき廻している。

引き戸の入口は三尺しかなく、非常に視野が狭い。

ライトを、とりつける所がなくて困った。椅子を持ってきて、椅子の背にとりつけて、スイッチを入れた。

「あら、此処も撮るの？」

なおみがクルッと、こっちを向いて、笑った。綺麗だ。乳房から腰のあたりのプロポーションも美しい。
「貴重な写真が得られるよ」
馬場、宮下と、大きな裸の男が二階から下りてきた。馬場氏は一米七五、宮下氏は七五キロぐらい、あるだろう。馬場氏は色が白く宮下氏は黒い。
「何してんだよ。早くおいで」
なおみは浴槽の中から、どなった。
煌々とライトに照らされてるのが、二人を躊躇させたが、なおみの一喝で、モゾモゾと馬場氏が入って行った。
「お前も、おいで」
宮下氏が傍を通る時、女の匂いがした。クリームや白粉で化粧した、その香料の匂いだ。口紅が唇の外へ、はみ出して、ふた目と見られぬ醜怪な容貌である。
馬場氏と宮下氏が浴室へ入ると狭い浴室は一ぱいになってしまった。
「馬鹿野郎。大の男が二匹、棒を飲んだように突っ立ってるやつがあるかい。おい、てめえは、そこへ寝ろ。仰向けに寝るんだよ」
浴槽の中から、なおみの野太い声が、どなった。
宮下氏は、それでも、どういう風に寝るのか分からず、まごまごしている。
「気のきかねえ野郎だね。頭を、こっち側にして、足を入口の方へ向けて。お前、ちょいと外へ出ていなよ。邪魔だよ」
一たん入った馬場氏が、外へ出る。
もごもごと、鈍い動作で、宮下氏は仰向けに寝たが、背中がタイルに触れると、痛そうに顔をしかめた。鞭でなぐられた、きずあとが硬いタイルに触れて痛んだのであろう。
「ふふ、痛いか。ざまあ見ろ。よし、それから、お前は此奴の顔へ跨がって、しゃがむんだよ」
馬場氏が浴室一ぱいに寝ころんだ宮下氏の身体を踏まぬように跨いで頭の方へ行った。
「頭の方から……」
なおみは浴槽からサッと立ち上がり、上気した桜色の濡れた肌をライトに照らしながらテキパキと命令した。
だが、その位置では、ちょっと、まずい。
「ちょっと待って。下の人の身体を、も少し斜っかけになってもらえないかな」
馬場氏がカメラの方に真向かいになって、しゃがむということは、なおみが真後ろになるということである。それでは、まずいので私は注文を出した。
だが片方の半分は浴槽にふさがれて、狭い中では宮下氏の身体を斜っかけにする余地がない。
「もっと下の人を手前にしたら、どうかな。足が入口から、はみ出したって、いいじゃない」
「ああ、そうか。はみ出したって、いいわけね。そいじゃ、もっと、お下がり」
宮下氏は身体を動かすのが、大儀そうだった。背中が、こすれると痛むらしく、膝を立てて、モゾモゾと入口の方へ、後もどりするように這った。
「何をモタモタしてやがんだい。もうあたしは、出たいのを我慢してるんだよ。てめえのために待ってるんだ。早くしろい」
なおみは浴槽から出ると、馬場氏の前に立って、宮下氏の禿頭に足をかけ、グイッと前へ押した。
「あ、痛っ——」
宮下氏は慌てて半身をおこして、下半身が入口の外へ出るくらい、イザって退った。
「よし、寝ろ。もうちょっと斜っかけに」
其処は浴槽の手前で、いくらか広く、宮下氏は身体を捻るようにして斜に寝た。

「ホラ、此処へ跨がって！」
　馬場氏は、ちょっと、ためらった。
「早くさ。何してんだよ」
　宮下氏の太い胴中を跨いだ、なおみは馬場氏の方へ向き直って、両肩に手をかけて押した。
　押されて馬場氏はヘタヘタと、くずれるように宮下氏の顔の上に、しゃがんだ。
「ホラ、用意しなよ。世話がやけるわね」
　馬場氏の手の動きで、宮下氏の口がふさがれた。なおみは、サッと片足をあげると、馬場氏の肩を跨いだ。なおみの体重がモロに馬場氏の肩にかかる。それはいいが、下の宮下氏は、たまらない。最初、馬場氏は加減して自分の膝で体重を支えていたのだが、なおみの六〇キロの三分の二ぐらいの体重を乗せられては、支えきれなくなり、やや仰向け気味になって、両手を後について支えた。
　なおみは、チラと私の方を見た。
〝いいの？〟
　と言うサインである。私は、とっくにカメラを構えていた。だが、なおみが浴槽から出てきてからは、もうもうと湯気が立って、鮮明さは薄れている。
〝しかし、これも又、面白いかもしれない〟
　と私は思った。
　馬場氏は一滴も、こぼすまいと、大きく口を開けていたが、それは、なおみの太い足の間に、かくれてしまった。
　なおみは上手に馬場氏の顔を、はさんだ。これは相当の経験のある女でないと、すぐに、この形は、とれない。
　馬場氏の顔が、クシャクシャに歪んだ。
　なおみは、その苦しそうな顔を見て、薄笑いを浮かべ加減しながら始めた様子だった。



……イメージギャラリー……『欲しけりゃ、お走り』……岡　たかし……

レンズを通して私は冷静に全体を画として眺めた。この「たまだれの滝」は私も、はじめて撮った。

「ウーム……」

一番下の宮下氏が唸った。馬場氏が足と両手で、かなり支えているとは言え、男女二人の体重を顔に乗せられては、苦しいだろう。

私は続けざまにシャッターを切ったが、全部、同じポーズだ。ほんとうは、なおみが、もう少し離れてくれるといいのだが、いまから注文をつけるのは酷なような気がして、黙ってアングルを変えて撮った。水線の見えないのが、写真にした場合、いまひとつ、迫力がないのだ。

宮下氏が、うめいても、なおみは平気な顔をして、動かなかった。

かなり長い時間だった。四〇秒ぐらいは、かかったであろう。

「ああ、気持が悪い」

なおみは馬場氏の頭を跨ぎ越すと、浴槽の中へ、とびこんだ。

「ダメねえ。ほとんど、こぼしちゃったじゃない」

なおみは浴槽の中から声をかけた。

馬場氏は、すぐ宮下氏の上から退いて、

「大丈夫ですか」

宮下氏は完全にノビていた。

没落

それ以来、宮下氏はバー「プペ」に現われなくなってしまった。

私としては次のチャンスには、いろいろのアイデアが浮かんで、期するところがあったのだが、それから間もなく、なおみから宮下氏の没落の事情を聞いたのである。

「あの家も人手に渡って、いまは、どこに居るのか分からないのよ。かつ子とも、あれっきりだって言うし」

そうと聞けば、宮下氏が心気一転、裸になって出直すことを望んだ。

だが、五十を過ぎて失敗すると、なかなか立ち上がれないということを聞いている。だが、宮下氏も斗志の人である。しばらくはM的願望も忘れて往年のファイトを出してもらいたいと思った。

馬場氏とは、あれから二、三日後に、会った。

恰度あの時の写真が出来たので、それを渡す用事もあった。

写真は、あまり上出来ではなかった。

だが最後に撮った「玉だれの滝」のシーンは何といっても珍奇なものだと思う。

馬場氏はその写真を見ただけで、あの場面を想い出したらしく、顔がポッと紅潮した。

「この時は宮下さん、死んじゃうんじゃないかと思いましたよ。はじめは、ぼくも加減して乗っかっていたんですが、そのうち、なおみがぼくに乗っかってきたでしょう。それが重いの何のって。とても加減して乗ってることが、できなくなっちまったんですよ。男女二人の体重を顔に受けたら、たまらないですよ」

「で、あの時、あなたは宮下氏に飲ませたんですか」

「そんな余裕はありませんよ。重くって苦しく、こっちも一生懸命に飲むのが、やっとでしたからね。いや、驚いたなあ」

写真を見ながら話しているうちに馬場氏はますます顔があかくなり、目の色も、ひかってきた。

「とにかく、あの女は凄いですねえ」

「かつ子と、どっちが凄いですか」

「サア。やっぱり、なおみの方が凄いんじゃないですか。あなたは、なおみのことを、ほ

んとのSじゃないと言われたけど、こないだのを見て、やっぱり、ほんもののSであることが分かったでしょう」
「いや、まだ私には、そう思えないんですがね」
「強情だなあ、鬼山さんも」
「だってね。なおみはSっ気は十分ある女だけれども、やってることは、すべて金のためにやってる、いわばサービス精神ですよ。鞭で殴るなんてのは本来、あまり好きじゃないんですよ。怒った時は別ですよ。ホラ、私が階下で話してた時に、なおみが〃これから殴ってやらなければならない。あんたが殴ってみない〃と言ったでしょう。つまり、宮下氏の注文に応じているんですよ。その点、かつ子の方は喜んで殴ったんじゃありませんか。だから、なおみより、かつ子の方がSの度はずっと強いと思うなあ」
「そう。あのかつ子って女は、時々恐くなることがありますが、なおみは恐いと思ったことはないですね」
「それと受ける側の主観によって違うのですよ。山本富士子や吉永さゆりがチラリと内股を覗かせて見せたとする。それは観客にとっては大きなショックでしょう。ポルノ女優がオッパイ丸出しで太股を拡げたよりも、はるかにショッキングなはずです。なおみと、かつ子にも、その差があるんじゃないですか。同じことをやられても、受ける側にとってはなおみの方がショックが強いという。だからなおみの方が、凄く感じるんじゃないんですか。それと、もうひとつ。なおみと、かつ子を比較した場合、なおみが、かつ子を抑えている。なおみが、かつ子を、ぶん殴ったことがある。なおみの方が、すべての点で上位でしょう。それも、〃凄い〃というファクターの中に、とり入れられているんじゃないですか。あなたの潜在的な意識の中にね」
「どうも鬼山さんの逆説的論鋒でやられるとかないませんねえ、ハハハ。ぼくは、この身体で感じたこと、そのままを率直に言ってるんですがねえ」
「しかし、宮下氏も気の毒なことになったものですねえ」
「ほんとにねえ。ああなりたくはないものですね」
　とにかく、宮下秀世氏は、我々よりも、はるかに異常な体験の持ち主であることは事実だ。
　その後、郷里の福島へ帰ったという噂も聞いたが、遂に二度と、会えなくなってしまった。

――(この項、終わり)――

〔伝言板〕　○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申上げます故、今暫くお待ち下さるよう願います。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既刊の臨時増刊号＜花と蛇＞第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。
○旧号に広告してありましても最近号に掲載していないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。
○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。



引退した特出しの女王
一条さゆりさんを想う

尾張仲一

生暖かい風が頬を撫でる春の宵だった。

去る四月十日、大阪へ出張の帰りに近鉄特急に乗るため上本町六丁目駅へ着いたのは午後四時過ぎだった。

一杯飲むのには、まだ少し早いのでパチンコでもしようかと思いながら、ふと新聞売場で、なにげなく買った『日刊カンコー』を拡げてみると、布施コーセー劇場の広告に、<ローソクベッドの女王、一条さゆり来る>という見出しが目についた。

早速、駅から公衆電話で劇場にきいてみると、本日限りとの事。直ちに切符を買って折よく来た準急に乗って布施駅で下車して劇場へ駈けつけると、入場料一五〇〇円と入口に書いてある。

新聞の広告には平常料金と書いてあったのに、一条さゆりの特別出演のために値が上がったのかと思って一五〇〇円を払って入場券を買って階段上のお兄いさんに切符を渡すと三〇〇円の割引券をくれた。

思えば、この前、ローズ秋山夫妻の残酷ショーを見た時は、入場料は五〇〇円であったが、もう二年以上も経っている今日だけに、諸物価の値上がりにスライドしたのかと思いつつ、入口のドアを開けて中へ入ると、レスビアンショーの二人が、お辞儀をして引き上げるところであった。

その次が、いよいよ、お待ち兼ねの一条さゆりのショーだとのアナウンスがあった。全く運がよかったのだ。五時少し前なので、二回、見ても近鉄特急に乗れる余裕があると思うと、急に気が楽になった。

待つ程もなく三味線の音が響き、今やおそしと固唾を飲むところへ、帯に短刀をさした女やくざの姿でライトを浴びて舞台上へ出てきた一条さゆりは、中央で一礼した。

彼女の十八番である花笠お竜ひとり旅シリーズの一曲を踊り終わると、客席に向かって一礼して、挨拶の口上を述べはじめた。

「私は今回で引退し、五月一日より十日まで最後の引退公演を、大阪吉野劇場で行ないますが、その前に港ダイコーで、今までの御礼として、つとめさせていただきます」

そうした引退の挨拶に引き続いて、本月十三日の『三時のあなた』に高峰三枝子さんと対談するという事。それに最近、開店するスナック店<いちじょう>の住所を読み上げ、その住所へ連絡して下さったお客様には、開店の挨拶状を送らせて頂きます——という今後の事業のPRを兼ねた紹介があった。

それから日本舞踊二曲をすませてから、いよいよ待望のベッドショーに移った。

一旦、舞台から裏の楽屋へ入った彼女は、長襦袢と腰巻だけの姿となり、今までかんざしで止めてあった髪も、かんざしを取って長いままに垂らし、舞台正面の一段と高い台の

上にある敷布団の上に横になった。
布団の上には、黒く変色した蝋涙のあとが点々と残っていて、今までに如何にローソクを使ったかを、よく物語っている。
舞台に出てきた時は、長襦袢の襟が、丁度乳房にひっかかって、これをかくすような風であったが、ベッドの上にあがってからは長襦袢の襟をひろげて、乳房を両手で、もみほぐしながら、右へ左へと揺れ動きだした。
日本人ばなれのした大きくて豊かな乳房。
そのうち、腹這いになって乳首を布団でこすりだした。これはいよいよ本物だ――と、固唾を飲んで見守っていると、長襦袢をベッドの下にほうり出し、ますます体の動きは激しくなっていった。
片手は乳房を、片手は、だんだん下の方へと滑らせてゆき、短い腰巻を、はだけて足をひろげ、やがて女性自身へと、迫ってゆきます。さて、万人の見守る中で、一条さゆりの特出しが、いよいよ始まるのだ。
その様子を出来るだけ多くの人々に平等に見せるために、その都度、方向を変えて、また繰り返してゆくのだ。
そのうち、傍にあった直径3センチ位のローソクを四本ばかり束ねて火をつけたものを（両手でやっと持てる位に太かった）傾けて熱蝋をたらたらと乳房の殆どを蝋涙でかくれる位にたらした。乳房が終わると、だんだん下方へ移り、僅かにデルタ地帯をかくしていた短い腰巻もはずして太股から膝、はては脛の方まで、身体を曲げてローをたらしていった。その熱い蝋涙が自分の肌に、じかにたれるのを、じっと耐えている気持は本人でなければわからないだろうが、彼女の様子を眺めていると、その行為によって、自己陶酔に陥っているのではないかと感じられる程、うっとりとした表情だった。
熱蝋の熱さを耐えるためにしているのか、或は自己満足のためか、ぐっと伸ばした足の指を開いてから、くの字に曲げ、そうしてから膝を曲げて、じっとこらえているあたり、彼女の呻き声と共に真に迫った蝋責めというものを感じとった。
やがて、けだるそうに、のろのろと起き上がった彼女は、舞台の隅に置いてあるタオルをとって汗にまみれた顔を拭いてから、下の方も軽く二、三度、拭いた。
そのままの姿で舞台の右側より、順次、お客によく分かる様に片手をついて爪先立って上半身を背後に、そり返った。片方の指を前に当てて、愛のしずくが出るのを、お客によく見える様に身体を動かしながら、見せて歩いた。片手だけで体を支えることは、我々でも困難なのに、しかも爪先立って体をうしろへ倒すのは、むつかしいのにと感心した。
一まわり舞台の袖をサービスしてから、また舞台裏へ入り、今度は短いネグリジェを羽織って出てきて、再び観客の前で御開帳のサービスを繰り返したので、見ている者は一様に皆、満足したようだった。
フィナーレのため、後でサインがあったらしく、「皆さん、途中でごめんなさいね」と囁いて舞台裏へ入る時に、中年の客よりプレゼントがあって一条さゆりの出番は終わったのだが、私は今までに、こんな見事なストリップを見たのは始めてだった。
第三回目のショーが始まり、やる気が余りないようなストリッパーが五、六人、出てきて踊ったあとでレズショーが始まった。このうち、アヌスの中へ指を入れたらしく、下時、カブリツキの席が空いたので、すぐその席へ移った。男役の方は指に指サックをはめていて、相手の体中を舐めまわしていた。そのうち、アヌスの中へ指を入れたらしく、下になっていた女役のストリッパーが、「キャー」という声と共に体をのけぞらせた。
次のも、やはりレズショーで、今度の男役





は左側の股に、花と盃の入墨をした女で、双方とも、前回のに比べると可なりグラマーだった。今度の男役は、前のと異なって女役のものに指を入れてサービスしながら自分の両股で女役の左脇を挟みつけて、自らもリズミカルに動いている。次第に、その動きが激しさを増したかと思うと、そのうち、下になった女は動かなくなった。多分、失神したのであろう。

それを見て、男役の方は体を放して正常位となり、指を自らのものに入れて激しく動かしているうち、自らも昇天してしまう。やっと自分に返ってから傍に横になっている女役を、だき抱えるようにしながら、ふらふらと舞台裏へと消えていった。

次が私の待望していた一条さゆりの出番である。第二回目の時のように、近々開店する店のPRがあり、立ち回りの後で、前回は長襦袢一枚になって出てきたのだが、今度は舞台の横で、だんだんに脱いでゆき、大きな櫛で止めてあった髪も、ばらばらにときほぐし舞台の前面を一まわりしてから正面のベッドの上にあがった。

ベッドにあがった彼女は長襦袢の襟を、はだけて、その豊かな乳房をもみほぐしながら体を右から正面へ、また左へとグラインドして、観客全部に自分の体が見えるようにサービスした。短いお腰の間から黒いものが、ちらちらと見えて、なまめかしい限りだ。

そのうち、長襦袢をするりと脱ぎすてるとベッドの下へ落としベッドにうつ伏せになって布団で乳首をこするようにして、悶えつつのたうちまわる。やがて短いお腰を、だんだん下へずらし、両手で束にして火のついたローソクを持ち（両手でなければ持てないほど太かった）少し傾けて蝋涙をポタリポタリと乳房の上へ落とすのは、前と同じであった。

蝋涙の熱さに身をもだえながら、ローソクの焰をよけつつ、右に左にと乳房の上に流すと、この前と異なって乳首はピンと立ち、それにつれて乳房も大きくなり硬くなったのか足の方から見ても、巨大なゴムマリの様に胸に、はりついた感じがした。

ローのかたまりが、乳房よりお臍、更にデルタ地帯へ移ると、熱さもよくこたえるのか一層、身をよじって、たらしている有様が、よくわかる。とうとう短い、お腰をとってしまった。片手で豊かな乳房をもみながら、片手を下へやって、まさぐるという大熱演である。こうした真に迫った演技は、他の女達には、とても出来ないことである。

布団の端から端まで、頭を中心にして回転しているのは、すべての見物客によく見えるようにサービスしているのであろうが、ライトが暗いので、よく分からない。指先の動きが活発になると共に女体はケイレンを起こし足の指先はピンと開いて、失神寸前まで、もだえにもだえぬいた上で、身体全体を布団の上に、ぐったりと落とした。

しばらくして腰巻を腹の上にのせ、ベッドを下りてから下手で体の汗を拭き、同じタオルで前を、よく拭いてから、おもむろに短い布切れを腰に結んで舞台の中央に出てきた。

最初の時はベッドを下りてから、舞台裏で汗を拭き、短い布切れを着けてきたのに、今度は見物客の前で後を向いてはいるものの、後始末をするところを見せるのは、客に対するサービスの一つに違いない。

舞台中央では両足を開いて後へ、そり、後頭部が床につくまで下げても、膝を曲げずにゆっくり、また元へ戻すと同時に、今度は足を真一文字に開いた。余程、体が軟らかくないと出来ない、身のこなし方であった。

日常から、いつも身体を鍛えて練習に練習をかさねていなければならない事が、よくわかる。一通り観客のみんなの前でサービスを

し終わってから、舞台の後で黒いケープのようなものを羽織り、見物人が期待の目を、らんらんと輝かしている前へ出てきた。

足の爪先で立ったかと思うと上半身をうしろへ反らして片手で床を支えた。いよいよ、待ちに待った御開帳である。片手を使って観客のよく見えるように、ひろげて見せるばかりか、時々指を中まで入れる。愛の涙がライトに照らしだされて、きらきら光っているところは、週刊誌にも書かれていたように、全く前代未聞である。

私は最前列のカブリツキの一番良い場所から眺めることが出来たのだからラッキーだった。それに引退してしまった今となっては、もう二度と見れない一条さゆりの真に迫った実演を堪納するほど見せてもらったのだから一生の思い出になった。

最後の演技が終わったところで中年のファンから、またプレゼントがあった。ストリッパーに、こんなに舞台上から贈物があるとは夢にも思っていなかった。入場料の一五〇〇円は安い、の一語につきる。それに三〇〇円の割引券もついているのだから——。

週刊誌を見ると、五月一日より十日まで、阪神電鉄野田駅前の吉野劇場で一条さゆりの「さよなら公演」があると書いてあったので機会をうかがっていたところ、丁度京都へ行く用事が出来たので、これ幸いと家を出た。

その日は京都で一泊して、翌日は午前中は京都見物に費やし、昼食後、快速電車で大阪へ向かった。阪神電車の野田で下車し、駅から劇場へ電話して道順をきいた。折悪く雨がしょぼしょぼ降る中を吉野劇場へ向かった。

切符売場の横を見ると、「十三、十四、十五日の三日間は、一条さゆりの引退興行でサイン会をする」と書いてあった。

さて、入場料二五〇〇円を払って、ふと、上を見ると、「一条さゆり、本日都合により出演出来ません」と書いてあるではないか。

連日の引退興行で張り切りすぎて、疲れでも出たのかと、私は自分自身で言いわけをしながら中へ入ってみたら、丁度、レスビアンショーをやっているところだった。それが、すんでから、次のショーが、なかなか始まらない。変だなあ——と思っていたところ、やっと次のショーが始まったかと思うと、音楽が間違っていたらしく、中止になった。

一度、舞台へ出たダンサーが、何もしないで、すぐ引っ込んだり、なんだかんだと、ちぐはぐな感じであった。そんな有様で第一回目が終了した。ところが客の大多数が、一条さゆりが出ないのに入場料の二五〇〇円は高い。金を返せ——と、わめき出して経営者ともみ合う一幕があった。しかし、それもやがて納得したのか、静かになった。

第二回目に入って、どうにかスムースにショーが始まったが、相変わらず単調で見ばえのしない平凡な踊りばかりで、これでは二五〇〇円も取っては客が怒るのも当たり前であると思い、馬鹿らしくなって劇物を出た。出口のところに一条さゆりのヌードパネル特価二〇〇〇円と書いて貼りつけてあった。カラーでよくとれていた。

途中のスナックで、サンドイッチとミルクで腹をふくらませて時間を潰し、野田駅の売店で夕刊を買って、ふと目を向けると、何たる事ぞ、前七日、一条さゆり公然ワイセツ罪に依り他の者十一人と共に警察に留置された——と書いてあるではないか。しかも、執行猶予中で、逮捕歴六回と出ていた。

恐らく、引退興行の人気を憎んでの事であろうが、私は悲しかった。

『三時のあなた』で、高峰三枝子と対談したり、また『11PM』に出演して得意の踊りを見せていた彼女が、警察に挙げられたとは、驚きの一語につきた。



〈カメラ〉と〈ペン〉のルポルタージュ　＜江口淑子の巻＞

爛れた淵に溺れた日

塚本鉄三

随意筋秘法のこと

　私は四十七年七月号に松本たえを主人公にしてカメラルポ＜観世音菩薩の化身＞という一文を、ものしたのだが、そのとき、ペンのはずみで、男性自身を随意筋化させて自己の意志のままに、自由にコントロール出来るという話を、つい書いてしまった。

　それ以来、十人近い読者の方々から奇ク編集部気付で信書をもらい、なんとか、その秘法というのを伝授してくれないかというようなことから、親しく文通するようになった人が出来、その中の三人の読者の方とは先日の連休、九月二十三日、二十四日には、折柄、襲来を予測された台風20号の指向する白浜、勝浦、熊野、尾鷲へと一泊のドライブ旅行を企てた。

　というのは、その中の一人が車を出して運転してくれるということなので、野郎ばかり四人、いわば密室の車のなかで、性談に耽ろうという魂胆であった。そして、その話題の中心になったのは、私の提起した『随意筋化問題』であったのは、いうまでもない。

　国道26号線を和歌山へ向かって走っている間は、暗澹とした空からは今にも雨が降りそうだったし、街路樹を揺する風も心なしか、次第に増してくるように思えた。ラジオの臨時ニュースは盛んに台風20号の襲来を報じていた。場合によっては潮岬に上陸する恐れもあるということなので台風の進行方向如何によっては引き返さなくてはならないかもしれないと思ってラジオをつけ放しにしておいたのだが、和歌山を通過して国道42号線に入った頃より風もおさまり、空もすっかり晴れて陽が照り出した。

　黒潮の暖流が眼下に見下ろせる海岸沿いの快適なドライブウェイを走る。海南、有田、御坊と瞬く間に過ぎて、印南（いなみ）、南部（みなべ）、田辺の渚ドライブコースに入る。南国の明るい太陽を受けて太平洋の浪が、きらきらと輝いてはいるが、流石に台風の余波を受けて波打際では岩を噛む白浪が高く舞い上がっている。



「いや、なにしろ、私なんかも、気持ばかり焦っているんですが、ソノ方は、とんと元気がなくて、ご無沙汰続きなんですよ」

話が一わたり賑わったところで三人の中の一人、田中洋氏が頭をかきながら言った。私も最初、便りを貰ったときは、田中洋——という名前には記憶がなかったのだが、昨年の十一月号で、辻村氏のカメラハント『甘受』に出ていたと言われて思い出した。

たしか、あのとき、ハントの主人公となった江口淑子は田中洋の愛人だった筈である。

そんなことから、私は田中氏と文通をするようになって、今日のドライブ同行の一人となったわけであった。

私が貰った便りのなかから、葉書の分（殆どは手紙であったが）一枚だけを参考のために、ここに引用させて頂くことにする。

☆

前略。大学受験前、所謂、白表紙時代に、京都の古本屋にてグラビア写真にひかれて、乏しい小遣いをヤリクリ算段して臨時増刊を揃え出してから既に15年。グラビアがなくなったときには、購読をやめようかとも思いながら、他誌の如き作り物らしからぬ辻村隆氏の「カメラハント」や塚本先生の「カメラルポルタージュ」の迫力に遂々今日迄、来てしまいました。しかしながら文章を読む度に、公刊誌としては今日の日本では止むを得ぬことと頭では分かっていながらも隔靴搔痒の嘆きは増すばかり。毎月一覧表に、登場女性の名前を書き込みながら羨情、妬情、溢れるばかり。

ああ、もし我、土地成金に生まれなば、分譲写真を全て買い揃えてと思えども、現実には妊婦写真だけでも、せめてと、児玉昌子夫人より富田由美子夫人迄は買い揃えたものの増田みゆき夫人及び福井桃子夫人の28種は金欠にてストップ。（中略）

才なく、金なく……のないないづくしで、

止むを得ず、「希望なきところ失望なし」を処世訓として、馬車の挽馬の如く費用のかかる趣味、遊びには一切、目隠しをして、趣味は漫画映画、TVの洋画、小説の立ち読み、金融機関で配付しているPR用貯金箱の収集（現在約千個）という表看板を大きく掲げているもののピエロの化粧の陰には Pessimism が常に牙を、むいております。

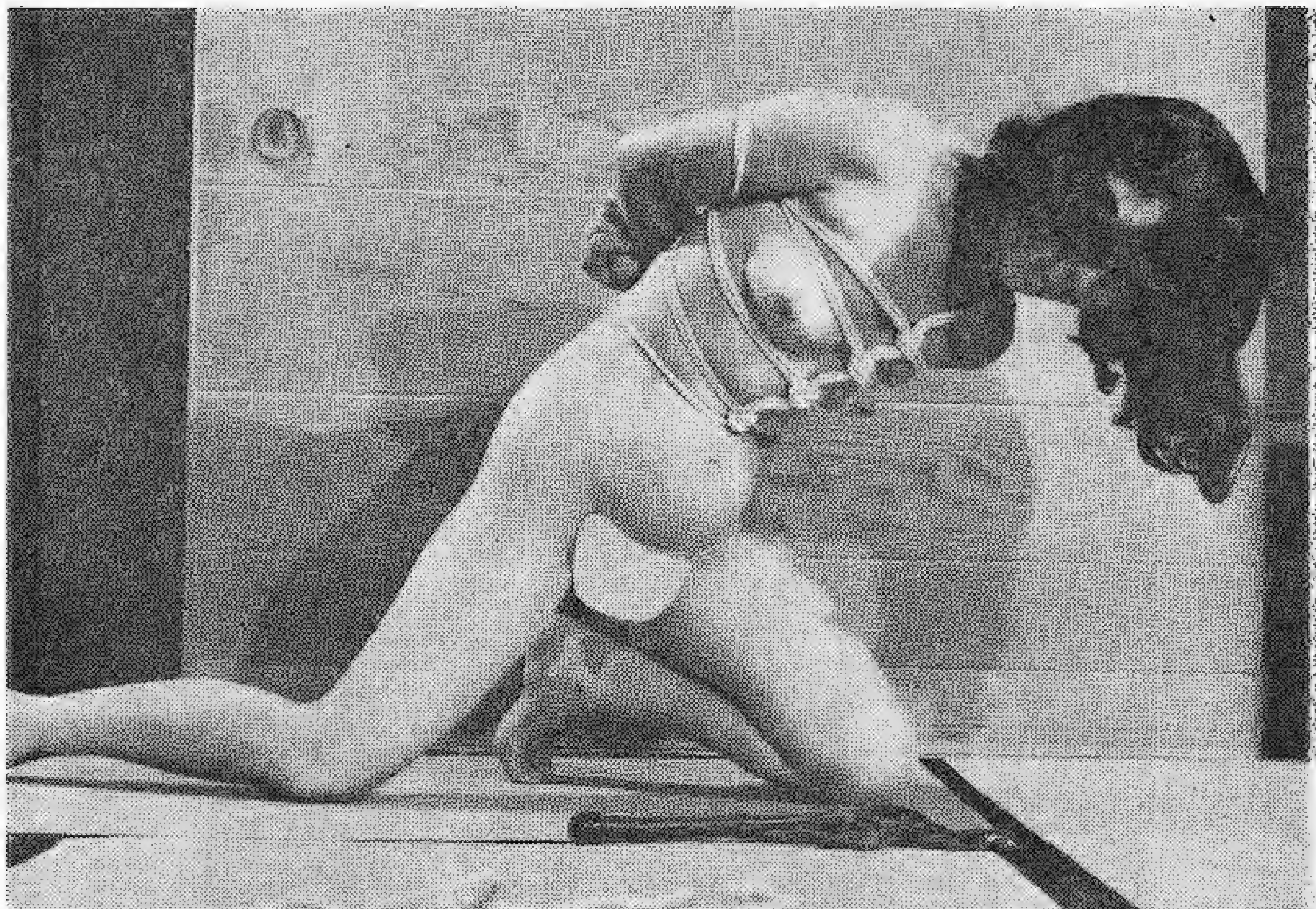
ただ怠惰と、万に一つ、兆に一つの僥倖の渇望が生に執着させるのです。そのようなわけで、十一月号に掲載された塚本先生の鈴木千鶴子嬢に対する責めの助手募集のお知らせに接しても、売り込むべき特技も、経験も、才能もないのが、全く残念でなりません。意余って力足らずとは、この謂でしょうか。

ところで塚本先生は、7月号〔カメラとペンのルポルタージュ〕「観世音菩薩の化身」において、男性のシンボルの随意筋化を達成しておられる旨、書いておられましたが、その秘法を御教授頂くわけには参りませんでしょうか。淫情は人並に或は人並以上かも知れませんが、催すものの、その後の能力のこととなると、週刊誌その他の告白等を読む度に少なからず、inferity complex の虜とならざるを得ません。



先にも書きました如く運動神経にも器用さにも、自信が持てないのが残念ですが、一度やり始めると、金銭的な面からの制約がない限り、トコトン迄やらずにおれないのが私の唯一の長所ではないかと思います。そのため fatal になりそうに思われることには、できるだけ最初から手を出さないようにしているのですが、貯金箱の収集も洋酒のミニチュアの収集も、そして勿論、奇譚クラブもが、止められなくなってしまっており、焦躁感に身を焼かれている始末です。

人間の一番根元的な問題で自信を持てるようになれば、それが他の枝葉に好影響を与えてくれるのではないかと、それが唯一の望み



です。本業その他、色々御多忙のことと思いますが、何卒何卒、良き御返事を頂けますように、宜しく、お取り計い下さい。　草々

（原文のまま、但し住所氏名は略す）

☆

私は通信を貰った人全員にこの随意筋化のことを、お知らせしたいと思ったのだが、なにしろ、これは手紙に書いたり文章にしたり、しただけで、ああそうか——と、いうような簡単容易な代物（しろもの）ではない。或程度の予備知識と予備訓練を経た上で、実地指導が必要であり、しかも仕上げはなんといっても実戦に耐えなければ何にもならないから、種々な対象の女性で実験しなければならない。

私も、自分の意志で、完全にコントロール出来るという（如何なる女性に対しても如何なる環境に於いても）自信を持つに至るまでには相当の年月を必要としたものだ。現在では、どんな凄腕の相手がきてもビクともしないという気持を堅く持っているつもりだがそれでも、つい最近、危うく自信が、ゆらぎそうになった相手が現われたことがあった。

東映の『徳川女拷問史』という映画を京都撮影所で撮影していた時、辻村隆氏が緊縛指導ということで出向いていた頃のことだ。彼は現場での指導に忙しくて、とてもカメラまで手が回らないからと、奇ク編集部から撮影現場のスナップを依頼された。

35ミリカメラ二台にカラーとモノクロを詰めて太秦の東映京都撮影所まで車を走らせたが午前九時頃から始まった撮影が昼食後になっても遅々として進まず、待っている時間の長いのには退屈してしまった。

最初、数人の白人女性のうち、一人の金髪で大柄な女性が、その真白い肌を晒して台上や木馬の上で責められる場面を撮ったあと、残りの白人女性がセット一杯にくりひろげられた責め道具の一つ一つにとりつけられて、捕束によって、それぞれ責められるという場面であるが、なにしろ人数が多いものだから恐ろしく時間がかかる。そのうち、最初に縛

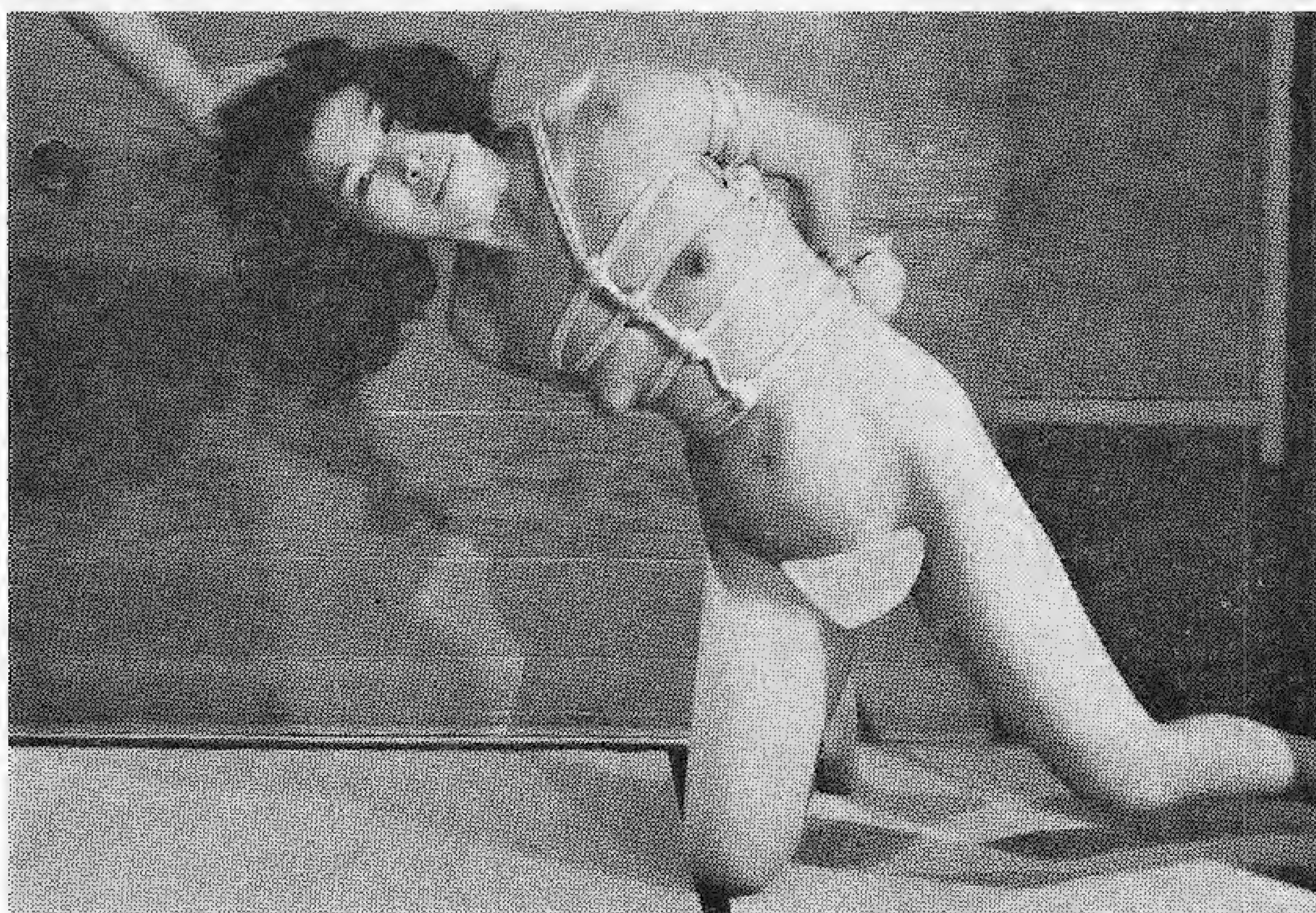
った女性が痛いと言い出して縄をゆるめたりで、なかなか歩調が合わない。

私は人垣のうしろの小道具の上に腰をおろして休んでいる先刻の白人女性に近づいて話しかけてみた。退屈しっていた時だから、格好の暇つぶしになった。人垣の足の間からチラチラと見えるセットの中では辻村氏が額に汗しながら、懸命に緊縛指導をやっている。

私の方は、切支丹の白人女性迫害といったフィクションのお芝居よりも、現実に目の前に腰かけている白人女性の方に、より興味があった。うまく話がついて、それでは、ここにテレホンして下さい――ということで、名前と電話番号を紙きれに書いてくれた。

そんなわけで、彼女と知り合ったわけだが、私にすればセットの中で、あんな凄い責められ方をしていたのだから、話によっては私の責めのモデルになって貰えるかもしれない――という虫のよい期待を持っていたのだ。

数日して電話をしてみると、幸いにして彼女は部屋にいた。早速、車を飛



ばして行ってみると、地下が駐車場になっている立派なマンションである。制服を着た守衛がいて、名前を言うとエレベーターまで案内してくれて八階へ行けと言われた。エレベーターを降りて人気のない廊下を数歩、歩くと、彼女の名前を書いた部屋が、すぐに見つかった。

ベルを押して部屋へ入ると、彼女は両手を拡げて豊満な女体をぶつけるようにして私を歓迎してくれた。コーヒーを一杯飲み終わったところでバスへ入れという。初めて訪問した女性の部屋で、すぐ風呂へ入れというのは変だと思ったのだが、まあいいや――とばかりシャワーを浴びて出てくるとバスタオルを腰に巻いたまま椅子に腰を下ろして彼女の出してくれた冷えたメロンを食べた。

明るい部屋である。床から天井までいっぱいに開いている硝子窓から陽光がさし込んでいるので明るい筈だ。だが八階なのでカーテンをしなくても覗かれる心配もないわけである。

いつの間に、彼女もバスから上がっ

てきたのか、濡れたままの脂肪のかたまりのような肌を私にぴったりと押しつけて、首に腕を巻きつけてきた。バタ—くさいという表現があるが、くさいどころか、バターそのもののようなヌルヌルした感じの唇と舌とが、私の口をふさいだ。まことに重量感のある女体であった。彼女の身体が、ずるずと私の上にくずれてきたとき、私は余りの重さに、とまどってしまった。

　なんということなのか、私は彼女にモデルになって貰いたくて、その依頼にきた筈だったのに、これはまた、なんという筋書きなのだろうか。といって、私は慌てて洋服を着けて退散するほど道心堅固でもなかった。

「ねぇ、こちらへいらっしゃいよ」

　猫がじゃれあうように椅子の上で、しばしの抱擁をくりかえした末、彼女はやさしく私を、ぶ厚いカーテンの向こうへ誘った。

　その部屋には白づくめの豪華なベッドがあった。置かれているタンスも鏡台も調度は、すべてアイボリーホワイトで、統一されていた。

　私は彼女の腰に巻かれていたバスタオルをパッとめくってみた。そして、そこに頭髪の金髪と同じ色のヘヤーを発見してから、始めて彼女が異国の女性であるということを身近かに感じた。

　抜けるような白さの肌であった。日本人の女性の色白の肌とは、また違った感じの白さで私の目に迫ってきた。やはり白人というだけあるナ——と、心のなかで考えながら、ペこんとへこんだ、お臍のあたりの皮膚を、しげしげと眺めていた。

　彼女は私がためらっているとでも思ったのか、「カムオン」と、両手をひろげて誘い込んだ。体格がよくて大柄な彼女の動作は、まことにダイナミックで忽ちのうちに激しい律動と共に口からは嬌声が矢つぎ早やに飛びだした。しばらくの間は、まるで野獣と野獣の格斗のような、ひとときであった。

　やがて、幅広いダブルベッドから、二人は組み合ったまま、どうっと床の上へ落ちた。床にはカーペットが敷きつめてあったから、そのまま、ごろごろと右に左に転がった。

　肉食人種のタフさというのか、脂肪のかたまりのような女体は、あくまで、むさぼりつくしてやまないというドンランにして執拗な挑みようであった。それに、如何にも大ゲサな発声と動作は、流石の私にも大きな負担であった。それは男性にとっては如何にも辛い試練であった。それでも、第一回目はかろうじて制禦することが出来て、随意筋としての役目を果たしたかに見えた。というのは、彼女の方が力尽きて、のびてしまったからだ。

　だが、しかし、ベッドの上へ戻って暫くしてからも、私がまだ元気であるのを見てとった彼女は再び挑戦してきた。私もその挑戦に応じたのは勿論だが、女体の構造的な特徴なのか、今度は第一回目の激しさ以上なので、私も危うくコントロールしそこないそうになった程だった。

　何万、何十万という奇クの愛読者やファンに奉仕するため誌上に掲載できて楽しく読んで貰えるものを書いてくれ——と、常々編集長から依頼されておりながら、ついつい、自分だけが楽しんでしまうという禁をおかしてしまった。その結果として、私は奇クへの執筆を暫く休んでいた。

　昭和45年4月号に、「見果てぬ夢の物語」（関谷富佐子）5月号に、「片えくぼのマリア」（川路むら子）6月号に、「金髪碧眼の美女を縛る」（シーラ・ケニー）9月号に、「据膳喰うは男の恥」（長野良子）10月号に「沖縄美人の責め記録」（座間明子）11月号に、「惑溺の周辺」（花坂道子）12月号に、

「M女の生態」（桜井葉子）――というぐあいに、カメラルポを書いていたのに、昭和46年になってからは、1月号から7月号まで、ずっと執筆を御無沙汰してしまっていた。

46年もやっと8月号になって「Mの天使」（深田菊子）10月号に、「深田菊子のSM生活」（深田菊子）の二篇を書いただけだ。

もっとも、その間でも写真撮影だけは、高村浩子、荒尾慶子、前田真知子とやっていたことはやっていたが、どうやら、自分だけの楽しみに耽りすぎていたようだ。というのは前記の白人女性の外に、トルコで知り合った女性の虜になってしまって彼女が結婚するまで、私は随意筋の秘法を縦横に活用駆使する悦楽に、うつつを抜かしていたため、とてもルポの方まで手がまわらなかったのである。

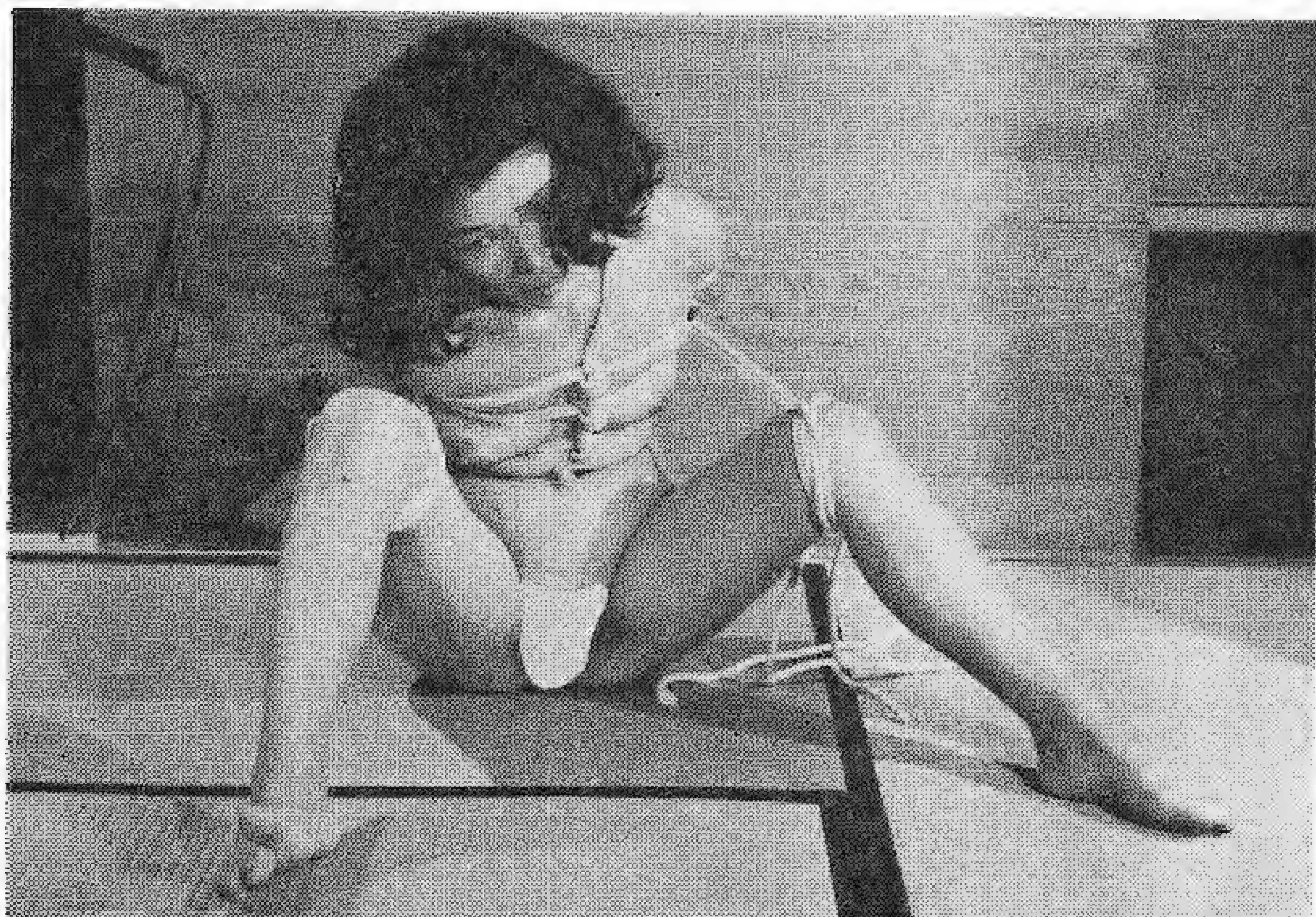


だが――。47年になって私は松本たえという好伴侶を得て俄然、水を得た魚のように書く意欲を持った。即ち、47年1月号に、「全日空機で来た女」（松本たえ）同じく2月号に、「縄に恋した女」（松本たえ）3月号に「水車小屋緊縛記」5月号に、「東京の踊り子緊縛記」（鈴木千鶴子）6月号に、「春宵一刻値千金」（笠井千鶴子）7月号に、「観世音菩薩の化身」（松本たえ）8月号に、「私の縛った思い出のM女たち」（中河恵子）9月号に「霖雨余情」（前田真知子、笠井奈保子）10月号に「東京の踊り子浣腸記」（鈴木千鶴子）11月号に「筐底のネガに見たM女の生態」（大塚啓子外）12月号に「縄とカメラの女体遍歴」（田原美佐子）を書いた。

話が、いささか横道へそれてしまったが、車は快晴の国道42号線を、ひた走って白浜温泉を通過し、やがて本州最南端の潮岬に到着して、ここで暫時、休憩する。まことに快調なペースで進んでいる。勝浦温泉に入ったのは午後二時頃だったから、如何に飛ばしてきたかがわかる。

田中洋氏が私と二人きりになった時、彼は私に言ったものである。

「私の飼育した淑子を、一度責めてみて下さいな。最近は私も、からっきし元気がなくて



放りっぱなしなので、彼女は欲求不満なんですよ。帰ったら、さっそく話をつけますから、よろしく頼みます。今日の貴方の話を聞いていたら、どうしても、淑子を貴方に責めてもらいたくて、辛抱できなくなりましたよ」

「私の方は願ってもないことですが、彼女が素直に、うんと言いますかね」

「その方は、まかしといて下さい。きっと喜びますよ。なんなら、淑子に奴隷誓約書か宣誓書でも書かせますから、うまく責めてやって下さいよ淑子は強いですから……」

田中洋氏は意味あり気に笑うのだった。

江口淑子のこと

九月も末近くなって、田中洋氏から私に一通の信書が届いた。

手紙の文面には、淑子に話したところ大変、乗気で喜んでいたから日時や詳しい打ち合せは直接、話してくれと彼女の店の電話番号が書いてあった。十日以降は身体の方が赤信号なので、出来たら一日から七日ぐらいまでの日中だったら都合はよいと言っていたと書き添えてあった。そして、その手紙の外に二通の罫紙が、はさまれてあった。

☆

誓約書

私の飼育していた江口淑子を貴殿に責めて頂くことを、ここに認めます。本人の希望するよう、如何ように責められましても、一切異存なきことを、お誓いします。

昭和47年9月27日

田中　洋㊞

塚本　鉄三殿

☆

奴隷宣言書

私は、あなた様の奴隷として縛られたり責められたいと思っておりますので、どうか、あなた様の思いのままに取り扱って下さい。どんな仕打ちにも奴隷として従順におききしますから、どうぞよろしくお願い致します。もしご不満なことがありましたら、きびしく

お仕置や、せっかんをお加え下さいましても私は素直に、すべてをお受け入れ致します。

昭和四十七年九月二十七日

江口　淑子㊞

塚本　鉄三様

☆

私が江口淑子と、電話で打ち合わせをした上、昼食を共にしようとして落ち合ったのは十月四日の正午少し前だった。

フランス風のレストランで軽く食事をすますと、新築して間もないホテルへ向かった。そこは特に広い部屋があると聞いていたので選んだのだが、一番広い部屋といって案内されたのは十帖ほどの広さの和洋折衷二間に、廊下と洗面所トイレバス付きの部屋だった。

「田中がね、塚本さんに思いきり責められて来いって言ってますのよ。フフフ、それに、……楽しんで来いって。私、アノ方は強くはないんですのよ。どちらかと言えば、淡白の方ですわ。でも、田中がそう申しますものですから……仕方なく………」

「なかなか、理解のある旦那様ですね。でも田中さんは、貴女は強い方だって言ってましたよ。この前、田中さんが送って来た貴女の奴隷宣言書は貴女が書かれたんですか?」

「あら、田中がそんなことを申しましたの。恥かしいですわ、そんなこと。宣言書は私が書きましたんですけど、文句は田中が言うのを私がうつしただけなんです。田中ってね、ああいうことが大好きなんですのよ。今までに、私、宣言書とか誓約書とか、何度も何度も書かされましたわ。それに……」

「それに、なんですか?」

「あの宣言書には名前の下に拇印が押してあったでしょ。署名のあとでの拇印だったら、いいんですけど、足の指を使ったり、乳首の先に口紅を塗って押したり、それに、こんなこと言うの恥かしいんですけど、アソコへルージュで化粧しておいて、拇印のかわりに押さしたりしますのよ」

「いやぁ、そりゃ面白いですね。田中氏は、なかなかのアイデアマンだ。こりゃ面白い」

「そんなの、もう何枚も何枚も田中の手元に提出してますのよ。彼は写真を撮らないからそんなことをして遊ぶんですのよ。ああ、それから今日のプレイ写真は、是非欲しいから分けてって言ってましたわ」

「勿論、言われなくたって、喜んで進呈しますよ。拇印のかわりに押すときは、勿論、剃毛してからでしょうね」

「それがまた大変なんですのよ。剃るときの体位が――。両足を上へあげて吊るようにしておいて、私に剃るところを見せたりして、ほんとうにネチネチと責めるんですのよ」

「でも、結構、貴女も、そんなに責められて楽しんでるんじゃないですか」

「イヤですわ。田中に言われて、しょうことなしにきいていますのよ。彼はね、自分の精力が弱いので、縛ったり、いろんなことをして遊ぶんだと思いますわ。そりゃね、私も責められるの、嫌いじゃないけど、それだけだったら、やはり物足りないですわね」

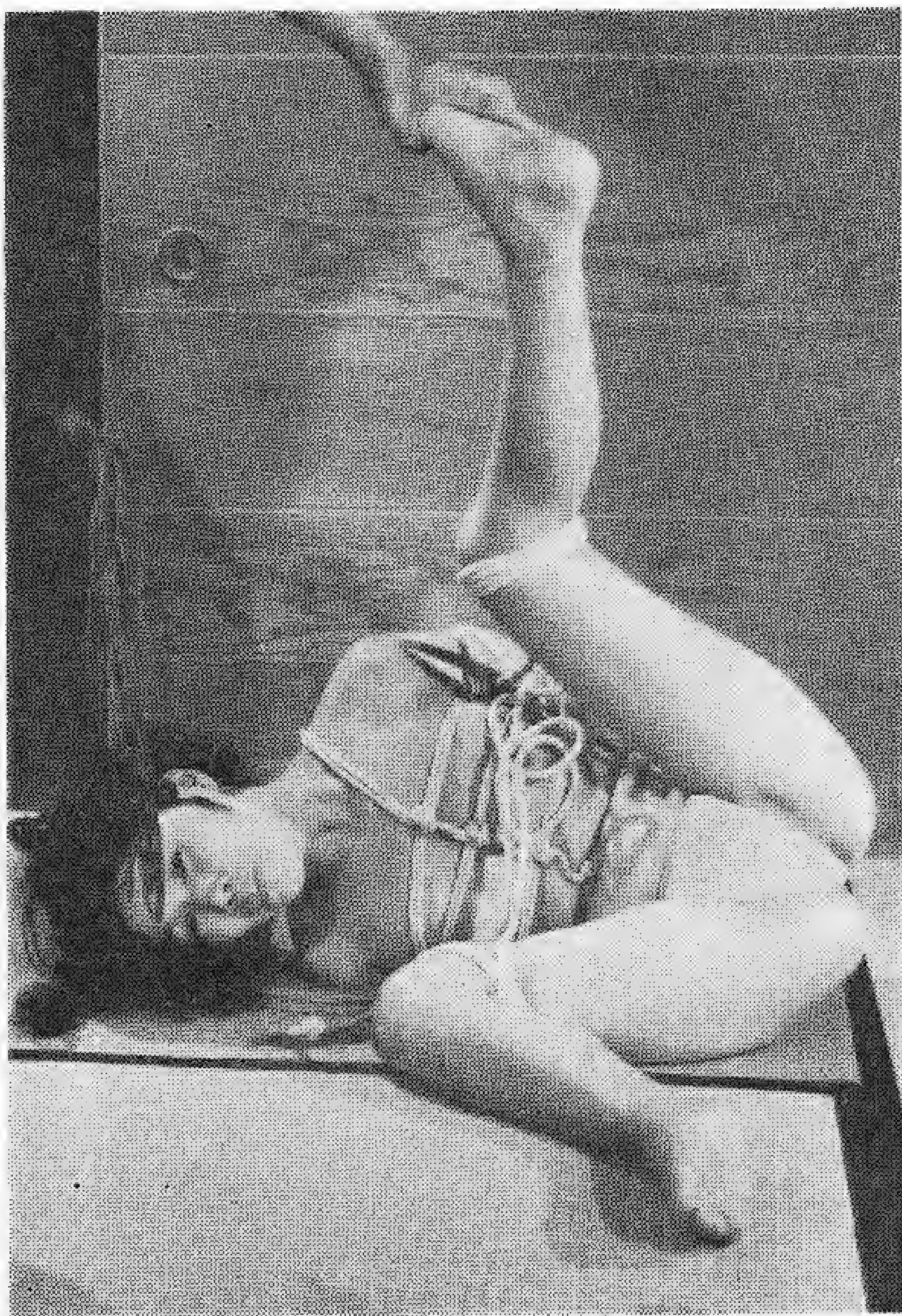
「すると、田中さんは、アノ方は……?」

「ゼンゼンよ。ムチで私のお尻を思いっきり叩いたりしたときは、少しは元気になるんだけど、それもいっときだけですわ」

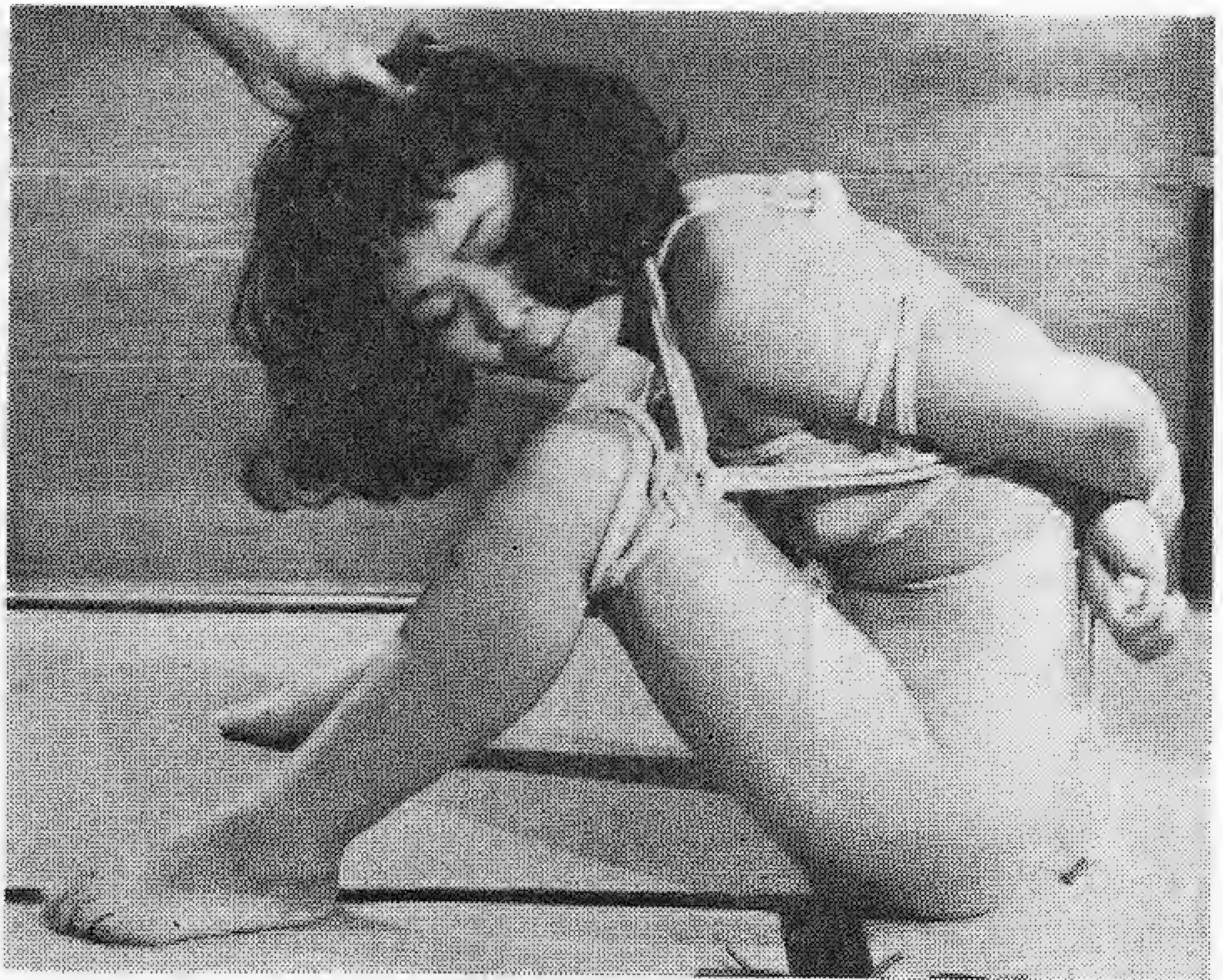
「宣言書を書いた九月二十七日には、彼とはプレイをしたんでしょ。きっと……」

「ええ、お店が終わってから、朝方まで。そりゃ、あの日はハッスルしましたわ。飼育の総仕上げをしてやるんだって、私、縛られたままで、大分、責められましたの。あんなに燃えた田中って、今までにないことですわ」

「それじゃ、私も、田中さんに負けないように、貴女を奴隷としていじめてみましょうか



な。先ず、奴隷は素裸になって、御主人様に身体のすみずみまで検査してもらわねばならないんですから、手始めに……」
「あら、私、もう若くはないんですから、裸になるのだけはカンニンして下さいよ。その外のことだったら、どんなことでも……」
レストランで食事をしていたときは上品にしていた江口淑子も、二人きりの密室へ落ち着くと、俄に身のこなしや口振りも色っぽく変わってきた。流石に田中洋の手によって四年もの間、飼育されただけのことはある。私は殊更、ぞんざいな言葉で淑子を叱りつけるようにして言った。
「お前のような脂ののりきった女奴隷を好むマニアの方も沢山あるんだ。そんな方の目を楽しませるためにも、お前は奴隷として、私の手で責められなければならないのだ」
「御主人様。奴隷の私は、とても恥かしくて自分の手では裸にはなれません。どうか御慈悲ですから、御主人様のお手で、無理に剝がして下さいませ」
跪いていた江口淑子は、私の足の甲に唇を当ててから拇指を口に含んで舌で舐めはじめた。いかにも飼育済みの家畜といった巧妙な仕草で、自らを奴隷の境地へ導いていった。
犬のように腹這いになり両肘をついて、私の足を両手で捧げるようにして足の裏まで舐めだしたので、私はそれをふり払って淑子の洋服を脱がしにかかった。なおも唇で私の足を求めながらも、淑子は私が脱がしよいように身をこなして、いつしか、パンティ一枚の裸になっていた。
「私、夜の晩い商売ですから、肌がたるんでるでしょう。だから、こんな明るい所で肌を見せるのは、恥かしいんです。もっと若ければ、いくらお見せしても、いいんですけど」
やっと私の足から唇を離した淑子は、自分の裸を顧って、ふとそんな言葉を洩らした。
「奴隷が人並みの口をきくなッ」



私は鞭を持って立ち上がっていた。

「御主人様。どうぞ、お願いです。私に奴隷の誓いを言わさして下さいませ。奴隷の誓いを言わない限り、私はどうしても奴隷になりきれないのです。お願いします」

「だったら、その誓いというのを、今ここで言ってみろ。そのパンティも、とってからだ」

「これだけは、どうか、お許しを――」

「いかん、いかん。自分でとるんだな」

私は手にしていた鞭を揮って、正座している淑子の肩口から背中を打った。一打、また一打。五打目になって淑子は、くるりと素早くパンティを脱ぎ乱れ篭に投げ入れた。

全裸で正座した江口淑子は畳に両手をついて、頭を下げた。ムチを右手にした私は、立ったまま、それを見下ろしていた。

「御主人様、私は御主人様の奴隷です。私は奴隷ですから御主人様に、どのような取り扱いをされても喜んでお受け致します。私は御主人様の奴隷であることをお誓い致します。奴隷の誓いに、先ず、御主人様のお肌を私の口で浄めさせて下さいませ」

私は鏡台の前のスツールを持ち出してきて腰かけてから右足を淑子の前にさしだした。彼女は両手で私の足を捧げ持つと、いかにもおいしい物を食べるように、足の指一本一本を丁寧に、しゃぶりだした。

今まで接したM女のなかでは、木村洋子や高村浩子は、私の肌を直接舐めることによって奴隷としての臣従を誓ったのだが、この江口淑子も、普通の人間から奴隷の身分に一挙に転落するための誓いとして、こんな儀式を経なければならないのだった。

一概にM女といっても、厳しく縛られたりムチで打たれたりして身体に苦痛を与えられることを喜ぶタイプと、苦痛を与えられることよりも、無理に女体を開陳させられたり、排泄を強要されたりといった羞恥責めを好むタイプとがあるが、後者のなかで男性の身体の汚い個所を舐めさせられたいと願うM女もある。しかし、いつの場合でも、そうしたいろんなMの傾向が複合して現われるのが普通ではあるのだが………。

ニュールビアで知り合ったトルコ嬢なんか

は、典型的な汚物崇拝のM女タイプで、私の身体中を舐めまくるばかりでなく、一番汚い所の穴に舌を入れるのが好きだった。

　よく、男性のMの人が、女王様に対する奉仕と称して、女性の身体を舐めたがる者があるが、これと同じく相手に絶対、服従するしるしとして、一番汚い個所を唇で清めるということは、気分的にはマゾの精神を、いたく満足させるものらしい。

　事実、そうした行為に出たときのM女は、いかにも美味そうに鼻息を荒くして舐めまわっているのだから、恍惚とした夢幻境を、さまよい、一種の宗教的な絶対的なものに、帰一する境地であるのだろう。

　だが、一方、全身を舐められる者の側にとっては、足の裏をミミズが這うような擽ったさは辛抱するとしても、その部分によってはトリ肌が立つような個所もあって、むしろ奉仕しているのは、こちら側ではないかと思うときさえある。

　ルビア嬢なんかは、足の裏から始まって、私の全身くまなく三十分から一時間にわたって、舐めまわすのだが、彼女が私の身体のうちで、どのあたりを好んで舐めるかと、じっと見ていると、お臍の窪んだところや耳の穴に鼻の穴、それに唇にキッスしているのは勿論だが、腋の下とか太股とか、身体の中で最も陰微なところを狙ってくる。



　そして、なんといっても、アヌスの周辺が一番おいしそうなのだが、私にわざわざ排便させておいてから、その後始末を自分の舌でやりだしたのには驚いた。しかし、なんといってもオシャブリの奉仕が彼女の最大の特技であった。詳細を書くのは憚るが舌の先を使うのが極めて巧妙なのと、私がやめろというまで継続する執拗さ。それに第一、全身に歓喜の表情を漲らしての熱演は、こうしたことの大好きなM女ならではのサービスだった。

　いや、むしろ、私の方がサービスしている

ような気持になるほどの彼女の喜びようであった。M女を次第次第に飼育してゆくと、どこまでエスカレートするか、私にも大いに興味を持たしてくれたルビア嬢ではあったが、その後、良縁を得て新婚生活に入った。

Mの傾向を持つ女性は、極めて豊富な性生活を持つことが出来る――と、言われているので、このルビア嬢も、きっと円満で幸福な夫婦生活を送っているものと思う。

さて、話は再び横道へそれてしまったが、ここで江口淑子とのSMプレイについて語りつぐことにしよう。

飼育済みのM女の味

本誌の読者の方の中には、十九か二十才のピチピチとしたM女の新鮮で未知数の味を好まれる方も多いと思うがまた飼育済みの、こってりとしたM女の味こそ最上だと、言われる方も決して少なくないと思う。

いま、私の足下に跪いて、奴隷の誓いを述べている江口淑子は、いわば、脂ののりきった飼育済みのM女に属している女性である。



田中洋によって四年近くも訓練、飼育され奇クの愛読歴も数年に亘っているというSMのベテランでもある。それに水商売によって異性の酸いも甘いも噛みわけた何ごともすべて弁えた、その道の理解者でもある。

江口淑子が私に対する絶対臣従の誓いとして、どのような行動を起こすのか、私は冷ややかな眼で彼女の挙動をじっと眺めていた。

足の指や足の裏を舐め終わった淑子は、足の甲に当てていた唇を放して両手をついたままで口上を述べだした。

「これで私が貴方様の奴隷になり下がるための誓いを終わりました。これからは、私を奴隷として愛して下さいませ。お願いします」

言い終わるや否や、淑子は私の膝頭に、むしゃぶりつき、内股へ唇を当ててきた。不意を衝かれてネットリとした唇を肌に受けて余りの擽ったさに、私は思わず足を挙げて彼女を押し倒していた。ころりと仰向けに倒れたところを素早く押さえつけて、手にした縄

で高手小手に縛りあげていった。

なんといっても、縛られた女体の写真を撮らないことには、誌上を飾ることは出来ないのだ。自分だけがＳＭプレイを楽しんだって写真がないことには、読者の方の眼を楽しませることは、出来ない。プレイ写真の撮影ということになると、ＳＭプレイに活を入れて一層ハッスルさせる原因にもなるし、また、それがルポの文章となり、写真が誌上に載ることによって次回のプレイの励みになることもある。だが、また一面、写真を撮ろうとしたがために、折角、調子よく滑りだしたプレイが中断されたり始めの予定とは違った方向へ一人歩きしてしまったりすることがある。

今回の場合も、江口淑子の奴隷宣言からプレイが開始されて、奴隷の御主人様に対する奉仕——。次には御主人様の奴隷に対する検身——という具合に進行する筈であったが、ここで彼女を高手小手に縛り上げてしまったことで、予定のコースは中断され緊縛プレイへと移行した。さて、縛られることによって淑子は果たして、どのような反応を示すだろうか。これもまた一つ、興味のある点であった。

縄を見ただけで顔を真赤に紅潮させてしまう松本たえのような女性がある。縄を見ただけでも、そんな状態になるのであるから、縛ってゆく過程で、全身がくらげのように柔らかくなり、縛り終わった途端、それはもう最高の仕上がり状態になってしまう。そんな恍惚状態の女性を緊縛プレイに導いてゆくということは、見ていて、如何にも酷なように思える。

今までに幾度となく縄の洗礼を受けたであろう江口淑子の女体は、今、私の目の前に全裸で縛られたまま、正座させられている。身に何物も着けさせられずに、両手の自由を奪われて厳しく縛られている。これは、もう既に奴隷の身分に落ちた淑子が、その宣言した通り完全に身の自由を私にまかせ切ったことにもなる。また、田中洋の委託による宣誓書の通りに、彼の長年に亘って飼育した愛玩ペットの味を、これから私が、たっぷりと味わうための序曲でもある。

「どうだ、淑子。今までに、どのくらい縛られたんだ?」

私の問いに対して淑子は、きょとんとして鳩が豆鉄砲を喰ったような顔をしている。私は持っているムチでテーブルの上を激しく叩いた。ムチの音はイヤに高かった。

「御主人に対して、何故返事をしないんだ。どのくらい縛られたか、聞いてるんだッ」

「ハ、ハイ、十回か二十回くらい……」

「そんなことは、あるまい。田中氏は三年もお前を飼育したって言ってるゾ」

「でしたら、もう少し多いかもしれません」

「そうして縛られた気持は、どうだ?」

「大変、縛り方が、お上手だと……」

「お前は、縛られることが好きか?」

「ハイ、大好きです」

「そうか、どのくらい好きなのか、それはあとでお前の身体を、ゆっくり検査してやるから楽しみに待っておれ」

「ハイ、有難うございます。どのように私の身体をお調べ下さいましても、私は喜んでお受けいたします」

「それはそうと、お前は縛りの外に、ムチ打ちに浣腸、それにローソク責めも好きなそうだが、他にも責めてほしいことがあるか」

「奴隷の身分で、そんな大それた望みは、いささかも持っておりませんが、もしお許し頂けるものなら、こうして縛られたままで、御主人様のお情けを……」

「それは極めて殊勝な心掛けであるぞ。気が向けば、その願い、許してつかわしてもよい

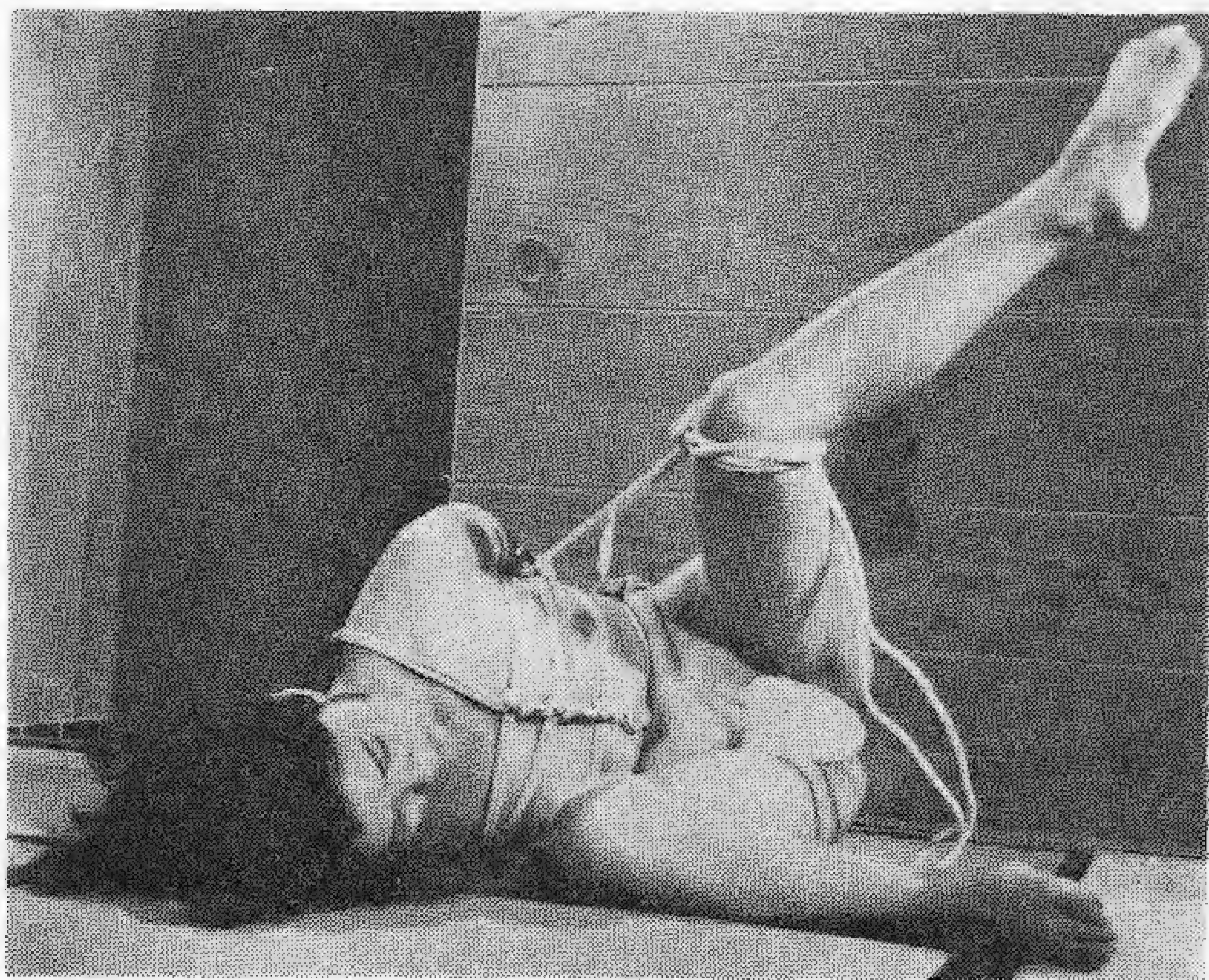
が、それは、お前のこれからの奴隷としての仕えぶりによってきめよう。それはそうと、剃毛の方もやったんだナ」
「ハイ、それは、もう何回も……」
「今も剃っているのか?」
「いいえ、最近は、あまり……」
「あまり、どうしたと言うんだ。いつ剃ってもらったんだ。はっきり言って見ろ」
「いえ、そんなこと恥かしくって、私の口からは、とても言えませんわ」
「言え、一月前か、二月前か?」
「あの、一月ほど前に……」
「そうか、それだったら、どんな具合か一度検査してやろう。お前の縛りに対する反応度の検査も兼ねてな」
正面には三脚の上にエヤレリーズをつけたカメラ一台。これをメインカメラとして、更に左右には一台宛、都合二台のグリップをつけて手持ちに使用するサブカメラを準備しておいた。うち一台にはポロファインダーを装着して目高位置で狙えるようにしておいた。これでフィルムの入れ替えなしに、三十数枚は撮影出来る手筈になっている。ローソクが好きだという淑子の股に火のついた百匁ローソクを挟ませたり、ムチをくわえさせたりして、一わたりシャッターを切っておいてから私は淑子の片足を握って大きく、ぐいと引き挙げていた。
そこに、縛られることが大好きだという淑子の言葉通りの証拠が、はっきりと見ることが出来た。ピンク色に染まったそれは、五〇〇Wのライトに真向こうから照らし出されて息づいているようだ。淑子は一カ月前に剃毛されたと言っているが、もう大分、生え揃っているようだ。
「田中氏は、奴隷のこちらの方は余り責めないようだナ」
「ハイ、主に浣腸なんかを……」
「そうか、お前は浣腸されることが好きだったんだナ。今日は浣腸の道具は持ってこなかったから、代りにムチの御馳走でもするか」
淑子のVは小じんまりとしていて、荒されているという感じは、いささかもなかった。Aの方も、きゅっと締まっていて、如何にも菊の蕾といった可憐な感じである。
ピチッ、ピチッ、ピチッ……。
皮ムチは小気味よい音を立てて、淑子の背中、臀部、太股へと弾けていった。
ムチの一打一打により淑子の白い全身が赤く染まってきた。関谷富佐子の様な、あのまるで悶絶寸前の喘ぎは見られないが、身体の奥底から湧き上がってくる歓喜が、じわじわと皮膚の表面に現われてきた感じである。
ピンと伸ばしきった脚をピクピクとケイレンさせて、女体は次第に法悦状態に陥ってゆく。これが責められたいと願っている奴隷というものであろうか。いや、そうではあるまい。内に秘められたM女の性格が、縄とムチによって、いやが上にも高められ爆発寸前にまで至っている状態でなくてなんであろう。
もしも、ここで適当な起爆剤があったなら、一挙に噴火してしまいそうな危険さを貽んでいることは火を見るよりも明らかだった。だが、しかしSMプレイとしては、まだまだ序の口の段階である。私という変わった責め手の変わった責め口によって、或程度、飼育されている淑子のM性が燃えたぎってきたといったところだろう。
私にしても、初めて見る淑子の女体やM性には未知の魅力を秘めていた。着物を着ていたときは、上品なマダムであった江口淑子が裸にされて責められてゆく過程で、一体、どのように変化してゆくものか、私にも大いに興味があった。しかし、ここで行き尽くところまで行かせてしまったら、あとのプレイ写

真の撮影に支障をきたしてしまう。蛇の生殺しのように、じわじわと責めた上で、M女の神秘を暴きながらそれによって女体が変化する有様をじっと冷やかな目で眺めてやるのだ。

私は淑子の足を放してやった。

淑子は、ぐったりと伸びている。私は煙草をくゆらしながら、そんな女体の放心状態をぼんやりと眺めていた。縛られたままで全裸の身体を長らえている女体というものは、まことに淫らで放恣なものであった。縛られていながら、喜悦の境地に彷徨している。そんな姿を眺めていた私の心のなかに、淑子を土足で踏みにじって辱かしめてやりたいという嗜虐心が、むらむらと湧きあがってきた。

両方の膝頭へロープをかけての開股縛りからのローソク責めとバイブ責め――。そんな状態の淑子の姿を丹念にカメラに収めてゆく労作を繰り返していると、主人と奴隷という上下関係が払拭してしまって、なんとはなしに甘いSMプレイのムードが部屋いっぱいに漂ってくるのだった。



写すのだったら、もっと、もっとあらわなところを写して――。

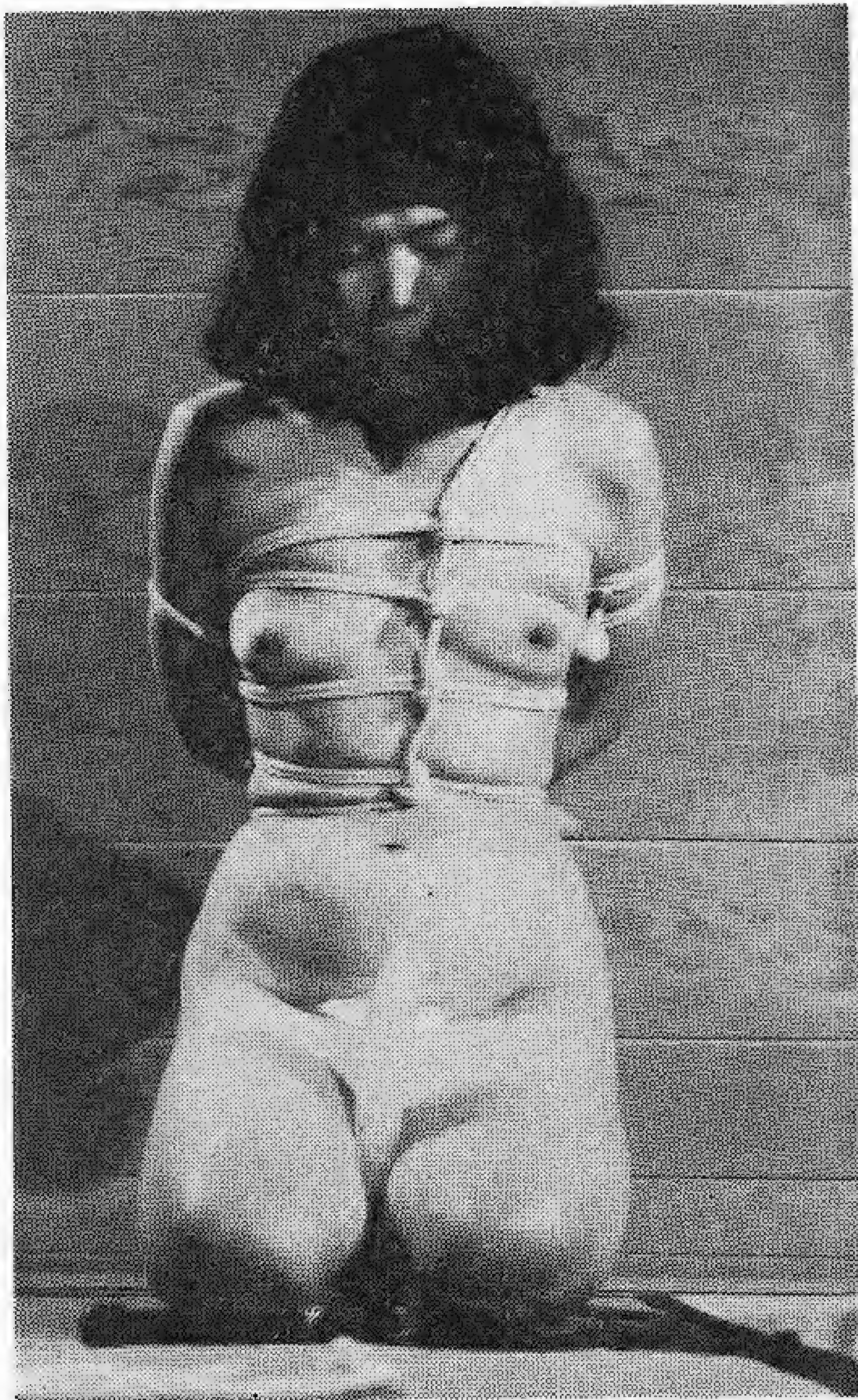
口に出しては言わなかったが、淑子の身体は如実に、それを示していた。カメラのレンズの前に自分の身体の秘奥のすべてを、さらけだしてしまいたいという、いじらしい悲願がファインダーを覗く私にも、よくわかった。

そんな奴隷淑子の女体の各部を、蛇腹をくり出したカメラのレンズを至近距離に寄せておいて幾度となくシャッターを切っておいてから、私は爛れきった空気を押し払うように突き出た豊かな臀部に火のついたローソクをふりかざして熱蝋の雨を降らしていった。白い花びらが、忽ちのうちに肌一面に咲いていった。

「あーあ、熱い。あつくて、たまらないワ」

囈言のように、淑子は呻く。しかし、止めてくれとは言わなかった。

私は蝋の花の上に更に蝋の花を重ねておいてから手にしたムチを揮った。先が十数本に別れている皮鞭は肌の上に咲いた蝋の



花びらを、忽ちのうちに弾き落としてしまった。あとの白い肌の上には、点々と赤い斑点が残っているだけだった。
　私は狂ったように淑子の肌の上へ、所きらわずムチを当てた。お尻を立てて必死にこらえていた淑子も、こらえきれなくなって、どさりと畳の上に横倒しになってしまった。
　緊張していた糸が、一瞬にして弛緩してしまった、ひとときである。

　よくよく、よく恍惚状態に陥ってしまう淑子である。私は彼女を縛ったままで放っておいて浴室へ向かった。洗面所と並んでトイレがあり、その向かい側に廊下を隔ててサウナと浴室があった。そう言えば、たしか入口の看板には『サウナ付き』と書いてあった。
　裸になってバスタオルを腰に巻いて中へ入ってみる。ムッとする熱気。カラカラに乾ききっていて、壁の板もベッドになっている板も、触ればヤケドしそうな熱さである。バスタオルを敷いておいて腰を下ろしてみる。忽ちのうちに首筋から胸へかけて汗の玉が噴き出てきて、それが全身に移っていった頃、咽喉がイヤに渇いてきた。熱さが刻一刻、増してくるように思え、私は扉を排して外へ飛び出していた。浴室で強力な圧力で左右六カ所から噴出するシャワーを全身に浴びてから、私は浴槽に、ゆったりと身を沈めた。

鈴木千鶴子のこと

　八月も末になって、私は鈴木千鶴子から電話を貰った。
「今、北海道から帰ってきたの。お土産、熊の置物、買ってきたんだけど、一度、こちらへ遊びにおいでにならない？　私、これから四日ほどは暇がとれるのよ」
　可愛いい声が受話器を通して伝ってきた。
　この前逢ったとき、私のお友達で蛇を使う踊り子がいるので紹介するわ――と言っていたので、その女の子も紹介してほしかった。
　舞台の上では、ただ蛇を使って踊るだけだが、アパートの一室に帰ったら蛇と同居していて、時には女体の中へ入れたりして遊ぶという、その若い踊り子に私は大いに興味を持

った。そんなわけで、私は是非とも、東京へ行きたかったのだが、折悪く、信州へのドライブを企画していて、既にホテルの予約もとってあった。いや、予約なんかは、断わればよいのだが、同行の人には急用が出来たからと今更、言うわけにはいかなかった。

「九月はまた忙しくなるかもしれないけど、プレイするくらいの時間はとれると思うわ。それじゃ、よろしくね」

私の断わりに対しても、明るい声で答えている鈴木千鶴子は底抜けに陽気な娘である。だが、これが鈴木千鶴子と電話を交わした最後になろうとは、神ならぬ身の私にとって知る由もなかった。

何人もの男性から、いじめられたい——という鈴木千鶴子の、たっての願いを入れて、私は〈奇クサロン〉に『助手募集』の記事を十一月号で載せてもらった。最初、五人か六人ぐらいの申込みがあれば、その中から適当な方を三人ほど選んで、一緒に千鶴子を責めてみようと考えていた。彼女の複数の男性によって責められたい、自分の責められているところを見物してほしい……という願いは熱烈なものがあった。

この前、鈴木千鶴子を浣腸責めにした時に見た蕾のように可愛いかったアヌスの柔軟さは忘れることは出来なかった。淡いピンク色に染まったそれは、また如何なるものをも許容するという拡張性にも富んでいたばかりではなく、淡雪や練絹のような柔軟さをも併せ持っていた、まことに見事なものであった。

私一人に責められるのが物足りなく思う鈴木千鶴子は、「台の上に寝かされて、四人か五人の男性の手によって、手とり足とりして浣腸されてみたい。そして浣腸された結果、排泄するところまで、みんなに寄ってたかって見られたい」とも言っていた。「今度逢える時は、みんなの人をつれてきてネ」と私に頼んでいた千鶴子であった。

「その時、私を暴れないように後手に縛っておいてもいいわ。でも、足だけは自由にしておいてほしいの。助手の方の一人に右足を、もう一人の人に左足を持ってもらって、左右に拡げながら顔の上まで曲げてもらうの。私は身体が柔らかいから、すぐ二つ折りになってしまうけど、あと二人の方に、お尻を出来るだけ高くつき出すように持ち上げておいてもう、これ以上、辛抱出来ないというくらいまで次々と浣腸してほしいのよ。私が台の上に乗せられて浣腸され、遂に排泄させられるところまで、次々と写真にしたら、きっと面白いと思うわ。私、自分の身体が若い間に、そんな責めに、あってみたいの」

うっとりとした目なざしで、そんなことを呟くように言う千鶴子に対して、私はその願いをかなえてやりたく、編集部に依頼して助手募集の記事を載せてもらった。そして、その時の記事を書いてくれるのだったら、助手の人達の交通費や宿泊費なんかは編集部で負担してやろう——という好意的な申し出までしてくれた。

十一月号が発売になって暫くして、私は七通ばかりの手紙の転送を受けた。私は鈴木千鶴子の、あの熱心な願いに対しても、出来るだけ早く、手紙の返事を書いて助手の方々を確保しておき、次の機会には素早くプランを樹てられるようにしておきたいと思った。

私信の手紙を一通また一通と丹念に読み、さて、封筒の表書きを書いて便箋に返事を書きだしたら、更に第二回目の転送分が手元に到着した。なにしろ、仕事の合間に読ませて貰うのだから、そんなに全部、一気に読み終えるわけにはいかない。第二回目の分が読みきれない間に来た第三回目の分が数としては最も多かった。私の予想としては、せいぜい

十通から多くても二、三十通ぐらいだと考えていた。それくらいだったら、まあ、なんとか時間をかけて返事は書けると思っていた。
それが、三回目までの分で百通を越え、更に日を追って増えつつあるという状態なので如何にペンの速い私でも、便箋に向かうのを断念せざるを得なかった。というのは、届いた手紙を読ませてもらうだけでも、とてもとても、時間がかかってしまった。



こんなに優秀な方々が助手として応募して下さって本当に有難い、いや勿体ないと思った。自分なんかより、すべての点で優れていて、私の方がかえって助手にしてほしいと思うほどの人もおられた。みんな本当に真面目で熱心な方ばかりである。鈴木千鶴子の依頼から、軽はずみに助手募集の記事を載せてもらったけれど、こんなに多くの読者の方々がこんなに熱烈に希望しておられるのだったらなんとか、他の方法を考えなければならないと思わざるを得なかった。
手紙の中には、折角、助手希望者の読者が集まるのだったら座談会とか撮影会を催したらどうだろうか——という意見を書いておられる方もあった。出来るだけ多くの人達に、自分の縛られた姿を見てほしいという希望の女性もあるのだから、これも、なかなか面白いアイデアである。嘗て山原清子が座談会に出席して、出席者の方々から順次縛られて、みんなになぶられたようなこともあったが、ああいった催しも面白いと思う。
ただ、鈴木千鶴子の希望だけから見れば、そうした公開の席上で行なう通り一遍のSMプレイだけでなくて、セックスプレイを含めた密室的な密度の濃い責めを目的としているので、その点、誌上掲載ということは困難ではないかと思うのだが、SMプレイも、その密度を高めてゆけば、当然そうした方向へ行き着くものであるかもしれない。何人ものS的傾向の男性から輪番に凌辱されたい——と

強く願う鈴木千鶴子に対して、どういった形で責めるのが最も満足を与えるものか、考えさせられるところである。

私は、この原稿を書いている途中で、鈴木千鶴子の母親という人から電話を受けた。

「娘が交通事故で入院しました。脚を折ったとかで手術をしています。娘が貴方にお知らせしてくれということで……」

オロオロとした婦人の声が電話を通して伝ってきた。詳しいことを聞いてみたが、それ以上は何もわからない。

東名神を十数回、往復したというベテランの鈴木千鶴子なのだから運転の腕は確かなのだろうが、昨年の八月、東名で居眠り運転で事故を起こしたとき、顎や下半身に幾針も縫うような大怪我をしたと聞いていたので、無茶な運転をしないように、呉々も注意していたのに、なんということだろうか。

私は事故や負傷を楽しんでいるようなマゾの心が彼女の胸の中に秘められているのではないかとふと考えてゾッとすることがある。

快活で陽気な彼女に接していると、いささかも、そんなことは考えられない。きっと、不死鳥のように再び私達の前に、あの抜群のプロポーションと可愛いい笑顔を見せてくれるだろう。また、そうあってほしいと、心から願う。彼女の怪我が軽微なものであったら或は、仕事を休んでいる間、奇クのモデルとして活躍してくれるという期待もある。

江口淑子を責める

江口淑子のことを書いていて、話が大脱線していたが、ペンを再び元へ戻そう。

縄を解いて一息入れ煙草をうまそうにふかしている淑子を眺めていると、このひとときは、奴隷の身分から人間に変身した、いや、奴隷に変身していて、人間に戻ったといった方がよいのかな。とにかく、二人ともホッと息を抜いた。煙草をくゆらせている淑子からは奴隷の影は消え失せていたが、それでも、犬が主人の足元にじゃれつくように、私の脚に、べったりと裸身を、すりつけている。

私の脚にすがりつくようにしている淑子の仕草を見ていると、早く奴隷になりたくて仕方がないといった風である。煙草をそうそうにもみ消してしまうと、私の足の甲に頬ずりを、し始めた。すがるように脚を抱きしめて指を唇にふくんでから、次第にその唇を足の甲から脛、膝頭、太股へと移行させてくる。

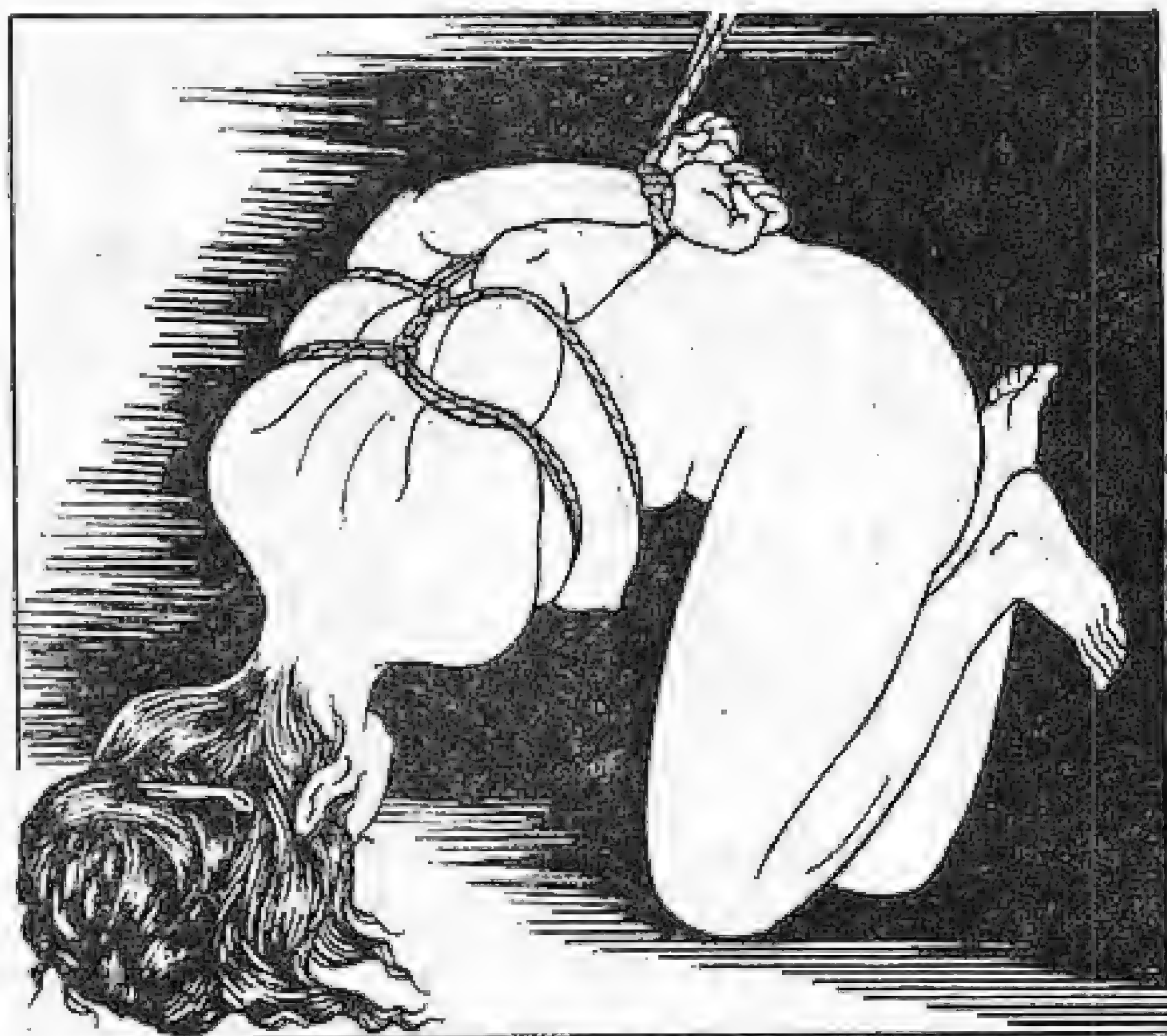
休憩が終わったことを告げないうちに淑子の方が自ら＜奴隷宣言＞を態度で示したことになる。彼女の唇の目ざしているものは、私にも、よくわかっていた。私は冷やかに見下ろしながらも、さっきのように、無下に淑子を押し倒すようなことはしなかった。太股のつけ根まで唇を這い上らせてきた淑子は、ふと唇を離した。

「お願い、舐めさせて……」

よく、〔Mの奉仕〕ということが言われるが、奉仕をするのは、Sの方かMの方か、これは大いに疑問とするところである。原則的には、より快楽の多い方が奉仕して貰う立場になるのであろうか。相手を喜ばせながら、自分も楽しむというケースが、SMプレイとしては最も理想的だと思うのだが、相手が余りにも喜ぶものだから、仕方なく相手をしている場合だってあるのであろう。

今の場合、淑子の今まで飼育された通りの好みに従って、SMプレイを進行させるべきか、或は私のペースに引き込んでおいて彼女を導いてゆくべきだろうか。

ここ迄書いた時、私は急用で少し遠方へ出かけなければならない用件が起こった。締切りも間近なので、これから以降の江口淑子との濃密なプレイは次の機会に譲りたい。



——連載・S大河小説——

パロディ

花と蛇 (13)

山光純

美女春情

……鬼源は、静子夫人に嘔吐を催させる行為を強制しながらも、熟しきって、触れなば落ちんばかりの女に、立ち直る余裕をあたえない。緩急自在のテンポで、太腿をねらったかと思うと、たちまち腋の下に飛び移り、いつの間にかモミジのような耳朶を襲っている。

焦れに焦れ、湯のような脂汗にまみれている令人は、かぎりなく切ない慕情をこめた瞳を、加虐者の視線にまといつかせてゆき、

「ねえ、ねえ……先生ったら。先生!」

切迫つまったような、からみ声でねだる。スメスメとした唾液を形のよい顎から喉元にまで、したたらせながら、どうしようもなく小山のように盛り上がった双臀をブルブル慄わせている。

しかし鬼源は容赦しない。もちろん彼も懸命に、こらえてはいるようだが、先程、からみついてくる裸女を突きはなした際、自身を防禦するための痺れ薬を使ったようだ。

はじめのうちは、ごく軽い気持で折檻してやろうととりかかったレスリングなのだが始めてみると猛然と興味が湧いてきたらしい。究極のところ、これは調教なのである。鬼源のテクニックをもってすれば、この女は使えば使うほど深みを増す肉体に造りかえられてゆく——つまり、その全身に分布した性感帯をくりかえし、くりかえし攻撃しつづければついには静子夫人の肉塊の、どの個所も、ほんのすこしの刺戟にも、たちまち溶けて流れだすような官能そのものに化身してゆく可能

性を秘めているのである。
『ついでに言うなら、往時の中国は、すでにこうした女体を創造させることを完成していた。まるで、この世のものとも思えない奔放さと、従順さと、可憐さに充ち、ただ男共の前にひれ伏すことだけを美肉に叩きこまれた少女――想像を絶する姿態を強制され、淫逸のみに捧げられる美少女。幼くして買い取られる彼女は、まずすべての歯を抜き取られることから始まる性地獄の修業を経て、一定の雌として売りに出されるのだ。買い手である長者は、持物であるしるしに好むままの刺青をほどこし、あるいは肉体に変形を加え、狒々や蛇を、けしかける。湯殿や寝所に鎖でつながれ、人豚と称し厠にも用いられる。あげくの果てに飽き果てた長者は、転売したり狒り物に用いたりする。頽廃の果てで這いまわる女は、「盲舞」とよばれた……これについては稿を改める』
その時、静子はヒューと笛のような吐息を洩らしたかと思うと、大浪のようだった息をピタリと止めた。
化石したように動かず、皓い糸切歯をみせる。喉元に静脈が浮かびあがり、炙り肉のような太腿に、自ら爪をたてているのだ。

累卵の瀬戸際である。
気が遠くなりかける。爛熟しきった状態のところへ、鬼源が新芽のようにつきだした乳頭をつまみ、ぐいと力を加えたのだった。あまりに残忍な仕打ちだ。
妖鬼が躯の芯で、最高潮の踊りを踊っている。ただ狂おしい。解放されるためには何をしてもいい……
又しても、ピンクの肌から、どっと噴きだした汗が玉となって起伏に富んだボディを流れる。
遥かな、わななき声で静子は、
「……も、う、よ、く、っ、て?……」
「だめだ。俺さまが、いいというまで、こらえるんだ。なあに、死にやしねえぜ」
悶死が、そこまで来ている静子。
このように残忍なリンチがあっていいものだろうか。憧憬にみちた令夫人であった筈の遠山静子は、何という悲愁の運命に弄ばれる女性なのだろう。嵩にかかって責めまくられ理由のない罪を負って、ただ詫び、許しを乞うだけの毎日。
鼻歌まじりに鬼源がやっているこの行為は世間の道徳律――刑法からいけば、どれほど数多くの累積犯に問われることだろう。

一寸、考えてみるだけで婦女誘拐・不法檻禁・脅迫・暴行・猥褻行為強要・財物詐取・猥褻図書販売……その他、数知れない罪が重なっているわけだ。しかし官憲の手のとどかないこの邸の中では、そうした常識は一さい通用せず、逆に制裁や刑罰に、おびえつづけなくてはならないのは利不尽にも被害者であるはずの静子夫人なのである。世の中のしくみが、どんなに変わっても、強い者は常に、より弱い者から奪い、その代償も、ろくに与える必要もないことは、すでに広く知られている通りである。
千代や鬼源の「ほんの一寸した慰み」は、静子夫人にとっては、全世界の崩壊にも通じる悲痛事である。それを乗り越えて生きつづけるためには、ただ一つの手段しかない。あくことのない羞かしめを躯一杯に受けとめながら、その恥辱、その嘲りを自らの歓びに変えることである。日夜を分かたない調教や呼び出しで厳しく監視されている彼女には、自ら死を選ぶ自由さえ、まったくないのだ。
何れにせよ、人間は諦めることによって、どんな暮しにも慣れることができる。まだまだ、彼女の積んできた修業は通り一ぺんである。自らの身を加害者たちの気まぐれの対象

として投げだし、その飽くない、くり返しの汚辱の中で、この世のものとも思えない妖しい歓喜を見出すようになるまで、彼女は救われることはない。

目の中で火花が、はじける懊悩の境に追いこまれている静子夫人は、濃厚な牝の体臭を立ちのぼらせながら小刻みに震えつづける。ネトネトした脂汗にまみれた姿態は、加虐者の激しい暴力の行為を待ちのぞんで、むくむくと、うごめくのだ。

鬼源は、むずがゆいような残忍さを募らせて、まるで生肉をさくようにメリメリと美女の両脚を、さらに左右に開かせ、内腿のたおやかなあたりを逆撫でしてゆく。燃えさかりもうどうしようもない破滅の渕を、ふらふらになって、さ迷っている静子にとっては、その刺戟は鳥肌が、立つ思いである。

「もう許して。このままなら静子、狂いだしてしまうワ。あなたって本当にひどいお方。あたくしを、こんなに夢中にさせて」

火のような牝奴隷は、かきくどく。滑らかな曲線は脂汗でテラテラと陶磁器のように光っている。

陰惨な感じの汚い部屋での二人の姿態は限りなくアブチックな絵である。

クスリの効き目と鬼源のいたぶりで、宙ぶらりんの、たまらなく遣る瀬ない情感に、どっぷりと全身を浸した麗人は、日ごろの慎みも忘れて暴力の行使を、ねだる。冷静な時なら想像できない大胆さで、猫のように、しなやかに、すりよるのだ。

彼女のしめす優しい媚態を歯牙にもかけぬ振りで、鬼源は黄色い歯をむき、

「これ位のことで、狂うの死ぬのと、大ゲサに騒ぐんじゃねえ。まだまだ訓練が足りねえな。こんなことじゃ、女郎稼業も、おぼつかねえぜ。そりゃ、ちっとばかり、きつかろうが、そこをウンと踏んばるんだ」

「ひ、ひどいわ。あたくしの切ぱつまっている気分が、よくお分かりになっているくせに……ねえ、鬼村さん、お願い！　静子を、めちゃくちゃにして。そのかわり、あたくしもあなたを、じゅうぶんに娯しませましてよ。ええ、たっぷり……」

と、おぼろな輪郭の振るいつきたいような美貌に媚をうかべるのである。男の意の向くままにキリキリ舞いさせられる真裸の女は、水族館で芸を仕込まれる人魚のようである。

チエッと、わざとのように舌打ちをしてみせる鬼源も、我慢が限界にきたらしい。

ふつう、このように発情しきった女を長々と呻きつづかせると、女体の消耗は、きわめて激しく、それが数日間も尾を引きかねないので、調教師たるもの厳にいましめなくてはならないことのはずである。ここにも鬼源の卑劣さがある。

「声をたてるのは許してやるが、おれが許さねえうちにマイってしまったりすると、勘弁しねえから覚えてやがれ――さあ、立ちな。立つんだよ」

「え、ええ」

いいようのない痒掻感にクナクナになった全裸美女は、べったりと黒髪を張りつかせた富士額を寄せて、唯々諾々と加虐者のリードに従う。脚をもつれさせ、この責苦から、ようやく解放されそうな期待で、安堵の涙が頬を伝う。

こらえにこらえた情念を精一杯、発散することが、いまの彼女にとって唯一ののぞみなのだ。その瞬間をむかえるためには、これからの一生を彼に捧げつくしても悔いはないとまで思いつめているのだった。この何かなわない嫋や女にとって、今の鬼源は最愛の愛人のようにすら思えるのであろうか。だが、その慕情は何という病的な陰々とした暗さにみ

ちていることか。

「後ろ向きになって俺に、もたれな」

絶世の女は、両脚を肩幅の倍もひろげプリプリした双臀をすり寄せる。

「うふふ……」

得たりとばかり鬼源は赤銅色の猿臂をのばして、たっぷりした女の太腿に手をかけ腹のあたりまで持ちあげる。このような奔放なスタイルが彼ごのみであることを知っている静子は後ろ向きのまま、鬼源の首っ玉に白々と柔らかい両の腕をまきつけて、そり返る。

「ずい分、重てえ女だな。これからは、アクロバットで、すこし肉をけずってやるか」

「ええ、ありがとう。静子いっしょうけんめいやりましてよ。だから、お願い……」

この性の惨劇が終わると、きまって苦くつきあげてくる凍るような自己嫌悪を忘れるためにも必死でご気嫌をとり結ばなくてはならない。煮沸する情感にぼんやりしながらも、静子夫人は今ならどんな羞辱のふるまいでもやって見せようと思うのである。

二人のとっているポーズは、ちょうど幼児をかかえあげて小用させる様に似ており、見方によっては滑稽そのものである。

息をはずませる静子夫人は、抱えられたまま右手をのばし、白魚のような指で鬼源を捉まえようとする。

ところが、鬼源は巧みにそれをかわして簡単に思いをとげられないようにする。ユラユラとした、裸女にとってはたまらなく、いらだたしい鬼ごっこだ。

そのたまらなさと、あまりのみじめさに耐えかねて、静子夫人は大粒の涙をこぼしながら啜り泣くのだった。

「……お、鬼村さん。お願い。もう少し下におろして。そ、そうじゃないの、もっと下なの。下だったら……」

もう完全に一疋の性獣になり下がった静子夫人は、彼女のする所作のなかで、もっとも下劣な醜い手付きで、もがくのである。

真珠のような歯をかみしめて、自由のきかない躯で精一杯の努力であるが、とらえかけたかと思うと、ひょいとはずされてしまう。

……無限とも思われる、時間がたち、ついに静子夫人は、我にもない、たまぎるような嬌声を一声たかく、あげた。

「あ、り、が、と、う。せ、ん、せ、い」

そして、思いのたけをこめて、

「ひいっ！……」と美しい女の喉がなるのとこの淫蕩な呻きに、とっぷりとひたった部屋の戸が、手荒く引き開けられたのが同時である。

戸をすっかり立てきってある室内は、うす暗かった。

バタンと音を立てて開かれた戸襖から、たちまち、夕暮れの煌めく残照がギラリと射し入った。そのまともの光りのなかに、真正面を入口に向けた静子夫人の肉体があった。

不運とも哀れともいいようはない。彼女は宙に浮いた形で不自然に伸ばした嫋やかに白い二の腕で鋼鉄の様な鬼源を摑んでいる姿態（ポーズ）を、ばっちりとさらしてしまったのである。

やって来たのは、千代であった。

つるしあがった眉毛の下に、不吉な妖術師のように金色にかがやく目で、静子をみすえて、まばたきもしない。

その一瞬をおかず、鬼源は抱えあげていた美体を、どさりと前に投げだし、手早く浴衣を羽織る。そして逆に居直った様子で、帯をくるくるっと、まきつける。

「なんだ、千代姐御か。あっしゃ、どっかの組が殴りこんできたのかと思いやしたぜ。ひひひ……まだそんなに時間はかかっていない筈ですぜ」

と、ぬけぬけという鬼源は眼中になく、

「どうも遅いとおもって来てみたら、やっぱり、こんな始末なのね。この淫売オンナ」

と理不尽にも、寝床の上に、よよと泣き伏してしまう静子夫人の濡れ光った豊かな頬をぴしゃりと平手打ちにした。

千代には酒が入っている。鬼源は下劣な人間がもっている特有の機転で、この場の収拾を、たくみに静子に転稼するのだ。

「おう、よくひっぱたいて下すった。何しろこいつが、あんなに簡単に小夜子にやられちまったんで、あっしの面目は丸つぶれでさ。そこで、折檻をはじめたところ、何しろ好き者のこの女のことだ。あることないことを喋くりやがったあげく、色仕掛でもって俺をだまくらかそうとしやがる――」

「ひ、ひどい……」

そのあまりの白々さに、静子夫人は動転してしまい、我を忘れて夢中で抗議する。

「そ、そんなのはウソよ。ねえ鬼村先生、そんなひどいウソを云わないでちょうだい。千代さん、静子はそんな女じゃなくってよ」

鬼源は取り合わず、

「色仕掛なんかは、あっしにゃ通用しねえんだが、まあその手に乗ったと見せかけてこいつの胸のうちをきいてやろうとした矢先の、姐ごの御入来でやしてね。フフ……」

「そうだろうよ。大方そんなことだと思ったよ。とにかくこの女には充分、気をつけないとだめのようね。客もお待ちだし、あんたの方は、もういいんでしょ？」

酒臭い息をついている千代が、彼を皮肉っているのかどうかはよく分からない。いずれにしても、静子がヘマをやらかし、罪をつくって罰をあたえられる口実を作ってやれば、気嫌はいいのだ。

「あっしは勿論いいんですが、この女が仲々本当のところを白状しやがらねえんで。何なら、もう一責め、やってもいいんだが」

と、つい本音を吐く。

「それで、別口で喋らせようとしたんでしょう。フフフ……まあ、あたしの奴隷なんだから、あまり勝手にいじくり廻さないでほしいものね。それにしても、こう色っぽくっちゃどんな男だって、抱くなという方が無理かしらね」

圧倒的な優位にたっているはずの千代だが自分でも不思議なくらい、目の前でブルブル慄えている元の女主人に対する哀れみが、わいてこない。

見下げ果てることはできても、完全に溜飲が下がったわけではない。肉体を蹂躙し、つい今朝方は、噴飯ものの不潔なわが身をさえ舌先きで浄めさせてやったが、それでもまだ癒やされないこの胸の中の不満は、どこからやってくるのであろうか？

「それで、どうなの鬼源さん。奥さまはこんなに泣いているじゃないの。よっぽど、ひどい目に合わせたんでしょう？　ふふふ……おやおや、若奥様ったらひどい脂汗だこと」

といいながら、千代は詮策ずきな好色な目つきで静子夫人の全身を、ねめ廻す。

女同志のするどい観察と、静子の肉体の千変万化の様子を知りつくしている千代には、裸女の陥っている状況が手にとるように分かるのである。

しっとりと眼元をうるませ、濡れた唇を半開きにして、頬をボーッと染めれば、明らかに彼女が情感をわかせた兆候である。すぐ前にいる加虐者なり見物人なりとも、視線をとても合わせられず、気弱わな恥かしさにみちて伏目の長い睫毛を、しばたたくのが常だ。

被虐が進めば、象牙色になめらかだったごく柔らかな肌に紅がさし、大きくなってくる呼吸につれて、可愛い臍のあたりが波打ちだ

す……。

しかし、今の状態はどうだろう。鬼源と媚薬によって巧みに絞りあげられた彼女は、彼女の意志の如何にかかわらず、これまで千代が何度となく物笑いの種にしてきた、肉体のあらゆる反応を、さらけ出している。

湯上がりのときのように上気しテラテラとひかった肌。むうんと鼻をついてくる臭い。その美肉は、鬼源によって、くまなく、いたぶられ、呼吸孔を開ききって、執拗にからみついてくる感じである。

あまりにも豊満だが、それでいて少しの崩れもみせず、要所がきっちりと、ひき緊まっている裸身は、貪婪にして奔放な一方、清純な無垢な輝きをも放っている。例えていえばこの女は淫猥な聖母であろうか。

絶えず軽いひきつりが一糸まとわない体のどこかを走る。巨大な完全に丸い乳房が、否応なしに挑発された性感をみなぎらせてムクムクと、うごめくのだ。

挑発され、すっかり相手のペースに巻きこまれたあげく熟しきった躯をドンと突き放された静子夫人は、濡れた唇をヒクヒクさせたまま、怨恨のこもった眼差しで見上げる。

「なんという目付きをするのよ。ご自分のいやらしさを棚にあげておいて。いずれにせよさっきの勝負は、やり直しときまったのよ。そうさ、お前のためにあたしが、とくに皆さんにお願いしてあげたんだから……今度こそはっきりと、けじめをつけて貰うからね。根性をすえて、おやりな！」

千代は、近々と息がかかるばかりに静子夫人の顔に近づき、狂おしい程の声で、

「やり直しの勝負に与えられる罰もきまったのよ！」

そして怪鳥のように、けたたましく笑いながら、かくし持った一枚の写真をとり出して妖艶な裸女の鼻先につきつけるのだった。

「負けた方には、これよ！　これ！　ようくご覧遊ばせ、売女（すべた）の奥さま！」

借金の代償

昨夜以来、閉じこもったきりの清次たちの変則カップルの濃密な部屋にも、ときどきどっと起こる喚声が、かすかに聞こえてくる。

「なんだか、随分と派手にやっているようだぜ。こちらも、もう一ふんばりやろうじゃねえか」

と陰気くさいボソボソした口調で、三郎が兄弟たちを、うながす。

部屋の中央に据えてあったダブル・ベッドは、爛れに爛れた歓楽の奔放な、もつれ合いのうちに、いつしか片隅のほうに押しやられてしまっていた。

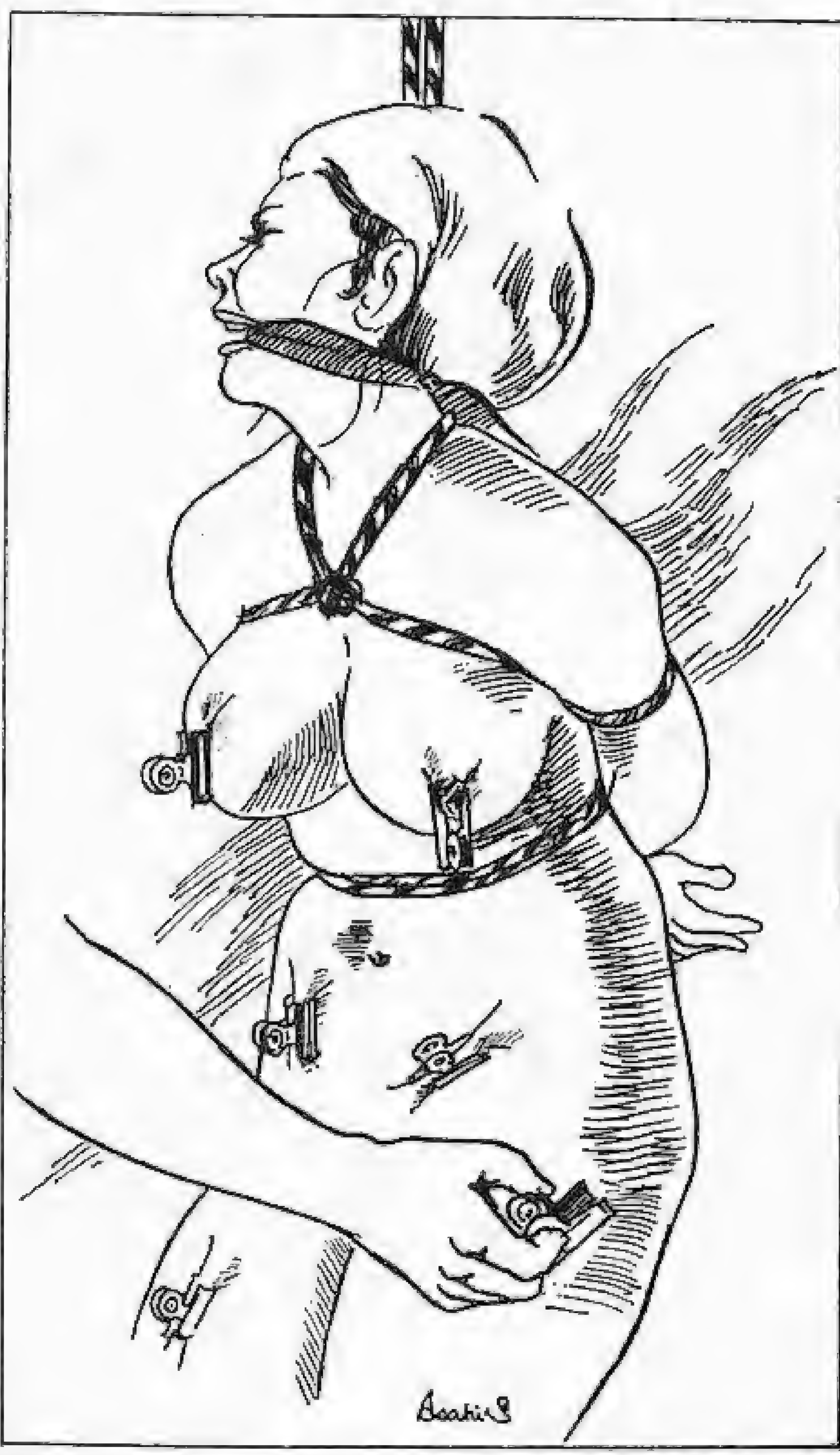
広い部屋には厚ぼったい絨毯が、しきつめられており、まん中には、一糸も許されていない京子が、不自然な、ねじくれた姿態のままで混沌とした睡りに、おちいっている。

溌剌とした青春の健康美に溢れていた生気は、ぐんにゃりと、うち伏したままの姿にはない。

何しろ日頃から欲求不満の塊りのようであったチンピラ共にとり囲まれ、しかも抵抗の手段を、すべて封じられてしまった、うら若い女に三対一の嗜虐が一昼夜、ぶっ通しで加えられたのである。

常に先手、先手ととられつづけ、京子には施すすべはなかった。手も足も出なかった。ただ命じられるままに開き、這い、立ち、そして味わう。

しかも、操り人形のように、ぼんやりしていることは絶対に許されなかった。チンピラ共は次々と際限ない要求をもちだし、彼女はそれに常に新鮮な動きで応えねばならなかっ


イメージ『快呼ぶ痛覚』須坂 旭

たのだ。

その上、若い女性として最も厭わしいポーズを取らされた瞬間を、適確に捉えてはフラッシュがきらめき、煌々と8ミリのライトが照り輝く。

京子は、恥辱の極みをのたうちながら、何度「殺されるのだワ」と思ったことだろう。だが、その時の異様なまでの昂まりの、すぐ隣に、目も眩むばかりの妖奇な陶酔感を見つけようとしていたことも否定できまい。このアブノーマルな恍惚の中で殺されるのであれば、死も案外にたやすいのではないかと思えるほどである。飼育され、調教の効果を痛いほど身に叩きこまされている京子は、その剣の刃渡りに似た汚辱と陶酔の危ういバランスの中で、チンピラ共の意に従い、彼らを歓ばせることを自らに強要した。さもないと到底生きつづけることはできそうもなかった。

三郎の提案を聞くと、清次は薄い膜のかかったような目をひらいて、つくづくあきれたように、

「お前って、そんなに細い体でいながら、ほんとうにタフな野郎だな。おれはもう、逆さまに振っても鼻血も出ねえや。出るのはゲップばかりさ……」

と、げんなりしたように言うのだ。

「じゃ、五郎は、どうなんだ。お前は、まだ十八だろう。もう一汗かかせて見ねえか」

「まあ、俺の方は、まだまだスタミナがあるがな、京子の奴、ぶっ倒れてしまったじゃねえか」

と虚勢を張る。世の中には、ごくくだらないことにも虚勢を張りたがる人間がいるものだが、このチンピラもそうした一人である。しかし五郎のその言い草も、時々家畜のようにピクピクと身を慄わせながら睡り続ける京子の体の状態については正確である。額に貼りついた、おびただしい乱れ髪が煩悶のあとを語っている。

「まあ、一休みさせるのも必要らしいぜ。何しろ、皆、はげしかったからな」

「そうかな。俺はそうとも思わねえぜ。最後の時の受け応えの仕方なんか満更でもなかったんだから。しかしこの女（すけ）も、かなりのもんだぜ。もう少しで俺たちの順番を当てるとこ

ろだったじゃねえか。俺が無理して連チャンをやったから、よかったものの……」

三郎は、どこまでも、しつこい。

彼らは最初のうちは、京子の空手の逆襲を恐れて、後手に固く縛りあげた上、享楽をほしいままにしたのだが、京子が自暴自棄の反抗を諦めたのを確かめると最初の約束を迫った。まず一廻りして、やたらにカッカしているのを静め、今度は、より一層、感興を盛り上げるために、はじめに宣告した目かくしによる識別ゲームを始めたのだ。

黒い布でキリリと目かくしをされ、男たちの順序を問違いなく言い当てねばならない。順序を正しく答えられなければ、又、元の、くり返し。チンピラ共は、わざと意地悪く、必死で足掻く彼女を混乱させる。

哀れをとどめたのは京子である。目かくしされて加虐者たちを識別するなどということが、簡単にできる筈はなかった。

はじめの内は、ただこの暴虐の嵐が通りすぎるのを耐えるだけだった勝ち気な娘も、チンピラ共が本気でこの淫猥なゲームをさせようとしているのを知ると、否応なく打ちこまざるを得ない境地に追い込まれたのだ。立てつづけに責めあふられるなかで、彼女は哀れにもフルパワーで応じ、両手と両目を奪われたまま、死に勝る屈辱に、翻弄されたのだった。

「それにしてもよ、もう少しという所で、しくじりやがったが、この女も大した感受性をもっていやがるせ。これだけのを、エロ・クラブででも働かせりゃ、しこたま、稼げるというものだぜ」

と、変にキョトキョトした様子で三郎が言う。

「そりゃ分かってるさ。だが、そうもいくめえ。何しろ滅多な人間に会わせて、この邸のことでも喋られると面倒だからな」

「ああ、それにしても勿体ねえや。何とか、生身のこいつに稼がせることはできねえものかな」

「何か、お前は嫌に稼がせたいようなことばかり言ってるが、カネがいるようなことでもあるんじゃねえのか？」

待っていたとばかり、三郎は頭をかきながら、

「実は、そうなんだ。つい先達て、ある野郎から借金を、しちまってな。そいつが又、取り立ての、きびしい奴だと、きている。困っちまってるんだ」

三郎は問わず語りに金のいる理由を、くどくどと並べたて始めた。――つまり遊ぶための小遣銭欲しさに、ケチな手慰みに手を出し逆に負けこんでしまい、挙句の果てに今夜が期限の借金をしてしまったというのである。

いずれにせよ、この三兄弟は、まだ正式に森田組の盃も貰っていないチンピラであり正業につく意欲なども、まるでないのであるから、始終、小遣銭には、不足している訳である。三人ながら、絶えず素寒貧であることにも変わりはない。

「で、借りは、どれ位なんだ」

三郎はバサバサの頭をかきながら、

「大枚、五万なんだ。取り立ても利子も、きびしい、因業な野郎でね」

同じような素寒貧の仲間同志なので、利息は月に一割という高利という。ほかの目的ならとにかく、借りが賭事であるため、もうこれ以上の引きのばしはできないと言うのだ。

「そうか、とんでもねえ奴だな……」

などと言いあうものの、同じように七所借りして歩いている兄弟のこと故、とっさに、いい智恵が浮かぼうはずもない。

「……といった訳なんだが、色々引き伸ばしを頼んでみたが、どうやらそいつの弱点は、

女に甘いことらしいんだ。一寸、変わった奴でね、女に不足していると思う。どうだろう兄貴。京子に一寸の間だけ辛抱させりゃいいんだ。別にとって喰われるわけじゃねえ」
「しかし、外へ連れだしたりはできねえんだぜ――」
「そこで考えたんだが、電話をしてな。実はもうこの邸の裏口の方へ来てる筈なんだ」
あきれた手筈のよさであった。この抜け目のない才覚を正業について用いれば、それなりの辛抱は必要だが、小金をたくわえるくらいのことはできるにちがいないとさえ思われる。もっとも、悪知恵と仕事の才覚とはちがうものであるから、そんな甘いものではないといえば、その通りともいえようが。
三郎は、周到にも午後からの接待の混雑を充分に見越し、また清次たちを説得できるチャンスを旨くとらえて、この提案をもちだしたのだった。
「まあ、兄弟のよしみで、目をつぶってくれよ。うまくすりゃ、今くる奴から、もう少しは引きだせるだろうよ。口だけは抜群に固い奴だから、京子に因果を含めれば、バレる気づかいもないぜ」
たえず京子の様子をうかがいながら、ヒソヒソ声で一方的に喋り、
「じゃ、ここへ連れてくらあ。なあに広い邸だから、見付からねえように旨くやるさ。ひひひ……」
と有無を言わせず押しきってしまう。気押される清次たちは、ただ苦りきるばかりだ。
三郎は、それでも、さすがに音を立てないように戸襖を開き、忍ぶように廊下へ出ていってしまった。
「おい兄貴。よそ者を引き入れたりして、いいのかよ」
「さあてね。京子の口から洩れないかぎり大丈夫だろう。だいいち、もう外へ来ちまってるんだから、追い返すわけにもゆくまい。まあいいってことよ。それよりオレは一寝入りするぜ……いささか、くたびれちまった」
五郎は、それでも、やや不安げな顔付きをしていたが、もとより金ヅルを持っている訳ではなし「ふん、別に、どうってこともねえや」などと呟き、こちらもゴロリと、寝転がる。二人とも、パンツ一丁のままである。
三郎は、階段を降り幾つもの部屋の前を通りながら作戦を練る。まだ宵の口ゆえ、客たちのいる奥座敷は笑いさんざめき、酒宴がたけなわのようだ。淫らな言葉が渦巻き、ズベ公どもの嬌声が一きわ高いところをみると、例によって、どの性奴隷かが引き出されて肴になっているのだろう。
彼は裏口へゆく途中で、厠に立った川田に会っただけである。
「おお、義雄兄ィの舎弟だったな。まあ、退屈だったら座敷のほうをのぞいてみねえ。おもしろいぜ。あんたの兄弟衆もよろしければおいでよ」
と、まるで屈託がない。京子のことなど、およそ念頭にもない様子だ。
三郎は、それに適当に相槌をうっておいてから、ペコペコと頭を下げ、追従笑いを返して、裏口のほうへ別れる。
この広大な邸には、三カ所の、裏木戸がある。一カ所は始終、出入りに使われているがあとは日頃から閉ざされたままである。
どちらも厳重に施錠されているが、咄嗟の状況のことを考えて掛け金ばかりで、南京錠などは使われていない。
三郎が選んだのは、庭の片隅の芝垣に、かくれた裏木戸で、その辺りは、どこからも光が来ない。
黒く塗った木戸の幾つもの掛け金をはずし

音を立てないように、そっと開く。
奥座敷の喧騒もせず、閑静な屋敷町に人影はない。陽はすっかり落ち、星がまたたき始めていた。
木戸のすぐ横に止まっている小型自動車がある。
「三郎か、オレだ。金はできたのかよ」
と、しゃがれ声で、車に乗った男が、いきなり先手をとってきた。
「いや、面目ない。じつは、申し訳ねえが出来ないんだ。それで、言っていたようにオンナの体で払わせて貰いたいと思ってな。なあ頼むよ。それで勘忍してくれよ」
「フン、女か。あいにくと、こちとらは間に合ってるんだ」
「そこを、まあ折れてくれよ。ここまで来たんじゃないか。せめて一目でも、玉を見てから決めても遅くないだろう。こんなところを兄貴分たちに見られたくねえんだ。さあ、入れよ。入ってくれよ」
「チエッ、しようがねえな」
磨きたてられた廊下を通りぬけるには、けっこうスリルがあったが、三郎の巧妙な誘導で三階の部屋につくまで、誰にも会わずにすんだ。
板襖を開けて連れを押しこむと、三郎は心張棒をしっかりと噛ませ、さてというように男の反応をみる。男は、クソ落着きに落着いているようで、ジロジロと部屋の乱れた様子を見廻している。
先程とは少し違った姿勢で、京子の一糸まとわない豊満な隆起が、撮影用のライトの下に伏臥していた。固太りの双臀が小麦色に盛り上がっている。
新入りの男は、車から降りた時のままで、黒っぽい背広の襟を立て、山のない真黒のソフト帽を、眉がかくれるくらい深くかぶっている。
清次は昨夜来の疲れが出たらしく、部屋の向こうの隅で羽根ぶとんを頭から、すっぽりかむって寝入ってしまったようだ。
やはりウトウトしかけている五郎をゆすり型通りに三郎は、男を引き合わせる。
「おお……」
と物憂く挨拶しようとしたとたん、五郎はギヨッとしたように身を起こした。
そいつは、奇妙にツルツルした感じの男であった。ソフトを、ま深く下げたきりだが、まるで湯上がりのようにツルリとした肌をしているのが、いやでも分かったからだ。
「三郎のダチ公の法界といいやす。あつかましいが、よんどころなく参上した訳で」
と横柄にいい、五郎の方にちょっとソフトを振った。
「まあ、くつろいで下さいよ。兄貴が、いろいろと迷惑をかけてるようで」
「では、御免――」
と、法界が、やにわに曰くありげなソフト帽を取るのと、五郎が目に見えて、はっと息をのんで腰をうかせかけたのが同時である。
――法界という男の頭には、一本の毛も生えていなかった。
大昔の僧侶みたい、剃りあげたようにテラテラと光る凸凹頭の他、彼には眉毛も髭も、まったくないのである。
まるで海坊主のようだ。ツルリとしたその

顔からは、一切の年齢は、わからない。
ふてぶてしい三白眼をくゎっと開くと、五郎のようなチンピラからでも、その容貌について、ちょっとした侮辱も容赦しないという兇暴なものを、ほとばしらせた。
それは彼なりの習性であろうが、とにかく迫力があり、五郎の言葉を奪うのに充分であった。
「まあ、ゆっくり、くつろいでくれよ。隅のほうで寝ているのが兄貴だ。どうだい、悪くねえ玉だろう。値ぶみしてくれよ」
と三郎が、とりなすように言い、それで無毛の男の容貌の奇怪さには、誰も触れないタブーとなっていることが分かる。
牛太郎よろしく三郎は売り込む。
「こいつは写真なんかで、あんたも見たことがあると思うが、組の秘蔵っ子なんだ。普通なら絶対に客と寝たりはしないんだが、今夜は特別に、おれが取り持つよ。……ふふふ、何の手加減もいらねえぜ。とっくりと仕込んであるからよ」
三郎は、もともと彼とは深いつき合いもないから、よく分からないのだが、ごく常識的にいって、この男と嬉々として寝る女はいないに違いないのである。法界の表情にも、それを裏書するものが露骨にではじめている。
三郎は畳みかけて、いかにも秘密めかして法界の耳元で、
「照れ臭くもあるだろうから俺たちは、あっちで一服しているから遠慮しなくていい。まあ、折紙つきの別嬪であることは、保証するぜ。ふふ……」
つづいて、一応の手順を念入りに教える。
眉毛のない法界の三白眼がギラギラし始め、打ち伏している京子のヌードをねめまわしだしたところをみると、満更でもないことが手にとるようである。
一しきり永々と教えこんだ後、法界を後ろに下がらせ、
「さあさあ、京子、いつまでサボってやがんだ。一休みさせてもらって図に乗るんじゃねえ。こっちもすっかり回復したから、続きをおっぱじめるぜ」
と、粗野な手付きで、バスト・九〇の弾力にみちた裸体を引き起こす。
浅い睡りだが、疲れのとれていない京子はぐんにゃりとしている。三郎は少しも酣酌せず、艶やかにもり上がった尻の双丘を平手打ちにし、
「さあ、はっきりしねえと、今迄以上の泣きを見るぜ」
「……ま、まってちょうだい三郎さん。京子はもう」
と、長い睫毛を慄わせて、とりすがる。
「何をいってるんだ。美津子の腰が抜けちまってもいいのかよ。ええ、さあ、目かくしをするぜ。さっきは、もう少しで俺たちの順番を当ててしまうところだったじゃねえか。今度は、もう大丈夫なんじゃねえのか？　そしたら許して貰えるんだぜ。ひひ……」
などと、すかしながら真黒い布で強引に視界を奪ってしまい、うろたえる美女の両手首に、すばやく蛇のような細引きを巻きつかせてゆく。手を使って暴行者の体をまさぐるのを封じる為である。
その間にも、法界をけしかけるように、素晴しい脚線を、ことのほか拡げさせて、いやらしくウインクしてみせたりするのだ。
京子の乳首を軽くひねり上げ、四つん這いのワンワンスタイルがいいだろう、と背筋を突つく。
美しい裸女の果実のような胸乳には、ところどころ、紅いろのキス・マークが、ついている。

――（つづく）――



第五十二回

前号まで＝秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じて五段七階級に分類され、巧妙な統制管理を受けている。有明のお手付きで未来を約束された女子大生、小林敏子は、かつて学生運動の女斗士で、和製ジャンヌとアダ名されていたけれども、今は有明に忠誠を誓って、アマゾン騎兵の見習士官として勤務している。若紫局を仰ぐ同名の中隊には、小川少尉を長とする騎兵小隊が新設され、華々しい披露演習が行なわれた。その結果、小隊に褒美として島曲輪行きが認可された。

負け残り

色獣と取り組む肉の狂宴は、夜を徹して行なわれ、マリファナに酔い、サイケな幻覚の洪水におし流され、爛れたような肉欲は、どろどろに融け、燃え上がり、爆発した。

翌朝、島（色獣曲輪のこと）を出た若紫騎兵小隊の女兵士たちは、皆、足どりもおぼつかなく、又、目のふちに隈を作っていたのであるが、徹夜したからといって、女兵に休息が許される筈もなかった。戦斗ともなれば、もっともっと激しい疲労を克服しなければならないからだ。

ジャンヌは、もちろん、自分から廓(くるわ)遊びを申し出る筈もないし、又、強制的に行かされる地位でもなかったから、その夜は他に気を使うこともなく、ゆっくりと休息が出来た、日課の通り、真っ先にスティブル（厩舎）に行き、自分の軍用馬を引き出して馬場で一責めする。汗をかいたカナダ女の裸身を、水でゴシゴシ洗っていたとき、伊藤連隊長に呼ばれて行ってきた小川小隊長が顔色を変えて帰ってきた。そして、ジャンヌの姿を見ると、つかつかと寄ってきて、

「0号生存刑の囚人が、ウチの中隊に廻され

ることになって、騎兵から先にと命じられました。これから営倉へ受領に行って下さいませんか。わたくしは島から帰った兵隊を集めておきますから」

B―二〇三号、すなわち杉本美和子元中尉が作戦中、脱走の罪で0号生存刑に処せられた経緯は今更、繰り返すまでもないと思う。(第21、22回、第40回、参照)

彼女の肉体番号は削りとられてしまっている。彼女には、もう名前も番号もなく、したがって家畜ですらない。しかし、彼女は生きていた。そして生きなければならなかった。刻一刻、又、日一日、彼女の肉体から、なにがしかの器官が切りとられて行った。0号生存刑というのは囚人の肉体を、生命を維持するギリギリの限界まで損壊して行くことを目的としている。苦痛が甚しいからといって狂人にしてはいけないし、切除の失敗や出血多量のため、死に至らせても、いけない。つまり、一寸だめし五分だめしに、ジリジリと詰めて行く。オペレーションが一段落すると、それが充分、抵抗力を貯えるまで慎重に治療し、休養させるのである。したがって、そのステップは何とも言えない、もどかしい、時間のかかるものとなってしまう。囚人は、その間中、だんだんと片輪にされて行く自らの肉体を見つめながら、はげしい苦痛をしのんで、絶対に救いのない、墜ちて行く一方の時間を、慄然として過ごして行かなければならないのである。

杉本美和子は、いつもの通り四肢を折りたたまれたロースト・チキンのようなスタイルで刑架に縛りつけられていた。

前述のように、体毛を引き抜く六十のステップにはじまり、最後に舌を断ち、両眼をつぶしてしまうまで、全部で二百種類を超える様々な肉体損壊のテキニックが整然と、そして長い年月をかけて行なわれる。最終的には手足は根元からなくなり、芋虫のような胴体に、鼻耳を削がれ、目も舌もない頭部がくっついた「消化器人間」だけになってしまうのである。こうなっては、何の生きる甲斐もなく、精神はもう死んだものに等しい。しかし残酷なことに、この国のすぐれた生体維持医学によれば、あらゆる一寸刻みの損壊過程を完了しても、尚その動物的生命を健康に保つことが可能とされているのである。

もう一つ、こうなっては杉本美和子当人にとって、もはや絶望以外の何物でもなく、苦痛の連続は、その苦痛にすら馴れる面も見られてくる筈であるが、それよりも敢て強行公開する意図が、惨烈な見せしめ効果を他の女たちに与えるためにあることを認めなければなるまい。

小川小隊長は前もって、囚人担当の医官から、切除位置の希望を照会されていた。

処刑者には、どこでも望みの場所を、えらぶ権利がある。もっとも、指が終わらないうちに腕を切りおとすようなことは勿論、許されないし、頭部は最後まで五官を残して苦しめるという目的から、一番あと廻しにされることになっていた。

何度も述べたところだが、こうした異常な環境では、地上の常識が、あてはまらない。小川晶子は、かつての同僚、杉本美和子に激しい憎悪を抱いていた。二人とも肉体番号のイニシァルがE、つまり六四年組で、番号も近く、同じ所属で、いわゆる苦楽を共にして来た親友だった。それなのに、いや、それだからこそ、こうなってしまったことが一層うとましく、我慢のならないものとなって行ったのであろう。

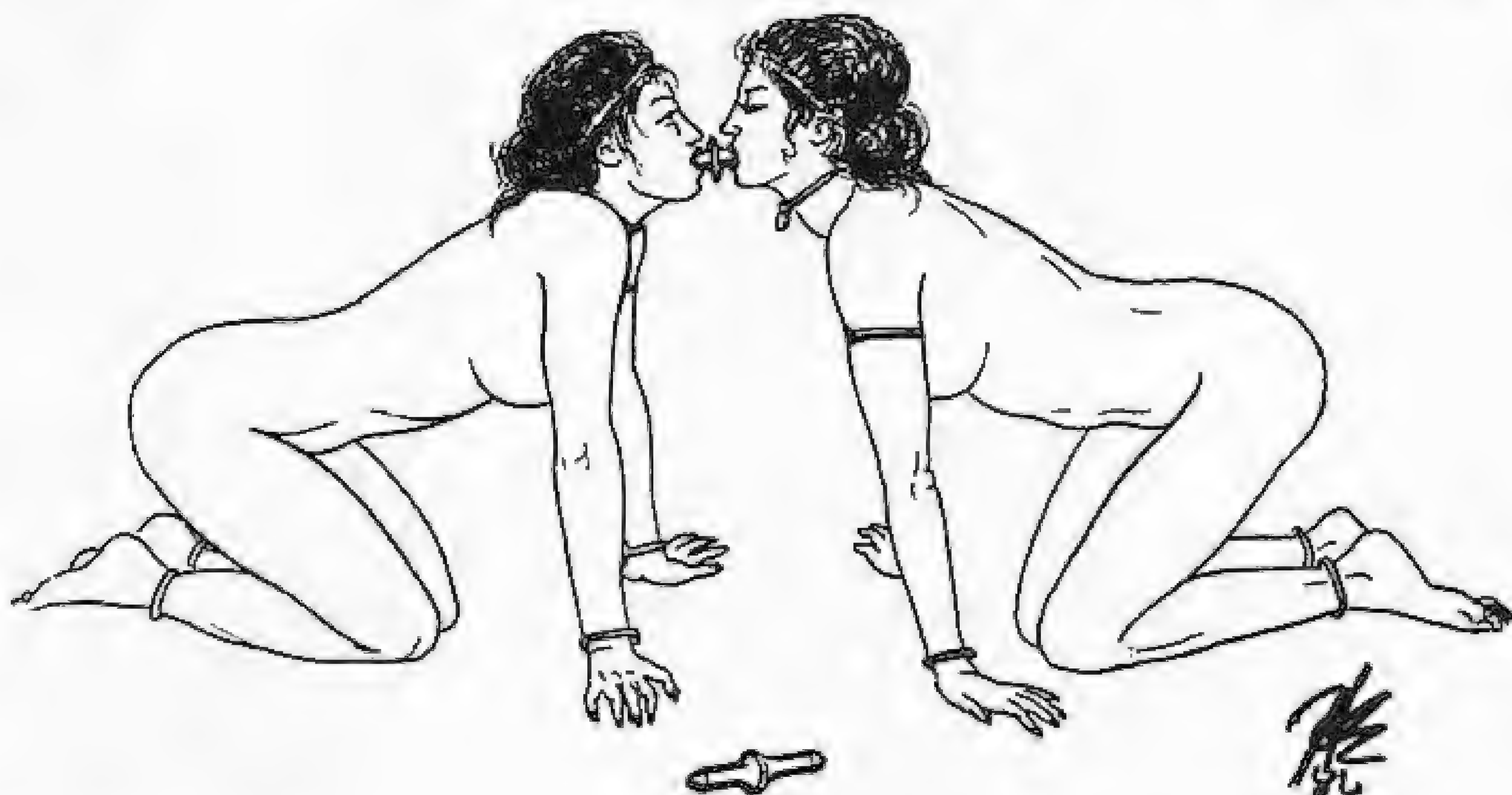
血反吐を吐く思いで陞った少佐の地位から蹴落とされて、今は一介の少尉でしかない。佐官は四品、尉官は五品。この一品の違いは大変なものである。課長が平社員にされたような屈辱だった。その上、競走の激しいこの社会では、容易なことでハンディを取り戻すことは出来そうもない。はっきり言って、小川晶子の未来は灰色になってしまったのである。こうしたことも、彼女の美和子を憎む気持に拍車をかけていた。

「ニップルですって？」

軍医は、おどろいたような顔をして、まじまじと小川晶子の顔を見直したものだった。

「はい。もし、お許しをいただければ……」

小川晶子は落ち着いて、いった。しかし、その瞳の奥に、凄まじい怨念の炎が燃えている。それが、美しい女医を、たじろがせた。



「よろしいでしょう。許可を得ておきます」

裸の全身に鳥肌をたてている女医を尻目にして、何か憑かれたような素ぶりで小川降等少尉は若紫騎兵小隊が集合している練兵場にとってかえした。そこには、もう六十名の小隊全員が、それぞれの軍用畜に跨がって整然と待機していた。

刑架のまま、曳かれてきた杉本美和子が、正面に据えられる。

「みんな、よく聞け。かつての同志B二〇三号は、破廉恥な逃亡罪を犯した。将校の逃亡は前代未聞の不祥事件だ。よって、ここに最高の0号生存刑が宣告された。刑の執行は各場所を巡回して行なう。今回ここに、わが小隊に執行が命ぜられた。われらの自戒のためにも、又、マスターに対する忠誠を再認するためにも、厳粛な決意で、憎むべき共通の敵を罰しなければならない」

小川小隊長の声は昂奮のためか、やや上ずっていた。実際のところ、ここに到っては憎悪というよりは、次に来たるべきことへの恐怖の方が大きかったかも知れない。小隊全員が同じ恐怖で戦いていたのである。

軍医が到着して、処刑位置が許可されたこと。そして、それは右のニップルを歯で喰いちぎってなさるべきことを伝えた。

——歯で喰いちぎるんですって？

さすがの小川晶子も顔色を変えた。

これは確かに一つのエスカレーションだった。今まで数回あった0号生存刑の実例でもニップルは鋭利な鉄で切除されているにすぎない。復讐心を隠そうとしない小川晶子の請願を聞いた有明は、その背後に含まれているスタンドプレイを、余り快く思わなかったのである。それで、小川晶子を驚かせるためにわざと条件を苛酷に変えてしまった。

全くのところ、0号生存刑の囚人が存在す

るということが、この国の女たちに上下を問わず、何か重苦しい重圧感を与えていた。囚人は自由官、つまり銀のクラスの女官たちが所属する様々の場所を点々と引き廻され、そのたび毎に、自らの肉体の一部を少しずつ喪って行くのである。それは当人にとっての苦痛であるばかりでなく、苦痛を与える側にとっても、やり切れない苦行となった。誰もが早く始末がついてしまうことを願っていた。そうなれば、あとはウイリー博士の実験材料にされるだけだったからである。

それにしても、気の遠くなるような期間の要る作業ではあった。たとえば指一本を切り落とすだけを考えても、爪を剝ぎ、第一、第二、第三関節と段々にツメて行く。しかも、一回一回、完全に治癒して断端が盛り上がるまで待たなければならないのだから尚更、厄介という他はない。

さて、進退きわまった小川少尉は蒼白な顔をひきつらせながら、

「命令を伝える。本小隊は、この罪人のニップルを隊員の歯で嚙みとる事を命じられた」

一瞬、整然としていた隊伍が異様にザワついた。誰も彼も今度こそ顔色を失っていた。

「臀円陣、作れ」

間髪を入れず号令が、とぶ。

たちまち隊列が動き出すと、やがて軍用畜は尻をくっつけ合わせて、円陣を形造って行った。つまり、車のついた前部を外側、脚部を内側にして直径七メートルばかりの円い人垣が、いや畜垣が出来たことになる。ご丁寧にも各軍用畜の首輪にロープを通して、かたく結び合わせたから、内側から押されても円陣は簡単には、くずれないのである。

アマゾン女兵たちは、夫々の持ち馬の足元に跪坐することを命じられる。間隔が狭いから、開股はできない。

「いいか。これから代表者を、えらぶ。もっとも歯の力が弱い者にする」

小川少尉は円陣の真ん中に立って叫ぶように言った。彼女の手にはゴムのレスビアン・ロッドが握られていた。

「これを二人ずつ口にくわえて、取りっこするのだ。抜きとられた方が負けだよ。膝や手を床から離しても負けだ。わたしから先ず見本を見せよう。小林見習士官」

「ハイッ」

ジャンヌが不動の姿勢をとった。

二人は四つん這いになって、ゴムのロッドを口一ぱいに頰ばった。向かい合わせに丁度口づけをしているように見えた。二人の裸身に赤身が走って、筋肉がピクピク痙攣した。互いに力一ぱい、相手の口からゴム棒を、とり出そうとしている。しかし、何としてもジャンヌは小川少尉の敵ではなかった。必死に棒に嚙みついてはいたものの、小川小隊長の激しい首の一振りで、ねじり倒されるように転がされてしまったのである。

つぎつぎと、三十組がゴム棒をとり合い、更に負けた方の三十人が十五組で勝負し、次第に「負け残り」を作って行く。最後に負け一番と残されたのは、気の毒にも例の望月レイ子だったのである。それが決まったとき、レイ子は一寸、逃げ出そうとするような素振りを見せたが、まわりに廻らされた軍用畜の臀部を眺めたとき、すぐにその不可能を覚って悄然と立ちすくむのであった。

円陣の真ん中に、杉本美和子を縛りつけた刑架が引き据えられた。

「F―〇一八号(レイ子のこと)われわれを代表して天誅を加えて下さい」

小隊長が、やや、おだやかな口調で望月レイ子に言いつけた。もはや絶対絶命だった。

レイ子は、ガタガタふるえながら、それでも哀れな犠牲者の前に跪いた。

杉本美和子の全身は傷だらけ、火傷だらけだった。かつての美肌は、もう見るかげもなかった。しかし、その胸の隆起だけは不思議に、もとのままだったのである。その真ん中に小豆つぶのような乳首が慄えていた。

しばらく、ためらっていた望月レイ子は、やがて狂ったように刑架にとびつき、罪人の胸に歯を立てたのである。

ゾッとするような悲鳴が、ギャグの奥から噴出し、刑架が激しく揺れ動いた。

裸体再生

若紫騎兵小隊に属するアマゾン女兵たちは昨夜一ぱい、色猷と寝もやらずドロドロと繰り返されたプレイの疲労で、目をひっこませていたのだけれど、その肉体の疲れと、今まさに見せつけられた惨虐な処刑で、精神の健康状態まで限界にきてしまった。全員が同じように、目を血ばしらせ、オコリにかかったように裸身をコワばらせている。

ゆっくり立ち上がった望月レイ子は、そのまま痴呆のように、すくんでいる。その口の周辺が杉本の血で真っ赤に染まっていた。付き添い衛生兵が、すぐに傷口の消毒と治療を始めている。

ふと、口中の異物に気づいたレイ子は、狂ったようにソレをつまみ、夢中で投げ出すと「ヒーイッ」

と絶叫してグラウンドに、くずれ落ちた。

投げつけられた肉粒は、女兵たちの頭越しに、垣根を作っている軍用畜の尻に当たってそこにへバりついた。後向きの軍用畜は殆どが白人女で言葉がわからない上、後向きなので仕合わせにも事態を知らないでいられた。で、異物が自分の尻にくっついたとしても、定められている通り、微動すらしない。

処置を終わった衛生兵が立ち上がった。

グッタリと失神したようになっている杉本美和子の、ふっくらした右胸の隆起に、白い絆創膏がペタリと貼りついていた。

切りとられた部分の大きさからいえば、今まで行なわれてきた、そして、これからも行なわれるであろう如何なる部分よりも小さいものではあった。しかし、それは女のいのちといってもよい部位であるが故に、はかり知れないショックを当の美和子はもとより、周囲の女兵たちに与えたのである。

こんなことにならなければ、美しいお嬢さんのことである。きっと立派な男性と祝福された結婚をして、可愛い愛の結晶を、もうけたにちがいない。そのとき、この乳首は、母性愛のシンボルとして、小さな赤ちゃんの唇を、やさしく愛撫したことであろう。

軍用畜の豊かな臀部に、その乳首は血まみれになって落ちもせず、くっついていた。もはや、それは一個の小肉粒でしかなかった。

付き添い衛生兵が馴れた様子で、それをピンセットでハサみあげた。

その軍用畜をあずかるアマゾン女兵が、渡されたアルコール綿で、自分の愛馬の汚れた腰のあたりを必死になって清めはじめた。アルコール綿が、たちまち赤く変わってゆく。

望月レイ子は、まだそのグロテスクなタスクから解放されなかった。

だまって衛生兵が、さしつける肉粒を、恐怖で一ぱいに見ひらいた目のうちに、おさめている。小さな血のかたまりが、彼女の視野一ぱいになっていた。

望月レイ子には、それを杉本美和子に喰べさせる義務が残っていたのである。

おそるおそる、つまみあげて、うなだれた美和子の顔を持ち上げ、力なく半開きになった口の奥に、それを押し込もうとする。
「ゲーッ」
　わずかに残った力を振りしぼって美和子はそれを吐き出そうと、あがいた。いったんは、唇からこぼれ出て、今しがた切りとられたばかりの胸の上に、唾液と一しょに、ズルズルと流れ出した位だった。しかし、拒否しようとしても、所詮は許さるべくもないことであった。冷酷な命令は冷酷に完遂されてゆく。口枷が美和子の口を一ぱいに、ひろげてしまう。無理に上を向かされて、その喉の奥深くピンセットで押し込まれると、もうどうすることも出来ない。本能的な嚥下作用が、やがてその小さな肉片を、食道に送り込むのであった。
　かたく閉じ合わされた杉本美知子の両眼から泪が止めどもなく流れ出ていた。
　今まで、三十回に亘って少しずつ切りとられて行った彼女の指の肉は、その都度、無理強いに自らの胃の腑に送り込まれてきたのだった。そして、今もまた三十一回目の共喰いが強制されたのである。
　六十名の半数近くが胸がわるくなって、便所へ駆け出すという珍事が起きたのは、その直後だった。それも、勝手に動くことは許されないので、
「何某一等兵、気分が悪いので便所に行かしていただきます」
　といって、一々許可を求めなければならない。本来は服務中だから、そんなことは許されないのだが、幸運にも、当の小川少尉自身、吐き気がしていたところだったので、
「よしッ、五分間、休憩する。自由に行ってよろしい」
　と許可したものである。
　円陣がくずれて、全裸の女兵たちは、わらわらと便所に、かけ出して行った。



　若紫騎兵小隊は、束の間の弱気を吹きとばすように激しい馬上訓練を開始した。立派なアマゾン女兵となるためには、こんなことで気分を悪くするようであってはならないからである。
　そして、ヘトヘトになるまで汗を流したころ、漸く夜になった。
「小林見習士官、連隊長がお呼びです」
　スピーカーがジャンヌを呼んだ。
　伊藤香織は彼女を屍体処理場に連れていった。ジャンヌには例のスラヴ女の生皮を剥いで若紫幢幡を作ったときの不快な記憶がマザマザと蘇ってきて、顔をしかめた。
　ここでは予備役要員の方が数が多くて、経

験を積んだ職人が男女年令を問わずに、その特殊な技術のみのために働いていた。男は勿論、去勢されてしまっている。

ここでする仕事は、ジャンヌが手伝ったような臓製作業ばかりでなく、高官貴妃などの永久保存、つまり新式ミイラ造りも、その大切な仕事になっている。

せんだって、自尽した柏木の局の遺骸も、ここで慎重な保存処置がとられつつある。近代技術の粋をこらし、ありし日の姿のままに再現されるのである。

そんなわけで、ここにも貴位高官のための貴賓室が、こしらえてあって、はじめて導かれたジャンヌは、その豪華さに目を瞠るばかりであった。

その上、驚いたことには、有明が、夢にも見た理想の人が、ひっそりと待っていたのである。

例によって、伊藤連隊長は次の間の扉口で平伏してしまう。ジャンヌも、それにならった。

「お召しにより、F―七五三号を引き連れました」

扉の奥から懐かしい声が聞こえた。

「ご苦労。伊藤は帰ってよろしい」

「はい。では失礼いたします」

平伏したまま、伊藤連隊長は次の間を出て行ってしまった。

絶対者といってもよい訓練連隊長でさえ、有明の前では、こんな扱いになるのかとジャンヌは息を呑む思いだった。つくづくと、自らの地位がカケ離れているのを覚らされる。大佐連隊長といっても宮廷席次では二品、中﨟位に等しい。朱房の房門を跨ぐ資格すらないのである。まして見習士官では人位と婢位の間、五品にも任官していないのだ。

「しばらくだったな。遠慮しないで、よろしい。這入っておいで」

やさしい声が聞こえた。ジャンヌは、おずおずと扉口を入り、朱房を平伏して、くぐり抜けた。

そのまま、床の厚い絨氈に顔を埋めていると、

「ジャンヌ。今日は身分を忘れてよろしい。昔のままになりたまえ」

「あ、ありがとうございます」

自然に上ずった声で、お礼の言葉が出た。これは大変なことだと、全身から血がひいて行くような気がする。

「さあ」

有明の逞しい掌が腕を掴んだとき、ジャンヌは電気にかかったように慄える。

次の瞬間、激情が堰を切った。

ジャンヌは、ワッと哭きながら、有明に、しがみついていたのである。

「よしよし、よしよし」

有明は子供をあやすように言いながら、ジャンヌの頭を、さすってやった。

しばらくして、やや落ちつきを取り戻したジャンヌは、それでも泣きじゃくりながら、失礼を詫びるのであった。

「いいじゃないか。身分を忘れてよいと言った筈だぞ」

有明は快活に言った。この調子がジャンヌには、たまらなくチャーミングだった。

「今日は見せたいものがあるので呼んだのだよ。その前に何か飲むかね。うん、私にブランデーをくれないか」

有明に、自分だけで奉仕出来ること、こんな幸福な機会は考えられないことだった。彼女は、いそいそとして部屋の片隅にあるホームバーに行って、有明のためのグラスを、ととのえるのだった。

有明が自分の肘かけ椅子にセットされているスイッチを操作すると、室内が次第に暗くなり、一方の壁を被っていた豪華なゴブラン織の緞帳が音もなく引かれ、大きな一枚鏡が現われる。その向こうがボッと明るくなるとこれがマジックミラーだったことが判る。ミラー越しに何の装飾もない小部屋が見え、その真ん中に白布をかけた人影が立っていた。

微動もしないその様子から、それが等身大の人形であることが想像出来た。

スルスルと白布が引き上げられると、全裸の女性像が現われてきた。

それを一目みたとき、ジャンヌは「アッ」と叫んで、自分の目を疑ったものである。

「お、おねえさん」

「そうだ。林シャオチエに殺された君のねえさん、小林敦子を再生させたのだ」

再び違うボタンを押すと、ミラー越しに見える小林敦子の像は、何と口をパクパク動かし始めたではないか。そして、ジャンヌの耳に、まぎれもない姉の声が響きわたった。

「身も心も、わたくしのすべてを、マスターにお捧げいたします……」

例の身技体の三誓願である。

誓願などは必ず録音にとられているから、それがここに利用されたのである。しかし、ジャンヌにとっては激しい驚き以外の何物でもなかった。

二人はミラーの向こうに入って行った。

「近よって、触ってごらん」

ジャンヌは、おそるおそる「姉」の腕に、さわった。おどろいたことに、それは生きた身体のようにソフトで体温までもあった。よく見れば、ウブ毛までキラキラ光っているシットリした肌は本物の人皮にまぎれもない。

「ねえさんの肉体は惜しいことに、目黒で焼けてしまった。だから、この皮膚は他の女のものだ。似通ったのを探すのに随分、苦労をしたのだよ」

唖然としてジャンヌは立ちすくむばかりだった。まるで彼女まで体温のある人形に変わってしまったようにさえ見えた。姉の人形を作るために、たったそれだけのために一人の女性の命が犠牲にされているらしい。

「立体写真のデータがあるから、コンピューターで作型すれば、ねえさんと寸分ちがわない人形が出来るわけだ」

人形とは思ってみても、無心に三誓願をくりかえしている声は、なつかしい姉のもの。

ジャンヌは、ただ、とめどもなく涙を流している。あのような奇禍に遭わなければ、今時分は姉妹、水いらずで、いにしえの祇王祇女の話のように、共に有明のため奉仕できたものをと口惜しい想いが募ってくる。それだけ、この国のどこかにいる下手人、林美玉に対する憎しみが、ムラムラと燃え立つ。

「あいつ、あいつは、どこにいるのです」

ジャンヌは涙にうるむ目を、ひたと有明に向けて叫んだ。

「会わせてやろう」

有明は即座に答えた。

（未完）

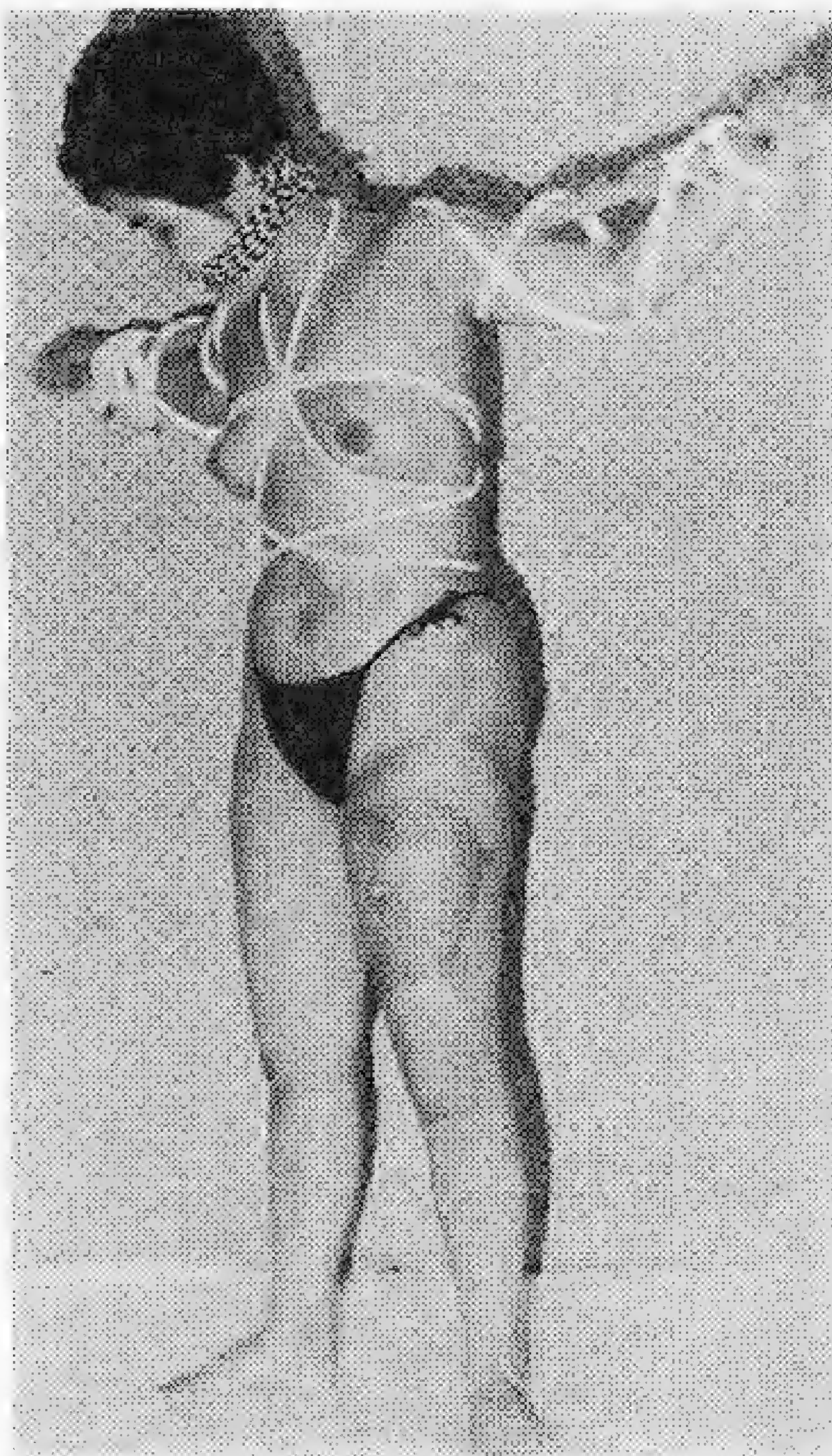
——**おことわり**——

どうしたものか、第五十一回分の原稿が紛失してしまいました。大要、左のような内容でしたが、とりあえず未定稿として保留し、これをとび越して、第五十二回から継続連載させていただきますので、ご了承下さい。〈**千葉青鬼**〉

◎**尻飾り**＝アマゾン騎兵中隊での競技で、軍用畜の尻飾り（当人から刈りとったヘアで作ったカモジのような尻尾）を奪い合うプレイの描写。

◎**島狂乱**＝アマゾン女兵の男性コンプレックスを矯正するため、性奴（手足を切りとり性奴隷として洗脳した男奴）が提供されているのだが、これを「島」と呼んでいる。尻飾りプレイで優勝した若紫中隊が、この島遊びを許されて、乱痴気騒ぎとなった情景。

奇クさろん



＜SM夫婦プレー・レポ＞

『夫婦交換プレー』に思いを馳せる

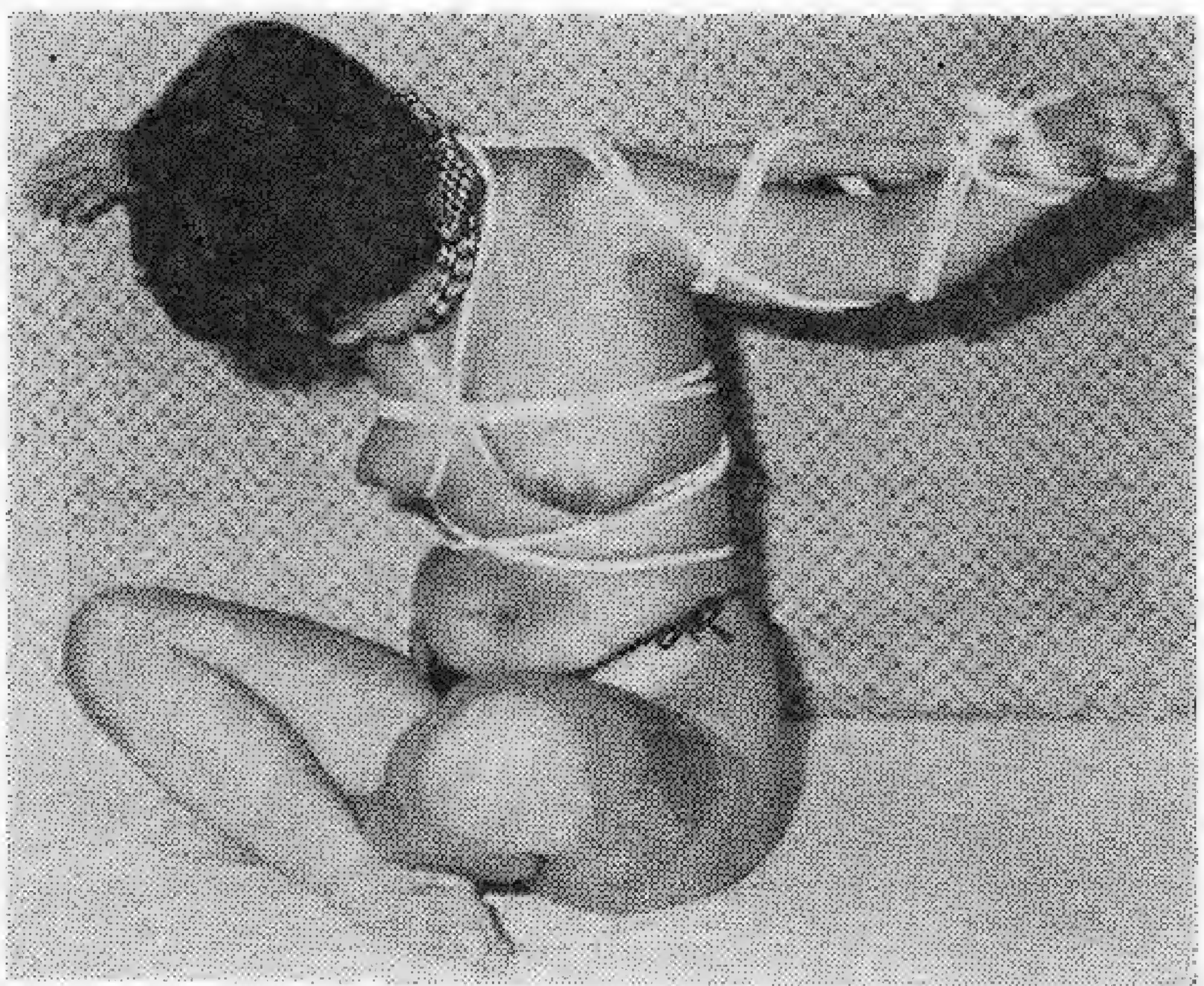
早坂信治

　若い頃、私の脳裡に、ほのかに芽ばえた嗜虐の欲望が、結婚と同時に、それを新妻に求めたことは当然のなりゆきでした。そして、常に新しいことを望む人間本能のおもむくまま次々と変わった嗜虐行為を求め続け、いつしか十五年近くにもなってしまいました。

　当初、そんな私の行為を、いみ嫌い、涙を流して許しを乞う妻を辛抱づよく徐々に説き伏せ、次第に自分の欲求に従わせ、遂には限りなく燃える嗜虐願望の生贄として、私の思うままに飼育してしまったのです。

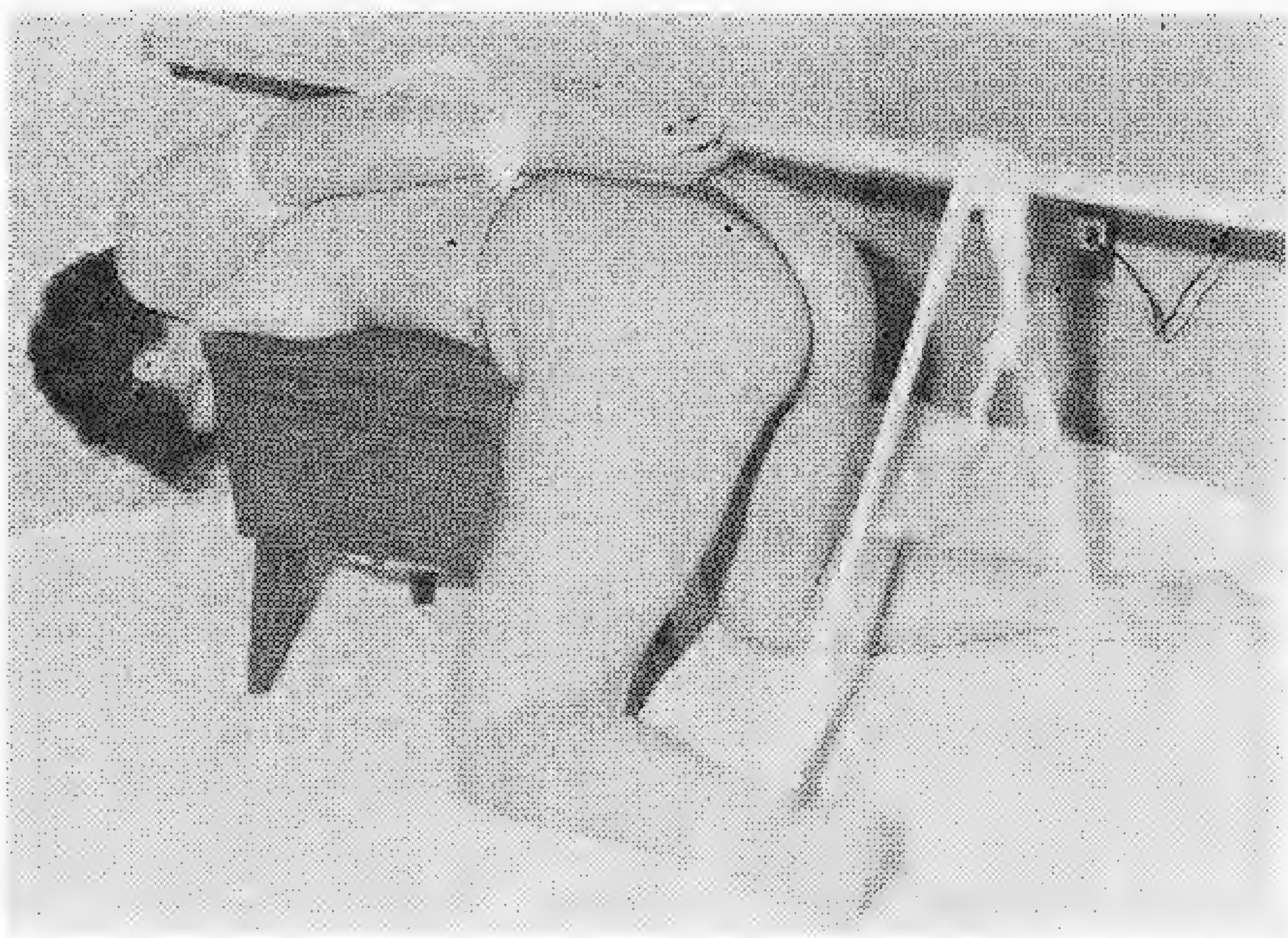
　長い間に亘る、被虐の苦しみの中で味わった、しびれるような性の歓びによって、妻は今では縛られることに喜びを感じ、その苦痛の中で昇華される快感に溺れ、恍惚のたかぶりに、陶酔するようになっていました。

　幼稚な縛りプレーから始まった私の変質的欲望が、一つのものを求めそれが充足されると、続いて新しい行為を欣求するようになりました。それが次第にエスカレートして遂に、女性として最も羞かしい剃毛から抜毛責めへと進展してしまいました。



　それというのも、こうしたSMプレーが、結婚以来、私達夫婦の愛情を益々こまやかにするのに役立ちました。夫だけの、妻だけのというような個人的な権利を、いささかも主張せず、夫婦の考え方を中心にして、いつまでも新鮮で素晴しい夫婦でありたいという念願が、私達夫婦の間で相互に理解しあってSMプレーを楽しむことが出来たのです。

　しかし、この夫婦間のSMプレーにも、おのずから限界が定められたかのように、昨今では、その行きづまりやマンネリに悩みながらプレーを続けてはみるものの、

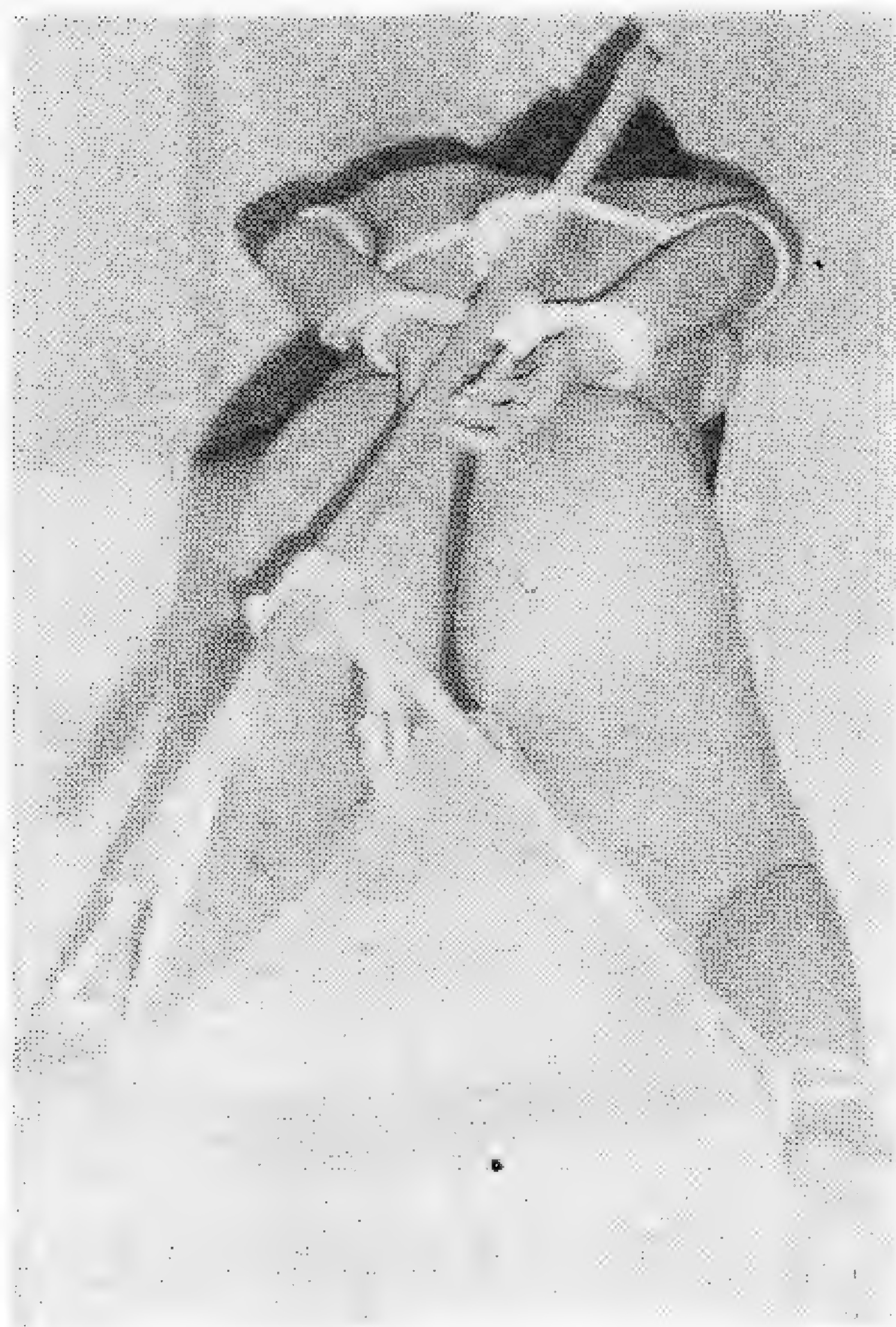


以前のように心から満足することが出来ず、徒らに惰性でプレーをくり返している様な状態でした。ここに於いて、最近つくづくと、このマンネリ打破のために、〈夫婦交換プレー〉について考えることが多くなりました。

一概に〈SM夫婦交換プレー〉と申しましても、各自各様に、条件とかプライバシーの問題とか難かしい事柄があると思いますが、それには先ず、お互い同好者同志の信頼と理解を得ることが必要です。その点からも、私達同好者のために、大きく門戸を開放して頂いている奇クに、告白を寄せられては如何でしょうか。

赤裸々な告白を奇ク誌上に発表してこそ、お互いの心の交流が果たされ、マンネリや行き詰まりに悩む同好者同志の横のつながりが出来て解決の道へと進むものと思います。

夫婦のSMプレーを続けられてさて、今一つ新しい展開がなくて不満に考えておられる方も少なくないと思われます。そうした同好のご夫婦の方々は、勇気を出して素直な気持で奇クに投稿しようではありませんか。



私は、これからも広く同好者諸氏のお仲間に加えて頂き、我々SMマニアだけが知る秘めやかな中に息づく燃え上がるような性の歓びを心の奥から味わい、楽しい人生を歩みたいものだと思っております。

尚、十一月号の奇クサロンで、『夫婦交換プレイの提唱』をなさいました加地進・悦子ご夫妻が、「交換プレイこそ、新しい生活における潤滑油である」と提言なさいましたが私も、そのお説には全面的に賛成です。

私自身、過去の夫婦プレーを顧ってみます時、これから新しく求める、私達夫婦生活の活性炭は、やはり、SMによる夫婦交換プレーの実現であると、信じております。

関東と関西で、地理的には、いささか遠く離れてはおりますが、今後、奇クのページを、さいて頂き、ご交流願えれば楽しいと思います。

最近、私達夫婦で行なったプレーのフォトの内から、数枚を同封させて頂きましたので、若しよろしければ、ご掲載願えれば幸いです。

もっと「浣腸」を認識しよう

竹迫誠也

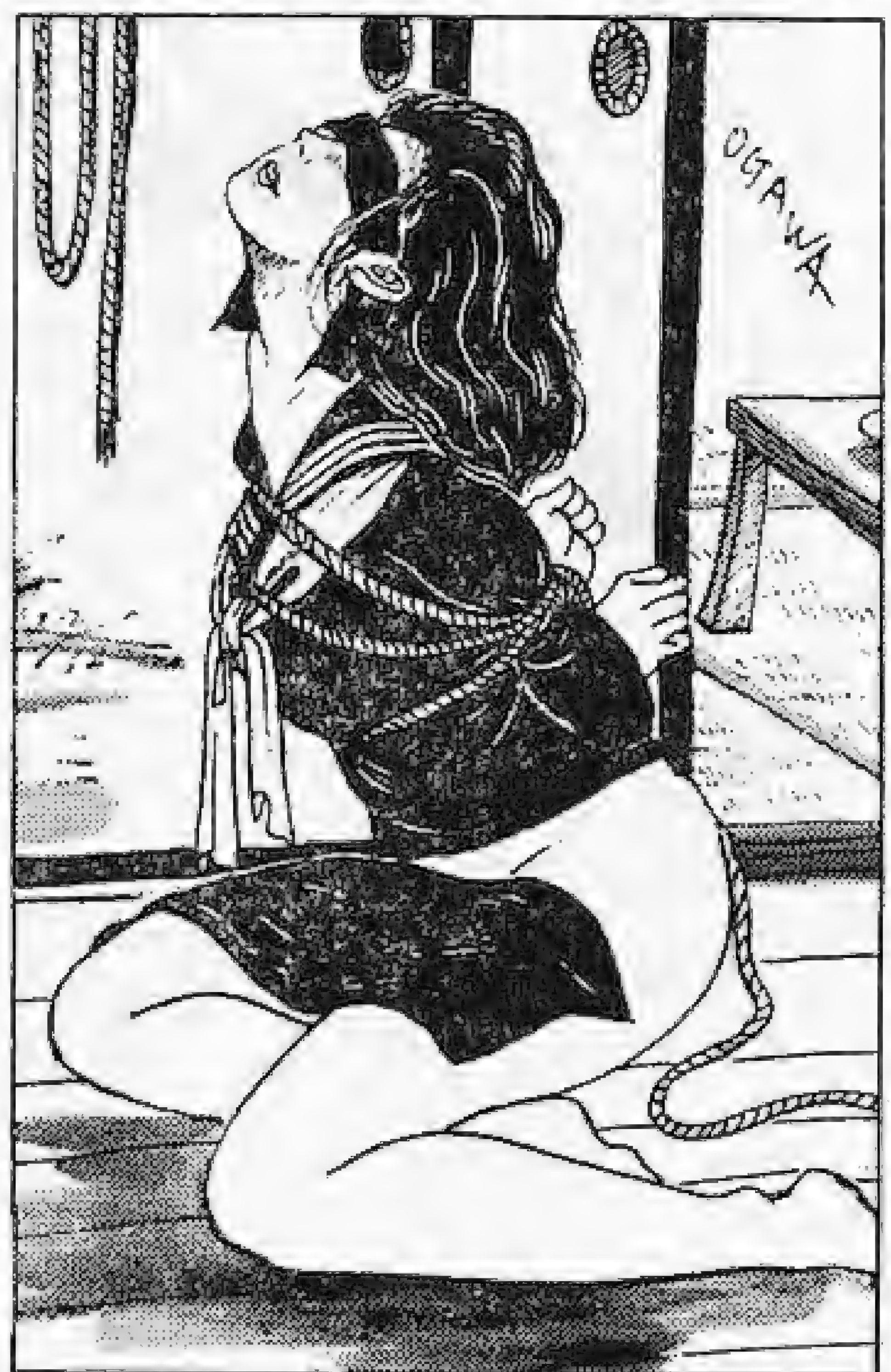
このところSMブームは正に爆発的で陰花的存在から一挙に陽の目を見、開花したようだ。特に今日その主流とみられるアヌス責めは、SMブームを頂点にもたらす凄い勢いで増えている。奇クが昭和二十六、七年頃から二十数年間訴え続け、啓蒙して来た貢献度は極めて高く、SM史上に残る偉大なる足跡であることはいうまでもない。然し今日のアヌス責めは浣腸が主で、しかもなんとなく平面になり易いきらいがある。

どのSM雑誌にも浣腸小説は、ふんだんに取り上げられ、ときにはグッと生つばをのみ込ませる場景もあるが浣腸小説の内容の大部分は浣腸器でイヤがるヒーローに浣腸をして苦しめるというスジが多い。ただ、その過程に時おり、こけしを使ったり、ソーセージが登場したりバイブが使われたりしているに過ぎない。この事は、なんといっても浣腸を中心としたアヌス責めが、ここ一年位で急激に脚光を浴びた、いわゆる底の浅さを物語るものである。いうなれば出版社としても浣腸小説に対する認識の不足、作家としての浣腸に対する材料不足が否めないのである。

浣腸は、あく迄もアヌス責めの一プロセスなのである。浣腸の種類も市販のイチジク浣腸によるもの（初歩的なもの）から硝子浣腸器、エネマ、イルリガートルとあり少しエスカレートした場合、水道浣腸といって水道の蛇口に直接アヌスを当てて手で水の勢いを弱めたり強めたり、或は蛇口にホースをつけアヌスに差し込み（その場合なるべくホースが腸の中深くはいった方が効果的だ）腸の奥深く水で責める法と色々ある。また浣腸液にしても水をはじめ湯、グリセリン、石鹸水、ドナン、ヒマシ油（下剤）食酢、食塩水、これ等を適当に混合したものや酒、ビールといった具合にコト液体であればあらゆるものが使え、使う浣腸液によって、それぞれ効果が違うのである。

以上、単に浣腸だけとりあげても種類は極めてバラエティに富んだものになり奥深さが感じられるのである。またアヌス責めも前記こけし、バイブ、ソーセージは勿論のこと、アヌス責めを最高にもってゆく為の補助モノとしてブージあり、肛門器あり、膣開口器、ネラトン等々がある。またアヌス責めもよくしたもので日時を費やした場合、当初アヌスには、せいぜい親指位しか挿入出来なかったのが、なんと直径五、六センチもあるソーセージ（上野小路に一本二百円で売っている）が挿入できるようになるものだ。大体アヌス口は、よく締まっていて中々はいりにくいが、一旦、差し込めたら腸の中は案外なんでもはいれるように柔らかくなっている。

このように大きいモノでアヌスを責める時一番よい方法は、グリセリンで浣腸した直後、排泄感を利用してアヌスに挿入した方が苦痛が少ない。もち論、事前にアヌス周囲にポマードを充分に塗り、また挿入するモノにもポマードを塗って挿入し易くする事はいうまでもない。そしてグリセリンで浣腸し排泄感が来た時は下腹に自然力がはいり便を押し出そうとするのでアヌス口がおしやられてゆるむので、その時、挿入すれば案外大きな苦痛もなくはいるものだ。



『不安と期待』小川茂正

山本五郎様に敬服

被虐の振袖に魅せられて

高橋英樹

七一年十二月号をふとした機会に古書店で開いたとき、思わずアッと声を出すところでした。そこには、私が幻想に描いていた光景が現実となってあらわれていたのです。すぐに買い求め、家に帰って頁を繰るのももどかしく、奥様の演ずる被虐の振袖花嫁の哀美感あふれる姿態を、心ゆくまで、ながめました。

それにしても、なんというすばらしい写真でしょう。綿入りの大振袖に分厚い巾広の帯を締め、重い高島田のかつらをつけた花嫁が、無残な姿に縛られ、吊られ、女性としての最高の盛装をしながら、最高に屈辱的な恰好をさせられている光景は、裸の女性の緊縛写真の遠く及ばない幻想性、哀美感を持っています。

和装花嫁の場合、衣裳をつけるだけで重く暑く息苦しいという三重の責め苦を受けるのに、その上はずかしい恰好に縛りつけられては、どれほどの苦痛になるのかわかりません。その責め苦を耐える奥様と、奥様に苦痛を忍ばせて振袖花嫁の哀美感を追及なさる山本様のご努力には、心から敬服しております。



艶美なる我が家の花嫁　山本五郎

羞かしながら私も振袖には堪まらぬ魅力を感じる者の一人で、特に女体を締めつけるあの巾広の帯に魅力を感じます。振袖盛装の花嫁の帯は、正式には昔風にいうと八寸巾に巻くそうですから、30センチ弱ということになり、こんなに巾の広い帯で体を締めつけられる花嫁は、日本以外に世界中さがしても見当たらないでしょう。

歌舞伎のお姫さまなどでは、体の横巾より帯巾の広い写真をよく見かけますが、あれが女優さんだったら乳房まで締めつぶされてしまい、苦しくて演技どころではなかろうと思います。

実は帯を主題にした責めの着附について、いろいろ空想をしておりますが、山本様ご夫妻のお力でお気に召したものを具象化していただけたらと考えております。いずれを見ても裸女の緊縛ばかりの中で、和装、それも完全盛装の花嫁の縛り写真は、私にとっては夢のような存在でした。奇ク誌上でも和装緊縛の記事は見かけますがきわめて少なく、誠に残念でなりません。どうか、私ども少数派の振袖マニアのために、今後もすばらしい作品を発表して下さるようお願いいたします。

奇ク誌におかれても、せっかくグラフページも復活したことですし、せめて新年号など着物シーズンには振袖責めの緊縛写真を見せていただきたいものです。

山本様には、いろいろお伝えしたいことがありますが、余り長くなりますので、またの機会にさせて頂きます。

「夫婦交換プレイ」に耽溺した「SM夫婦」の告白

——佐　藤　真　由　夫——

奇ク愛読の皆様、今日は。皆様のお名前を誌上で拝見させていただき、いつも勇気づけられ倒錯という文字ですら、甘美なものに思える私です。

先ず私たちが夫婦交換という事実を知ったのは、過去十二、三年前だったと記憶しております。当時、「実話雑誌」なる月刊誌の巻末に文通欄があり、「夫婦交換」「若いツバメの交際」「異常プレイ交際」「レズ希望」など多種多様に出ておりました。

早速、妻の名前で投稿しましたところ、「レズ趣味のお嬢さんや奥様から」「露出プレイ希望の男性諸氏から」「夫婦交換ご希望の奥様や御主人様から」等、約二百通のお便りをいただきました。素敵なプレイフォトを同封して下さる方も多数あり、未経験の私たちには、思いも寄らぬ倒錯の世界の幕明けに、凄い刺戟を、受けました。

とりあえず神戸市のK夫人と姫路市のM夫妻にお返事を書きましたが、投函する決心がなかなかつかず、二週間ばかり机の上に置いて思案しました。やっと勇気を出して投函。すぐ御返事をいただき開封。私たちに甘く、ささやきかけるような、幻の使者から便りのようで、高鳴る胸を押えて読み、「一度お会いしてみよう」と二人で決心しました。

その夜からは妻も凄い乱れようで、毎夜毎夜、愛し合いました。新婚間もない最愛の妻が他人に抱かれるなんて——、全裸にされて弄ばれるなんて——。想像すればするほど興奮してしまう自分が不思議でなりません。

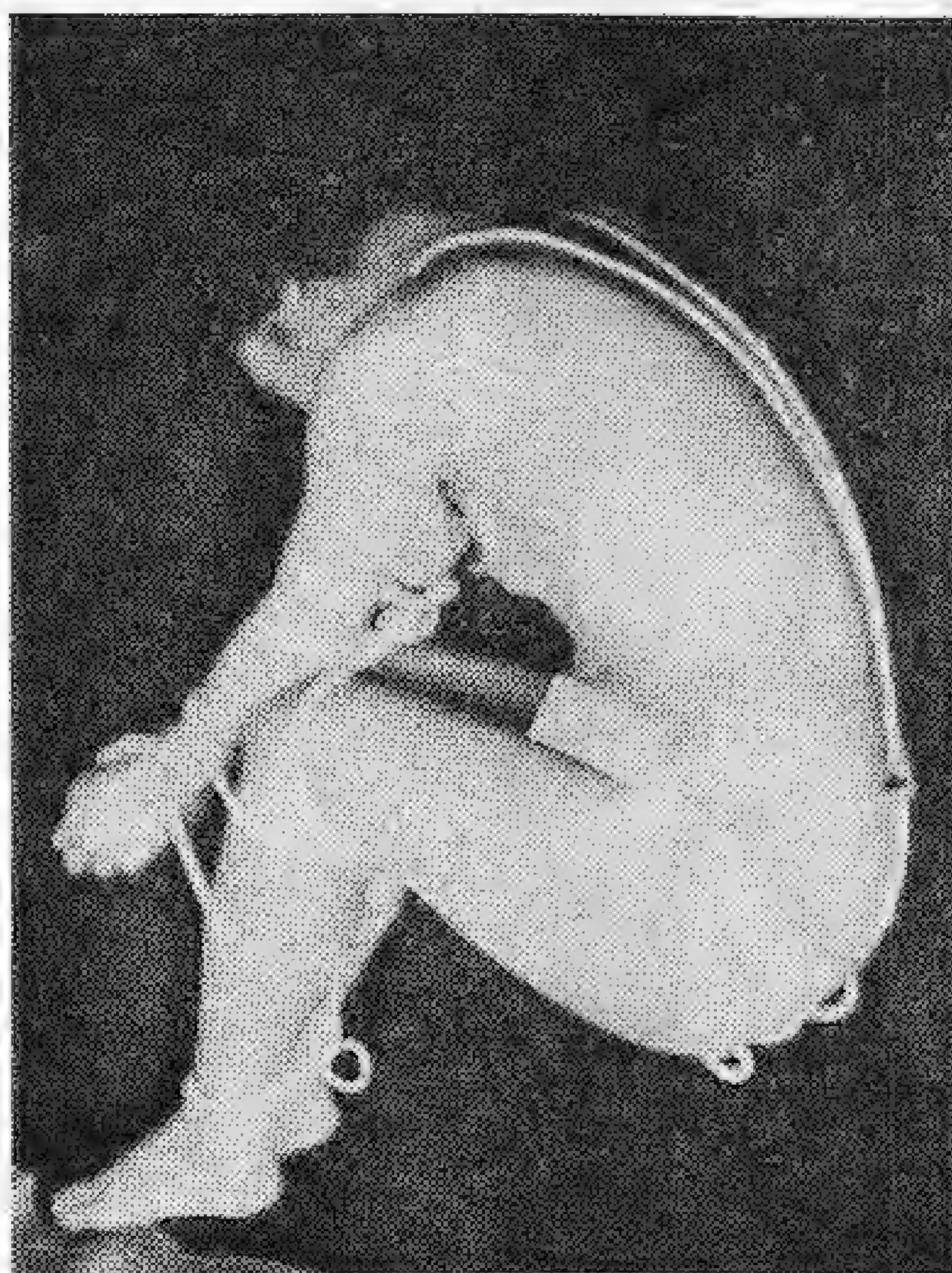
妻も、夫の目の前で他の男に素肌を見せる——、そして犯される——。そんな気持が入り乱れて尚一層、興奮の世界に引き込まれるのでしょう。忘れもしない結婚して、まだ一年も経っていない頃でした。姫路市にある山陽百貨店前で待ち合わせました。勿論、何度も文通の上、この人なら信用出来そうだと決心した後のことです。お互いに会って四人で近くの喫茶店へ——。

私たちが、あまりにも子供っぽいのには大変驚かれたとの事でした。私は二十五才、妻は二十三才でした。ご主人は、「こんな若い子が抱けるとは——」と内心、嬉しく思われたそうですし、また四十近い奥様は、私のような青年とセックス出来るとは——と、ほくほくされたそうです。その日以来、変形セックスプレイに魅せられた私たちでした。

また、レズ趣味の三十六才の奥様とも神戸市の「ホテル香港」でお会いし、私を無視した激しいレズプレイが私の眼前で展開されたこともありました。今思い出しても胸の高鳴りを覚えるほどの凄い

「夫婦交換」プレイを夢見て

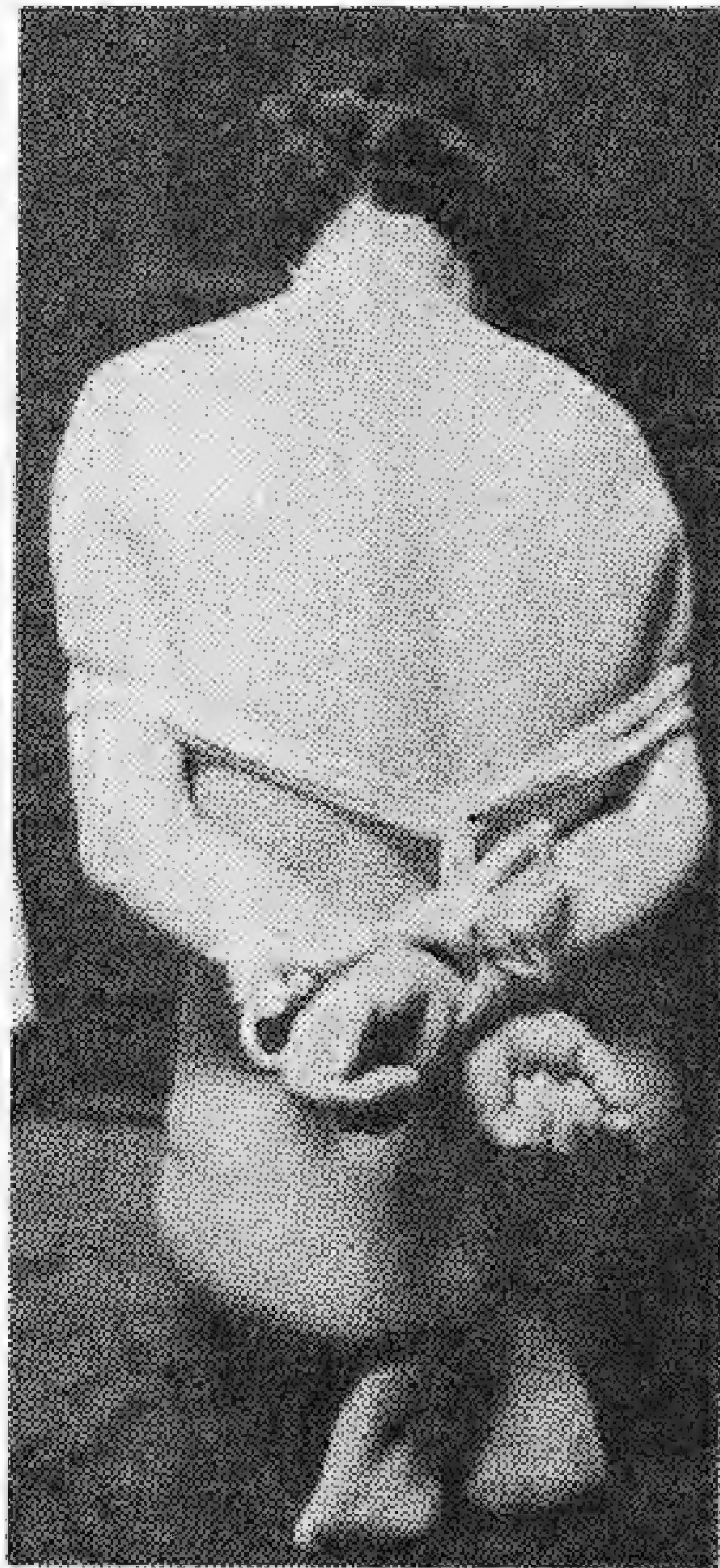
——土　田　純——



編集部御一同様、奇ク愛読者の皆様、お元気ですか。ひさし振りに、投稿させて頂きます。毎月、＜奇クサロン＞楽しく愛読させて頂いております。最近は、あたらしい愛好者が次々と名乗り出られ又、文通、交換プレイ希望者が多くなってきました。私もその中の一人として喜ばしいかぎりです。

私達夫婦は現在、個人的に紀川正信氏御夫妻と交際させて頂いておりますが、紀川氏のお許しがあれば、他の御夫婦とも文通交際、出来れば、夫婦交換プレイも実現したいものだと、ひそかに夢見ております。

私達夫婦は軽い縛りと羞恥責めで楽しんでおりますが、これからも先輩皆様の御指導をお願いして一層楽しいSMプレイと夫婦生活を過ごしたいと思っております。拙い作品ですが同封しましたので御掲載下されば幸せです。



夜明けのマゾうた

北川まりこ

緊縛の裸身を鞭で追われつつ
素足に冷たし朝露のみち

○

明けきらぬ河原の石に佇みて
見降ろす腿のムチ痕ぞ美し

○

夜を徹し悶え狂いし牝ハダを
潔めてこいと川中に追わるる

○

瀬の水の速き流れに足とられ
もろくも倒る後手の身ゆえに

○

脛を噛む小石を耐えるわが膝に
ぐいと喰い込み揺する下駄の歯

○

流木に開股の足首縛られて
朝ひぐらしの嘲りを聴く

○

わが裸身花瓶代りに活けられし
花もはじらう河原撫子

○

啼泣と悲鳴に乱れし朝モヤは
縄にくびれしハダに冷たし

○

あさましく悶えてくねる後手の
わが身を嘲うや明け鴉のこえ

○

羞しき緊縛裸身に朝日浴び
とどめの責めにのたうちて哭く

興奮の連続でした。私の妻を、まるで赤ん坊の様に抱き、乳房をふくませ両手を駆使して夢中にさせ妻自らがK夫人の上に乗って動作するほどまでに妻を飼育したK夫人。

その後、今日に至る迄、一年に一回乃至二回、ご夫婦とお付き合いして夫婦交換による四人プレイを楽しんでおります。最近になって奇クの浣腸プレイなどの羞恥責めに興味を持ち、妻にも試みてみましたが、正直申しまして浣腸がこんなに酔えるものだとは思ってもみませんでした。

奇ク十月号の豊中市吉田礼一さんと意見が、ちょっぴり共通する点がある私。異なっている点は、私は女性には人の倍以上も興味がありながら、女性としても扱われてみたい事です。その為の手段として特に女性の下着に興味を持ち身に付けて人に見られたい心境なのです。

それで自分の露出好みを満足させたいばかりに妻を口説き、深夜の公園の芝生の上で夜露に濡れながら全裸プレイを実行した事もあります。以上の様な私たち。痛みを覚えず傷付かぬSMプレイを指導して下さる御夫婦とお知り合いになりたくてペンをとりました。

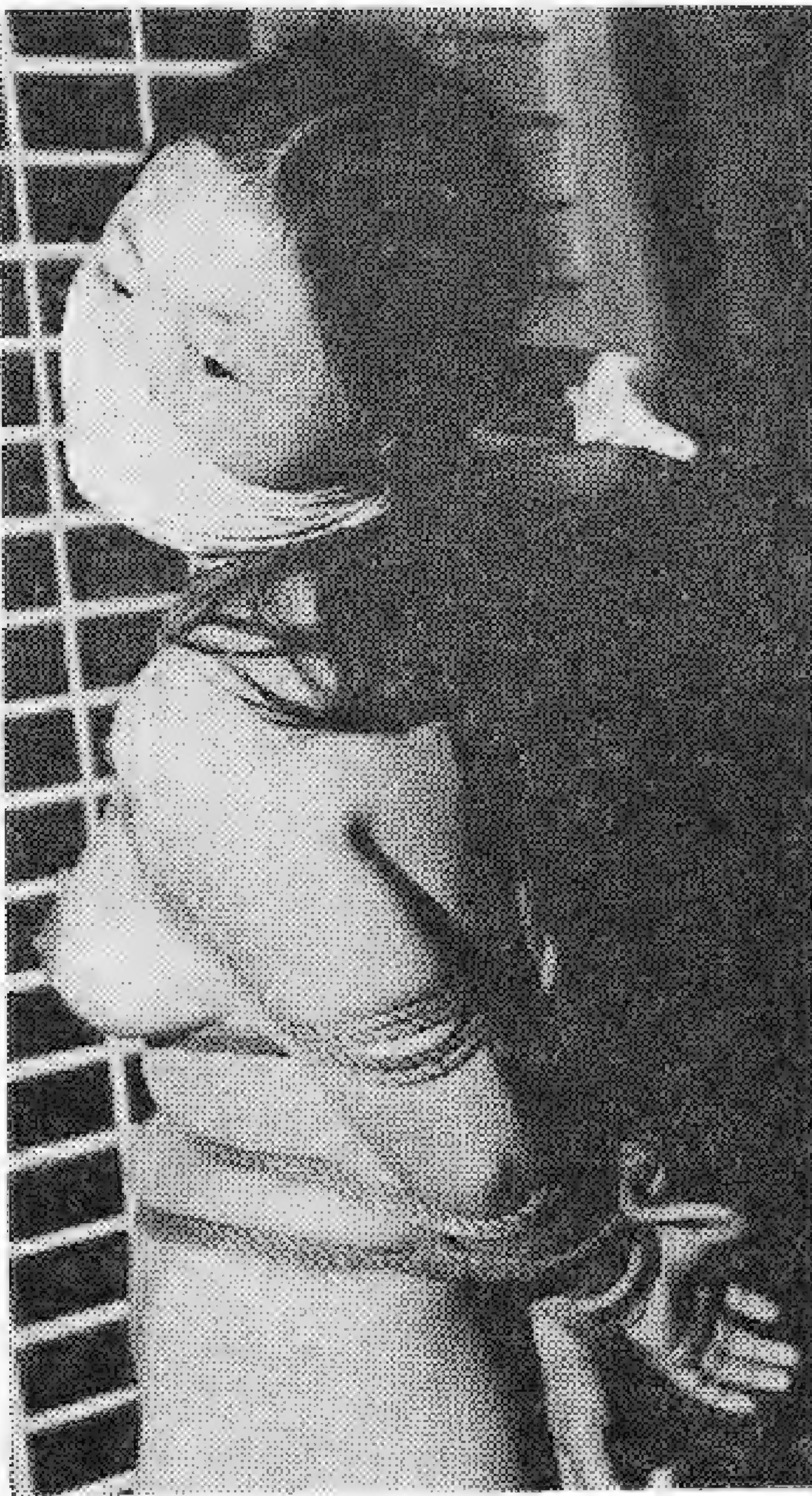
最初は軽く「夫婦交換」の友としてお付合いを始め、お互いに信頼し合えるようになりましたら、奥様と妻だけの会話（電話とか、お互いの自宅訪問）の中から、SMの甘味を説いて下されば妻も目覚める事でしょう。

神戸市の早坂信治様御夫妻なら距離的にも近く、御指導願えるのでは——と、勝手な想像をしております。私たち夫婦と同様に、これから実行してゆきたいと希望しておられる皆様方。励まし合い教え合い、最終的には夫婦和合、家庭円満を願う者同志が手を取り合ってゆきたいと思います。

（加古川市・SM夫婦）

四人のマゾ女性へ書を呈す

田谷光弓



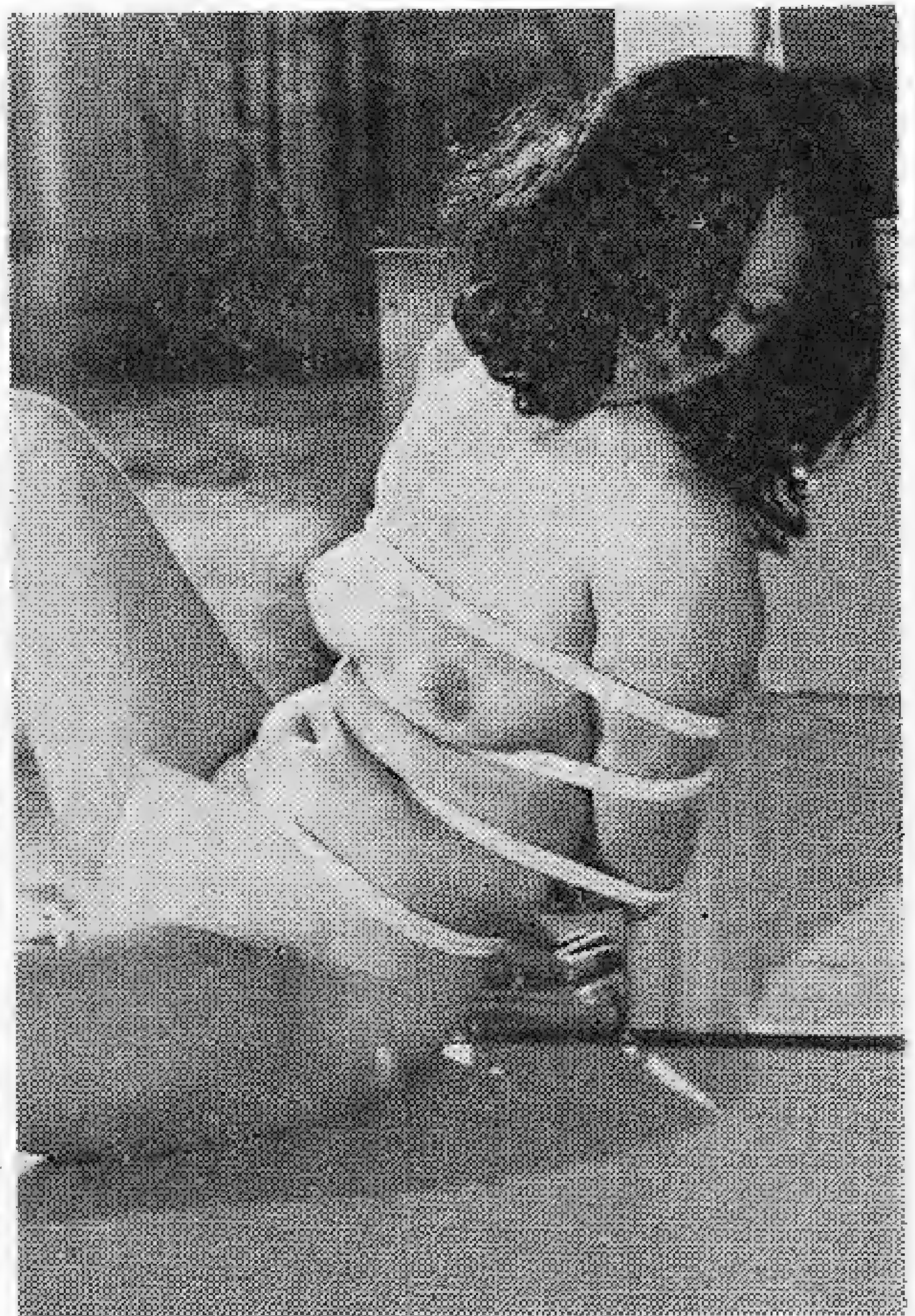
高村浩子さん。

貴女はファンタスイックな性向ですね。私も空想する事は大好きです。私は奇クに投稿するすべてのS男性を凌駕して、貴女を攫って行きたい。浩子さんの肉体も精神もマゾ化の一途を辿っている。それに言葉の責めを望んでいるようだ。では、貴女の羞恥のマゾ心を掻き立てるためのＳＭプレイを試み様と思う。

「おいマゾ豚、浩子。お前も奴隷として扱われたいのなら、倨傲は許さない。私の前に跪いてフェラチオの奉仕をしろ」

今度は場面が変わり、貴女は後手に縛られ蒲団の上にごろごろと足蹴にされ足で乳房を踏まれ乳首を足の指の間に挟まれて肉の喜びのために呻吟する。それから豊満なマゾヒップを摩られて悦虐に欷歔するであろう。その後、開股縛りにしてエレガンスなマゾの泉を凌辱する。もうそれだけでマゾの牝豚浩子は、えも言われぬ陶酔が五体に、まるで漣が渡る様な痺れを味わうのである。

次は待望の浣腸責めを、たっぷりと御馳走してあげるよ。その時にも、勿論言葉の責めを加味してマゾの醍醐味を語ってもらう。



笠井奈保子さん。

貴女の如何にも肉感的なマゾ女体に、私は憧憬の念を抱かざるを得ない。奈保子の可愛いいマゾヒップを鞭打って見たい。きっと貴女は鋭い悲鳴を上げるだろう。しかし、雁字搦目の肉塊には、憐憫の情などはない。ただの豚肉と同じだ。

徹底的に責めて、白い柔軟な肉の起伏を赤く染め上げたい。また肉に弾ける鞭の音や猿轡から洩れる甘苦しい、くぐもりの声をテープレコーダーに録音して、その後の羞恥責めや浣腸責めに利用し、効果を一層、高めることにする。

それから鼻責めをする。臭いの責めとして汚れたパンティを嗅がせたり、酢責めをする。ゴム手袋の一種独特な甘酸っぱい臭いもまた、貴女に馨しい思い出を残すことだろう。但し上記の物に合わせて香りの良い化粧水をミックスさせれば、もっと貴女を恣まに玩弄する事が出来る。最後に、ローソク責めで失神させて、総仕上げである。



前田真知子さん。

貴女の肉体は、股間縛りにして犬の首輪を嵌めさせ、鎖で引きながら部屋の中を一周させて、色々な犬のポーズをとらせ、自分が牝犬であることを自覚させたい。

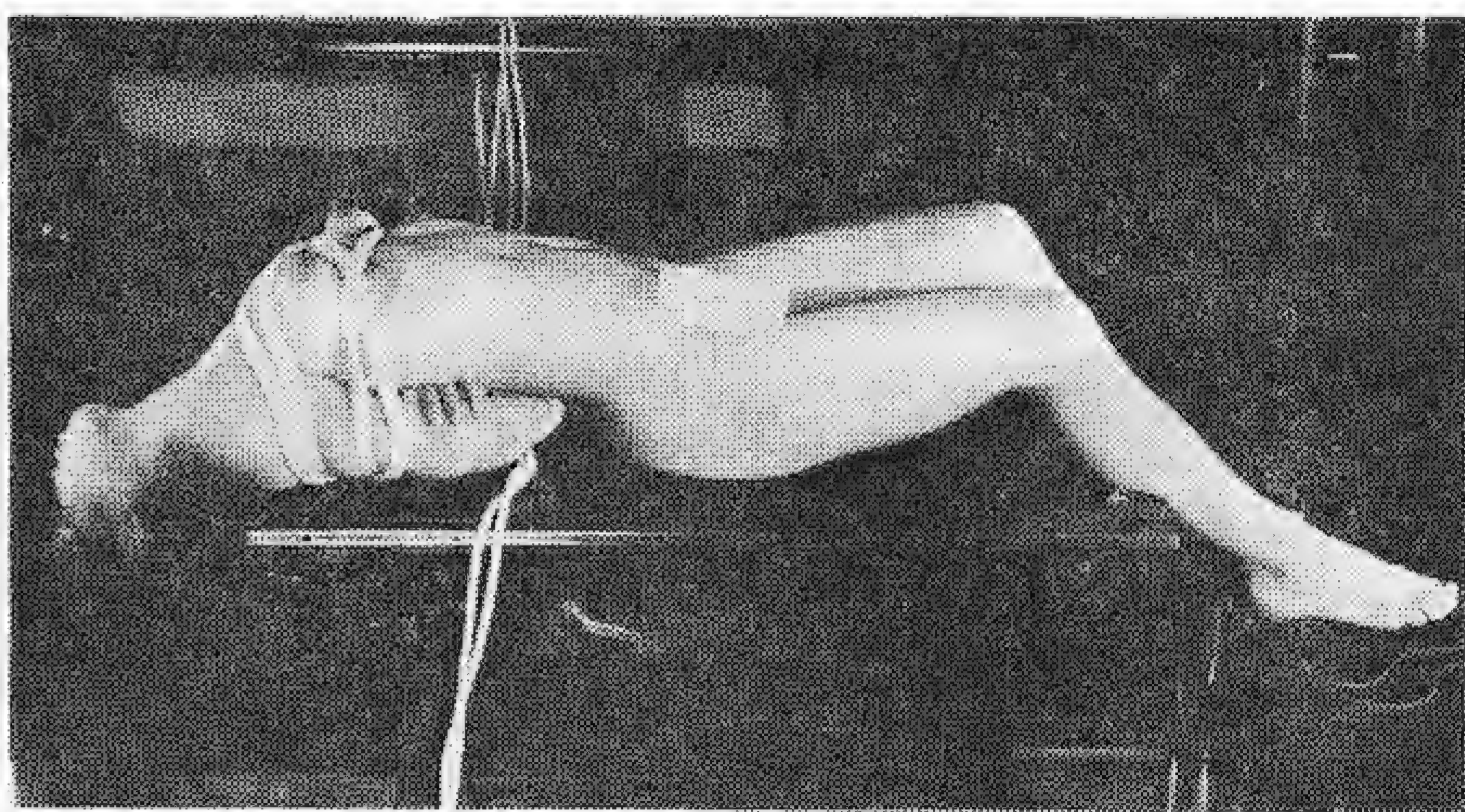
従順でない時は、容赦なくマジックでマゾと書いたマゾヒップにバンドの鞭が炸烈する。それを執拗なカメラ乃至は8ミリで、あます所なく追う。

貴女の怜悧なプロフィルが苦痛に歪む。しかし貴女の円な瞳は煌々としてマゾの喜びを歴然と露呈してくる。そして又、すぐに次の責め手が貴女の柔肌に伸びる。羞恥の極みのポーズを命令され、もし、それを拒み、逡巡すれば、当然の様に鞭が唸る。そこには、貴女の矜持も虚栄心ももはやない。あるのは、被虐に泣くマゾの喜悦だけである。

鈴木千鶴子さん。

貴女は風呂場で汚辱し、嬲る。

浣腸責めを施し、窮極まで耐えさせ、脆弱なアヌスを鍛えるために、濡れタオルで思いきり、お尻を叩いて飼育する。そして遂に排泄することを強要し、その瞬間、醸し出す貴女のマゾの喜びに打ち震えた表情をカメラに納める。



また良く締まるゴムのロープで貴女のマゾ女体を雁字搦目に緊縛し、茹で蛸の様に赤くなるまで、どっぷりと湯に漬ける。

その後は、優しく労わり悶絶するまでカーレスしてやりたい。何か貴女に対して助手を募っている様ですが、私は大学で柔道と空手を嗜んでいます。ですから、彼女を吊り責めなどにする時は便利だと思います。力には自信があります。それに塚本先生に色々な縛り方を教授してもらいたいのです。よろしく、お願いします。

☆

何か陰惨なことばかり綿々と綴って来ましたが、あまり残酷過ぎる箇所は拘泥しないでいただきたい。それでは、ちょっとユーモラスに千人の女性からの返事を期待して、『返事を出すのなら出すのだし、出さないのなら出さないのだし、どちらか二つにしろよ」失礼しました。

支離滅裂なこの短文を理解されたら、すぐに返事を出して下さい。では吉報を待っています。

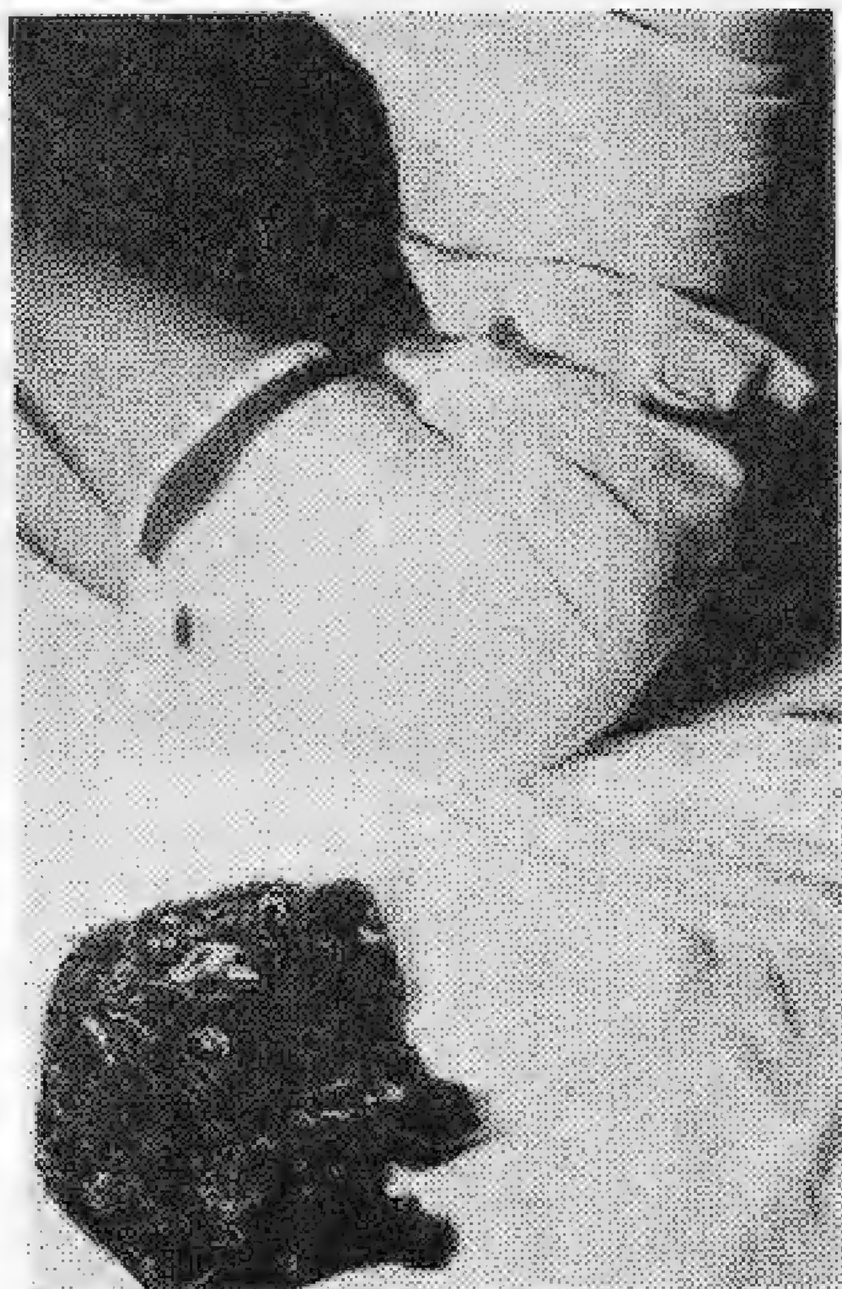
（サド＋オプティミストより）

『日出ずる処のサドプリンスより日没する処のM女性に書を致す』

浣腸とゴムとおしめ

ボクのプレイ

仁戸せんじ



「さあ、プレイの用意が、できましてよ」

三十ccのガラス浣腸器。五十パーセントのグリセリン液をたっぷり。ふとんの上に敷かれた広いビニール・シーツ。

「一階のトイレまでは、走っても間に合わないかもしれないので、オムツカバーも用意しましたわ。念のため、カバーの上にゴムズロースも穿きましょうね。その上からもう一枚、女学生のブルマーを重ねると大丈夫ですよ。さあ、横になって」

○

「パンティを、すこし下げて。そうそう。いいこと?

お腹の力をぬくのよ。どう? 浣腸器の液は減っていってるわ。注入されるの、わかるでしょう?」

○

「まだ続けるの? これで三本目よ。がまんできるかしら。いつかみたいに、そのまま洩らしちゃっ



ては駄目よ。いいの? じゃあ、しっかりこらえるのよ」

○

「フフフ、だいぶ効いてきたようね。さあ、オシメしましょうね。三枚ぐらい重ねて、カバーを穿けば大丈夫で…ええ? 洩れそうだって? まだ駄目ッ!」

○

「さあ、これでボタンは皆とまったわ。ずいぶん、ゴムが喰いこんでるけど、痛い? え? 中のほうが痛いって? そりゃ、九十ccのグリセリン液だものねえ。でも、これから十分間はがまんしなくちゃあ……何? 粗相しそうって? フ



ッフフ、この人ったら。赤ちゃんみたいに、オシメの中にやっちゃうの? がまんしなさいッ! あらら、少し臭うわ。洩らしちゃっ



たの？　まあいやだ」

○

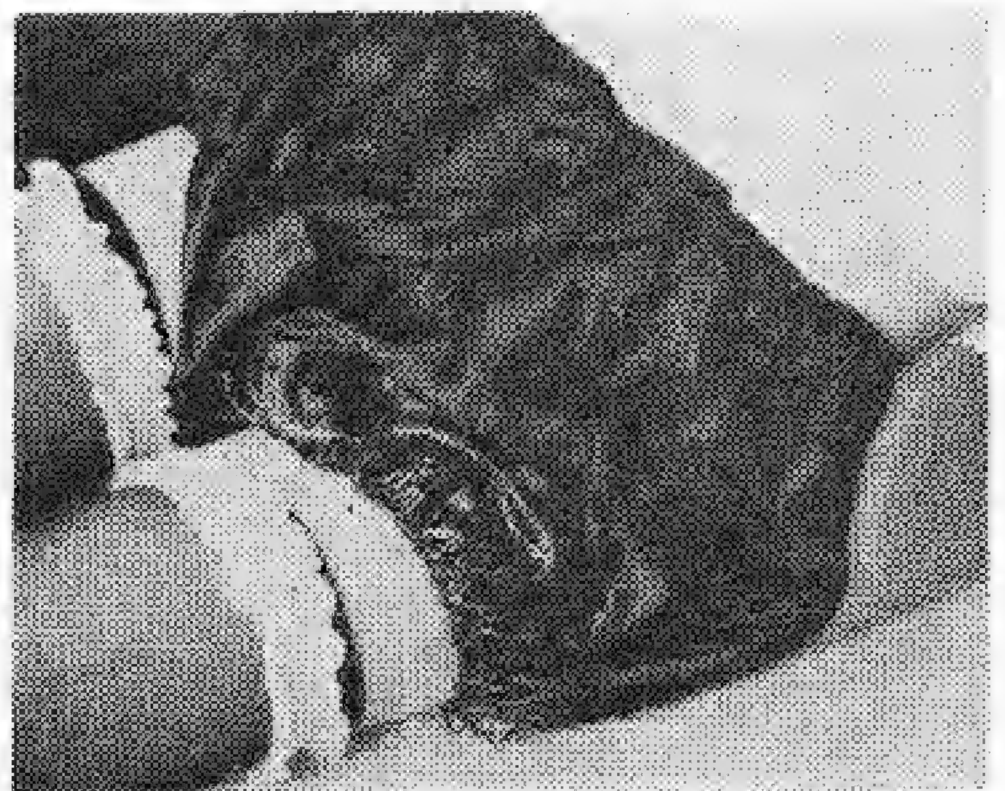
「さあ、早くこの黒いゴムズロースを重ね着しなさい。裾口のゴムが強いから、ピッチリと太もものところで締まって、こぼれることはないと思うけど……なにをそんなにモジモジするのよ？　え？　おしっこも出そうだって？　いやだわ、このひと。駄目ッ！　おしっこはこぼれるわ」

○

「ゴムズロースを穿いたら、こんどはブルマーよ。ええッ？　駄目ったら駄目よッ！　いくら苦しくったって、時間までは、がまんするのッ！　えッ許してくれって？　いけませんッ！　もう少し……あらッ、まあ呆れた。ブルマーまでもう滲みでてるじゃない。ダメなひとだわねえ」

○

「まあまあ、これは大変！　大洪水じゃない。何もかもビショビショよ。お洗たくがタイヘンだわ。ほんとに、こらえ性がないんだから。今度は、栓も用意しとかなくっちゃあねえ」



おしめカバーは希望の匂い

羽路四郎

〃おしめカバー〃……私はこの言葉を絶えず忘れることはなく、それの持つ意味に、何か、純粋なものを感じます。私は二十一才の青年ですが、おしめカバーとは、私に、純粋な若者を連想させてくれるのです。

〃おしめカバー〃イコール〃赤ちゃん〃の連想から、退行現象を起こしたこともありますが、本来、おしめカバーの意味するところは赤ちゃん連想ではなく、かつて、ルース・ベネラグト女史が分析したとおり〃恥意識〃なのです。日本人の意識そのものです。

日本人は、常に地位と役割というものに強く反応しますが、それは、今でもまだ基礎社会的人間関係が通用しているところが多いからです。終身雇用制の示している姿こそ、地位と役割に対する観念が健在である証明だと思います。

〃恥意識〃……もの心のついた子供にとって、おしめカバーを身につけていることは、日本人の子供なら、恥かしく思う習慣を植えつけられています。限りなく恥かしいことなのです。

この〃恥かしさ〃そのものが、〃恥かしいという快感〃なのであって、自身で気付くかどうかの違いはあっても、結局は「恥かしかったからこそ忘れることが出来ない」というのが〃おしめカバー〃だと思います。

私は、おしめカバーを身につけた自分を想像して、何度、自己の純粋さを思ったことでしょうか。

〃おしめカバー〃という文字を書くことさえ、どうしても、ためらってしまうほど、恥かしく感じることだったのです。

でも、今は違います。

私にとってのおしめカバーは、生きるということの甘味です。人間としての生活の中の一つの余裕とでもいえましょうか。

私のおしめカバーには、赤ちゃん的な乳臭さはなく、青年の若さと希望の象徴としての匂いがあるのです。

私には、おしめカバーをマスコットにし得る人間は、人間的に余裕のある人間になり得ると思えてなりませんが、実際に、おしめカバーを身につける必要はないと思います。恥かしさという観念が失われない限り……。



＜第103回＞　辻村　隆

かつて、残酷ショウで、我々同好者の眼を愉しませてくれた、秋山美智夫・ローズ秋山夫妻が、よみうりテレビの、イレブンPM番組『サド侯爵もびっくり』に、私と一緒に出演したのは、恰度、三年前の四十四年十月廿八日の夜であったが、その翌年の二月頃、ショウの出演を打ち切ったあと、ひょっこり私宅を訪れ、二泊ばかりしていって、二夜とも、憑かれたような、激しいプライベートのSMプレイに耽溺し、そのことは、SMカメラ・ハント、四十五年五月号の『深夜の舞踏会』に、書いた通りであった。

あの夜を最後に、彼等夫妻は、突如として日本から姿を消し、西欧への放浪の旅に、出たのであった。その唐突な行動に驚いたが、今にして思えば、近頃流行りの、ディスカバージャパンの、先取りでもあった。

それ以来、外地での、秋山夫妻の消息は、杳として知れず、四十五年の夏の終わり頃、パリから届いた簡単な絵葉書には、

（哲学者マルキ・ド・サドの、人間の持つ、最も華麗なる美と、大海のような大きな愛と、炎の如き何ものをも焼き尽す嗜虐の結晶を追求し、日夜苦悩しています）

と、謎めいた一節をしるしてあっただけで、懼らくは、SMショウの行き詰まりを、打開すべく、彼等は彼等なりに、必死にSMの真髄を探究しているかのようであった。

新しきもの、真髄を求めて、外地を彷徨する秋山夫妻のことも、めまぐるしくエスカレートしてゆくポルノ攻勢で、いつしか世人からも忘れられようとし、この私ですら、既に遠い、過去の人のように思われ出した今頃になって、突然、思いもかけぬ、彼からの電話を受けとったのであった。

電話は大阪空港からであった。

彼は、長らくの御無沙汰を詫びたあと、今年の八月中旬、日本へ帰ってきたのだと告げた。それなら、どうしてすぐ連絡してくれなかったの？　と、一寸なじるようにいうと、長い不在中の、もろもろの雑事に追われてもいたのだが実は……と、言い難そうに告げたのは、夫人の出産の件であった。

外地を放浪中、妊娠には、かなり気を配っていたらしかったが、彼に言わせると、思わぬ不手際で夫人はみもごり、折から戒律の厳しい国で、人工中絶は出来ず、そのうちに、夫人のおなかは段々にせり出してくるし、アルバイトにしていた、会員制のSMクラブの夜のショウも出来なくなり、やむを得ず、その土地で出産したのであるが、子連れの旅は、夫婦にとっても、かなりの荷重となってしまった。

四十六年の四月初旬、夫人は女児を分娩したが、放浪の旅と、深夜のSMショウなどで、かなり弱っており、外地での産後の生活で遂々寝込んでしまい、夫人の体の恢復を待って、急拠帰国したということであった。

一旦はショウを断念するつもりであったが、秋山夫人の妹さんやお母さんが、幼児の面倒をみてくれることになり、SM探究が仇花になるのを憂慮していた夫妻も、やっと腹をきめて、再びSMの世界に返り咲くべく、東京、名古屋大阪各地の、ミュージック劇場を挨拶廻りし、これから、空路九州へ帰るというのであった。

久濶も叙したいし、しきりに来訪を奨めたが、やはり、預けてきた子供のことも気掛かりだし、夫人が、かなりの長い間、静養していたので、六キロも目方がふえて恥かしいということで、改めて再会を約したのであったが、各地の興業主も、秋山夫妻の再起を、双手を挙げて歓迎し、早々に話が纒って、ダイコーミュージックなどは、九周年記念興行で、十一月初旬よりの出演を要請したらしいが新しいものに賭ける、彼等の準備もあって、再起第一回公演は、大晦日の十二月三十一日から、正月十日までの正月特別興行で、華々しく、門出を祝うことにきまったのである。

場所は大阪市港区八幡屋宝町
大晃ビル内、ダイコーミュージック。

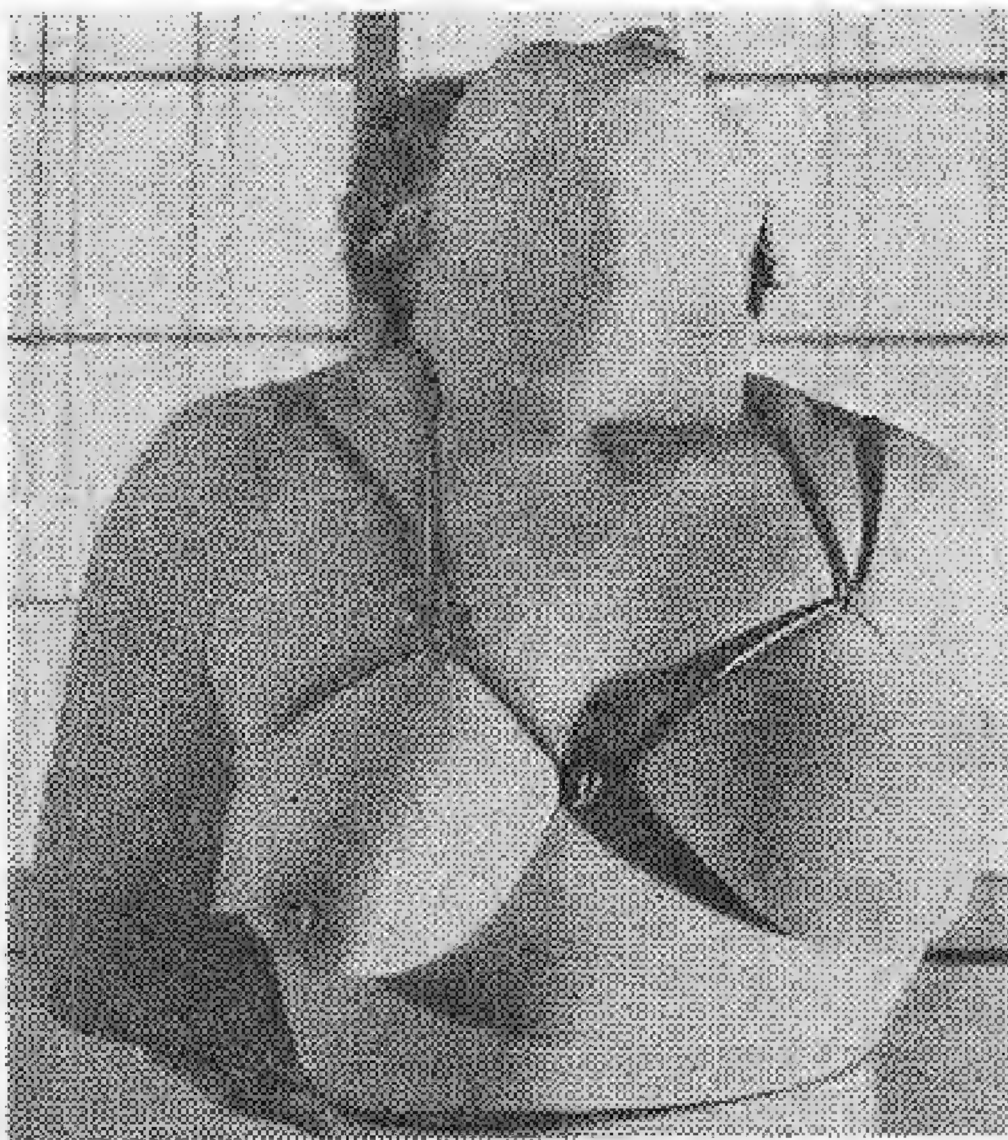
いずれ、打ち合わせがてら、再

び近日中に上阪するが、その節は必ず来訪すると約し、変貌したSMプレイを、是非みて欲しいということであった。

外地で何ものかを体得した、秋山夫妻の〝新残酷ショウ〟が、どのように変貌したかは、私もこの眼で確かめるまでは未知であるが必ずや、何かを掴んで、帰ってきたに違いない。

不死鳥は羽搏く——。

そんな感懐と期待で、電話を切ったのは、十月四日のことであった。


『偉大なるボイン』長野良子

× × ×

同好の友O氏が、若き美貌の細君をマダムに据えて、大阪ミナミの炭屋町にSMスナック『レイ』を開店したのは、去年の夏頃。

『レイ』の名は、彼女の名の〝玲子〟からとったのであるが、冴えたような美貌のマダムは、強烈なS性の持主で、SMスナックでありながら、自然、蝟集してくるメンバーは、M男性が多い。

大阪十三方面で、スナック『サニー』を経営する、刺青の山原清子も、マダムに納まっていたが、彼女のS性も、日と共に激しくなり、気が向くと『レイ』を訪れ、二人の美貌のマダムが、M男性達を、よってたかってコテンコテンに虐めつけ、随喜の涙を流させては、赤い溜飲を下げていた。

私も『レイ』や、『サニー』を数度、訪れたが、所詮はS性の私。どうもウマが合いかねて、余り足を運ばなくなっていた。

その『レイ』のマダム、美貌の玲子さんが、プレイの度が過ぎてか、入院してしまったものだからスナックの経営を、すべて彼女に任せ切っていたO氏は大慌てで、急拠、代理マダムを探したが、SM気のある、才気煥発の美貌のマダムなんて、そうそうおいそれとは、みつかるものではない。

何しろ、客とのSMプレイも、かなり寛大に許容していたO氏である。それというのも、彼女が、プレイのすべてをO氏に話し、それが刺激となって、この夫婦は結構、愉しいプレイをしていたからでもあった。

玲子さんが、SMプレイの度が過ぎて、病床（どんな病かは、O氏は秘めて語らないが……）に横たわる身となると、O氏の困惑するのも当然であった。

夫婦の仲の、デリケートな感情にまで触れることもないが、どうやら彼女の症状も、恢復に向かってきたようで、再び、あの妖艶な麗姿を『レイ』に見せる日も近いらしい。

それに力を得たのか、SMの探究心旺盛な彼は、いよいよ自身でSMスナックの経営に乗り出し、新たに第二の『レイ』をつくりあげ、十一月二日、開店の運びとなった。この種のスナックの経営は難かしいものであるが、彼の才覚が、それをうまく乗り切ってゆくことであろう。

場所は大阪市南区三津寺町、大阪センタービル地階——である。称して、『レイ・ナンバー2』電話は〇六—二一三—三一〇〇

謂わば『レイ』の二号店であるが、やはり愛する玲子夫人の名を冠するあたり、奔放、悍馬の如き冴えた美貌の、玲子さんのSM性に依存しているようである。

決してスナックのタイコもちをしているわけではないが、関西にも、こうしたSMスナックが出現したことを、同好者諸氏に御紹介したまでである。

他誌にも宣伝しているらしいがM男性の溜まり場になりそうである。

× × ×

そのO氏に誘われて、先日、東京のSMスナックの探訪に出掛けた。ここは知る人ぞ知る、新宿御苑のSMスナック〝K〟——。

SM週刊誌などの、かなり派手な広告振りに、嘸かしSM気分、横溢しているのかと思ったが、実態は案外に狭くて、さほどのこと

もない。度々の踏み込みで、流石のマダムもかなり控えめに、せざるを得なかったのであろう。客の殆どは、M紳士であり、スナックの女性達はS的女王を気取っていて、S性の私には、足を踏み入れた最初から、違和感を覚えて、どうも場違いの感じである。

Sの女王のマダムの足を、嬉しげに揉む紳士——。首輪を嵌められて鎖でつながれ、四つ這いになって、御馳走を頂戴し、蹴転がされている若いパリッとした青年。

そしてO氏の知り合いで、偶々来合わせていたK氏は尿瓶で、おいしそうにビールをのんでいた。

ノーマルな人士なら確かに異様と感じよう。しかし倒錯したM性に傾斜した人々にとっては、又となき憩いの場で、あったに違いない。刺青の山原清子もこの〝K〟のM紳士を求めて、時々上京しては、ここへ現われるらしいが、酔えば、女豹さながらに、嗜虐に荒れ狂う彼女に辟易して、流石のM紳士連も、山原清子には恐れをなして近寄らなくなったらしい。

私の目からみれば、ごく大人しいものだが、スナックとして営業する以上は、このあたりが限界なのではなかろうか。



K氏に奨められて、尿瓶に入ったビールを飲み乾す。微かに異臭を感じたが、さして気にもとめなかった。O氏が心得て、のみ乾す私のスナップを数枚、撮ってくれる。

「どうでした、ビールの味は？」

K氏は、愉しそうにきく。

「別に、どうってこともありませんが。容器がカワっているといった程度です」

「そうですか」

腑に落ちぬ風でK氏は釈然としない顔付きである。

「どうかしましたか？」と私。

「ええ、実はホラあそこの隅に坐っている若い娘が、いるでしょう。あの娘に頼んでネクタールを入れていただいたのですが——」

「へえ——そういえば……」

微かな異臭が、そうであったのかビールの味で、のみほせる程度だから、大して混入もしていないだろうが、私は慌てて口を押えた。

指さした薄暗いシートに、ネクタールの主の、若い娘が、六十年配の丸禿の紳士の頭をパチパチ叩きながら、両手をうしろへ捻じ上げ、その眼は、私達をみつめていた。

マダムが寄ってくる。

「余り書かないで下さいよ。又、手入れをうけると、うるさいですから……」

雑文書きと知ってか、チラリと眉をひそめて、つぶやく。彼女の背にした仕切りのカウンターには奇クを始め、SM雑誌が十数冊、散乱しており、ムチや、縄や手錠が、ものものしげに並べられてあった。

所詮、この程度で満足してゆく紳士は可愛いいものである。

それが、偏向する性癖の持主の憩いの場であれば、吾人又、何をかいわんやである。

「どうです参考になりましたか」

スナックを出ると、O氏がきいた。

「まあね。しかし私にとっては、さして面白くもありませんでしたネ。所詮はS性ですからネ」

「そうでしょう。私もS性なのです。唯、女性をSに仕立てた方がスナック経営はやり易い様です。私はSとMの、両面の女性を集めて、今のスナックのような陰湿な感じは、つくらない様にするつもりです。協力して下さいよ」

「出来ることはね」

「じゃあ、これから、フォトは撮れませんが、とびきりM性の女性を紹介しますよ」

O氏は、そういって、車に手を上げたのであった。

『SMプレイ夫婦交換』案に燃える

福岡　草二



愛読者の皆様、こんにちは。私も皆様と同じように、毎月奇クを愛読しております。とくにこの頃は、誌上に『夫婦プレイ』や『夫婦交換プレイ』の記事が沢山のっているので、大変うれしく思っております。と申しますのは、私も結婚当初から妻を縛って、夫婦のSMプレイの真似ごとのようなものをして楽しんでいるからです。毎月の奇クの誌面は私達夫婦にとっても大いに参考になり、喜んでおります。

最近号でも、早坂信治・郁子ご夫妻のようなすぐれた夫婦のSMプレイ実践者が現われて誌面を賑わしておりますが尊敬の念を抱くと共に羨望の念も禁じ得ません。

十一月号では〃夫婦交換〃プレイの提唱をされた加治進氏や十二月号の「ある夫婦プレイ実践者の願い」を書かれた鈴鹿山賊氏の記事がいたく私達を刺戟しました。

「一度、自分達も夫婦交換のSMプレイをやってみては？」という気持が、動いたのです。

私は妻以外の女性を縛ったことはありませんが、結婚以来、五年余り、妻を実験台として相当の責めの習練は、積んだつもりです。一度、他の女性を責めてみたいという願望と、もう一つは自分の愛する妻を他人の手で責めてもらいたいという悪魔的な願望とが重なって、ここに「夫婦交換SMプレイ」の希望が、強く私を責めたてることとなったわけです。

先日、妻とSMプレイをやっている時、その事を話したのです。最初、「そんなこと恥かしくって貴方以外の人となんか――」と言って、激しくイヤイヤをしていた妻ですが、私がしつこくすすめますと、とうとう先日は「貴方、浮気って、どんなことなの？ 私が他の男の人と浮気したって、貴方怒らない？」と言い出すようになったのです。どうやら妻も、私と同じように「夫婦交換のSMプレイ」に、興味を持ち出した模様です。

私は二十九才、妻は二十五才です。まだ子供がありませんので、気楽に何処へでも行けます。出来ることならば、ベテランの四十才から五十才ぐらいまでの、SMを愛好される御夫婦との交換を望んでいます。

妻に対しての責めは、私達の行なってきたプレイで、奇クにのっているようなことは殆ど全部といってよいほど試みておりますのでおそらく、どんなことでも耐えるだろうと思います。リングをはめていますからセックスの方も楽しませてやって下さい。妻は裸にすると、なかなか肉づきはよいのですが、洋服を着ると、着やせするたちです。

先日、夫婦交換の話を妻が承諾した日、二人共、いつになく激しく燃えあがり、今までに経験したことのないような楽しい一夜を過ごしました。実際にやらなくても話し合っただけでも、こんな燃えあがりようですから、本当に見ず知らずの他の御夫婦と、お互いに妻を交換してSMプレイに耽ったら、一体どんなことになるでしょうか。

十二月号を読んで
「浣腸」をおすすめします
柴田朝子

二十七才になる一流会社のOLです。書店で何気なく奇ク十二月号を手にとってひろい読みしていると、浣腸という字が目にとびこみ、あわてて買い、そそくさと店を出ました。その時の私の胸は早鐘のように波打ち、どのようにして代金四百円を払ったかも覚えていない位でした。早速アパートに帰り読んでいるうち、驚きと共になにか救われたような気持がしました。

といいますのは、私と同じ浣腸が好きな人が如何に多いことか、また、むしろ浣腸をエンジョイしている人が多いことが、わかったからです。

例えば、二四三頁の小杉千恵さんの、「千恵のハダカを見て下さい」のなかで、「最近浣腸の回数が多すぎて少しやせがめだっています……」や二四四頁の佐野みさ子さんの浣腸告白等々、むしろ私より遥かに若い方が、浣腸を喜々として使っておられる事に感心しました。

これでおわかりのように私は浣腸が大好きなのです。今より五、六年前、ひどい便秘に悩まされ、そのために、気分が悪いばかりではなく、顔にふきでものが出たりして困っていた時、友人の、便秘には浣腸が一番よいという何気ない一声で、おぼれる者はワラをもつかむのたとえの通り、なんとかして便秘をなおしたい一心から、いちじく浣腸で浣腸したのが始まりです。

当初はいちじく浣腸でよかったのですが、人づてにグリセリンがよくきく、或はドナンがよいと聞き、私の浣腸もだんだんエスカレートしていきました。お蔭さまで顔のふきでものはなくなり毎日浣腸しているので便秘はしません。むしろ、ぜい肉もとれたようでプロポーションもよくなったようです。ところが最近になり浣腸で肛門を責める快感を覚え更にアヌスをいたぶる喜びを知ったのです。

幸い私のアパートはバストイレ付きなので、どのような強烈な浣腸液を使ってギリギリまで耐えても、他人にのぞかれたり知られた



秋の夜のイメージ
『濾過装置？』虹　妖二

佐野みさ子とのSMデート
横須賀　S男

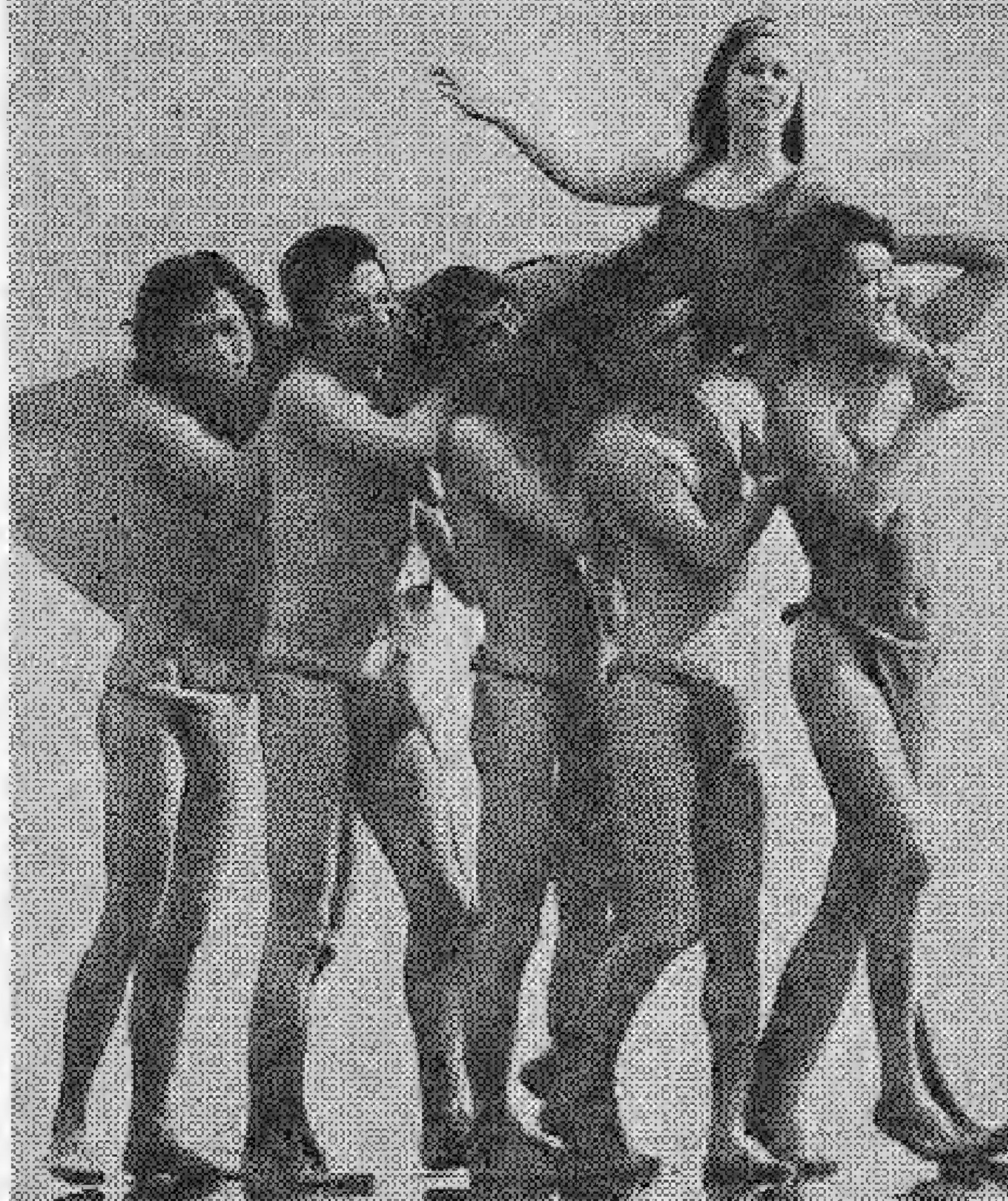
私の目前に、後手縛りのみさ子が正座している。奴隷宣言をさせた直後である。「よし」という返事の代りに、上下を締め上げられて突き出ている乳房を、グイッとひとひねり、してやる。

痛いのか嬉しいのか、みさ子が体をくねらせて呻くのを尻目に、手早く後手縛りを解くと、その縄をつきつけて「ブラジャー縛りはオレがしてやるから、股間縛りだけ自分でしておけ」と命じておいて、私は一風呂、浴びに行く。

浴室から出てくると、早速にみさ子の自縛した股間縄の点検をする。そして、私が縛るよりもずっと強い締まり具合に驚嘆するのだが、そんなことは表情に出さず、両乳房をくびって8字形に縄掛けしてやると、右の乳首にクリップを噛ませ、左の乳首に小さな鈴を縛りつけ、ブラウスと超ミニのス

りするような心配はありません。したがって浣腸する時は大胆になり、三面鏡を使って浣腸器のアヌスにはいり込む具合や、排泄する時のアヌスの模様を鏡で見ながらする事も出来、浣腸の楽しみもひとしおです。

十二月号を見て同好の方が予想以上に多いのに、今までの不安がいっぺんに晴れました。今の若い人が肥らないようにと食べたいものも食べず我慢しているのをみますと、何時もこのような人に浣腸する事をすすめたらよいのにと思うのです。私は肉でも、うなぎでも、おうどんでも、なんでも食べますが、浣腸のおかげで太りません。（身長一六四、体重四六、バスト八九、ウエスト六一、ヒップ九一）です。浣腸美容とはこの事かも知れません。中年太りでお困りの方、若い方でスタイルがよくなるよう心掛けている方。方法は簡単です。毎日一回浣腸する事です。私は自分の体験から、皆さんに、浣腸をおすすめします。



ふんどし美とポスター（2）

——国鉄の拒否に遭う——

岩手信夫

これも四国四県の観光課の合作品。国鉄の「ディスカバージャパン」用にと三百万円も投じて作ったのに、当の国鉄当局が拒否したと写真入りで報じたのが何と英字新聞「朝日イブニングニュース」である。（本年五月十一日号）

事情は知らないが考えさせる問題だと思って香川県庁に依頼して取寄せてみた次第。次回は興銀。

カートを着ることを命じる。外出をするためである。

歩きにくそうな足どりのみさ子を、後から追い立てるようにして繁華街まで行き、ピンク映画をやっている映画館のキップを買わせる。みさ子がためらうと、耳許に口を寄せて「ミニスカートを捲くるぞ」と、おどかしてやる。

席は一番後ろを選び、早速、ポケットから縄をとり出して、驚くみさ子を後手に縛り、両足をイスの脚にくくりつけると、ジワジワと太腿や乳房のいたぶりにとりかかる。ちょっとでも抗らうようなら、「このままにしてオレは帰るぞ」と、おどかす。

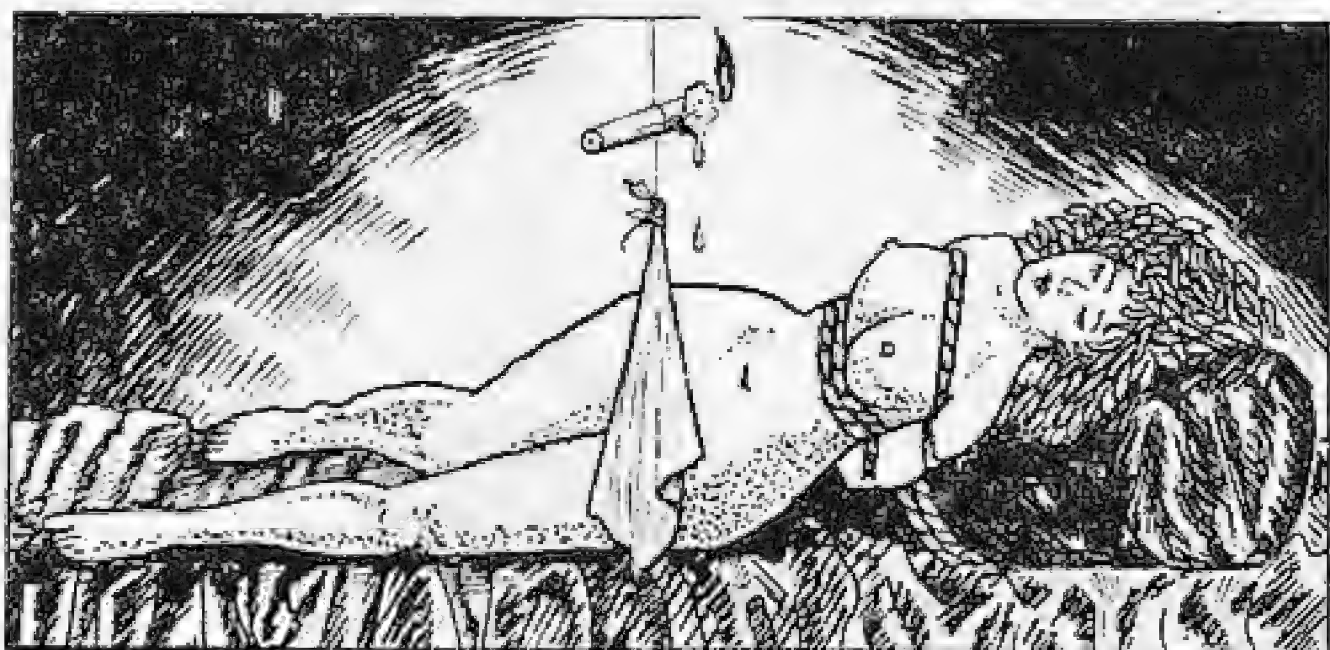
映画の中の縛りと責めシーンに合わせて、みさ子の肌をいたぶってから、何回か「このままにして置こう」といってみさ子をおどかして、ようやくイスから放してやり、映画館を出ると、今度は同伴喫茶に入る。

みさ子を壁際に坐らせて、ボーイに注文が済むとすぐに又、みさ子を後手縛りにする。注文品が届く時には私が抱くようにして、ボーイの目をごまかし、ボーイが去ると、後手のままのみさ子を私の膝に伏せさせて、股間縛りを解いてやるが、すぐにイチジク浣腸を三つばかりご馳走して、しっかりと栓をしてしまう。

みさ子が、もじもじ始めると壁に背中を押しつけるようにして乳房のクリップをはじき、腹を揉み上げてやる。左の乳首の鈴がチリンチリンとよい音を立てるのと呼応するように、みさ子の許しを乞う囁きが私の耳をくすぐる。

こんなことを夢想している私です。佐野みさ子さん。こんなデートは、いかがでしょうか。

イメージ画『迫る瞬間』　西　名鶴



劇画ブームに想う

ＳＭと劇画

バロン　影沼

ひと頃、劇画ブームとか、ＳＭブームとか言われていたけれど、最近は、これらが別々のものではなく、いわゆる劇画の中にＳＭシーンが展開してきたので驚くことがある。特に、私の好きな劇画家小島剛夕氏の作品中にも多くなってきたので、本当に世の中変わったと思う。

現在の小島氏は、いわゆる時代劇画の第一人者だと思うけれど、十年ぐらい前の、無名時代の小島氏の作品では、美しい抒情の世界が描き出され、作中のヒロインたる美女の運命は、愛するヒトのもとを去り、或は自らの手で、自らの命を断つという、悲恋ものが多かったようだ。それが今や、その可憐な美女達の運命は女郎屋の責め場に展開されるようになったのだから、まさに驚きであり、又、喜びでもあるのだ。映画化された有名な「子連れ狼」の中にも少し登場して、おや！　と思っていたら今度は、同じ原作者と組んで報知新聞に「忘八武士道」というタイトルで登場してきた。小島氏が梶原一騎の原作「斬殺者」を描いている＜漫画ゴラク＞の、毎号殆どにＳＭシーンがあるように、責められる美女の、素晴しい表情が期待できて楽しみだ。

現代的ハードボイルドの劇画家として有名な佐藤まさあき氏も、＜プレイコミック＞誌上の、「影男」シリーズでＳＭシーンを描いている。中でも「サバト」に出てきた責め具の描写には思わず唸らされ、心中で、この劇画家はＳではないかと思ったものである。

「影狩り」＜週刊ポスト＞を描いているさいとうたかお氏も、ＳＭシーンを多く採りいれている劇画家であるが、この人の描く〝責められる美女の表情〟も、なかなかに素晴しい。

これら有名で、又、実力のある劇画家たちが、競って展開して行くＳＭシーンは本当に楽しみである。しかし、私としては、このＳＭという特異な世界が、これらの劇画の一般化によって何か、ごく当たりまえのものになってしまいそうに思えて、なんとなく割り切れないものを感じてしまうのだ。

―プレイ雑記―

お引き回し

早　木　夢　二

拷問プレイの終わりは〝お引き回し〟で、しめくくる。

そんな時、私はよく、富田常雄の短篇「お馬」を思い出す。畳屋の隠居が中年のホステスを囲う。そして、その女を全裸にして、よつばいにさせ、自分も裸になって馬乗りになり、女の尻をピチャピチャと手で叩きながら、ハイドウドウと部屋中を乗り回す。

ところが、ある日、女を向こう向きに、よつんばいにして、老人が後ろから突進すると、女が命じられた通りヒヒーンといなないてはね上げた足が老人の急所に当たって、老人はそのまま死んでしまう、というハナシ。

しかし私は、どちらかといえば私が裸馬になる方が好きである。彼女だと、どうしても、ひ弱くてどっしり跨がった私を支えて、あちこちと這い回るのは、つらいようだ。だが、緊縛プレイの時、囚人になるのは彼女の方が多いのだから、私が裸馬になる率が多いことにもなる。

「女囚、早木慶子。その方の罪、浅からざるも、拷問に堪えかね、早々に白状致したる段、殊勝の至り。よって重き罪科に処すべきところ、情状酌量し、来る何月何日江戸市中、裸引き回しの上、鈴ガ森に於いてハリツケの刑に処す。ありがたく、お受けせい」

「ハイ。お処刑ありがたく、お受

け致します」

私は拷問プレイで汗ばんだ彼女の体を、きれいに拭き清め、かけ縄を点検し、ゆるんだ縄をしめ直す。新しい縄に打ち直した方がいいのだが、ここで余り時間をかけては、折角の感興に水をささないとも限らない。

よつん這いになった私の背に、彼女が遠慮もなく跨がる。

いつもながら、ずっしりした裸の女の重みを受けとめ、かけられている股間縄を裸の背に感じるととたんに私はたまらなく、やるせない気持になって、思わず、ぶるっと身をふるわせる。そして、ヒヒーンと馬らしく、いなないて見たくもなる。

「女囚」

「ハイ」

「その方、一世一代の晴れのお引き回し。本縄かけの素っ裸を、十分に見ていただくのだぞ」

「ハイ、一生懸命、相つとめますでございます」

私は、ゆるゆると動き始める。

「女囚、胸をはれ！」

「女囚、顔を上げろ！」

私は、お役人様でもある。背の上の彼女の様子をうかがって時々指示を与えなくてはならない。

彼女の体が重くなってくる。私の背中が、じっとりと湿って、彼女は「あっ」と呻くと体を、ずらせる。

鏡の前で私は動きを止めて、彼女の姿が鏡一ぱいに写るようにする。彼女は顔を上げて、じっくりと見入る。一糸まとわない全裸にきびしい菱縄を打たれ、後手高手小手に縛られて、下腹にかけられた菱形の縄は、ふっくらとした肌に、ぴっちり喰い込んで後に回されている。

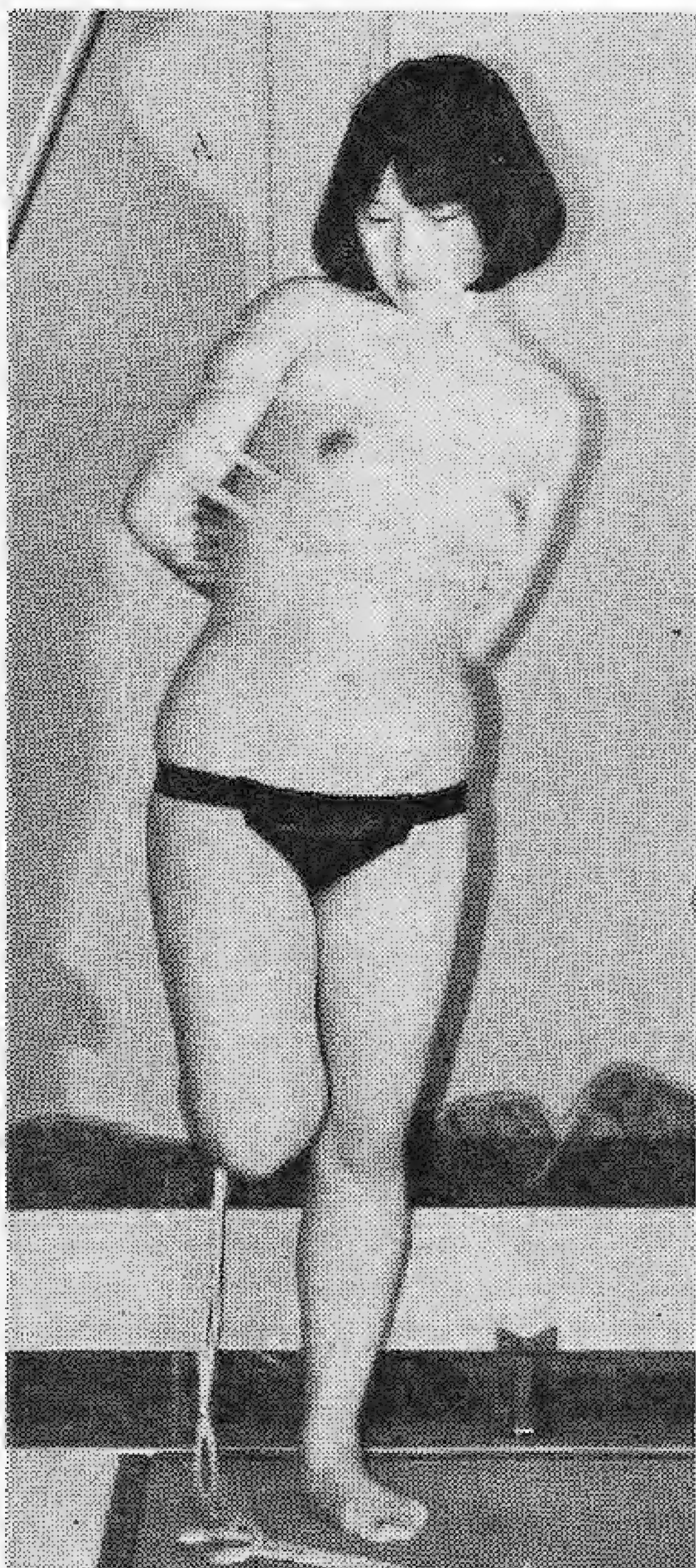
「女囚、お引き回しの味は、どうじゃ」

「ハイ、とても、いいお味でござります。こんな素晴しいお縄をいただいて、裸引き回しをお受けするなんて女囚冥利につきまする。お役人さま、厚く厚く、お礼申し上げます」

冥利につきるのは、彼女ばかりではあるまい。私の方こそ、菱縄マニアとしての冥利につきる。お引き回しが終わってから、富田常雄の小説のように、彼女を向こう向きに、よつん這いにして、後ろから突進などしては、興ざめというものであろう。

永遠のマゾの灯

大塚啓子



奇ク愛読の皆さん、長らくご無沙汰いたしました。一身上の都合で、心ならずも誌上で皆さんとお会いすることが出来ず、淋しく思っておりました。幸い、最近になって時間的にも余裕ができましたので、再び私の縛られた肢体を皆さんの前にお見せしたいと思い塚本様に連絡いたしました。

私の心のなかに絶えることなく燃えつづけておりましたマゾの灯を再びかきたてて美しく咲かせたいと願っております。愛読者の皆さんの温いお便りをいただけましたら幸せに存じます。

浣腸恋慕

ある日の散歩

菊地明彦

散歩しながら、ふと出来たのが「せんせい」の替え歌だった。

〈淡い浣腸知った日は
雨がしとしと降っていた
ママにかくれて浣腸の
悦び見つけて泣いていた
はたちの私が胸こがし
慕いつづけたその名前
浣腸、浣腸、それは浣腸

呟くように唄っていると、子供の頃のことが思い出されてきた。

あの日、私は医院で診察の番を待っていた。診察室には先に呼ばれたキレイな女の人が居るはずだった。その若い女の患者がまだ出て来ないのに、私の名前が呼ばれた。私が診察室に入ると、先生は隅の方で手を洗っているらしく、向こう向きになっていた。私は診察席に行こうとして、なんの気なしに間仕切りのカーテンつい立の裏がわをのぞいた。そしてその瞬間にハッとなったのであった。

そこには、あの若くキレイな女の人が、白いお尻をまる出しにされて、看護婦さんに抑えつけられるようにして浣腸されている光景があったのだった。

私は頭がカッカと燃えあがるようなウロタエを感じて、すぐに眼をそらしてしまったが、むっちりとした白いお尻が瞼の裏に灼きついていて、自分が受ける診察の時には、うわの空だった。

やがて、カーテンの向こう側で起こった独特のバクハツ音。思わずビクッとなった私の様子から、きっと先生は何かを察したに違いなかったことと思う。

この世の中に、こんなにも魅力的に感じられるものがあったのかという直感的なショックに、当時の私は呆然となったに違いない。あの時ほど、看護婦を羨ましく思ったことはないし、以後、浣腸という言葉と白いお尻の印象が切り離せないものとなったのだ。

そんな事を思い出しながら、散歩というより、フラフラと宙に浮いている感じで歩いていると、向こう側から来た着物姿の若い女性とすれ違った。私の意識は十数年をスッ飛ばして現在に戻った。そして、視線がその女性の後ろ姿、いや、そのお尻に集中した。

〝ああッ、あのお尻に浣腸をしてあげたいッ！〟

そう思った途端、診察台に横たわったお尻が頭の中いっぱいに浮かび上がった。艶々とした白さ。むっちりと柔らかそうな小山。私の手にある浣腸器には満々と石けん液が吸い上げられている。

女のお尻がイヤイヤをする。構わず浣腸器が襲いかかる。石けん液の目盛りがじりじりと下がってゆく。白い山がヒクヒク慄える。

美しい呻き声が哀訴に変わる。魅惑の小山が大きく揺れる。私の叱咤がとぶ。哀訴が悲鳴に近くなる。私に抑えつけられた小山が、柔らかさと、強じんな弾力と、滑らかな反発力を掌に、ぶち当てて大浪のように、うねり始める。

十分……十三分……十五分。大浪が津浪に変わり、そして、ついにバクハツ。まるで活火山の噴火のように……。

羞かしい終末までを私に観察された女性は、ホッと息がつけた時に、どんな表情で私を見るものだろうか？

キキーッ！　とブレーキの音がした。路地を曲がったとたんだ。目の前に車がいた。ドキッとした私に「フラフラすんなッ！」と怒声が、ぶち当てられた。運ちゃんの表情は鬼のようだった。

編集部だより

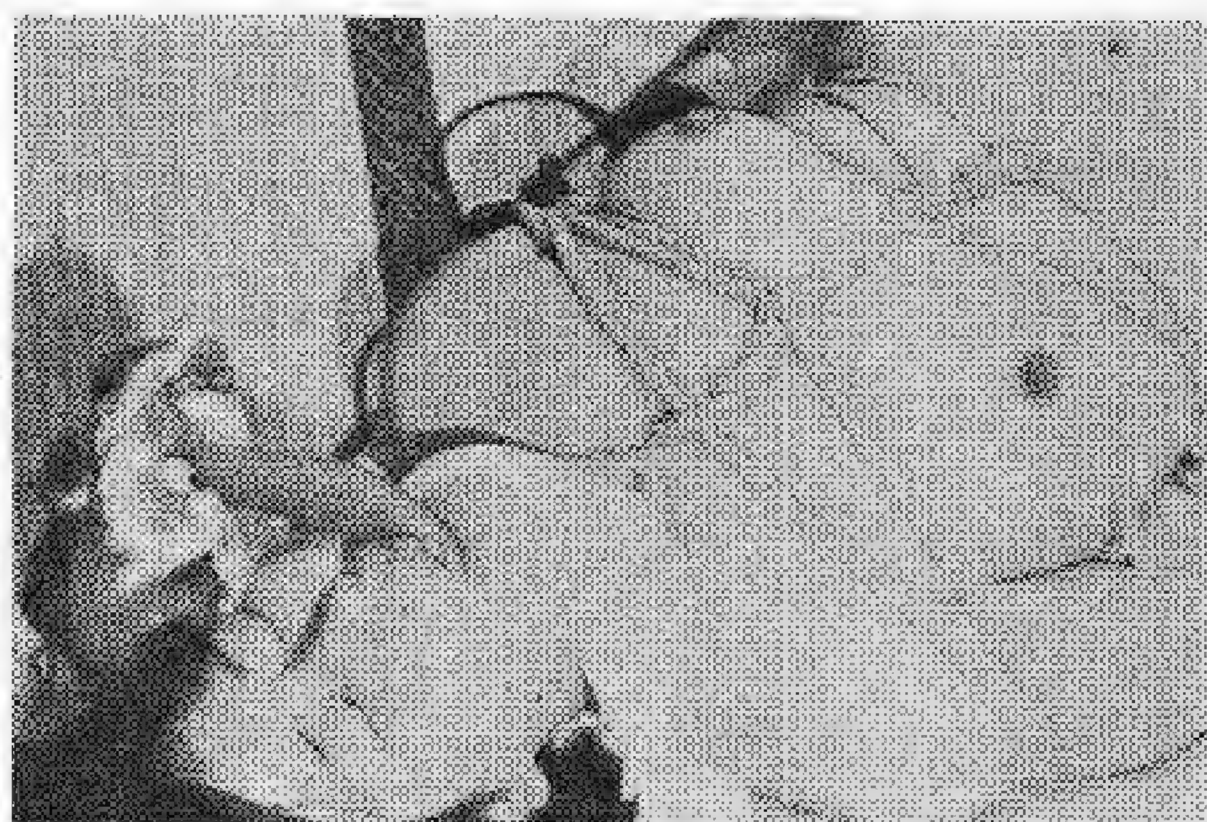
○12月号では〈告白〉の読者原稿を大幅にとりあげました。これは本誌の特色として大いに誌上を賑わしたいと考えておりますので、今後もドンドンお送り頂きたいと思います。『夫婦プレイ』の投稿は今月号で比較的、多く掲載しました。まだまだ未掲載の分がありますので徐々にお目に入れます。

○昭和30年頃から36年頃にかけてはSM雑誌といえば日本広しといえども本誌が唯一誌だけという状態で一入風当りも強く孤高を保っていましたが、昨今では雨後の筍のように続出してきて確かに稀少価値がなくなりました。そのかわり社会全般にSMというものが理解されてきたという点で、大いに意を強くしてよいでしょう。

○本誌も次号で愈々通刊三〇〇号を迎える事になりました。泡沫雑誌だとか三号雑誌だとか蔑んで見られるこの種の雑誌に於いて、よくもまあ、これだけ続いたものだと我ながら感心します。五年や六年は惰性で続けられるとしても四分の一世紀以上続けるということ

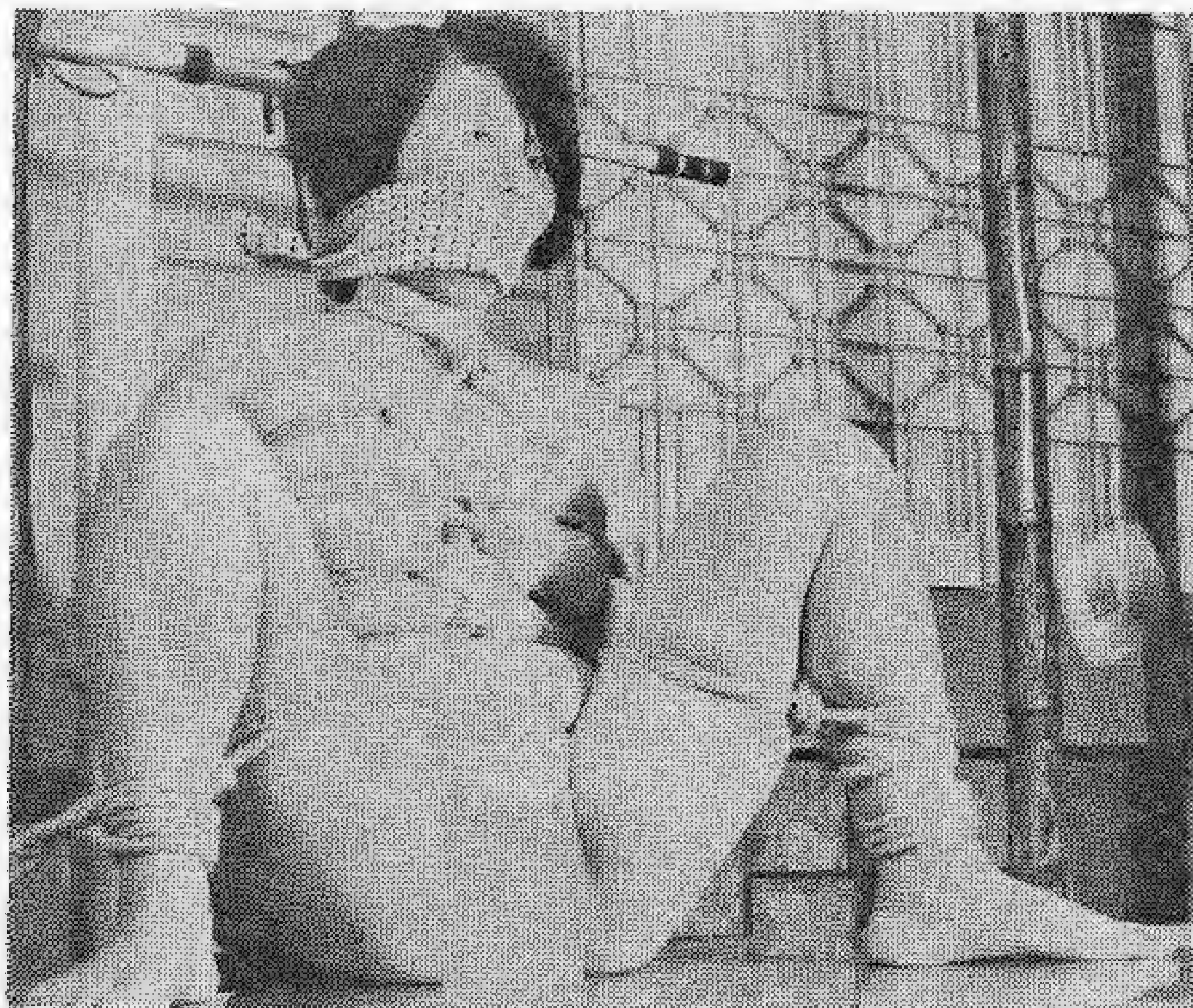
ＳＭ代理妻の交換

佐野　正



奇ク愛読者の皆さん、始めまして。私は佐野みさ子の主人の正です。これまでに、みさ子をロマン派生氏や辻村隆様にお貸ししてみさ子にプレイを楽しませてきました。そのありさまは奇ク誌上に発表されておりますので、皆さんはよく御存じの事と思います。十二月号のカメラハントには、『特訓プレイ妻』として、詳しく辻村様のペンで記載されています。

さてこのへんで、私の希望を申しますと、ＳＭ夫婦交換プレイをしてみたいのです。お互いにその妻を交換して全裸にして縛り上げて、バイブやローソクで責めたうえで、セックスプレーに入るという激しいものです。どなたか、この私に奥様をお貸し下さるお方はおられませんか。そのかわり、私もみさ子を無条件で、お貸しします。小さな子供がいるので一度に二人共、出かけるわけには参りませんが、もし今日みさ子をお貸しするとしますと、後日、私が奥様をお借りするというぐあいになります。東京に限ります。



は至難の業ではないでしょうか。

○本誌はいつも派手さを避けて地味な編集を続けて参りましたが、その真摯さを愛して下さるファンの方々が根強く支持して下さって本誌の基盤が固まり、今日の隆昌をもたらしたものと思います。読めば読むほど味の出てくる、捨て難い風格を持った雑誌に仕上げたいと常々念願しておりますが、これは急に心掛けても出来ない相談だということは、よく承知しております。一歩一歩、階段を昇るように地歩を築く考えでおります。

○編集部に対する通信が昨今は特に多くなっております。つとめてお返事を出すよう心掛けておりますが、なにしろ数が多いものですから誌上にて御承知頂けるものは出来るだけ、一括して御返事差し上げたいと思います。読者通信におきましては御遠慮なくお寄せ下さい。誌面の許す限り誌上に掲載させて頂きます。〈奇クサロン〉や読者通信に顔を出されることによって共通の広場に於ける意志の疎通を計ることが出来るのですから、先ず誌面を通じての交流を密にして下さることを切に希望いたします。それがまた愛読者誌友の交歓の早道だと考えます。

〔秘蔵版写真一掃分譲品〕

昭和四十年頃より四十二年頃にかけて天星社に於て分譲しておりましたSM資料写真は、その後分譲中止になっておりましたが、最近になって再開を強く要望されておりますので特に希望者に限り焼増をいたします。御注文の方には五日間位の予定で作成の上、早速御送付申上げます。

〈Mフォト〉

馬乗り女王様行状記　大手札四枚一組　花田沙登子　略号〈わふ〉　一〇〇〇円

両足の首絞め責め　大手札三枚一組　花田沙登子　略号〈わむ〉　八〇〇円

肩車の臀部に喘ぐ　大手札三枚一組　花田沙登子　略号〈わら〉　八〇〇円

女王様の臀臭をかがす　大手札二枚一組　花田沙登子　略号〈わけ〉　六〇〇円

足舐めの強制　大手札三枚一組　花田沙登子　略号〈わな〉　八〇〇円

女王様の牡犬調教　大手札八枚一組　花田沙登子　略号〈わね〉　一五〇〇円

〈入墨女賊拷問刑罰集〉

女賊仰向け木馬責め　大手札三枚一組　山原清子　略号〈よひ〉　五〇〇円

全裸の入墨女賊折檻　大手札三枚一組　山原清子　略号〈よせ〉　五〇〇円

入墨女笞打ち白洲糾問　大手札三枚一組　山原清子　略号〈よゆ〉　五〇〇円

ハリッケ女賊拷問　大手札三枚一組　山原清子　略号〈よめ〉　五〇〇円

凄絶エビ責め拷問　大手札三枚一組　山原清子　略号〈よす〉　五〇〇円

全裸の四つ這い木馬責　大手札三枚一組　山原清子　略号〈よも〉　五〇〇円

逆さ吊りのお仕置　大手札三枚一組　山原清子　略号〈よき〉　五〇〇円

大の字磔女賊処刑　大手札三枚一組　山原清子　略号〈よさ〉　五〇〇円

〈日本女性拷問刑罰集〉

三角木馬責め　大手札三枚一組　美木乃々子　略号〈もと〉　五〇〇円

石抱き算盤責め　大手札三枚一組　美木乃々子　略号〈もへ〉　五〇〇円

凄惨女囚海老責め　大手札三枚一組　美木乃々子　略号〈もに〉　五〇〇円

女囚竹棒羞恥責め　大手札三枚一組　美木乃々子　略号〈もち〉　五〇〇円

白洲笞打ち折檻　大手札三枚一組　美木乃々子　略号〈もほ〉　五〇〇円

非情の囚女開股責め　大手札三枚一組　五〇〇円　美木乃々子　略号〈もぬ〉

土壇で胴斬りの仕置　大手札三枚一組　美木乃々子　略号〈もり〉　五〇〇円

白洲調べに悶える囚女　大手札三枚一組　美木乃々子　略号〈もは〉　五〇〇円

〈M写真M場面決定版〉

裸女二人の尻の下にうごめく　大手札十二枚一組　大塚・山原　略号〈まふ〉　三〇〇〇円

二女にいじめられるM男　大手札十二枚一組　山原・大塚　略号〈まも〉　三〇〇〇円

美女二人から縛られる男　大手札十二枚一組　大塚・山原　略号〈まね〉　三〇〇〇円

男馬を乗り潰す裸女二人　大手札十二枚一組　山原・大塚　略号〈まめ〉　三〇〇〇円

痛烈、ムチ打ちのご馳走　大手札十二枚一組　大塚・山原　略号〈まれ〉　三〇〇〇円

首絞めでM男に止どめを刺す　大手札十二枚一組　山原・大塚　略号〈まむ〉　三〇〇〇円

汚臭と足舐めの強要　大手札十二枚一組　大塚・山原　略号〈まり〉　三〇〇〇円

二女の臀臭にむせび泣く男　大手札十二枚一組　山原・大塚　略号〈まみ〉　三〇〇〇円

パンプスの下に喘ぐM男　大手札十枚一組　大塚啓子　略号〈わそ〉　二〇〇〇円

豊満な太股で首を股責め　大手札十枚一組　大塚啓子　略号〈わよ〉　二〇〇〇円

男奴隷緊縛虐待への過程　大手札十枚一組　大塚啓子　略号〈わた〉　二〇〇〇円

顔面騎乗の女王様　大手札五枚一組　大塚啓子　略号〈らも〉　一〇〇〇円

〈女体切腹フォト〉

腸露出無念腹切腹　大手札十枚一組　大塚啓子　略号〈せ10〉　一五〇〇円

全裸の切腹悦楽 1　大手札四枚一組　大塚啓子　略号〈ひた〉　七〇〇円

全裸の切腹悦楽 2　大手札四枚一組　大塚啓子　略号〈ひと〉　七〇〇円

マニヤの切腹　大手札三枚一組　甘木春子　略号〈まに〉　五〇〇円

血紅切腹決定版　大手札十枚一組　大塚啓子　略号〈れは〉　一五〇〇円

血紅切腹凄惨姿態　大手札十枚一組　大塚啓子　略号〈れみ〉　一五〇〇円

血紅切腹連続写真　大手札十二枚一組　大塚啓子　略号〈のせ〉　二〇〇〇円

血紅美女の切腹　大手札三枚一組　絹川文代　略号〈ちた〉　五〇〇円

豊満腹を切り裂く女　大手札三枚一組　長野良子　略号〈ほふ〉　五〇〇円

バイブ責めに呻めく女	大手札三枚一組	松本たえ	略号＜きわ＞	五〇〇円
両足挙げ柱宙縛り	大手札三枚一組	松本たえ	略号＜きろ＞	五〇〇円
強烈黒縄縛り悦虐地獄	大手札三枚一組	松本たえ	略号＜きる＞	五〇〇円
羞恥責めに陶酔する女	大手札三枚一組	松本たえ	略号＜きは＞	五〇〇円
猿轡と縄に涕泣する瞬間	大手札三枚一組	松本たえ	略号＜きへ＞	五〇〇円
柱宙縛りと逆さ縛り責め	大手札三枚一組	松本たえ	略号＜きた＞	五〇〇円
足を吊られた悦虐に泣く	大手札三枚一組	松本たえ	略号＜きほ＞	五〇〇円
浣腸溶液を圧入される	大手札三枚一組	深田菊子	略号＜みは＞	四〇〇円
全裸で受ける三種の浣腸	大手札三枚一組	深田菊子	略号＜みふ＞	四〇〇円
イルリの嘴管挿入浣腸	大手札三枚一組	深田菊子	略号＜みほ＞	四〇〇円
突き刺さる浣腸器の恐怖	大手札三枚一組	深田菊子	略号＜みち＞	四〇〇円
自ら施す浣腸の悦楽	大手札三枚一組	深田菊子	略号＜みそ＞	四〇〇円

体内に奔流する浣腸溶液	大手札三枚一組	深田菊子	略号＜みや＞	四〇〇円
浣腸プレイを楽しむ美女	大手札三枚一組	深田菊子	略号＜みぬ＞	四〇〇円
オシメから生ゴムカバーへ	大手札12枚一組	深田菊子	略号＜みめ＞	二〇〇〇円
おムツに排便する乙女	大手札12枚一組	深田菊子	略号＜みし＞	二〇〇〇円
生ゴム製のオムツカバー着用	大手札10枚一組	深田菊子	略号＜みせ＞	一八〇〇円
メロン腹白縄縛り	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜えす＞	五〇〇円
正面柱縛りの蛙腹	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜えき＞	五〇〇円
開脚縛り妊娠腹	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜えけ＞	五〇〇円
蛙腹を晒す開股責め	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜えこ＞	五〇〇円
太鼓腹強調片足吊り	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜えさ＞	五〇〇円
妊孕緊縛美の極致	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜えあ＞	五〇〇円
美しき妊孕腹緊縛	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜えか＞	五〇〇円

八カ月の妊婦裸身開陳	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜えせ＞	五〇〇円
柱縛りの九カ月腹妊婦	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜さて＞	五〇〇円
引き回された妊婦腹	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜さり＞	五〇〇円
膨隆妊婦腹の股間縛り	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜され＞	五〇〇円
鏡に映る太鼓腹縛り	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜さえ＞	五〇〇円
蛙腹誇張の緊縛美	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜さう＞	五〇〇円
足挙げ縛り蛙腹妊婦	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜さた＞	五〇〇円
卓の脚に縛った蛙腹妊婦	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜さつ＞	五〇〇円
九カ月妊娠腹の緊縛美	大手札三枚一組	福井桃子	略号＜さゆ＞	五〇〇円
豆絞りの猿ぐつわ哀情	大手札三枚一組	前田真知子	略号＜ぬも＞	五〇〇円
逆エビ地獄の美女	大手札三枚一組	前田真知子	略号＜ぬや＞	五〇〇円
麻縄亀甲菱縄縛り	大手札三枚一組	前田真知子	略号＜ぬむ＞	五〇〇円

後手高手小手縛り三態	大手札三枚一組	鈴木千鶴子	略号＜ぬみ＞	五〇〇円
卓上の緊縛悦虐姿態	大手札三枚一組	鈴木千鶴子	略号＜ぬろ＞	五〇〇円
全裸浴室での股間縛り	大手札三枚一組	鈴木千鶴子	略号＜ぬひ＞	五〇〇円
悶える踊子の欲情処理	大手札三枚一組	鈴木千鶴子	略号＜ぬま＞	五〇〇円
美しき全裸の縛り	大手札三枚一組	鈴木千鶴子	略号＜ぬふ＞	五〇〇円
柱縛りと脚挙げ縛り	カラー三枚一組	前田真知子	略号＜すき＞	一〇〇〇円
麻縄高手小手首縄縛り	カラー三枚一組	前田真知子	略号＜すめ＞	一〇〇〇円
荒縄強烈エビ縛り	カラー三枚一組	前田真知子	略号＜すけ＞	一〇〇〇円
荒縄悦虐羞恥責め	カラー三枚一組	前田真知子	略号＜すら＞	一〇〇〇円
悶える強烈海老責め	カラー三枚一組	前田真知子	略号＜すへ＞	一〇〇〇円
柔肌をくびる厳しき縄目	カラー三枚一組	前田真知子	略号＜すれ＞	一〇〇〇円
緊縛の全裸女体をいびる	カラー三枚一組	前田真知子	略号＜すろ＞	一〇〇〇円

両足首括り逆さ吊り	大手札五枚一組	梨花悠紀子	略号〈さか〉	八〇〇円
手足逆さ宙吊り	大手札五枚一組	梨花悠紀子	略号〈さと〉	八〇〇円
逆さ吊りの女体を折檻	大手札五枚一組	梨花悠紀子	略号〈させ〉	八〇〇円
メンズバンド着用替ゴム見せ	大手札五枚一組	東浦ひかる	略号〈へみ〉	七〇〇円
股に喰い込む黒フンドシ	大手札三枚一組	東浦ひかる	略号〈とし〉	五〇〇円
股を開いた黒フンドシ姿	大手札三枚一組	東浦ひかる	略号〈とひ〉	五〇〇円
開股逆さ吊り姿態	大手札三枚一組	左近麻里子	略号〈ちて〉	五〇〇円
褌美・表と裏の二態	大手札二枚一組	左近麻里子	略号〈ちけ〉	四〇〇円
強烈責め被虐の果て	大手札五枚一組	梨花悠紀子	略号〈りお〉	八〇〇円
踊り子の美しき緊縛	大手札三枚一組	絹川文代	略号〈りこ〉	五〇〇円
股間縛りの法悦境	大手札三枚一組	絹川文代	略号〈ぬこ〉	五〇〇円
相撲褌着用の艶姿	大手札12枚一組	美木乃々子	略号〈ぬわ〉	一八〇〇円
六尺褌着用の艶姿	大手札七枚一組	美木乃々子	略号〈ぬお〉	一〇〇〇円
パリスSSバンド着用	大手札三枚一組	東浦ひかる	略号〈おこ〉	五〇〇円
サカエメンズバンド着用	大手札三枚一組	東浦ひかる	略号〈おえ〉	五〇〇円
サカエ軽便型バンド着用	大手札三枚一組	東浦ひかる	略号〈おた〉	五〇〇円
パリスメンズバンド前開き	大手札三枚一組	東浦ひかる	略号〈おい〉	五〇〇円
携帯用白色メンズバンド着用	大手札三枚一組	東浦ひかる	略号〈おか〉	五〇〇円
パリスバンド着用縛り	大手札三枚一組	東浦ひかる	略号〈おは〉	五〇〇円
パピアメンズバンド着用	大手札三枚一組	東浦ひかる	略号〈おし〉	五〇〇円
相撲褌を締めた女	大手札五枚一組	東浦ひかる	略号〈そい〉	七〇〇円
メンズバンド着用開股ポーズ	大手札三枚一組	東浦ひかる	略号〈つん〉	五〇〇円
黒ゴム衣後手縛り	大手札三枚一組	木村洋子	略号〈なほ〉	五〇〇円
ゴム衣緊縛悶悦姿態	大手札五枚一組	木村洋子	略号〈なへ〉	七〇〇円
ゴム衣とゴムの猿ぐつわ	大手札三枚一組	木村洋子	略号〈なと〉	五〇〇円
甘美なる椅子プレイ	大手札四枚一組	中河恵子	略号〈なあ〉	六〇〇円
開股拷問椅子の正面責め	大手札四枚一組	中河恵子	略号〈なた〉	六〇〇円
オムツ着用の股間縛り	大手札四枚一組	東浦ひかる	略号〈むく〉	六〇〇円
オムツ着用フェチフォト	大手札七枚一組	大塚啓子	略号〈むね〉	一〇〇〇円
オシメをつける二人プレイ	大手札六枚一組	山原・東浦	略号〈むし〉	一〇〇〇円
ゴムのオムツカバー強制着用	大手札六枚一組	山原・東浦	略号〈むに〉	一〇〇〇円
生ゴムの猿ぐつわ責め	大手札四枚一組	木村洋子	略号〈むこ〉	五〇〇円
オシメ着用と女学生	大手札七枚一組	大塚啓子	略号〈うえ〉	一〇〇〇円
六尺フンドシの女性像	大手札四枚一組	関谷富佐子	略号〈くろ〉	六〇〇円
黒フンドシを着用した女	大手札四枚一組	大塚啓子	略号〈くふ〉	六〇〇円
黒フンドシの女（背面）	大手札三枚一組	遠藤百合子	略号〈くう〉	五〇〇円
黒フンドシの女（正面）	大手札三枚一組	遠藤百合子	略号〈くま〉	五〇〇円
黒フンドシを誇る姿	大手札三枚一組	遠藤百合子	略号〈くわ〉	五〇〇円
黒フンドシ背面刺青模様	大手札三枚一組	山原清子	略号〈くこ〉	五〇〇円
黒フンドシ入墨姿	大手札三枚一組	山原清子	略号〈くの〉	五〇〇円
黒ふんどし媚態の魅力	大手札五枚一組	山原清子	略号〈くな〉	七〇〇円
白晒六尺フンドシの姿態	大手札五枚一組	刑部典子	略号〈けす〉	七〇〇円
黒六尺フンドシを締めた女	大手札五枚一組	刑部典子	略号〈けせ〉	七〇〇円
フンドシ姿の羞らい	大手札三枚一組	栗本ミチ	略号〈ふへ〉	五〇〇円
フンドシ姿の女の魅力	大手札三枚一組	栗本ミチ	略号〈ふの〉	五〇〇円
六尺褌の羞じらい	大手札五枚一組	横尾峯子	略号〈ふけ〉	七〇〇円
双臀に喰い込む褌	大手札五枚一組	横尾峯子	略号〈ふく〉	七〇〇円
褌美に羞じらう女	大手札六枚一組	玉田美佐子	略号〈こん〉	八〇〇円

血紅女体切腹絶命ポーズ　大手札四枚一組　梨花悠紀子　略号＜せん＞　六〇〇円
女体切腹シリーズ　大手札12枚一組　大塚啓子　略号＜せい12＞　一八〇〇円
血紅切腹祭壇に果てる女体　大手札三枚一組　大塚啓子　略号＜せぬ＞　五〇〇円
首桶に落ちる女の首　大手札三枚一組　水野加代子　略号＜せへ＞　五〇〇円
愛妻の切腹を介添えする　大手札三枚一組　水野加代子　略号＜せほ＞　五〇〇円
切腹する女体を介錯する　大手札三枚一組　水野加代子　略号＜せは＞　五〇〇円
血紅使用介添え切腹　大手札五枚一組　大塚・東浦　略号＜きつ＞　八〇〇円
介添え切腹の女　大手札四枚一組　甘木春子　略号＜あか＞　六〇〇円
自刃した血まみれ屍体　大手札10枚一組　山原清子　略号＜えし＞　一五〇〇円
自らの腹を切り裂く女　大手札三枚一組　大塚啓子　略号＜やい＞　五〇〇円
自ら柔肌を切り裂く場面　大手札三枚一組　大塚啓子　略号＜やえ＞　五〇〇円
自らの下腹に突き刺す刃　大手札三枚一組　大塚啓子　略号＜やお＞　五〇〇円

血紅女体切腹苦悶悦楽表情　大手札五枚一組　大塚啓子　略号＜くえ＞　七〇〇円
哀婉美女の血紅切腹　大手札五枚一組　大塚啓子　略号＜るな＞　七〇〇円
絞首刑に果てる女体　大手札二枚一組　新宮夫人　略号＜るく＞　四〇〇円
引回しと晒の処刑　大手札二枚一組　新宮夫人　略号＜るに＞　四〇〇円
血紅使用血まみれ切腹　大手札五枚一組　大塚啓子　略号＜わい＞　七〇〇円
殿中の自決女体切腹　大手札三枚一組　大塚啓子　略号＜わこ＞　五〇〇円
切腹美態から絶命ポーズへ　大手札五枚一組　大塚啓子　略号＜わは＞　七〇〇円
女体自刃の美態　大手札三枚一組　細川アヤ子　略号＜ねに＞　五〇〇円
女体切腹媚態　大手札二枚一組　細川アヤ子　略号＜ねは＞　四〇〇円
肉体美少女全裸切腹　大手札五枚一組　長野良子　略号＜なせ＞　七〇〇円
褌裸女血斗凄惨場面　大手札五枚一組　絹川・大塚　略号＜らは＞　七〇〇円
和洋争斗場面展開　大手札六枚一組　田中・愛川　略号＜らり＞　八〇〇円

血紅使用斬られる美女　大手札七枚一組　絹川文代　略号＜らふ＞　一〇〇〇円
鎌腹を切られる女　大手札二枚一組　愛川・田中　略号＜らく＞　四〇〇円
咽喉笛を刺される女　大手札二枚一組　愛川・田中　略号＜らみ＞　四〇〇円
斬首の瞬間　大手札三枚一組　新宮夫人　略号＜のき＞　五〇〇円
晒台の女の生首　大手札三枚一組　新宮夫人　略号＜のく＞　五〇〇円
全裸正面切腹姿態　大手札三枚一組　大塚啓子　略号＜のみ＞　五〇〇円
切腹に悶える悦虐裸身　大手札三枚一組　大塚啓子　略号＜のそ＞　五〇〇円
切腹した裸女の屍体　大手札12枚一組　大塚啓子　略号＜のい＞　二〇〇〇円
美しき裸女の屍体　大手札12枚一組　大塚啓子　略号＜のり＞　二〇〇〇円
屠腹される女体　大手札12枚一組　大塚啓子　略号＜のる＞　二〇〇〇円
立腹切腹に悶える女体　大手札10枚一組　大塚啓子　略号＜のさ＞　一八〇〇円
切腹に苦悶する裸女　大手札10枚一組　大塚啓子　略号＜のむ＞　一八〇〇円

絞首された女体　大手札六枚一組　大塚啓子　略号＜のひ＞　一二〇〇円
斬首処刑場面　大手札二枚一組　新宮夫人　略号＜くし＞　四〇〇円
絞首刑にされる女　大手札三枚一組　新宮夫人　略号＜こけ＞　五〇〇円
血まみれ血斗場面　大手札12枚一組　山原清子外　略号＜えみ＞　二〇〇〇円
ゴムフェチの美体　大手札四枚一組　梨花悠紀子　略号＜こま＞　六〇〇円
ゴム包みの束縛女体　大手札四枚一組　東浦ひかる　略号＜こは＞　六〇〇円
メンスバンド只今着用　大手札三枚一組　東浦ひかる　略号＜もか＞　五〇〇円
白褌刺青女体脇差切腹　大手札10枚一組　山原清子　略号＜ひに＞　一八〇〇円
白褌刺青女体短刀切腹　大手札10枚一組　山原清子　略号＜ひぬ＞　一八〇〇円
ゴム衣着用緊縛　大手札三枚一組　水本茂美　略号＜みす＞　五〇〇円
メンスバンドを脱ぐ女　大手札三枚一組　遠藤百合子　略号＜ゆお＞　五〇〇円
月経帯を着けた緊縛　大手札三枚一組　遠藤百合子　略号＜ゆす＞　五〇〇円

竹棒と猿轡と縄と　大手札四枚一組　中河恵子　六〇〇円　略号〈せて〉
麗身の裏と表縛りの綾　大手札四枚一組　中河恵子　六〇〇円　略号〈せと〉
裸身に悶えるマゾの表情　大手札四枚一組　中河恵子　六〇〇円　略号〈せり〉
豆絞りの猿轡と縛りの表情　大手札四枚一組　中河恵子　六〇〇円　略号〈せれ〉
私を虐めて下さい。お願い　大手札四枚一組　中河恵子　六〇〇円　略号〈せろ〉
悦虐夫人のマゾの表情　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈せや〉
全裸の股間縛り　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈せら〉
ムチの一打に反る裸身　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈もれ〉
富佐子の裸身を陳列　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈もる〉
尻を立てたムチ打ちポーズ　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈もて〉
片足吊り上げで鞭に泣く　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈もな〉
私をムチ打って頂戴ネ　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈もね〉

脂ぎった豊満女体縛り　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈もむ〉
鞭が柔肌に炸烈する　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈もう〉
滑車吊りで揮う甘い鞭　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈もき〉
両手万才に縛りムチ打ち　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈もこ〉
狂う鞭に哀切の表情　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈もみ〉
エビ縛りの鞭打ち　大手札四枚一組　安井喜久子　六〇〇円　略号〈しと〉
鞭と縛りに夢心地の表情　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈めり〉
烈しい鞭は美肌にからむ　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈めも〉
狂う鞭に狂うムチの女王　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈める〉
両手吊りの女体に鞭の雨　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈めさ〉
鉄砲縛りの鞭打ち地獄　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈めせ〉
鞭打ちに呈す感泣の極致　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈めて〉

逆エビ開股の女体に鞭打ち　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈めひ〉
ムチ打ちに悶絶した女体　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈めへ〉
強打にのけぞる悦虐表情　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈めふ〉
羞恥責めによる法悦境地　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈めら〉
足挙げ開股羞恥責め　大手札三枚一組　梨花悠紀子　五〇〇円　略号〈あけ〉
片足挙げ姿態にムチ打ち　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈こら〉
両手吊りに悶えるM女　大手札四枚一組　中河恵子　六〇〇円　略号〈くい〉
開股責めに泣く女　大手札四枚一組　中河恵子　六〇〇円　略号〈くあ〉
両手万才吊りで晒す女体　大手札四枚一組　中河恵子　六〇〇円　略号〈くむ〉
開股羞恥責めにむせぶ　大手札四枚一組　中河恵子　六〇〇円　略号〈くめ〉
片足挙げ吊り責め　大手札四枚一組　中河恵子　六〇〇円　略号〈くも〉
両膝頭開股宙吊り　大手札四枚一組　中河恵子　六〇〇円　略号〈くち〉

ムチの強打に泣く裸身　大手札四枚一組　関谷富佐子　六〇〇円　略号〈むち〉
足吊りの被虐肢体　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈らえ〉
鞭打ちにうねるM女　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈らあ〉
鞭に狂う女の悦虐表情　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈らて〉
美しき女体マゾの境地　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈らせ〉
全裸開股膝頭縛り　大手札三枚一組　中河恵子　五〇〇円　略号〈ねさ〉
菱縄縛り竹棒責め　大手札三枚一組　中河恵子　五〇〇円　略号〈ねし〉
開股竹棒羞恥責め　大手札三枚一組　中河恵子　五〇〇円　略号〈ねろ〉
手足縛り逆エビ責め　大手札三枚一組　中河恵子　五〇〇円　略号〈ねき〉
竹棒の開股強烈縛り　大手札三枚一組　中河恵子　五〇〇円　略号〈ねく〉
首縄後手高手小手縛り　大手札三枚一組　中河恵子　五〇〇円　略号〈ねこ〉
竹棒開股ムチ打ち縛り　大手札三枚一組　関谷富佐子　五〇〇円　略号〈つい〉

〈極最新版〉新人M女性羞恥責め写真集

V組百態　大手札印画紙（9×13糎）極鮮明焼付写真

各組　一組一枚（送料共）

五組五枚　八〇〇円
十組十枚　一五〇〇円
二十組二十枚　二八〇〇円
五十組五十枚　五〇〇〇円
百組百枚　八〇〇〇円

（郵便番号545-91）天星社
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が出回っているようですが、これは全部特殊マニアの蒐集用として一粒選りのネガから直接印画紙に焼付した極めて鮮明な逸品揃いばかりです。きっとファンのアルバムを最高に充実させると信じます。大阪市阿倍野局私書箱14号天星社へ前金にてお申込み願います。

☆

1 足挙げ羞恥責め（深田　菊子）
2 トイレ排泄強要（三浦　純子）
3 完全二つ折締め（三浦　純子）
4 逆エビ凄絶苦悶（前田真知子）
5 超強烈エビ責め（三浦　純子）
6 荒縄柔肌いじめ（前田真知子）
7 全裸縛玄関晒し（三浦　純子）
8 ネどうでもして（高村　浩子）
9 蝋燭責後手縛り（富田由美子）
10 羞恥の源を抉る（江口　淑子）
11 妊婦縛りの圧巻（富田由美子）
12 菱縄縛正面開放（江口　淑子）
13 正面の妊婦縛り（富田由美子）
14 麗しのマドンナ（荒尾　慶子）
15 両手挙前面晒し（福井　桃子）
16 強烈浣腸ポーズ（高村　浩子）
17 後手吊上げ猿轡（高村　浩子）
18 胡坐縛りの羞恥（江口　淑子）
19 ゴム人形の恐怖（江口　淑子）
20 菱縄股間縛前面（深田　菊子）
21 柱縛り開股強要（福井　桃子）
22 鮮烈股間縛の縄（深田　菊子）
23 本格的な麻縄責（前田真知子）
24 強烈麻縄の緊縛（前田真知子）
25 正面股間縛晒し（高村　浩子）
26 両足吊りの苦悶（江口　淑子）
27 店での全裸縛り（福井　桃子）
28 豊満な女体開陳（福井　桃子）
29 恍惚バイブ責め（江口　淑子）
30 マダム責の哀愁（江口　淑子）
31 開股強制棒責め（前田真知子）
32 大の字片足挙げ（高村　浩子）
33 雁字搦目の女体（江口　淑子）
34 足挙げ責の羞恥（江口　淑子）
35 淫虐蝋燭の挿入（福井　桃子）
36 海老開脚強制責（深田　菊子）
37 全裸立像後手縛（富田由美子）
38 麻縄逆エビ惨酷（前田真知子）
39 美女の全裸縛り（荒尾　慶子）
40 マダム全裸開陳（江口　淑子）
41 後手錠吊上げ責（江口　淑子）
42 女体美を晒して（深田　菊子）
43 高々と後手緊縛（福井　桃子）
44 猿轡に悶える女（高村　浩子）
45 太鼓腹全裸正面（富田由美子）
46 菱縄股間縛猿轡（前田真知子）
47 苛酷の宴果てて（高村　浩子）
48 美しき緊縛女体（荒尾　慶子）
49 エビ責めの序曲（江口　淑子）
50 猿轡に呻く麻縄（高村　浩子）
51 料理される女体（高村　浩子）
52 美肌に映える縄（荒尾　慶子）
53 両手両足開責め（三浦　純子）
54 剃毛責めの結果（荒尾　慶子）
55 人の字型羞恥縛（江口　淑子）
56 浴室での浣腸責（江口　淑子）
57 股間に喰込む麻（深田　菊子）
58 浣腸責めのあと（福井　桃子）
59 黒髪前に垂れる（福井　桃子）
60 スナックで縛る（福井　桃子）
61 喰込む股間縄責（江口　淑子）
62 責めに呻くM女（高村　浩子）
63 片足挙げ開股縛（江口　淑子）
64 菱縄悲し女泣く（江口　淑子）
65 M女を責め尽す（前田真知子）
66 引回される全裸（江口　淑子）
67 尻立蝋燭悦虐貨（福井　桃子）
68 羞恥責を待つ女（深田　菊子）
69 凌辱に捧げる体（高村　浩子）
70 剃毛の女体展開（荒尾　慶子）
71 被縛者のマダム（江口　淑子）
72 縄の山と浣腸器（福井　桃子）
73 強制足挙臀部晒（高村　浩子）
74 厳重菱縄緊縛責（江口　淑子）
75 両手両足吊り責（江口　淑子）
76 白肌に喰込む縄（荒尾　慶子）
77 全裸一直線開股（福井　桃子）
78 裏門を開放する（深田　菊子）
79 豆絞りの猿轡縛（深田　菊子）
80 後手胴締股間縛（深田　菊子）
81 強烈海老責地獄（江口　淑子）
82 大の字縛り正面（高村　浩子）
83 足挙げ強制開陳（高村　浩子）
84 海老責の耐久度（荒尾　慶子）
85 猿轡咽喉輪縛り（三浦　純子）
86 後手吊上げ責め（三浦　純子）
87 羞恥責臀部露出（三浦　純子）
88 柔肌に喰込む縄（荒尾　慶子）
89 淫虐に晒す女体（高村　浩子）
90 マダム開股の図（福井　桃子）
91 がっちり後手縛（深田　菊子）
92 無惨白肌の縄痕（前田真知子）
93 妊婦大の字縛り（富田由美子）
94 開脚を強要せよ（富田由美子）
95 引回される妊婦（富田由美子）
96 強烈麻菱縄掛け（前田真知子）
97 股間縛の引回し（江口　淑子）
98 正座する股間縛（荒尾　慶子）
99 荒縄後手二つ折（前田真知子）
100 椅子開股羞恥責（前田真知子）

木馬責めにあう三態
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚　啓子　略号〈もく〉

乳房責めの苦悶表情
大手札二枚一組　四〇〇円
関谷富佐子　略号〈もろ〉

強烈なエビ縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
関谷富佐子　略号〈もい〉

乳枷と貞操帯着用
大手札三枚一組　五〇〇円
山原　清子　略号〈もや〉

檻に入れられた捕われ女
大手札二枚一組　四〇〇円
山原　清子　略号〈もの〉

黒フンドシ高手小手縛り
大手札八枚一組　一二〇〇円
山原　清子　略号〈ひろ〉

入墨女体の全裸姿態
大手札十枚一組　一五〇〇円
山原　清子　略号〈ひへ〉

黒フンドシの刺青女体
大手札十枚一組　一五〇〇円
山原　清子　略号〈ひね〉

刺青姐御晒の腹巻脇差姿
大手札十枚一組　一五〇〇円
山原　清子　略号〈ひほ〉

刺青姐御晒の腹巻短刀姿
大手札十枚一組　一五〇〇円
山原　清子　略号〈ひり〉

両手吊りにあえぐ女
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈ひお〉

ボリウムをくびる妖蛇の縄
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈ひか〉

後手垂直強烈しばり
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈ひけ〉

一糸まとわぬ柔肌緊縛
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚　啓子　略号〈ひく〉

豊胸をくびるむごき縄目
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚　啓子　略号〈ひき〉

開股羞恥責めの恥態
大手札四枚一組　六〇〇円
安井喜久子　略号〈しう〉

尻立て鞭打ちの艶姿
大手札四枚一組　六〇〇円
安井喜久子　略号〈しつ〉

あぐら縛りの羞恥責め
大手札四枚一組　六〇〇円
安井喜久子　略号〈しよ〉

片足引きつけ縛り
大手札四枚一組　六〇〇円
安井喜久子　略号〈しち〉

髪吊り責め強烈ムチ打ち
大手札四枚一組　六〇〇円
安井喜久子　略号〈した〉

柔肌に炸裂するムゴい笞
大手札四枚一組　六〇〇円
安井喜久子　略号〈して〉

貞操帯着用にて鞭打ち
大手札四枚一組　六〇〇円
安井喜久子　略号〈しや〉

ムチの痛打にもがく女体
大手札四枚一組　六〇〇円
安井喜久子　略号〈しゆ〉

前開きゴム製オシメカバー
大手札12枚一組　一八〇〇円
大塚　啓子　略号〈しま〉

前開き布製防水オシメカバー
大手札12枚一組　一八〇〇円
大塚　啓子　略号〈しな〉

妊娠したお腹を見て
大手札四枚一組　六〇〇円
中河　恵子　略号〈ゆわ〉

縛られた妊婦横臥姿態
大手札四枚一組　六〇〇円
中河　恵子　略号〈ゆよ〉

被虐に燃える若き妊婦
大手札四枚一組　六〇〇円
中河　恵子　略号〈ゆぬ〉

縛られて尚見せたい妊娠腹
大手札四枚一組　六〇〇円
中河　恵子　略号〈ゆる〉

くすぐり責め地獄
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚・東浦　略号〈きす〉

奴隷の捨札開股縛り
大手札三枚一組　四〇〇円
木村　洋子　略号〈きむ〉

菱縄強烈開股縛り
大手札三枚一組　四〇〇円
木村　洋子　略号〈きま〉

竹柱立縛り正面晒しもの
大手札三枚一組　四〇〇円
木村　洋子　略号〈きみ〉

柱宙縛り苦悶表情
大手札三枚一組　四〇〇円
木村　洋子　略号〈きめ〉

猿ぐつわ股間縛り引回し
大手札三枚一組　四〇〇円
木村　洋子　略号〈きも〉

マゾ女のＭの生態
大手札三枚一組　四〇〇円
木村　洋子　略号〈きに〉

奴隷女のマゾの生態
大手札三枚一組　四〇〇円
木村　洋子　略号〈きね〉

私はあなたの奴隷です
大手札三枚一組　四〇〇円
木村　洋子　略号〈きふ〉

美貌の裸身に鮮やかな縄目
大手札三枚一組　五〇〇円
絹川　文代　略号〈きん〉

激痛！逆エビ責めの惨美
大手札四枚一組　六〇〇円
大塚　啓子　略号〈きえ〉

女奴隷を弄ぶ三人プレイ
大手札八枚一組　一二〇〇円
大塚・東浦・木村　略号〈きあ〉

二女をいじめる啓子
大手札十枚一組　一五〇〇円
大塚・東浦・木村　略号〈きい〉

股裂き責めと逆さ吊り
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚・東浦・木村　略号〈きう〉

口中の詰物で汚辱する
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚・東浦・木村　略号〈きお〉

猿ぐつわのいたぶり
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚・東浦・木村　略号〈きさ〉

抓ねりと擽ぐり責め
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚・東浦・木村　略号〈きし〉

灼熱の蠟涙責め
大手札四枚一組　六〇〇円
大塚・東浦　略号〈きせ〉

豊満な乳房を責める
大手札五枚一組　八〇〇円
大塚・東浦　略号〈きそ〉

明瞭な臨月腹の妊娠線　大手札四枚一組　増田みゆき　略号＜りき＞　六〇〇円

双胎の臨月腹を鑑賞する　大手札四枚一組　増田みゆき　略号＜りけ＞　六〇〇円

妊婦の乳房を縛り弄ぶ　大手札四枚一組　増田みゆき　略号＜りさ＞　六〇〇円

妊婦後手縛り引き回し　大手札四枚一組　増田みゆき　略号＜りし＞　六〇〇円

亀甲縛りの臨月妊孕美　大手札四枚一組　増田みゆき　略号＜りた＞　六〇〇円

乳房緊縛の双胎臨月腹　大手札四枚一組　増田みゆき　略号＜りち＞　六〇〇円

臨月双胎蛙腹の股間縛り　大手札四枚一組　増田みゆき　略号＜りぬ＞　六〇〇円

浣腸される妊産婦　大手札三枚一組　増田みゆき　略号＜りひ＞　五〇〇円

臨月妊婦の全身像　大手札二枚一組　安原さゆり　略号＜りせ＞　四〇〇円

臨月妊婦腹の側面　大手札三枚一組　安原さゆり　略号＜りそ＞　五〇〇円

妊婦臨月腹のアップ　大手札二枚一組　安原さゆり　略号＜りと＞　四〇〇円

恵子の妊孕美緊縛　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜おに＞　六〇〇円

膨満の妊娠腹の緊縛　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜おみ＞　六〇〇円

妊婦開股縛り哀歓　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜わう＞　六〇〇円

八カ月の妊婦開股責め　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜わの＞　六〇〇円

妊婦腹誇張の開股縛り　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜わえ＞　六〇〇円

妊孕美人の媚態立像　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜わお＞　六〇〇円

妊孕美人の媚態坐像　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜わき＞　六〇〇円

両手吊り片足挙げの妊婦　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜わく＞　六〇〇円

両手吊り妊婦の正面　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜わす＞　六〇〇円

縛られた妊婦の艶姿　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜わせ＞　六〇〇円

両手一本吊りの妊婦　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜わち＞　六〇〇円

臨月の妊婦三態　大手札三枚一組　安原さゆり　略号＜よむ＞　五〇〇円

動物的な臨月妊婦の腹　大手札三枚一組　安原さゆり　略号＜よみ＞　五〇〇円

産み月の膨大な腹　大手札三枚一組　安原さゆり　略号＜よま＞　五〇〇円

麻縄でくびった妊婦腹　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜よは＞　六〇〇円

ころがされた緊縛の妊婦　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜よほ＞　六〇〇円

臨月妊婦の革紐縛り　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜よに＞　六〇〇円

見事に美しい臨月腹妊婦　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜よち＞　六〇〇円

臨月の妊婦麻縄縛り　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜よら＞　六〇〇円

臨月の妊婦全裸鑑賞　大手札四枚一組　中河恵子　略号＜よへ＞　六〇〇円

九カ月妊婦全裸正面立像　大手札三枚一組　木戸悦子　略号＜のま＞　五〇〇円

羞らう妊婦の裸身前向立像　大手札三枚一組　木戸悦子　略号＜のめ＞　五〇〇円

九カ月の妊婦腹を晒す　大手札三枚一組　木戸悦子　略号＜のや＞　五〇〇円

九カ月の妊娠腹を縛る　大手札三枚一組　木戸悦子　略号＜のこ＞　五〇〇円

便々たる太鼓腹に縄掛け　大手札三枚一組　木戸悦子　略号＜のし＞　五〇〇円

膨満腹も露わな両手挙げ縛り　大手札三枚一組　木戸悦子　略号＜のろ＞　五〇〇円

竹棒責めに喘ぐ九カ月妊婦　大手札三枚一組　木戸悦子　略号＜のは＞　五〇〇円

十文字縛りの妊婦腹　大手札三枚一組　木戸悦子　略号＜のに＞　五〇〇円

柱縛りに苦しむ九カ月の妊婦　大手札三枚一組　木戸悦子　略号＜のほ＞　五〇〇円

開股責めと椅子縛りの妊婦　大手札三枚一組　木戸悦子　略号＜のへ＞　五〇〇円

脈打つ全裸の臨月腹　大手札三枚一組　中河恵子　略号＜こふ＞　五〇〇円

猿轡にうめく臨月妊婦腹　大手札三枚一組　中河恵子　略号＜この＞　五〇〇円

革紐による臨月腹股間縛り　大手札三枚一組　中河恵子　略号＜こや＞　五〇〇円

逆さ吊りの臨月妊婦　大手札三枚一組　金原奈加子　略号＜さめ＞　五〇〇円

両手吊りの臨月妊婦　大手札三枚一組　金原奈加子　略号＜さも＞　五〇〇円

強烈縛り妊婦責め　大手札三枚一組　金原奈加子　略号＜さろ＞　五〇〇円

妊婦全裸縛りの全身　大手札三枚一組　金原奈加子　略号＜さに＞　五〇〇円

若妻初妊娠の哀歓　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さい〉

妊娠腹の緊縛ヌード側面　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さみ〉

若妻の緊縛妊孕美　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さま〉

膨満腹妊婦の乳房責め　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さむ〉

臨月腹若妻全裸晒人形　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さち〉

躍動する妊婦の裸像　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さほ〉

妊娠という異常美　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さへ〉

見てほしい若妻の臨月腹　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さよ〉

若妻妊婦の全裸全身肢体　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈ささ〉

八カ月の妊孕腹鑑賞　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈ほち〉

双胎妊婦の乳房と腹部　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈ほる〉

八カ月の双胎腹菱縄縛り　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈ほわ〉

岩田帯をする双胎妊婦　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈ほた〉

双胎懐妊の生態を探る　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈ほれ〉

全裸の双胎妊婦を見せる　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈ほそ〉

便々たる双胎初産妊娠　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈ほま〉

臨月の妊婦ヌード　大手札三枚一組　五〇〇円　田中美佐子　略号〈にわ〉

臨月妊婦の裸身立腹　大手札二枚一組　四〇〇円　田中美佐子　略号〈にた〉

九カ月の妊娠腹　大手札三枚一組　五〇〇円　安原さゆり　略号〈にの〉

首枷手枷で責められる妊婦　大手札三枚一組　五〇〇円　増田みゆき　略号〈にゆ〉

双胎妊婦腹強調縛り　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈にき〉

緊縛と猿轡双胎妊婦虐待　大手札五枚一組　七〇〇円　増田みゆき　略号〈にけ〉

後手縛りの双胎妊産婦　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈にさ〉

動物的な双胎妊婦の生態　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈にな〉

白肌に喰い込む縄目　大手札三枚一組　五〇〇円　松山真樹子　略号〈とわ〉

一糸まとわぬ白い柔肌　大手札三枚一組　五〇〇円　松山真樹子　略号〈とら〉

開陳した華麗な肢体　大手札三枚一組　五〇〇円　松山真樹子　略号〈とゆ〉

縄目に喘ぐ麗人諦観の相　大手札三枚一組　五〇〇円　松山真樹子　略号〈とえ〉

縛られた美女二人　大手札三枚一組　五〇〇円　小池・松山　略号〈とそ〉

全裸の美女二人の連縛　大手札三枚一組　五〇〇円　小池・松山　略号〈とれ〉

SとMの美女の甘い一瞬　大手札三枚一組　五〇〇円　小池・松山　略号〈とさ〉

縄に通うSM愛情の焔　大手札三枚一組　五〇〇円　小池・松山　略号〈とけ〉

全裸の豊満な女体にムチ　大手札四枚一組　六〇〇円　関谷富佐子　略号〈もた〉

両手吊りで悶える裸身　大手札三枚一組　五〇〇円　関谷富佐子　略号〈もえ〉

女奴隷を飼育するシーン　大手札五枚一組　八〇〇円　大塚・東浦　略号〈きて〉

凌辱されるマゾ女の恥態　大手札五枚一組　八〇〇円　大塚・東浦　略号〈きと〉

完全逆さ吊り責め　大手札三枚一組　五〇〇円　木村洋子　略号〈さつり〉

少女全裸アグラ縛り　大手札三枚一組　五〇〇円　長野良子　略号〈てへ〉

少女全裸屈伸縛り　大手札三枚一組　五〇〇円　長野良子　略号〈てほ〉

鬼面と接吻する少女　大手札二枚一組　四〇〇円　長野良子　略号〈てち〉

緊縛女体撮影風景　大手札四枚一組　六〇〇円　大塚啓子　略号〈むら〉

柱縛り宙吊り晒し　大手札二枚一組　四〇〇円　大塚啓子　略号〈つめ〉

柱縛り全裸臀部晒し　大手札五枚一組　七〇〇円　大塚啓子　略号〈つま〉

柱正面縛り折檻　大手札三枚一組　五〇〇円　大塚啓子　略号〈つも〉

豊満な双乳の強調縛り　大手札三枚一組　五〇〇円　長野良子　略号〈そう〉

八の字開股縛り羞恥責　大手札四枚一組　六〇〇円　中河恵子　略号〈そか〉

菱縄縛りの全裸を晒す　大手札四枚一組　六〇〇円　中河恵子　略号〈そえ〉

全裸二つ折り縛りの苦悶　大手札四枚一組　六〇〇円　中河恵子　略号〈そむ〉

浣腸責め地獄の妊産婦
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　略号〈ほな〉

浣腸責めの甘い恐怖
大手札三枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号〈とか〉

浣腸液注入直後の状況
大手札三枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号〈とま〉

強制浣腸の各美姿態
大手札三枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号〈とみ〉

浣腸責めの美態開陳
大手札三枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号〈とめ〉

浣腸を待つポーズ
大手札三枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号〈とも〉

エネマと縛りの恐怖
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号〈よて〉

エネマ責めの恐怖
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号〈よる〉

浣腸器を弄び愛撫する女
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号〈よろ〉

イルリガートルの浣腸責め
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号〈よた〉

浣腸にむせび泣く女
大手札四枚一組　六〇〇円
大島照代　略号〈つゆ〉

身動き出来ぬ浣腸地獄
大手札四枚一組　六〇〇円
大島照代　略号〈つえ〉

浣腸とオシメ装着
大手札四枚一組　六〇〇円
大塚啓子　略号〈ひそ〉

強制浣腸責めの序曲
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号〈よか〉

襲いくる浣腸器嘴管の先
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号〈より〉

鼻孔の奥を探る魔手
大手札三枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号〈はむ〉

開孔器にてひらく鼻孔
大手札三枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号〈はら〉

なぶられる拘束裸身の鼻
大手札三枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号〈はれ〉

仰臥した緊縛女体の鼻なぶり
大手札三枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号〈はに〉

美女の鼻をもてあそぶ
大手札三枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号〈ちる〉

美女の鼻孔を観賞する
大手札三枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号〈ちれ〉

開孔器で検査する鼻孔
大手札三枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号〈ちき〉

鼻孔に煙草挿し込み責め
大手札三枚一組　五〇〇円
美木乃々子　略号〈ぬと〉

可愛いい鼻責めのアップ
大手札五枚一組　七〇〇円
美木乃々子　略号〈ぬは〉

強烈縛りで顔面翻弄
大手札八枚一組　一二〇〇円
美木乃々子　略号〈ぬほ〉

可憐乙女の鼻をいたぶる
大手札四枚一組　六〇〇円
一宮百合子　略号〈るえ〉

鼻責めと鼻孔のアップ
大手札三枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号〈ねけ〉

鼻責めの陶酔境
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号〈なは〉

淫虐鼻なぶりの形相
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号〈ない〉

鼻の穴を責める
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号〈なく〉

夫婦連縛にて鼻責め
大手札十枚一組　一五〇〇円
増田みゆき　略号〈らか〉

鼻責めに悶える女
大手札七枚一組　九〇〇円
木村洋子　略号〈むる〉

顔面を凌辱される女
大手札四枚一組　六〇〇円
木村洋子　略号〈むよ〉

鼻責めと緊縛
大手札五枚一組　七〇〇円
大塚啓子　略号〈うい〉

鼻責めによる悦楽
大手札二枚一組　四〇〇円
東浦・大塚　略号〈きな〉

美しき鼻をいたぶる
大手札三枚一組　五〇〇円
遠藤百合子　略号〈ゆは〉

乳房いじめの責め
大手札二枚一組　四〇〇円
大塚啓子　略号〈とお〉

豊かな乳房を責める
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈とき〉

逆エビ吊り責め
大手札六枚一組　一〇〇〇円
梨花悠紀子　略号〈りつ1〉

逆胴吊り責め
大手札六枚一組　一〇〇〇円
梨花悠紀子　略号〈りつ2〉

大の字逆さ吊り
大手札二枚一組　四〇〇円
増田みゆき　略号〈むの〉

豊満乳房しばり責め
大手札三枚一組　五〇〇円
長野良子　略号〈うは〉

吊り打ち責め
大手札三枚一組　五〇〇円
関谷富佐子　略号〈やり〉

腰元の吊り責め
大手札二枚一組　四〇〇円
村井知可子　略号〈こり〉

乳房強調膨隆責め
大手札三枚一組　五〇〇円
佐々木真弓　略号〈こわ〉

エネマシリンジ挿入責め
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号〈えね〉

ワシづかみ責めの乳房
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚・東浦　略号〈えう〉

強烈乳房責め五態
大手札五枚一組　七〇〇円
山原清子　略号〈てら〉



○

よくもまあ、これだけ、いろんな女性、美しい女性、可愛いい女性、魅力的な女性が毎月新しく登場するものだと、感心していました。奇クにのる女性たちの魅力はなんといっても素人娘の、ういういしさです。商売女の毒々しい化粧に、けがされない女性愛読者の素人ぽさが、また何とも言えません。ピンク女優なんかの見せかけの美しさや演技による大ゲサな表情のないところが一番に好ましいです。この事はまた奇ク誌上全体にも言えます。雑誌を手にとってみて、毒々しいイヤらしさがないのです。12月号にしても、まるで学術誌のような清楚さが奇クを、いつまでも手放せない理由になっています。絹川文代、大塚啓子、梨花悠紀子、佐々木真弓と私の知っている限りでも、十指に余るM女が記憶に残っていますが、こうした人達も、新しい観点から再登場させて下さいませんか、お願いします。

（三重県・北井三山）

○

たくさんのお手紙ありがとうございました。主人は俺がヤキモチをやくのは、お前を愛しているのだと言いますが、ヤキモチのくせにケチなのです。ヤキモチをやいて口でいじめるのが愛情でしょうか。最初の主人も最低でしたが今度の主人もあまりよい人ではありません。三人ばかりの方と交際してみて、男の人にもいろいろあるということを知りました。ダメな男といっしょになると一生苦労をします。一度でもいいからSMプレイというのをやってみたいと考えていましたが、SMプレイっていいですね。投書したおかげでこの頃は充実した毎日を送っています。ありがたくお礼申し上げます。

（箕面市・中村栄子）

○

読者通信に始めて投稿いたします。この欄には常連の方がよく顔を出しますね。常連の方もいいですが新人の便りも是非とりあげて下さいね。私は本誌に「家畜人ヤプー」や「或るマゾヒストの手帖」などの沼正三氏の作品が連載されていた頃から奇クを愛読していました。あの頃の奇クは雑誌全体が本当に貴重な文献といった感じでしたが、奇クに連載中の作品が単行本化されたことが本日のSMブームのきっかけになったようですね。でも今たくさん出ているSM誌は粗雑で興味本位で、とても文献といった代物ではなく、ひと頃流行したヌード雑誌にSMの色づけした一夜漬けのものばかりで真にSMを愛する者にとってはアイソがつきます。この頃奇クでもM傾向の好読物が少なくなって失望していますがそれでも毎月愛読を続けています。過去の栄光を偲んでいる私達のような愛読者のためにもM作品の一層の充実を期待してやみません。

（静岡県・三島久仁夫）

○

鶴見浩一様。御作品、いつも興味深く拝読いたしております。特に七月号の「残酷ショウ」に発表された妊娠責めは、責めのアイデアに新しいジャンルを開いたものではないでしょうか。私はヤラレタと思いました。実は私の小説でも今月号の第52回に似たような責めを予定しておりましたが、完全に先を越されてしまいました。結果としては今回アイデアをお借りするようになってしまいましたが構成上、何としても必要ですので何卒お許しいただき度いと存じます。浣腸以外の内臓責めは、今まで余り用いられていない手法であります。今後共一層のご活躍をお祈り申し上げ、且、種々ご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

（千葉青鬼）

○

私は三十七才になる横浜近郊の開業医です。神奈川の高田礼子様十八才の将来ある若さを大切にして下さい。無理な浣腸は健康によくありません。私はその方の専門であるばかりでなく長年のアメリカ生活で得たアメリカ娘に関する色々な浣腸経験もあります。さまざまな器具を用いた浣腸、注腸、時には直腸鏡で貴女の健康感情管理をしてみたいと思います。同時に私の浣腸モニターとして研究対象になって頂けないでしょうか。

（神奈川県・大木広一）

○

女装者にはM傾向の人が多くS傾向の人が少ないようですが、私は女装でSの人がもっと多くいてもよいように思うのです。というのは、女装者には自身の美しさを誇るナルシストが多く、それは自己優越の感情となり、優雅なS的態度につながるのではないでしょうか。私は数少ないSの女装者の一人ですが、容姿には自信があるつもりです。M男性またはMの女装者との文通交際を希望します。女装の女王への奉仕を望む奴隷下僕趣味の人が最もよいのですが、とにかくこれにこだわるつもりはありません。広くMのかたからのお便りをお待ちします。

（東京都・女装のS）

○

貴誌を愛読して2年程になりますが、筆不精の為、初めてお便り差し上げます。貴誌の存在を知るまでは、自分は社会道徳からはずれた異端者のように思え、一人悩んでいたのですが、同好の諸氏が数多く居られることを知り救われた思いでした。現在、多種多様のSM雑誌が出回っていますが、その多くは徒らに商業主義に走り満足のいくものはほとんどありません。週刊誌のように見出しや題だけはこけおどかしに凄いのですが、内容を読んで見てがっかりします。見様見真似で題だけ大ゲサにつけているので、失望もいいところです。その中にあって奇クだけは本物のSMを書いてくれています。奇クは私の救いです。編集者諸氏の努力に只々、頭が下がる思いです。神奈川の高田礼子さん、一度私とプレイしませんか。貴女の望んでおられる羞恥責めを存分にして上げます。

（横浜市・島田旭）

○

11月号「ふるーい奇ク」の花田一郎氏の神田の古書店の件、たしかに貴殿の言われる通りです。別にその書店を宣伝する意図はさらさらないが、少なくとも昭和27年からの奇クを保存し、今日において吾々の目に止めさせる事は、店主に感謝するよりほかはない。その店名は「文省堂」名前からみると大きな書店のようにみえるが古ぼけた小さい古書店である。ただここで非常に感じがよい事は、いくら立ち読みしても何も言わず、またいやがらせもなく実に悠々と長時間立ち読みさせて呉れる事である。そのせいか、いつ行っても一杯来ており神田の街独特の学生を始め、ときにはどこの重役かと思うリューッとしたかっぷくのよい紳士等も散見される。そういう小生も古い奇クを前に余りのなつかしさに立ち読み一時間余。その間、私の傍で昭和四十年頃のものや四十四、五年の奇クが数人、合わせて七、八冊は売れたようだ。このように古い奇クが今日、充分通用し、しかも可成り多くの人が買ってゆく現実を奇クの編集長にみせてやりたい位だ。そうすればもっと責任を感じ浣腸告白モノや浣腸カメラルポ等多彩にわたってとりあげられるハズ。奇クの編集長よ、東京に来たら銀座のバーで飲むより神田のこの感心な文省堂に一回でもよいから立ち寄り、店主に挨拶すべきではなかろうか。店内には奇クの最も古いものとして昭和二十七年六月号が三千円で一九六四年もので絵画特集がなんと五千円でビニールに包まれて陳列されていたが、事実これ程の価値があるものだろう。

（東京都・竹迫誠也）

○

私は21才になる都内の医学部の生徒です。奇譚クラブはまだ三冊しか手にしていません。今年の一月号、九月号、十一月号です。九月、十一月号に載っていた前田真知子さんは文句のつけようがなく美しいですね。私は将来医師になるので、あまり軽はずみなことは言えませんが、もの心ついた頃には、すでにSM心理は持っていたようです。十一月号の佐渡黄門さんのお書きになった文章が、あまりにも自分の歩んできた人生と似ているのにあきれました。愛する女性の中で汚い部分というものは存在しないということに私も賛成しますし、彼が言っているように、自分が本当に愛するようになった女性と結婚し永遠に愛を維持できるのか恐ろしさでいっぱいです。将来医師になっても自分のS性は、その職業の中では発揮できないと思います。今、私達はおそろしい量の学問をつめ込まれています。その中でVやAについて学

＝御送金についてのお願い＝

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替、法定額小為替、普通小為替等の方法もありますのでご利用下さい。便宜上「切手代用」にても結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願い致します。

んでも、前述の感情は満足しません。ただ精巧な図や写真、スライド等を見ても顔がうつっていないせいなのか、物としてしか見られません。医師になるにあたってはそれでいいのですが、私の欲求不満はつのるばかりです。産婦人科の医師がストリップを見にいく心理もやっとわかりました。私も前田真知子嬢や笠井奈保子さん、高村浩子さん、鈴木千鶴子さんらと浣腸を中心としたプレイがしてみたいです。私はまだ縛り方も知りません。できたら奇クの一読者として編集部の方の教えを請いたいと思います。浣腸プレイなどは治療とはまったく無関係にやりたいですね。前田さんの告白文などののっている八月号や十月号を、さっそく買いたいと思います。尚、十一月号に「鈴木千鶴子を責めるために助手を募る」とありますが小生はいまだそういうことは未経験ですが、ぜひやりたいと思います。浣腸器などは身近にありますが持ち出すわけにはいきません。小型なら、あります。

（東京都・矢部依志夫）

○

北九州市外にすんでいる者ですが以前は奇譚クラブは手に入らなくて商用で大阪へ行くと駅の地下の本屋で買っていたのですが、最近は当地でも買える様になりました。毎月楽しんでいます。辻村、[illegible]本両先生の文章と写真は、やはり他と違った物があります。この頃では「不毛の愛」というのが面白かったです。お願いしたいのは内容のバラエティを考えてほしいのです。昔の奇譚クラブは実にいろいろな事が出ているのが古本で分かるのですがこの頃は何か思いつめたみたいに緊縛ばっかりになってる感じです。汚物願望やフェチシズムや浣腸やレキ断の残酷物や男装、女装など多様のものも取挙げてほしい。それと昔の（大正頃の）雑誌のように、これらについてのコクのある研究の書ける方に書いてほしい。女相撲の研究が出ていますが、あれはよくわからないが随分研究してある様に思えた。緊縛でも縄のかけ方の歴史や移り変わりや、いろいろのやり方など研究した文が要るのではありませんか（北九州市・竹田胴丸）

○

12月号を手にして久しぶりに感動に似たものを身に受けました。雑誌を手にした時の掌の感じがインクの香と共に私の胸を打ったのです。12月号の内容いいですね。甘ったるいものはすぐ倦きてしまいますが、奇クは爽々しい秋の果物のように絶対に倦きません。往年の奇クのように、口の中にじわじわと唾が湧き出てくるような読みごたえのある告白物が多く、やはり奇クはいいと思いました。長く保存しておけばおくほど味合いの出る本だと思いました。野津敏生氏の「ホットパンツの可愛い娘」は題の通り本当にかわいいお嬢さんですね。よくこれだけ縛りましたね。真実の告白は、少しもひどい責め方をしていなくっても、とても楽しめました。南埜茂雄氏の「フートフェチシズム」こういった真面目な告白を他の読者の方々にも、是非自分一人のとっておきのものを書いてほしい。足だけじゃなしに、読者の方の中には、いろんな変わった体験や傾向がある筈です。東京介氏の告白「ＳＭへの誘い」写真入りで、凄い告白です。凄いという意味は、自分との斗いを勇敢に吐露していることです。自分の傷口をじっと冷徹に見つめるということは、とても勇気のいることです。笠井奈保子さんの告白「奴隷妻になりたい」は私達の心を魅了する文章と写真で、だんだん文章もうまくなってきましたが少し初心が薄らいできたようです。写真でもっと活躍してほしい。嵐由之助の「アナルセックスの一つの体験」も面白かった。私の趣味ではないが自分も一度経験してみたいと思ったくらい思わず引き込まれた。佐川増夫氏の、「金色のローソク」うまい文章だが、これで写真があったら、もっとよかったと思う。喜多庸介氏の「窃視の愉悦」はさすがに懸賞入選だけあって巧妙な書きぶりだがなにか、このあとも知りたくなるような思わせぶりの結末だった。仲圭介氏の「白い脚の下で」それに二人の女性、村田恭子さんの、「蝋責めと浣腸の思い出」野村麻子さんの「不貞妻の描く欲望のデッサン」と挙げてくると12月号の告白手記は、まさに花ざかり。私は十分満足しました。村田恭子さん、モデルになるのはイヤなんか言わないで、早く神戸まで行く用件をこしらえて奇ク誌上に姿を現わして下さい。私達は貴女の文章を読んだだけで素晴しい女性だと思い込んでいます。是非お願いします。

（茨城県・凰早良三）

○

私は身長一米五〇糎体重四七瓩

の小柄な四十二才の男性です。寄クを読み始めて僅か半年余りの新参者ですがよろしく願います。悲しいことには、まだプレイする機会が一度もなく無聊をかこっておりましたが塚本鉄三先生のお呼びかけを拝見してペンをとった次第です。もし先生のお力でこの様な私でも助手の末席にお加え下されば幸甚に存じます。いや助手というよりは弟子にしてほしいとさえ思います。日常の走り使いでも道具の運搬でも何でも致しますから是非この私を、緊縛師の弟子として使って下さいませんか。今回が駄目でも次回、或はその次の機会でも結構ですから是非お願いします。

（岡山県・宇野高夫）

○

11月号の読者通信に寄せられていた箕面市の中村栄子様、私は北海道に住むSMファンの一人でSMを知ってから丁度一年になります。まだ私は一度もプレイをした経験がないので行なうとしたら初めての人としたいと思います。私はベルト締め、アナル責め、流腸責めといったプレイが好きで特にアナル責めに興味があります。そのため空想がつよいというのか、アナル責めをしているところが頭に浮かんでくるのです。それも毎日、違った女性を責めているから人一倍アナルにひかれるのです。相手をはずかしめる所、それはアナル、私にとって唯一の責め場所なのです。もしプレイが行なわれたら早速あなたのアナルを責めつくしてあげましょう。どうか私とプレイを楽しんでみませんか。そして素晴しいSMの空間へ二人で歩んでいきませんか。

（北海道・河本和宏）

○

菅原妙子様、読者通信を拝見しました。いかにも普通のOLの方らしく、SMについても初心者との事で何か無性に御手紙差し上げたくなりました。小生三二才で法律関係の職場に勤務しています。二年程前から奇クを知りいろいろと空想しているのですが、まだプレーの経験はありません。写真では相当強烈で新奇なポーズでないと物足りませんが、いざ実際に全裸の若い女性と対すると手を後へ回わして縛るだけで素晴しい感動に似た味わいがあるでしょう。できれば初心者同志、少しずつSMの楽しみを持ち度いと存じます。文通から始めて互いに信頼と親しみが湧いて来てからでも、いいと思います。貴女を得ることができれば本当にそれだけで外の諸々の苦労も吹き飛ぶことでしょう。拙い文章ですがお目にとまれば幸いです。

（吹田市・小倉悠紀）

○

編集部の皆様には大変お忙しい日々をお送りの事と存じます。私は昭和三十年頃から三十五年頃に奇クの読者通信にたびたびお世話になりました月経帯、ゴムオムツカバー・マニアの西郷房子です。当時は東京の葛飾区に住んでいましたが現在は気仙沼に住んでいます。古い月経帯が三十枚ほどたまりましたので、マニアの方にぜひさし上げたく筆をとりました。パンティも二十枚ほどございます。なお私は月経帯着用フォト、生ゴムオムツカバーフォトなどほしいと思っています。

（宮城県気仙沼市・西郷房子）

○

10月号の読者通信にのせて頂いてありがとうございました。いろんな方から沢山のお便りを頂き楽しく読ませて頂きました。私は34才という年ですのでモデルになれるようなプロポーションではありませんが、せめてSMプレイだけでもと考えておりましたのに、塚本様、辻村様のお二人からは何のお便りもなく口惜しく思っております。私は経済的には十分余裕がございますし時間もその気にさえなれば独身ですから、何日でも自由になります。誌上に出して下さっても構いませんと申し上げましたが、やはり私の年令をお考えになったのでしょうか。日本全国の温泉地めぐりをしながら、熱烈なSMプレイをしたらどんなに楽しいだろうかと考えております。

（東京都・寺田陽子）

○

私は二十一才の年から奇クを愛読しはじめて、それから十数年、白表紙の時代をなつかしく思っている愛読者の一人です。その間、毎月発行される奇クを心の糧として、どれだけ慰められてきたか、はかり知れないものがあります。嘗て発行された古い奇譚クラブが貴重な文献として今では高価に取引きされているということですがそれだけ、この雑誌の刊行が社会にとっても有意義だったということを示しているのだと思います。私自身奇クによって、どれだけ心を励まされ生活意欲をかきたてられたかわかりません。さて、十一月号で塚本鉄三さんが責め場面撮

影の助手を求めておられますが、さぞ多数の希望者が殺到していることと思います。私も志願したいのはやまやまですが目下のところ仕事が忙しくて、とても気ままに自由な時間をとることが出来ません。それで一つ提案があるのですが、塚本さんもさぞお忙しいことと思いますので一年の中で一回なり二回なり、便りのあった人々を集めて懇談会とか研究会とかいったものを催されては如何かと思います。休日のとれそうな日を選ばれたら、相当の人数が集まることと思います。そのとき有志のモデル嬢なんか二人でも三人でも顔を見せて下されば座も大いに賑やかになることでしょう。一つ、お考えいただけませんか。

（大阪市・的場　進）

○

読者通信に載っているM女性からの便りには、いつもどんな女性なのだろう？　とこちらの胸を熱くさせ、とりとめもない想像と憧憬の念（いささかM的ですが）を掻きたてています。9月号の通信欄を見たとき玉木章子の文章にひかれました。何よりも貴女が日蔭の女と自称され、そして文面から読みとれる古風で無垢、どこか子供っぽい臭いを私が嗅ぎとったからです。そして貴女こそ、私が待っていた女性にちがいないと（いささか大袈裟ですが）思いペンをとった次第です。私は当年三十才既に結婚し一子を儲けておりますが、妻はSMに関しては一向に興味を示しません。ともあれ、一度お会いして、出来得れば、お互いの信頼の上に立った、かりそめのプレイを楽しむことが出来るなら願ってもない幸せです。貴女のあられもない姿を幾葉か写真にする用意も整っております。現在私は神戸に住んでおりますので、貴女

の所からは比較的、近くだと思います。貴女からの返事を心待ちにしております（神戸・関峯俊一）

○

読者の投稿が大巾に取り入れられている楽しい僕らの雑誌奇ク。あてがいぶちで、文章を書く専門家たちが毎月、同じ事を、くり返してのせている雑誌は親しみが持てない。身近な、親味のある奇クを僕は愛す。十月号、十一月号、十二月号と、三冊の奇クの表紙を手でこすりながら、ああ、これは僕たちの雑誌だと叫んだ。いついつまでも、この雑誌を僕は愛す。

（京都市・滝川　孝）

○

昨年5月号奇ク誌上で羽鳥水江氏も触れておられましたが、切腹妊婦を特集した企画をぜひ実現していただきたいものです。SMを扱った雑誌が多く見られるようになった現在でも、この分野では、まだ全くと言っていいほど見るべきものはありません。それだけにぜひ、いわば本家本元ともいうべき奇クに他誌の追随を許さぬところを見せていただきたいと思います。妊婦物では福井桃子さんのあの見事な臨月腹に至るまで奇クの開拓された努力は全く感服すべきもの。四馬孝氏の女性切腹画集などリバイバルしてほしいものの一つです。（東京都・植田良三）

○

九州の山なみハイウエイの助手席に高村浩子さんを乗せて走る。僕が片手で彼女の腿に触れると、彼女はいやがる。いやならいやでもいいんだと、ハンドルから両手を離す真似をする。もう僕が彼女のスカートの中へ、いくら手を入れても拒まない。彼女は狭い座席の中で器用にスカートを脱いでゆく。トイレへ行きたいと言っても車を止めてやらず、うんと我慢させておいて、車を止めると彼女はお尻を振りながら草むらへかけて行く。

（大分県・秋野美水）

○

駄文で時折、誌上を汚している山井二良です。図々しく書きつらねては誌上に載せていただき読み直す度に冷汗が出ます。本間秀雄様、多分、私と同じお好みとお見受けしますが、私のことは四月号と十月号の奇クサロンをお読み下されば多少は判っていただけるものと思っています。私は結婚四年になりますがマンネリとは恐いもので夫婦プレイはサッパリ少なくなりました。鼻毛が嫌いで一本でも気になる方です。奇ク誌上のフォトや鼻孔が正面から見える写真なら映画館からも週刊誌雑誌などあらゆる機会に買い求め大小鼻写真約三百種以上保存しています。但し他の方に自分のこんな性向は話したことなく奇ク誌上と自分自身の殻の中にのみ閉じこもっていました。奇ク誌上へのご返書お待ち致します。（静岡・山井二良）

○

一生に一度でもよいから、Sの御婦人からドレイとして使用していただきたいと願っている四十六才になるマゾ傾向の男です。気持としては御婦人方のどのような御命令に対しても絶対服従することをお誓いしたいと思い、そうすることが自分の生まれてきた使命のように思っているのです。幸いにして仕事も自由業ですので、何日間でもSの御婦人方の下へ仕向して掃除、洗濯、便所掃除から人間犬人間馬として仕込んで下さい。お気に召さない時は、エビ責めローソク責めなど、どんなお仕置でも甘んじて受けます。又食事の代りにネクタールやアヌスからのお馳走をお与え下さい。福井桃子様私を下男代り兼ドレィとして使用して下さいませんか。

（広島市・金田間曽男）

○

同好の女性でタバコ責めのマゾンナ（マゾ女）がおられましたらぜひ一度おつき合い願いたいものです。緊縛の腕は今まで奇クに載りましたタバコ責めの写真を御覧下さい。拷問用の喫煙用具は皆揃っています。アメリカから取り寄せたフルサイズのシガー（長さ30センチ太さ2センチぐらい）、本物の銀キセル（男でも咥えるのが重い）、巻タバコを五本装置できるさるぐつわ、鼻穴用パイプ（鼻の穴にさし込んだら開腔具を使わないと抜けなくなるもので、鼻でタバコを喫わせるもの）、パイプを改造した膣用パイプ（葉巻を主として喫わせる）、アヌスは葉巻だけで十分、抜けなくなります。以上のようなものを準備してお待ちいたします（京都・城野道一）

○

秋たけなわのおり、ますますご発展の奇クに、敬意を表します。奇クを初めて手にしていらい長い年月を経ましたが、小生も不惑の齢に達しました。最近の奇クも巻頭の緊縛フォトが増え、昔日の面影が甦り、また告白、手記の挿入フォトも、すばらしいかぎりだ。

例によって辻村隆氏のSMカメラハント「特訓プレイ妻」をまず読ませていただきました。佐野みさ子さんのM性は、かつて奇クに登場した谷山久美子さんに劣らないものだと思います。読者通信を寄せられた菅原妙子さん。ぜひお知り合いになりたいものです。小生も同じ市内に住む男性として、お互いの秘密を固く守り、貴女の願いを実現し、ともに楽しみたいと思います。（寝屋川・中村　純）

○

三回にわたる雄松氏の貴重な文献「女相撲書誌雑考」に脱帽！。氏のこの道に対する熱意と打ち込みの深さ、学究的とも云うべき真面目な態度には駆け出しの分際で女斗美愛好などという言葉を使うのが恥ずかしくなるくらいのものだ。女斗美愛好は、少数派のもの——とは確かにそのとおり、これを大衆の前に拡げてしまっては女相撲の床しさが失われてしまう。常にアウトサイダーであるところの誇りが生まれる。ＴＶ放映中の〝女相撲〟なるものにさえ冒瀆的な反発を感ずるのだけれど、最近のＳＭブームに乗っかった、縛り写真（それも、大部分は縄を巻きつけたという程度のいいかげんなものだ）の氾濫を見せつけられると、女相撲好みなどは至極健全な趣味に思えてくる。しかし、そうは云っても、やはり誌上、殆どとり上げてくれるもののないということは全く淋しい。唯一の頼りであるべき奇クでさえもが、このごろは一向にお呼びでないらしく緊縛スターたちのグラビヤは復活しているにもかかわらず女力士の曲線美凛々しい締め込み姿の方は挿画の方にすらなかなかお目にかかれない。少数派切り捨ては日本のお家芸——かも知れないが、この分野の創作だってないわけではないのだろうにというらみごとをこの機会に訴えたい。雄松氏の激賞する〝金星、銀星〟の力作もなんとか拝見させてもらいたいものだ。最後にこの文化財的資料を寄せられた雄松氏に最敬礼。そしてそれを掲載してくれた奇クに〝アリガトウ〟これからもタノンマッセ。

(新潟県・奮斗士好太)

○

神戸市の小林マリ子様。私は23才の独身サラリーマンです。中肉中背で性格は温厚な方です。是非私を貴女の空想の相手にしてください。縛りの傾向としては肌を傷つける鞭打ちより羞恥責めを好む方です。写真歴は3年ですがSMシーンの撮影経験はありません。貴女をモデルにしたSM写真を考えております。安物ですがDPEの設備もあります。秘密は固く守りますし、貴女の意志も尊重します。貴女と友達になれることを夢に見ながらペンを置きます。

(奈良・原田圭一)

○

毎月、奇ク楽しく拝見しております。秋もようやく深まり、落ち着いてSMについて思考出来る頃となりました。夏のバカンスの喧噪さも終わり、私の住む富士山麓も静けさと落ち着きを取り戻してまいりました。毎月の奇クは、まことにSMのバイブルか百科辞典のようで、いくら読んでも読み飽きないものを持っております。さて十二月号を手にして思わず机に向かってペンをとってしまいました。奇クは何だか、そんな読者にペンをとらす魔力のようなものを持っているんですね。それだけ身近に感ずる何物かが、きっとあるのでしょう。十月号、十一月号と手にして、奇クこそは保存しておきたいという気持を強くしていたのですが、十二月号に至って、その気持は決定的になってしまいました。「奇クサロン」の充実で、読者の方々の投稿が大いに取り上げられているのは、全く嬉しいです。「夫婦プレイ」の記事が多いのも愉快です。といって、私の妻は残念ながら、その方には一向に興味を示さず、我関せず焉ですがまたそれだけに、私の夫婦プレイ実践者に対する羨望は大変なものです。辻村氏のカメラハントは、とうとう、佐野みさ子さんを縛りましたね。私も出来れば、こんなプレイをやってみたいという羨望の念に堪えきれず、あたかも自分が主人公になっているみたいな気持で読みました。マゾを忘れかねた中河恵子さんと奴隷妻になりたいという笠井奈保子さんの文章とフォトは非常に興味を持って拝見しました。こうしたマゾ女性と親しく誌上で接することが出来るという点が奇クの特色です。どうかこれからも新しいM女の方が出現して私達SMマニアを、なぐさめて下さい。月一回、出る奇クを私達は、どれほど待ちこがれていることか、よろしく、お願い致します。

(山梨県・ノボル・山下)

○

私のことが奇譚クラブに載っているということを、最近まで知らなかったのですが、最近になって本を送っていただき、始めて知りおどろいています。私は何故、これほどまで縄で縛られることが好きなのか、本当に自分ながら、あきれているほどです。本に載っているのを見せてもらってからは、もっともっと責めてほしい気持がこうじてきて困っています。仕事の方が大へん忙しくて暇がとれませんのですが、どうしても近い中に、二日でも三日でも、ぶっ通しで縛られたままで責められたいと願っております。

(松山市・松本たえ)

○

辻村氏の〃SMカメラハント〃に登場した数多くのモデル中で、唯一無二の男性モデル「M七〇生の巻」を御所持の方に、お願いします。小生の私蔵している奇クの旧ナンバーの中の御希望号と、交換して頂けませんか。小生の所有する旧年号は、昭和31年5月号より47年12月号までで、多少、欠けてはいますが、大体は揃っています。私の希望する右「M七〇生の巻」の掲載号は、確か昭和40年の一月号か二月号ではなかったかと記憶しています。

(宮城・カメラハント愛好生)

○

奇ク12月号内容が非常に充実していて、何時ものことながら、たんのうさせられました。辻村隆氏のSMカメラハント(佐野みさ子の巻)笠井奈保子の「奴隷妻になりたい」東京介氏の「SMの誘い」村田恭子さんの「蝋責めと浣腸の思い出」や数々のマゾ女フォトも圧巻でした。今月号は実に、賞讃すべき内容でした。小林マリ子さん。君はファンタジックなマゾの世界に一人、懊悩している様ですね。望み通り全裸にし縛り上げて君の女体がマゾに痺れるまで、たっぷりと虐めて上げます。菅原妙子さんも縛られたいというマゾの欲望が強いですね。君を素裸にして雁字搦目に縛ったり、股間縛りや開股縛りなど、種々の責めを加味して調教し飼育して上げます。山下悠子さん、君は相当奴隷願望が強い様だ。つまり、完全な精神

次号（二月号）は十二月二十五日に発売いたします

的マゾヒストだ。この様に、自分から奴隷になりたいと赤裸々に吐露するとは果敢なマゾ女である。私は君に対して罵言を浴びせかけ一カ月でも二カ月でも奴隷として飼ってあげるよ。私の部屋は、御主人様とマゾ女のエデンの園だ。そして奴隷という境地に至るにはアトモスヒアーが最も大切だ。従って君には「奴隷宣言」をしてもらう。もし、少しでも躊躇したならば、容赦なく鋭い鞭が君の豊満な双臀に弾ける。また、日常生活に於いて凌辱されるマゾ奴隷のノルマは厳しく辛い。だが、それを励ます愛の鞭が、素裸で鎖に繋がれた女奴隷に対し、ある時は威嚇的に、またある時は、甘く囁く様に、甘美な慕情を残すであろう。

（東京都・大和　剛）

○

山下悠子さんは十二月号でアメリカの奴隷制度を卒論にすると書いておられますが、アメリカの奴隷は、主に労働力として導入されたのではないでしょうか。貴女の望むような状態は中世アラビヤのハレムの女奴隷の方が適しているように思われます。私も専門家ではないので、くわしくは解りません。長期に亘り貴女を飼うことは少し難しいですが、それでよければ、お便り下さい。私はアヌス責めに興味を持っております。私は26才の独身青年です。

（横浜市・新井和夫）

○

東京都の山下悠子さん。本誌十二月号の読者通信に寄せられた貴女のお便りを拝見しました。結婚して七年になります私は、三十三才でT公社に勤めているS一〇〇パーセントの平凡なサラリーマンです。奇譚クラブは独身時代から愛読し、既に十数年になります。現在もプレイは妻を相手に、しばしば行なっております。「本当に奴隷として使役されてみたいとも思います」という貴女の呼びかけを、一刻も早く実現されるよう、ペンをとりました。なお、幸か不幸か子供はおりませんので、貴女の御希望を全面的にかなえる事ができると思います。教養のある貴女ですが、実際的な体験をするチャンスとして呼びかけに応じて下さい。貴女とは目に見えぬヒモで結ばれているように思います。長時間、本当に奴隷として使役致します。本当の奴隷としての心理が理解できるように、全責任を持って、あらゆる訓練を実施します。実際的な体験の殆どない貴女故にやりがいがあるのです。全裸の動物のような姿で後手に縛りあげ、私の前で正座させます。そして本当の奴隷になることを誓わせ、いっさいの人格を剝奪し、本格的な奴隷調教に入ります。柱に、はりつけにさせられた鞭打ち、全裸の高手小手股間縛り、ベッドに強烈に縛られたローソク責め、全裸開股縛りでのアヌス責め、羞恥責め等、すべてを経験させ、本当の奴隷としての立場からの考え方、奴隷の心理を理解させます。貴女の身体にはマゾの血が流れているのですから、大胆なポーズで法悦の台詞を口走るマゾの権化となることでしょう。貴女は東京に、私は大阪にいることが誠に残念です。しかし、新幹線を利用すれば三時間余りの時間ですので、打ち合わせに東京へ行っても構いません。貴女には本格的な奴隷になってもらう事が目的です。その他のいろいろな事柄は、すべて私の方で御心配のないように配慮させていただきます。さいわい妻も非常に興味を持ち、その時の来る事を待ち望んでおります。貴女が読者通信で発表されておられるように、ただの遊びの延長ではなく、一生に二度とないチャンスと考え、心からお呼びかけしている次第です。貴女が望んでいるような奴隷体験は、結婚生活七年の間に、すべて妻に実施いたしております。「なお、私が望んでいるような奴隷体験を、本当になさった女性の方がありましたら、お目にかかることは、できないでしょうか」という貴女の呼びかけを、妻も自分自身の体験から、いろいろ助言し、協力をしたいと、待ち望んでおります。

（大阪市・北田勝利）

○

12月号に、大分前にセルフタイマーで撮影しましたやせていた頃の私の写真が発表されておりましたので、とっても恥かしく思いました。でも今は浣腸をひかえておりますので、また、肥って参りました。どうせ、ご採用は願えませんでしょうが懸賞愛読者M女性への想いをこめて書きました文章と一緒に別便でお送り致しました写真のとおり乳房もウェストももと

に戻っております。空想の世界に燃え、過度の浣腸プレイに明け暮れ致したのですが所詮、孤独な浣腸オナニー、冷静に戻ればわびしい限りでした。安心してSM交歓に耽れる同じ愛読者の方と知りあって、丸裸で縄目を受け、お小水を強要されたり、浣腸を施されたりするのが私の夢でございます。ぞくぞくする羞恥の宴こそ私の生きがいかと考えてみたりする今日此頃です。末筆ですが12月号の佐野みさ子様は素晴しかったと、うらやましく思っております。

（神戸市・小杉千恵）

〇

笠井奈保子様。十二月号に書いておられた「奴隷妻になりたい」を拝見しました。僕の所に、貴女が「奴隷妻」になって来てくれたら、それは毎日が楽しく又素晴しいことでしょうね。毎月奇クを買いますと、まず一番に貴女の写真が載っているか、貴女の文が書いてあるかと探します。でも貴女の文が載っていないと何か読む気も起こらないのです。ですから何でも結構、短くてもいいですから毎月何か書いて下さいね。それにしても塚本鉄三様も幸せな人ですね貴女を思う存分縛ることが出来るのですから。しかしまだ五回位しか縛られてないとは、もったいないですね。僕だったら、しょっちゅう呼びだして縛るのですが。今貴女は多くの人から手紙をもらい返事を書くのに困っておられるとか。もしよかったら僕にもお便り下さい。僕も縛られた写真を見るのも好き、SMの本を読むのも、そして貴女を縛るのも好きな二十四才の青年です。お互いに気が合ったらプレイをしてみませんか。プレイをしてみて、もっと気が合ったなら、僕と一緒になりませんか。そして貴女を僕の奴隷妻にしたいのです。僕は貴女の写真が奇クに載った時から、貴女のファンになってしまい、何をしていてもいつも貴女の事ばかり思っております。

（奈良市・香取鷹一郎）

本誌既刊号在庫一覧表

〇本誌既刊雑誌は左記一覧表の通りの在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫が僅少なものもありますから、お早い目に御注文願います。

〇七月一日よりの郵便料値上に伴い、在庫既刊号の〈送料共値段〉も全面的に改訂の必要が生じましたので、御諒承願います。尚、既刊号以外で、三カ月以上御予約の場合は送料の全額を当社にて負担致します。多数一括しての既刊号御注文の節は〈小包〉にて発送致します。

既刊雑誌在庫案内

号	値段
昭和41年4月号	（送共三三二円）
昭和41年5月号	（送共三三二円）
昭和41年6月号	（送共三三二円）
昭和41年7月号	（送共三三二円）
昭和41年8月号	（送共三三二円）
昭和41年10月号	（送共三八二円）
昭和41年11月号	（送共三八二円）
昭和42年6月号	（送共三八二円）
昭和42年11月号	（送共三八二円）
昭和43年2月号	（送共三八二円）
昭和43年3月号	（送共三八二円）
昭和43年4月号	（送共三八二円）
昭和43年5月号	（送共三八二円）
昭和43年6月号	（送共三八二円）
昭和43年11月号	（送共三八二円）
昭和43年12月号	（送共三八二円）
昭和44年1月号	（送共三八二円）
昭和44年2月号	（送共三八二円）
昭和44年3月号	（送共三八二円）
昭和44年4月号	（送共三八二円）
昭和44年5月号	（送共三八二円）
昭和44年6月号	（送共三八二円）
昭和44年7月号	（送共三八二円）
昭和44年8月号	（送共三八二円）
昭和44年9月号	（送共三八二円）
昭和44年10月号	（送共三八二円）
昭和44年11月号	（送共三八二円）
昭和44年12月号	（送共三八二円）
昭和45年1月号	（送共三八二円）
昭和45年2月号	（送共三八二円）
昭和45年3月号	（送共三八二円）
昭和45年4月号	（送共三八二円）
昭和45年5月号	（送共三八二円）
昭和45年6月号	（送共三八二円）
昭和45年7月号	（送共三八二円）
昭和45年8月号	（送共三八二円）
昭和45年10月号	（送共三八二円）
昭和45年11月号	（送共三八二円）
昭和45年12月号	（送共三八二円）
昭和46年1月号	（送共三八二円）
昭和46年2月号	（送共三八二円）
昭和46年3月号	（送共三八二円）
昭和46年4月号	（送共三八二円）
昭和46年5月号	（送共三八六円）
昭和46年6月号	（送共三八六円）
昭和46年7月号	（送共三八六円）
昭和46年8月号	（送共三八二円）
昭和46年9月号	（送共三八二円）
昭和46年10月号	（送共三八二円）
昭和46年11月号	（送共三八二円）
昭和46年12月号	（送共三八二円）
昭和47年1月号	（送共三八二円）
昭和47年2月号	（送共三八二円）
昭和47年3月号	（送共三八二円）
昭和47年4月号	（送共三八二円）
昭和47年5月号	（送共四三二円）
昭和47年6月号	（送共四三二円）
昭和47年7月号	（送共四三二円）
昭和47年8月号	（送共四三二円）
昭和47年9月号	（送共四三二円）
昭和47年10月号	（送共四三二円）
昭和47年11月号	（送共四三二円）
昭和47年12月号	（送共四三二円）

〈編集後記〉

☆年度の改まった第一号です。新年号だからやはり、明けまして……と、きまり文句を並べるべきでしょうが、テレクサイので口の中でブツブツとごまかすことにして、今、ペコリと頭を下げたところです。おかげさまで本誌も二十七才を迎えた訳でして、人間流に数えるとムニャムニャ才ぐらいでしょうが、いよいよ脂の乗りきった働き盛りです。一月号だからといって、ことさらな気負い立ちや飾りたてもせず、只ひたすらに真価の高揚を狙うオトナの情熱で〝花よりも実を〟と念ずる辺り、駈出しでは叶わぬ境地……ではあるまいかと、アゴを撫ぜている次第であります。

☆その年輪をまた一つ刻み増した本号では、『西方より友来たる』〈中宮栄〉と『裕子の泣く時』〈最上卓也〉及び『女子トイレ考現学』〈福島和男〉等の、生々しい実態ルポを掲載することが出来、辻村、塚本両氏の手慣れた取材ぶりとは、また趣きの異なった雰囲気を以て充実し得たと思います。添付されたプレイフォトの物語る情景が、サロン欄で展開されている夫婦プレイ写真と共に、この世界愛好者の逞しい主張の代弁となり、そうザラには得難い文献資料となっていることは、今更いうまでもありますまい。

☆これら貴重な記録の発表を、特に本誌を選んで託して下さった各位に深謝すると同時に改めて、この小誌にお寄せ下さる信頼に応えねばならぬと肝に銘じた次第ですが、やはりこれも、新年度の〝気負い〟でしょうか。

〔懸賞原稿募集〕

〈体験、告白、手記〉

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

〈創作、小説、物語〉

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

〈感想、論評、批判〉

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千円以上の賞金を贈呈します。

〈(映画、雑誌)通信〉

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千円以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております故悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の〔懸賞原稿募集〕を致しております故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

〈読者通信原稿〉

巻末の通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆本誌御購読の栞☆

予約に限り

一月分(1冊)四〇〇円〈送32円〉
三月分(3冊)一二〇〇円〈送共〉
半年分(6冊)二四〇〇円〈送共〉

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ　定価　四〇〇円
一月号（第二十七巻第一号　通刊第二百九十九号）
昭和四十七年十二月二十日　印刷
昭和四十八年一月一日　発行
編集人　杉原虹児
発行人　吉田稔
印刷人　北村俊夫
郵便番号558
大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所　暁出版株式会社
〈振替口座大阪四二七八三番〉
（昭和三一年四月二〇日第三種郵便物認可）
（昭和四二年四月二一日　国鉄大局特別扱承認雑誌第二二〇号）

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全な育成に関する各条例に指定されないよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、十八才未満の方には絶対販売下さらないよう、特にくれぐれもお願い申し上げます。